

# 鹿児島大学構内遺跡

## 郡元団地D-7・8区

農学部研究棟D（旧・農学部5号館）改修工事に伴う発掘調査

## 郡元団地D・E-5区

農学部共通棟（旧・農学部1号館）中庭増築工事に伴う発掘調査

## 郡元団地C-4～6区

農学部研究棟A（旧・農学部2号館）改修工事に伴う発掘調査

## 郡元団地C-6区

南九州地区軽種馬医療体制整備事業

（附属動物病院軽種馬診療センター新営）に伴う発掘調査

2010年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

## 序

鹿児島大学キャンパスには、後期旧石器時代から近代までの、貴重な遺跡が包蔵されていることが、鹿児島大学埋蔵文化財調査室の発掘調査によって、次第に明らかにされています。その成果は、これまでに『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Vol. 1～23, 『鹿児島大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書』第1～4集として逐次報告されてきました。

今回の報告書は、農学部で平成17(2005)年から行われたPFI事業工事に伴う発掘調査3件, 平成19(2007)年に行われた附属動物病院軽種馬診療センター新営工事に伴う発掘調査1件を掲載しています。

前者は、弥生時代の住居跡から近世にかけての水田跡が確認され、それに伴う遺物が多量に出土しました。また、鹿児島大学の前身である「鹿児島高等農林学校」関連遺物も特筆され、平成21(2009)年には、農学部開学100周年事業に協力して、それらの遺物を展示し、「地中からみた農学部の歩み」と題したパンフレットを配布しました。

後者の地点では、近世の水田跡の下部に大きな河川跡が確認され、中世の時期に、弥生時代から古墳時代にかけて郡元キャンパスを横断していた河川が大きく流路を変えていることが分かりました。

現在、キャンパス内では、研究、教育の発展に伴って、多くの建物の建築や周辺整備などが行われ、それに先立って必要な埋蔵文化財の発掘調査が行われており、年々増加する発掘調査や埋蔵物に対する調査および研究体制、遺物保管体制が十分でないのが現状です。しかしながら、近年、徐々に研究体制や遺物の整理・研究体制が認められてきており、状況が好転しつつあります。

大学キャンパス内から出土する貴重な大学の財産、県民・国民の財産としての埋蔵文化財の調査および研究を行うための体制の実現について、重ねて全学的なご理解、ご支援をお願いする次第です。

平成22年 3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査室長  
鹿児島大学埋蔵文化財調査委員長

新田 栄治



# 例 言

1. 本報告は、鹿児島大学構内遺跡郡元団地において、平成17（2005）年度から行なわれたPFI整備事業に伴う発掘調査、2005-4郡元団地D-7・8区農学部研究棟D（旧・農学部5号館）改修工事に伴う発掘調査、2006-2郡元団地D・E-5区農学部共通棟（旧・農学部1号館）中庭増築工事に伴う発掘調査、2006-4郡元団地C-4～6区農学部研究棟A（旧・農学部2号館）改修工事に伴う発掘調査、ならびに2007-4郡元団地C-6区南九州地区軽種馬医療体制整備事業（附属動物病院軽種馬診療センター新営）に伴う発掘調査をまとめ、また、付編として自然科学分析と出土石器の使用痕分析について掲載したものである。
2. 本書に掲載している発掘調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が担当した。調査時における図面・写真等の担当者は以下の通りである。  
  
Ⅱ：中村直子・清永千春  
Ⅲ：新里貴之・川島秀義  
Ⅳ：中村直子  
Ⅴ：新里貴之
3. 本書の作成にあたっては、埋蔵文化財調査室が行なった。担当者は以下の通りである。  
  
Ⅰ～Ⅵ 執筆（新里貴之） 実測（篠原美智子・福永美保子・相美伊久雄・真邊彩・河野祐次・赤尾和洋・寒川朋枝・中村直子） 製図（濱田綾子・篠原・福永・中村・寒川・里之園淳子・新里） 作表（里之園・新里） 集計表（篠原・福永・新里） 写真（新里）  
付編1・2 自然科学分析（株式会社古環境研究所）  
付編3 執筆・製図・写真（寒川）  
編集（新里・中村・寒川）
4. 本報告の出土遺物について、陶磁器は、渡辺芳郎氏（鹿児島大学）、中島恒次郎氏（大宰府市教育委員会）、縄文土器については、相美伊久雄氏（志布志市教育委員会）のご教示をいただいた。石器・石材については本調査室員寒川朋枝による。
5. 発掘調査による遺物の保管は、埋蔵文化財調査室の管理のもと、各学部、部局が収蔵している。また、図面・写真などの資料は埋蔵文化財調査室に保管している。

## 凡 例

1. 昭和60年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査室に便であるように、鹿児島大学構内座標を郡元団地と桜ヶ丘団地（旧宇宿団地）とに設定した。その設置基準は、以下の通りである。
  - (1) 郡元団地では、国土座標第2座標系（ $X=-158.200$ ,  $Y=-42.400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割りを行なった（Fig.3参照）。
  - (2) 桜ヶ丘団地では、国土座標第2座標系（ $X=-161.600$ ,  $Y=-44.400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割りを行なった（Fig.4参照）。
2. 本年報におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
3. 本書で使用した遺構の表示記号は、以下の通りである。  
SK：土坑状遺構 SD：溝状遺構 P・PP・Pit：ピット
4. 観察表等で使用した土器の編年観については、弥生時代を中園聡1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号、古墳時代を中村直子1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号に依った。中世陶磁器については、主に、山本信夫2000『大宰府条坊跡』XV、瀬戸哲也ほか2007「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究』5、小野正敏1982「15, 16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2に依った。ガラス瓶については、桜井準也2006『ガラス瓶の考古学』六一書房を参考とした。また、観察表の「種別」について、様式・型式名の不明なものは、弥生土器・成川式などとして記す。
5. 土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。この色調に当てはまらないものについては、「～に類似」と表記した。
6. 遺物に関しては観察表を作成した。復元によるサイズは、（ ）をつけた。
7. 遺物実測図中、——はスス付着の、——は釉の境界ラインを示す。
8. 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致している。
9. 本章Ⅰ～Ⅵにかけて、挿図・表・写真は通し番号を付す。

# 目 次

I	遺跡の位置と環境	1
II	2005-4 郡元団地D-7・8区農学部研究棟D（旧・農学部5号館） 改修工事に伴う発掘調査	5
III	2006-2 郡元団地D・E-5区農学部共通棟（旧・農学部1号館） 中庭増築工事に伴う発掘調査	19
IV	2006-4 郡元団地C-4～6区農学部研究棟A（旧・農学部2号館） 改修工事に伴う発掘調査	125
V	2007-4 郡元団地C-6区南九州地区軽種馬医療体制整備事業 （附属動物病院軽種馬診療センター新営）に伴う発掘調査	171
VI	総括	246
付編1	2006-2 郡元団地D・E-5区農学部共通棟発掘調査における自然科学分析 （株式会社古環境研究所）	253
付編2	2007-4 郡元団地C-6区農学部附属動物病院軽種馬診療センター発掘調査に おける自然科学分析（株式会社古環境研究所）	269
付編3	鹿児島大学構内遺跡郡元団地出土の横刃形石器の使用痕分析 （寒川朋枝）	275

## I 遺跡の位置と環境

鹿児島大学構内遺跡が所在する鹿児島市は、薩摩半島の北東部に位置する (Fig.1)。東側には鹿児島湾 (錦江湾) が広がり、他の三方は始良カルデラに由来するシラス台地に囲まれている。

鹿児島大学構内遺跡は、郡元団地と桜ヶ丘団地があり、それぞれを鹿児島大学構内遺跡郡元団地、同桜ヶ丘団地と呼んでいる (Fig.2)。ほかにも、遺跡の存在する大学施設には、入来牧場、唐湊学生寮などがあり、早急な遺跡登録の必要がある。

郡元団地は沖積平野の南端部付近に位置し、標高約7mである。周知の遺跡として知られており、古くから遺跡の存在することが認識されていた<sup>1)</sup>。校舎などの建設に伴う事前の発掘調査も多く行われている。昭和59年までは字名などが遺跡の名称として用いられて

おり、県立医大遺跡、附属中学校敷地内遺跡、釘田遺跡、水町遺跡も郡元団地内の遺跡である<sup>2)</sup>。構内遺跡付近には、弥生時代中期後半の住居跡が検出された一ノ宮遺跡などがある。

郡元団地では、弥生時代から古墳時代の遺構が多く検出されているが、特に古墳時代の竪穴住居跡が多く検出される。住居跡やピット、遺物廃棄溝などを手がかりにすると現在5つの居住域群が把握でき、発掘調査による土層の観察からは、いずれも周辺よりはやや標高の高い微高地上に形成されていることが分かる (Fig.3)。北半部の居住域 (I・II) に挟まれた部分には、工学部付近で二又に分かれる河川跡が確認されている。工学部や理学部で確認された河川跡の中からは、弥生時代から古墳時代にかけての木製品や木杭なども出土している。弥生時代の水田跡は、工学部と教育学部で確認されているものの、古墳時代の水田跡は未だ検出されていない。しかしながら、古墳時代の包含層中には多量のイネ・プラント・オパールが含まれており<sup>3)</sup>、教育学部水町遺跡では、牛足痕のある古代水田跡が確認されている<sup>4)</sup>。また、近年の調査では、近世においても同様な遺構が検出されている (平成18年度農学部1号館中庭調査)。郡元団地周辺域では、稲作が断続的に行われていた可能性が高いものと考えられる。ただし、中世の生産遺跡については、発掘調査によると畑地化している可能性があるものの、不明確である。

桜ヶ丘団地は郡元団地から南に約2.5kmの亀ヶ原台地上に位置し、標高約70mを測る。昭和60年に埋蔵文化財調査室が設置されてからは、「鹿児島大学構内遺跡宇宿団地」と呼称したが、キャンパス名の変更に伴い、桜ヶ丘団地と呼んでいる。付近の台地上には、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡が点在しており、桜ヶ丘団地でも同様の時期の遺物が出土している。後期旧石器時代から縄文時代草創期段階の陥穴遺構、縄文時代早期前半の住居跡や集石遺構、弥生時代前期から終末期の住居跡なども確認されており、少なくとも縄文時代早期前半代と弥生時代前期・終末期には居住域として占地されていたものとみられる。



Fig.1 鹿児島市の位置

### 註

- 1) 河口貞徳 1969「弥生持代」『鹿児島市史』I 鹿児島市史編さん委員会 58-75頁
- 2) 松永幸男 1986「鹿児島大学構内遺跡の位置と環境」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』I 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 21頁
- 3) 藤原宏志 2004「郡元団地L-6区 (中央図書館増築地A地点北壁) におけるプラント・オパール分析結果報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』18 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 75-77頁
- 4) 坪根伸也ほか 1987「水町遺跡」鹿児島大学教育学部・法文学部考古学研究室



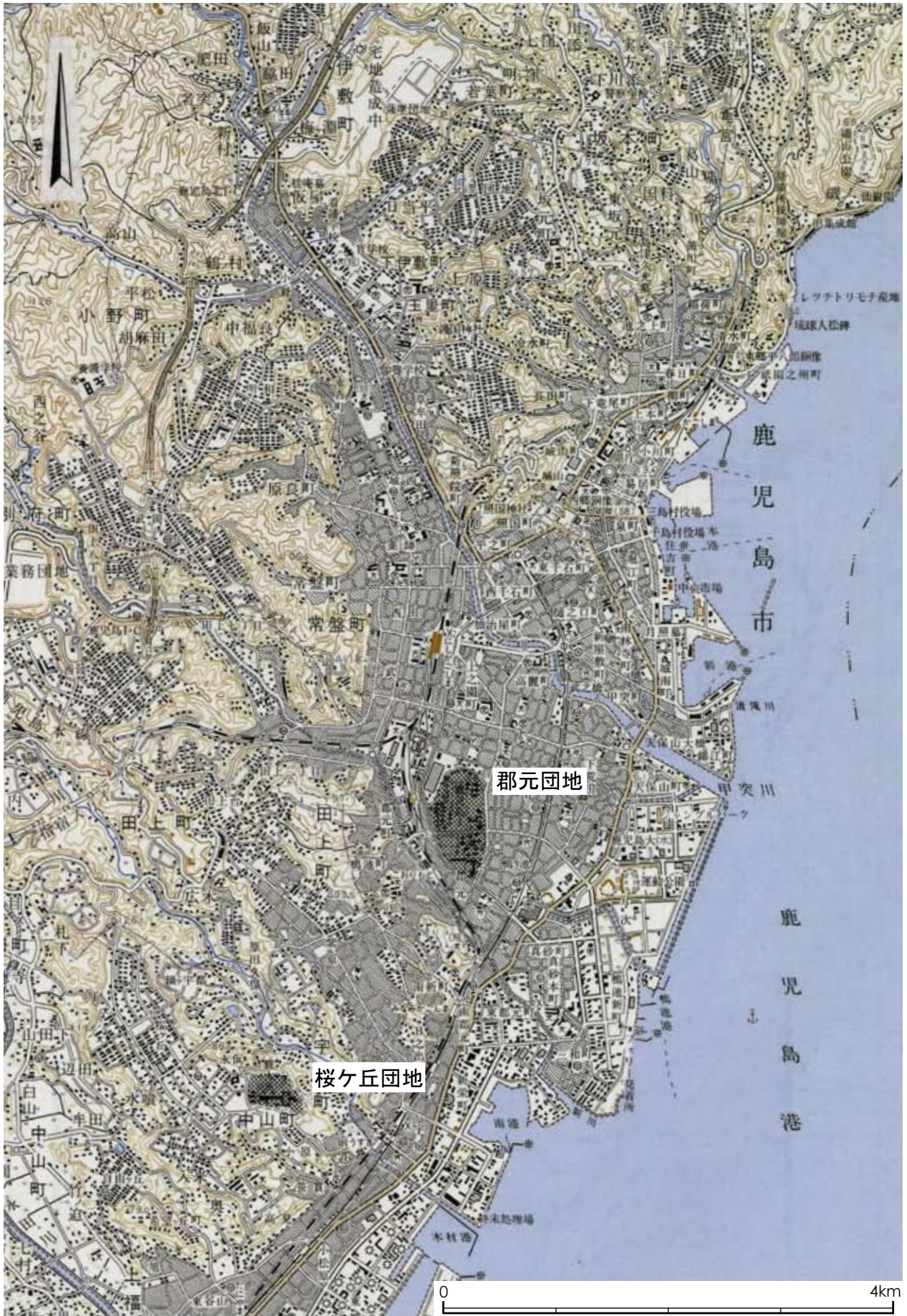


Fig.2 鹿児島大学構内遺跡の位置 (S=1/50,000)



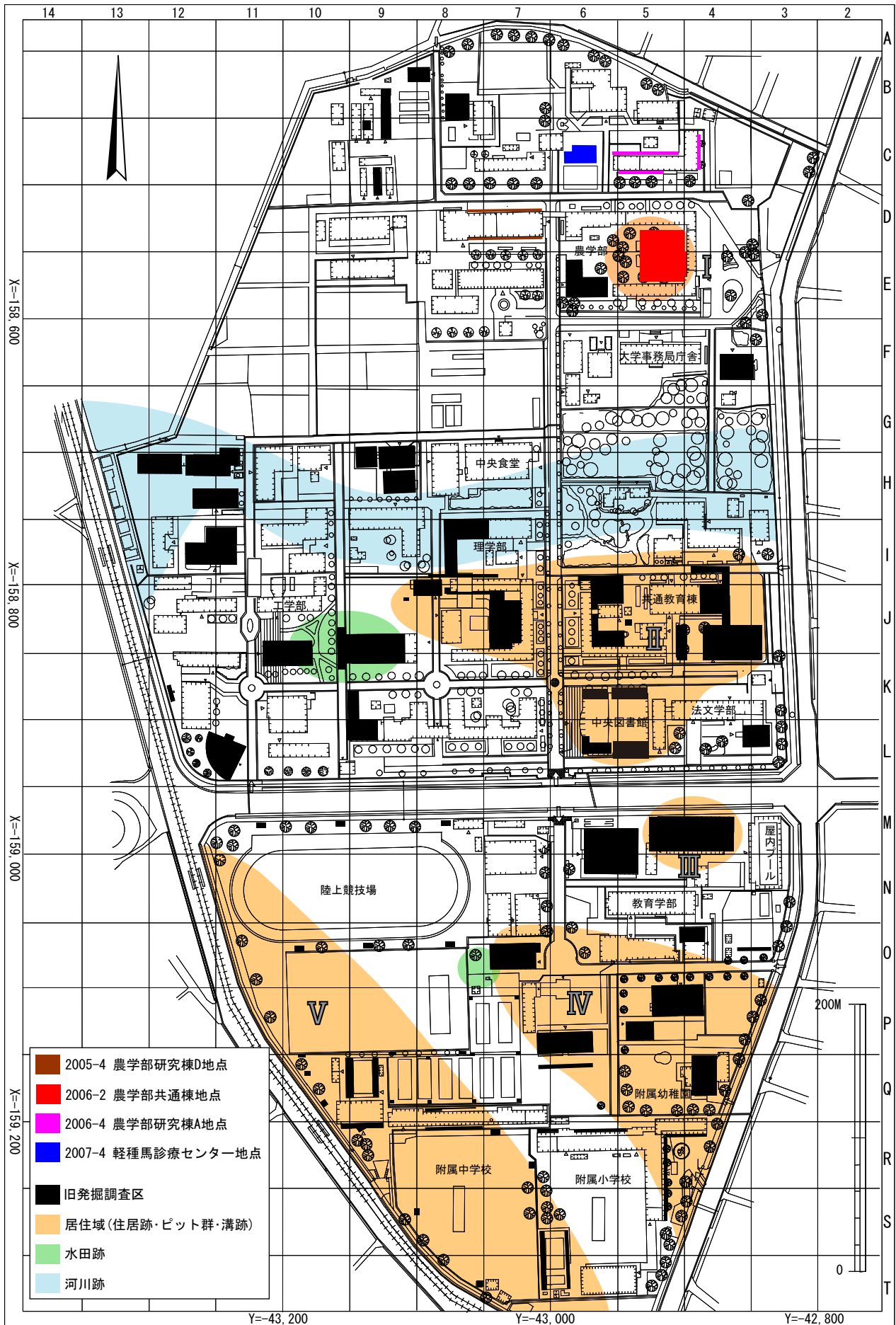


Fig.3 鹿児島大学構内遺跡郡元団地における調査地点と弥生時代～古墳時代の遺跡立地 (S=1/4,000)

シリーズ名	鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書 第5集													
ふりがな	かごしまだいがくこうないいせき こおりもとだんち													
書名	鹿児島大学構内遺跡 郡元団地 D-7・8区													
	鹿児島大学構内遺跡 郡元団地 D・E-5区													
	鹿児島大学構内遺跡 郡元団地 C-4～6区													
	鹿児島大学構内遺跡 郡元団地 C-6区													
編集者名	新里貴之 中村直子 寒川朋枝													
編集機関	鹿児島大学埋蔵文化財調査室													
所在地	〒890-8580 鹿児島市郡元一丁目21-24													
	Tel 099-285-7270 Fax 099-285-7271													
発行年月日	2010年3月													
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因						
		市町村	遺跡番号											
鹿児島大学構内遺跡郡元団地D-7・8区	鹿児島市郡元一丁目21-24	4620	1-23-0	31°	130°	2005.9.7-10.31	110㎡	校舎改修						
				34'	32'									
				32"	53"									
主な時代		主な遺構		主な遺物			特記事項							
近世～近代		水田跡, 土坑		陶磁器, 五輪塔										
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因						
		市町村	遺跡番号											
鹿児島大学構内遺跡郡元団地D・E-5区	鹿児島市郡元一丁目21-24	4620	1-23-0	31°	130°	2006.6.19-10.21	1300㎡	校舎増築						
				34'	32'									
				21"	43"									
				主な時代					主な遺構		主な遺物			特記事項
				近世～近代					水田跡, 建物跡		陶磁器類,その他			弥生時代中期の集落跡?
古墳時代		自然流路		土器, 須恵器										
弥生時代		住居跡		土器, 石器										
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因						
		市町村	遺跡番号											
鹿児島大学構内遺跡郡元団地C-4～6区	鹿児島市郡元一丁目21-24	4620	1-23-0	31°	130°	2006.10.10-11.28	89㎡	校舎改修						
				34'	32'									
				23"	88"									
主な時代		主な遺構		主な遺物			特記事項							
近世～近代		水田跡, 河川跡		陶磁器類,その他			河川流路移動の証拠							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因						
		市町村	遺跡番号											
鹿児島大学構内遺跡郡元団地C-6区	鹿児島市郡元一丁目21-24	4620	1-23-0	31°	130°	2007.12.18-2008.3.31	350㎡	校舎新営						
				34'	32'									
				31"	41"									
				主な時代					主な遺構		主な遺物			特記事項
近世～近代		水田跡, 土坑		陶磁器類, その他			河川流路移動の証拠							
古代～中世		河川跡		土師器, 中国陶磁器										

## II 2005-4 郡元団地D-7・8区農学部研究棟D（旧・農学部5号館） 改修工事に伴う発掘調査

### 1. 調査にいたる経過

鹿児島大学では、PFI事業に伴い、平成17～21年度にかけて農学部の改修工事を実施することが計画されている。初年度である平成17年度は農学部研究棟D（旧・5号館）の改修工事地点が掘削工事範囲となった。このため、鹿児島大学埋蔵文化財調査室では平成17年7月に試掘調査を行い<sup>1)</sup>、本地点に埋蔵文化財が包蔵されていることを確認し、本調査を実施することになった。

### 2. 調査期間と調査体制

調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が以下の体制と期間で行なった。

所在地 鹿児島市郡元一丁目21番24号

調査面積 110m<sup>2</sup>

調査期間 平成17年9月7日～10月31日

調査体制 主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室長 新田栄治

担当者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 主任 中村直子

国際航業株式会社

調査代理人 飯田英樹

監理技師 植田誠一

調査員 東園千輝男・長尾聡子・百瀬正恒

作業員 矢住純子・粒崎幸蔵・脇 春教・脇 秋江・脇カツ子・脇タミ子・中園三千代・  
外蘭節子・仮屋アキ・仮屋郁夫・清永千春

### 3. 調査の経過

本調査は、校舎改修工事に伴うもので、掘削工事が行われる校舎北側と南側2か所が調査区となった。研究棟をはさんで調査区が南北に分かれたため、それぞれ北区・南区と呼称した（Fig.4）。

調査は表土を重機で掘削した後、2層以下を人力によって掘削調査を行った。調査区は、いずれも幅1.5m以下であったため、基準ライン（Y=-43,070）から5m間隔のグリッドを設定し、東西方向に西からA～Mと付した。層位は、調査区ごとに分層した。遺物は、部位や種別が判別するもののみ出土位置のポイント測量を行い、他の破片については、層・グリッドごとに分けて取上げた。試掘調査の結果、本地点で埋蔵文化財が包蔵されているのは6層までであったので、全面調査はその層までとし、下層確認のため深掘トレンチを3か所に設定した。

北区から調査を開始した。試掘調査で遺物が確認されなかった6層で遺物が出土したため、その層までを全面掘り下げた。その後、調査区東端に設定した深掘トレンチ1の掘削を行い、郡元キャンパスではそれ以下は無遺物層である粗砂層まで調査を行った。深掘トレンチでは遺物は出土しなかったが、泥炭層が堆積しており、年代測定とプラント・オパール分析のための土壌サンプリングを行った。

北区終了後、南区の調査を開始した。全面調査は5層まで行い、深掘トレンチ2か所を設定して、さらに下層の調査を行った。深掘トレンチ2では、7層上面に足跡状の遺構を確認し、その広がりを見るためトレンチを東西に拡大し、調査を実施した。遺構の写真撮影・測量の後、粗砂層まで掘削を行った。下層からは泥炭層が確認されたので、それぞれのトレンチで柱状に泥炭層のサンプリングを行った。

### 4. 層位（Fig.5・6，PL.2・3）

北区と南区は基本的な層序は類似していたので、北区の基本土層を基準に、以下に記す。



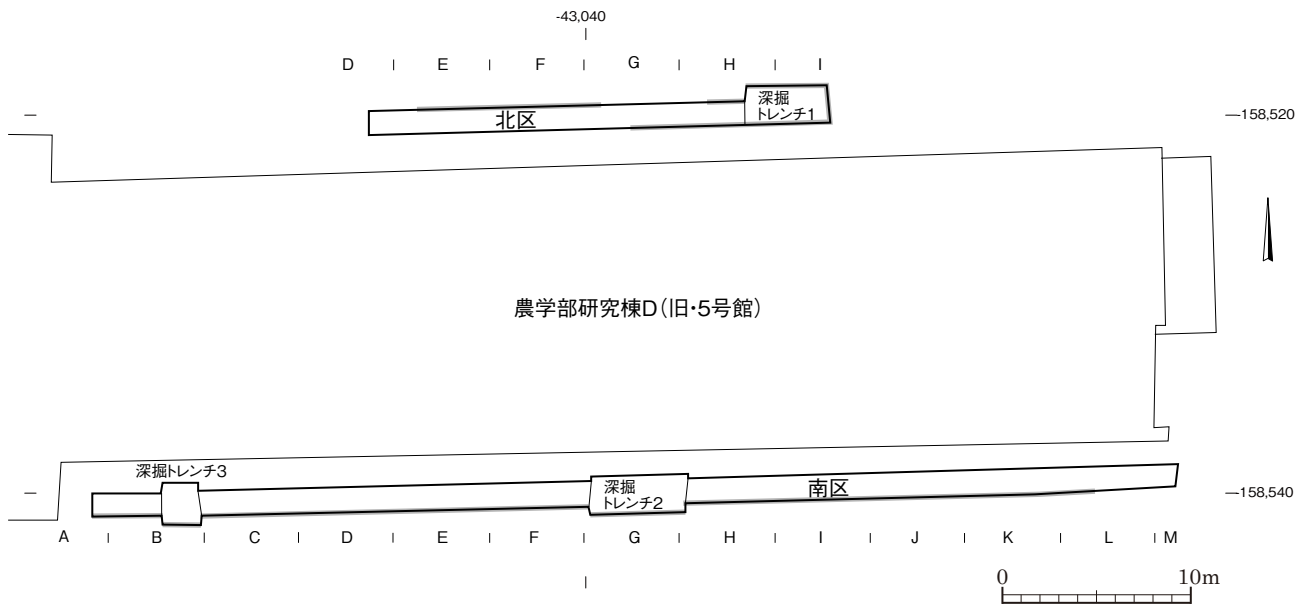


Fig.4 調査地点配置 (S=1/400)  
調査区の灰色線は壁面層位図化箇所

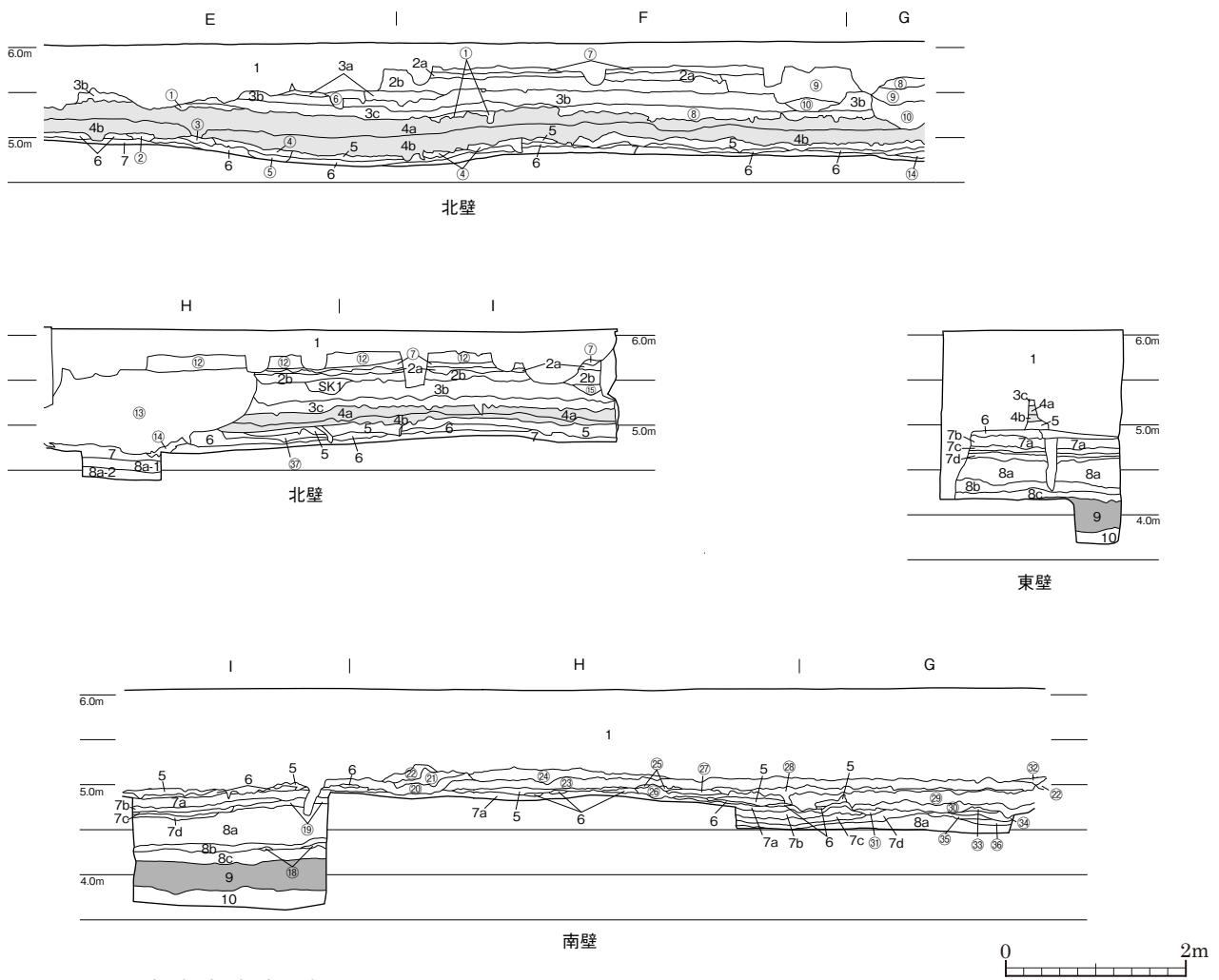


Fig.5 北区北壁・東壁・南壁層位 (S=1/80)

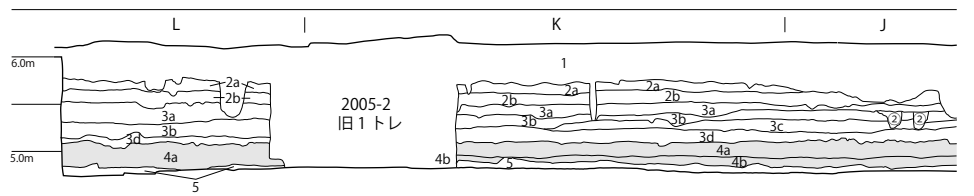
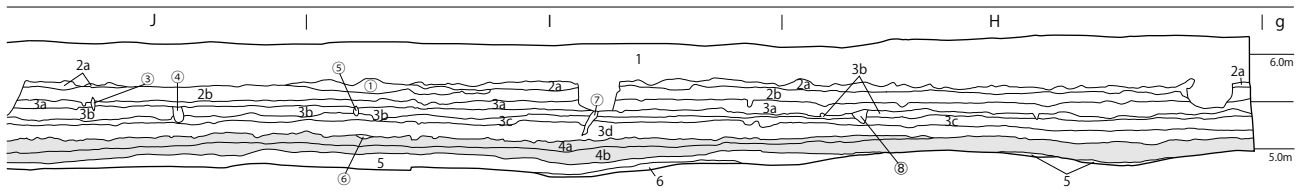
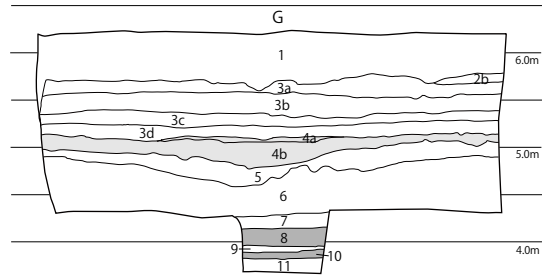
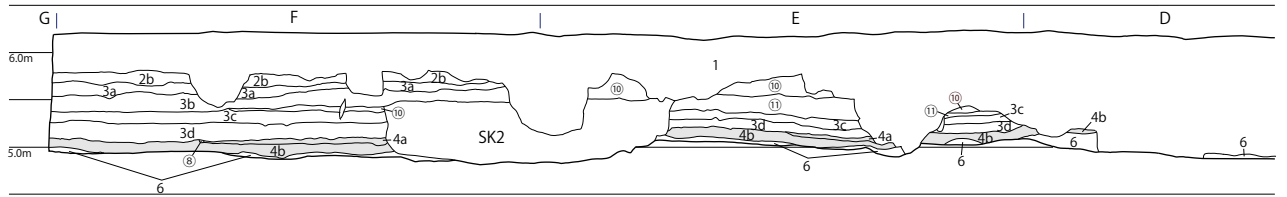
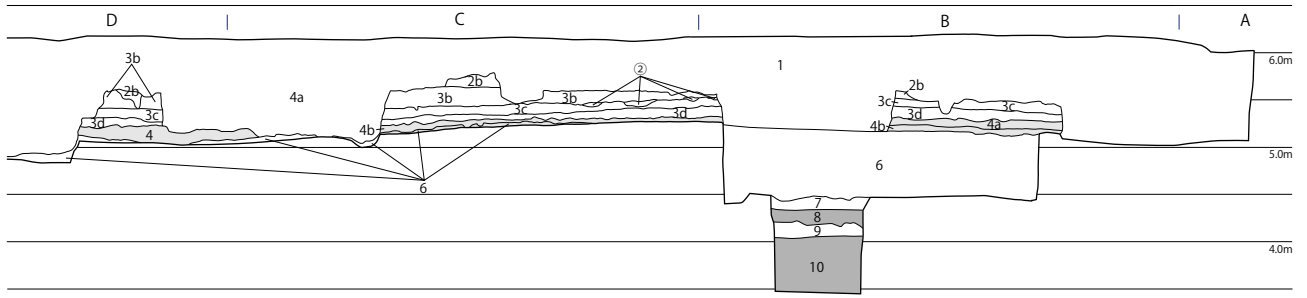


Fig.6 南区南壁 (S=1/80)

- 1層 表土・攪乱層。ブロック・鉄・ガラスなど現代遺物を含む。
- 2a層 灰黄褐色10YR5/2細砂。0.5cm大のパミス含む（2%）。
- 2b層 灰黄褐色10YR5/2シルト質砂。0.5～1cm大のパミス含む（3%）。
- 3a層 褐灰色0 YR5/1砂質シルト。0.5～1cm大のパミス含む（5%）。鉄分・マンガンが筋状に浸透。
- 3b層 灰褐色10YR5.5/1砂質シルト。0.5～1cm大のパミスを含む（3%）。鉄分・マンガンが筋状に浸透。
- 3c層 黄褐色10YR5/6砂質シルト。鉄分を多く含む。
- 3d層 褐灰色10YR6/1シルト質砂。0.5～1cm大のパミスを含む（4%）。マンガンが筋状に浸透。
- 4a層 褐灰色7.5YR4/1砂混じりシルト。少し粘質。0.5～2cm大のパミス含む（10%）。4b層とともに弥生～古墳時代層に対応。
- 4b層 黒褐色10YR3/2砂混じりシルト。少し粘性あり。0.5～3cm大のパミス含む（3%）。
- 5層 灰黄褐色10YR4/2シルト。粘質。0.5cm大以下のパミス含む（1%）。
- 6層 灰黄褐色10YR6/2シルト質粗細砂。下部には5～10cm大の軽石を含む（25%）。
- 7層 灰黄褐色10YR5/2シルト。粘質。
- 8層 にぶい黄褐色10YR5/3細砂。
- 8a層 北区深掘トレンチ1で検出。砂礫層。黄色パミス2cm大も多く含む。
- 8a-1層 北h区深掘トレンチで確認。灰黄褐色10YR6/2砂。
- 8a-2層 北h区深掘トレンチで確認。灰黄褐色10YR6/2シルト質砂。粒状の鉄分まじり。
- 9層 黒色N1.5/泥炭（南区の8～10層に対応）。
- 10層 灰黄褐色10YR5/2砂（南区の11層に対応）。北区8層は南区に存在していない。  
そのほか、基本層位に包括できない層は、以下のとおりである。
- ①層 2a層土に類似。水平方向に薄い細砂層がまじる。
- ②層 褐灰色10YR6/1砂質シルトを基調とし、黄褐色10YR5/6シルトを0.5cm大のブロックで含む。
- ③層 2b層土に類似。締まり悪い。
- ④層 ②層に同じ。
- ⑤層 灰黄褐色10YR5/2砂質シルト。締まり悪い。
- ⑥層 灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。微細なパミスまじり（1%以下）。
- ⑦層 ②層に同じ。
- ⑧層 3d層に類似。締まり悪い。
- ⑩層 10YR5/1褐灰色を基調とするシルト質砂。鉄分多く浸透。
- ⑪層 3b層土に類似。3cm大のパミスまじり（5%）。
- ⑫層 灰黄褐色10YR4/2粗砂。3～5cm大のパミスまじり（1%以下）。下部に白粗砂ブロックを含む。
- ⑬層 褐灰色10YR5/1シルト質砂を基調とする。3cm大のパミスまじり（5%）。締まり悪い。
- ⑭層 7層土と⑬層のまじり土。
- ⑮層 2b層を基調とするが、下部に3層土を2cm大ブロックで含む。
- ⑯層 灰黄褐色10YR4/2砂。締まり悪い。樹痕か。
- ⑰層 ⑯に同じ。
- ⑱層 にぶい黄褐色10YR5/3粗砂。
- ⑲層 黒褐色10YR3/2砂質シルト。5cm大のパミスまじり。粘質。
- ⑳層 暗灰黄色2.5Y5/2砂質シルト。締まり悪い。
- ㉑層 暗灰黄色2.5Y5/2砂質シルト（砂多い）。5cm大の木炭まじり。締まり悪い。
- ㉒層 黄灰色2.5Y5/1シルト質砂。5cm大の木炭まじり。締まり悪い。
- ㉓層 暗灰黄色シルト。締まり悪い。
- ㉔層 木炭を基調とし、ガラス・木片などを多く含む。攪乱層。
- ㉕層 灰黄褐色10YR5/2細砂。

- ②6層 にぶい黄橙色10YR7/2細砂。
- ②7層 灰黄褐色10YR5/2砂。0.5cm大パミスまじり (2%)。
- ②8層 褐灰色10YR4/1シルト質砂。29層土をブロック状で含む。締まり良い。
- ②9層 褐灰色10YR5/1シルト質砂。1cm大のパミスまじり (2%)。
- ③0層 5層・6層・7a層などのまじり土。
- ③1層 7c層を基調とするが、5・6層土がまじる。
- ③2層 暗灰黄色2.5Y5/2シルト。締まり悪い。
- ③3層 7b層に類似。
- ③4層 にぶい黄色2.5Y6/4に類似するシルト。
- ③5層 黄褐色10YR5/8細砂。鉄分浸透。
- ③6層 灰黄褐色10YR6/2細砂。筋状の鉄分含む。根痕か。
- ③7層 灰黄褐色10YR4/2シルト。

## 5. 遺構・遺物

遺構は、北区と南区あわせると、3つの面で検出した。3層上面、4層上面、7層上面である。遺物集計はTab.1に、観察表はTab.2に記した。

### 表土・攪乱層出土遺物 (Fig.10, PL.1)

1は宝珠・受花部が一体となった凝灰岩製五輪塔であり、底面にはめ込みの突起がある。ほかにも、肥前系と考えられる染付高台部片(2)が図化できた。

### 2層出土遺物 (Fig.10, PL.1)

青磁碗高台部(3)、焙烙底部片(4)、陶器口縁部(5)、肥前系染付口縁部片(6)、土師質土器の脚部片(7)、弥生時代中期前半(新)の入来Ⅱ式甕口縁部(8)、白薩摩皿口縁部(9)を図化した。

### 3層上面検出遺構 (Fig.7, PL.2・4)

北区と南区で土坑3基と溝跡1条が確認できた。北区では1基のみであったが、南区ではe・f区に集中していた。南区SK2は、南側は調査区外に広がっているようであるが、現状で幅80cm、深さ80cmを測り、断面は若干側面が張り出した袋状を呈している。底面は6層土である。埋土中より近世の染付の小破片が出土している。

### 3層出土遺物 (Fig.10, PL.1)

うち、古墳時代成川式高坏脚部片(10)、糸切底土師器を図化した(11)。

### 4層上面検出遺構 (Fig.8, PL.4)

南区bグリッドにピットを1基検出した。遺物は出土していない。

### 4層出土遺物 (Fig.10, PL.1)

弥生時代中期黒髪式系甕口縁部(12)、弥生時代中期～後期多条突帯壺胴部(13)を図化した。

### 7層上面検出遺構 (Fig.9, PL.4)

南区深掘トレンチ2・3で小ピット群と足跡状遺構を検出した。7層は粘質のシルト層で、上層の粗砂層が埋土となっている。これらはほとんどが深度10cm内と浅く、足跡状遺構は並んで配列しているようにみえた。これ以下の土層からは遺物が確認されていない。

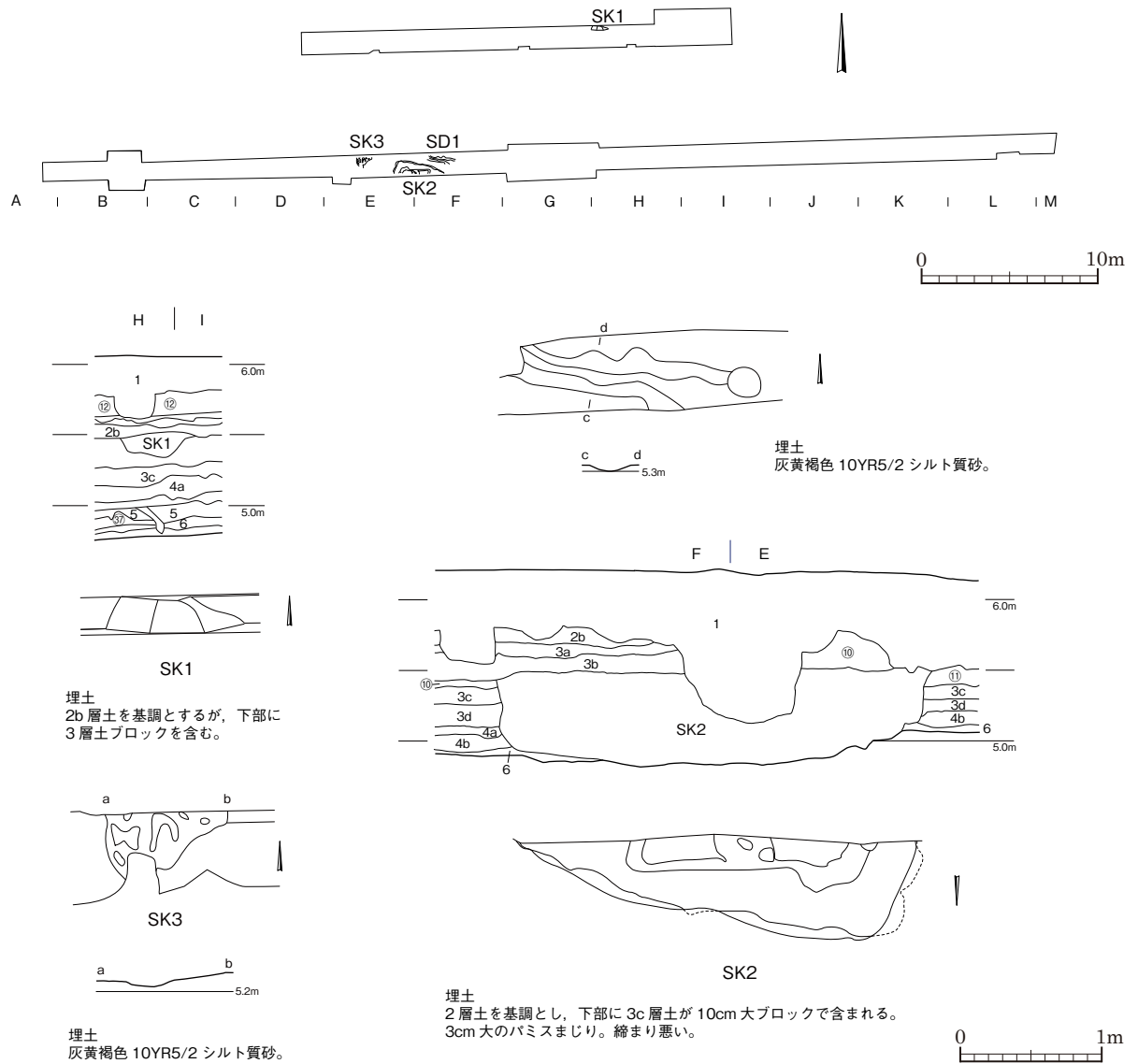


Fig.7 3層上面検出遺構(遺構配置:S=1/400, 個別遺構:S=1/50)

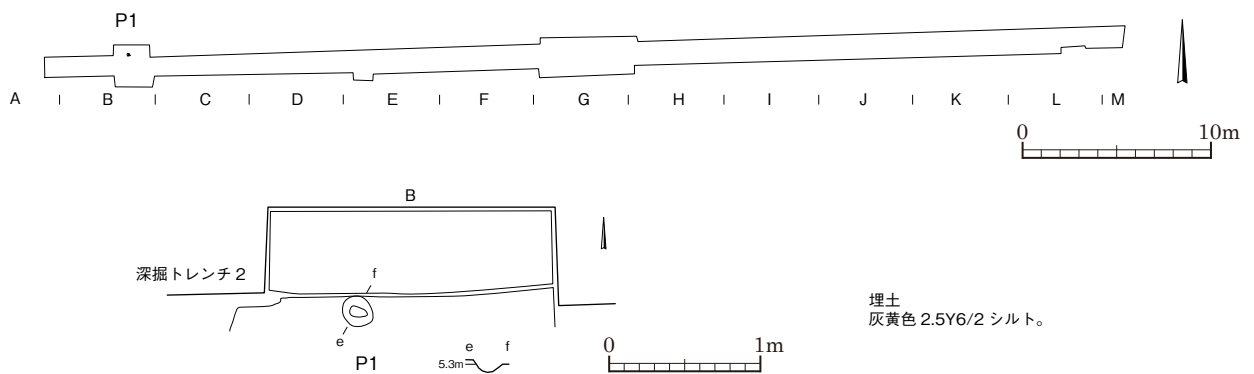
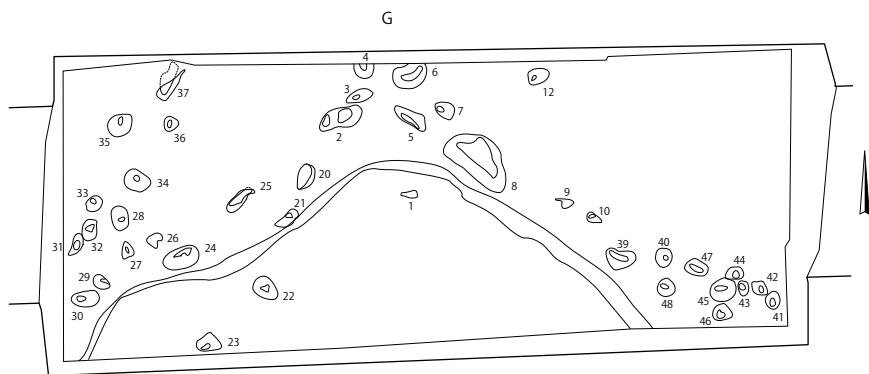
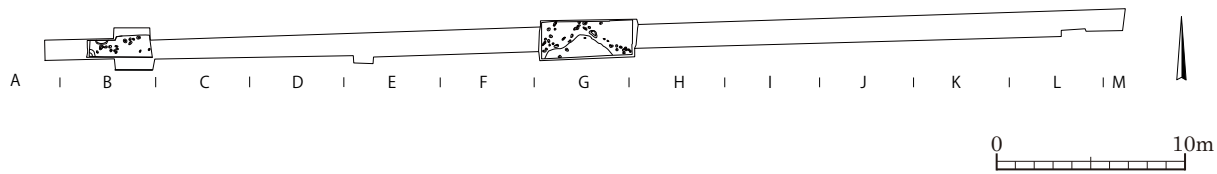
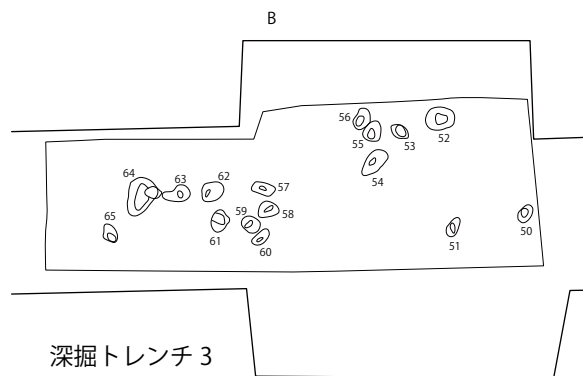


Fig.8 4層上面遺構(遺構配置:S=1/400, ピット:S=1/50)



深掘トレンチ 2



深掘トレンチ 3

ピット深度 (cm)

1	4.9	29	6.5
2	5.9	30	8.2
3	4.8	31	6.9
4	3.6	32	3.0
5	4.9	33	4.5
6	4.8	34	4.9
7	2.8	35	7.6
8	5.7	36	4.2
9	不明	37	13.1
10	3.9	39	5.3
12	4.7	40	5.7
20	6.3	41	11.4
21	4.0	42	7.4
22	3.4	43	5.2
23	3.1	44	5.9
24	8.3	45	7.8
25	8.3	46	9.8
26	5.8	47	6.6
27	4.7	48	7.7
28	5.2		

ピット深度 (cm)

50	4.1
51	3.1
52	7.6
53	3.2
54	4.9
55	3.4
56	6.4
57	3.8
58	5.3
59	5.3
60	6.5
61	3.9
62	6.1
63	7.9
64	4.0
65	2.9

ピット埋土

灰黄褐色 10YR6/2 シルト質粗細砂。6層砂。

Fig.9 7層上面遺構(遺構配置:S=1/400, 個別遺構:S=1/50)

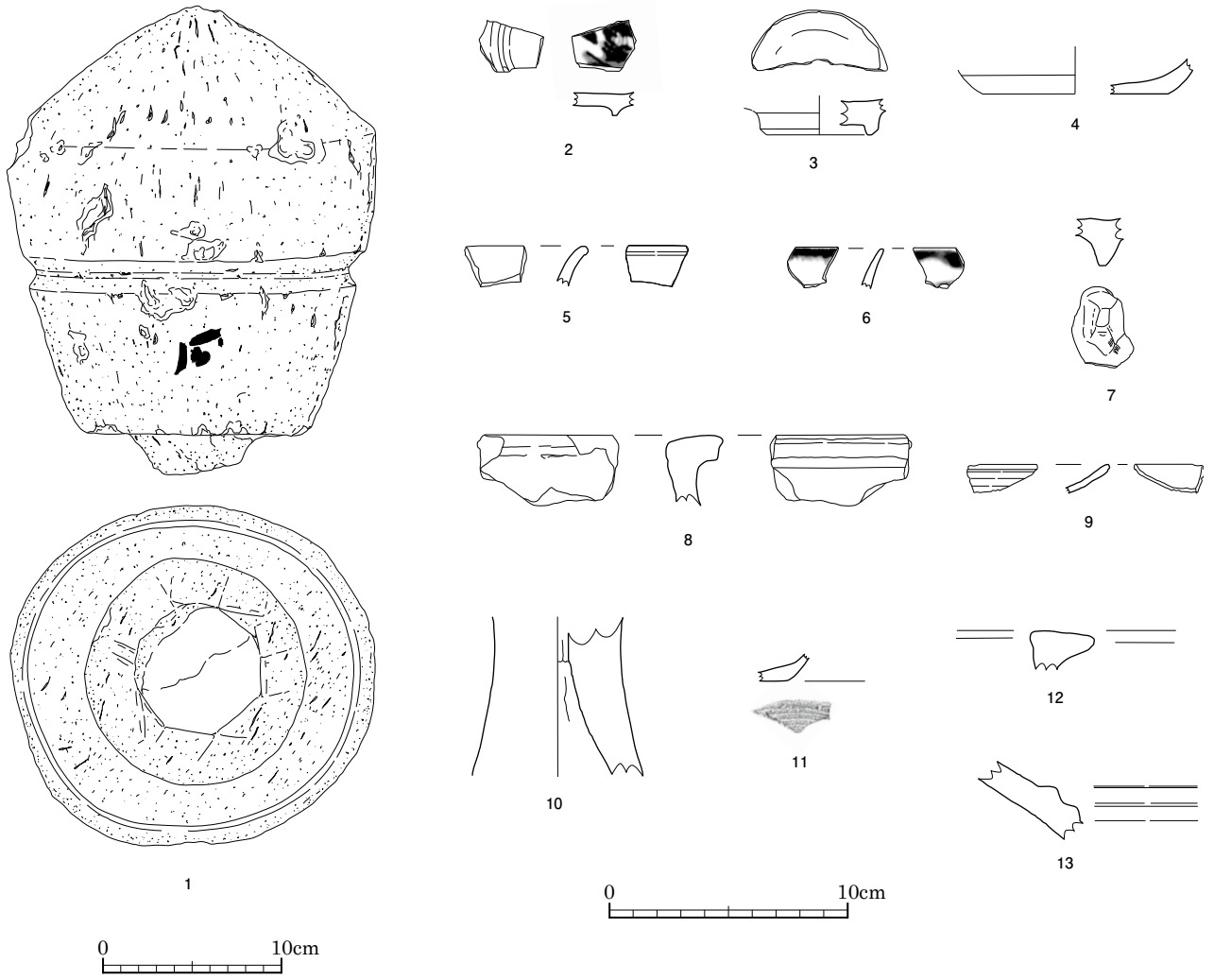
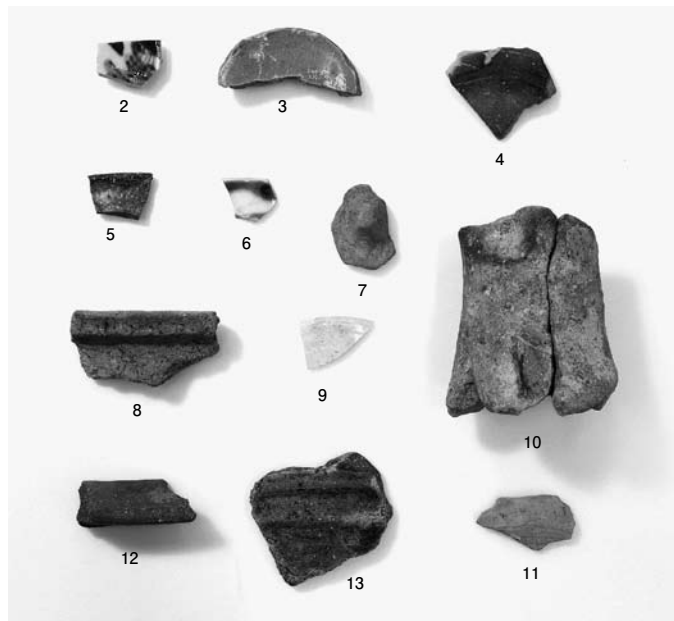


Fig.10 出土遺物(S=1/3)



PL.1 出土遺物

## 6. 小結

遺物は、少量であるが弥生時代～近代のものが出土した。Tab.1からみると、4層は弥生～古墳時代、3層は中世以降、2層は近世以降、1層は鹿児島高等農林学校時代（近代）以降と捉えることができる。近世～近代の遺物として五輪塔の一部が出土しているが、郡元団地一帯は、近世～近代にかけて水田地帯であったことが発掘調査や文献から分かっている。この遺物は水田地帯の一角に所在する墓域を想定してもよいのかもしれない。3層上面で検出された土坑SK2のような遺構は、2006-2・2007-4地点（Ⅱ・Ⅳ章）にもあり、郡元団地の近世以降の水田跡に比較的類例が多いものの、性格については不明な部分が多い。7層上面の足跡状遺構と小ピット群は、水田に伴うものであるとすると、弥生時代中期以前の可能性もあるが、遺物の出土がなく、年代を決定することができなかった。

## 註

- 1) 中村直子・新里貴之 2007『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』21

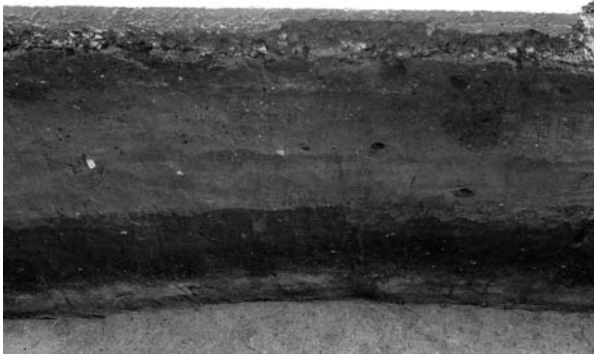


Tab.1 2005-4 遺物集計

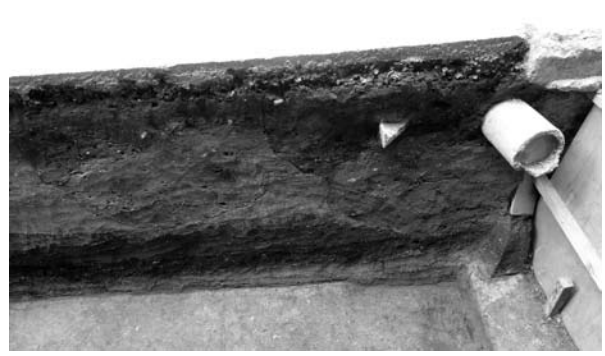
時期	種別	器種	北区					南区									計
			攪乱層	2層	3b層	4層	6層	攪乱層	2層	2a層	2b層	3層	3a層	3b層	4層	SK2	
弥生時代	土器	甕								1	3				1		5
	2条突帯	壺				1											1
古墳時代	土器	甕						1									1
	土器	高坏											1	1			2
	土器												3				3
弥生～古墳	2条突帯										2						2
	土器		1		4	2	1		3	12	58	1	1	15		1	99
	須恵器									1	2						3
	土師器										3	1		1			5
古代～中世	瓦器										2						2
	青磁・竜泉窯系	碗							1								1
	青磁・竜泉窯系	盤?												1			1
	青磁・竜泉窯系									1							1
	白磁	皿									1						1
近世～近代	白磁			1							1	1					3
	苗代川	播鉢						1									1
	白薩摩	皿									1						1
	肥前陶器										1						1
	肥前系磁器									1							1
	肥前系磁器?			1				1			1					1	4
	土製品	焙烙								2							2
その他	土製品										1						1
	陶器				1				1	7	3						12
	石・石製品							1		7	2						10
	黒曜石										1						1
	瓦							1								1	
計			1	2	5	3	1	5	5	32	82	3	1	21	2	2	165

Tab.2 遺物観察

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
1	南区・排土	石製品	五輪塔	宝珠・受花		凝灰岩 受花に「風」墨書 最大径：19.8cm 最小径：12cm 重：9.6kg
2	南E・攪乱	磁器（肥前系?）		高台	釉：明緑灰・淡白 素地：白 文様：青灰・暗青灰	
3	南G・2	青磁（竜泉窯系・沖繩IV類）	碗	高台	釉：オリーブ灰 素地：灰	高台内：露胎 14c中～15c初 底径（4.2cm）
4	南G・2a	土製品	焙烙	底	内：浅黄橙	外面：スス附着 底径（7.6cm）
5	南G・2a	陶器		口	釉：透明 素地：灰	
6	南H・2a	磁器（肥前系）		口	釉：灰白 素地：白 文様：コバルトブルー	
7	南L・2b	土師器	香炉?	足	内外：橙	
8	南F・2b	弥生土器	甕	口	橙	入来Ⅱ式 弥生中期前半・新
9	南E・2b	陶器（白薩摩）	皿	口	釉：透明 素地：灰白	
10	南K・3b	成川式	高杯	脚	表：灰白～にぶい黄橙 裏：にぶい黄橙	
11	南G・3b	土師器	坏	底	外：にぶい黄橙 内：橙	糸切底 14c以降
12	南I・4	弥生土器	甕	口	外：褐 内：明褐	肥後・黒髮式折衷タイプ 弥生中期
13	北E・4	弥生土器	壺	胴	外：にぶい褐 内：赤褐	胎土に黒雲母（多） 弥生中期～後期



北壁



北壁



北壁 (SK1付近)



東壁



南壁



SK1[南より]

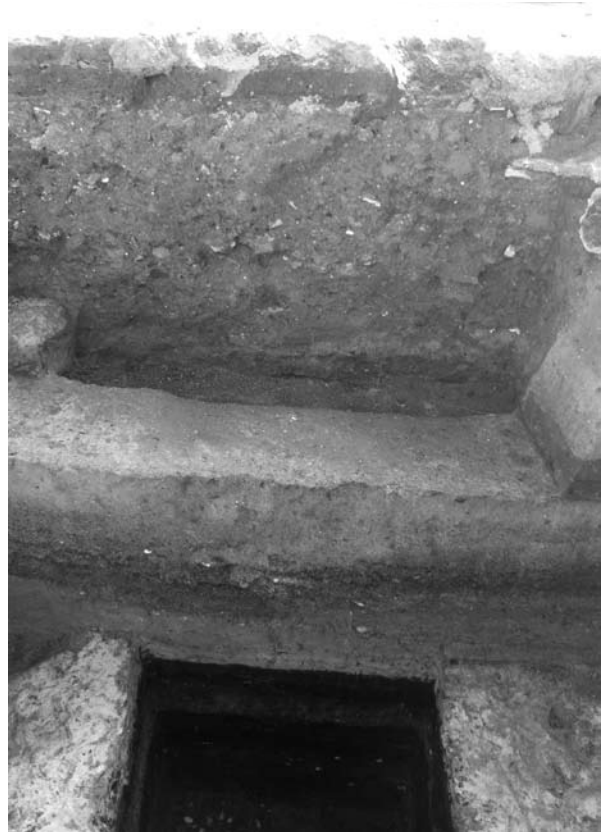


完掘[東より]

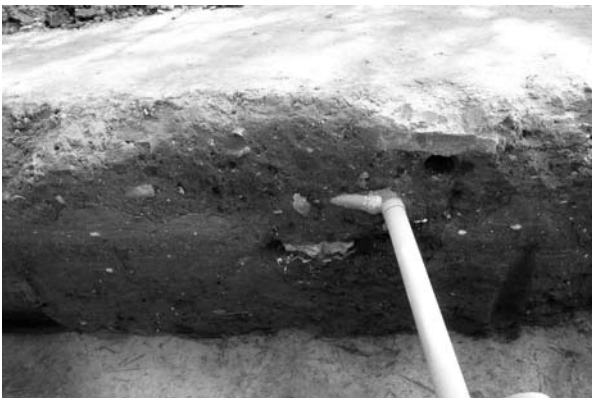
PL.2 北区



南区完掘(西より)



南壁(深掘トレンチ3)



南壁 (SK2付近)



南壁(深掘トレンチ2)



南壁



南壁

PL.3 南区



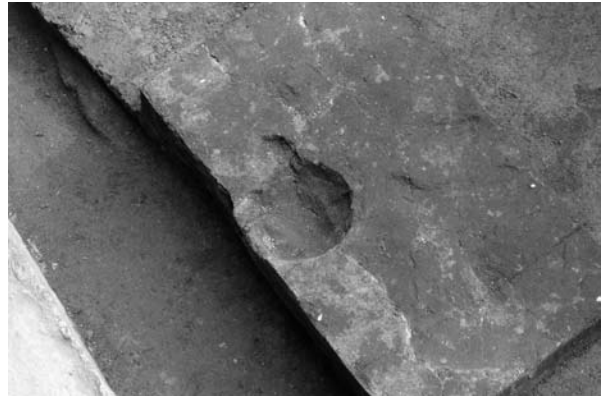
SK2[南より]



SK3[南より]



SD1[西より]



P1[北より]



深掘トレンチ2足跡[東より]



深掘トレンチ3[西より]

PL.4 南区





PL.5 層位



PL.6 大畦下の溝跡と隣接した建物跡





PL.7 水田下の土坑（壁面に粘土を貼りつける）



PL.8 竪穴住居跡

### Ⅲ 2006-2 郡元団地D・E-5区農学部共通棟（旧・農学部1号館） 中庭増築工事に伴う発掘調査

#### 1. 調査にいたる経緯

鹿児島大学ではPFI事業に伴い、平成18年度に二つの改修工事予定があり、農学部共通棟（旧・1号館）中庭において校舎増築が予定された。そのため、平成16年11月に試掘調査を行うことで農学部土層データを蓄積した<sup>1)</sup>。平成17年には鹿児島県教育委員会文化財課、鹿児島大学埋蔵文化財調査室、建築土木担当の錢高組とで発掘調査の方針を固め、平成18年、工事に先立ち埋蔵文化財発掘調査を行なうこととなった。8月12日には、一般市民向けの遺跡説明会を開催した。

#### 2. 調査体制

発掘調査の期間・体制は以下の通りである。

所在地 鹿児島市郡元一丁目21番24号

調査面積 1300㎡

調査期間 2006年6月19日～10月21日

調査体制 主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室長 新田栄治

担当者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室員 新里貴之

調査代理人 国際航業株式会社 川村 稔

調査員 国際航業株式会社 長尾聡子・百瀬正恒・安村 健

作業員 安楽美智代・石田翔太・石谷美智子・石田万里子・岩切ひとみ・鶴藤猛夫・鶴藤タス・大谷一也・鹿倉征治・加治屋幸雄・樺山マリ子・仮屋崎徹・川内吉藏・川口永流・川島秀義・久保聡美・久保 静・倉津喜三郎・坂口由可・末吉サチ子・末吉幸子・末吉政甲・平トシ子・谷口ノリ・中馬美子・粒崎幸蔵・中岡勝志・中村奈雄美・南部正和・西窪典子・野下美代子・濱田マリ子・原田 親・福満一典・藤崎ヨオ子・牧之瀬サチ子・松下郁美・松元アヤ子・水迫久夫・山口晃司・山口博昭・山口雄幸・山下キヨミ・山平真一・吉村敏郎・米森千代子・脇 秋江・脇 春教

#### 3. 調査経過 (Fig.11)

6月19日より調査開始。雨天・推薦入試などの関係により表土剥ぎに時間がかかり、7月19日まで、表土剥ぎと写真撮影、周辺測量を同時並行で行う。2層上面より軽石の詰まった溝が検出されたが、後に溝ではなかったことが判明した。7月25日より2層掘り下げ開始。掘り下げの際には各層、遺物を点上げ、一括取り上げ、測量、写真撮影を適宜行なって調査を進めた。5×5mのグリッドを設定し、北から南方向へA～H区、西から東方向へ1～8区とした。工事の関係上、調査区南側と東側の一部を最初に発掘することとなり、大区画で1区と便宜的に呼称し、その他の箇所を2区とした。7月27日より1区の3層掘り下げ開始。28日より2区の2層掘り下げ開始。8月8日には1・2区の3b層を掘り下げ、4層上面で水田の畦・稲株痕・人足痕・牛足痕などが検出され、水田の様相が明確となった。そのため、本調査室では先史時代の遺跡の遺跡説明会はこれまで行ってきたが、急遽、8月12日、近世～近代の水田跡の遺跡説明会という初めての試みを行った。50名内外の参加者があった。

8月31日までに1区の4層を掘り下げ、この地点では4層に削平されて薄くなった5層の掘り下げを開始した。翌日には6層上面で、弥生時代の住居跡ほか古墳時代の自然流路、ピット群などを検出した。1区は9月5日に全調査を終了した。2区は4層除去後、5・6層に深く掘りこまれた鋤跡が水田跡の辺に沿って存在しており、これに切られる形で、円形・楕円形などの土坑群を検出した。9月16日には台風13号が鹿児島を通過し、本調査区を再び水田に変えた。また、大畦下に畦構築以前の幅10cm程度の溝跡が確認され、その



Fig.11 地点区分とグリッド (S=1/500)

畦付近に1間×2間の小型の建物跡が検出された。この間、工事の拡張箇所が決定し、新たに調査区東側を大区画の3区として調査を開始した。10月2日より2区5層掘削開始。6層上面検出遺構確認。3区2層掘削は9月26日より開始した。10月5日より3区4層掘削開始。畦・稲株痕・牛足痕などを検出した。翌6日には1区で検出されていた弥生時代住居跡の残りを6層上面で検出し、調査した。

10月11日より6層以下の状況を確認するため、確認トレンチを5箇所を設定し、水の湧き出すレベルで掘削を止め、写真撮影・測量を行った。その後、各壁面の写真撮影・測量を行い、10月20日、調査を終了した。

#### 4. 層位 (Fig.12~16, PL.5・9~11)

本調査区では、1~10層の基本層序が確認されている。地点によって色調や内容物に若干の違いはあるものの、概ね同様に土層が堆積している。以下に基本層序を記す。各地点で基本層序間に貫入する層は、各層や遺構図面に記した。

1層 表土・攪乱層。

2層 水田層。遺物包含層。にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。0.5~1cm大のパミスまじり。締まり良い。

2'層 水田層。1区AZ7付近・AZ1付近で確認された層。灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。締まり良い。

2''層 水田層。1区AZ7付近で確認された層。2'層よりやや明るい。

3a層 水田層。遺物包含層。褐色10YR4/4砂質シルト。0.5~2cm大のパミスまじり。マンガン浸透。締



まり良い。

3a'層 水田層。1区南西隅・2区で確認された層。2層よりやや白い色調。

3b層 水田層。遺物包含層。褐色10YR4/4シルト質砂。0.5~3cm大のパミス・粗砂まじり。締まり良い。

3b'層 水田層。1区で確認された層。灰黄褐色10YR4/2シルト質細砂。

3b''層 水田層。1区AZ1付近で確認された層。3b層に類似。やや締まり悪い。

4a層 水田層。遺物包含層。にぶい黄褐色10YR4/3砂質シルト。0.5~1cm大のパミスまじり。マンガン浸透(多)。締まり良い。

4a'層 水田層。2区AZ3付近・3区で確認された層。にぶい黄褐色10YR5/3砂質シルト。マンガン浸透。締まり良い。

4b層 水田層。遺物包含層。4a層に類似するが、マンガン浸透がさらに多く、かなり締まり良い。

4b'層 水田層。2区北西部・1区で確認された層。4b層に類似するが、かなり固く締まり、よりマンガン浸透が多い。

4c層 水田層。遺物包含層。褐色10YR4/4砂質シルト。0.5cm大のパミスまじり。締まりやや悪い。場所によって存在しない。

4c'層 水田層。2区北西隅で確認された層。4b・4c層のまじり土。

4d層 水田層及び5層とのまじり土。遺物包含層。暗褐色10YR3/4砂質シルト。締まりやや悪い。

5a層 遺物包含層。黒褐色10YR2/2砂質シルト。0.5~3cm大のパミスまじり(多)。かなり締まり良い。

5b層 5層と6層の漸移層。

6a層 にぶい黄橙色10YR6/4粗砂。0.5~5cm大のパミスまじり。締まり悪い。

6b層 6a層・6c層のまじる砂質シルト。

6c層 にぶい黄橙色10YR6/4シルト。上部からの根跡が目立つ。粘質。

7a層 黒褐色10YR3/2シルト。粘質。

7b層 暗褐色10YR3/4シルト。粘質。

7c層 黒褐色10YR3/2シルトとにぶい黄褐色10YR7/2シルトの縞状堆積。粘質。

8a層 にぶい黄褐色10YR5/3細砂。脆い。

8b層 にぶい黄橙色10YR6/3シルト。粘質。

9a層 黒色10YR2/1若干粗砂まじりのシルト。粘質。

9b層 黒色10YR2/1シルト。粗細砂のラミナがみられる。粘質。

9c層 黒色10YR2/1シルト。粘質。

9d層 黒色10YR1.7/1シルト。泥炭。にぶい黄橙色10YR6/3シルトが底面に縞状に入る。

9e層 黒色10YR2/1シルト。

10a層 にぶい黄褐色10YR5/3(地点によってオリーブ黒5Y2/2)粗砂に、0.5~10cm大のパミスがびっしりとまじる。地点によって存在しない。

10b層 にぶい黄褐色10YR5/4粗砂。0.5~10cm大のパミスまじり。脆い。

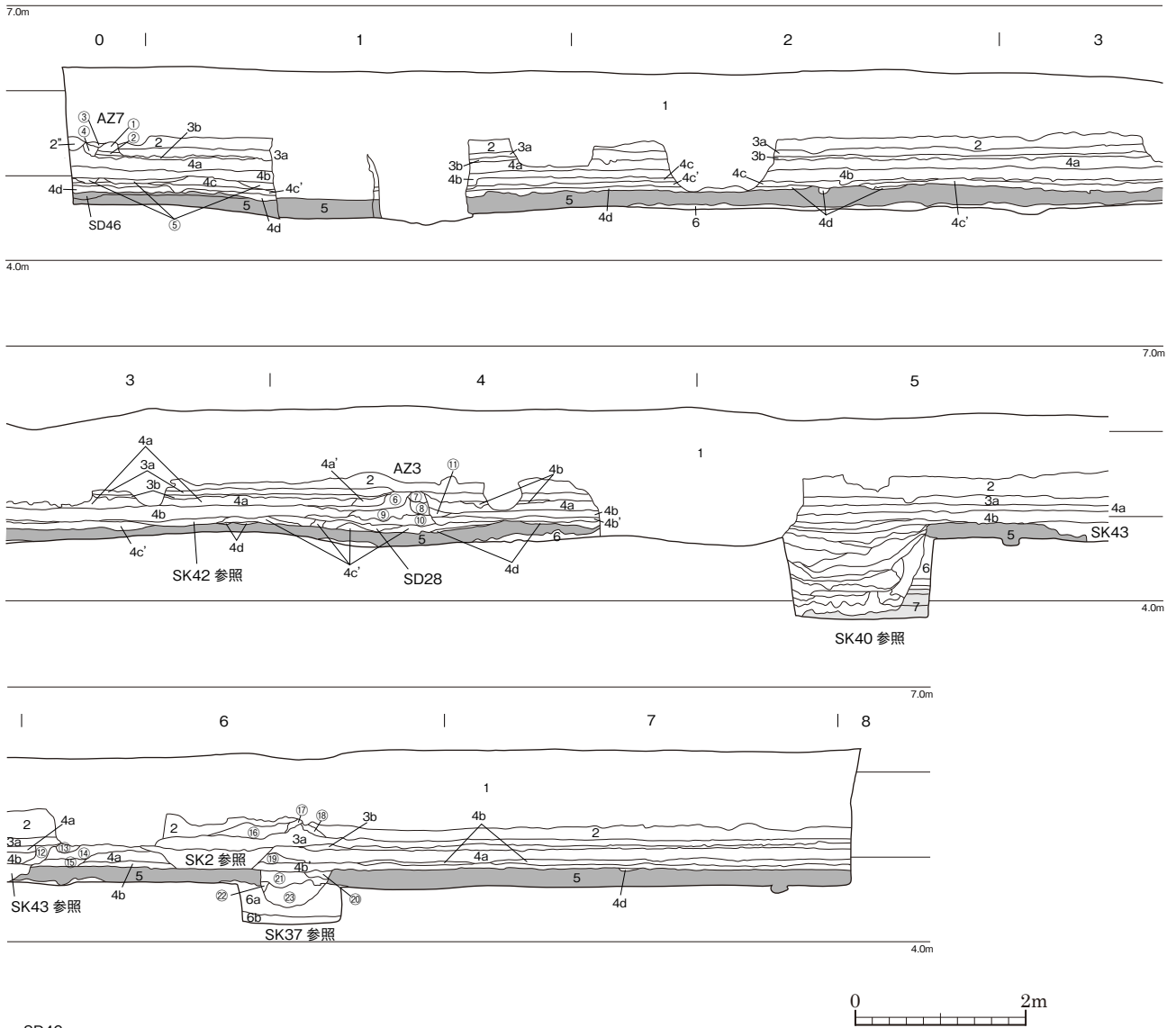
10c層 灰黄褐色10YR5/2粗砂。0.5~2cm大のパミスまじり。人頭大の軽石礫がまじることもある。脆い。

1層は、鹿児島大学・鹿児島高等農林学校時代の遺物が出土する。発掘期間の関係上、2層上面までは重機による掘削を行なった。同層の遺物は、基礎跡や排土中より採集したものがほとんどである。

2層は、1層に削平される。近代以降~鹿児島高等農林学校直前段階までの水田・耕作土と考えられる。上面より鹿児島大学や鹿児島高等農林学校時代の建物跡が検出された。

3層は、近世~近代の水田層と考えられる。大きくは砂まじり粘土層(3a)と粘土層(3b)に分かれる。粘土層(3b)は、水田の床土であると考えられる。3b層上面・4層上面で、大畦・小畦、稲株痕や牛足痕、人の足跡が検出されている。沖積平野の自然地形を利用し、唐湊側から錦江湾側へ緩やかな段状を呈していたと考えられる。

北壁



**SD46**  
 にぶい黄褐色 10YR5/3 シルトまじり粗細砂。0.5～1cm 大のバミスまじり。締まり良い。

- AZ7**
- ① にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。0.5～1cm 大バミス混じり。締まり良い。
  - ② にぶい黄褐色 10YR6/4 シルトまじり細砂。
  - ③ にぶい黄褐色 10YR7/3 細砂を基調とし、にぶい黄が色 10YR5/3 シルトまじる。
  - ④ にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質シルト。0.5～1cm 大バミス混じり。締まり良い。
  - ⑤ にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルトに 4c 層土がまじる。

- AZ3**
- ⑥ 灰黄褐色 10YR 砂質シルト。0.5～3cm 大のバミスまじり。締まり良い。
  - ⑦ にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。0.5～2cm 大のバミス、底面には白色細砂がまじる。締まり良い。
  - ⑧ にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。マンガンまじり。
  - ⑨ にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。
  - ⑩ にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。白色粗砂がまじる。締まり良い。
  - ⑪ にぶい黄褐色 10YR6/4 粗細砂。
  - ⑫ 灰黄褐色 10YR5/2 砂質シルト。0.5～1cm 大のバミスまじり。3b 層に近いやや細かいマンガンまじり。
  - ⑬ 灰黄褐色 10YR5/2 砂質シルト。マンガンわずかにまじる。
  - ⑭ 灰黄褐色 10YR5/2 砂質シルト。
  - ⑮ にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。0.5～1cm 大のバミスまじり。やや締まり良い。
  - ⑯ ⑰ よりさらに明るいい色調。
  - ⑱ 2 層よりやや明るいい色調。
  - ⑳ 2 層にシルトが多くまじる。締まり良い。
  - ㉑ 灰黄褐色 10YR4/2 シルト質粗砂。

- SK37**
- ㉒ 褐色 10YR4/6 砂質シルトベースに 5 層ブロック、0.5～1cm 大のバミスまじり。
  - ㉓ 暗褐色 10YR3/3 砂質シルトベースに 5 層ブロック (少)、0.5～1cm 大のバミスまじり。
  - ㉔ 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルトベースに 20cm 大の 5 層ブロック、0.5～2cm 大のバミスまじり。
  - ㉕ 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルトベースに 3～10cm 大の 5 層ブロック、0.5～1cm 大のバミスまじり。

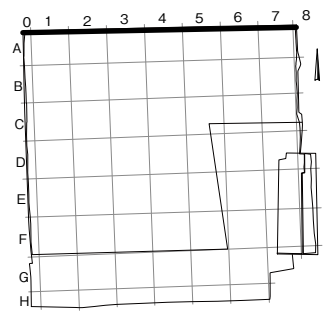
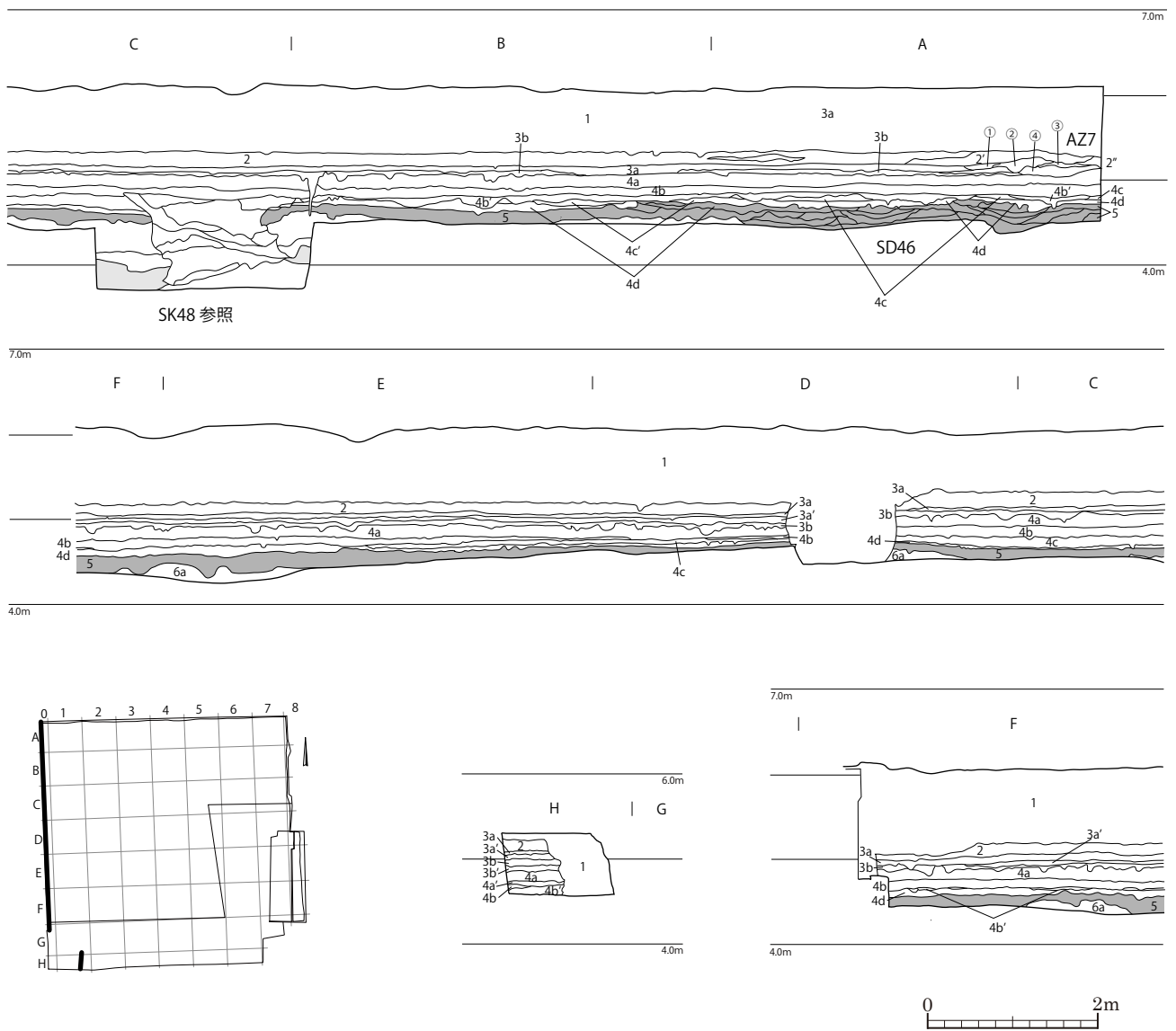


Fig.12 北壁 (S=1/80)

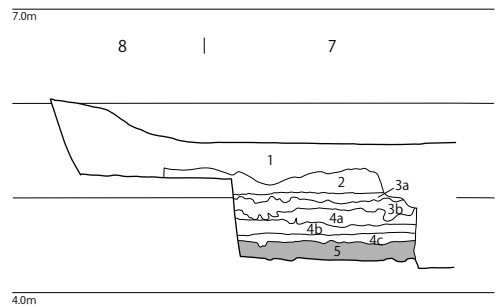
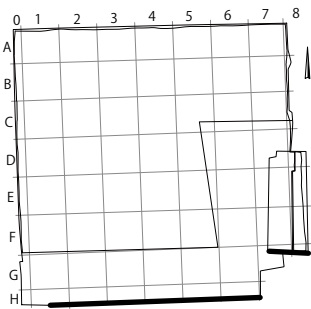
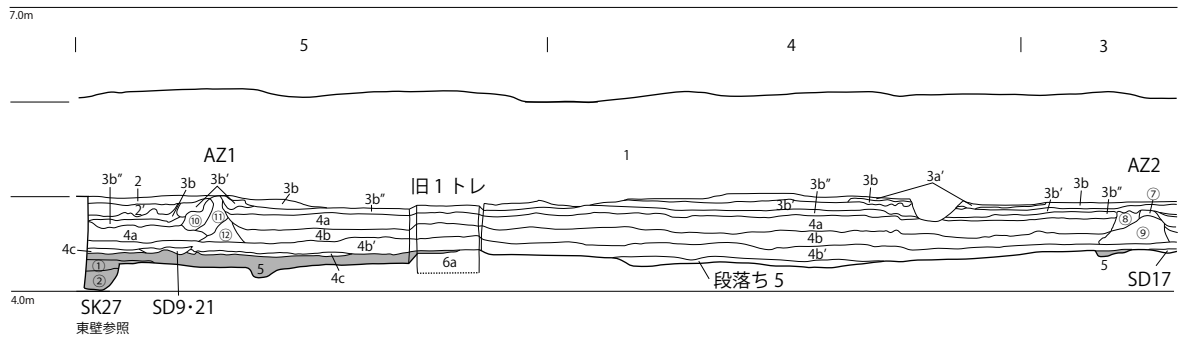
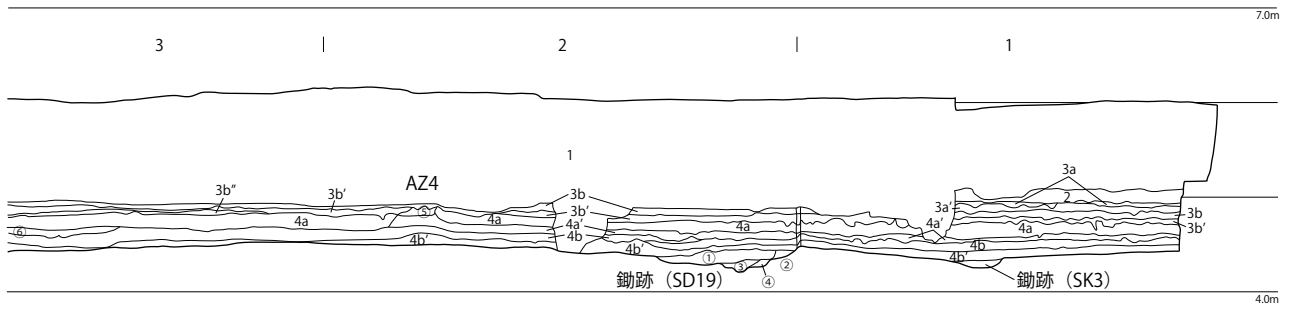


- ① にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。Aに貫おなじ。
- ② Bを基調とし、にぶい黄褐色 10YR7/3 細砂まじり。
- ③ にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。0.5～1cm大バミス、マンガンまじり。締まり良い。
- ④ にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。マンガン浸透。

Fig.13 西壁(S=1/80)

4層は、近世以降の水田層である。a～d層に細分されるが、c・d層は部分的に検出される。あるいは利水を目的とした、棚田状に段差を作り出すための造成土である可能性も高い。4c・d層上面で、10～15cm深の浅い溝が掘られており、大畦下位に位置することから、大畦設定のための区画溝であった可能性が高い。このため、4a～d層は、さほど時間差のない土層であると判断している。水平堆積しており、起伏のあった5層土を削平しているため、人工的に運ばれた土壌である可能性もある。

5層は、弥生時代～古墳時代の遺物が主体に出土する。5層上面からは円形・不整形円形・楕円形の土坑群が検出され、皆一様に開口部が4c・d層に水平に削平されていることから、水田造営のために埋め潰された遺構であると考えている。また、自然流路と思しき古墳時代の浅い溝は、5層掘削中に検出され、須恵器な



**鋤・犁跡 (SK3)**

暗褐色 10YR3/3 砂質シルト。4b'・6層のまじり土。

**鋤・犁跡 (SK19)**

- ① 黒褐色 10YR3/2 砂質シルトに6層粗砂がまじる(少)。締まり悪い。
- ② ①に6層粗砂が多量にまじる。
- ③ ①に類似するがやや暗め。
- ④ 6層土。

**AZ4**

- ⑤ 4a'層に類似しているが、やや暗め。

**AZ2**

- ⑥ 4aに類似するが、マンガンの含有量が多い。
- ⑦ ⑥に類似。
- ⑧ 4aに類似。
- ⑨ 4bに類似するが、やや白っぽい。

**段落ち5**

4b層に類似。

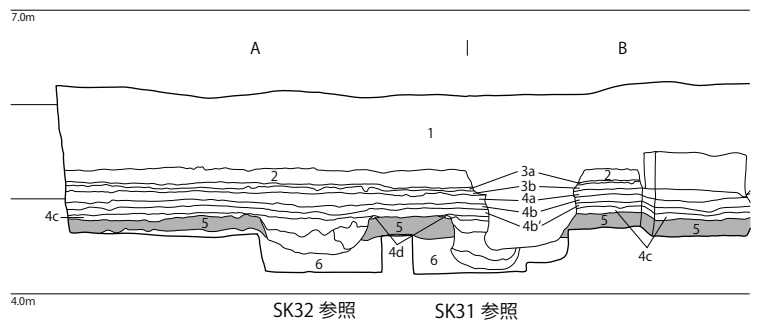
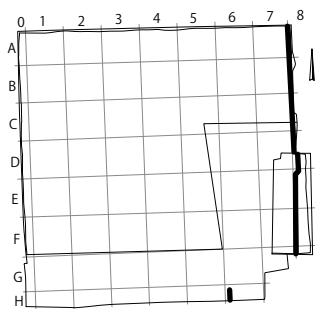
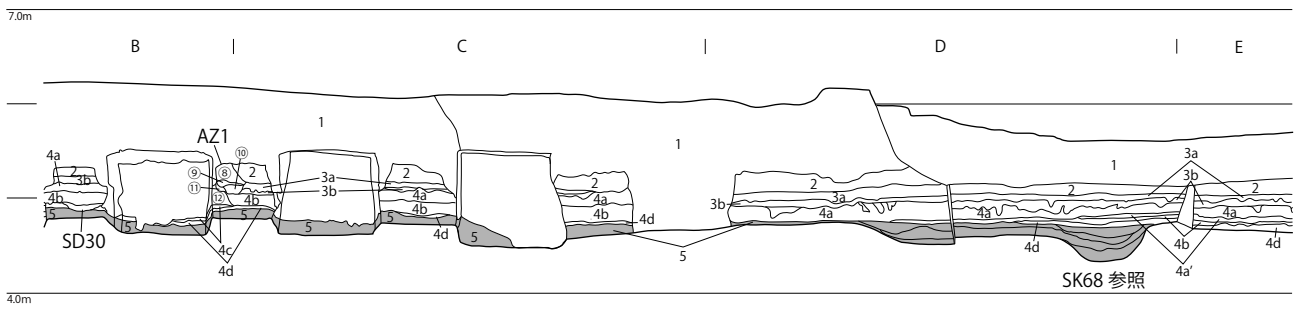
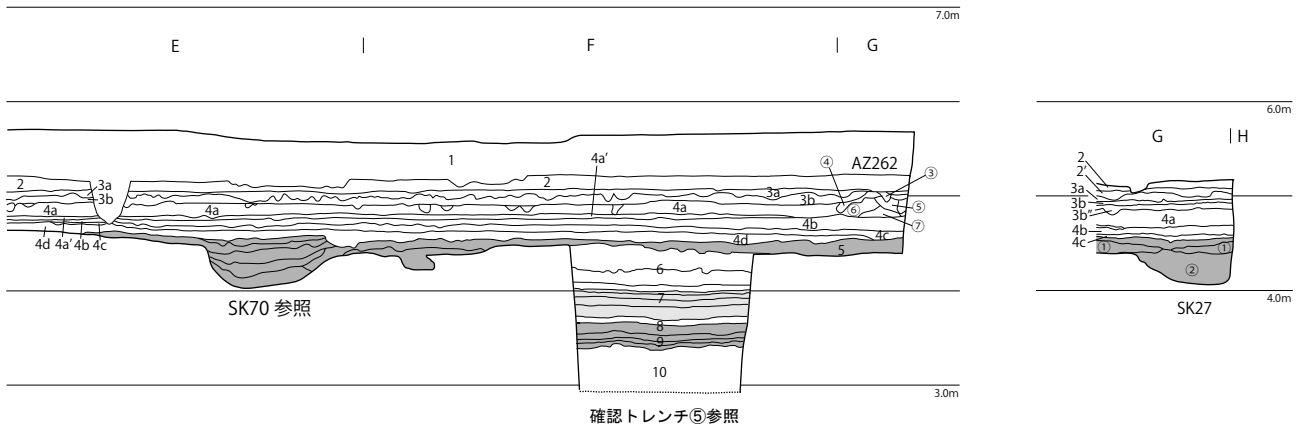
**AZ1**

- ⑩ 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5cm大のバミスまじり。脆い。
- ⑪ にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。0.5~1cm大のバミス、マンガンまじり。脆い。
- ⑫ 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。マンガンまじり。粘質。

**SK9・21**

4bに粗砂が混じる。

Fig.14 南壁(S=1/80)



**SK27**

- ① 黒褐色 10YR3/1 砂質シルト。5層に6層粗砂が多く含まれる。
- ② 5層土。

**AZ262**

- ③ 灰黄褐色 10YR4/2 細砂質シルト。やや白っぽい。締まりやや悪い。
- ④ 南面 3b に類似。
- ⑤ 灰黄褐色 10YR4/2 細砂質シルト。マンガンまじり。締まりやや良い。
- ⑥ 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。
- ⑦ やや暗めの灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。

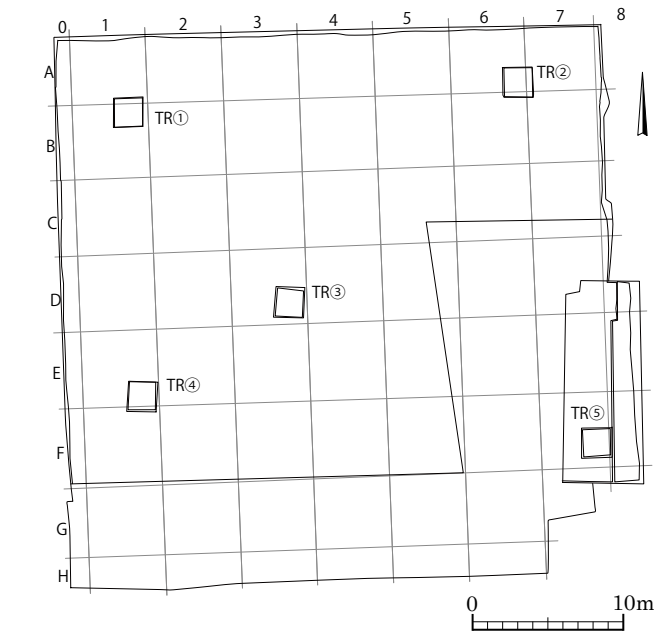
**AZ1**

- ⑧ やや明るめのにぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。締まり良い。
- ⑨ にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。締まり良い。やや粘質。
- ⑩ にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルトにややマンガンまじり。締まり良い。
- ⑪ A に類似。締まりやや悪い。
- ⑫ やや C に類似するが 4b よりはやや暗め。

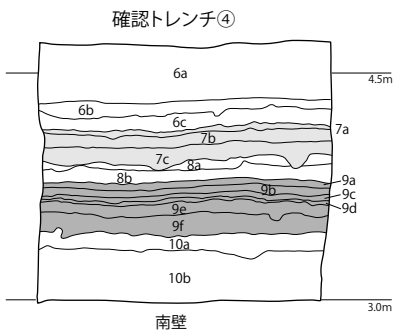
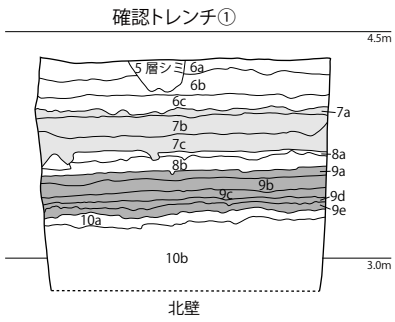
**SD30**

- 4b・4c 層のまじり土。

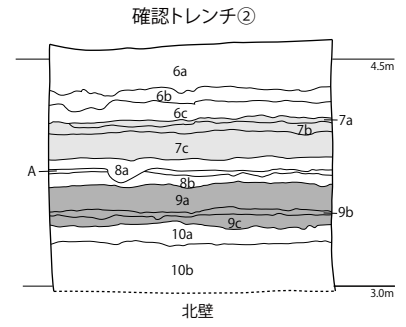
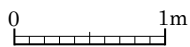
Fig.15 東壁(S=1/80)



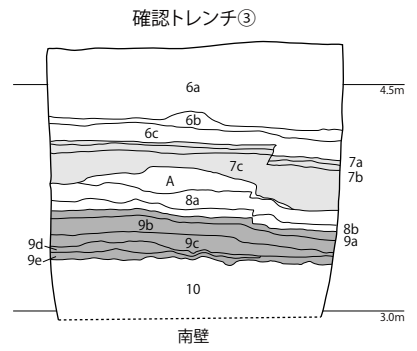
確認トレンチの位置 (S=1/500)



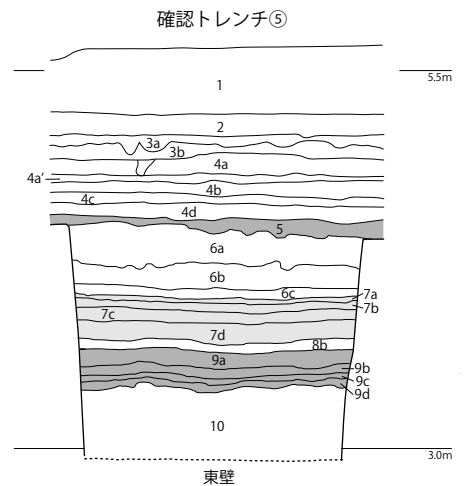
9c ~ 9e : 確認トレンチ①の 9c に対応  
9f : 確認トレンチ①の 9d・9e に対応



A : 黒褐色 10YR3/1 シルト。粘質。  
9a : 確認トレンチ①の 9a ~ 9c に対応  
9b : 確認トレンチ①の 9d に対応  
9c : 確認トレンチ①の 9e に対応

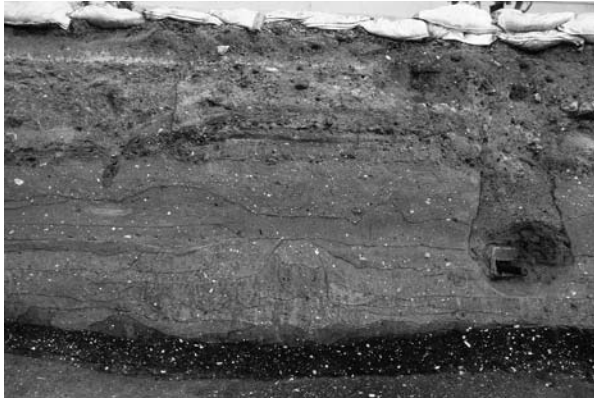


A : にぶい黄褐色 10YR5/3 粗砂。  
※ 7層以下 9a層まで逆断層。



7d : 黒褐色 10YR3/2 シルト。やや暗い。粘質。  
9a : 確認トレンチ①の 9a・9b に対応。  
9c : 確認トレンチ①の 9d に対応。  
9d : 確認トレンチ①の 9e に対応。

Fig.16 確認トレンチ (S=1/50)



北壁・大畦3 (AZ3) 付近



北壁・SK40付近



北壁・SK42付近



北壁・SK37付近



西壁



西壁 3層水田段落ち (左:水田⑩・右:水田⑨)



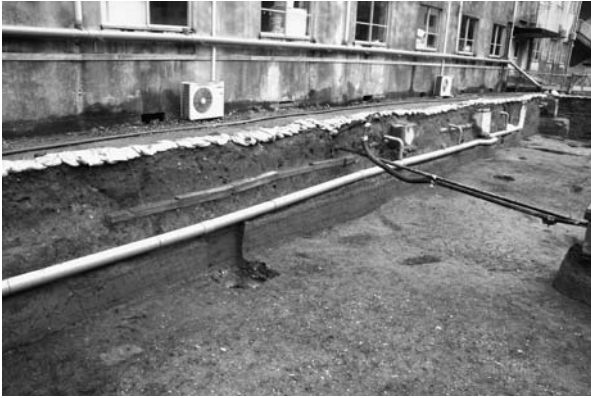
西壁 SK48付近



西壁・北壁隅 壁面で確認された大畦4 (AZ7)

PL.9 北壁・西壁





南壁



南壁・小畦1(AZ4)付近



南壁・大畦2(AZ2)付近



南壁・大畦1(AZ1)付近



東壁・SK32・SK31付近



東壁・SK68付近



東壁・SK70付近



東壁・小畦7(AZ262)付近

PL.10 南壁・東壁





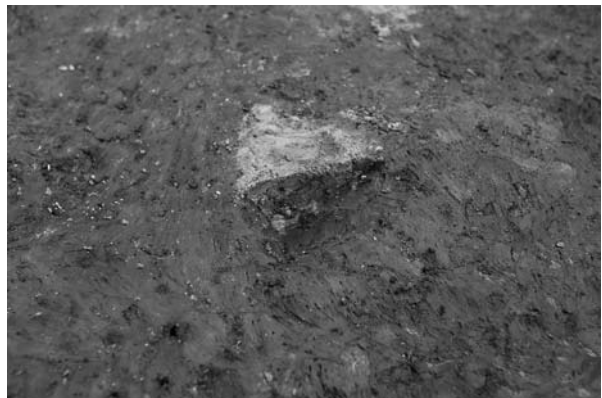
確認トレンチ①北壁



確認トレンチ②[南より]



確認トレンチ③9a層上面検出落ち込み



確認トレンチ③9a層上面検出落ち込み半裁



確認トレンチ③北壁 (断層)



確認トレンチ⑤東壁



確認トレンチ④南壁

PL.11 深掘り確認トレンチ

どを伴うため、古墳時代のものと判断している。この層までは全掘した。

6層上面より弥生時代中期後半古段階～古墳時代の遺構が検出された。

6層から10層までは無遺物層で6層以下の調査は遺物の出土が見込めなかったため、調査地点に5箇所の確認トレンチを設定し10層まで確認した。調査区南東の確認トレンチ⑤では8層の形成が未発達であり、泥炭層を含む9層は各トレンチで微妙に様相が異なる。調査区の確認トレンチ②・④を結ぶライン以西は軽石礫を多量に含む10a層が発達している。10層は大学構内遺跡郡元団地の基盤層である粗砂層と考えられるが、地表下約1.7m（標高約3m）で水が湧き出し、これ以下の調査は断念した。

## 5. 遺構・遺物

ここでは、上層から下層へ、遺構・遺物の順序で記載する。遺物集計表はTab.3に、遺物観察表はTab.5に記した。

### 1層（攪乱層・排土・地区層位不明）の遺物（Fig.18・19, PL.12・13）

1層は、鹿児島高等農林学校（明治42年）以降現在に至る土層で、礫・鉄・コンクリート片などが出土する。重機で掘削したために時間をかけて確認してはいない。表土剥ぎや排土中より確認した遺物を紹介する。

14は、弥生時代中期後半（新）の山ノ口Ⅱ式甕である。15は須恵器で器種は不明、16は中世白磁で13世紀後半～14世紀前半のものである。17～19は苗代川産陶器で、18～19世紀ごろのものである。播鉢(17)・鉢(18・20)・土瓶(19)などが出土している。21は沖縄産陶器の花鉢と思われるものである。22は肥前系の皿、23は仏飯器である。24は関西系の陶器と考えられる。以上の出土品は、攪乱によって下層から掘りあがったものであろう。

近現代の陶磁器類が最も多いが、碗として25は2006-4地点（Ⅳ章）や2006年度立会調査などでも出土している井碗である<sup>2)</sup>。26は口縁部内外面に薄い緑色の圈線を描くものである。27は「生協」のロゴがみられる湯飲みであり、32も同様の皿とみられる。昭和40年以降のものであろう。28は外面に農学部が描かれる湯飲で、27もともに2006年度の立会調査でも出土している<sup>3)</sup>昭和24～44年の発注品とみられる。33は日本硬質陶器（株）製の皿で、大正時代後半～昭和時代初期のものであると考えられる。ほかにも火鉢(34)などが得られている。37はガラス瓶のガラス栓である。2006-4地点（Ⅳ章）に良好な資料が得られている。38は型づくりの土人形とみられる。39は用途不明の金属製リング、40・41は寛永通宝である。42～44は泥メンコで、44は「金」の文字が読み取れる。45～48は当時の建物の屋根を葺いていたと考えられる平瓦で刻印をもつものである。「筑後・大津製」(45)、「筑後・小宮製」(46)、「柳川・武藤製」(47)であり、全て福岡製である。48は連合農学研究科棟の調査で得られていたもので<sup>4)</sup>、未報告だったものを参考に掲載した。瓢箪形の枠内に「河野製造」の文字がある。

### 2層上面検出遺構（Fig.17, PL.16）

当初、攪乱層として処理しようと考え遺構名はつけていなかったが、当時の建物配置図と照らし合わせた結果、比較的深めの遺構は、鹿児島高等農林学校（後の農林専門学校：明治42～昭和27年）の本館北側に当たる第一・二教室、職員・学生便所、雨天体操場（後に柔剣道場）、廊下などの建物基礎跡と確認された。本館並びに雨天体操場の建物基礎は1mほどの深さがあり、人頭大の礫や小礫を詰め込んだもので、人力での除去には時間を要した。木造建物の基礎にしてはかなり頑丈なものである。

### 2層の遺物（Fig.20・21, PL.14・15）

古墳時代～古代・中世・近世・近代以降の遺物が得られていが、近世～近代以降の焼物が目立つ。

49は須恵器胴部片であり、時代は不明確である。50は中世白磁碗であり、12世紀中ごろ～後半に位置づけられる。51は中国青花で明末～清初の時期と考えられる。52～62は苗代川陶器であり、52～54・56が土

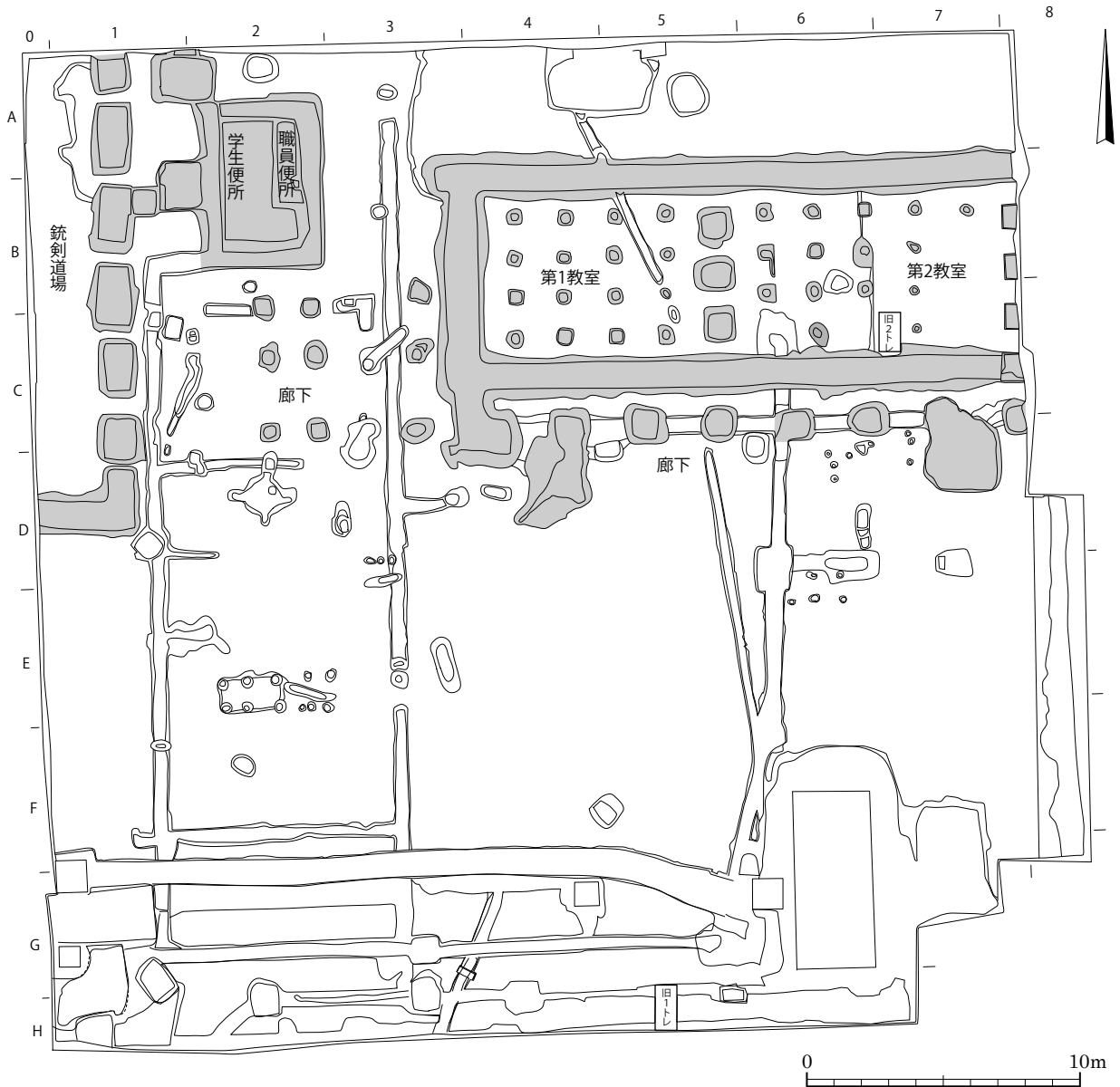


Fig.17 2層上面検出遺構(S=1/250)

瓶, 55が山茶家, 57~62が播鉢である。63~65は加治木・始良系陶器で, 63が土瓶蓋, 64が坏, 65は灯明皿と思われる。66~68は産地不明の陶器で, 66は蓋かもしれない。69・70は龍門司陶器で69が鉢, 70は仏花器である。71・72は沖縄産陶器で, 71が鬼の腕とよばれる壺, 409は花鉢の文様の一部ではないかと思われる。73・74は薩摩磁器の碗, 75・76は肥前・磁器の皿, 77は紅皿, 78は波佐見の瓶と考えられる。79~81は肥前系の碗, 83は肥前陶器内野山の製品である。83は瀬戸・美濃系と思われる磁器碗, 84も同系の製品と考えられる。85~89は近代以降の磁器碗である。

90・91は焙烙の把手部分である。92・93は陶器製の円盤状加工品である。92は苗代川播鉢を転用している。94は用途不明の土製品, 95~99は泥メンコである。100は寛永通宝, 101は清朝銭(乾隆通宝)で縁を欠く。102・103は薩軍鑄造のスナイドル銃の弾丸と思われるものである<sup>5)</sup>。底部に木栓が残存している。104は青銅製の鈴で紐部分が残っている。105は滑石製品で中央に1.4cm大の穿孔があり, 上下端に切りこみが巡っている。106は硯と考えられる。

Tab.3 2006-2 出土遺物集計

時代	時期	種別	器種	地区層位不明	表採・攪乱	2層	3層	3a層	3b層	3c層	4層	4a層	4b層	4c層	4d層	畦	SD11	SK4	SK31	SK35	SK37	SK38	SK39	SK40
縄文	晩期	土器	深鉢												1									
	晩期～弥生初頭	土器	鉢・深鉢											1										
弥生		弥生	甕			1		1			2			14	13		1							
		弥生	大甕																					
		弥生	壺								1		1	2										
		弥生																						
中期		肥後・黒髪式系	甕											8	1									
	前期	古墳（東原式）	甕																					
古墳		成川式	甕								1	2	7	10	8									
		成川式	甕か鉢									1	1	2										
		成川式	壺											1	6	4			1					
		成川式	高坏												2									
		成川式	埴												1									
		成川式	高坏か埴									1			1	1								
		成川式				9								1	1									
弥生・古墳		土器			1	25	5	2	1		71	49	230	430	328			1						
		1条突帯									1	1	3	3	7									
		2条突帯									2		2	1	3									
		3条突帯													4									
		1条刻目突帯									1	1	2		4									
古代・中世		2条刻目突帯																						
		須恵器		1	3	1					2	3	26	24	9									
		須恵器	坏								1													
		土師器	甕												1									
		土師器	椀								1					1								
		土師器	皿									1												
		土師器	坏								1		2	2										
		土師器	糸切底								1			1	1									
		土師器		1	8		1			1	9	10	45	12	10		1						1	
		瓦器				1	1				3	1	10	3										
		白磁	玉縁碗													1								
		白磁	端反碗			1																		
		白磁	碗											1	1								1	
		白磁	皿										1	1	1									
		白磁		1						1			1	6		1								
		青磁・同安窯系	櫛描文碗・皿											2	1									
		青磁・竜泉窯系	鎚蓮弁文・碗											2	1									
		青磁・竜泉窯系	線刻蓮弁文碗									1	2	8		1								
		青磁・竜泉窯系	無文碗									4	1	14	1			3						
		青磁・竜泉窯系	腰折反皿									1	2	1										
		青磁	稜花皿																					1
		青磁	無文皿										1	6				1						
		青磁		1								11	7	23	2	1		1						1
		磁器				2								3	1									
		中世陶器	播鉢													2								
	瓦質土器					1							2											
近世・近代	16c後半～17c前半	青花	碗			1							1										1	
	16c後半～17c前半	青花	皿									1	1											
	16c後半～17c前半	青花（華南系）	碗その他				1				1		5											
	15c後半～17c前半	青花				1					4	2	7											
		磁器（中国？）																	1					1
	17c	苗代川	甕											1										
	17c後半～18c	苗代川	甕										2											
	18c～19c	苗代川	甕			1					1	1	2											
		苗代川	甕	1																				
	17c	苗代川	鉢										1	4										
	17c～18c	苗代川	鉢											2										
	17c後半～18c	苗代川	鉢											2										
	18c～19c	苗代川	鉢	1	12	1							2	4	1									
	19c以降	苗代川	鉢	1																				
	17c	苗代川	播鉢										1											
	18c	苗代川	播鉢	2	2		1	1				3	3	2	1									
	18c以降	苗代川	播鉢	1																				
18c～19c	苗代川	播鉢			21		3		1			2	5	1			1							
19c	苗代川	播鉢			3																			
	苗代川	播鉢	2									1												
18c後半以降	苗代川	土瓶・蓋			4		2																	
18c後半～19c	苗代川	土瓶・蓋			1																			
	苗代川	土瓶・蓋			2																			
18c後半以降	苗代川	土瓶	6	30	1	3						2	11	1										
18c後半以降	苗代川か？	土瓶									1	2	3											

時代	時期	種別	器種	SK41	SK45	SK48	SK49	PP	P	SD28	SK29	5層	SD33(46)	SD38(46)	SD46	SK21	SK60	SK68	SK70	6層	7層	計	
縄文	晩期	土器	深鉢									3										5	
	晩期～弥生初頭	土器	鉢									2										5	
弥生		弥生	甕									13	1		6	5			1			58	
		弥生	大甕									1										1	
		弥生	壺									4										8	
		弥生										3										3	
	中期	肥後・黒髪式系	甕									1			2	1		1					14
古墳	前期	古墳(東原式)	甕									1										1	
		成川式	甕									7			7		1	1				44	
		成川式	甕か鉢																			4	
		成川式	壺									3			1			1				17	
		成川式	高坏									1										3	
		成川式	埴									1										2	
		成川式	高坏か埴									1										4	
		成川式										1				1						13	
弥生～古墳		土器			1				1			292			12		4	1		1		1455	
		1条突帯										5	1		4							25	
		2条突帯										7			1							16	
		3条突帯										1										5	
		1条刻目突帯										1										9	
		2条刻目突帯										1										1	
		須恵器										6		1			3	10	1			90	
		須恵器	坏																			1	
古代～中世		土師器	甕																			1	
		土師器	椀																			2	
		土師器	皿																			1	
		土師器	坏																			5	
		土師器	糸切り底																			3	
		土師器										1										8	
		瓦器																				110	
		白磁	玉縁碗																			19	
		白磁	端反碗																			1	
		白磁	碗																			2	
		白磁	皿									1										5	
		白磁				1																11	
		青磁・同安窯系	櫛描文碗・皿																				3
		青磁・竜泉窯系	鎚蓮弁文・碗																				3
		青磁・竜泉窯系	線刻蓮弁文碗																				12
		青磁・竜泉窯系	無文碗									1											24
		青磁・竜泉窯系	腰折外反皿																				4
		青磁	稜花皿																				1
		青磁	無文皿																				8
		青磁										1											48
		磁器																					6
		中世陶器	播鉢																				2
		瓦質土器																					3
		16c後半～17c前半	青花	碗																			4
	16c後半～17c前半	青花	皿																			2	
	16c後半～17c前半	青花(華南系)	碗その他																			7	
	15c後半～17c前半	青花																				14	
		磁器(中国?)																				2	
近世～近代	17c	苗代川	甕																			1	
	17c後半～18c	苗代川	甕																			2	
	18c～19c	苗代川	甕																			5	
		苗代川	甕																			1	
	17c	苗代川	鉢																			5	
	17c～18c	苗代川	鉢																			2	
	17c後半～18c	苗代川	鉢																			2	
	18c～19c	苗代川	鉢																			21	
	19c以降	苗代川	鉢																			1	
	17c	苗代川	播鉢																			1	
	18c	苗代川	播鉢								1											16	
	18c以降	苗代川	播鉢																			1	
	18c～19c	苗代川	播鉢																			34	
	19c	苗代川	播鉢																			3	
		苗代川	播鉢																			3	
	18c後半以降	苗代川	土瓶・蓋																			6	
	18c後半～19c	苗代川	土瓶・蓋																			1	
		苗代川	土瓶・蓋																			2	
18c後半以降	苗代川	土瓶																			54		
18c後半以降	苗代川か?	土瓶																			6		

時代	時期	種別	器種	地区層位不明 表採・攪乱		2層	3層	3a層	3b層	3c層	4層	4a層	4b層	4c層	4d層	畦	SD11	SK4	SK31	SK35	SK37	SK38	SK39	SK40
	18c後半以降	薩摩焼	土瓶			2																		
	18c後半以降	苗代川	山茶家			1						1	1											
	19c以降	苗代川	山茶家		1																			
	17c～18c	苗代川										5	7		1									
	18c～19c	苗代川				35		3			3	8	21											
	19c	苗代川				1			1			1	2											
		苗代川			4	6					2													
	17c後半～18c	加治木・始良系	碗								1													
	18c前半	加治木・始良系?	碗										1											
	18c	元立院	碗										2											
	18c後半～近代	龍門司	碗					1																
		加治木・始良系?	碗		1																			
	18c以降	加治木・始良系	灯明皿?			1																		
	18c～19c	加治木・始良系	皿		1							2												
	19c以降	加治木・始良系?	蓋			1																		
	18c～19c	加治木・始良系	香炉										1			1								
	19c以降	龍門司	鉢			2					1	1												
		龍門司?	仏花器			1																		
		加治木・始良系	坏			1																		
		加治木・始良系	土瓶					1																
		加治木・始良系?	急須		1																			
	19c以降	龍門司			3	5						2												
	17c後半～18c前半	加治木・始良系									1													
	18c	加治木・始良系				1							2	1										
	18c～19c	加治木・始良系				5		1			1	3	3					1						
		加治木・始良系?				8																		
		堅野・冷水窯系	茶入																					
	18c後半	白薩摩	土瓶			1																		
		白薩摩	碗									1												
		白薩摩	蓋			1						1												
		白薩摩				1						3												
		白薩摩か?											1											
	18c前半	肥前陶器	碗			1																		
		肥前陶器	碗			1																		
		肥前陶器	三彩皿				1					2												
		肥前陶器?	天目碗											1										
	17c～18c前半	肥前陶器										1												
	18c前半	肥前陶器											1											
		肥前陶器				1																		
	17c後半～18c前半	肥前陶器 内野山					1						1	1										
		肥前陶器 内野山				2								2										
		関西系?				1						2	2											
	19c	京焼											1											
	18c後半～19c後半	琉球	鬼の腕			2		1																
		琉球	鉢		1																			
		琉球	花鉢			1																		
		琉球?				3		1					1											
	19c		紅皿			2																		
		焼き締め陶器	播鉢													1								
		焼きしめ陶器				1							1											
		華南三彩?	鳥型水注?																					
		土製品	焙烙			4					1	2	3											
		土製品	土人形		2	3							1											
		土製品	泥面子		3	6																		
		土製品				1																		
		土鍾									1		2	1										
		円盤状加工品(陶器転用)				2					1		1											
		古銭(寛永通宝)			2	1						3												
		古銭(清朝銭)				1							1											
		陶器	碗									1												
		陶器	蓋			1																		
		陶器	土瓶										1											
		陶器	急須		1																			
		陶器	蠟燭立										1											
		陶器		1	12	114	4	10	13		30	54	134	11	2	2	3						1	
	18c末～19c	薩摩磁器	碗			2																		
	19c	薩摩磁器	碗			1						1												
	19c	薩摩磁器?	碗		1	1																		
	19c	薩摩磁器	皿						1															
	19c	薩摩磁器?	輪花皿			1						1												
	19c	薩摩磁器			1	5																		
	19c中～幕末	薩摩磁器				1																		

時代	時期	種別	器種	SK	SK	SK	SK	PP	YT	SD	SK	5層	SD	SD	SD	SK	SK	SK	SK	6層	7層	計
				41	45	48	49		28	29	(46)	(46)	46	21	60	68	70					
	18c後半以降	薩摩焼	土瓶																			2
	18c後半以降	苗代川	山茶家																			3
	19c以降	苗代川	山茶家																			1
	17c ~ 18c	苗代川																				13
	18c ~ 19c	苗代川																				70
	19c	苗代川																				5
		苗代川																				12
	17c後半~18c	加治木・始良系	碗																			1
	18c前半	加治木・始良系?	碗																			1
	18c	元立院	碗																			2
	18c後半~近代	龍門司	碗																			1
		加治木・始良系?	碗																			1
	18c以降	加治木・始良系	灯明皿?																			1
	18c ~ 19c	加治木・始良系	皿																			3
	19c以降	加治木・始良系?	蓋																			1
	18c ~ 19c	加治木・始良系	香炉																			2
	19c以降	龍門司	鉢																			4
		龍門司?	仏花器																			1
		加治木・始良系	坏																			1
		加治木・始良系	土瓶																			1
		加治木・始良系?	急須																			1
	19c以降	龍門司																				10
	17c後半~18c前半	加治木・始良系																				1
	18c	加治木・始良系																				4
	18c ~ 19c	加治木・始良系																				14
		加治木・始良系?																				8
		堅野・冷水窯系	茶入	1																		1
	18c後半	白薩摩	土瓶																			1
		白薩摩	碗																			1
		白薩摩	蓋																			2
		白薩摩																				4
		白薩摩か?																				1
	18c前半	肥前陶器	碗																			1
		肥前陶器	碗																			1
		肥前陶器	三彩皿																			3
		肥前陶器?	天目碗																			1
	17c ~ 18c前半	肥前陶器																				1
	18c前半	肥前陶器																				1
		肥前陶器																				1
	17c後半~18c前半	肥前陶器 内野山																				3
		肥前陶器 内野山																				4
		関西系?																				5
	19c	京焼																				1
	18c後半~19c後半	琉球	鬼の腕																			3
		琉球	鉢																			1
		琉球	花鉢																			1
		琉球?																				5
	19c		紅皿																			2
		焼き締め陶器	搦鉢																			1
		焼きしめ陶器																				2
		華南三彩?	鳥型水注?							1												1
		土製品	焙烙																			10
		土製品	土人形								1											7
		土製品	泥面子																			9
		土製品																				1
		土鍾																				4
		円盤状加工品 (陶器転用)																				4
		古銭 (寛永通宝)																				6
		古銭 (清朝銭)																				2
		陶器	碗																			1
		陶器	蓋																			1
		陶器	土瓶																			1
		陶器	急須																			1
		陶器	蠟燭立																			1
		陶器										1			1							393
	18c末~19c	薩摩磁器	碗																			2
	19c	薩摩磁器	碗																			2
	19c	薩摩磁器?	碗																			2
	19c	薩摩磁器	皿																			1
	19c	薩摩磁器?	輪花皿																			2
	19c	薩摩磁器																				6
	19c中~幕末	薩摩磁器																				1

時代	時期	種別	器種	地区層位不明	表採・攪乱		2層	3層	3a層	3b層	3c層	4層	4a層	4b層	4c層	4d層	畦	SD11	SK4	SK31	SK35	SK37	SK38	SK39	SK40		
					2層	3層																					
近世 近代	18c	肥前	小杯			1																					
		肥前	碗									1	1														
	19c	肥前	皿				1							1													
		肥前	蓋													1											
		肥前系	碗		1	5		1				3	2	12	1												
		肥前系	皿		1	1		1	1			2		5	2				2								
		肥前系	合子												1												
		肥前系	蓋		1																						
		肥前系?	仏飯具		1																						
	18c以降	肥前													1												
		肥前				13	2	1			1	1	4	9					1								
		肥前系				33		2				6	9	24	5	2											
	18c	肥前系?											2	2													
		波佐見				1		3																			
		関西系磁器			2	1							1	2	1												
	19c以降	瀬戸美濃?			2																						
	18c末~19c	清朝磁器・徳化窯系	碗											1													
		清朝磁器												2													
	近現代		清朝磁器?											4	1	1											
			クロム青磁	井碗		1																					
		「高等農林」食器	皿		2																						
		「農学部」	碗		1																						
		生協	碗					1																			
		生協	皿		1																						
		日本硬質陶器 (株)	皿		1	1	1																				
			碗		9	9																					
			皿		1										1												
			蓋				1																				
			火鉢		1																						
		急須		2																							
時期・系統不明		磁器		21	37							1		1													
		磁器	碗	2	7	1						1	2	6													
		磁器	皿									1	1	3													
		磁器	小杯	1																							
その他		磁器		5	15			2	1	3	4	4	24														
		瓦		13	52	1	3				1	1	3														
		土管		2																							
		レンガ			1																						
	石製品・石	打製石斧															1										
		石鏃																									
		剥片石器			2		1							3	2												
		滑石製品			1																						
		火打石													1	1											
		硯			1																						
		基石		1											1												
		黒曜石		1								1	3	2	1	2								1			
		石		5	71	1				1	8	7	25	3	8			1									
		軽石					1								3												
	金属製品	鉄製品			15	1								2													
		鉄滓		1	10									1	5	1											
		青銅金具		1																							
		弾丸			2																						
		青銅鈴			1																						
青銅釣針												1															
青銅蓋														1													
煙管																											
		ガラス玉											1														
		ガラス		2	3							1								1							
		山桃の種												1													
		木炭			15		2					1															
	アスベスト		2																								
	コンクリート		1																								
計				2	144	653	24	46	23	5	200	248	780	578	411	4	17	2	1	1	5	2	1	1			



時代	時期	種別	器種	SK41	SK45	SK48	SK49	PP	YTT	SD28	SK29	5層	SD33(46)	SD38(46)	SD46	SK21	SK60	SK68	SK70	6層	7層	計	
近世 近代	18c	肥前	小杯																			1	
		肥前	碗																				2
	19c	肥前	皿																				1
		肥前	皿																				2
		肥前	蓋																				1
		肥前系	碗																				25
		肥前系	皿																				15
		肥前系	合子																				1
		肥前系	蓋																				1
		肥前系?	仏飯具																				1
	18c以降	肥前																					1
		肥前										1										1	35
		肥前系																					81
		肥前系?																					4
	18c	波佐見																					4
		関西系磁器																					7
	19c以降	瀬戸美濃?																					2
	18c末~19c	清朝磁器・徳化窯系	碗																				1
		清朝磁器																					2
		清朝磁器?																					6
近現代		クロム青磁	井碗																			1	
		「高等農林」食器	皿																			2	
		「農学部」	碗																			1	
		生協	碗																			1	
		生協	皿																			1	
		日本硬質陶器(株)	皿																			3	
			碗																			18	
			皿																			2	
			蓋																			1	
			火鉢																			1	
			急須																			2	
	時期・系統不明																						60
		磁器	碗																			19	
		磁器	皿																			5	
		磁器	小杯																			1	
その他		磁器		1								1										56	
		瓦																				74	
		土管																				2	
		レンガ																				1	
	石製品・石	打製石斧																				1	
		石鏃										1										1	
		剥片石器										2				1						11	
		滑石製品																				1	
		火打石																				2	
		硯																				1	
		碁石																				2	
		黒曜石										1			1							13	
		石								1		9			1							141	
		軽石										1										5	
	金属製品	鉄製品																				18	
		鉄滓																				18	
		青銅金具																				1	
		彈丸																				2	
		青銅鈴																				1	
		青銅釣針																				1	
		青銅蓋																				1	
		煙管																				1	
		ガラス玉																				1	
		ガラス																				7	
		山桃の種																				1	
		木炭																				18	
		アスベスト																				2	
		コンクリート																				1	
	計				2	2	1	1	1	1	3	2	383	2	1	36	8	8	14	2	2	1	3619

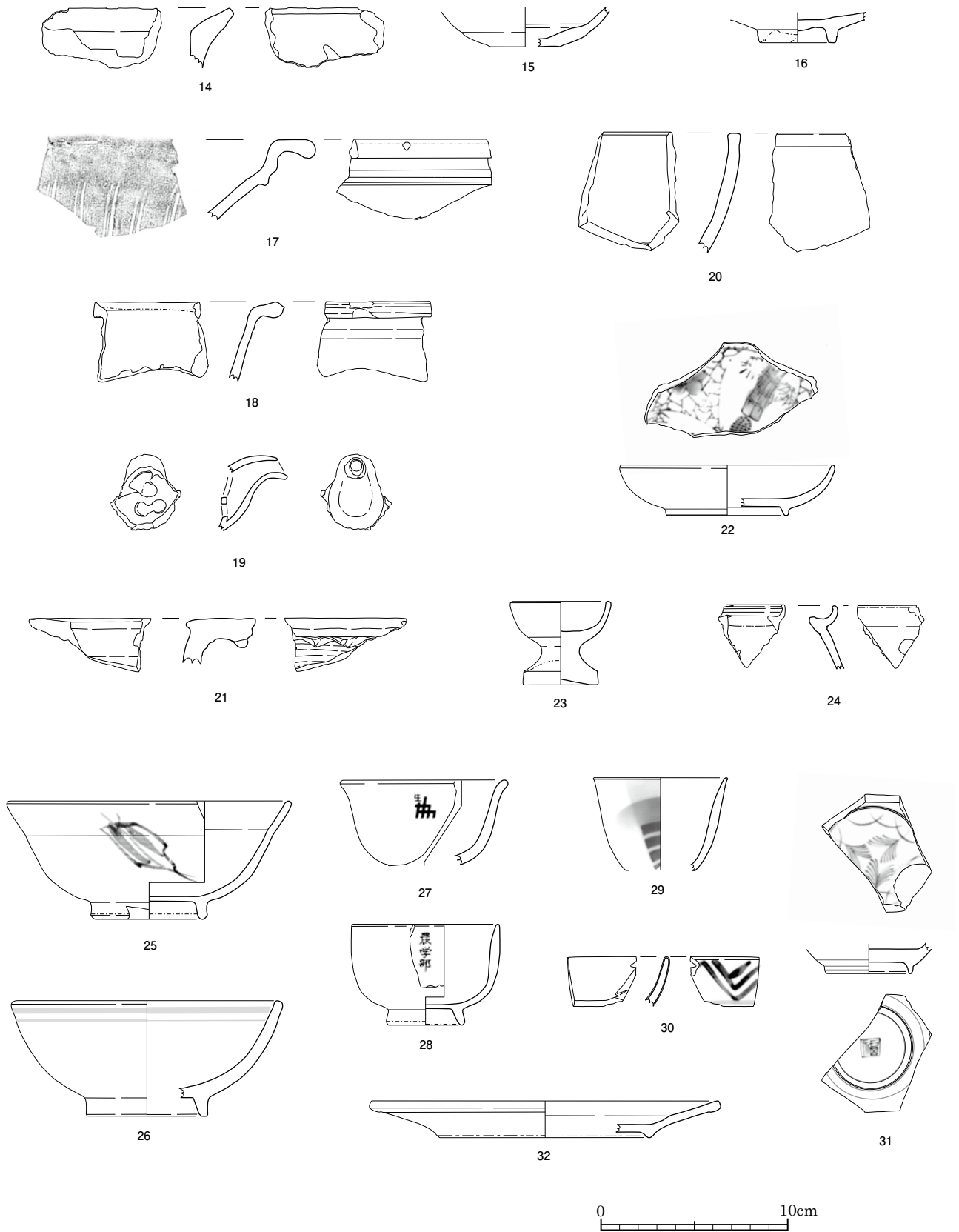
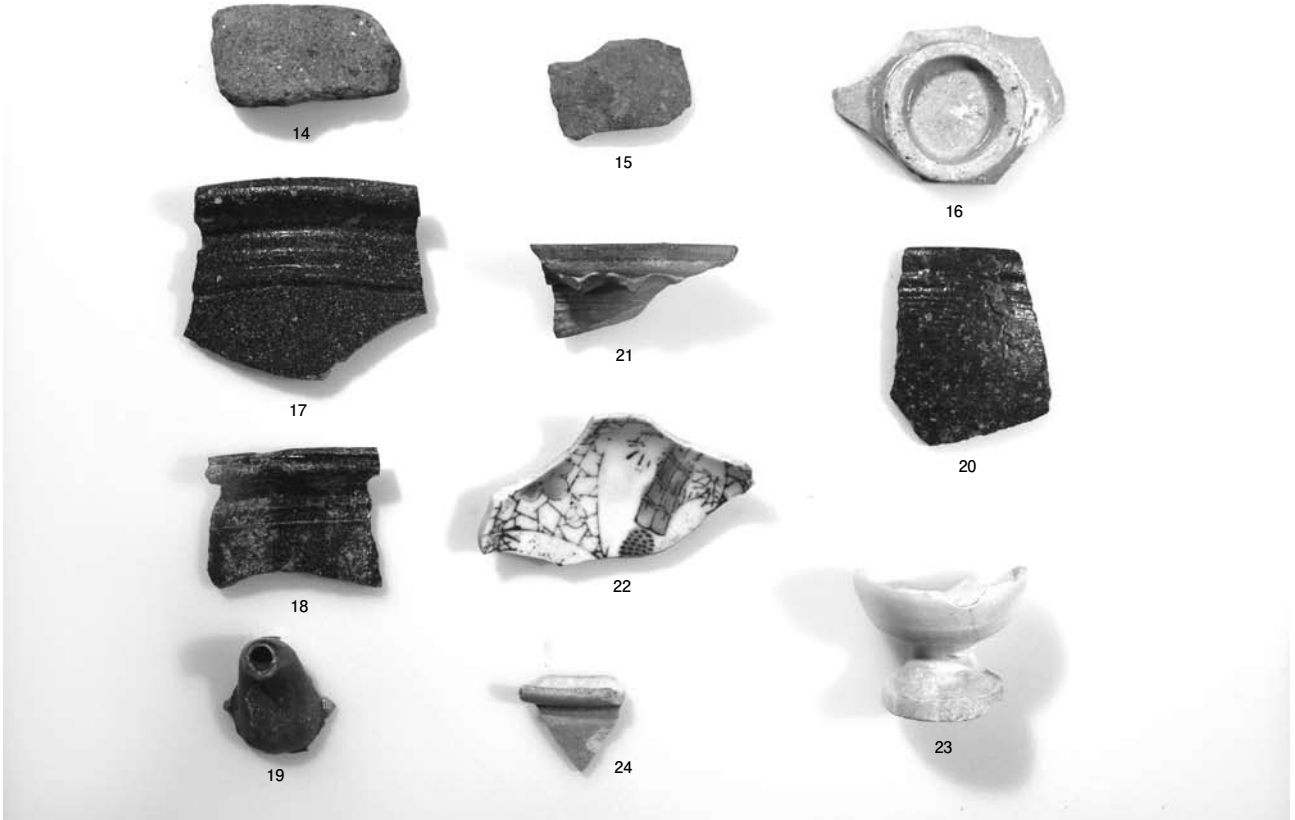


Fig.18 攪乱層・排土・地区層位不明遺物(1) (S=1/3)



PL.12 攪乱・排土・地区層位不明遺物(1)

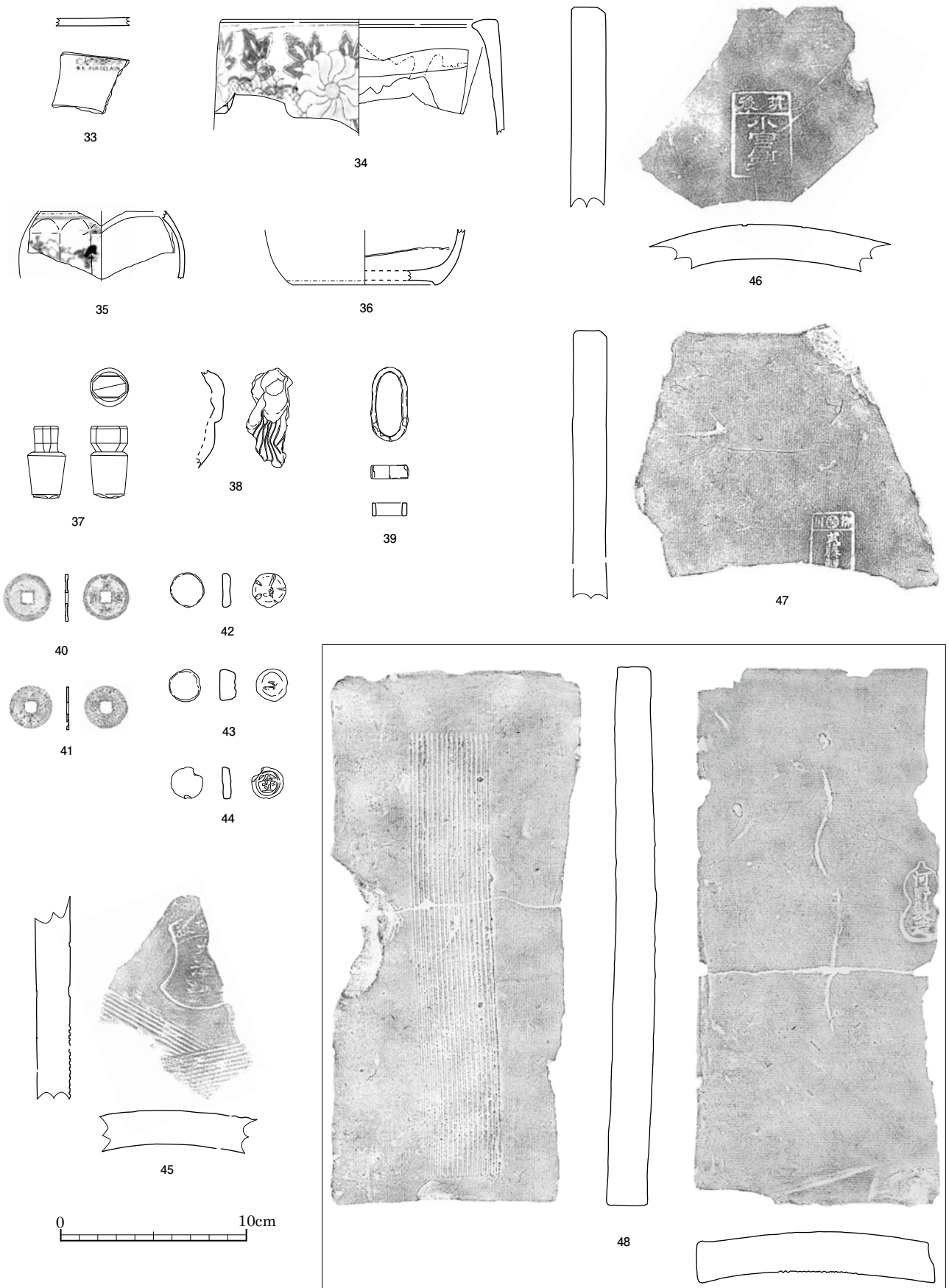
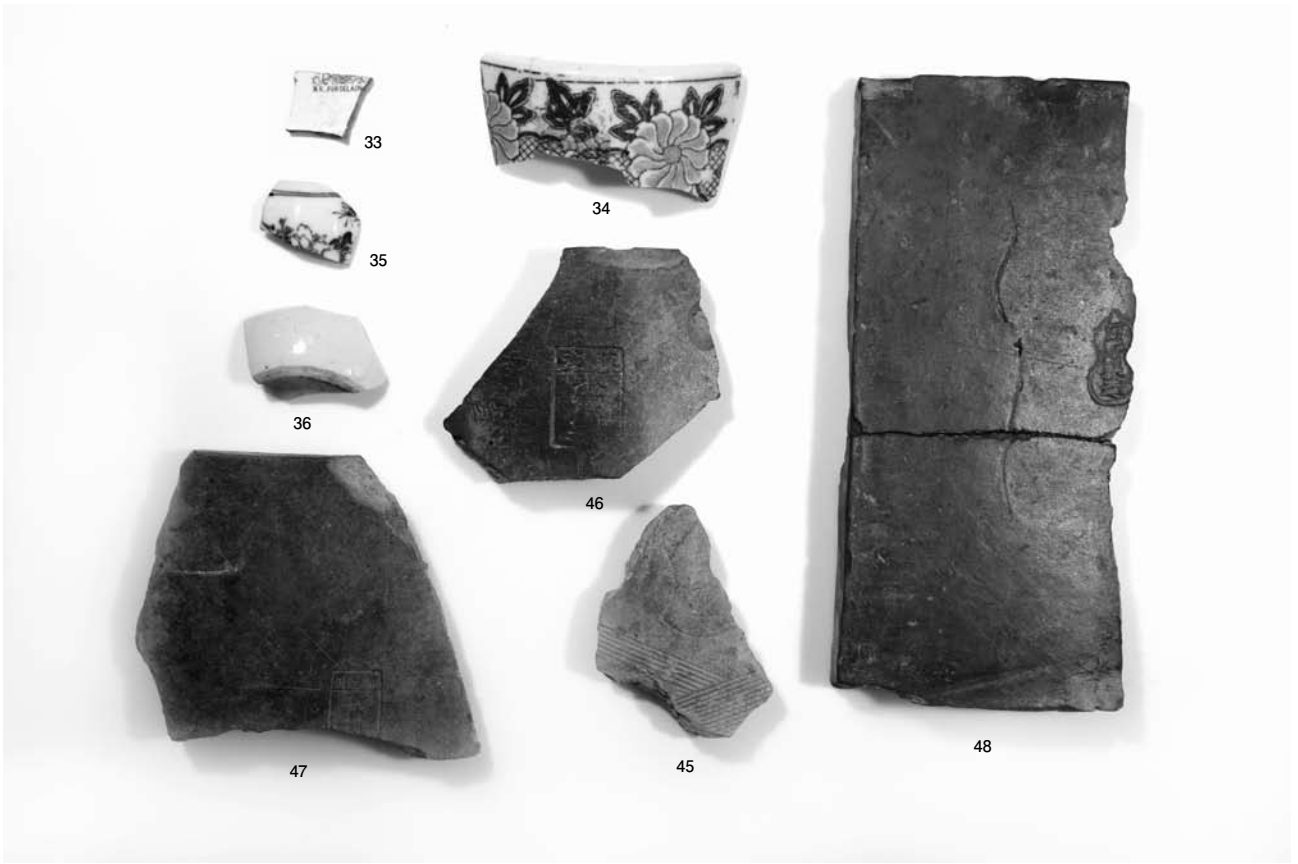


Fig.19 攪乱・排土・地区層位不明遺物(2) (S=1/3)



PL.13 攪乱・排土・地区層位不明遺物(2)

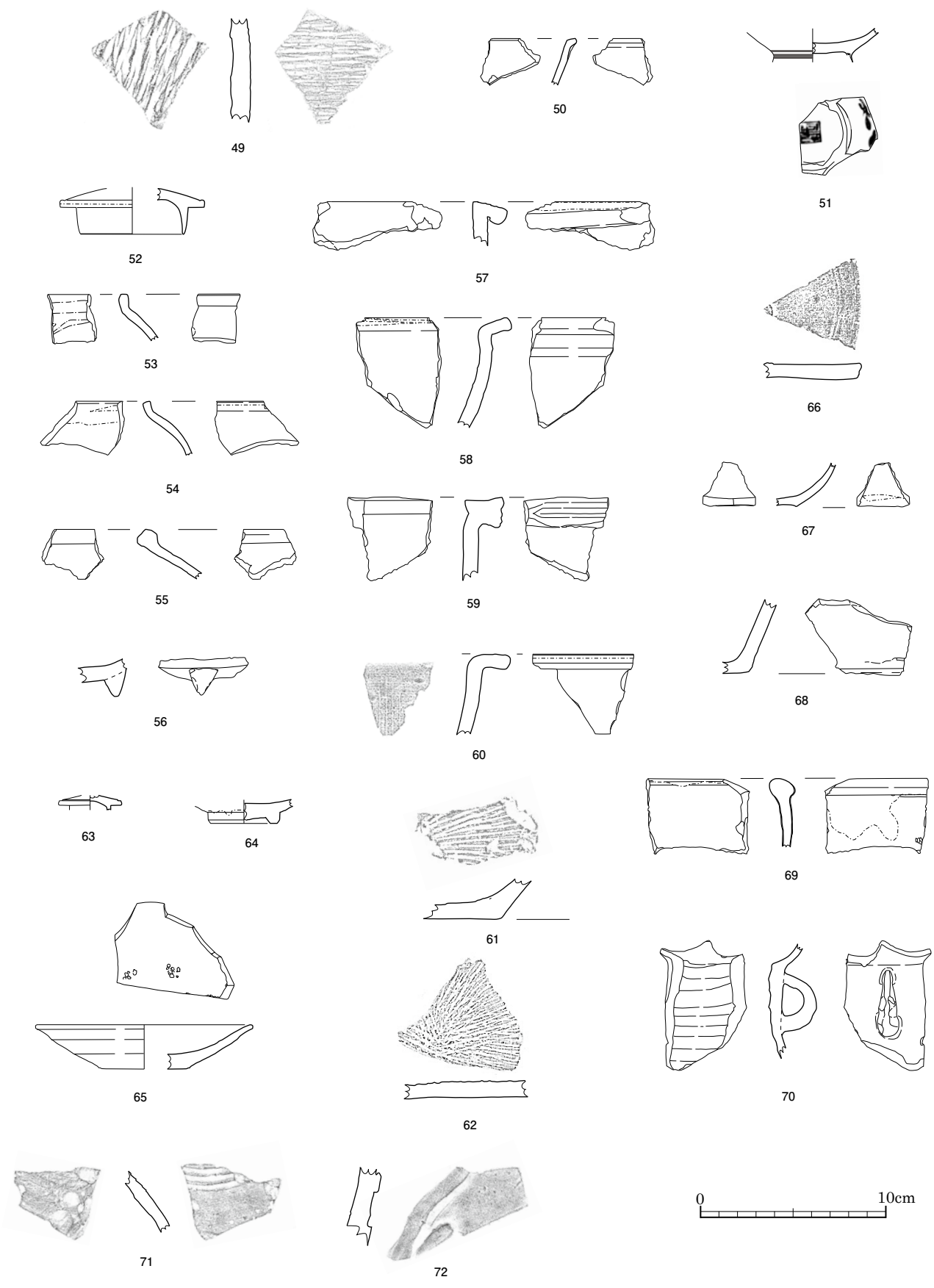
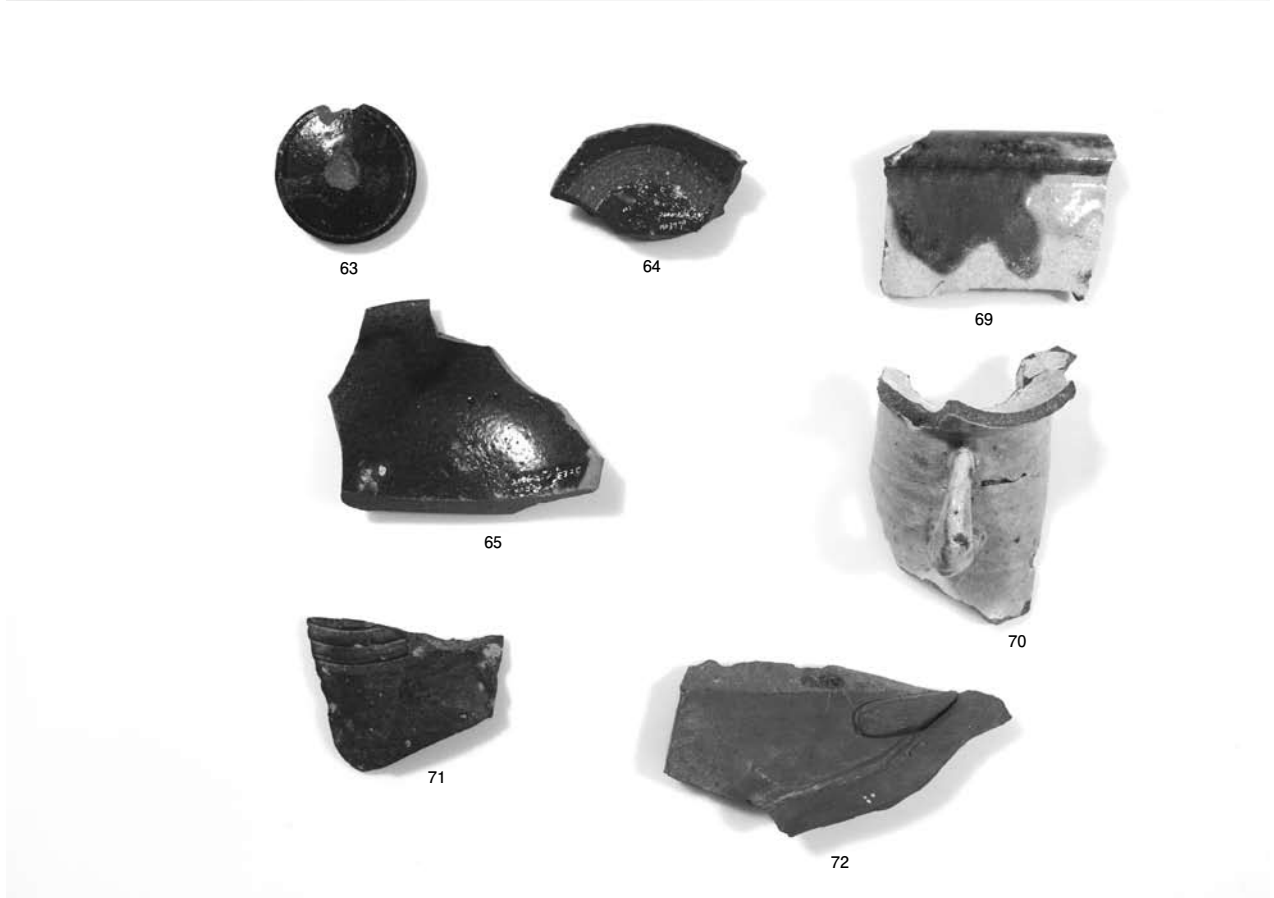


Fig.20 2層出土遺物(1)(S=1/3)

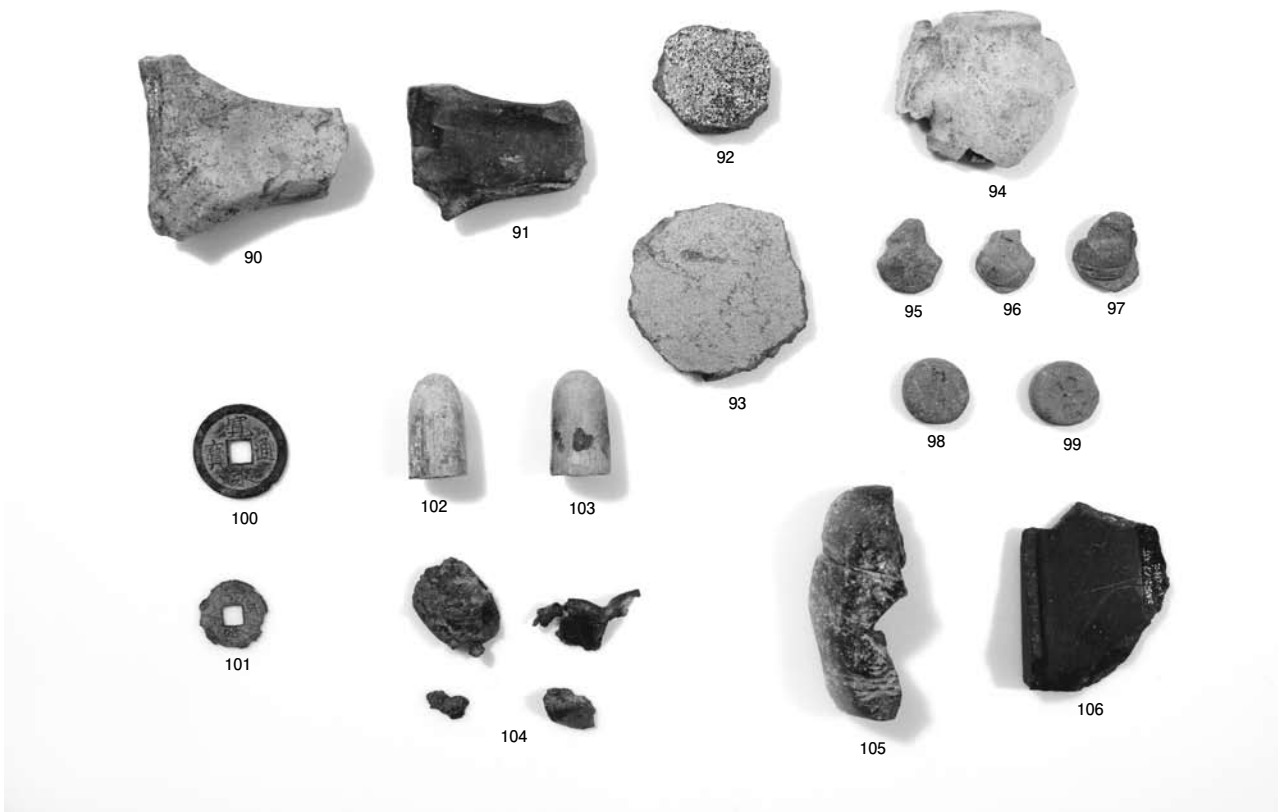
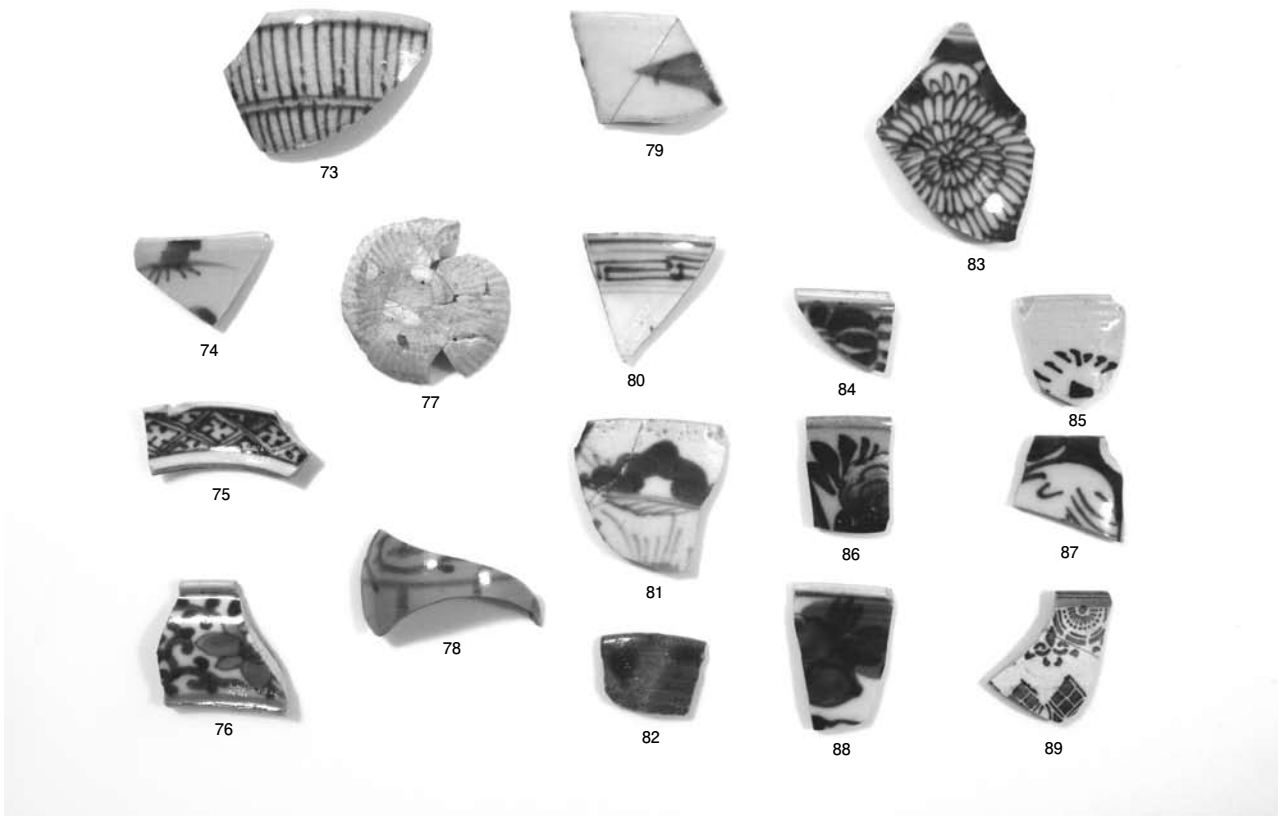


PL.14 2層出土遺物(1)





Fig.21 2層出土遺物(2) (S=1/3)



PL.15 2層出土遺物(2)

### 3b層上面検出遺構 (Fig.22, PL.16・17)

3b層上面を中心に、溝跡 (SD1~4・42)、土坑 (SK1・2) が検出された。

溝跡 (SD1~4) は軽石や細砂を多く含むもので、何らかの流路かと考えていたが、小トレンチを入れて断面確認をしたところ、溝ではなく、4層で検出される大畦に沿って位置し、3a・3b層の隙間に入り込み (PL.17 SD4断面, Fig.25 §9参照)、上層の3a層に切られる関係にあった。これは、軽石の多量にまじる土砂が水田を覆い尽くしたのち、水田を再生しようと軽石土を除去した結果、畦付近に僅かに残された部分であると判断される。土坑SK2についても河川堆積物である粗細砂と軽石礫で構成され、4層で検出された大畦に隣接していることから、同様の性格のものと考えた。SD42については埋土にパミスの含有も少なく、畦に隣接していないことから、性格をつかむことはできなかった。

SK1は性格不明の土坑である。播鉢状の掘りこみであった。これらの遺構からは遺物が得られていない。

### 3層出土遺物 (Fig.23, PL.18)

3層から得られた遺物は、2層、4層に比してさほど多くない。多量の遺物が埋没するほどの時間をこの水田跡は有していなかったのかもしれない。

107は弥生時代中期前半 (古) の入来 I 式甕で、口唇部に浅い刻目を施す。108は加治木・始良系陶器である。109は龍門司碗、110は苗代川土瓶、111は苗代川播鉢、112は外面に白化粧土、鉄絵を施す陶器である。113・114は産地不明の陶器、588は肥前系磁器碗、116は波佐見焼である。117は薩摩磁器皿である。118・119は近代以降の磁器であろう。120は頁岩製の石器であるが用途は不明である。

### 4a層上面検出遺構 (Fig.24~26, PL.19~24)

4a~4c層上面で検出された水田遺構にかかわるものをここで挙げる。

水田跡に伴う遺構として、大畦1~3 (AZ1~3)・大畦4 (AZ7)、小畦1 (AZ4)・小畦2 (AZ5)・小畦3 (AZ6)・小畦4 (AZ8)、小畦 (仮)、段落ち1~5、稲株痕、人足跡、牛足痕、鋤・犁跡 (SD11ほか) などがある。これらは全て1~3層の削平によって同時期であるのか不明なものが多かったが、セクションベルト (§) を多数残して、土層を確認しながら掘り下げた。

水田跡は最終的に大畦と小畦に囲まれた13面を確認することができたが、なかには掘削時、面的に把握することができず、掘り下げ後の壁面観察で確認できた大畦4 (AZ7) や小畦 (仮) もある。水田1面の規模は様々であるが、水田⑥などは約1反を測る。水田跡の切りあいとして明らかに時間差をもつものは、段落ち2・小畦4 (AZ8) が境界となる水田⑥・⑦、段落ち1が境界となる水田③a・③bで、水田⑦や水田③bが下層に位置する。つまり小畦の区画は作り変えが行なわれているが、大畦は大きく移動しない。このことから判断すれば、おそらく大畦が基準となつての耕地作り変えだったと考えられる。

水田跡の標高は、調査区北西部から南と東に向かって低くなっており、西側の山手、唐湊方向から東側の錦江湾方向へ緩やかな段差をもっている。緩やかに傾斜する自然地形を利用した用水を意識したものであろう。

水田区画内には、稲株痕のほか、畦に沿った人の足跡や牛蹄の痕跡もあり、犁跡とともに「牛耕」の存在を裏づけている。人の足跡は水田⑨で目立ち、小畦3 (AZ6) や大畦3 (AZ3) に沿って歩いているように見える。牛足痕が明瞭だったのは水田①と③aであった。水田④・⑦では部分的に偏った検出状況を示している。これらの水田跡下には、鋤・鋤跡が確認され、4c層上面や4c層の未発達な部分では、5・6層を抉るように検出された。

小畦7 (AZ262) 埋土中で、備前陶器播鉢 (293)、加治木・始良系碗 (294) が、鋤・犁跡 (SD11) で弥生土器 (297)、青磁碗・皿 (298~301)、肥前系磁器皿 (302) が得られている (Fig.43, PL.42)

#### 4c層上面検出遺構1 (Fig.27~29, PL.6・25~28)

ここでは、4c層上面を主体とし、4c層の存在しない場所では5層上面で検出された水田構築直前の遺構と判断されるものを挙げる。

大畦1~3 (AZ1~3) の下には幅10~20cm、深さ10cm程度の溝跡が検出された。大畦1 (AZ1) 下では分断しながら検出されたので多数の遺構名が付されているが、元々は同じ機能を持つ溝であろう。SD7~9・16 (18)・21・30が相当する。大畦2 (AZ2) 下位ではSD13・17・29が、大畦3 (AZ3) 下位ではSD28 がそれぞれ検出されている。これらは小畦には存在せず、大畦の下位のみで検出された。SD28 埋土は4c層と4d層のまじり土になっていることがあり、これらが掘削されたことを示している。また、底面に薄く細粗砂のラミナを形成している箇所もあり、恒常的でないにしろ、水が流れている可能性が示唆された。SD28からは中国緑釉陶器 (295)・苗代川播鉢 (296) が出土している (Fig.43, PL.42)

ほかにも建物跡の柱穴が調査区北西部に集中して検出された (Fig.28・29)。柱穴内から遺物がほとんど出土しないため、時期は検出層位と埋土で判断した。

建物跡①~③は、大畦3 (AZ3) 付近に構築されており、①などは大畦をまたぐように構築される。また、①は桁・梁の方向が、②・③とは90°異なる。

建物跡①は2×1間の建物跡で、面積は3㎡である。PP10~12・15では柱痕が検出され、これから判断される柱の太さは10cm程度である。検出面から判断して30~40cm程度の深度で打ち込まれる。

建物跡②も2×1間の建物跡で、面積3.5㎡である。PP5・7・9・13で柱痕が確認されており、柱痕径は10cm以下である。PP9や13は斜位に打ち込まれる。30~40cm程度打ち込まれる。

建物跡③は後世の攪乱のために、部分的に破壊されているが、2×1間と考えられ、推定される面積は2.1㎡である。PP3で確認できた柱痕は径6cm程度である。PP1・3・4は斜位に、40cm程度打ち込まれる。

建物跡④・⑤は、大畦4 (AZ7) 付近に構築されており、同じ場所に建て直されたものであると判断できる。PP30・36も建物跡の一部であると考えられるが、主体部が調査区外にあり、判然としない。

建物跡④は2×1間の建物跡で、面積は3.7㎡である。検出建物跡では最も規模が大きい。柱痕から判断される建材径は5~10cmである。PP23は斜位に打ち込まれる。30~50cmの深度がある。

建物跡⑤は唯一の2×2間の建物跡で、面積は3.3㎡を測る。柱痕は径5~6cm程度であり、深さは10~50cmとばらつきがある。

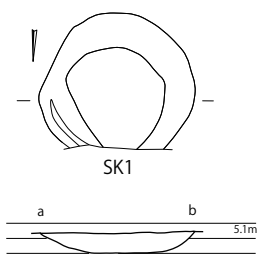
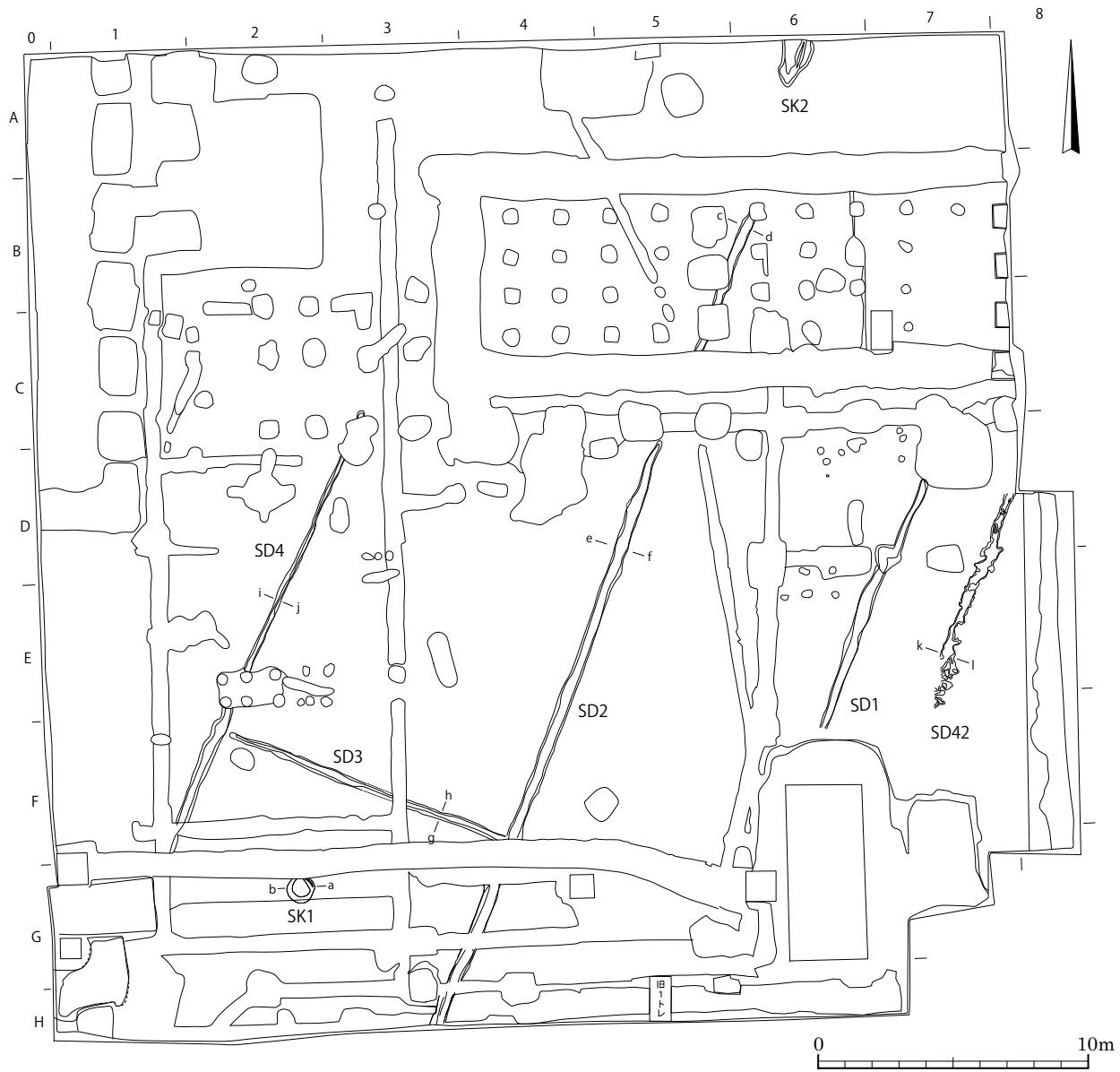
これらの建物跡の性格については、面積が極めて狭いこと、柱痕から判断される柱径が10cm以下の細い建材であること、斜めに打ち込まれるものもあり、深さにもばらつきがあることから、極めて簡易的に構築された建物跡であるといえる。さらに、大畦下位の溝跡に付随するように位置すること、建物軸が大畦の方向と一致していることなどから考えて、水田造営直前の耕地測量・区画のための櫓のようなものが建てられていたのではないかと推測する。

#### 4c層上面検出遺構2 (Fig.30~34, Tab.4, PL.29~33)

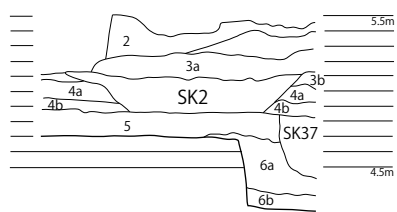
ここでは、最も上位のレベルでは4c層上面、4c層の堆積していない場所では5層上面、5層の削平されている場所では、6層上面で検出され、埋土は4層土を主体とする土坑群を紹介する。

存在の確認されたのは22基の土坑群で、深さや形態などの確認可能なものは20基ある。調査区の北東部に集中しており、上面観が楕円形 (底面にピットを有するものを含む) を主体とするが (SK4・28・29・31・33~37・41・45・46)、ほかにも円形 (SK37・38)、不整形 (SK22・49・50) などがある。深さも約30~100cmと様々で、土坑の軸にも明確に規則性がない。土坑内の埋土は、削平以前の土壌や土坑掘削位置によって左右されていたようで、4層土を主体に土坑を掘削した際の下層のシルトや粗砂がまじるので、全てが共通する埋土とも言い難い。

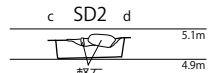
SK41は厚さ約10cm粘土を穴の周りの壁に貼りつけた土坑であり、バスタブ状を呈する。粘土層まで掘削し、粘土層はそのまま用い、砂層である壁面、底面に掘削した粘土を貼りつけている。水が抜けにくいよう工夫されたものと考えられる。また、粘土の内面は、工具によって上から下方向へ、時計回りに削られ、



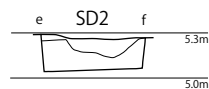
SK1埋土  
灰黄褐10YR4/2砂質シルト。0.5~1cm大のバミス(少)。締まり良い。



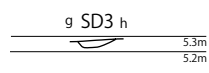
SK2埋土  
灰黄褐10YR4/2, 褐10YR4/4粗砂。0.5~10cm大のバミスまじり。



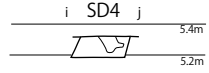
SD2埋土  
灰黄褐10YR4/2砂質シルト。締まり良い。1~25cm大のバミスまじり。



SD3埋土  
にぶい黄褐10YR4/3砂質シルト。0.5~5cm大のバミスまじり(多)。



SD4埋土  
灰黄褐10YR4/2砂質シルトに0.5~3cm大のバミスが(多)。脆い。



SD42埋土  
①褐10YR4/4砂質シルト。0.5cm大のバミスまじり。締まり良い。  
②暗褐10YR3/4砂質シルト。粘質

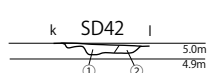


Fig.22 3b層上面検出遺構(全体:S=1/250, 各遺構:S=1/50)





表土剥ぎ状況(東より)



表土剥ぎ完了(西より)



表土剥ぎ完了(北より)



表土剥ぎ完了(南より)



3層上面検出溝SD1-4(南より)



3層上面検出溝SD1-4(南より)

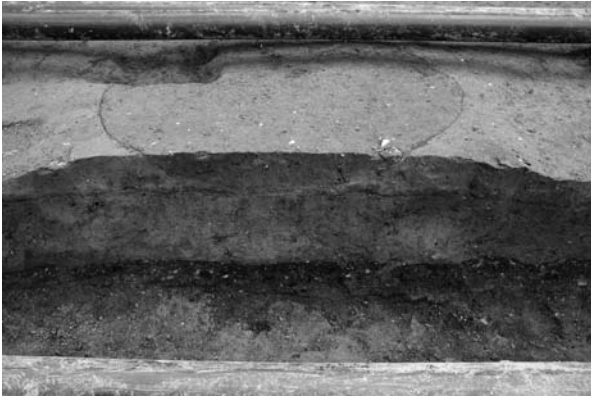


SD42検出(東より)



SD1-4完掘(南より)

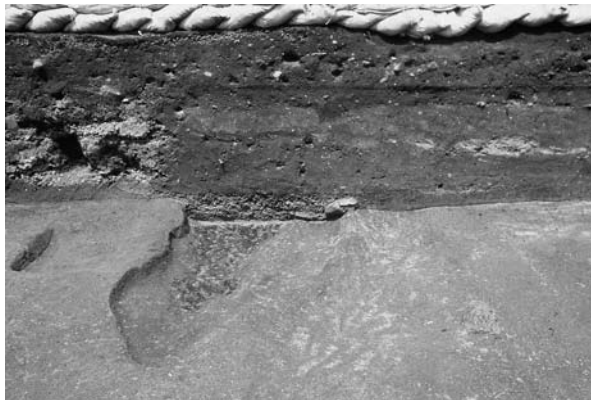
PL.16 表土剥ぎ・SD1~4・42



SK1検出[北より]



SD2完掘[北より]



SK2完掘[南より]



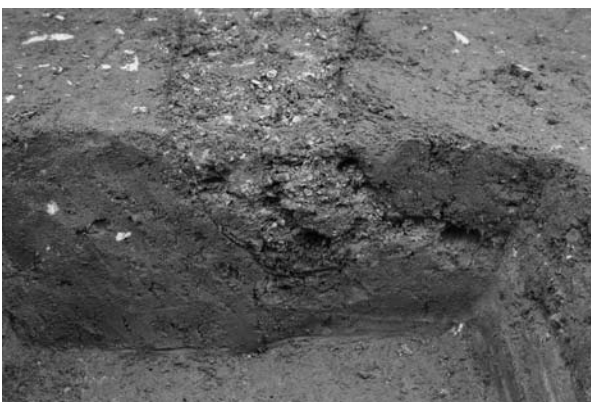
SD2断面[南より]



SD2断面[南より]



SD3断面[東より]



SD4断面[南より]



SD42断面[南より]

PL.17 SK1・SD1～4・42

形や厚みが整えられている。工具痕からは、刃幅12cm前後の手斧状の工具が想定される。土坑開口部は4b層によって水平に削平されており、埋没中に内部に壁面の粘土がブロック状に崩れ落ちている。埋土は4層土を主体とするが、6～8層土が小ブロックでまじる。底面付近から豎野系冷水窯製の茶入と思われる小破片が出土している。SK42も全形は不明だが、特徴はSK41に類似する。SK41・42は発掘当初、肥溜めの可能性を考え寄生虫卵分析（付編1参照）を行なったが、寄生虫卵の検出は極めて少なく確証は得られなかった。水溜めの可能性が高いが、天水を溜めるものにしては規模が小さい。

その他の土坑はほとんどが粘土層に達しておらず、性格は不明確なものが多い。SK38は底面に掘削工具の痕跡を残すものであり、SK36は60cm以上の深いピット状である。SK35・34は埋没した埋土を水田耕作に伴う犁跡が切っており、水田造営時には埋没していたことを示している。SK22・50は不整形でかなり浅いため、土坑ではなく落ち込みである可能性もある。

SK48は全形が確認できないものの、断面形状は底面が広がる袋状を呈している。この形状は連合農学研究科の調査で確認された土取り穴と考えられている土坑群の形状に類似している<sup>6)</sup>。また、土層断面で見ると、北側では5層以下の堆積層が落ち込んでおり、これは6・7層の粘土を採掘したためとも考えられる。

以上のことは、土坑群が全て同じ機能を有していない可能性を示唆する。土坑埋土中の遺物は、縄文時代晩期末の刻目突帯文土器～近世薩摩焼までと幅広く（Tab.4）、流れ込み様の小破片のみであることから考えると確言できないが、層位的な判断と近代以降の遺物が含まれないことから考えて、出土遺物で最も新しい近世段階の遺構ではないかと想定している。土坑埋没後に犁跡によって切られていること、機能的にも水田の機能に直接関連しているとは考え難く、近世でも水田造営以前の遺構が多いものと捉えておきたい。

#### 4層出土遺物（Fig.35～40，PL.34～39）

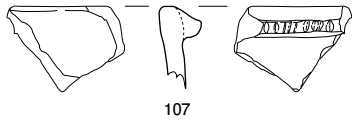
遺物は、縄文時代晩期～古墳時代の土器・須恵器・打製石斧、中世の土師器・瓦質土器・陶磁器、近世の焙烙・陶磁器、陶器転用の円盤状加工品・煙管・古銭・釣針・土錘・ガラス玉・火打石などが得られている。最も出土量の多いのは近世の陶磁器類であるが、下層の5層由来と考えられる弥生～古墳時代の土器・須恵器も一定量ある。

121・122は縄文時代晩期末～弥生時代初頭の刻目突帯文土器で、刻目突帯が口唇部よりやや下部に位置する比較的古手のタイプである。123は縄文時代晩期ごろの深鉢の底部ではないかと考える。124～127は弥生時代中期前半（新）の incoming II 式甕と考えられる。128～132は本調査区で数量的に目立つもので、断面形状からみると incoming II 式のように口縁部はさほど長くないが、山ノ口 II 式のようにくの字に立ち上がり、内面に張り出しをもつものもみられる。弥生時代中期後半（古）の山ノ口 I 式段階の資料ではないかと考える。133～135は口唇部が丸みをもつものもあるが、山ノ口 II 式段階の資料としておきたい。203は弥生時代後期ごろに相当する。137・138は弥生時代中期の甕・鉢の底部だと考えられるが、138は外面に縦位のミガキを施している。139は同時期ごろの壺の底部であろう。140は時期不明の土器口縁部である。141は古墳時代成川式の壺、142～144は同成川式の甕の中空脚、145は弥生時代終末～古墳時代初頭の中津野式壺の底部である。146は乳房状の突起のつく成川式埴の底部と考えられる。

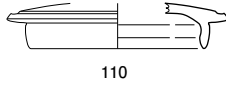
147～157は須恵器あるいはそれに類するものを挙げた。147は須恵質の製品であるが、把手のような形状をしており、器種も不明である。148は坏、149は壺と考えられる。151はこの項に含めたが、中国陶器の可能性もある。152～156は甕あるいは壺の胴部片であろう。157は古代の須恵器碗であろう。

158～1645は中世以降の土師器と考えられるものであり、158は瓦器碗、159は土師器甕、160～165は坏と考えられるが、163はかなり焼成が良好であり、近世以降のものであるかもしれない。166は瓦質土器、167は陶器播鉢である。168～171は白磁であり、168～170が碗、171・172が皿となる。172～181は青磁で、172・180・181が皿、173～179が碗である。11世紀後半～16世紀前半までのバリエーションがある。

182～185は中国青花で、182・186が碗、183・184が皿、185は小碗である。15世紀後半～16世紀中葉のものと考えられる。



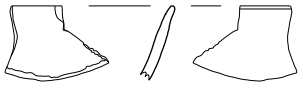
107



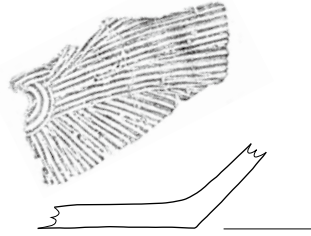
110



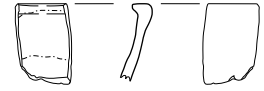
112



108



111



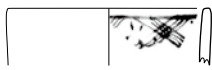
113



109



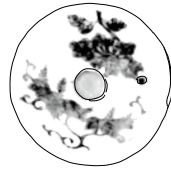
114



115



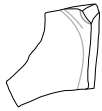
117



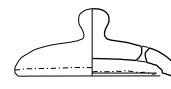
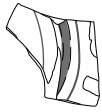
118



119



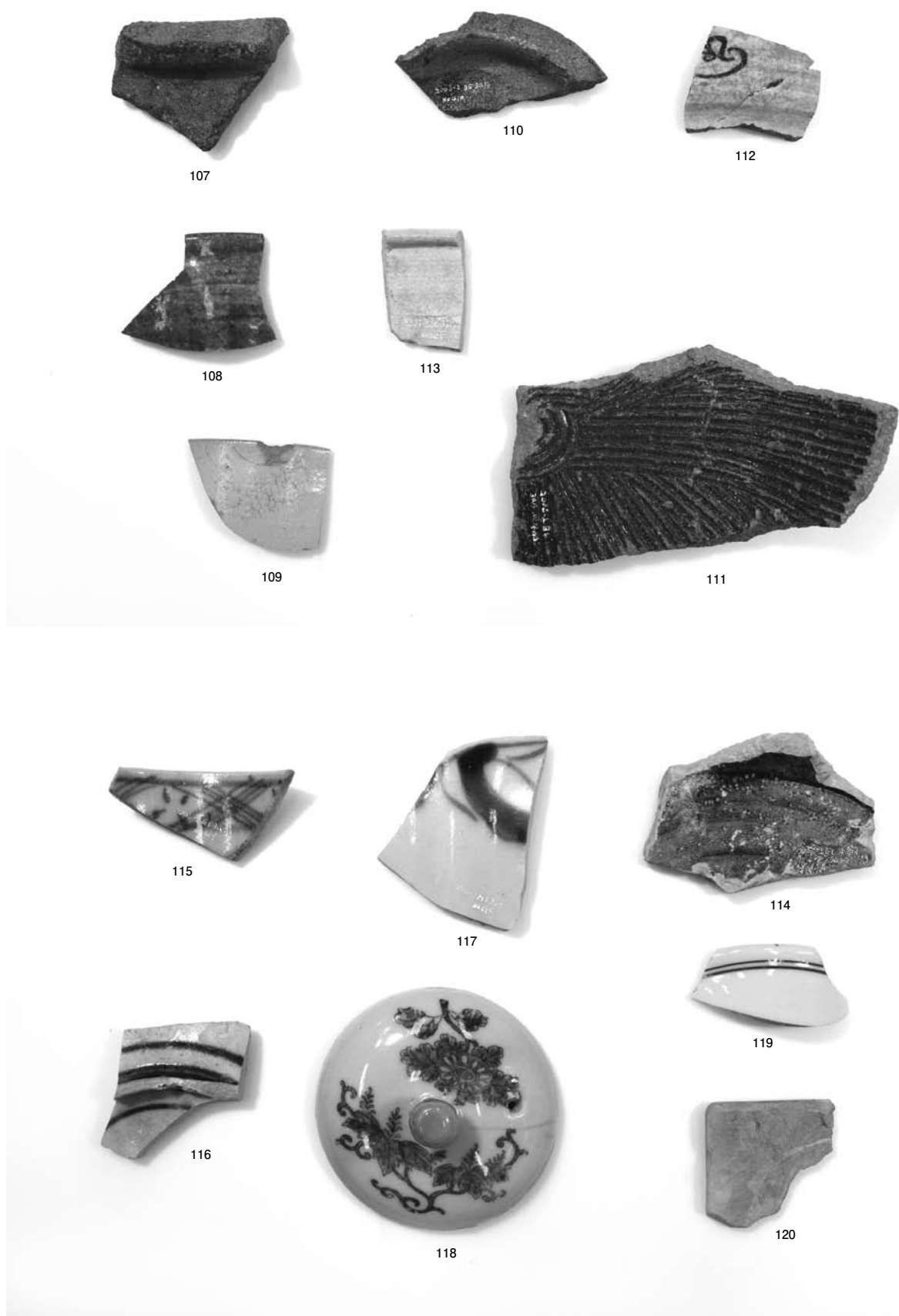
116



120



Fig.23 3層出土遺物(S=1/3)



PL.18 3層出土遺物



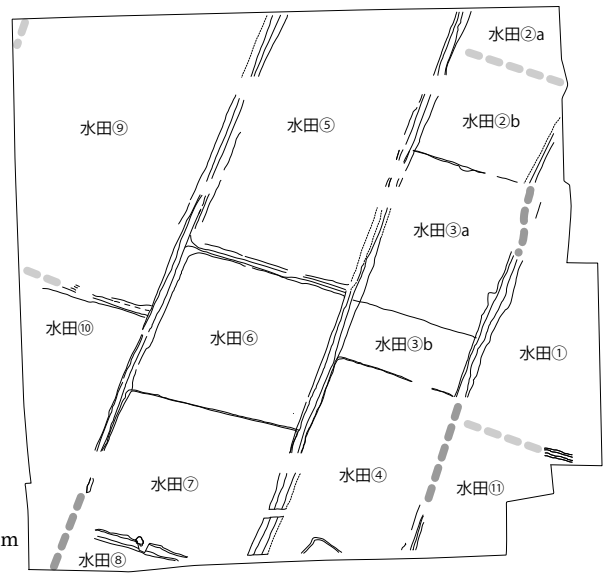
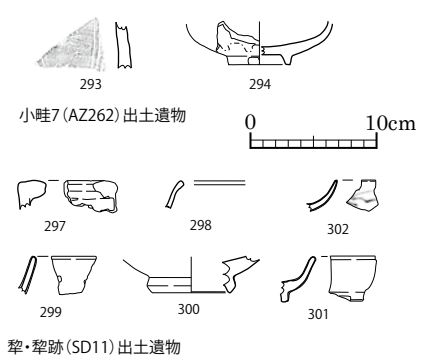
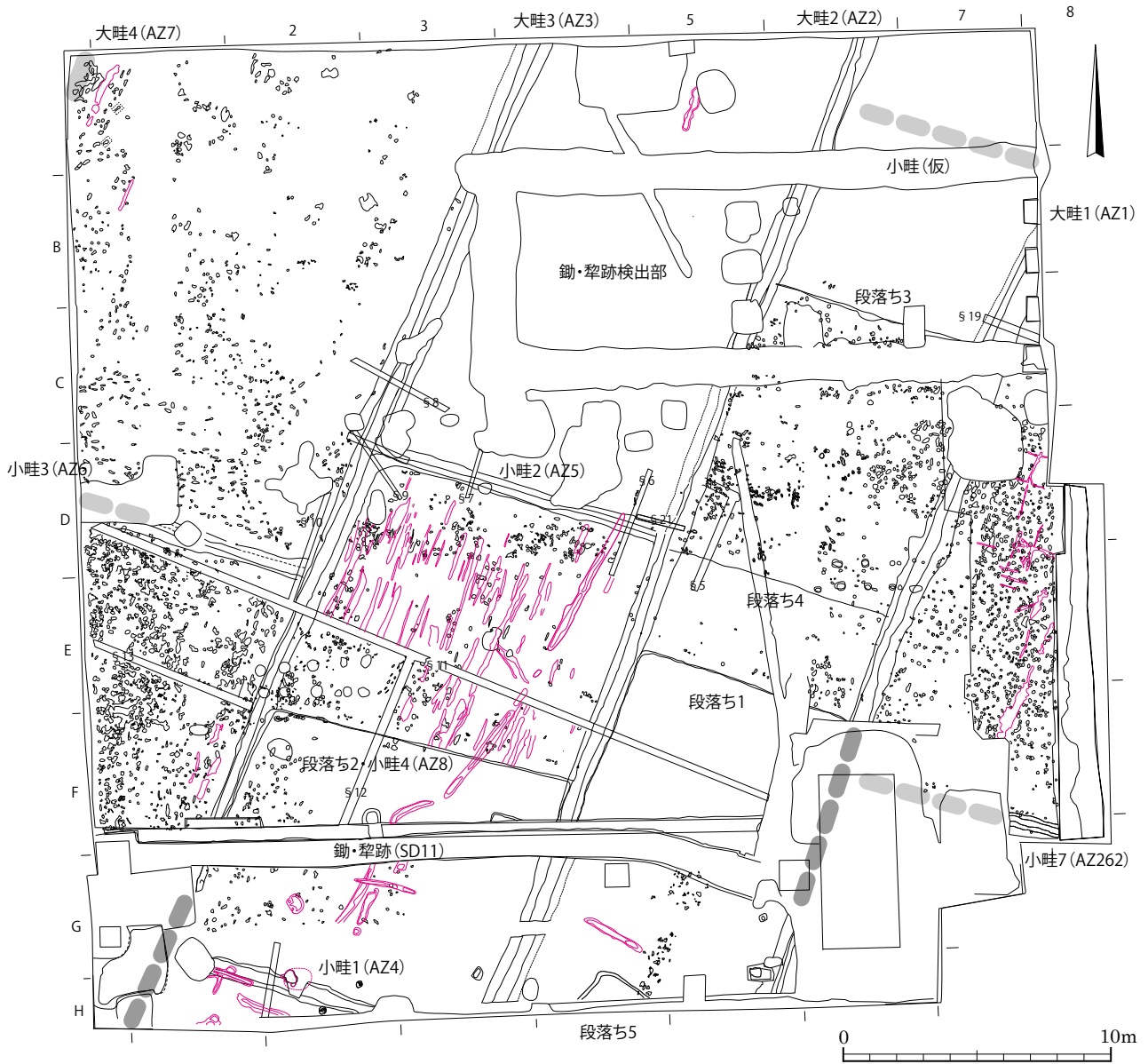
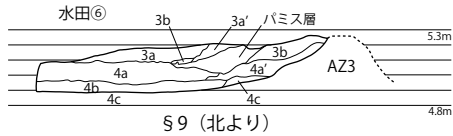
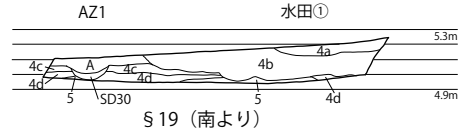


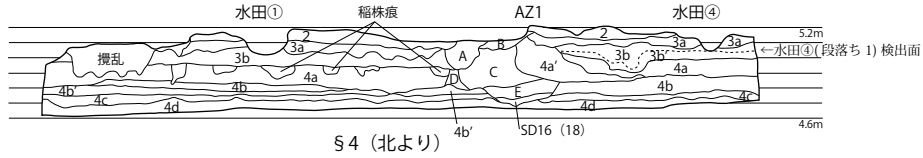
Fig.24 4層検出遺構 (S=1/250)  
 水田跡の復元 (S=1/500)  
 遺構出土遺物 (S=1/6)  
 赤色: 鋤・犁跡



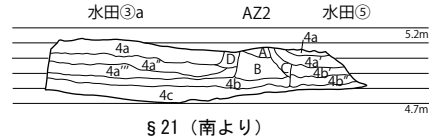
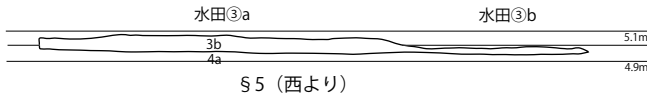
3a' にふい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。0.5～2cm 大のパミスまじり。  
4a' 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト 0.5～6cm 大のパミスまじり。締まり良い。  
パミス層 0.5～10cm 大のパミスが多量に含まれる。



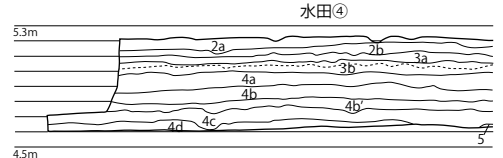
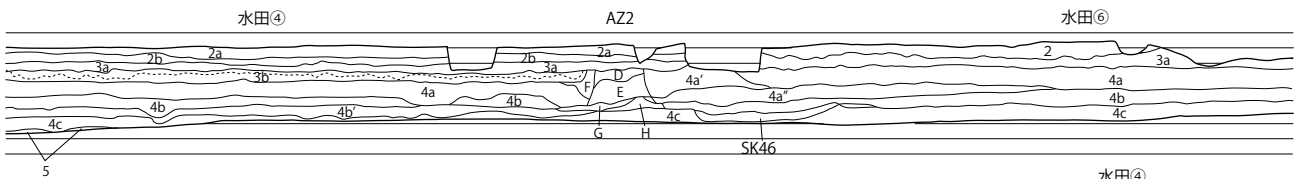
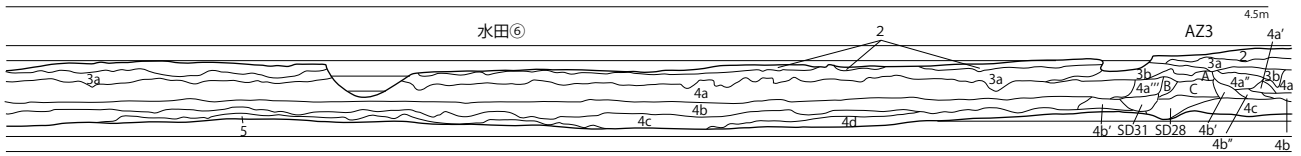
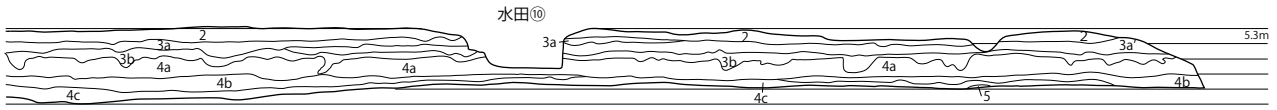
A 黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。  
SD30 A に 5 層土がまじる。



A にふい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。  
0.5～1cm 大のパミスまじり。締まり良い。  
B A よりやや淡い色調。  
C B よりややマンガンが多い。  
D 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。  
E D が青味が強い。マンガン (多)。  
3b' 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5～2cm 大のパミスまじり。締まり良い。  
4a' にふい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。  
4b' 明褐色 10YR3/3 砂質シルト。マンガンまじり。かなり締まる。  
SD16 (18) D よりやや淡い色調。  
攪乱 No.47 出土。



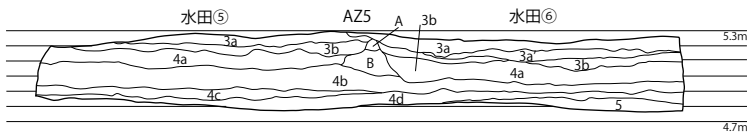
A 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。マンガン少ない。  
0.5cm 大のパミス。締まり良い。  
B A に近似。  
C 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。マンガンやや多い。  
0.5cm 大のパミス。締まり良い。  
D 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。マンガン少ない。  
4a' にふい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。締まり良い。0.5～1cm 大のパミスまじり。  
4a'' にふい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。シルトが多い。締まり良い。0.5cm 大のパミスまじり。  
4a''' にふい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト・黄褐色 10YR5/8 シルトまじり。  
4b' にふい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。締まり良い。0.5～1cm 大のパミスまじり。かなり締まる。  
4b'' 4b' よりやや暗め。



2a 基 2 層に同じ。  
2b 2a に類似するがやや暗め。  
3a' 褐色 10YR4/6 よりやや黄味強い砂質シルト。締まり良い。  
4a' 4a よりもやや黄味帯びる。  
4a'' 4a にラミナ状に粗砂がまじる。  
4a''' 4a よりもやや黄味を帯びる。  
4b' 4b よりもシルト質。  
4b'' 4b よりも暗め。  
SD28 褐色 7.5YR4/3 砂質シルト。やや粘質。締まり良い。  
SD31 灰黄褐色 10YR4/2 に細砂がまじる。  
SK46 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルトに 4c 層土がまじる。0.5cm 大のパミス (少)。締まり悪い。

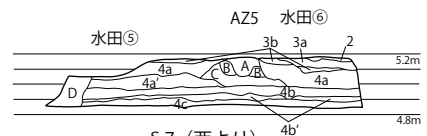
AZ3  
A B より明るい。  
B C より赤味が強い。  
C 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。締まり良い。0.5cm 大のパミスまじり。  
AZ5  
D 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5cm 大のパミスまじり。  
E 4a に類似。  
F D に類似。  
G D に類似。  
H 4b に類似するが、やや明るめ。

Fig.25 3～4層セクションベルト 1 (S=1/50)



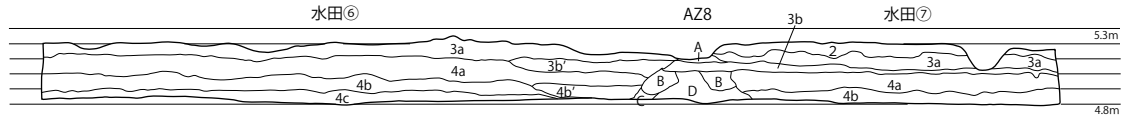
§ 6 (西より)

A にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質シルト。  
 B 3b 層に類似。  
 3a' 褐色 10YR4/4 砂質シルト。0.5~2cm 大のパミス、細砂まじり。やや脆い。



§ 7 (西より)

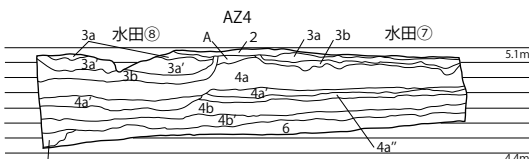
A 4a 層に近似。締まり良い。  
 B 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5~1cm 大のパミス、マンガンまじり。締まり良い。  
 C B よりもマンガンが多い。  
 D 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5~1cm 大のパミス、マンガンまじり。締まり良い。  
 4a' 4a よりやや暗め。  
 4b' 4a' 層に類似。



§ 12 (西より)

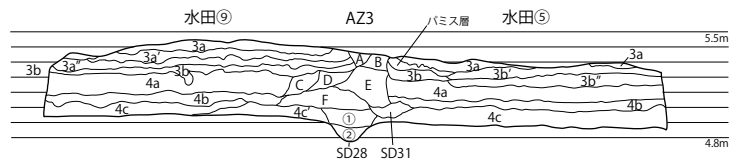
A にぶい黄褐色 10YR5/3 細砂。0.5cm 大のパミスまじり。脆い。  
 B 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。マンガン、0.5~1cm 大のパミスまじり。脆い。  
 C 4b' よりもマンガンが多い。

D 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5cm 大のパミスまじり。締まりやや悪い。  
 3b' にぶい黄褐色 10YR6/4 砂質シルト。マンガン、1cm 大のパミスまじり。締まり良い。  
 4b' やや暗い灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。



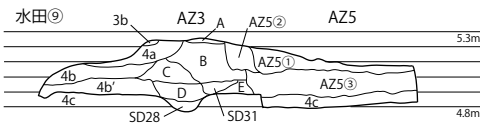
§ 1 (東より)

3a' にぶい黄褐色 10YR6/4 シルトまじり細砂。  
 4a' 褐灰色 10YR4/1 と灰黄褐色 10YR4/2 の中間色砂質シルト。0.5~1cm 大のパミスまじり。締まり良い。  
 4a'' 黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。0.5~1cm 大のパミスまじり。締まり良い。  
 4b' 黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。0.5~2cm 大のパミスまじり。



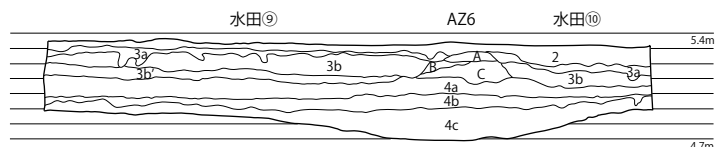
§ 8 (南より)

A にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。0.5cm 大のパミスまじり。  
 B にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質シルト。  
 C B より暗め。  
 D にぶい褐 7.5YR5/3 砂質シルト。0.5cm 大のパミス (多)。締まりかなり良い。  
 E にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。0.5~2cm 大のパミスまじり。  
 F 灰黄褐色 10YR4/2。砂質シルト (やや暗い) 締まり良い。  
 3a' 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト (シルトが多い) 締まり良い (床土) 0.5~2cm 大のパミスまじり。  
 3a'' にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。0.5~2cm 大のパミスまじり。  
 3b' にぶい黄褐色 10YR4/3 細砂質シルトに灰黄褐色 10YR4/3 シルト混じり。パミス多い。  
 3b'' にぶい黄褐色 10YR4/3 暗褐色 10YR3/3 砂質シルト。0.5~3cm 大のパミスまじり (多)。締まり良い。  
 4c' やや黄色味が強い灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。締まりかなり良い。0.5cm 大のパミスまじり。  
 パミス層 0.5~5cm 大のパミス層 (汎層か?)。  
 SD28① 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。底面に粗砂まじり。  
 SD28② 暗褐色 10YR3/4 砂質シルト。粗砂まじり。  
 SD31 灰黄褐色 10YR5/2 砂質シルト。細砂粗砂まじり。



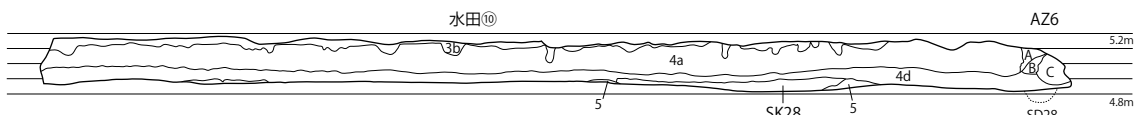
§ 20 (南より)

A 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5~1cm 大のパミスまじり。締まり良い。  
 B にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。0.5~1cm 大のパミスまじり。締まり良い。  
 C やや暗めの灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5cm 大のまじり。締まり良い。  
 D C に粗砂が多量にまじる。  
 E やや暗めの灰黄褐色 10YR4/2。砂質シルト。かなり締まる。  
 SD28 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。  
 SD31 灰黄褐色 10YR4/2 粗砂質シルト (粗砂多い) 脆い。  
 AZ5① やや明るめの灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト 0.5~1cm 大のパミスまじり。あまりマンガンが入らない。  
 AZ5② B に類似。  
 AZ5③ 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5~2cm 大のパミスまじり。締まり良い。  
 4b' 暗めのにぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト 0.5~1cm 大のパミスまじり。締まり良い。

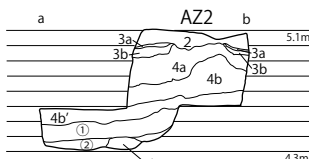


§ 10 (西より)

A にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質シルト。0.5~3cm 大のパミスまじり。締まり良い。  
 B 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。締まり良い。  
 C 2a より明るめ。  
 3b' 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト 0.5cm 大のパミスまじり。締まり良い。



§ 13 (南より)



SD13 (北より)

4b' 暗オリーブ褐色 2.5YR3/3 砂質シルト。締まり良い。  
 SD13① 灰黄褐色 10YR5/2 砂質シルト。0.5cm 大のパミスまじり。締まり悪い。  
 SD13② 灰黄褐色 10YR6/2 砂質シルト。0.5cm~10cm 大のパミスが遺構底面に集中。締まり悪い。

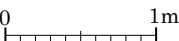


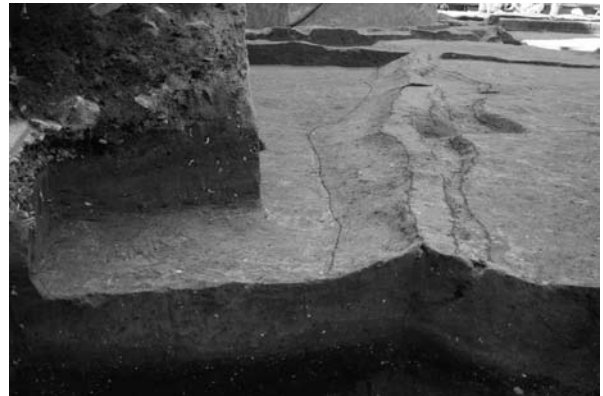
Fig.26 3~4層セクションベルト 2 (S=1/50)



3b~4層上面遺構(北より)



大畦1(AZ1)[東より]



大畦1(AZ1)(北より)

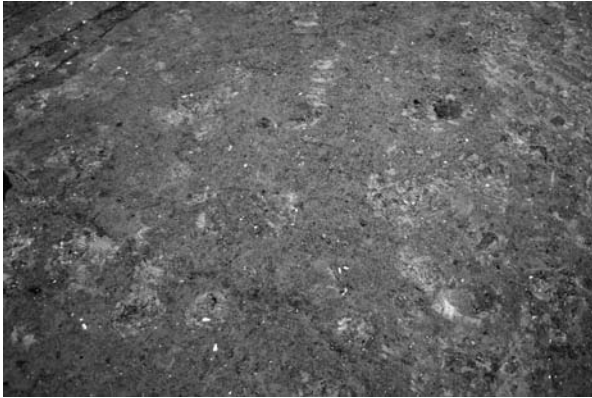


大畦2(AZ2)[北より]



大畦3(AZ3)[北より]

PL.19 水田跡全景・大畦



4層上面稲株痕検出



3区4層上面稲株痕[北より]



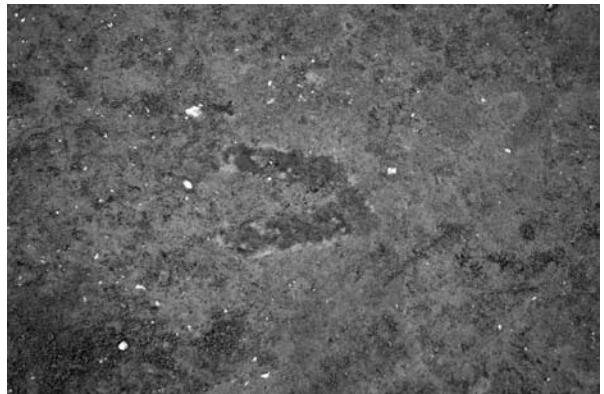
4層上面稲株痕・牛足跡検出[西より]



4層上面人足跡検出[西より]



4層上面検出水田と稲株痕・牛足跡・人足跡[南より]



牛足跡



足跡1半裁[南より]



足跡2完掘[南より]

PL.20 稲株痕・牛足跡・人足跡





水田④[北より]



水田④[東より]



3区小畦7(AZ262)[西より]



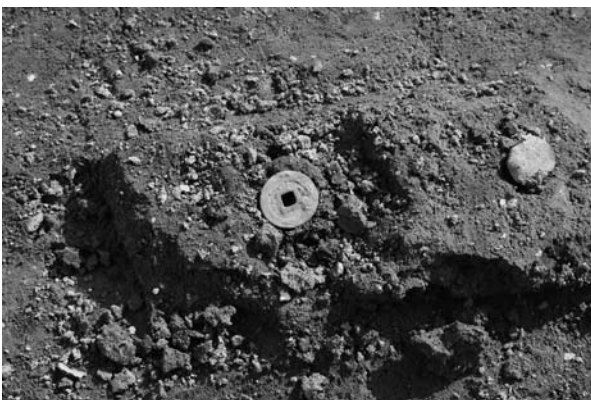
段落ち5[東より]



水田⑦段落ち2[西より]



4b層ヤママモ種子



3区4b層出土古銭



4c層出土打製石斧

PL.21 水田跡・出土遺物





セクションベルト9[北より]



セクションベルト19[南より]



セクションベルト4[北より]



セクションベルト5[西より]



セクションベルト21[南より]



セクションベルト11・AZ3付近[北より]



セクションベルト11・AZ2付近[北より]



セクションベルト6[西より]

PL.22 セクションベルト(S)



セクションベルト7[北より]



セクションベルト12[西より]



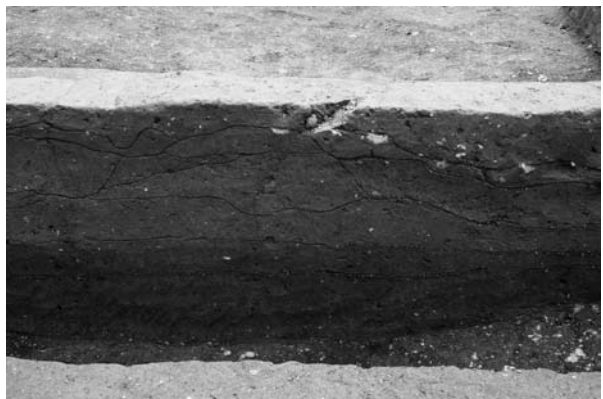
セクションベルト1[東より]



セクションベルト8[南より]



セクションベルト20・8[南より]



セクションベルト10[西より]



セクションベルト13[南より]



SD13上のベルト[北より]

PL.23 セクションベルト(S)





水田⑥下の鋤痕[南より]



水田⑤下の鋤痕[南より]



水田⑦下の鋤痕[南より]



大畦1(AZ1)下の溝跡(SD30)[南より]



大畦1(AZ1)下の溝跡(SD16・18)[南より]



大畦2(AZ2)下の溝跡(SD17)[北より]



SD13完掘[北より]



SD13底面の軽石[東より]

PL.24 鋤跡・大畦下の溝跡

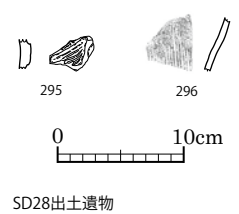
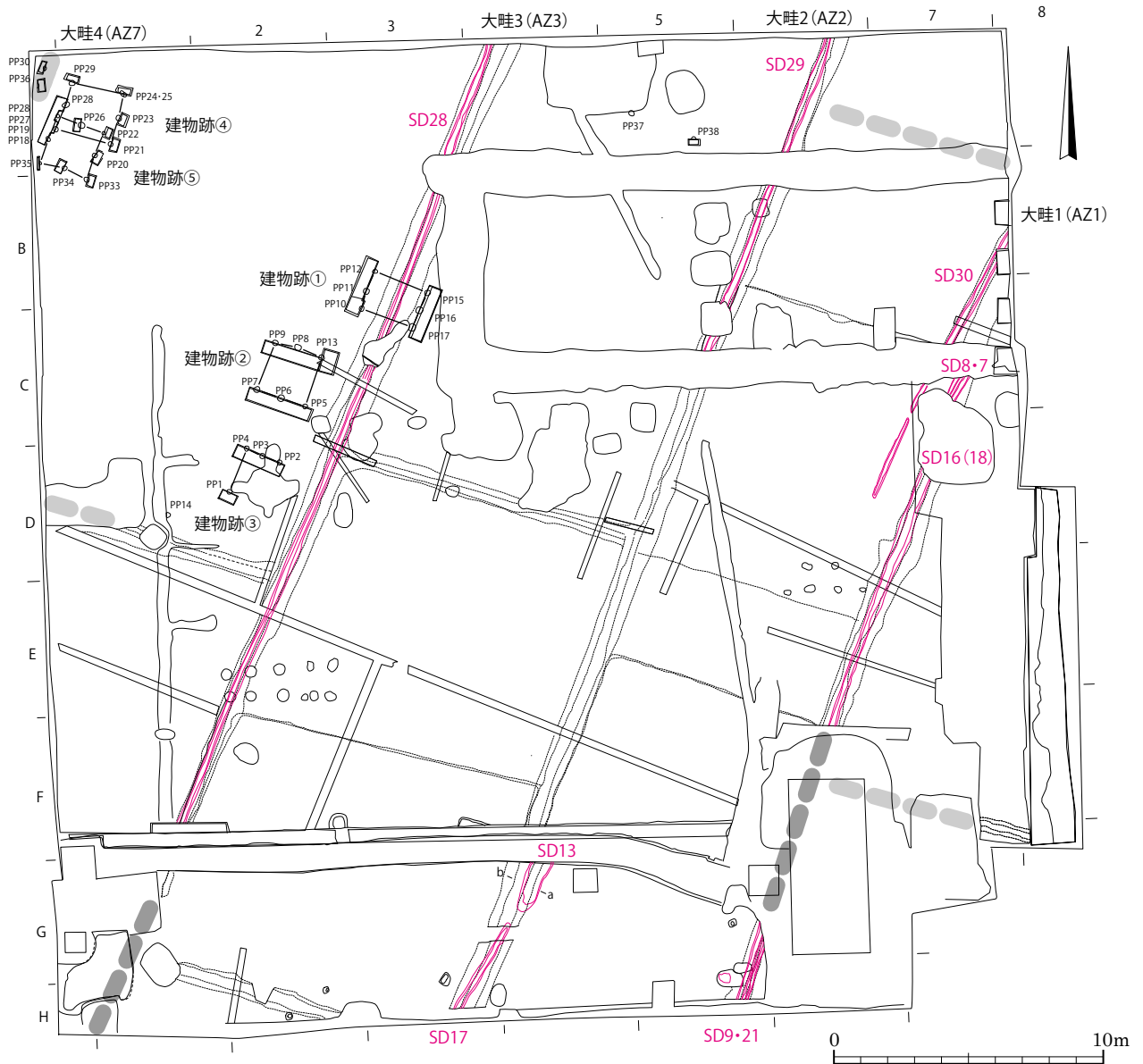
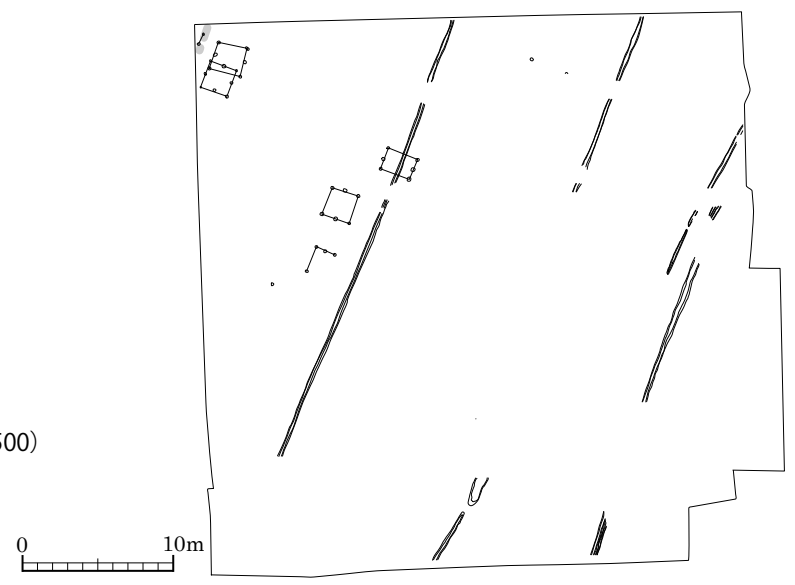


Fig.27 4c層上面検出遺構1  
大畦下の溝跡と建物跡 (S=1/250, 1/500)  
溝跡出土遺物 (S=1/6)



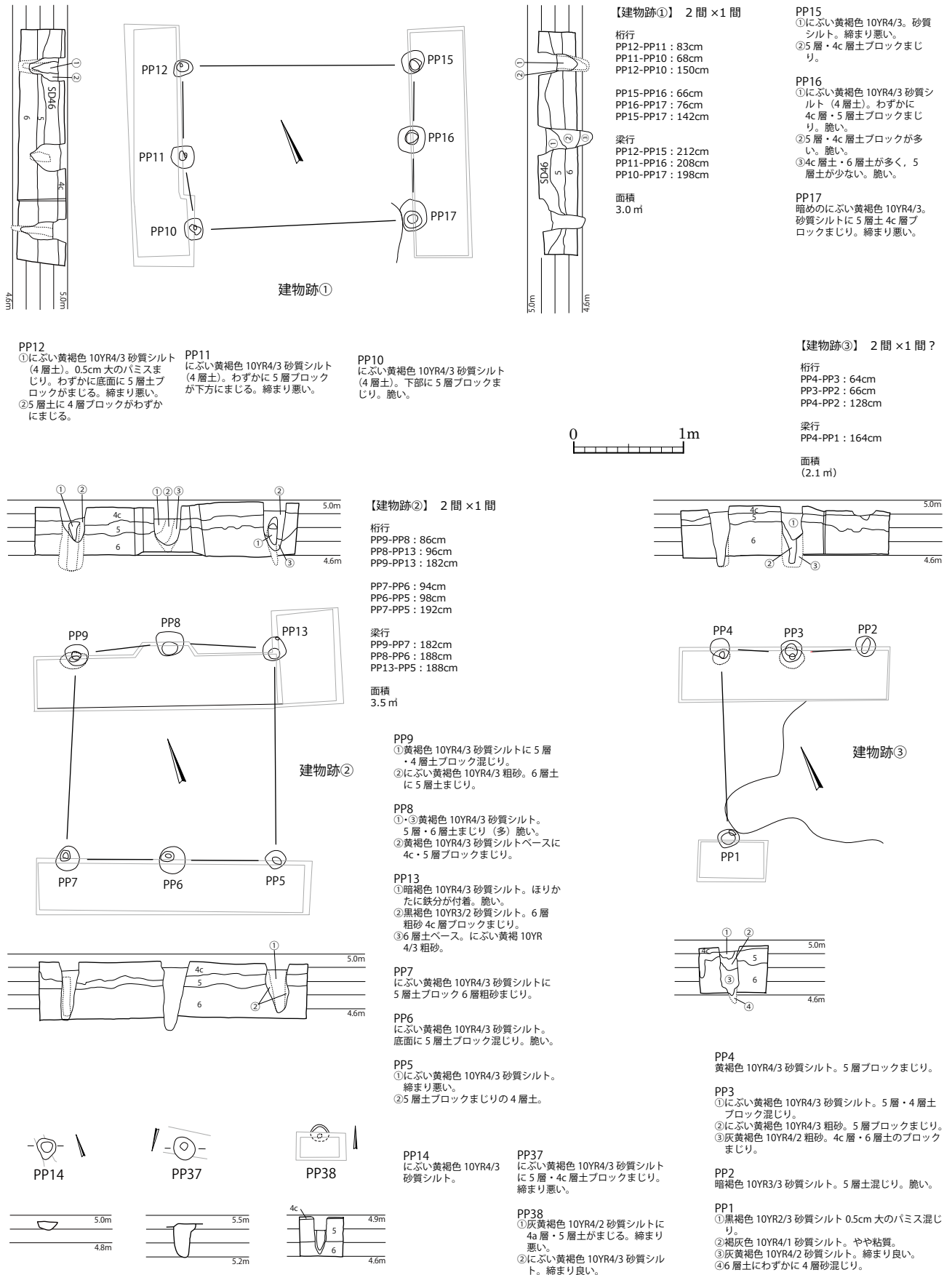


Fig.28 4c層上面検出建物跡①～③, その他ピット (S=1/50)



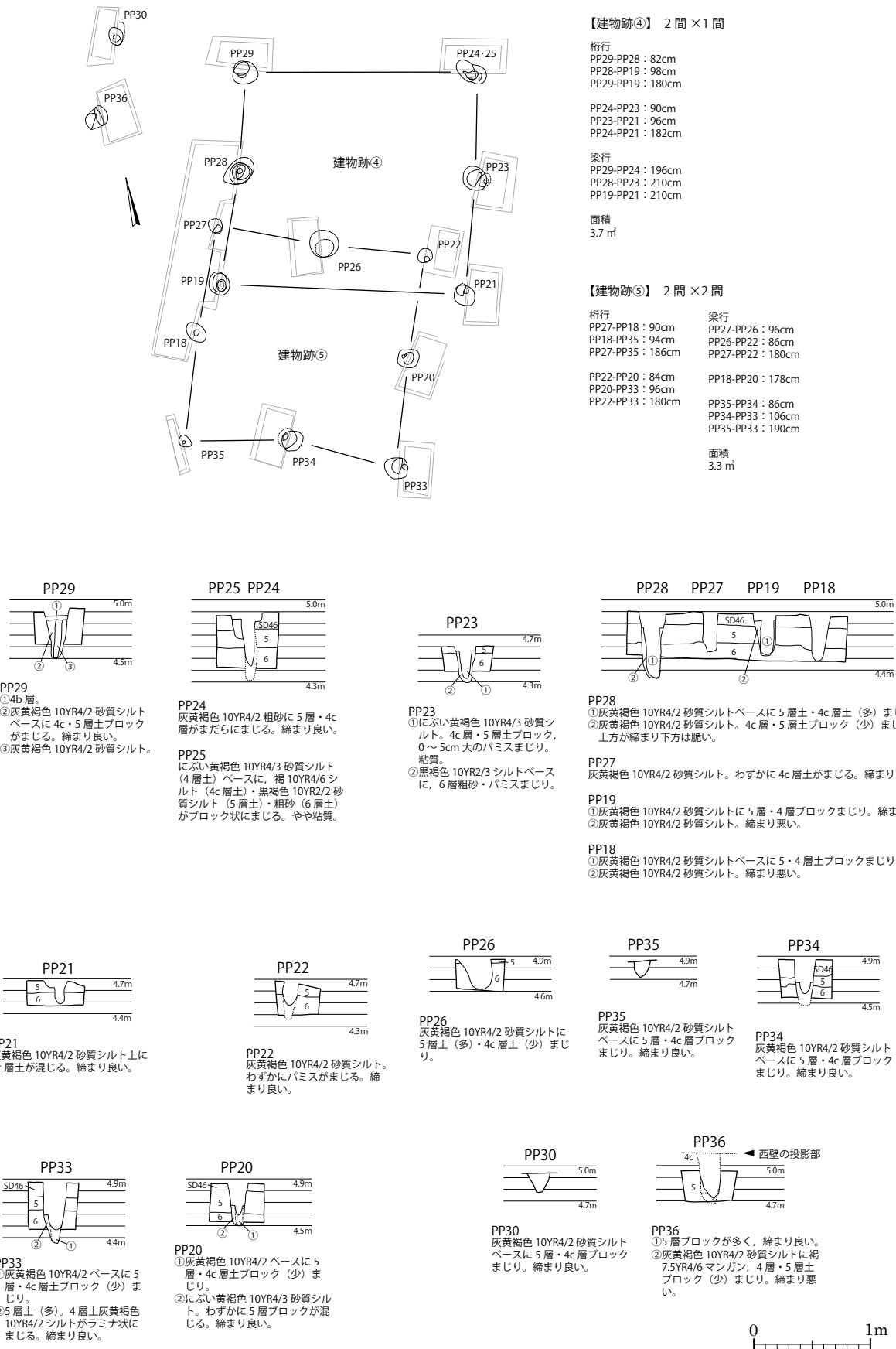
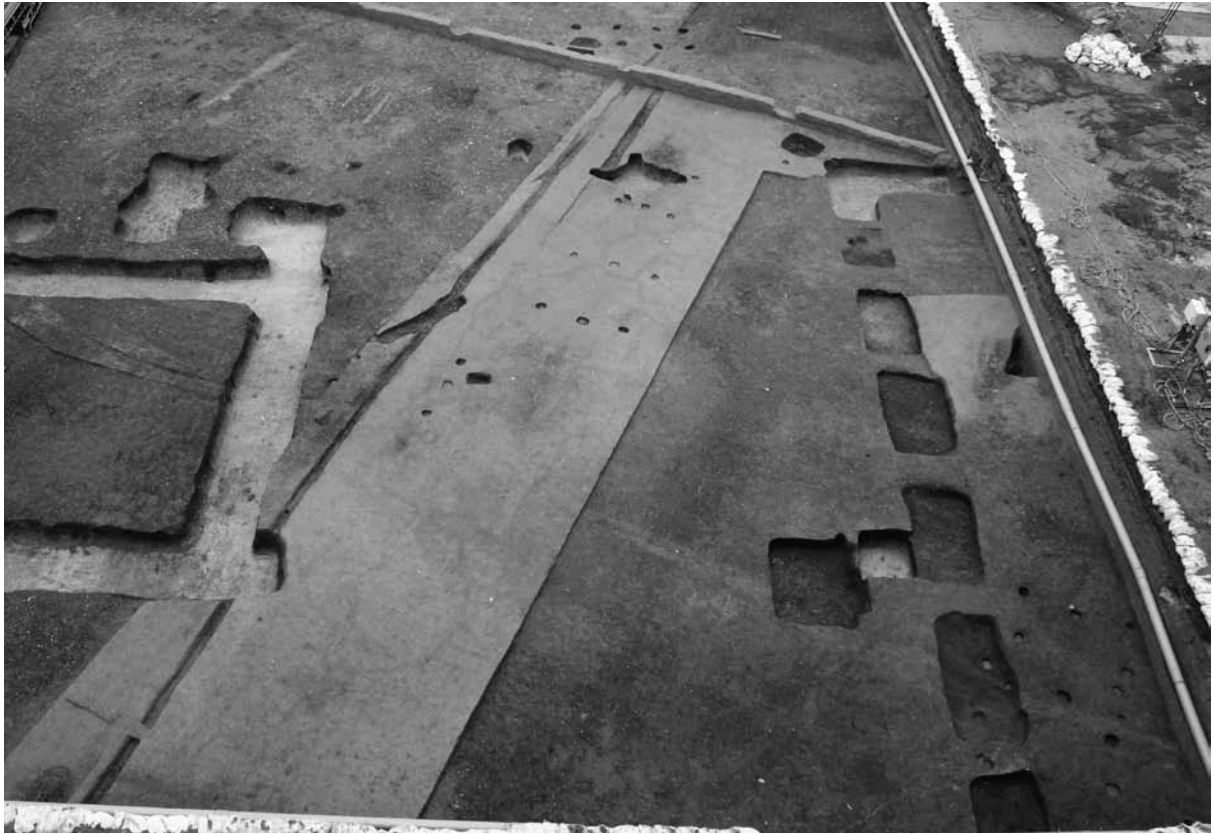


Fig.29 4c層上面検出建物跡④・⑤ (S=1/50)





大睦3(AZ3)下の4c層上面検出溝跡(SD28)と建物跡[北より]



溝跡(SD28)[北より]



セクションベルト®と溝跡(SD28)[南より]



セクションベルト®と溝跡(SD28)[南より]

PL.25 大睦3(AZ3)下の溝跡(SD28)



4c層上面検出の建物跡1～3配置と溝跡(SD28)[北より]



建物跡1(PP10～12・15～17)[東より]



建物跡2(PP5～9・13)[北より]



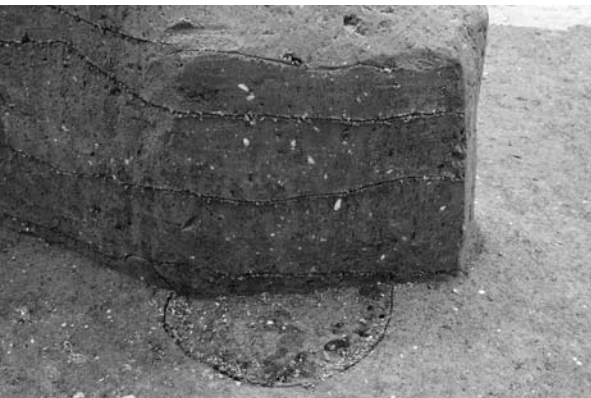
建物跡3(PP1～4)[北より]



建物跡4・5[北より]



建物跡4・5[東より]



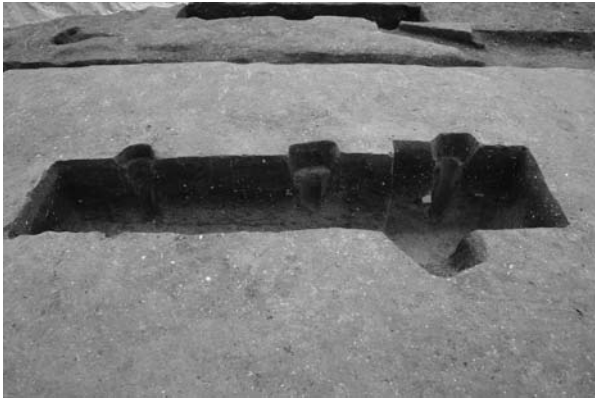
S8にかかるPP13[北より]



建物跡2(PP8・13)[南より]

PL.26 建物跡1～5





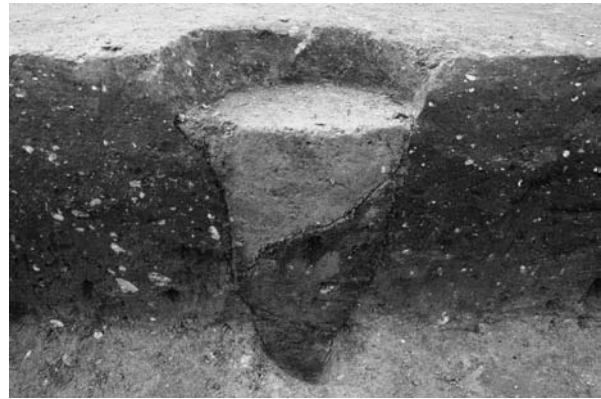
建物跡1(PP12・11・10)[西より]



建物跡1(PP17・16・15)[東より]



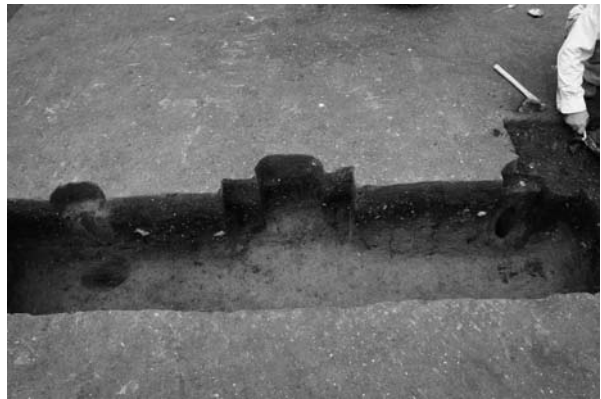
建物跡2(PP12)[西より]



建物跡1(PP16)[東より]



建物跡2(PP7・6・5)[南より]



建物跡2(PP13・8・9)[北より]



建物跡2(PP6)[南より]



建物跡2(PP13)[東より]

PL.27 建物跡の柱穴(1)



建物跡3(PP4・3・2)[南より]



建物跡3(PP1)[南より]



建物跡4(PP24)[北より]



建物跡4(PP29)[北より]



建物跡4(PP28)[西より]



建物跡5(PP22)[東より]



建物跡5(PP27)[西より]



PP36[東より]

PL.28 建物跡の柱穴(2)

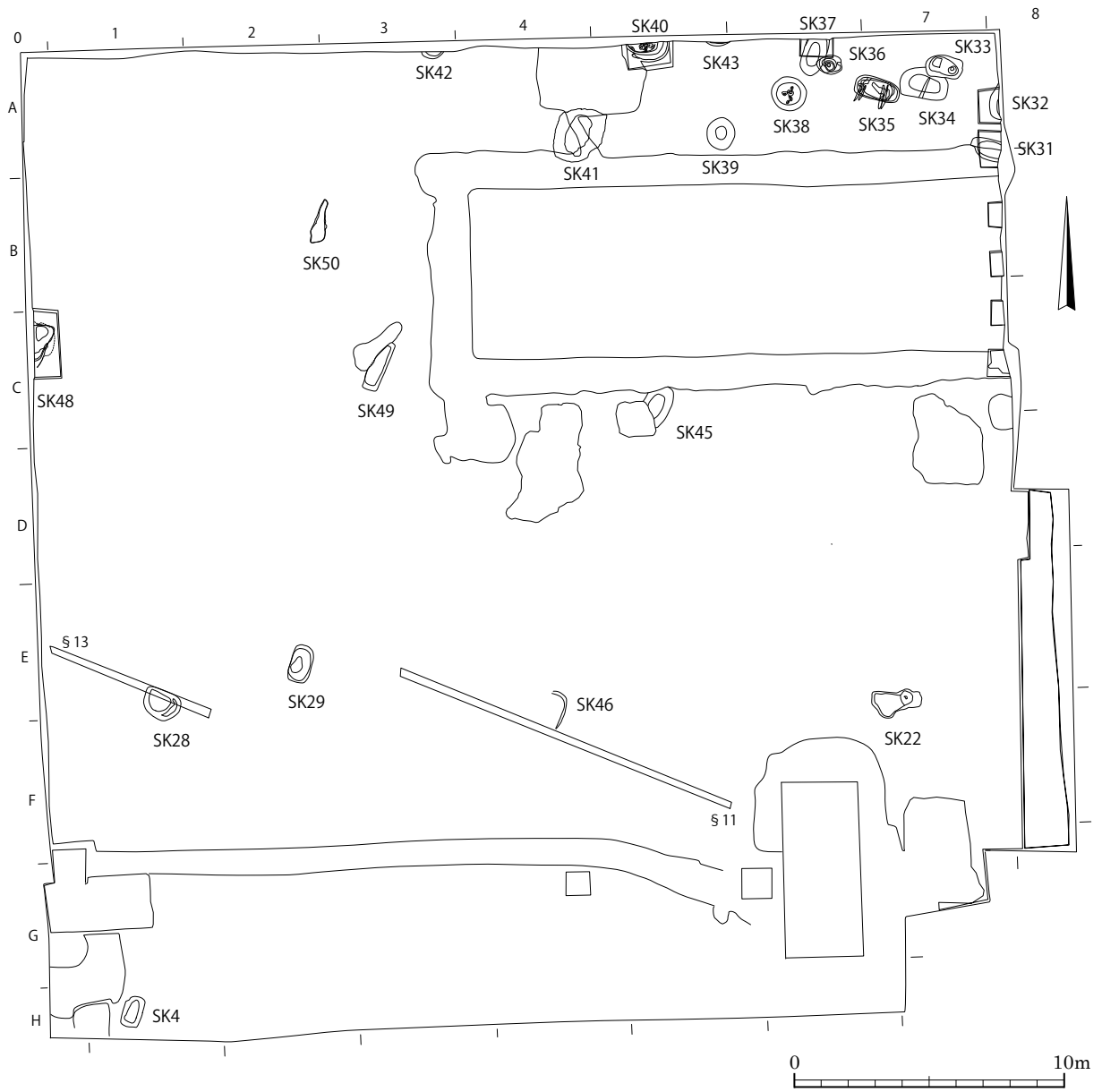
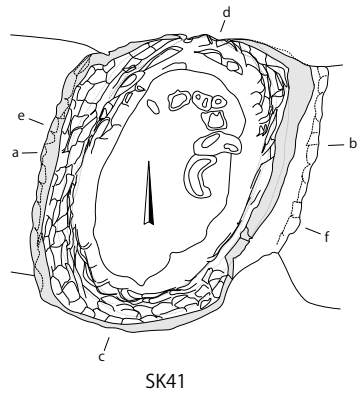
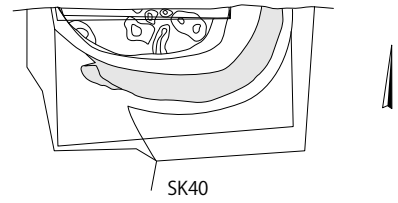
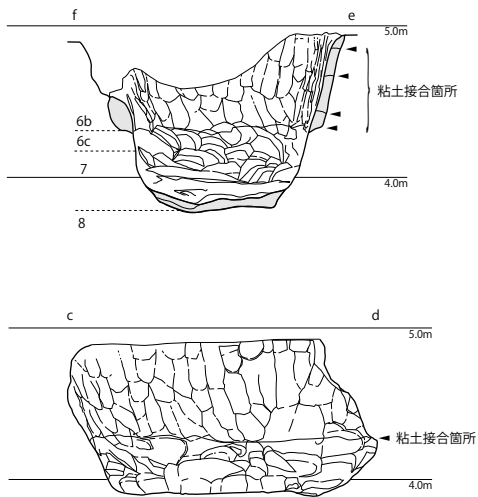


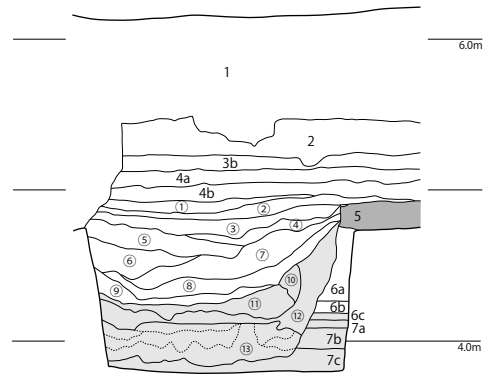
Fig.30 4c層上面検出遺構2(S=1/250)



SK41

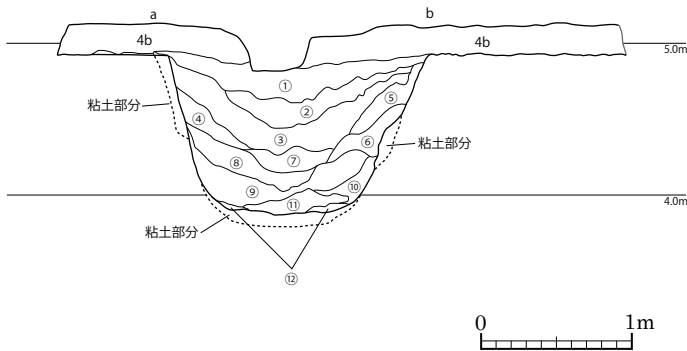


SK40



SK40 埋土

- ①
- ②
- ③にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質シルト。0.5cm 大のパミスまじり。
- ④にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質シルト。0.5cm 大のパミスまじり。
- ⑤褐色 10YR4/4 粗砂まじりシルト。0.5 ~ 2cm 大のパミスまじり。締めりやや悪い。
- ⑥にぶい黄褐色 10YR5/4 粗砂。
- ⑦褐色 10YR4/4 粗砂。0.5 ~ 5cm 大のパミスまじり。脆い。
- ⑧灰黄褐色 10YR4/2 粗砂。0.5 ~ 2cm 大のパミスまじり。
- ⑨⑥よりやや明るい。
- ⑩灰黄褐色 10YR4/2 粗砂まじりシルトに、細砂と 0.5 ~ 2cm 大のパミスまじり。
- ⑪⑦よりややシルト質。
- ⑫6c 層・7 層粘土のまじり土。
- ⑬6c 層・7 層粘土のまじり土。



SK41 埋土

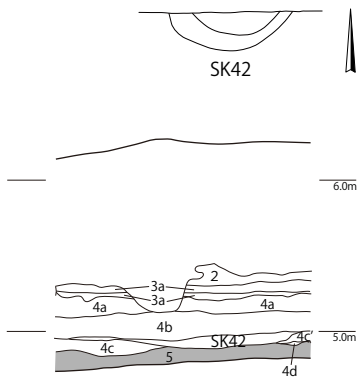
- ①灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト (4 層土) に、黒褐色 10YR2/3 砂質シルト・褐色 10YR4/4 粗砂基調 (6 層砂), 明黄褐色 10YR6/6 シルト (7 層土) ブロックがまじる。0.5 ~ 3cm 大のパミス混じり。締めり悪い。
- ②6 層粗砂基調。4 層シルトやや多い。5 層ブロック若干混入。0.5 ~ 3cm 大パミス。脆い。
- ③6 層粗砂基調。5 層・8 層・7 層・4 層土がブロック状にまじる。
- ④4 層土基調。6 層粗砂混ざる。脆い。
- ⑤④に同じ。
- ⑥④に類似。
- ⑦4 層土を基調。5 層・8 層土 (黒褐色 10YR3/2 シルト) まじり。脆い。
- ⑧4 層土を基調。6 層粗砂 (多)。5 層土 (少) まじり。
- ⑨4 層土に 6 層粗砂まじり。5 層土大ブロックまじり。
- ⑩4 層土基調。6 層粗砂・5 層土ブロック (少) まじり。
- ⑪7 8 層の混土。粘質シルト。締めりよい。
- ⑫福灰色 10YR4/1 シルト。6・7 粘土層のまじり土。



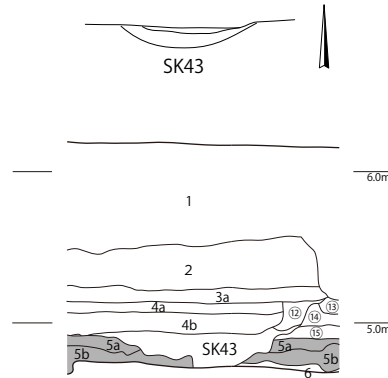
SK41 出土遺物

Fig.31 4c 層上面検出土坑 1 (S=1/50), 出土遺物 (S=1/6)

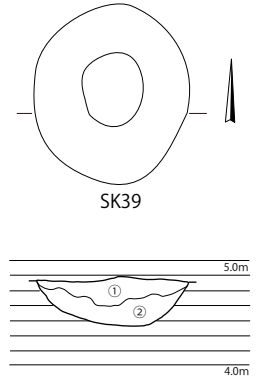




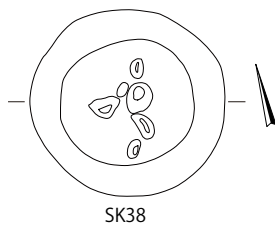
**SK42 埋土**  
にぶい黄褐10YR4/3砂質シルト、0.5~1cm大のバミスまじり。締まり良い。



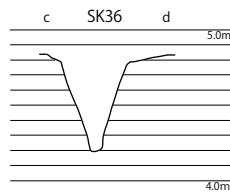
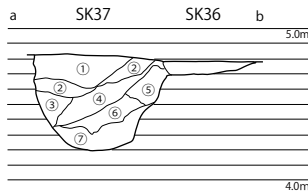
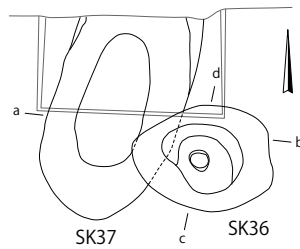
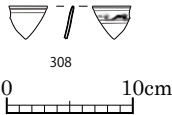
**SK43 埋土**  
にぶい黄褐10YR5/4粗砂ににぶい黄褐10YR5/4シルトブロックまじり。締まり悪い。



**SK39 埋土**  
①にぶい黄褐10YR5/4粗砂シルト。4・6・5層のまじり土。脆い。  
②①より5層土ブロックが多量にまじる。脆い。

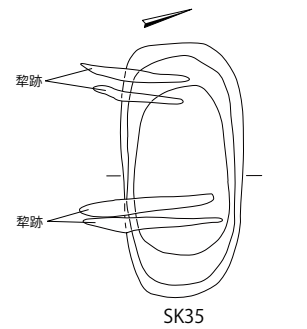
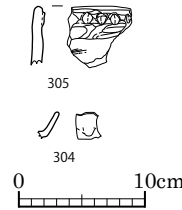


**SK38埋土**  
①褐10YR4/4砂質シルト(4層土)。0.5cm大のバミスまじり。締まり良い。  
②にぶい黄褐10YR4/3砂質シルト(4層土)ベースに5層・4層ブロック6層粗砂がまじる。  
③にぶい黄褐10YR4/3、砂質シルトに5・6層ブロック、7層(粘土)ブロックまじる。  
④灰黄褐10YR4/2、砂質シルトに6層粗砂がわずかにまじる。



**SK36埋土**  
にぶい黄褐10YR4/3砂質シルトに4c層・6層粗砂ブロックまじり。脆い。

**SK37埋土**  
①にぶい黄褐10YR4/3砂質シルト、0.5~1cm大のバミスまじり。締まり良い。  
②①に5層土・6層砂ブロックがまじる。  
③②に類似。  
④①に類似。  
⑤②に類似するが5層土ブロックが小さい。  
⑥①に類似。  
⑦5層土ブロックに4層土が混じる。



**SK35埋土**  
①灰黄褐色10YR4/2砂質シルト(4層土)。0.5~1cm代のバミスまじり。締まり良い。  
②灰黄褐色10YR4/2砂質シルトに、褐色10YR4/6シルト(4c層土)、黒褐色10YR2/2砂質シルト(5層土)、6層粗砂、バミスまじり、やや粘質。やや締まり悪い。  
③②より4層土が多い。  
④③より4層土が多い。  
⑤③より5層土が多い。

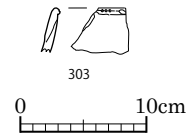
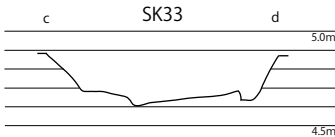
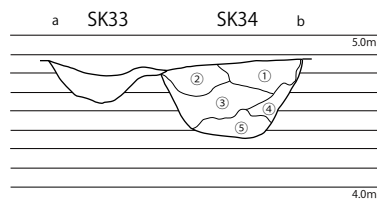
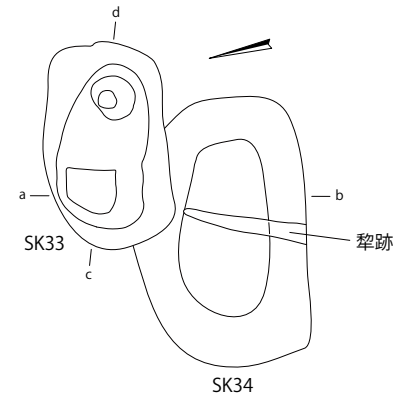
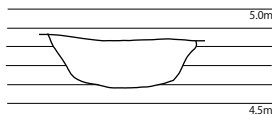
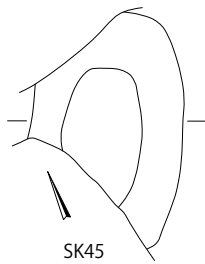


Fig.32 4c層上面検出土坑2(S=1/50), 出土遺物(S=1/6)

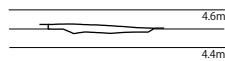
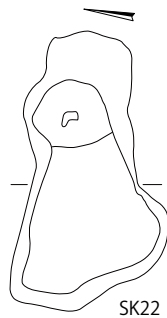


**SK33埋土**  
 灰黄褐10YR4/2砂質シルト(4層土)に、にぶい黄褐10YR6/4細砂ブロック・黒褐10YR2/2砂質シルトブロックまじり。

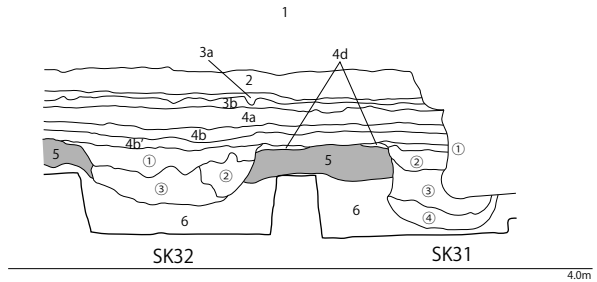
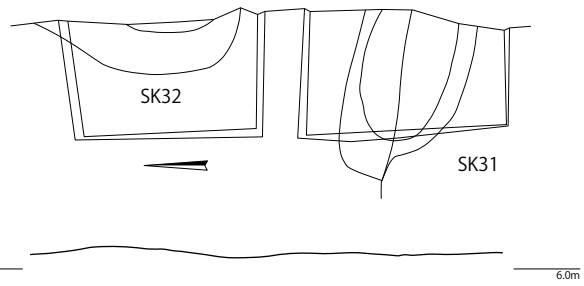
**SK34埋土**  
 ①灰黄褐10YR4/2砂質シルト(4層土)に黒褐10YR2/3砂質シルト(5層土)、褐10YR4/6シルト(4層土)、0.5~2cm大のバミスまじり。  
 ②5層土が多い、4c層土も目立つ。  
 ③2より4層土が多い。  
 ④4層土をベースに5層土。  
 ⑤4・5層土のまじり。



**SK45埋土**  
 黒褐10YR3/2、砂質シルト。わずかに4c層・5層・6層土ブロックまじり。0.5~3cm大のバミスまじり。締まりやや悪い。

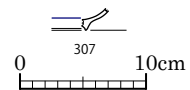


**SK22埋土**  
 黒褐7.5YR3/1砂質シルト(4d層土)。0.5~1cm大のバミス(多)。ジャリジャリ。締まり良い。

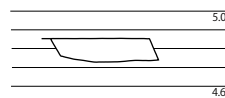
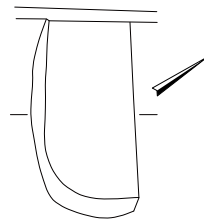


**SK32埋土**  
 ①灰黄褐10YR4/2砂質シルトに4c・5層土が少量に混じる。  
 ②・③は5層土が少なく、まじり方で分層。

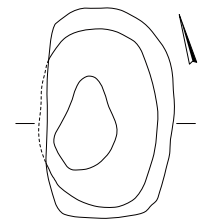
**SK31埋土**  
 ①灰黄褐10YR4/2砂質シルト。  
 ②にぶい黄褐10YR4/3砂質シルト0.5~2cm大のバミスまじり。やや粘質。わずかに4c層土もまじる。  
 ③灰黄褐10YR4/2砂質シルトに4c・5・6層土。0.5~2cm大のバミスまじり。  
 ④灰黄褐10YR4/2砂質シルトベースに5層土ブロックが少量まじる。



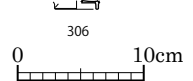
SK31 出土遺物



**SK46埋土**  
 灰黄褐10YR4/2砂質シルト。締まり弱い、0.5cm大のバミス(少)。



**SK29埋土**  
 ①にぶい黄褐10YR4/3砂質シルト(4層土)に6層粗砂まじり。締まりやや良い。0.5~1cm大のバミスまじり。  
 ②にぶい黄褐10YR4/3砂質シルトベースに、5層土ブロック、6層粗砂がまじる。  
 ③②より粗砂が多い。



SK29 出土遺物

Fig.33 4c層上面検出土坑3(S=1/50), 出土遺物(S=1/6)

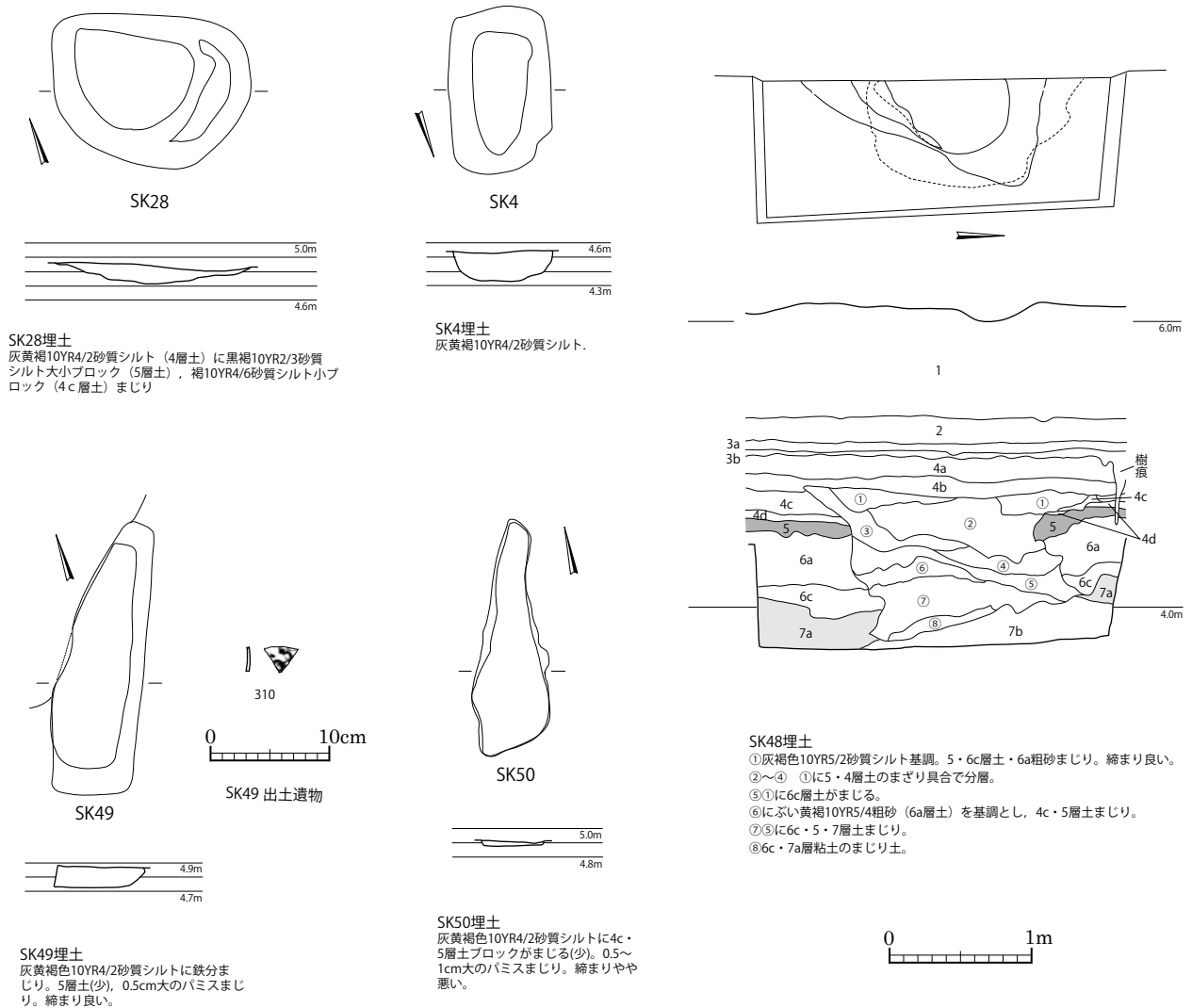


Fig.34 4c層上面検出土坑4(S=1/50), 出土遺物(S=1/6)

Tab.4 土坑観察

SK	平面形状	開口口径 (cm)	検出深度 (最深度: cm)	埋土	遺物 ※番号は遺物番号に対応
4	楕円形	72 ~ 118	21.2	4層土	土器, 成川式, 土師器, 陶器
22	不整形	60 ~ 185	19.5	4層土	-
28	楕円形	105 ~ 140	24.1	4・5層土	-
29	楕円形	78 ~ 132	45.4	4・6層土	土器, 中国白磁小皿 (306)
31	楕円形	-	63.9	4・5・6層土	土器, 中国青花 (307)
32	?	-	-	4・5・6層土	土器
33	楕円形 (底ビット)	81 ~ 138	91.2	4・5・6層土	-
34	楕円形	114 ~ 178	54.8	4・5層土	土器
35	楕円形	78 ~ 170	61.1	4・5・6層土	刻目突帯文土器 (303)
36	楕円形 (底ビット)	67 ~ 90	57.9	4・5・6層土	土器
37	楕円形	88 ~	64.8	4・5・6層土	刻目突帯文土器 (305), 黒曜石, 土器, 青磁 (304)
38	円形	123 ~ 130	66	4・5・6層土	土器, 土師器, 青花椀 (308)
39	円形	105 ~ 120	32	4・5層土	陶器
40	楕円形?	~ 156	68.2	4・5・6・7層土	磁器
41	楕円形	88 ~	102.5	4・5・6・7層土	堅野冷水煮茶入 (309)
42	?	-	-	4層土	-
43	?	-	-	4層土	-
45	楕円形	100 ~	33.3	4・5・6層土	土器, 土師器
46	楕円形	-	17.3	4層土	-
48	?	-	113.5	4・5・6・7層土	中国白磁
49	不整形	-	16.2	4層土	中国青花 (310)
50	不整形	54 ~ 165	6.2	4層土	-



SK41[北より]



SK41埋土内粘土塊[南より]



SK41埋土内粘土塊[南より]



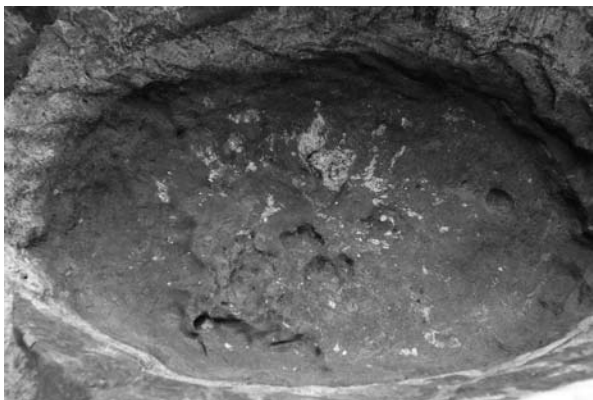
SK41埋土堆積状況[南より]



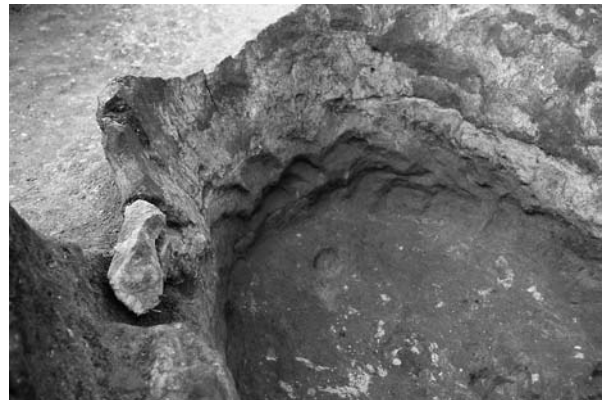
SK41埋土除去[南より]



SK41工具痕[北より]



SK41底面[西より]



SK41工具痕[東より]

PL.29 土坑群(1)



SK41粘土貼付け状況[北より]



SK41粘土貼付け状況[北より]



SK41底面粘土貼付け状況[北より]



SK41完掘[南より]



SK40[南より]



SK40[南より]



SK40粘土貼付け状況[西より]

PL.30 土坑群(2)





SK4[北より]



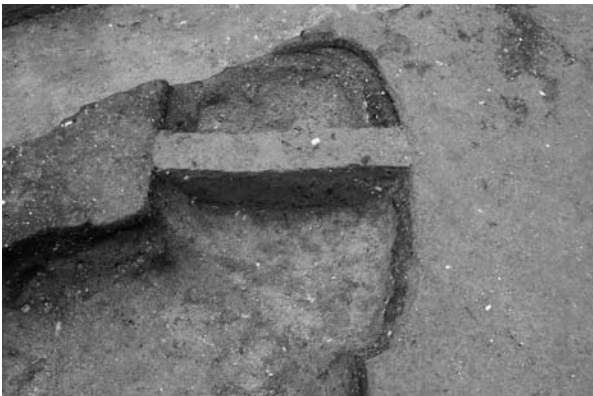
S ㊸と(SK28[南より])



SK29[南より]



SK46[北より]



SK45[南より]



SK31[南より]



SK32[西より]



調査区北側土坑群検出(SK31~39)[北より]

PL.31 土坑群(3)

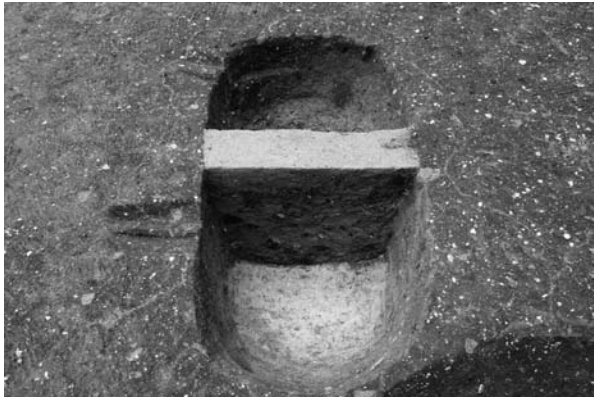




SK33~35[南より] 鋤跡に切られる



SK33・34[西より]



SK35[東より]



SK36~38[東より]



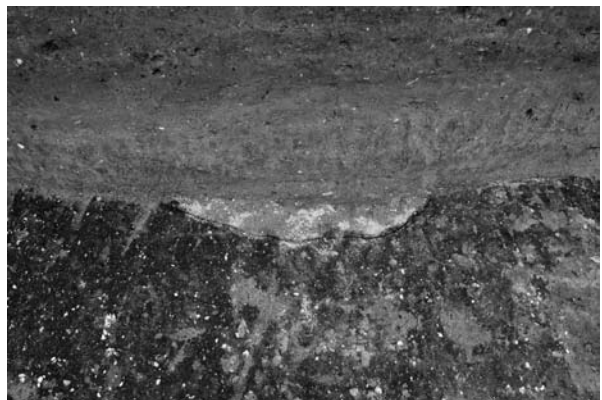
SK36・37[南より]



SK38[南より]



SK39[南より]



SK43[南より]

PL.32 土坑群(4)



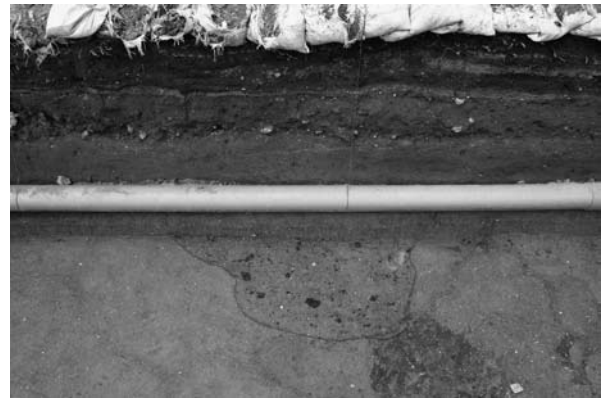
SK42[南より]



SK50[東より]



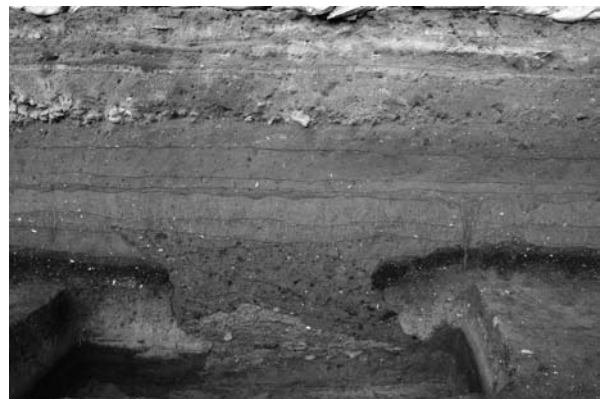
SK49[南より]



SK48[東より]



SK48[南より]



SK48[東より]



SK28[南より]



SK22[西より]

PL.33 土坑群(5)

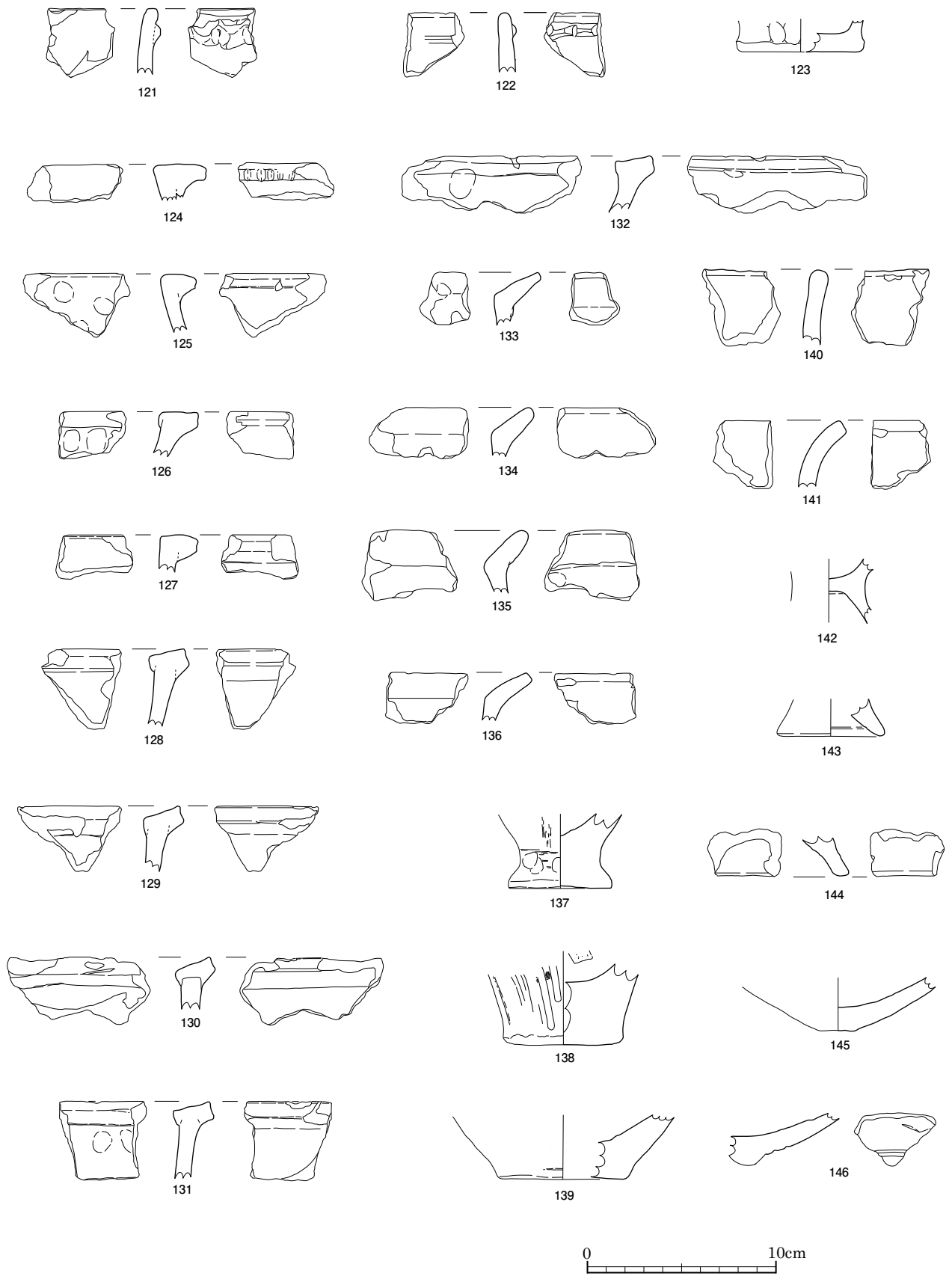
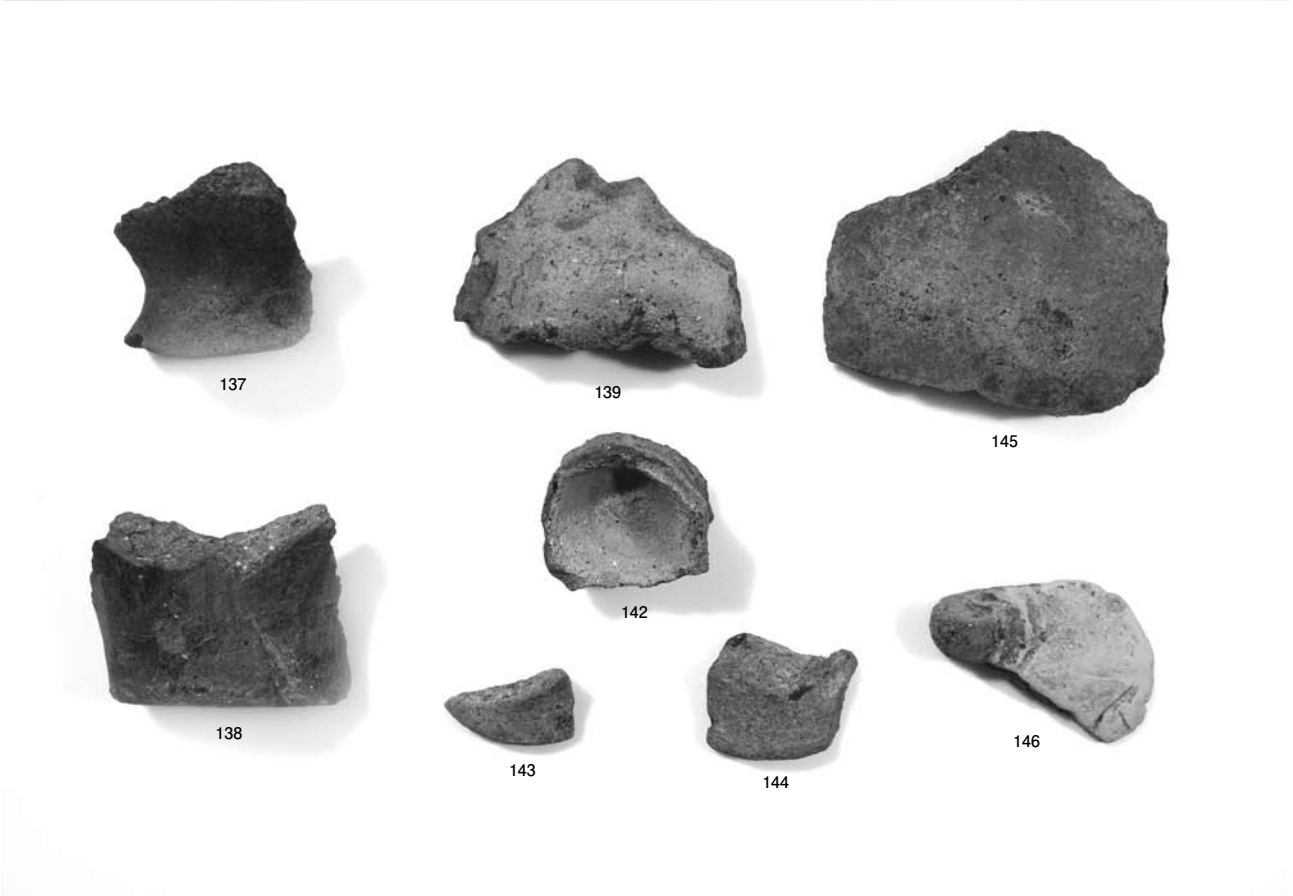
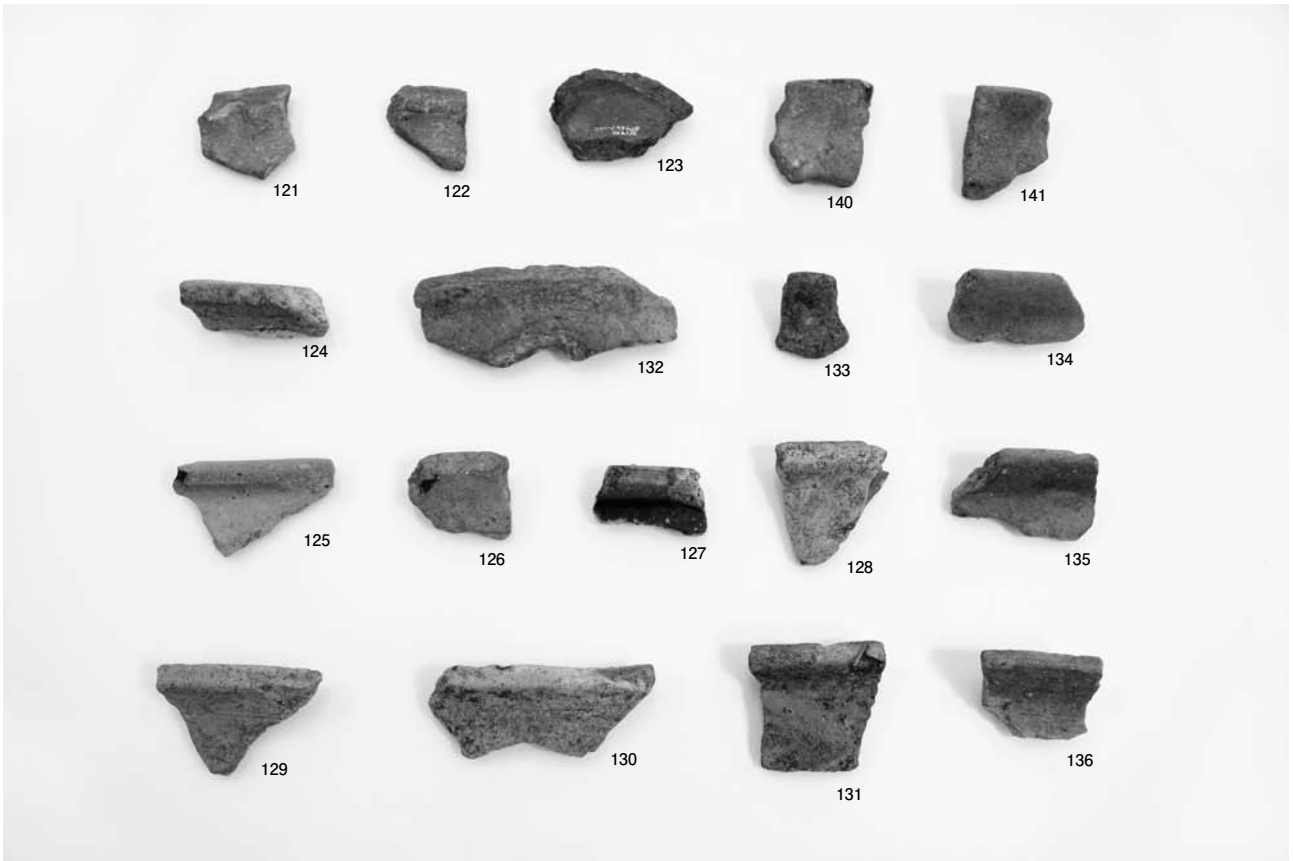


Fig.35 4層出土遺物(1) (S=1/3)



PL.34 4層出土遺物(1)

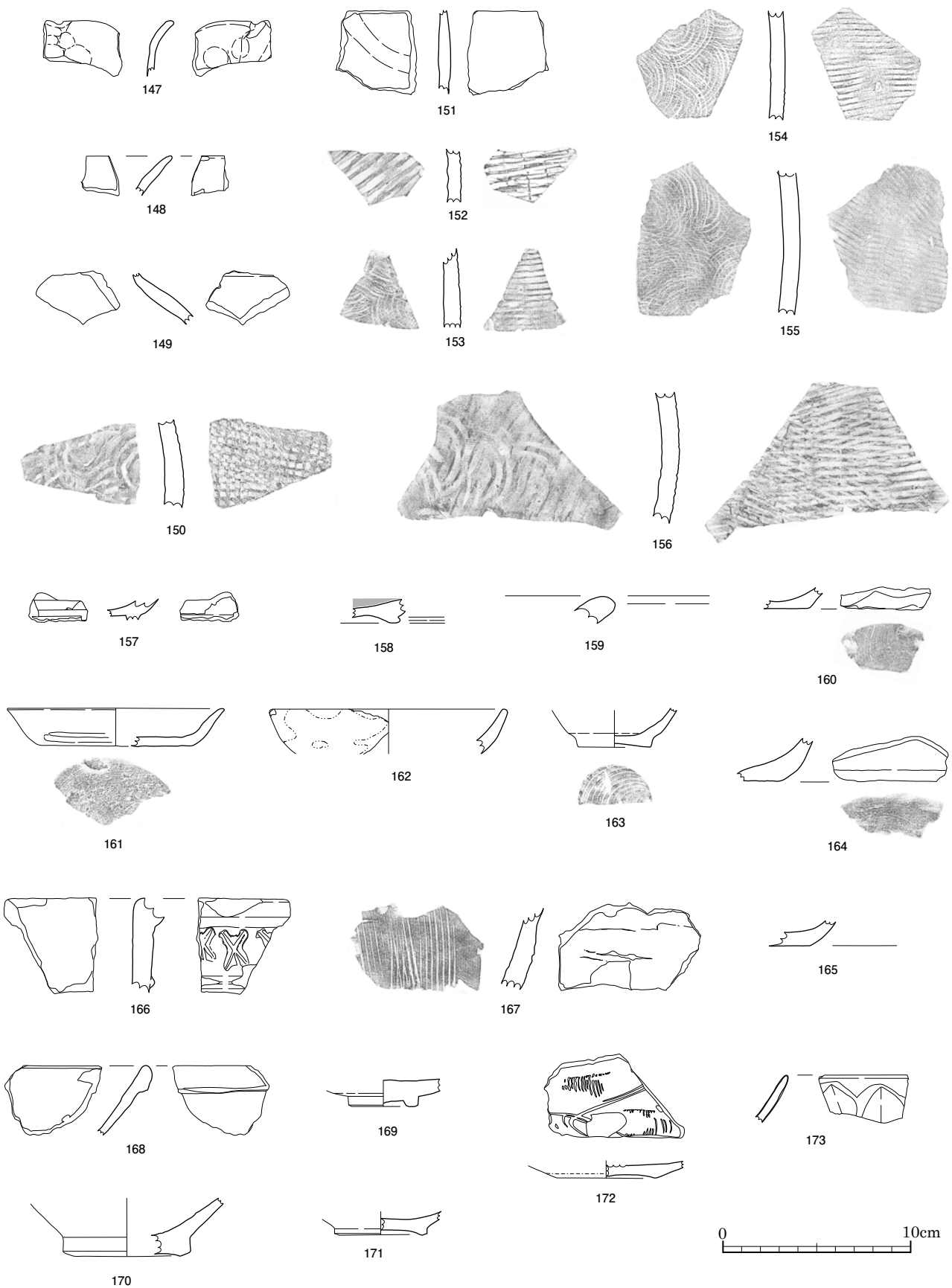
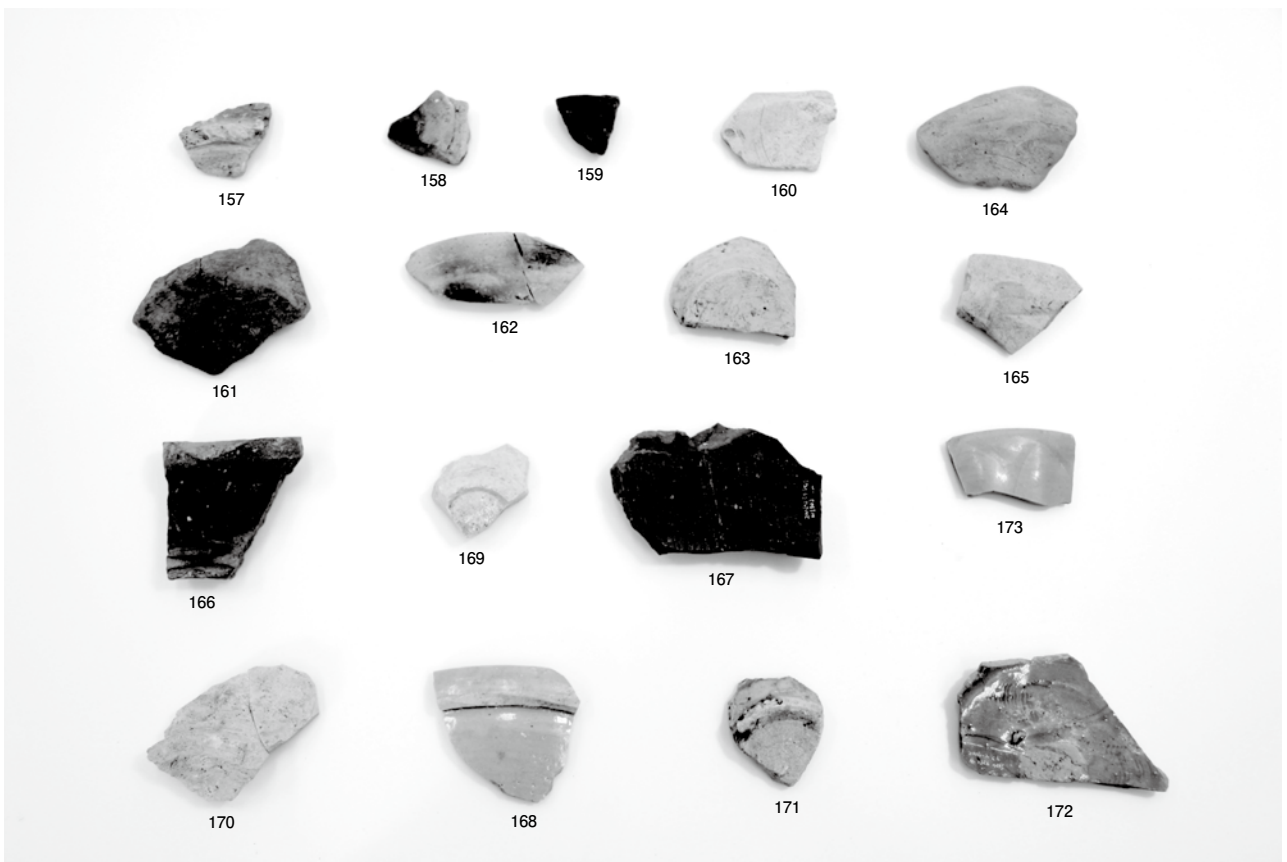
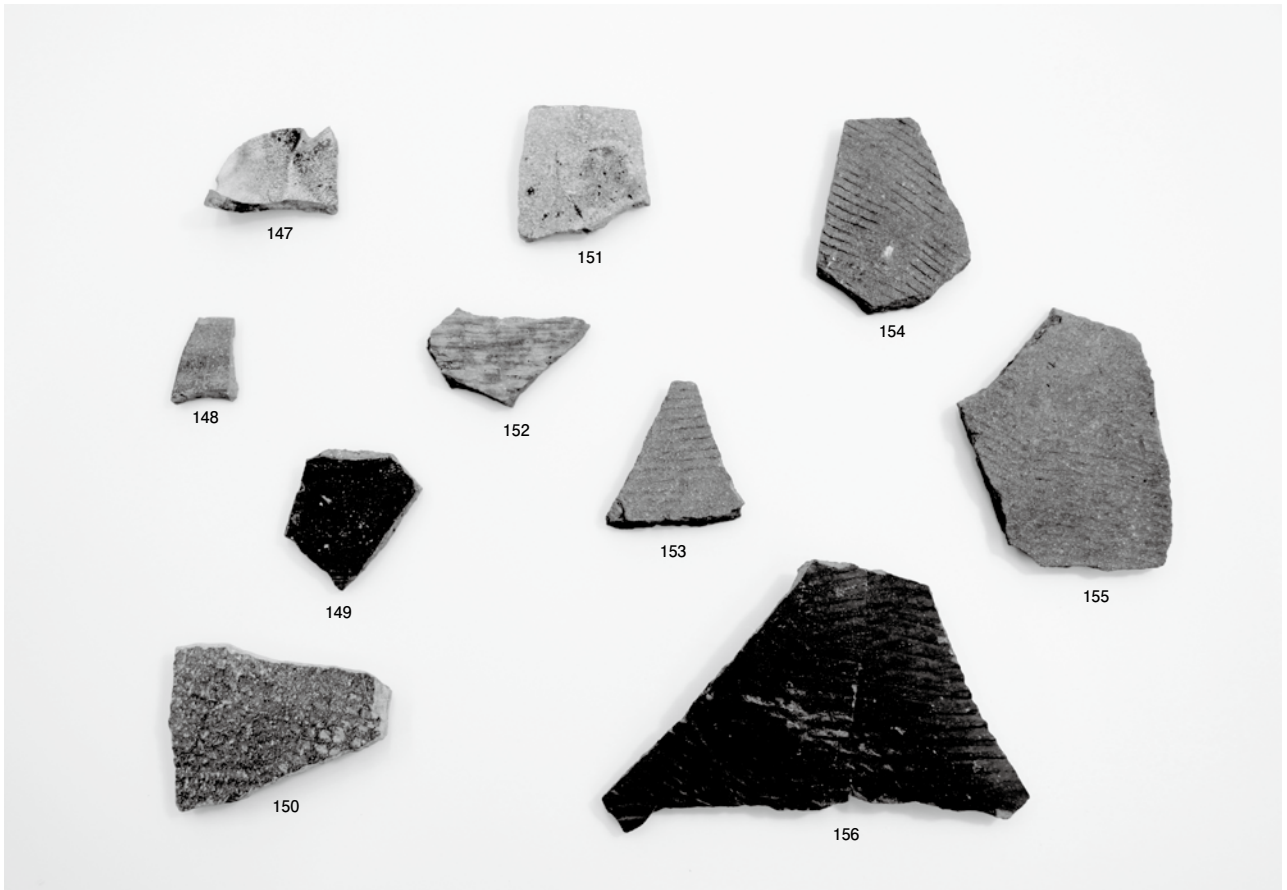


Fig.36 4層出土遺物(2) (S=1/3)





PL.35 4層出土遺物(2)



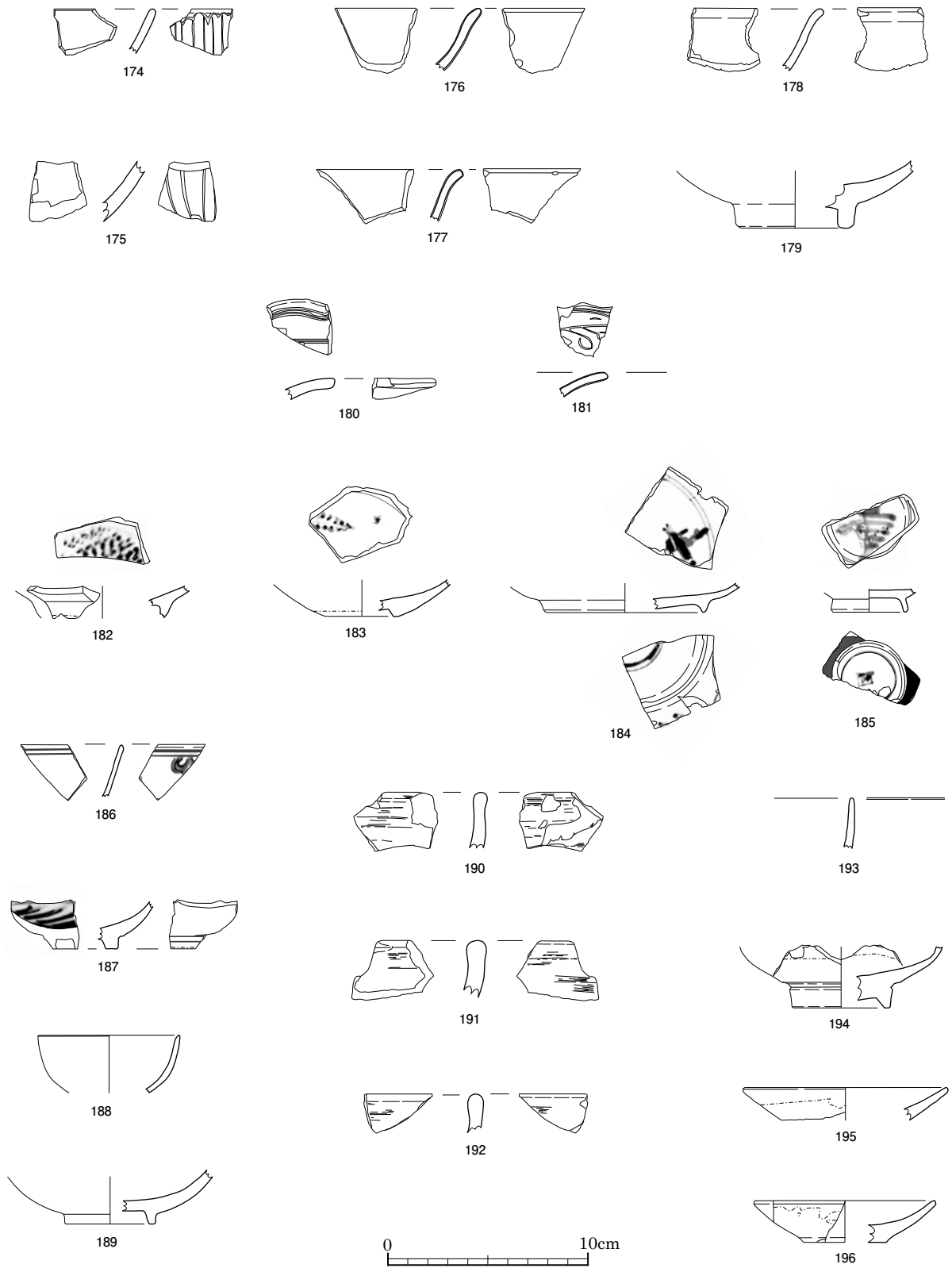
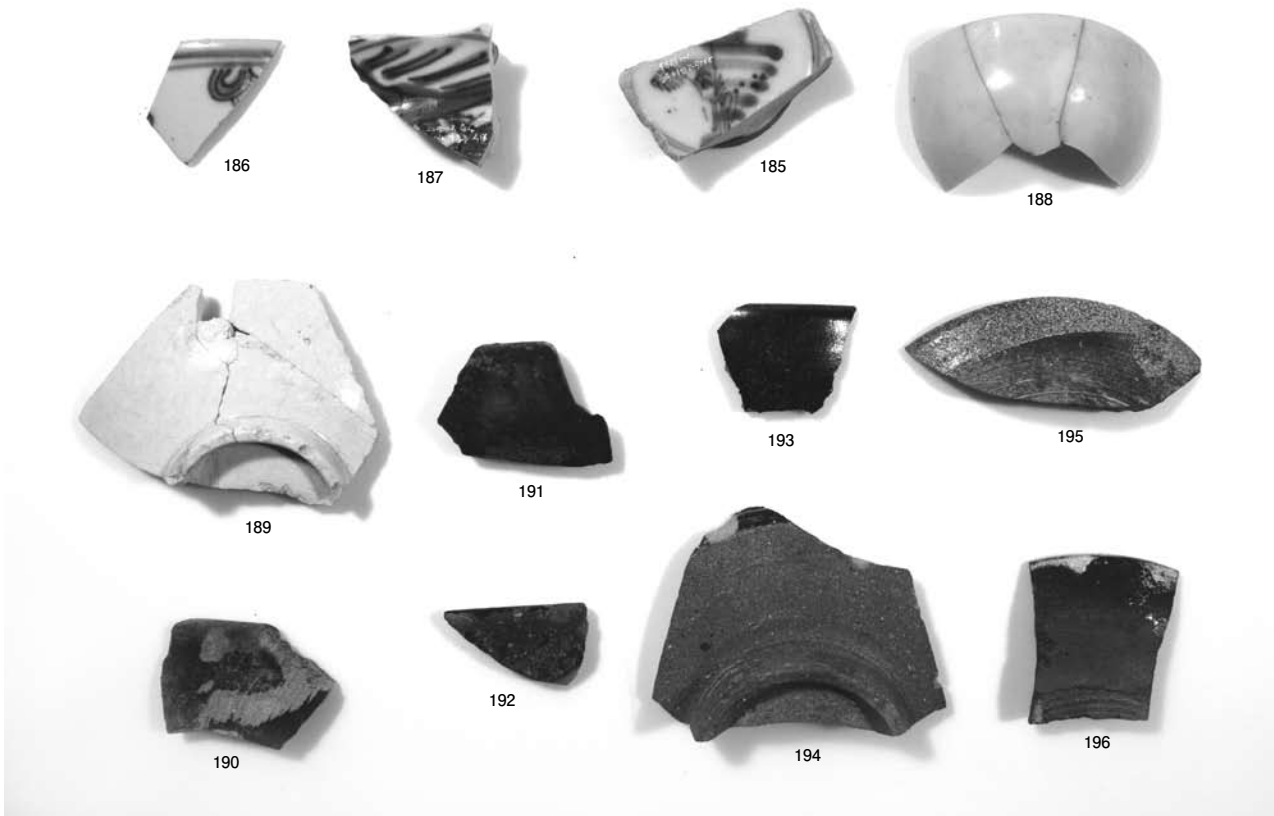
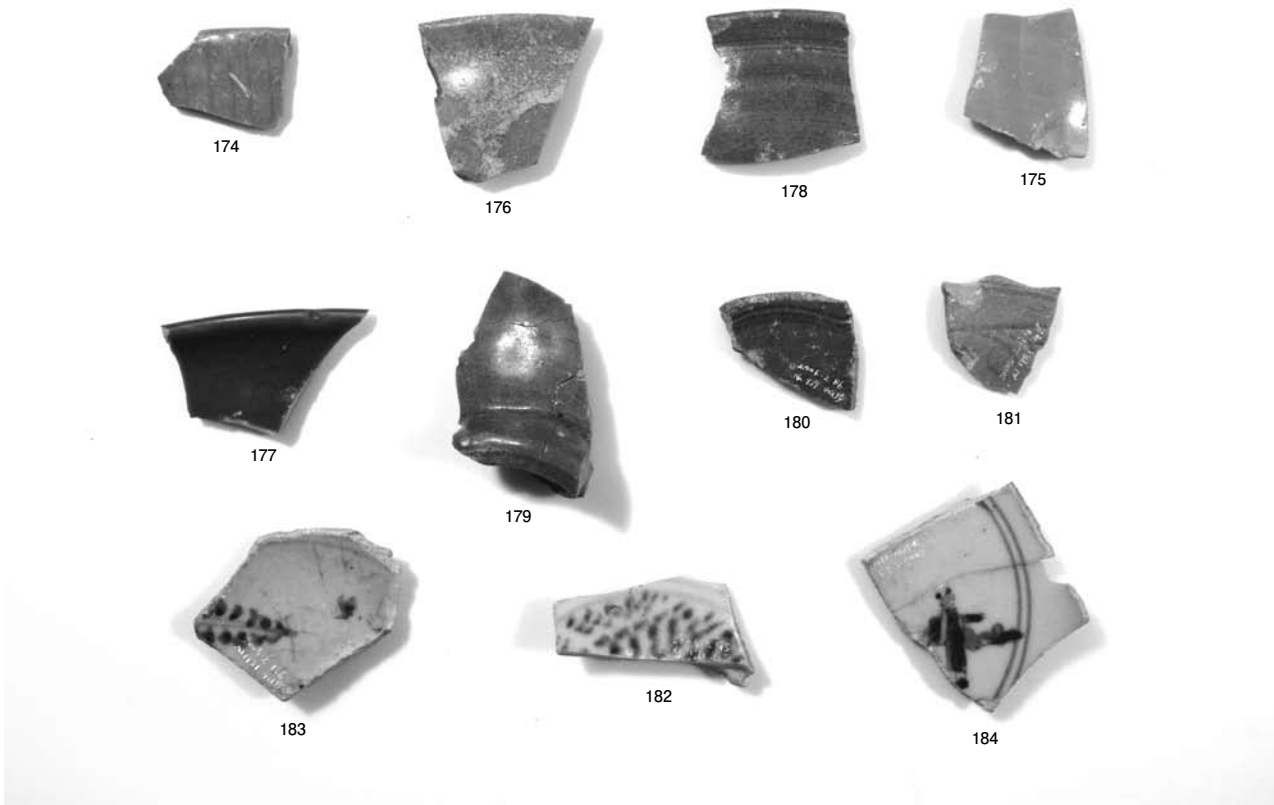


Fig.37 4層出土遺物(3) (S=1/3)



PL.36 4層出土遺物(3)

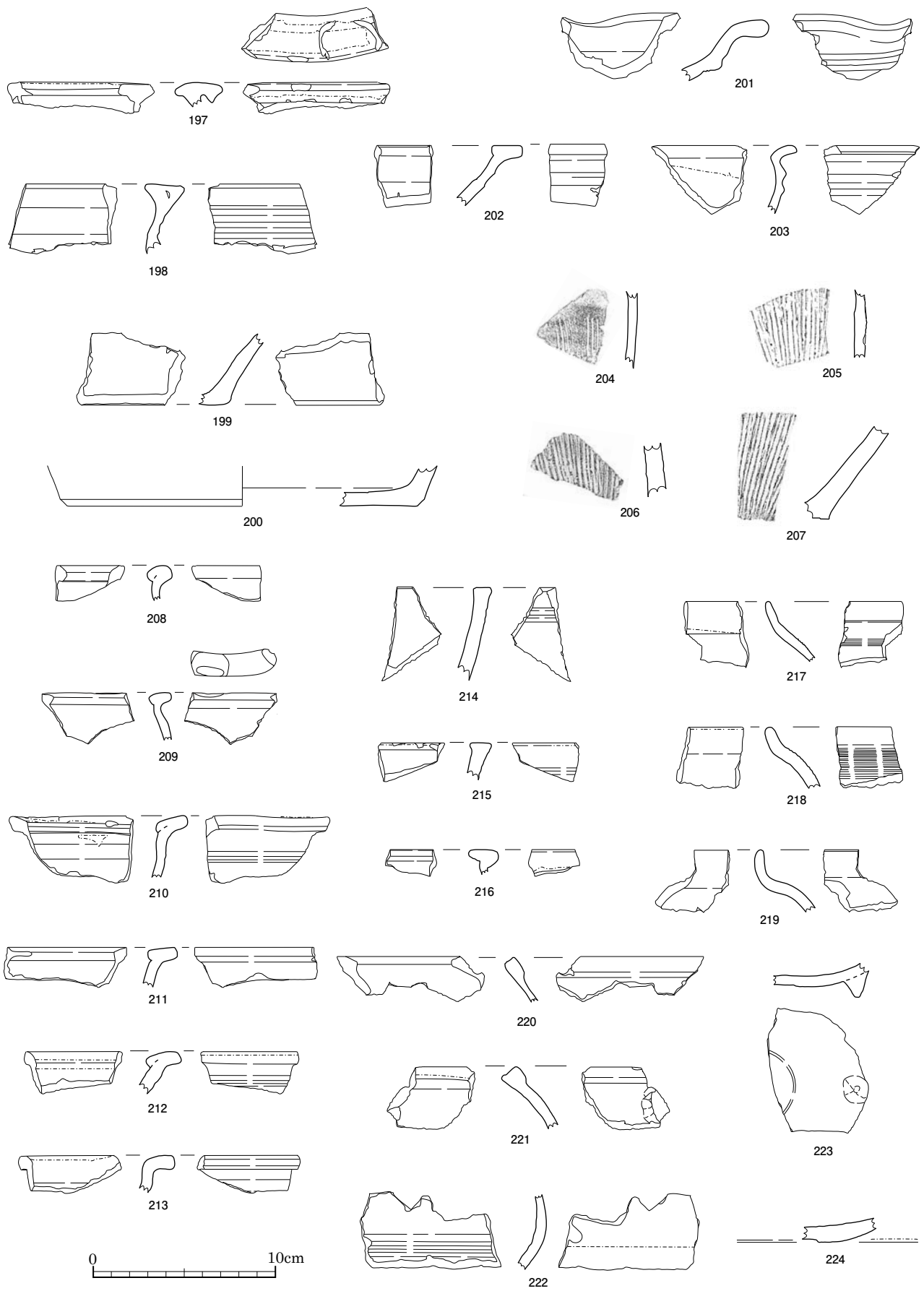
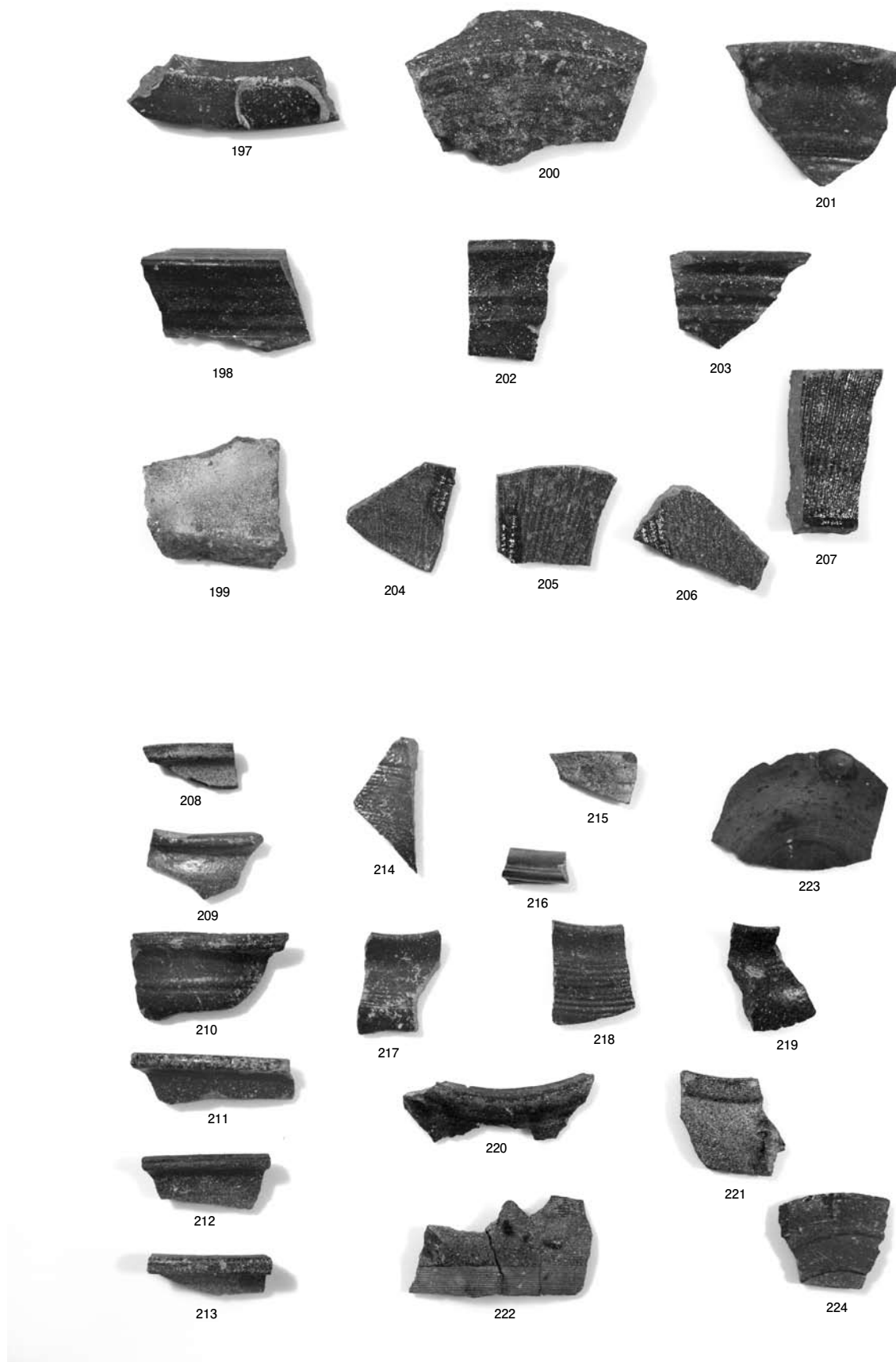


Fig.38 4層出土遺物(4)(S=1/3)



PL.37 4層出土遺物(4)

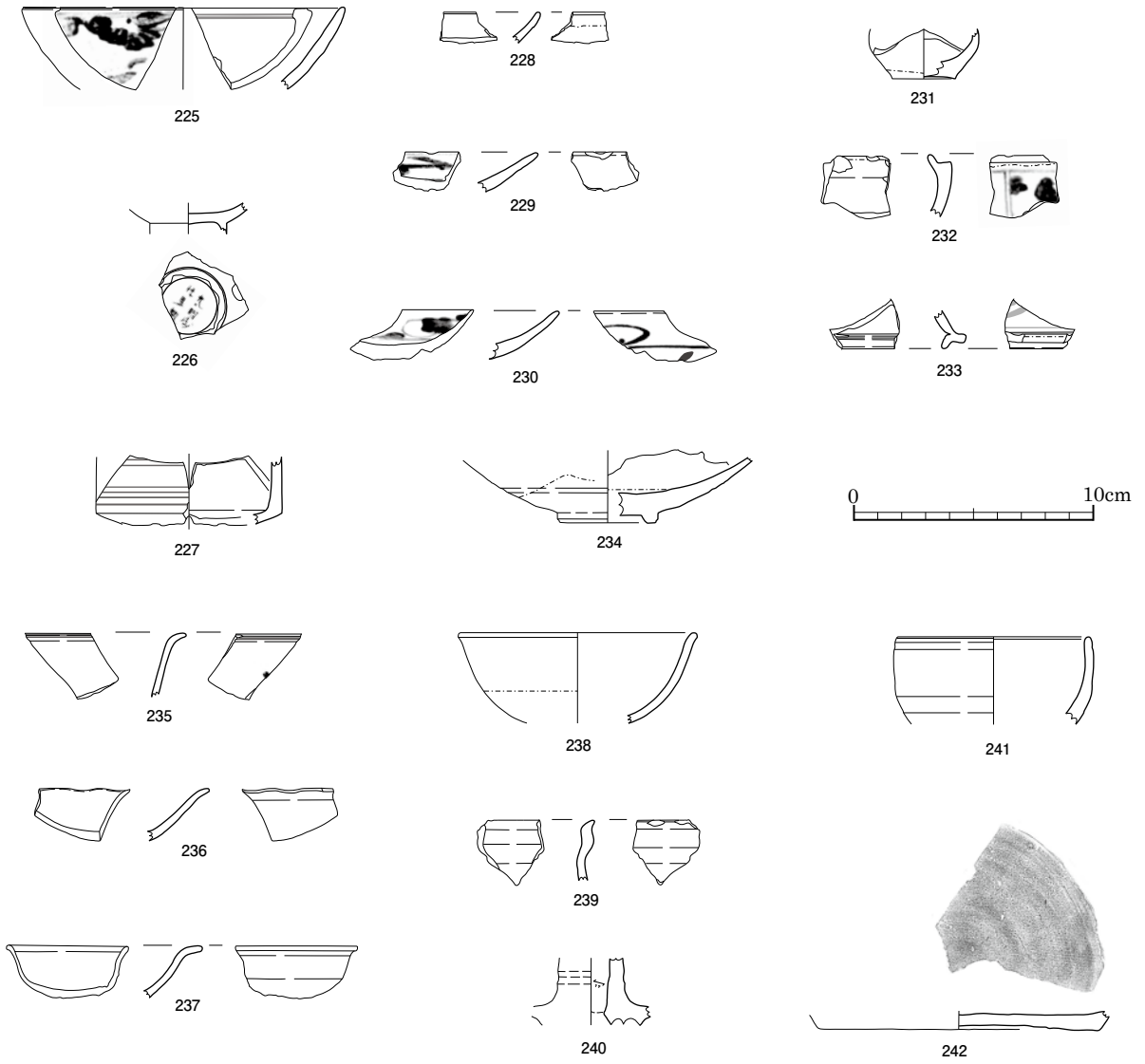
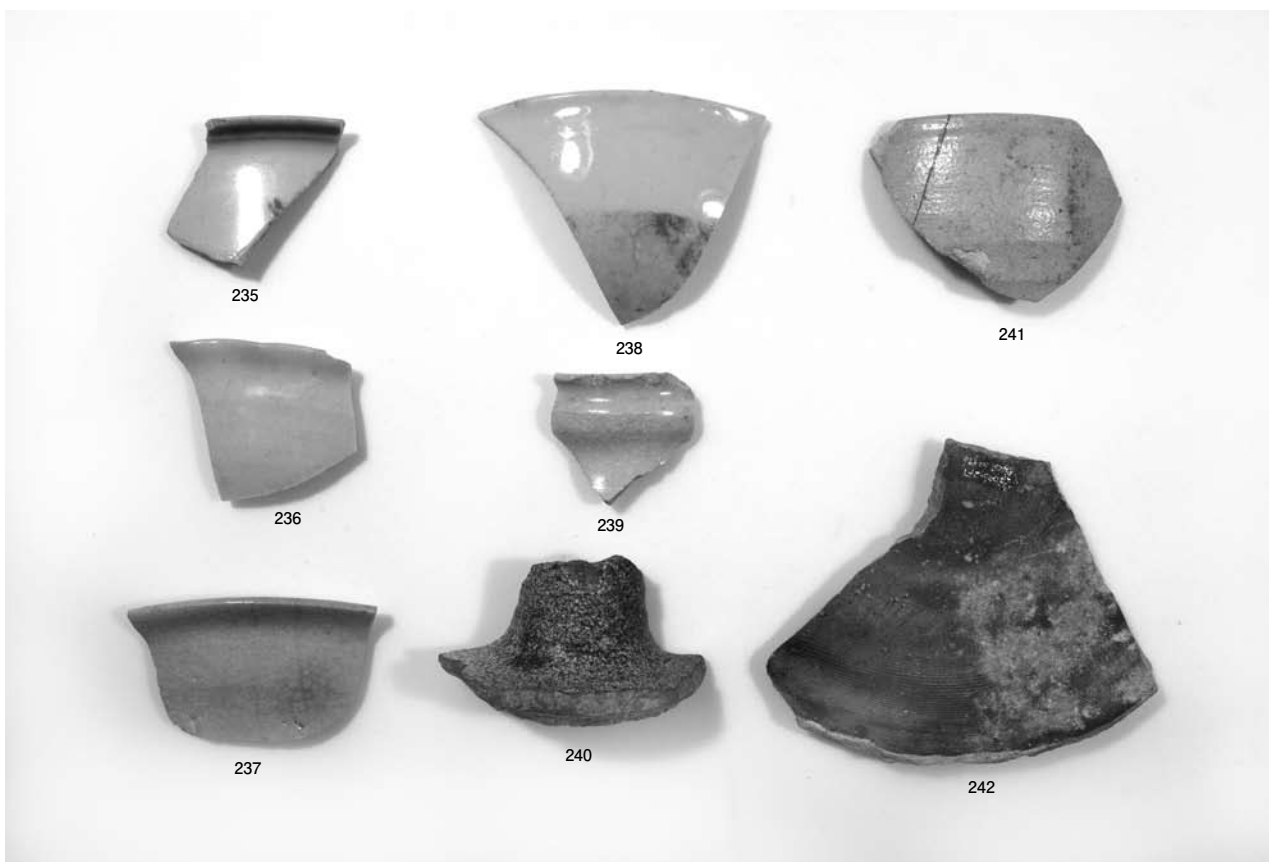
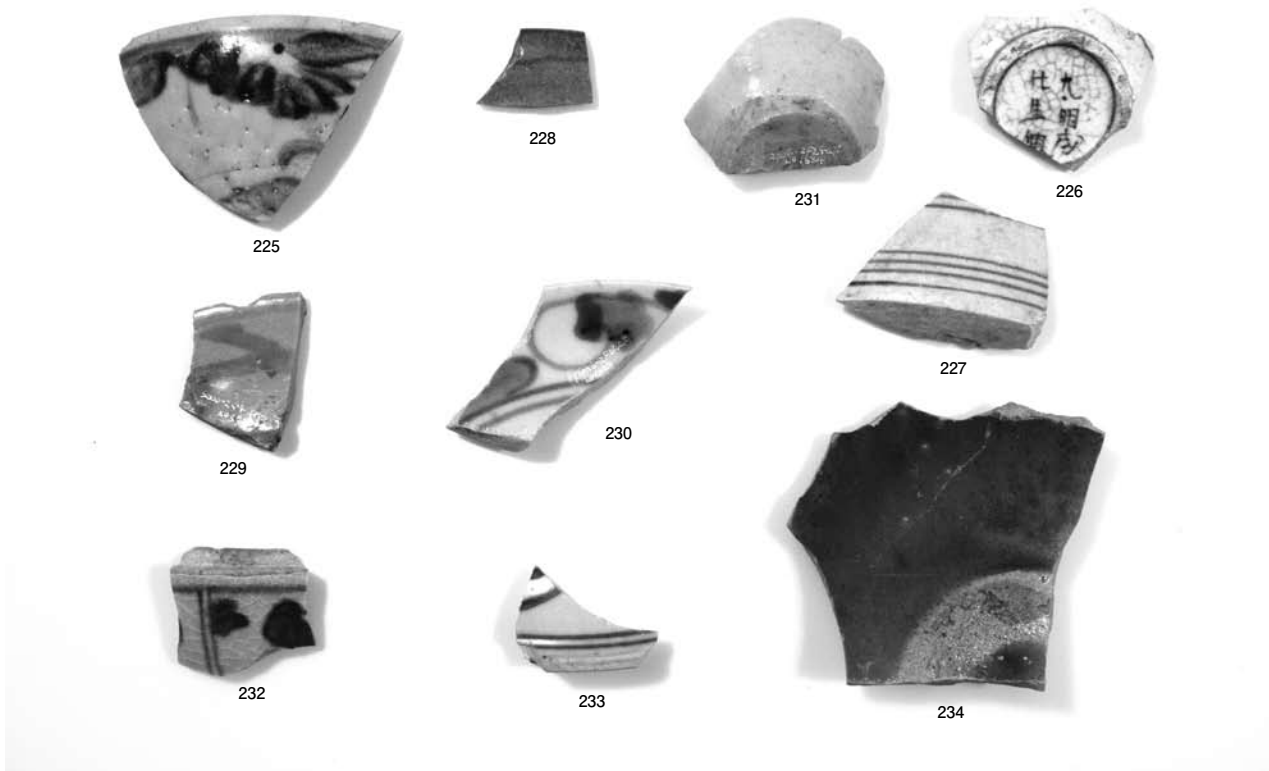


Fig.39 4層出土遺物(5) (S=1/3)





PL.38 4層出土遺物(5)

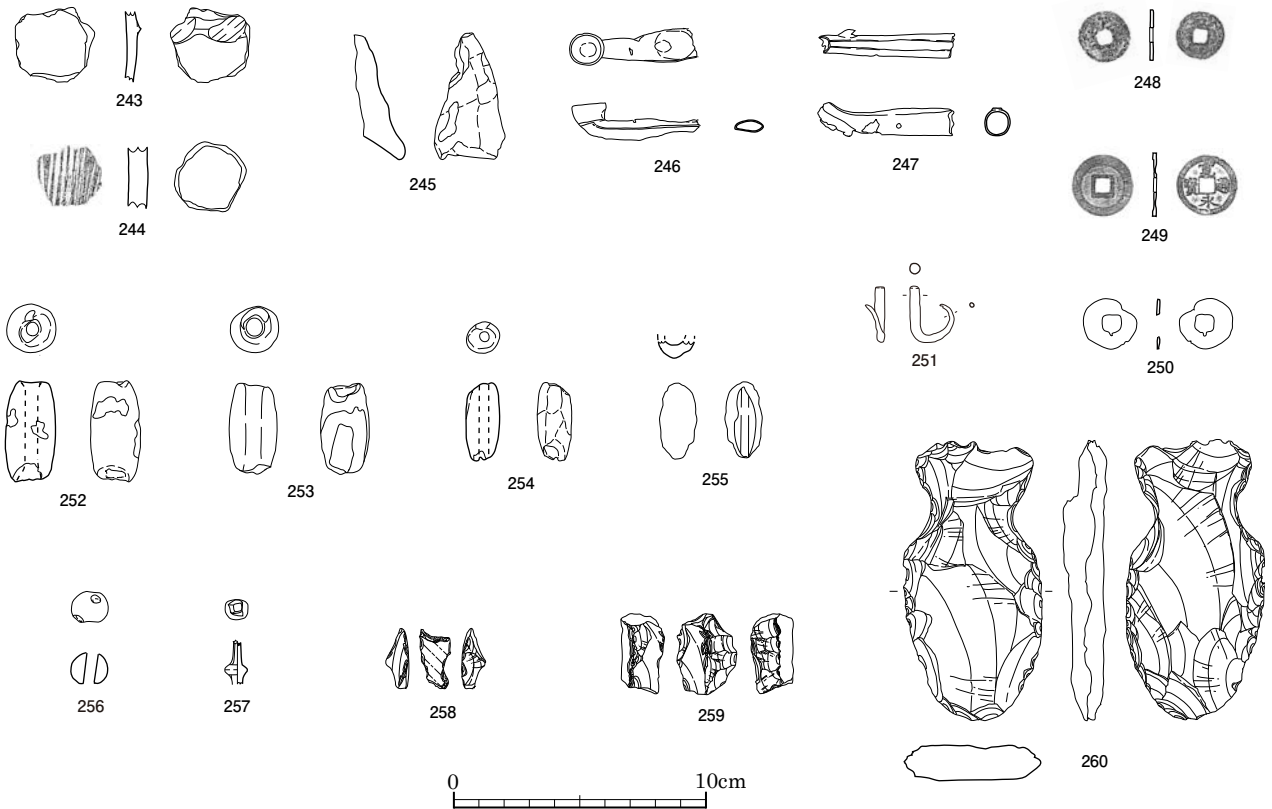


Fig.40 4層出土遺物(6) (S=1/3)

近世の遺物は出土量もバリエーションも多い。188は清朝徳化窯白磁である。189は近世白薩摩碗である。190～192は焙烙である。193～196は加治木・始良系陶器で、193が碗、194が香炉、195・196が皿である。197～215・217～224は薩摩焼苗代川陶器で、197～200は甕、201～207は播鉢、208～216は鉢、217～219・222～224は土瓶、220・221は山茶家である。そのほとんどが18～19世紀のものであるが、197・203・208のように17世紀までさかのぼる資料もある。187・225・227は肥前系磁器碗、228～230は同皿、232は合子、233は蓋である。234は肥前内野山系陶器碗で17世紀後半～18世紀前半の資料である。240は時期不明陶器の蠟燭立である。

243・244は苗代川陶器を用いた円盤状加工品であり、前者が甕を、後者が播鉢をそれぞれ転用している。245は土製品で土人形と考えられる。246・247は煙管であり、246は火皿接合部に補強帯が巡ることから17世紀後半ごろのものと考えられる。247は煙草盆などに雁首を打ち付ける際に曲がらないよう脂返し部に沿って補強されている。248～250は古銭で、判読できるのは寛永通宝である。251は釣針ではないかと考える。252～255は土錘である。256は黄色透明のガラス丸玉、257は青色透明のガラス製品であるが用途不明である。258・259は玉髓製の火打石で、角部が潰れている。260は下位の5層起源の打製石斧であろう。頁岩製である。

#### 5層出土遺物 (Fig.41・42・45, PL.40・41)

5層は4層(近世)に削平されており、さほど出土量はなかった。出土遺物のほとんどが弥生～古墳時代の土器・須恵器・石器類である。近世陶器が一部に混入しているが、これらは小破片のみで、上層から削平時に混入したものと捉えられる。

縄文時代晩期土器の鉢・浅鉢・深鉢として261～264が得られているが、量的に少ない。265は縄文時代晩期末～弥生時代初頭の刻目突帯文土器であるが、太めの刻目突帯を口唇部よりやや下がった部分に貼り付けている。表裏面には擦過痕が目立つが、裏面には横位のミガキが一部にみられる。266は弥生時代中



243



244



245



260



252



253



258



254



255



259



246



248



257



247



249



251



250



256

PL.39 4層出土遺物(6)

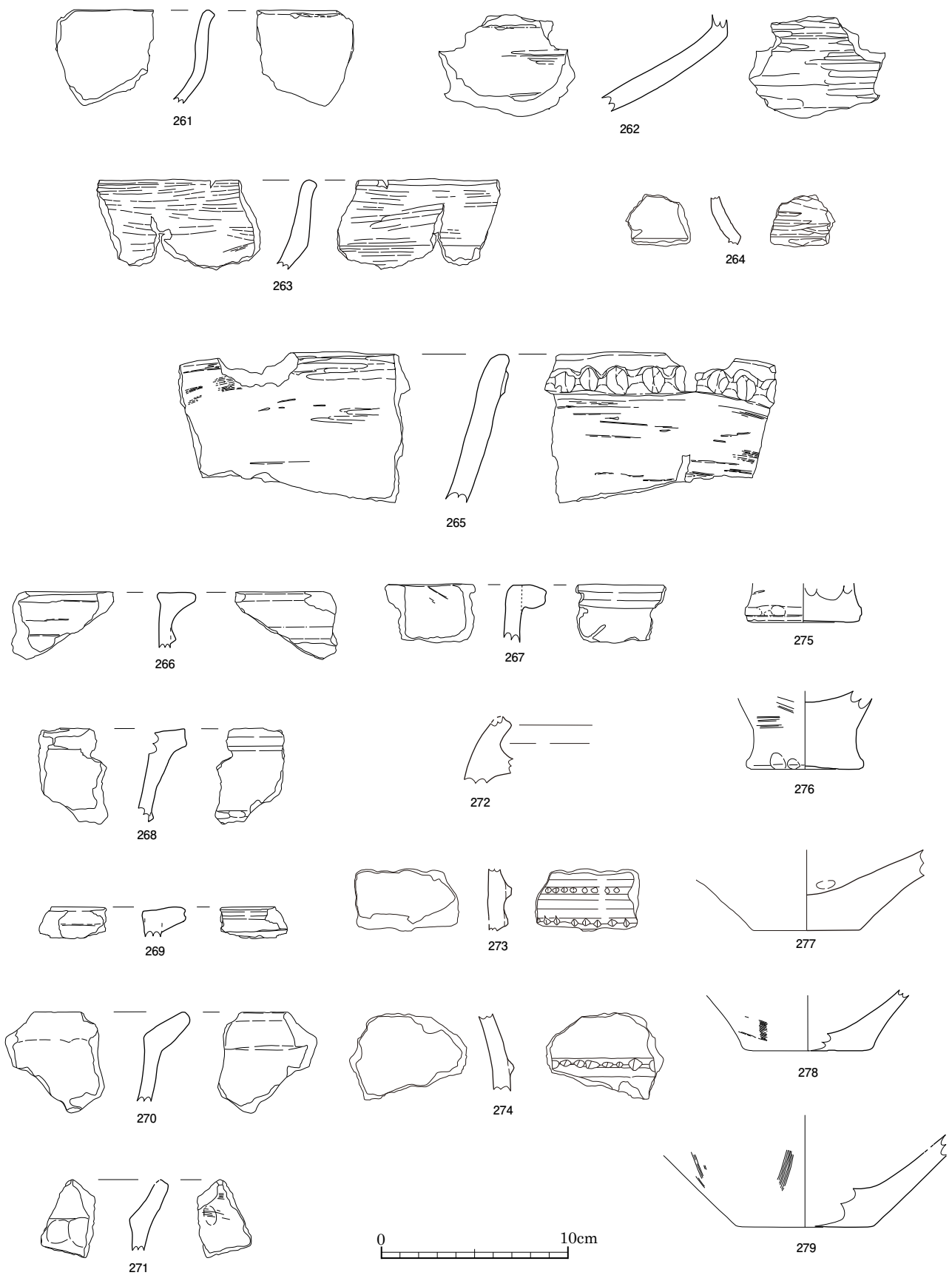
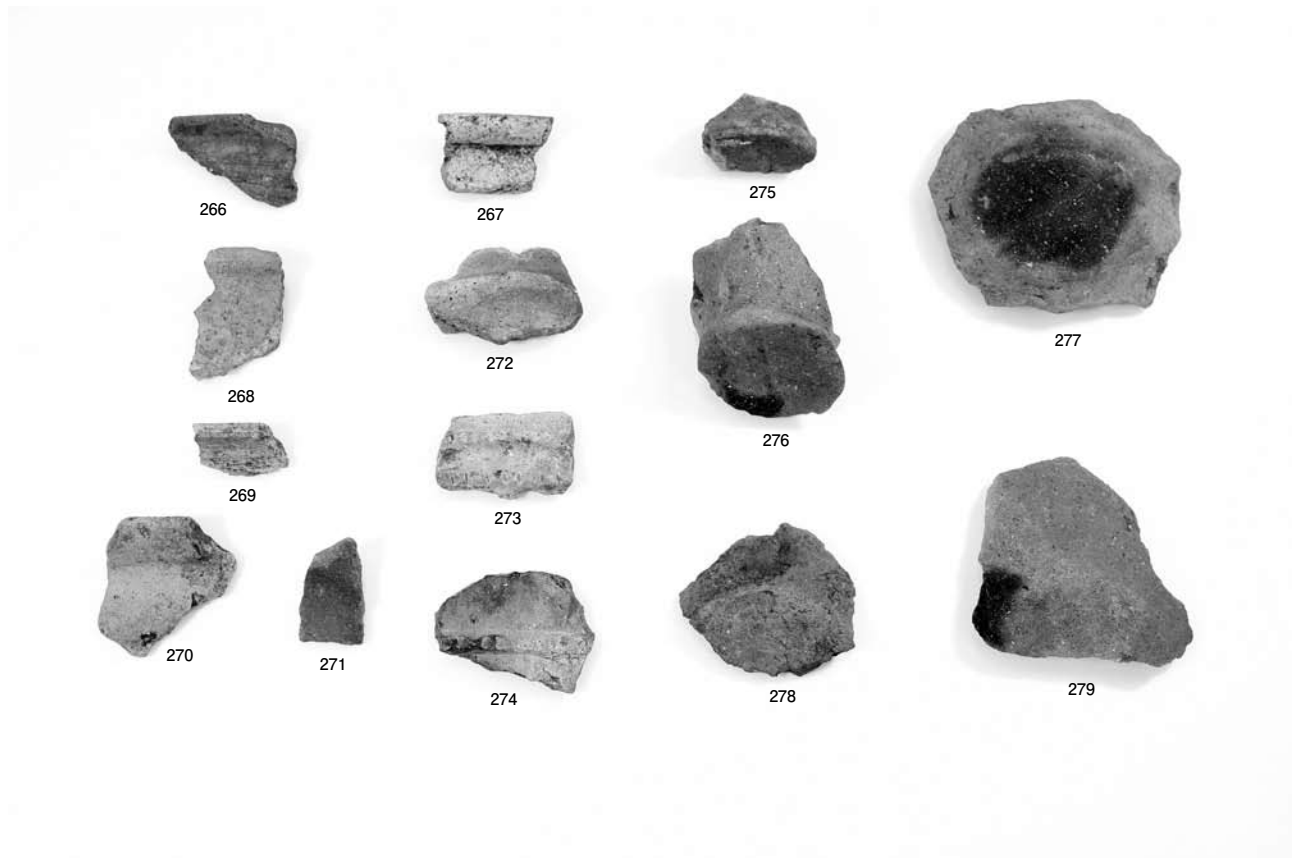


Fig.41 5層出土遺物(1)(S=1/3)



PL.40 5層出土遺物(1)

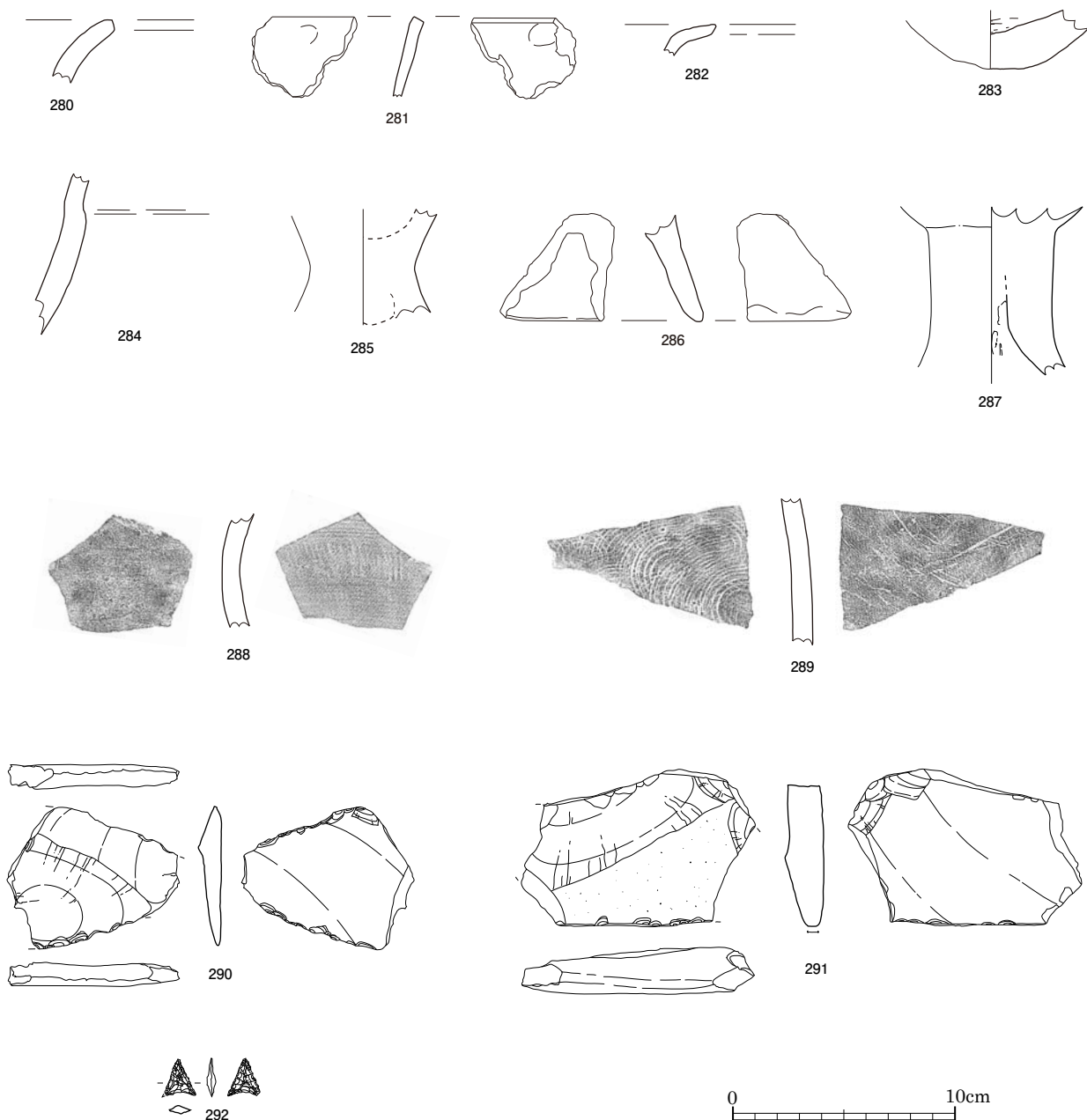
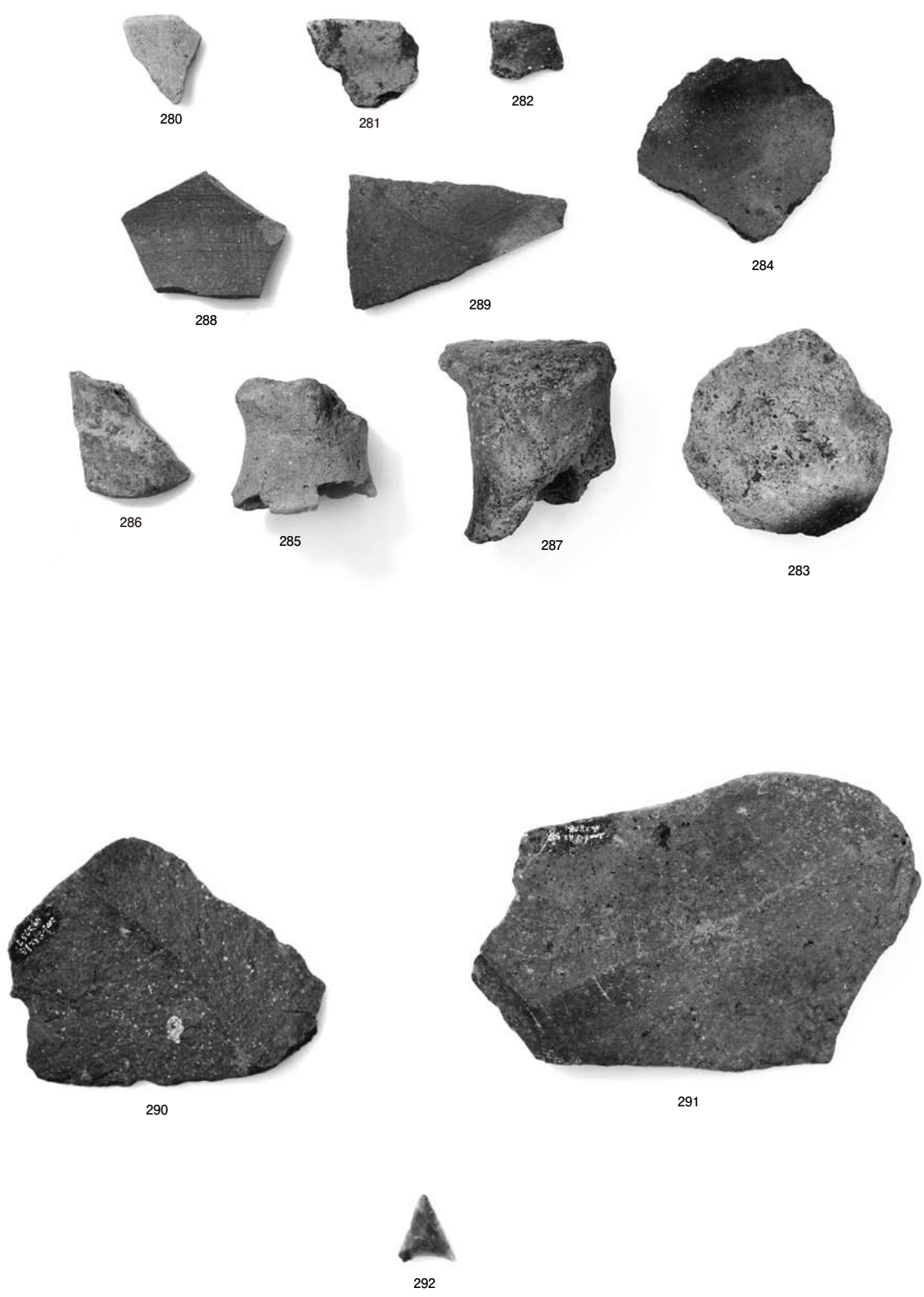


Fig.42 5層出土遺物(2) (S=1/3)

期前半（古）の incoming I 式甕, 267は中期前半（新）の incoming II 式甕, 168は中期後半（古）の山ノ口 I 式甕, 269・270は中期後半（新）の山ノ口 II 式甕, 271は弥生時代後期の甕と考えられる。272は弥生時代中期後半の壺, 273は二条刻目突帯を持つ壺, 274は中津野式の壺と考えられる。275・276は弥生時代中期の甕の中実脚台, 277～279は同時期の壺底部と考えられる。280～287は古墳時代成川式土器とその他の土器を掲載した。283は壺の底部であり, 284は古墳時代前期の東原式甕の肩部ではないかと考えられる。285・286は甕の脚台, 287は高坏の脚部である。280～282については, 判然としない土器である。288・289は須恵器である。290・291は安山岩製の剥片石器, 292はチャート製の打製石鎌である。





PL.41 5層出土遺物(2)

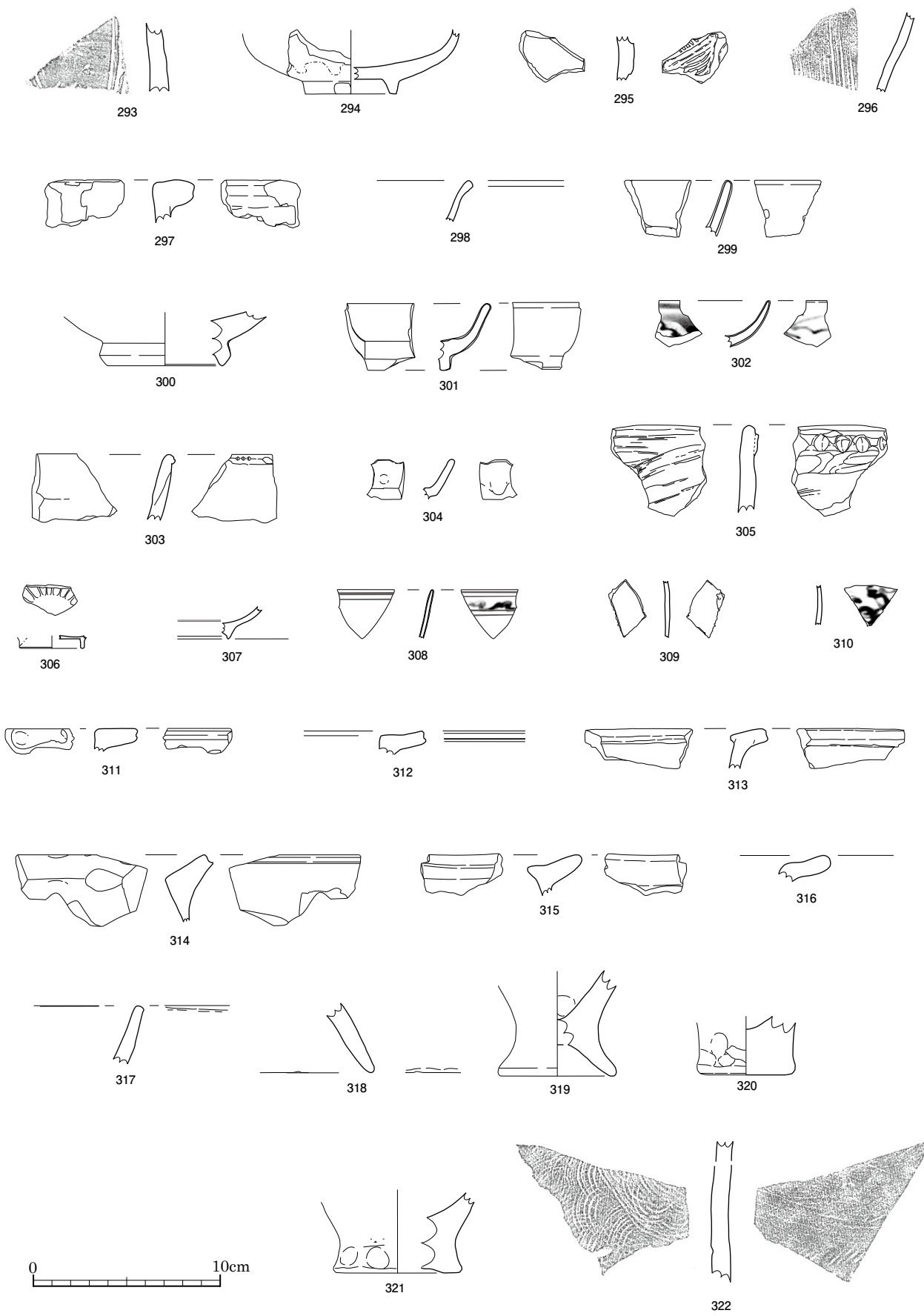
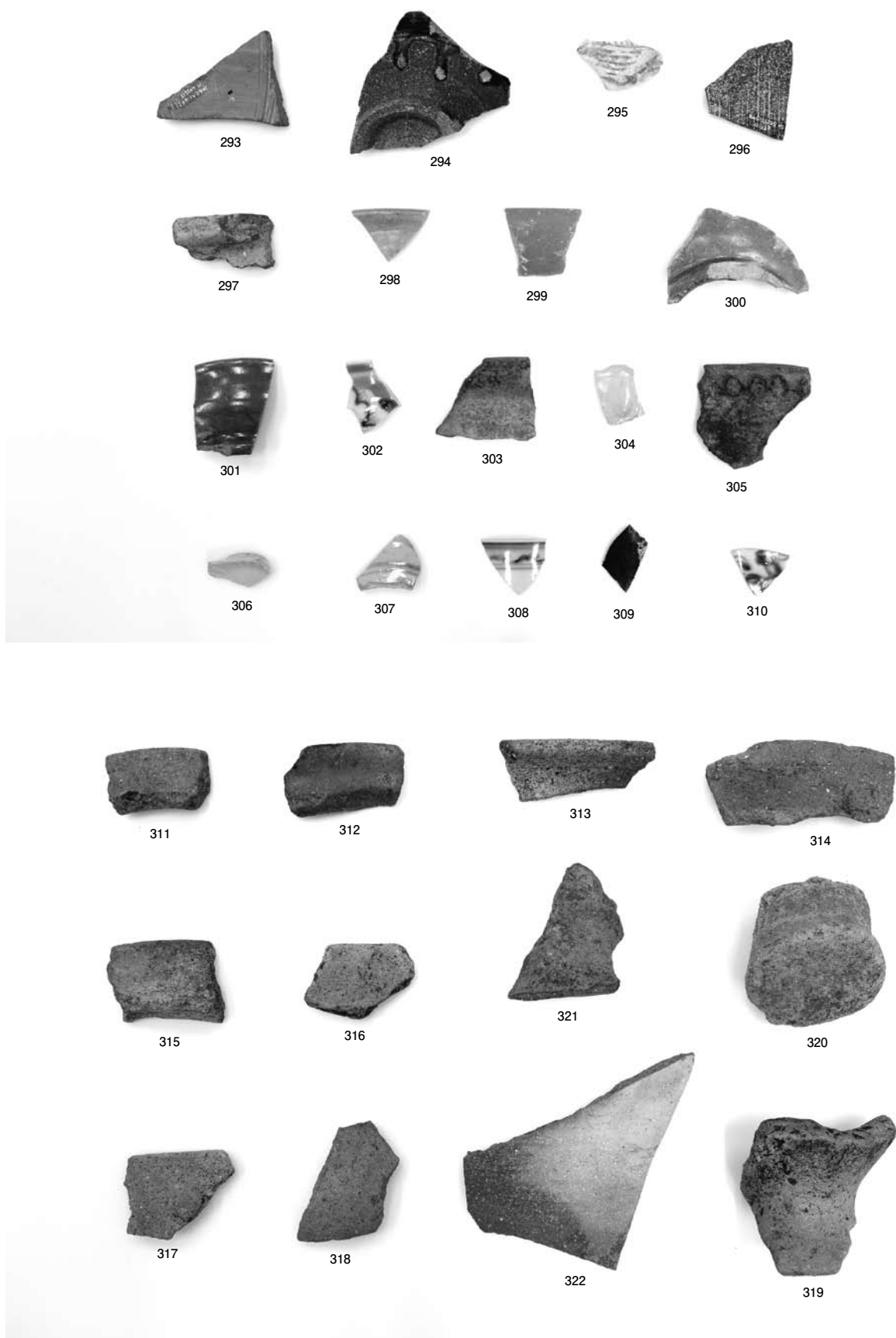


Fig.43 遺構出土遺物(1) (S=1/3)



PL.42 遺構出土遺物(1)

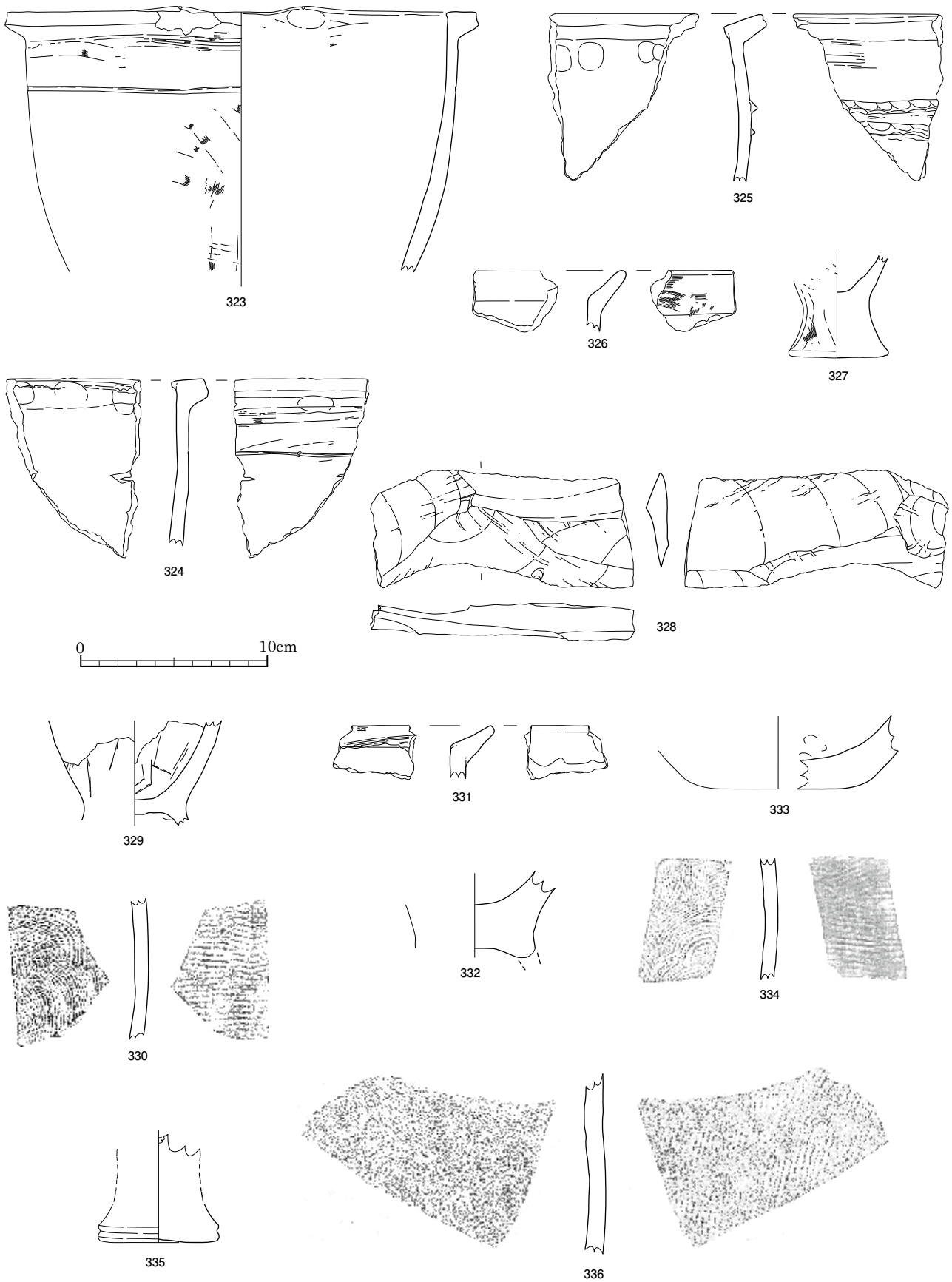
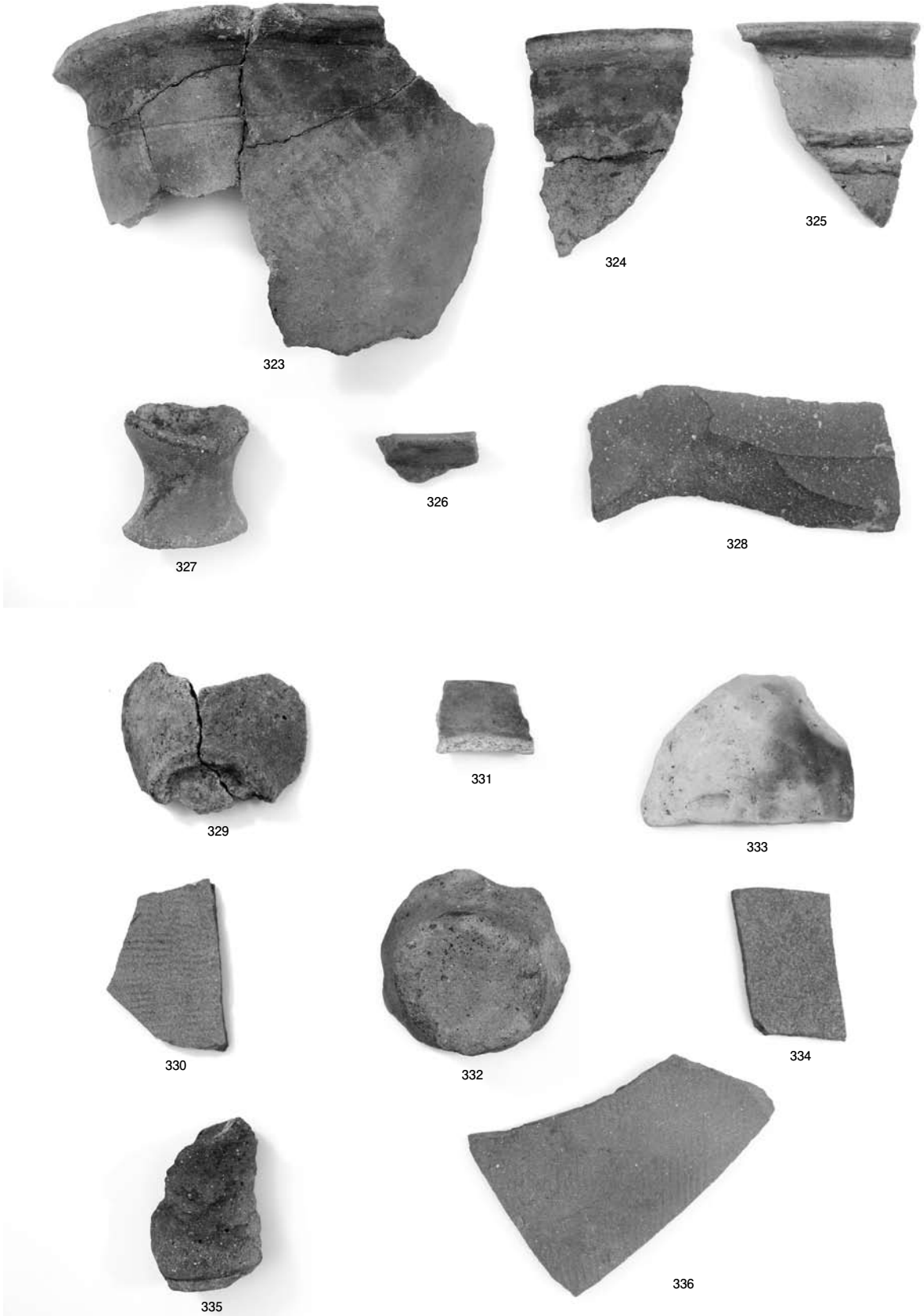


Fig.44 遺構出土遺物(2)(S=1/3)



PL.43 遺構出土遺物(2)

Tab.5 遺物観察

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
14	表採	弥生土器	甕	口	外：にぶい黄橙 内：肉：明黄褐	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半：新 胎土：黒雲母(多)
15	攪乱	須恵器		底	外・内：肉：灰	底径(3.7cm)
16	地区・層位不明	白磁(沖繩Ⅲ期?)	碗?	高台	釉：灰白 素地：灰白	高台内まで施釉 底径4.5cm 13c後半～14c中
17	表採	陶器(苗代川)	播鉢	口	外・内：黒褐 素地：にぶい橙・黒	口縁部上面釉剥ぎ 18c
18	攪乱	陶器(苗代川)	鉢	口	外：オリーブ黒 内：暗オリーブ褐 断：赤褐	口縁部上面釉剥ぎ 19c以降
19	表採	陶器(苗代川)	土瓶	注口	外・内：オリーブ褐 素地：にぶい橙	18c後半以降
20	3区・攪乱	陶器(苗代川)	鉢	口	外：黒褐 内：オリーブ黒 素地：灰	18c～19c
21	攪乱	陶器(琉球)	鉢	口	外：にぶい橙 内：褐灰 断：にぶい赤褐	焼き締め陶器
22	3区・攪乱	磁器(肥前系)	皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	見込：ツクシ等 高台：圏線 口径(11.3cm) 底径(6.2cm) 器高2.7cm
23	攪乱	磁器(肥前?)	仏飯器	口～底	釉：透明 素地：白	口径(5.5cm) 底径4cm 脚台：無釉 器高4.5cm
24	攪乱	磁器(関西系)		口	釉：浅黄 素地：灰白	受部：無釉
25	攪乱	クロム青磁	井碗	口～底	釉：灰白 素地：灰白 文様：暗褐・(緑)	外：笹 口径(15cm) 底径(5.8cm) 器高6.4cm 近現代
26	攪乱	磁器	井碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：緑灰	口径(13.8cm) 底径(6.4cm) 器高6.2cm 近現代
27	表採	磁器	茶碗	口～胴	釉：透明 素地：白	外：「生協」 口径(8.6cm) 美濃窯業(株) 1965年以降
28	攪乱	磁器	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：(緑)	外：「農学部」 口径(7.8cm) 底径(4cm) 器高5.4cm 1949～1969年
29	攪乱	磁器	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	口径(6.6cm) 近現代
30	攪乱	磁器	碗	口	釉：明緑灰 素地：灰白 文様：コバルトブルー	近現代
31	3区・攪乱	磁器	碗?	底	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	見込：ススキ 高台：圏線 高台外底：「福」 底径4.4cm 近現代
32	攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白	口径(18.8cm) 底径(11.4cm) 器高2cm 「生協」? 美濃窯業(株)?
33	表採	磁器	皿?	胴	釉：透明(細かい貫入あり) 素地：白 文様：(緑)	見込：「N.K.PORCELAIN」 日本硬質陶器(株) 大正後半～昭和初期
34	攪乱	磁器	火鉢	口	釉：透明 素地：(白) 文様：コバルトブルー	外：草花文・圏線 口径(14.8cm) 近現代
35	攪乱	磁器	胴		釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	外：草花文・圏線 近現代
36	攪乱	磁器	底		釉：透明 素地：白	外底：無釉 底径(11.4cm)
37	表採	ガラス	栓	完形	緑透明	
38	表採	土製品	土人形?		外：淡黄	
39	攪乱	金属製品	金具	完形		青錆
40	攪乱	銭	寛永通宝	完形		径：2.6cm 孔径：0.6cm 重：3g
41	攪乱	銭	寛永通宝	完形		径：2.4cm 孔径：0.6cm 重：1.7g
42	攪乱	土製品	泥メンコ	完形	外：にぶい橙 内：橙	径：1.8cm 厚：0.5cm 重：1.9g
43	攪乱	土製品	泥メンコ	完形	外・内：黄褐	径：1.7cm 厚：0.9cm 重：2.9g
44	攪乱	土製品	泥メンコ	完形	外：褐 内：にぶい黄褐	径：1.7cm 厚：0.5cm 重：1.5g
45	表採	瓦	平瓦		外・内：灰 肉：にぶい黄橙	外：「筑紫・大津製」
46	表採	瓦	平瓦		外・内：黒 肉：灰白	外：「筑後・小宮製」
47	1区バルト4・攪乱	瓦	平瓦		外・内：灰 肉：浅黄	外：「柳川・武藤製」
48	(連大地点)	瓦	平瓦		外・内：灰 肉：灰白	外：瓢箪内に「河野製造」 内：櫛目
49	A2・2	須恵器		胴	内：灰 外：暗灰黄 肉：灰白	叩き：平行 当具：平行
50	1区・2	白磁(大宰府Ⅷ類)	碗	口	外・内：灰白 素地：灰白	端反 12c中～後半
51	D7・2	青花	碗	高台	釉：明緑灰 素地：(白) 文様：(青)	外：草花文 高台内：字款 16世紀後半～17世紀前半
52	G7・2	陶器(苗代川)	土瓶・蓋	口	釉外：黒 内：灰黄褐 素地：黄灰	口径5.5cm 最大径：7.8cm 18c後半以降
53	1区・2	陶器(苗代川)	土瓶	口	釉外：暗オリーブ褐 内：褐灰 素地：灰白	18c後半以降
54	1区・2	陶器(苗代川)	土瓶	口	釉外：黒褐 内：灰 素地：灰黄	18c後半以降
55	A2・2	陶器(苗代川)	山茶家	口	外：オリーブ黒 内：灰白・暗褐 素地：橙	18c後半以降
56	1区・2	陶器(苗代川)	土瓶	底	内：暗褐 外：灰黄褐 素地：にぶい黄橙	18c後半以降
57	D1・2	陶器(苗代川)	鉢	口	外：灰白 内：褐灰 素地：明褐灰	18c～19c
58	F1・2	陶器(苗代川)	鉢	口	外・内：黄灰 素地：にぶい赤褐	18c～19c
59	1区・2	陶器(苗代川)	鉢	口	外・内：灰白 素地：にぶい赤褐	18c～19c
60	E3・2	陶器(苗代川)	播鉢	口	外：暗灰黄 内：黄灰 素地：にぶい橙	細いすり目 18c後半～19c
61	E2・2	陶器(苗代川)	播鉢	底	外：灰 内：灰 素地：橙	18c～19c
62	1区・2	陶器(苗代川)	播鉢	底	外：褐灰 内：褐灰 素地：にぶい赤褐	18c～19c
63	F1・2	陶器(加治木・始良系)?	土瓶	蓋	釉外：黒褐 内：黄灰 素地：灰褐	19c以降
64	C6・2	陶器(加治木・始良系)	杯	底	釉：透明 素地：にぶい黄橙 素地：灰褐	
65	E3・2	陶器(加治木・始良系)	燈明皿?	口～底	釉・内：オリーブ褐 外：橙・灰黄褐 素地：橙・黄灰	口径(11.6cm) 底径(4.7cm) 器高2.45cm 18c以降
66	E7・2	陶器	蓋?	口	外：にぶい橙 内：灰 素地：にぶい橙・灰	
67	F4・2	陶器	底		釉：灰白 素地：灰白	碁笥底 スス付着



番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
68	E3・2	陶器		底	外：褐灰 内：黒褐 素地：灰	
69	F4・2	陶器（龍門司）	鉢	口	釉外：灰白・エメラルドグリーン 釉内：灰白 素地：灰黄褐	19c以降
70	D3・2	陶器（龍門司?）	仏花器	胴	外：浅黄 内：やや黄色がかった 白色	象耳花瓶 近代
71	A3・2	陶器（琉球）	鬼の腕	胴	外：褐灰 内：灰褐 素地：灰褐	焼き締め陶器 近世
72	A1・2	陶器（琉球）	花鉢	胴	外・内・素地：にぶい赤褐	外：草花貼付 焼き締め陶器
73	F5・2	薩摩磁器	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	外：磨 内：二重圏線 18c末～20c
74	1区・2	薩摩磁器	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	内：圏線 口径（7.4cm） 18c末～19c
75	F5・2	磁器（肥前）	皿	口	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	外：草花 内：襷 19c
76	D3・2	磁器（肥前）	皿	口	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	内外：草花
77	C2・2	磁器	紅皿	完形	釉：透明 素地：灰白	口径4.4cm 底径1cm 器高1.5cm 19c
78	F5・2	磁器（波佐見）		胴	内：灰黄 釉外：灰白 文様：コバルトブルー	18c
79	E6・2	磁器（肥前系）		口	釉：透明 素地：淡青 文様：コバルトブルー	
80	1区・2	磁器（肥前系）	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	外：圏線 内：雷
81	E5・2	磁器（肥前系）	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	外：山水? 内：二重圏線
82	B2・2一括	陶器（内野山）		口	釉：灰オリーブ 素地：灰白	
83	C6・2	磁器（瀬戸・美濃?）	碗	口	釉：明緑灰 素地：灰白 文様：コバルトブルー	外：菊花 19c以降
84	C2・2	磁器（瀬戸・美濃?）		口	釉：灰白 素地：灰白 文様：コバルトブルー	19c以降
85	F2・2	磁器近現代	碗	口	釉：灰白 素地：灰白 文様：(青)	
86	F4・2	磁器近現代	碗	口	釉：灰白 素地：灰白 文様：コバルトブルー	
87	D1・2	磁器近現代		口	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	
88	E1・2	磁器近現代	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	内：雷文
89	E5・2	磁器近現代	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：コバルトブルー	
90	F5・2	土製品	焙烙	把手	外：灰白 内：灰黄褐 肉：黄灰	
91	F5・2	土製品	焙烙	把手	外：浅黄 内：にぶい黄褐・褐灰	
92	E2・2	陶器（苗代川）	円盤状加工	胴	内：灰褐 外：灰白 素地：明赤褐	18c～19c
93	F4・2	陶器	円盤状加工	胴	外：灰白 内：赤橙	
94	E4・2	土製品	土人形?		灰白	
95	F3・2	土製品	泥メンコ		橙	径：1.65～1.9cm 厚：0.45cm 重：1.4g
96	1区・2	土製品	泥メンコ		橙	径：1.55～1.65cm 厚：0.55cm 重：1.3g
97	2	土製品	泥メンコ		橙	径：1.7～2.1cm 厚：0.9cm 重：2.2g
98	1区・2	土製品	泥メンコ	完形	橙	径：1.75cm 厚：6mm 重2.1g
99	1区・2	土製品	泥メンコ		橙	径：1.5～1.9cm 厚：0.55cm 重さ：2g
100	1区・2	銭	寛永通宝	完形		径：2.4cm 孔径：0.6cm 重：2.5g
101	1区・2	中国銭	乾隆通宝			孔径：0.5cm 1736年初鑄
102	1区・2	ライフル銃弾	スナイドル弾	完形		長：1.65cm 径：1.5cm 36.1g
103	F4・2	ライフル銃弾	スナイドル弾	完形		長：1.65cm 径：1.5cm 34.5g
104	F0・2	青銅製品	鈴			
105	1区・2	滑石製品	錘?		灰・にぶい褐	切りこみが二条巡る 長：5.8cm 孔径：1.4cm
106	F7・2	石製品	硯?		褐灰	
107	D7・3a	弥生土器	甕	口	外：にぶい黄橙 内：明黄褐 内：黒褐	弥生中期前半・古
108	D5・3b	陶器（加治木・始良系）		口	釉：赤黄褐～黄褐 素地：灰褐	18～19c
109	D6・3a	陶器（龍門司）	碗	口	釉：灰白 素地：にぶい橙	18c後半～近代
110	B5・3a	陶器（苗代川）	蓋	口	釉：赤褐 素地：にぶい黄褐	径（8.8cm） 口径（7cm） 18c後半以降
111	B6・3a	陶器（苗代川）	播鉢	底	釉：茶褐 素地：淡赤橙	18～19c
112	B6・3a	陶器		胴	外：灰白 素地：黄灰	外：白化粧土・鉄絵
113	C5・3b	陶器		口	釉：灰白 素地：灰褐 文様：黒褐	
114	G1・3b	陶器	?	底	釉：褐 素地：灰黄	内に施釉 底径（11.8cm）
115	E1・3a	磁器（肥前系）	碗	口	素地：透明	内：襷 口径（7.0cm）
116	E2・3a	磁器（波佐見）		底	素地：透明	高台：圏線 内面：圏線 18c
117	H5・3b	磁器（薩摩）	皿	口	釉：透明	外：山水? 19c
118	F4・3	磁器	蓋	完形	釉：透明 素地：白 文様：(茶)	外：草花 径：6.5cm 近現代
119	A2・3a	磁器	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：(緑)	外：グリーン2線「生協」? 美濃窯業（株）?
120	F4・3a	石器				頁岩 厚さ：約4.5mm 重：7.8g
121	F4・4c	縄文土器	深鉢	口	外：赤橙と赤の中間 内：橙 器内：灰白	刻目突帯文 縄文晩期末～弥生初頭
122	H1・4	縄文土器	深鉢	口	外：にぶい褐 内：にぶい褐 器内：褐灰	刻目突帯文 縄文晩期末～弥生初頭
123	A3・4d	縄文土器	深鉢	底	外：黄褐 内：褐 器内：明褐・黒褐	縄文晩期? 底径6.4cm

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
124	C1・4d	弥生土器	甕	口	外：浅黄橙・にぶい黄橙 内：にぶい黄橙 器肉：にぶい黄橙	入来Ⅱ式 弥生中期前半・新
125	F7・4d	弥生土器	甕	口	外：にぶい橙 内：橙 器肉：浅黄橙	入来Ⅱ式 弥生中期前半・新
126	A2・4d	弥生土器	甕	口	外・内：にぶい黄褐	入来Ⅱ式 弥生中期前半・新
127	B0・4d	弥生土器	甕	口	外：灰黄・オリーブ黒 内：にぶい黄橙 器肉：灰白	入来Ⅱ式 弥生中期前半・新
128	C2・4d	弥生土器	甕	口	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙 器肉：灰 口唇：灰白	山ノ口Ⅰ式 弥生中期後半・古
129	C1・4c	弥生土器	甕	口	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙 器肉：黄灰	山ノ口Ⅰ式 弥生中期後半・古
130	A2・4d	弥生土器	甕	口	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙 器肉：灰	山ノ口Ⅰ式 弥生中期後半・古
131	B0・4d	弥生土器	甕	口	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙 器肉：褐灰	山ノ口Ⅰ式 弥生中期後半・古
132	A2・4c	弥生土器	甕	口	外：にぶい黄橙 内：浅黄	山ノ口Ⅰ式 弥生中期後半・古
133	B2・4c	弥生土器	甕	口	外：橙 内：にぶい橙 器肉：浅黄橙	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半・新
134	B5・4c	弥生土器	甕	口	外・内：にぶい橙 器肉：浅黄橙	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半・新
135	A5・4c	弥生土器	甕	口	外：明黄褐 内：にぶい黄橙 器肉：浅黄橙	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半・新
136	F7・4d	弥生土器	甕	口	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	松木蘭式 弥生後期
137	B0・4d	弥生土器	甕	脚	外・内・器肉：にぶい橙 底面：橙	縦方向のハケメ 底径(5.4cm) 残高：3.9cm 弥生中期
138	G2・4	弥生土器	甕	脚	外：にぶい黄褐・明赤褐 内：にぶい黄褐	縦方向のミガキ 底径(6.4cm) 弥生中期
139	B6・4c	弥生土器	壺	底	外・底面：にぶい橙 内：灰白 器肉：灰白	底径(7.0cm) 残高：3.4cm
140	A3・4c	土器	甕	口	内外：橙	
141	B4・4c	成川式	壺	口	外：黄褐 内：褐 器肉：黄褐	角閃石(多)
142	B7・4c	成川式	小型甕	脚	内：にぶい黄橙 外：浅黄・橙 器肉：黄灰	
143	C1・4d	成川式	甕	脚	外：橙 内：にぶい橙 器肉：橙	底径(5.2cm)
144	G1・4	成川式	甕	脚	外：橙に近い 内：明黄褐に近い	
145	C5・4c	成川式	壺	底	内：にぶい橙 外：にぶい黄橙 器肉：黒褐	中津野式 弥生終末～古墳初頭 底径1.7cm
146	C7・4c	成川式	埴	底	外：にぶい黄橙 内：黄褐 肉：灰白	
147	C6・4b	須恵器?			釉：(白) 器肉：灰	器種・部位ともに不明
148	B2・4c	須恵器	坏	口	内外：灰	
149	B3・4c	須恵器	壺	肩	外：灰 内：灰 器肉：灰	
150	C2・4c	須恵器	胴		外：灰 器肉：灰黄	叩き：格子 当具：同心円
151	C7・4d	陶器(中国?)	胴		釉：灰白 素地：灰	浙江省
152	B6・4d	須恵器	胴		外：灰白 内：にぶい黄橙	叩き：平行 当具：平行
153	A2・4c	須恵器	胴		外・内：灰 器肉：灰	叩き：平行 当具：同心円
154	D8・4a	須恵器	胴		釉：オリーブ黒 器肉：灰	叩き：平行 当具：同心円
155	E7・4d	須恵器	胴		外：灰 内：灰白 器肉：灰	叩き：平行 当具：同心円
156	D4・4c	須恵器	胴		外：灰 内：灰 器肉：灰	叩き：平行 当具：同心円
157	G4・4	須恵器	椀	高台	外：黄灰 器肉：灰白	8c後半
158	G5・4b	瓦器	椀	高台	内：灰黄 外：灰白	内黒 畿内模倣 平安後期
159	A3・4c	土師器	甕	口	外：にぶい赤褐 内：にぶい黄褐 器肉：黄灰・にぶい黄橙	
160	F1・4c	土師器	坏	底	内外：灰白	糸切底
161	E2・4c	土師器	坏	口～底	内外：にぶい橙	糸切底 口径(11.5cm) 底径(8.2cm) 器高2cm
162	H3/G1・4	土製品	坏	口	内外：灰白	口径(12.2cm) 外：スス付着
163	F3・4b	土師器	坏	底部	内外：浅黄橙	糸切底 底径(3.9cm) 焼き良好
164	B7・4b	土師器	杯	底	内：灰白・にぶい橙 外：にぶい橙 器肉：にぶい橙	
165	G3・4	土師器	坏	底	内外：灰白	
166	E6・4b	瓦質土器	火鉢	口	内外：灰 肉：灰黄	突帯間にX字スタンプが巡る 中世後期
167	E4・4c	陶器	播鉢	胴	外：にぶい橙 内：灰	中世
168	B5・4c	白磁(大宰府Ⅳ類)	碗	口	釉：灰白 素地：灰白	玉縁口縁 11c後半～12c前半
169	D7・4c	白磁(大宰府Ⅳ-ⅠC類)	碗	高台	釉：灰白 素地：灰白	底径(5.6cm) 11c後半～12c前半
170	F3・4b	白磁(森田D群)	碗	高台	釉：(白) 素地：(白)	底径(3.4cm) 14c中～15c中
171	F1・4a	白磁(大宰府Ⅱ-Ⅰ類)	皿	高台	釉：灰白 素地：(白)	底径(4.4cm) 11c後半～12c前半
172	C6・4d	青磁(同安窯系・大宰府Ⅰ-2B類)	皿	底	釉：浅黄 素地：灰白	櫛描文 底径(5.2cm) 12c中～12c後半
173	E7・4b	青磁(竜泉窯系Ⅱ-B類)	碗	口	釉：明緑灰 素地：(白)	鎚連弁文 13c前半
174	H2・4	青磁(竜泉窯系・沖繩Ⅵ類)	碗	口	釉：灰 素地：灰白	線刻蓮弁文 15c後半～16c前半
175	F2・4c	青磁(竜泉窯系Ⅱ-B類)	碗	口	釉：明緑灰 素地：(白)	鎚連弁文 13c前半
176	G3・4	青磁(竜泉窯系・沖繩ⅣかⅤ類)	碗	口	釉：オリーブ灰 素地：灰白	無文 14c中～15c中
177	H7?・4	青磁(竜泉窯系・沖繩ⅣかⅤ類)	碗	口	釉：灰オリーブ 素地：(白)	無文 14c中～15c中
178	D6・4b	青磁(竜泉窯系Ⅳ-0類)	碗	口	釉：灰オリーブ 素地：灰	14c中～15c初
179	F5・4b	青磁(竜泉窯系Ⅳ類)	碗	高台	釉：灰オリーブ 素地：灰	高台内：露胎 底径(5.4cm) 14中～15c初
180	B6・4a	青磁(竜泉窯系Ⅴ-3類)	皿	口	釉：オリーブ灰 素地：灰	腰折・稜花 14c中～16c前半
181	G4・4	青磁(竜泉窯系・沖繩Ⅳ～Ⅶ類)	皿	口	釉：オリーブ灰 素地：灰白	稜花 内：雲水文 14c中～16c前半
182	G5・4	青花(小野C群Ⅲ類)	碗	高台	釉：青緑灰 素地(白) 文様：(青)	見込：二重圏線・花文? 15c後半～16c中葉

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
183	E6・4a	青花 (小野C群Ⅰ類)	皿	底	釉:灰白 素地:灰白 文様:(青)	基筒底 見込:二重圏線・草文 畳付:露胎 底径(3.4cm) 15c後半~16c中葉
184	F3・4b	青花 (小野E群Ⅱ類)	皿	高台	釉:透明 素地:(白)	見込:人物 高台内:二重圏線 高台外:二重圏線 底径(7.9cm) 15c末~16c初
185	B1・4b	青花	小碗	高台	外釉:暗褐 内釉:(白) 素地:(白)	見込:草花文・二重圏線 高台内:圏線・字款 底径(3.6cm) 明末~清初
186	C3・4b	青花	直口碗	口	釉:(白) 素地:(白)	口縁内外:二重圏線 外:草花文? 明末~清初
187	G4・4	肥前系	碗	底	釉:(青白) 素地:(白) 文様:(青)	見込:圏線・魚文? 高台外:二重圏線
188	A7・4a	白磁	小碗	口~胴	釉:(白) 素地:(白)	清朝磁器(徳化窯) 口径(7cm)
189	F3・4a	陶器(白薩摩)	碗	高台	釉:灰白 素地:灰白	底径(4cm) 近世
190	B7・4b	土器	焙烙	口	外:にぶい黄褐 内:橙 器肉:灰白	外:スス
191	F1・4a	土器	焙烙	口	外:にぶい黄褐 内:器肉:灰白	外:スス
192	F7・4a	土器	焙烙	口	外:黒褐 内:器肉:灰白	外:スス
193	E3・4b	陶器(加治木・始良系)	碗	口	釉:黒・暗オリーブ	元立院 18c
194	H4・4b	陶器(加治木・始良系)	香炉	胴~高台	釉:オリーブかかった黒 素地:灰褐	底径(4.8cm) 18~19c
195	E0・4a	陶器(加治木・始良系)	皿	口	釉:灰・暗灰黄 素地:黄灰	口径(10cm) 18~19c
196	C6・4a	陶器(加治木・始良系)	小皿	口~底	釉:灰褐・暗赤褐 素地:にぶい赤褐・黒褐	口径(9cm) 底径(4.1cm) 器高2.1cm 18~19c
197	F3・4b	陶器(苗代川)	甕	口	釉:白くにごりの混じるオリーブ 黒 素地:灰	貝目痕 17c
198	G1・4a	陶器(苗代川)	甕	口	釉:黒褐 素地:灰	17c後半~18c
199	G2・4a	陶器(苗代川)	甕	底	釉:褐灰 素地:にぶい赤褐・灰	18c~19c
200	A1・4b	陶器(苗代川)	甕	底	釉:オリーブ黒に近い 素地:暗赤褐	底径(19.4cm) 18~19c
201	H5・4	陶器(苗代川)	搦鉢	口	釉:オリーブ黒・にぶい赤褐・褐灰 素地:にぶい赤褐	18c
202	B5・4a	陶器(苗代川)	搦鉢	口	釉:オリーブ黒・黒褐 素地:にぶい赤褐	18c~19c
203	B4・4a	陶器(苗代川)	搦鉢	口	釉外:オリーブ黒 釉内:黒 素地:褐灰	17c
204	G4・4	陶器(苗代川)	搦鉢	胴	外:オリーブ黒 内:灰 素地:灰褐	18c
205	F7・4a	陶器(苗代川)	搦鉢	胴	内・外・素地:灰	18c
206	F2・4c	陶器(苗代川)	搦鉢	胴	外・内:褐灰 素地:にぶい赤褐	18~19c
207	C3・4b	陶器(苗代川)	搦鉢	底	釉:オリーブかかった黒褐 素地:褐灰	18~19c
208	E6・4b	陶器(苗代川)	鉢	口	釉:オリーブかかった黒 素地:褐灰	17c
209	C7・4c	陶器(苗代川)	鉢	口	釉:黄灰 素地:褐灰	18~19c
210	F3・4b	陶器(苗代川)	鉢	口	釉:暗褐~暗オリーブ褐 素地:赤褐	18~19c
211	D4・4a	陶器(苗代川)	鉢	口	釉:オリーブ黒 素地:にぶい赤褐・褐灰	18~19c
212	D1・4b	陶器(苗代川)	鉢	口	釉:オリーブ黒に近い 素地:にぶい褐	18c~19c
213	C1・4b	陶器(苗代川)	鉢	口	釉:オリーブ黒	18c~19c
214	D7・4a	陶器(苗代川)	鉢	口	釉:オリーブ黒・灰 素地:にぶい赤褐	18c~19c
215	D5・4b	陶器(苗代川)	鉢	口	釉:オリーブ黒 素地:灰	17c~18c
216	G3・4	陶器(龍門司)	鉢	口	釉:オリーブ褐・青黒・緑灰 素地:黄灰	19c以降
217	G5・4a	陶器(苗代川?)	土瓶	口	釉:黒褐・暗灰黄・黒褐 素地:灰褐	18c後半以降
218	B1・4b	陶器(苗代川?)	土瓶	口	釉:黒褐 素地:灰褐	18c後半以降
219	D4・4a	陶器(苗代川?)	土瓶	口	釉:黒褐 素地:灰	18c後半以降
220	F4・4a	陶器(苗代川)	山茶家	口	釉:暗灰黄・にぶい褐灰 素地:にぶい橙	18c後半以降
221	F5・4b	陶器(苗代川)	山茶家	口	釉:白濁した暗オリーブ褐 素地:灰黄褐	18c後半以降
222	E1・4d	陶器(苗代川)	土瓶	底	内:褐灰 外:灰・灰黄褐 素地:灰白・にぶい赤褐	18c後半以降
223	D7・4b	陶器(苗代川)	土瓶	底	釉:やや黄色がかった灰白 素地:にぶい赤褐	18c後半以降
224	D2・4b	陶器(苗代川?)	土瓶	底	釉:オリーブかかった灰白 素地:赤褐・黄褐	18c後半以降
225	D6・4b	磁器(肥前系)	碗	口	釉:透明	口径(13.6cm)
226	D3・4a	磁器(肥前?)	底	釉:透明 素地:灰白 文様:青灰		
227	F3・4a	磁器(肥前)	碗	胴	釉:透明 素地:白 文様:コバルトブルー	半筒碗 胴径(7.8cm)
228	C4・4a	陶器(肥前)	皿?	口	釉:透明 素地:灰白	17c~18c前半
229	G4・4	磁器(肥前系)	皿	口	釉:透明 素地:灰 文様:緑灰	
230	F2・4c	磁器(肥前系)	皿	口	釉:透明 素地:白 文様:コバルトブルー	
231	F2・4a	磁器(肥前系)	底	釉:透明 素地:白	底径2.7cm	
232	B2・4b	磁器(肥前系)	合子(身)	口	釉:透明 素地:白 文様:コバルトブルー	
233	C1・4b	磁器(肥前)	蓋	口	釉:透明 素地:白 文様:コバルトブルー	
234	E4・4b	陶器(肥前・内野山)	碗	底	釉:オリーブ黄・コバルトブルー 素地:灰白	蛇の目釉剥ぎ 底径(4cm) 17c後半~18c前半
235	G3・4b	青花(外反口)	碗	口	釉:透明 素地:(白)	口縁内外:二重圏線 清朝磁器

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
236	E5・4a	白磁(輪花)	皿	口	釉:透明 素地:(白)	
237	F1・4d	白磁	皿	口	釉:透明 素地:灰白	
238	F7・4一括	磁器	碗	口	釉:透明 素地:白	口径(9.8cm)
239	C3・4b	青磁?	壺?	口	釉:明緑灰 素地:(白)	袋状口縁
240	C6・4b	陶器	蠟燭立	胴	釉:灰白~暗オリーブ 素地:灰黄褐	下部に剥落の痕跡有
241	B5・4a	陶器	碗	口	釉:淡黄 灰白:灰白	口径(8cm)
242	F1・4c	陶器	底	底	釉:褐 素地:灰黄	内:施釉 底径(11.7cm)
243	G5・4	陶器(苗代川)	円盤状加工	胴	釉:褐灰 素地:にぶい橙	甕転用 17c~18c
244	C2・4b	陶器(苗代川)	円盤状加工	胴	釉:黒褐 素地:褐灰	搦鉢転用 18c~19c
245	F5・4b	土製品	土人形		にぶい黄橙~褐灰	最大長:4.9cm 最大幅:2.9cm 鉄分付着
246	F4・4b	金属製品	煙管	雁首		火皿接合部に補強帯あり 火皿径1.4cm 17c後半
247	F4・4b	金属製品	煙管	雁首		脂返し部に沿って補強帯あり
248	A2・4b	銭				孔径:0.6cm
249	E7・4a	銭	寛永通宝	完形		径:2.5cm 孔径:0.6cm 重:1.8g
250	F7・4a	銭	寛永通宝			
251	H3・4	金属製品	釣針?			青銅 径:0.3cm 重:1.25g
252	F7・4b	土製品	土鉢	完形	にぶい黄橙	最大長:4.0cm 最大幅:2.0cm 孔径:0.5cm 重:16.6g
253	E3・4c	土製品	土鉢		にぶい黄橙・やや茶がかかった橙	残存長:3.6cm 最大幅:1.95cm 孔径:6.5cm
254	C6・4b	土製品	土鉢	完形	橙・淡黄に近い	最大長:3.1cm 最大幅:1.35cm 孔径:0.4cm 重:4.9g
255	G3・4	土製品	土鉢		橙・オリーブ黒・灰黄褐・にぶい橙	
256	F2・4a	ガラス製品	丸玉	完形	黄透明	大きさ:1.3×1.5cm 孔径0.5cm 重:4.6g
257	G5・4	ガラス製品			青透明	
258	A7・4c	石器	火打石			玉髓 重:2.3g
259	F6・4b	石器	火打石			玉髓 重:13.5g
260	C3・4c	石器	打製石斧	完形		頁岩 重:130g
261	A6・5	縄文土器	鉢?	口	外:にぶい褐 内:灰黄褐 器肉:灰黄褐	縄文晩期
262	C4・5	縄文土器	浅鉢?	胴	外:浅黄 内:にぶい黄橙 器肉:暗灰黄	縄文晩期
263	A6/B6・5	縄文土器	深鉢	口	外:黄褐 内:明褐 器肉:褐	縄文晩期
264	A2・5	縄文土器	浅鉢	胴	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙 器肉:にぶい黄橙	縄文晩期
265	A4・5	縄文土器	深鉢	口	外:暗灰黄 内:にぶい黄橙 器肉:にぶい黄褐	刻目突帯文 縄文晩期末~弥生初頭
266	B1・5	弥生土器	甕	口	外:暗灰黄 内:明褐 器肉:にぶい黄橙	肥後黒髮式折衷タイプ 弥生中期
267	B6・5	弥生土器	甕	口	浅黄橙	入来Ⅱ式
268	C0・5	弥生土器	甕	口	外:にぶい黄褐 内:灰白	一ノ宮式 弥生中期後半・新
269	D7・5	弥生土器	甕	口	外:浅黄橙 内:灰白 器肉:灰	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半・新
270	B6・5	弥生土器	甕	口	外・内:にぶい橙 器肉:浅黄橙	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半・新
271	G7・5	弥生土器	甕	口	外:にぶい黄褐 内:にぶい橙	弥生後期
272	C2・5	弥生土器	壺	口	外:橙 内:にぶい黄橙 器肉:にぶい黄橙	弥生中期
273	A7・5	土器	壺?	突帯	外:明黄褐 内:黄橙 器肉:浅黄	
274	A1・5	土器	壺	突帯	外:灰 内:にぶい黄褐 器肉:黄灰	
275	C0・5	弥生土器	甕	脚	外:にぶい黄橙 底面:オリーブ 褐 器肉:橙	弥生中期 底径(約6.0cm)
276	B4・5	弥生土器	甕	脚	外:にぶい橙 内:暗灰 底面: にぶい褐 器肉:灰黄褐	底径(約6.4cm)
277	F7・5	弥生土器	壺	底	内:明褐灰 外:にぶい橙~橙	底:5.5cm×6.0cm
278	C1・5	弥生土器	壺	底	外:橙 内:灰白	底径(7.0cm)
279	G6・5	弥生土器	壺	底	外:橙・にぶい橙 内:にぶい橙	底径(7.4cm)
280	F7・5	土器		口	外・内・器肉:にぶい黄橙	
281	B3・5	土器		口	外:にぶい橙 内:橙 器肉:灰	
282	B5・5	土器		口	外:灰黄褐 内:橙 器肉:にぶい黄褐	
283	B5・5	成川式	壺	底	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙 器肉:灰白	底径(1.5cm)
284	A1・5	成川式	甕	肩	外:橙・黒褐 内:にぶき黄褐 器肉:褐灰	東原式 古墳前期
285	F7・5	成川式	甕	脚	にぶい黄橙~橙	
286	B6・5	成川式	甕	脚	内:にぶい黄橙 外:明黄褐 器肉:にぶい黄橙	
287	A1・5	成川式	高杯	脚	外:灰黄 内:にぶい黄褐 器肉:灰白	
288	D7・5	須恵器		胴	内:灰 外:白灰 器肉:灰白	
289	C7・5	須恵器		胴	内・外・器肉:灰	
290	A2・5	石器	剥片石器			安山岩 重:48.2g
291	A2・5	石器	剥片石器			安山岩 重:185g
292	C5・5	石器	石鏃			チャート 重:0.5g
293	AZ262・埋土	陶器(備前)	搦鉢	胴	内外:橙 肉:にぶい赤褐	
294	AZ262・埋土	陶器(加治木・始良系)	香炉	高台	内:灰 外:灰 素地:灰白 釉:オリーブ黒	底径(4.9cm) 18~19c
295	SD28・埋土	中国緑釉陶器	?	胴	釉:(緑) 素地:(白)	鳥の羽状
296	SD28・埋土	陶器(苗代川)	搦鉢	胴	外・内:灰 素地:黒褐	18c

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
297	SD11・ベルト・4d	弥生土器	甕	口	外：浅黄橙 内：にぶい黄橙 器肉：灰黄褐	
298	SD11・4b	青磁（竜泉窯系・沖繩Ⅳ類）	碗	口	釉：オリーブ灰 素地：灰白	14c中～15c初
299	SD11・4b	青磁（竜泉窯系）	碗	口	釉：オリーブ灰 素地：灰白	腰折 14c中～15c初
300	SD11・4b	青磁（竜泉窯系・沖繩Ⅳ類）	碗	高台	釉：オリーブ灰 素地：灰白	底径（6.8cm） 14c中～15c初
301	SD11・4b	青磁（竜泉窯系・沖繩Ⅳ-0類）	皿	口～高台	釉：オリーブ灰 素地：灰	腰折 14c中～15c初
302	SD11・4a	磁器（肥前系）	皿	口	釉：透明 素地：白 文様：（青）	
303	SK35・埋土	縄文土器	鉢	口	外・内：にぶい黄橙	刻目突帯文 縄文晩期末～弥生初
304	SK37・埋土	白磁	皿	口	釉：灰白 素地：灰白	口唇は輪花状 外には蓮弁状のふくらみ
305	SK37・埋土	縄文土器	深鉢	口	外：褐灰 内：にぶい黄橙 器肉：灰黄褐	刻目突帯文 内外：横方向のケズリ 縄文晩期末～弥生初頭
306	SK29・埋土	白磁（沖繩E群）	小皿	高台	釉：灰白 素地：灰白	菊花皿 底径（3.3cm） 15c後半～16c前半
307	SK31・埋土	青花	碗	高台	釉：明オリーブ灰 素地：灰白 文様：（青）	見込：二重圏線
308	SK38・埋土	青花	碗	口	釉：灰白 素地：灰白 文様：（青）	圏線 雲文？ 明末～清初
309	SK41・埋土	陶器（薩摩焼）	茶入	胴	外：黒褐 内：灰 素地：灰	冷水窯 近世
310	SK49・埋土	青花	碗	胴	釉：明緑灰 素地：（白） 文様：（青）	草花文？ 明末～清初 明末～清初
311	SD46・埋土2	弥生土器	甕	口	外・内・器肉：にぶい黄褐	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半・新
312	SD46・埋土2	弥生土器	甕	口	外・器肉：褐・オリーブ褐	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半・新
313	SD46・埋土2	弥生土器	甕	口	外：褐灰・灰黄 内：浅黄 器肉：黄灰	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半・新
314	SD46・埋土2	弥生土器	甕	口	外・内・器肉：黄褐	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半・新
315	SD46・埋土2	弥生土器（肥後系）	甕	口	外：にぶい黄橙 内：淡黄	肥後・黒髪式 弥生中期
316	SD46・埋土2	弥生土器	甕	口	外・器肉：褐・にぶい橙	肥後・黒髪式折衷タイプ 弥生中期
317	SD46・埋土2	成川式	甕	口	外：にぶい黄橙 内：灰黄 器肉：にぶい黄橙	
318	SD46・埋土2	成川式	甕	脚	外：にぶい褐 内・器肉：にぶい黄橙	
319	SD46・埋土2	成川式	甕	脚	外：黄灰 内：にぶい橙 器肉：にぶい黄橙	底径（6cm）
320	SD46・埋土2	弥生土器	甕	底	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙 底面・器肉：浅黄橙	弥生中期 底径（42cm）
321	SD33・埋土2	弥生土器	甕？	底	明赤褐・明褐	弥生中期 底径（7cm）
322	SD38・埋土	須恵器		胴	内・器肉：灰 外：灰白	叩き：平行 当具：同心円
323	SK21・埋土1	弥生土器	甕	口～胴	外：明褐 内：にぶい黄褐	山ノ口Ⅰ式 沈線1条 弥生中期後半・古 口径（25.6cm）
324	SK21・埋土1 + 埋土3	弥生土器	甕	口	外：にぶい橙 内：にぶい橙・浅黄	山ノ口Ⅰ式 沈線1条 弥生中期後半・古
325	SK21・埋土4	弥生土器	甕	口	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	一ノ宮式 絡繩突帯2条 弥生中期後半・新
326	SK21・埋土1	弥生土器	甕	口	外：にぶい褐 内：にぶい橙	肥後・黒髪式折衷タイプ 弥生中期
327	SK21・埋土1	弥生土器	甕	脚	外：明赤褐 内：橙	底径5.3cm 弥生中期
328	SK21・埋土1	石器	剥片石器	完形		安山岩 残存長：13.8cm 幅：4.8cm～6.0cm 厚：1.5cm 重：140g
329	SK60・埋土	成川式	甕	脚	内：にぶい黄橙 外：明黄褐 器肉：黄灰	
330	SK60・埋土	須恵器		胴	内：灰 外：灰 器肉：灰	叩き：平行 当具：同心円
331	SK68・埋土	弥生土器	甕	口	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙	弥生後期
332	SK68・埋土	成川式	甕	脚	内：にぶい橙 外：橙 器肉：にぶい橙	
333	SK68・埋土	成川式	壺	底	内：にぶい黄橙 外：浅黄橙 器肉：灰	底径（7.5cm）
334	SK68・埋土	須恵器		胴	内：灰 外：灰 器肉：灰	
335	SK70・埋土	弥生土器	甕	脚	外：にぶい黄橙 器肉：橙	弥生中期後半 底径（6.5cm）
336	SK70・埋土	須恵器		胴	内・外・器肉：灰	叩き：平行 当具：同心円

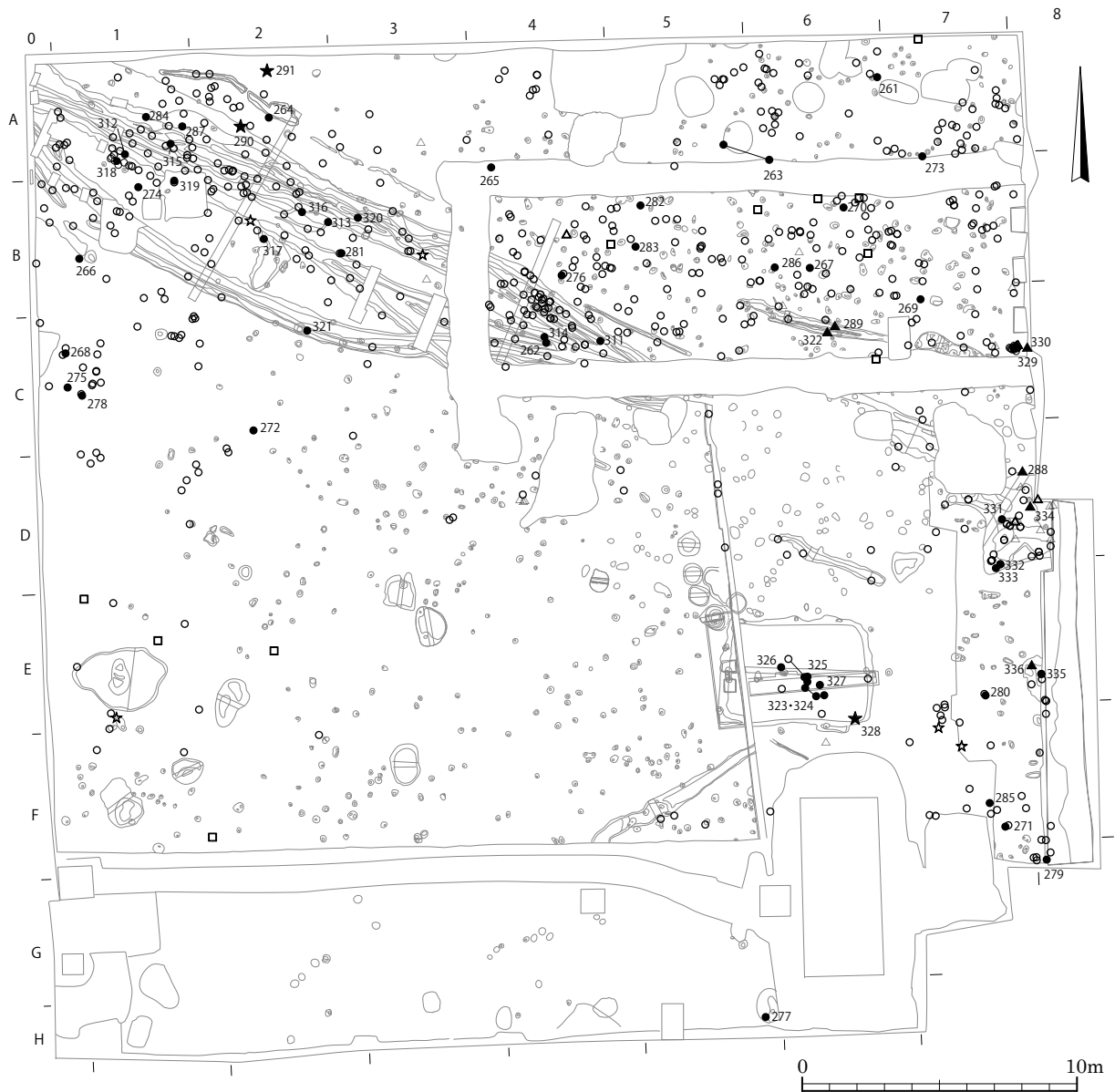


Fig.45 5層中遺物出土状況(S=1/250)

- :土器
- △:須恵器
- ☆:石器・石
- :陶器

※黒塗りは図化したもの  
 ※番号は実測図に対応



### 5層中検出遺構 (Fig.41・42・44・46・49, PL.40・41・44)

人為的なものではなく、自然流路と考えられる幅3.6~7.4m、深さ30cm前後の凹凸の著しい浅い溝であり、幅20~30cm、深さ10cm前後の溝がわずかずつ流路を変えながら埋没したものであると考えられる。当初は流路単位で測量していたが (SD32・33・39・40・46・47)、途中からSD46へ統括した。遺構検出面が漸移的で判然とせず、埋土中の観察からは、水が流れたクロスラミナが見られ、唐湊側から錦江湾側へと深くなっていくことから、自然地形に沿って流れていたものと推察される。遺物は弥生時代中期後半 (新) の山ノ口Ⅱ式甕 (311~314) のほか、肥後系黒髪式甕 (315)、折衷タイプ (316)、弥生時代中期の甕脚台 (320・321)、古墳時代成川式甕 (317~319)、須恵器 (322) などが得られているため (Fig.43, PL.42)、古墳時代の自然流路と捉えられる。自然流路の東側に位置するSK68(69)も最終的にはこの自然流路の一部となっているようであるが、上面観の形状として、弥生時代の遺構を古墳時代の流路が洗い流したものととも考えられる。

### 6層上面検出遺構 (Fig.44~51, PL.45~50)

6層上面では、弥生時代と古墳時代の遺構が確認されたが、遺物を伴っていない大半の遺構が時代を判断できない。

確実な弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡 (SK21) 1基が検出されたのみである。当初a-bラインの土層観察ベルトを残し掘り下げたが、土層観察終了後にベルト下位より主柱痕が確認されたため、軸をずらしたc-dラインの主柱確認用トレンチを設けて調査を行なった。また、本調査では工事の工程上、1区を先に終了しなければならなかったため、住居跡の西側一部は後日調査された。

3.85×5.5mのやや長方形を呈し、竪穴面積約21㎡の規模となっている (Fig.45)。検出面からの深さは約30cmで、確実な生活床面 (硬化面) や炉跡などを検出することはできなかった。竪穴内長軸方向中央に一列に4本の主柱痕が検出され (pit4~6・10)、pit4は斜位に掘りこまれる。また、pit10は建て替えがなされているようである。30~60cmの深度である。これらは棟持柱と考えられ、切妻形の上屋構造が想定される。また、竪穴壁際にも6基の柱穴が検出されているが (pit11~3・7~9)、pit9以外は浅いもので、主柱とは考えにくい。しかし、垂木と考えると屋根がせまり、かなり面積が狭くなるように思われる。竪穴南北外に位置するP621・622・625・626・656 (深さはTab.6参照) が垂木痕と考えることもできる。長軸両サイド側にしか存在しないことも切妻形の上屋からは考えやすいように思われる。竪穴の南東部に1.1×0.2m、深さ10cm程度の規模の浅い張り出しがあり、この延長上の竪穴内部に主柱がないことから、入口となっていたのではないかと想定する。

住居跡内から土器と石器が得られている量が少なく、住居跡中央部の底面よりも5cm程度上部の埋土中に集中的に出土した。面的に発掘中、中央部に流れ込むように検出された。また、掘床に無数の小ピットが存在し、これは竪穴外には存在していない (Fig.47断面図, PL.46・48)。これらのことから、住居廃絶後、上屋のない形で周りから土壌が入り込んで自然に埋没していったことを示していると考えられる。Fig.44, PL.43-323・324は同一個体である。口縁部形態と一条沈線文の特徴が入来Ⅱ式に類似するが、口縁部がやや立ち上がることから、弥生時代中期後半 (古) 山ノ口Ⅰ式甕の特徴を備えていると考える。325は口縁部がくの字に折れ、二条の絡条突帯が弥生時代中期後半 (新) 一の宮式に類似しているが、口縁部立ち上がりやや弱く、口縁内面の突出部が短い。326は口縁端部が丸みを持ったつくりが肥後黒髪式に類似するものの、口縁部が短く口縁部内面の突出がないことから、折衷型と捉えられる。328は安山岩剥片の湾曲した部位を刃部とした石器であり、刃部は光沢面ができるほど使用頻度が高い (付編3参照)。稲作に関連する遺物と考え、住居跡埋土の底面近くの土壌をサンプリングし、プラントオパール分析を行なったが (付編1参照)、イネは全く検出されなかった。

SK68 (69) は、全形が窺えない不定形の遺構であり、攪乱で分断されているSK23も一連のものと考えられる。埋土は黒色土と細粗砂のラミナを形成し、SD46の東側延長上に位置していることから、不整形ながら自然流路の一部となっていると考えられる。全形が不明なために確言はできないが、遺構南のコー

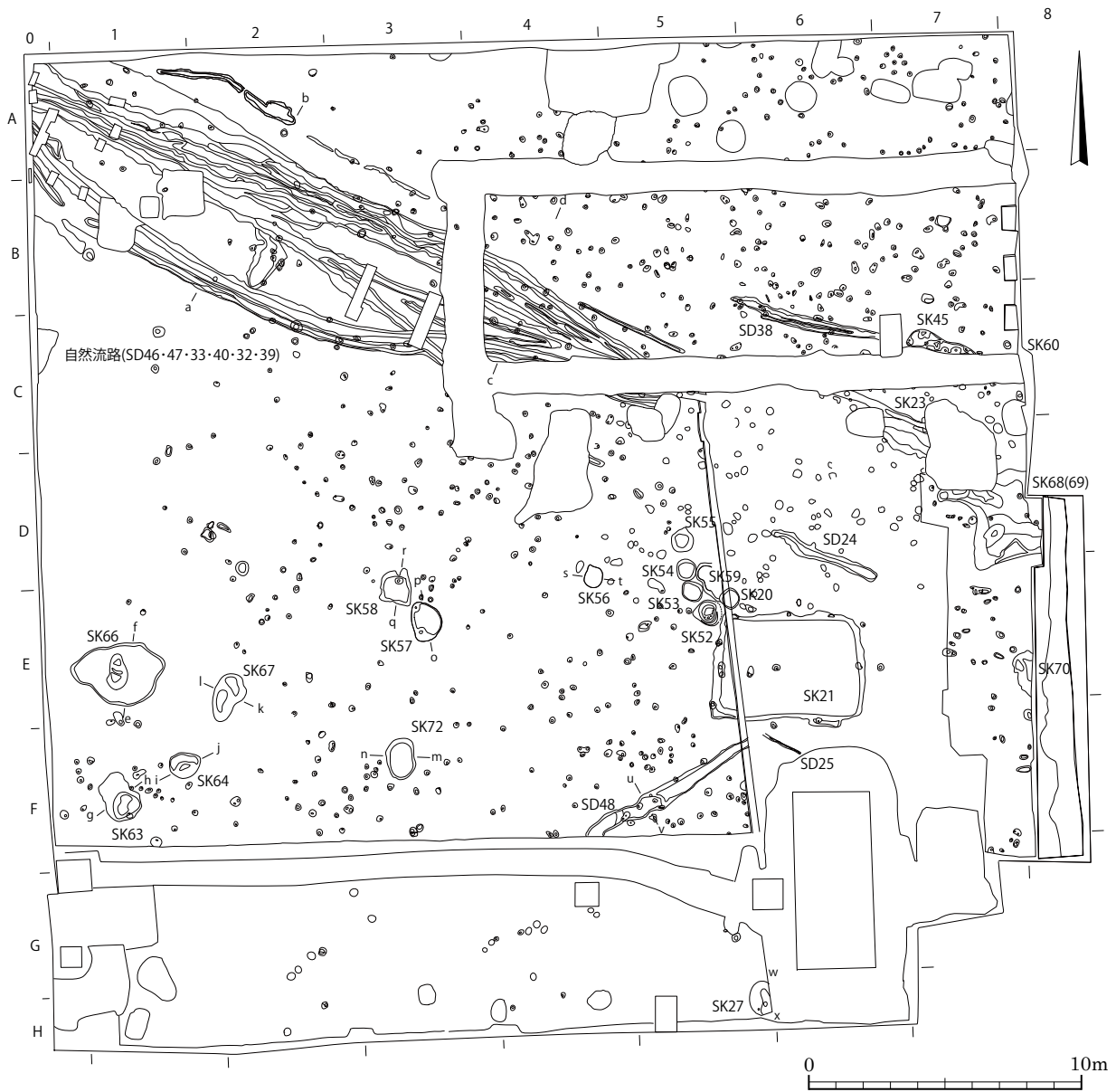
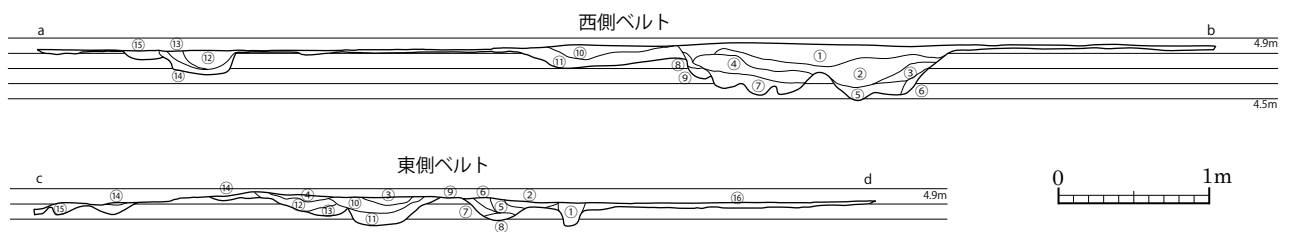


Fig.46 5層中・6層上面検出遺構 (S=1/250)



西側ベルト埋土

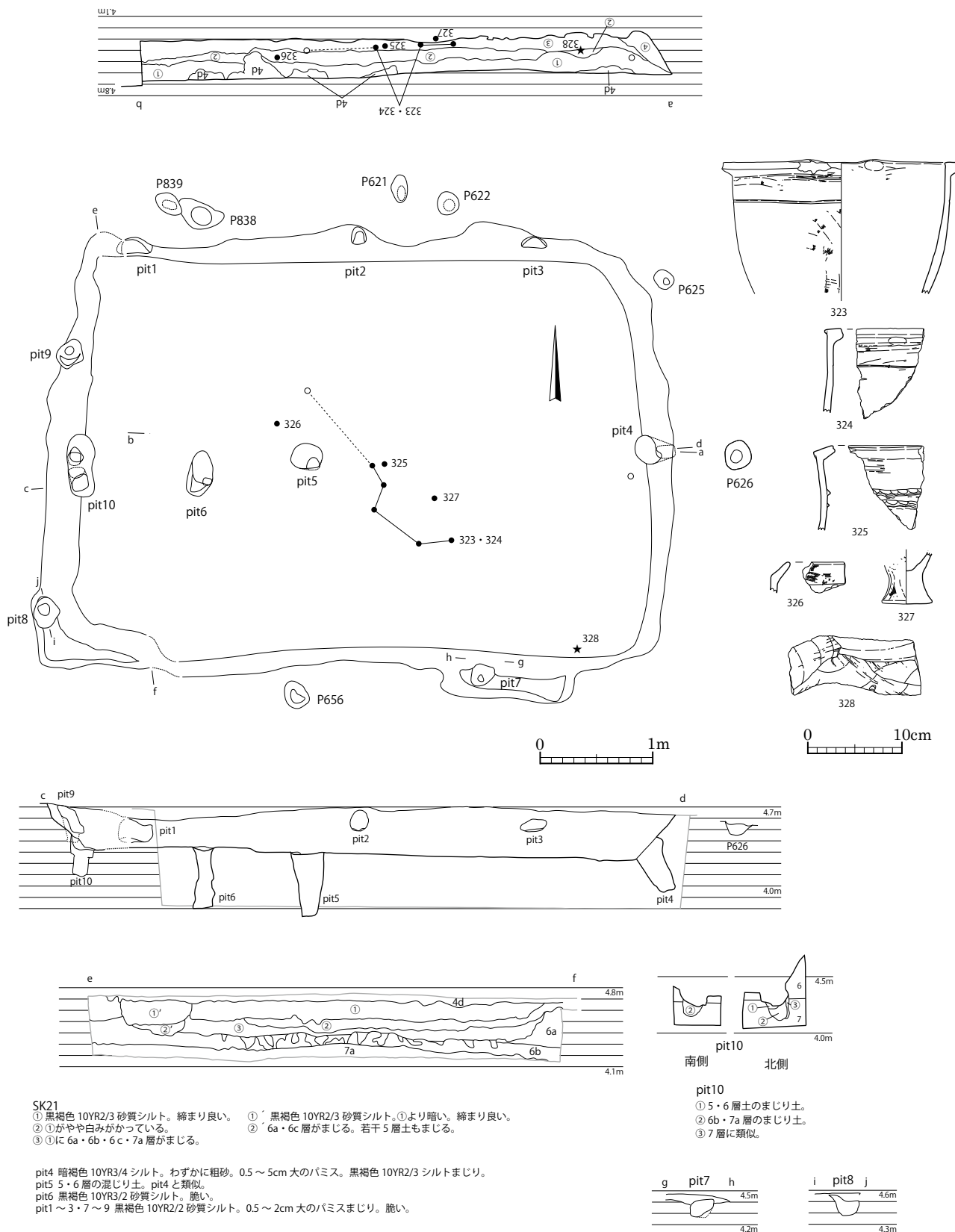
- ① 黒褐色10YR2/2砂質シルト。0.5~1cm大のバミスまじり(多)。締まり良い。
- ② 黒褐色10YR2/2砂質シルト。0.5~1cm大のバミスまじり(少)に粗細砂がラミナ状に入る。
- ③ 灰黄褐色10YR4/2粗砂にシルトが僅かにまじる。締まり悪い。
- ④ ③に類似
- ⑤ 黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5~1cm大のバミスまじり。締まり悪い。
- ⑥ ⑤よりも暗め。
- ⑦ ⑤に類似。
- ⑧ 黒褐色10YR2/2砂質シルト。0.5cm大のバミスまじり。
- ⑨ ⑤に類似。
- ⑩ 灰黄褐色10YR4/2粗砂。0.5~1cm大のバミスまじり。締まり悪い。
- ⑪ ⑧に類似。
- ⑫ 黒褐色10YR2/2砂質シルト。0.5~1cm大のバミスまじり。底面にラミナが入る。
- ⑬ ⑫に灰黄褐色10YR4/2粗砂がラミナ状に入る。
- ⑭ 黒褐色10YR3/2粗砂。0.5~1cm大のバミスまじり。締まり悪い。
- ⑮ 基5層。

東側ベルト埋土

- ① 黒褐色10YR2/2砂質シルト。0.5~1cm大のバミスまじり(多)。締まり良い。
- ② 暗褐色10YR3/4粗砂まじりシルト。0.5~1cm大のバミスまじり(多)。締まり良い。
- ③ 暗褐色10YR3/3砂質シルト。0.5~1cm大のバミスまじり(少)。締まり良い。
- ④ にぶい黄褐色10YR5/4細砂。0.5~1cm大のバミスまじり(少)。
- ⑤ 黒褐色10YR2/2砂質シルト。0.5~1cm大のバミスまじり(少)。締まり良い。
- ⑥ 黒褐色10YR2/2砂質シルトに灰黄褐色10YR4/2細砂がまじる。
- ⑦ ⑥より暗め。
- ⑧ 黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5~1cm大のバミスまじり。
- ⑨ ⑧よりも暗め。
- ⑩ ④に類似。
- ⑪ 暗褐色7.5YR3/4砂質シルト。0.5~1cm大のバミスまじり。
- ⑫ ⑪よりもバミスが多い。
- ⑬ 黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5~3cm大のバミスまじり。
- ⑭ 黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5~2cm大のバミスまじり。
- ⑮ 基5層。

Fig.47 5層中検出自然流路断面 (S=1/50)

SK21 埋土  
 ① 黒色 10YR1.7/1 砂質シルト。0.1~2cm 大のバミス (多) まじり、締まり良い。  
 ② 黒色 10YR1.7/1 砂質シルト。やや粘質、締まり良い。0.5~5cm 大のバミス (多)。  
 ③ 黒褐色 10YR2/3 砂質シルト。やや粘質、締まり良い。0.1~5cm 大のバミス (多)。  
 ④ 黒色 10YR2/2 砂質シルト。0.5~2cm 大のバミス (多)。脆い。



SK21

- ① 黒褐色 10YR2/3 砂質シルト。締まり良い。
- ② ①がやや白みがかった。
- ③ ①に 6a・6b・6c・7a 層がまじる。
- ④ 黒褐色 10YR2/3 砂質シルト。①より暗い。締まり良い。
- ⑤ 6a・6c 層がまじる。若干 5 層土もまじる。

pit4 暗褐色 10YR3/4 シルト。わずかに粗砂。0.5~5cm 大のバミス。黒褐色 10YR2/3 シルトまじり。  
 pit5 5・6 層の混じり土。pit4 と類似。  
 pit6 黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。脆い。  
 pit1 ~ 3・7~9 黒褐色 10YR2/2 砂質シルト。0.5~2cm 大のバミスまじり。脆い。

pit10

- ① 5・6 層土のまじり土。
- ② 6b・7a 層のまじり土。
- ③ 7 層に類似。

Fig.48 6 層上面検出住居跡 SK21 (S=1/50), 出土遺物 (S=1/6)

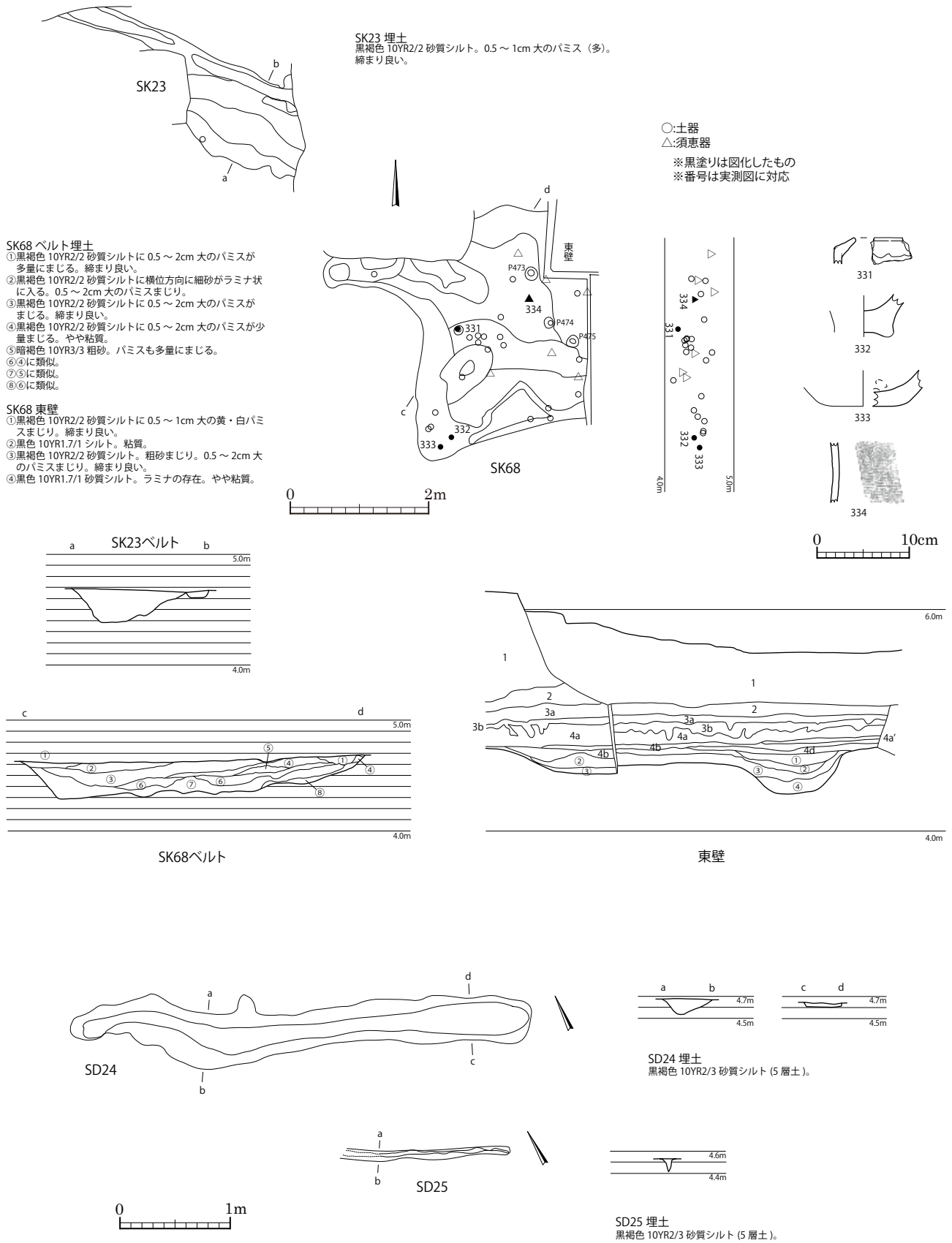
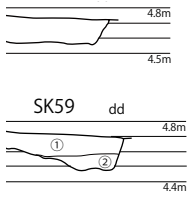
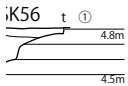


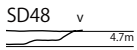
Fig.49 6層上面検出遺構(SK23・68平面:S=1/80,他:S=1/50,出土遺物:S=1/6)



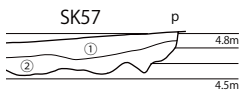
SK59 dd  
R2/2砂質シルト。0.5~1cm大のパミス。悪い。  
YR2/3砂質シルトに0.5~3cm大の白・黄まじり(多)。縮まり良い。R2/1砂質シルト0.5~1cm大のパミス(多)。脆い。



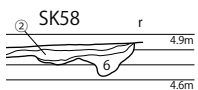
SK56 t ①  
R2/3砂質シルトに0.5~3cm大の白・黄まじり(多)。縮まり良い。  
R3/2粗砂。0.5~1cm大のり。脆い。



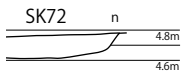
SD48 v  
2/3砂質シルトに0.5~3cm大の黄色パミス。0.5cm大の黄色。縮まり良い。



SK57 p  
R2/2砂質シルト。0.5~3cm大の白色パミス・1cm大の黄色パミスまじり。縮まり良い。  
R2/2シルト砂質0.5cm大の白色パミスまじり。悪い。



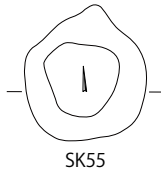
SK58 r  
YR2/2砂質シルト。0.5~2cm大の白多・黄色パミス(0.5~1cm大)(少)まじり良い。  
YR2/2シルト砂質0.5cm大の白色パミス。縮まり悪い。



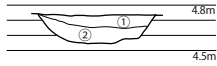
SK72 n  
土  
YR2/2砂質シルト。



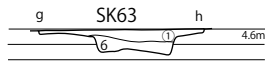
SK52埋土  
①黒褐色10YR2/3砂質シルトに0.5~3cm大のパミス(白・黄)まじり(多)。縮まり良い。  
②黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5~1cm大のパミス(多)。縮まり悪い。



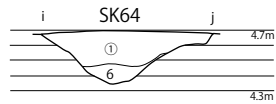
SK55



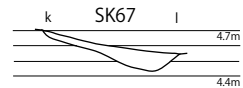
SK55埋土  
①黒褐色10YR2/3砂質シルトに0.5~3cm大のパミス(白・黄)まじり(多)。縮まり良い。  
②暗褐色10YR3/4砂質シルト。0.5~3cm大の白色のパミスまじり(多)。脆い。



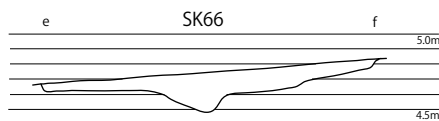
SK63埋土



SK64埋土  
黒褐色10YR2/2砂質シルト。



SK67埋土  
黒褐色10YR2/2砂質シルト。

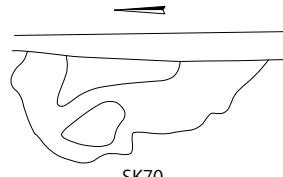


SK66埋土  
黒褐色10YR2/2砂質シルト。

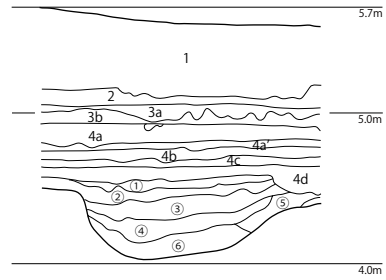


埋土  
①黒褐色10YR2/3砂質シルトに0.5~3cm大のパミス(白・黄)まじり(多)。縮まり良い。  
②黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5~1cm大のパミス(多)。縮まり悪い。

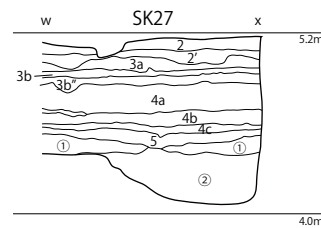
①黒褐色10YR2/3砂質シルトに0.5~3cm大のパミス(白・黄)まじり(多)。縮まり良い。  
②黒褐色10YR2/1砂質シルト0.5~1cm大のパミスまじり(多)。脆い。



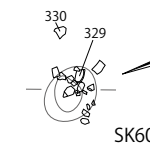
SK70



SK70埋土  
①黒褐色10YR3/2砂質シルト0.5~1cm大のパミス(多)。縮まり良い。  
②黒褐色10YR2/2砂質シルト0.5~2cm大のパミス(多)。縮まり良い。  
③黒褐色10YR1.7/1砂質シルト0.5~3cm大のパミスまじり。縮まり悪い。  
④黒色10YR2/1砂質シルト0.5~3cm大のパミスまじり。縮まり悪い。  
⑤③に類似。もろい。  
⑥黒色10YR1.7/1砂質シルト0.5~3cm大のパミスまじり。ラミナが入る。

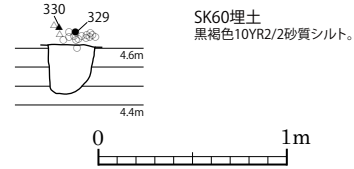


SK27埋土  
①黒褐色10YR3/1砂質シルト(5層土)に6層粗砂・0.5~5cm大のパミスが多くまじる。  
②黒褐色10YR3/1砂質シルト(5層土)に0.5~20cm大のパミスを多量に含む。



○:土器  
△:須恵器  
※黒塗りは図化したもの  
※番号は実測図に対応

SK60



SK60埋土  
黒褐色10YR2/2砂質シルト。



上面検出遺構(S=1/50, SK60:S=1/40)



Fig.51 6層上面検出ピット(S=1/250)

ナー部分の存在からSK21のような方形竪穴住居跡を削って古墳時代に自然流路が流れ込んだものとも考えられる。遺物は弥生時代中期後半(新)の山ノ口Ⅱ式甕(331), 成川式甕脚台(332), 壺底部(333), 須恵器(334)などが得られている(Fig.44, PL.43)。

SD24・25は性格不明の溝跡である。方向はSD46の自然流路に類似する(Fig.46)。

性格不明の土坑群をFig.50にまとめた。SK20・52~55・59は、住居跡SK21の北西隅に集中する円形の土坑であり、ほぼ規模がそろっている。SK70やSK27などは一定の深さをもっている。SK56・48・57・58・72・63・64・66・67などは土層の落ち込みあるいは樹痕の可能性もある。SK60は本来ピットであった可能性があるが、上部で遺物が集中して出土した。

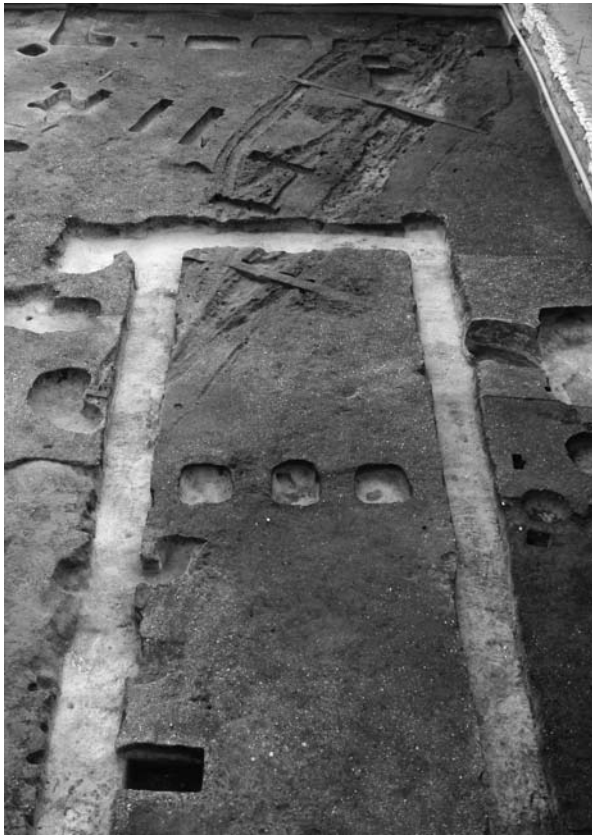
また、第6層上面では、631基のピットが確認されているが、調査中、建物プランを特定することができず、断面形状の観察でも、先細りの穴で、方向も垂直でなく斜位になるものも少なくなかった。全てが建物の柱穴というわけではないようである。現段階では、弥生時代~古墳時代という時期幅でしか捉えられない(Fig.51, Tab.6)。







5層上面検出[東より] 4層土に削平され、部分的に6層が露出



自然流路(SD32~47)[東より]



自然流路西側ベルト[東より]



自然流路東側ベルト[東より]

PL.44 5層中検出自然流路



SK68検出[東より]



SK68ベルト[東より]



SK20埋土[東より]



SK68[西より]



SD24[東より]



1区東側遺構[東より]



SD24[東より]



SD25[西より]

PL.45 6層上面検出遺構(1)



住居跡1(SK21)遺物検出[西より]



剥片石器出土状況[北より]



住居跡1(SK21)遺物出土状況[西より]



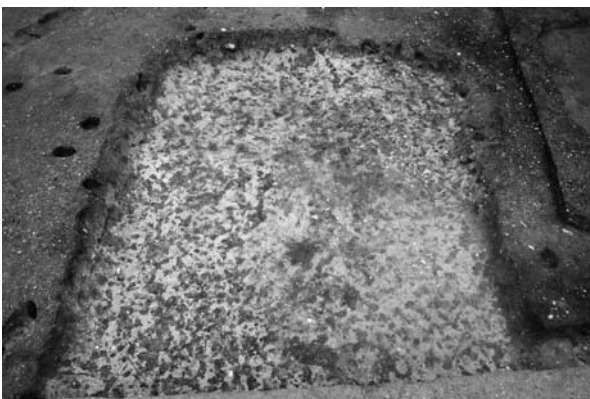
住居跡1(SK21)遺物出土状況[南より]



掘床検出[西より]



埋土状況[北より]



ベルト除去後柱穴検出[西より]



柱穴掘り下げ[東より]

PL.46 住居跡(SK21)





柱穴半裁[南より]



住居跡内Pit6半裁[南より]



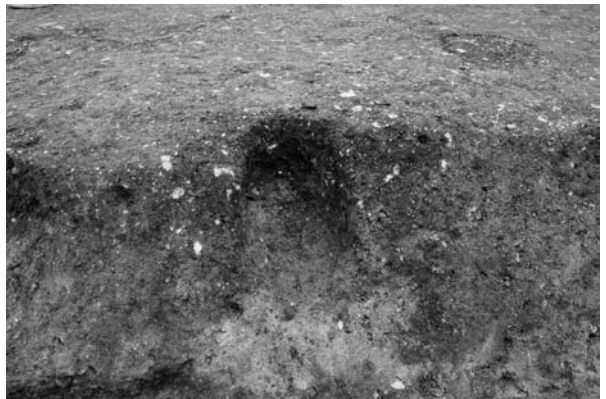
住居跡内Pit5半裁[南より]



住居跡内Pit5半裁[南より]



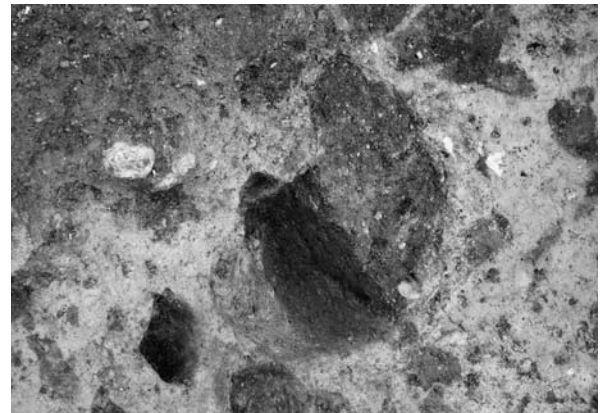
住居跡内Pit1検出[南より]



住居跡内Pit2[南より]



住居跡内Pit3[西より]



住居跡内Pit7半裁[東より]

PL.47 住居跡(SK21)



住居跡1(SK21)西側検出[西より]



住居跡1(SK21)断面[西より]



Pit8~10[東より]



Pit10[東より]



Pit10[西より]



Pit10南側ピット[南より]



Pit10南側ピット[南より]



Pit10北側ピット[北より]

PL.48 住居跡(SK21)





SK20[東より]



SK70[西より]



SK27[西より]



SK52~59[東より]



SD48[北より]



SK57[東より]

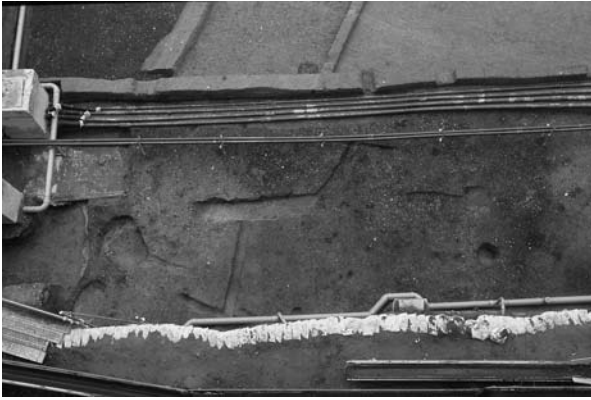


SK66[東より]

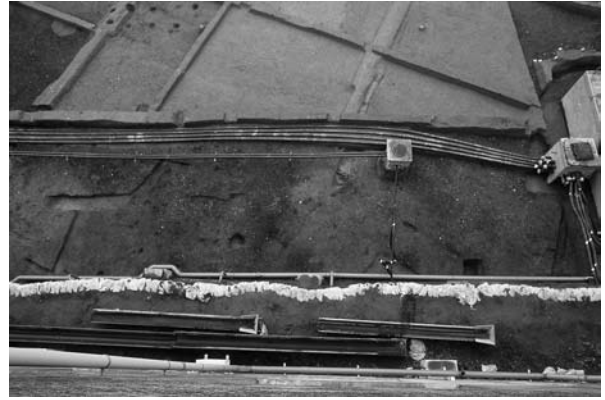


SK60[西より]

PL.49 6層上面検出遺構(2)



1区完掘[南より]



1区完掘[南より]



3区完掘[東より]



3区完掘[東より]



2区完掘[北より] 1区は埋め戻し済み

PL.50 完掘

## 6. 小結

本調査区では、概ね1層が近代～現代、2層が近代、3・4層が近世～近代、5層が弥生～古墳時代の年代観が与えられる。

6層上面で弥生時代中期の住居跡が1棟検出されている。鹿児島大学構内遺跡郡元団地内における弥生時代の住居跡の初例であり、同地域の弥生時代中期の居住域を想定する上で極めて重要である。遺物では植物質ものを頻繁に刈り取っていた痕跡のある剥片石器が出土したが、住居跡内部の土壌にはプラントオパールはほとんど検出されなかった。古墳時代には住居跡は明確でなく、浅い自然流路が検出されていることから、湿地帯へと変化しているのではないかと考えられる。

中世遺物の存在から包含層が存在していた可能性があるものの、4層の近世の水田造営の際に削平されている可能性が考えられる。遺物は11世紀後半～16世紀前半ごろまでの青磁・白磁・中国青花・土師器・瓦器・陶器・瓦質土器などが得られているが量的に少ない。

近世には水田が営まれるが、その直前に水溜め、粘土掘削孔などの土坑が掘られている。また、水田の大畦を造営する以前、区画溝を掘削し、測量・測地を行なったと考えられる櫓跡らしき建物跡も大畦付近で検出された。

水田跡は大畦と小畦で区画されたもので、11面確認された。そのひとつは1反の規模である。稲株痕のほか、人足跡、牛足痕も認められ、「牛耕」の存在が裏づけられた。プラントオパール分析でも水田であることが追認された。3層は水田跡であることは確実であるが、プラントオパールの検出量は少なく、遺物の出土量も少ないことから、長期にわたって使用されたものではない可能性がある。3b層上面の大畦付近で軽石層が除去された痕跡が検出されたことから河川の氾濫を想定したが、これも水田が長期に営まれなかった要因と考えられる。近世の遺物のうち、食器類は薩摩焼（加治木・始良系、苗代川）の播鉢・鉢・土瓶、肥前系（有田・波佐見・唐津）碗・皿類などの日用雑器がほとんどで、18世紀～19世紀の遺物が主体となる。ほかには、泥メンコ、寛永通宝・乾隆通寶（清：1736年初鑄）などの古銭、青銅製鈴、黄色ガラス玉、釣針状に湾曲した青銅製金具などがあり、水田にはそぐわないような遺物もあることから、水田造成時にもたらされた可能性も考えておきたい。特に釘などの鉄製品や鉄滓は、2・4層に一定量出土している（Tab. 3）。

2層からは西南戦争時の弾丸が2点出土しており、薩軍によって鑄造されたスナイドル銃の弾丸と考えられる。

## 註

- 1) 新里貴之 2005『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』20
- 2) 新里貴之ほか 2008『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』22・23
- 3) 2)に同じ
- 4) 松永幸男・砂田光紀1990『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』V
- 5) 西南戦争を記録する会・高橋信武氏ご教示。
- 6) 4)に同じ

## IV 2006-4 郡元団地C-4～6区農学部研究棟A（旧・農学部2号館） 改修工事に伴う発掘調査

### 1. 調査にいたる経過

鹿児島大学では、PFI事業に伴い、平成17～21年度にかけて農学部の改修工事を実施することが計画された。平成18年度は2つの改修工事が予定され、農学部研究棟A（旧・2号館）の改修工事地点も掘削工事範囲となった。このため、改修工事に先立ち、本調査を実施することになった。

### 2. 調査期間と調査体制

調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が以下の体制で行なった。

所在地 鹿児島市郡元一丁目21番24号

調査面積 89㎡

調査期間 平成18年10月10日～11月28日

調査体制 主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室長 新田栄治

担当者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 主任 中村直子

国際航業株式会社 現場代理人 飯田英樹

管理技師 植田誠一

調査員 長尾聡子・東園千輝男

作業員 仮屋郁夫・仮屋アキ・脇 春教・仮屋マサ子・弓場ナツ子・  
仮屋秋雄・矢住純子・矢崎一成・吉永幸子・上國料純一・  
矢崎一成・篠原國範・島中 薫・山下美智子・宮下 巧・  
橋口節子・森美穂子・井ノ上さゆり・上木隆義・榎 富士子

### 3. 調査の経過

調査区は、研究棟をはさんで1区から3区に分かれる。1区は南側、2区は北側、3区は南側に位置する。1・2区については、5m間隔のグリッドを設定し、西側からA～Iグリッドと呼称した（Fig.52）。表土は

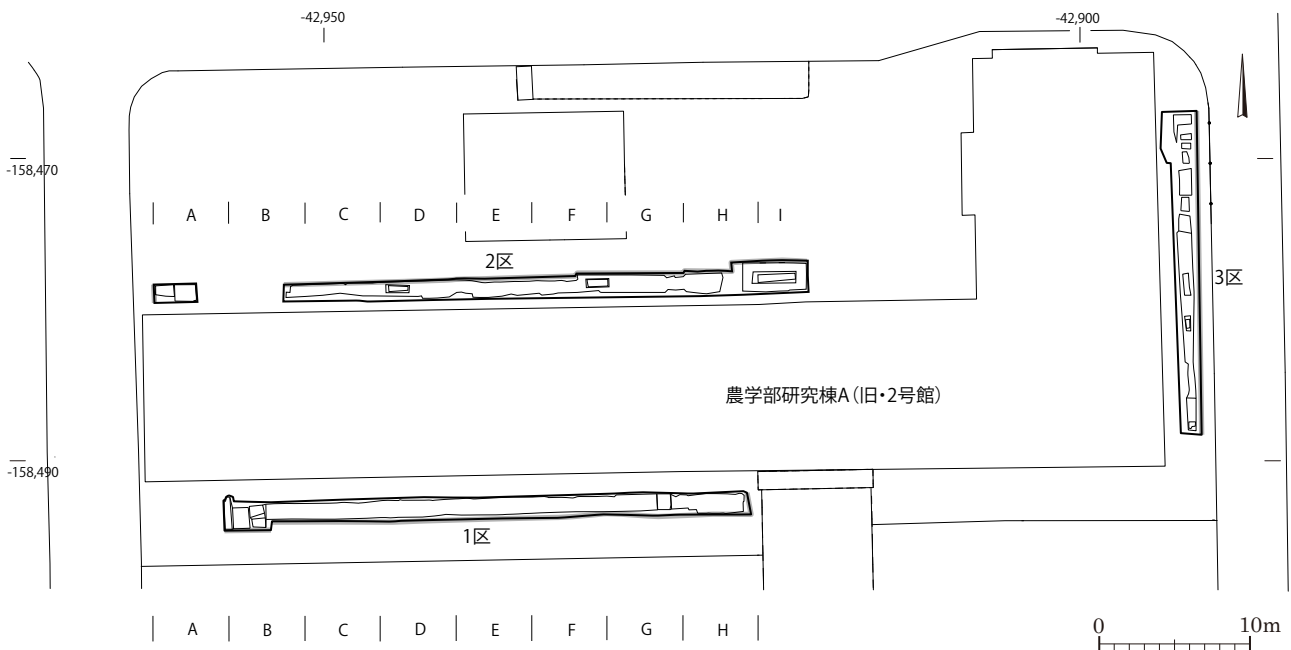


Fig.52 調査区配置 (S=1/500)

調査区の灰色線は壁面層位図化箇所

重機での掘削を行い、それ以下は人力による掘削を行った。層は調査区ごとに異なっていたため、各調査区で観察した。

1区は、6層上面までの掘削を行った。7層以下はA・Bグリッドに設置した部分のみ掘削し、下層確認を行った。その結果、地山である砂層までを確認したが、いずれも無遺物層であった。遺構は、3層・3b層・3d層・4層・4b層・5層・6層上面で検出した。畦や鋤跡・溝などで、水田耕作に関係する遺構であると考えられる。中でも、5層上面で検出した軽石集積を境として西側と東側では、層位の堆積状況が異なっていた。東側は、河川堆積物と考えられる砂層である。2区と3区が河川堆積物であったことから、軽石集積はその堤であったとも推定できる。遺物包含層の最下層である5b層からは染付けが出土しており、それ以下は無遺物層である。1区深掘りトレンチでは、泥炭層をサンプリングした。

2区は、A・D・F・Iグリッドを深掘りした。Aグリッド以外は河川堆積物か氾濫原であると考えられる。遺構は検出されていない。Aグリッドには、上部には1区のような層位が検出されたが、下部は、河川堆積物が確認できた（次章2007-4地点の層と類似する）。

3区は、上部から細砂や粗砂で構成された堆積物であったため、安全上の理由から、全面を地表下2mまでの掘削にとどめた。河川跡であるが、埋土中より摩滅した遺物（陶磁器・土器片）が出土している。

#### 4. 層位

地区ごとに土層が異なるため、各区で基本層位を記す。各区に貫入する個別層は、各層図に記してある。

##### 1区 (Fig.53, PL.63)

- 1層 鹿児島高等農林学校時代以降の表土・攪乱層。
- 2層 灰褐色シルト質砂。
- 3層 暗褐灰色シルト質砂。
- 4a層 灰黄褐色10YR5/2シルト質砂を基調とし、白色細砂がブロック状にまじる。
- 4b層 褐灰色10YR5/1シルト質砂。
- 5a層 灰黄褐色10YR5/2シルト質砂。
- 5b層 灰黄褐色10YR6/2と5/4との混土、砂質シルト。
- 5c層 黒褐色10YR3/2粗砂まじりシルト質砂を基調とし、褐色7.5YR4/6鉄分含む。
- 5d層 黒褐色10YR3/2基調で粗砂まじりシルト。5c層土・6層土・黒色10YR2/1シルトのブロックを含む。
- 6層 灰黄褐色10YR6/2シルト。
- 7層 明褐色シルト。
- 8a層 粗砂。
- 8b層 白色シルト。
- 9層 黒色泥炭層。
- 10層 砂礫層。

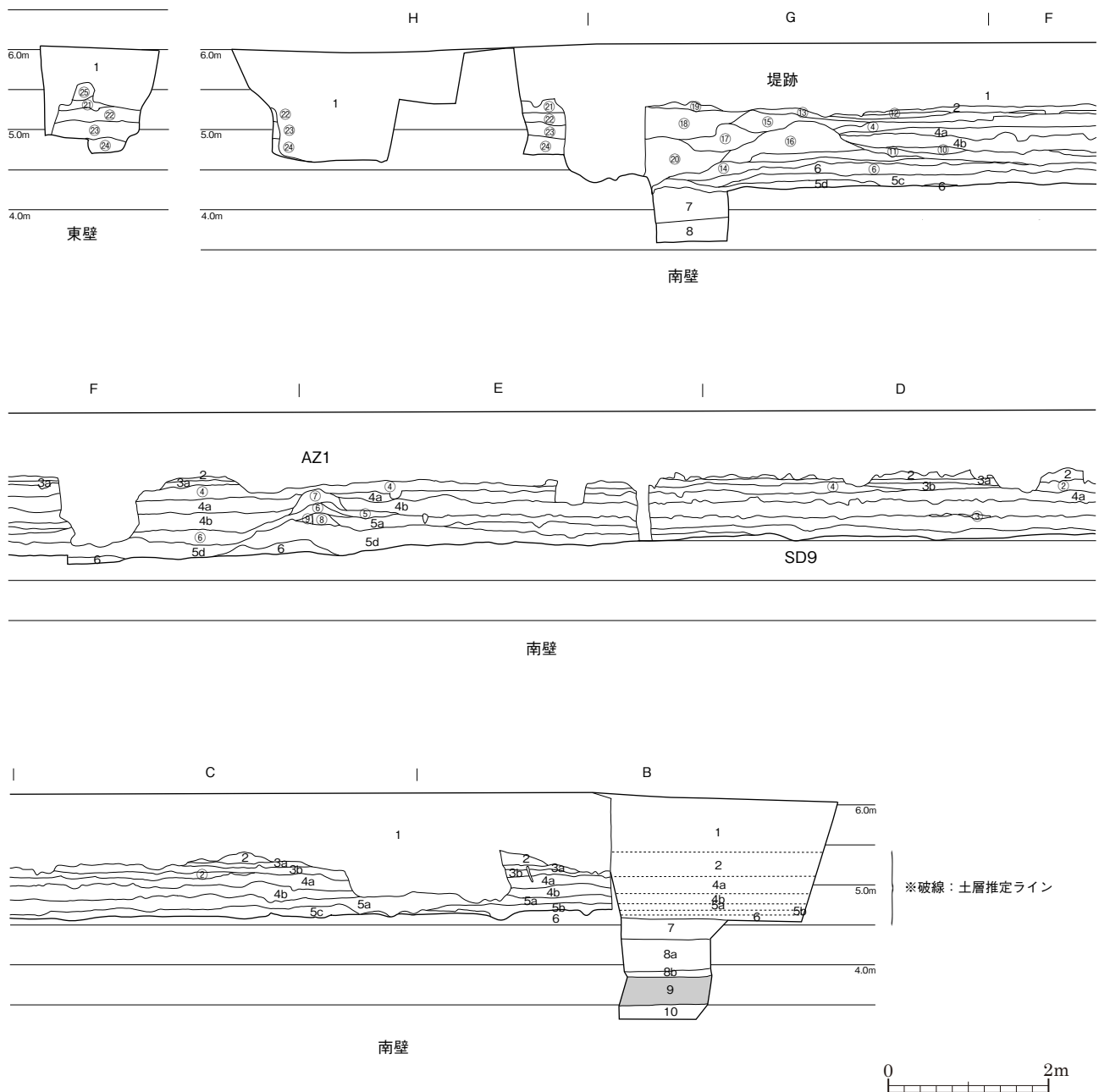
##### 2区 (Fig.54, PL.66)

###### 2F・G区

- 4a層 2H区東壁の4層に対応。にぶい黄褐色10YR5/3シルトと細砂の縞状堆積。
- 4b層 にぶい黄褐色10YR5/3シルト。

###### 2B～D区

- 2層 灰黄褐色10YR5/2粗砂まじり細砂。
- 2'層 灰黄褐色10YR5/2細砂。1～2cm大のパミスまじり。
- 2"層 暗灰黄色2.5Y5/3細砂。1～2cm大のパミスまじり。
- 3層 にぶい黄褐色10YR5/3細砂、粗砂まじり。

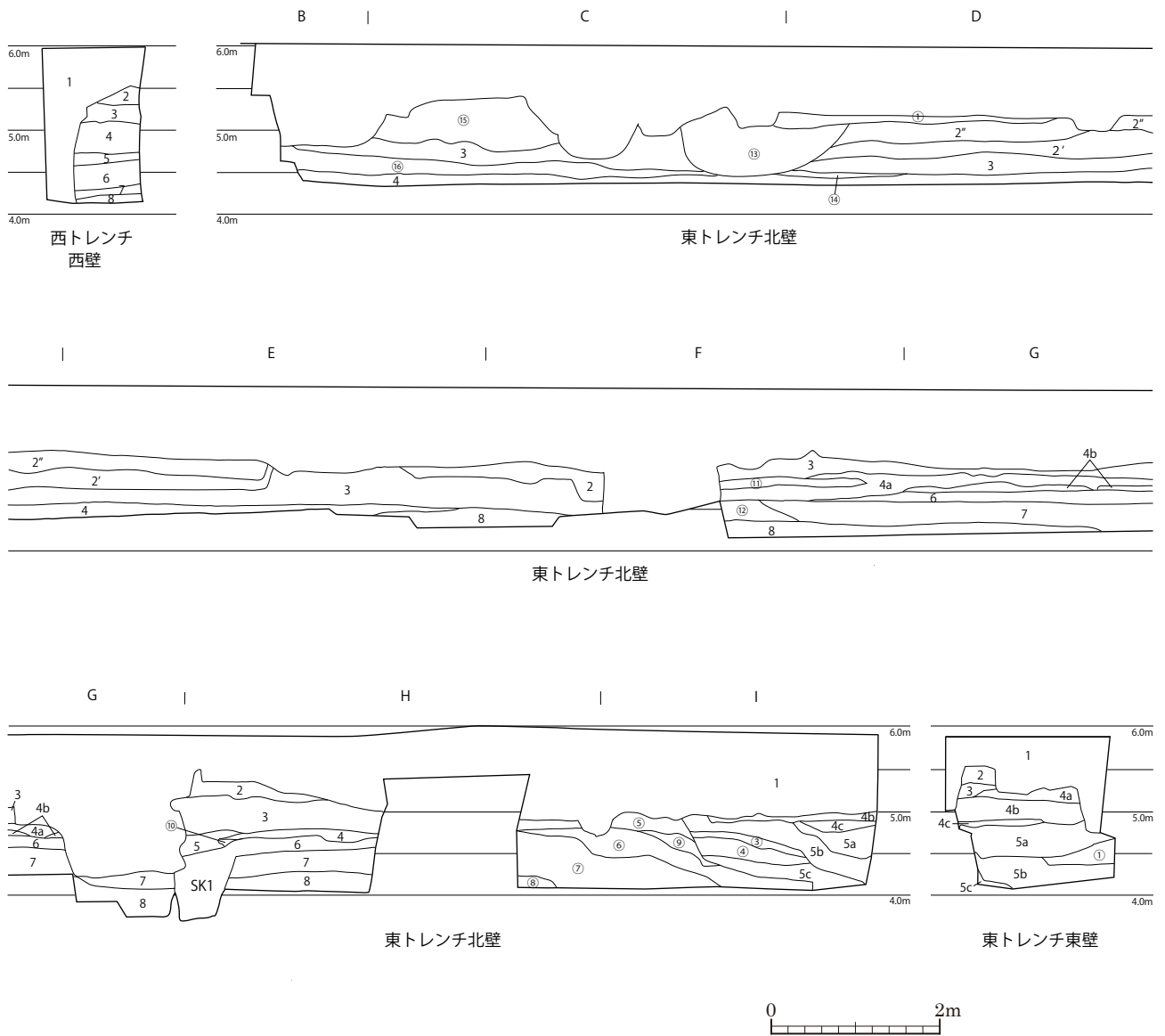


- ① 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト質砂。
- ② 灰黄褐色 10YR5/2 シルト質細砂。3b層に類似するが、少し黄色味を帯びる。
- ③ 灰黄褐色 10YR6/2 細砂。
- ④ 灰黄褐色 10YR5/2 細砂。やや粘質。3b層に類似。
- ⑤ 4b層に類似するが、細砂ブロックを含む。
- ⑥ 灰黄褐色 10YR4/2 シルト質砂。
- ⑦ 灰黄褐色 10YR5/2 砂質シルト。やや粘質。
- ⑧ 褐灰色 7.5Y4/1 粗砂混じりシルト質砂。
- ⑨ 褐灰色 10YR4/1 粗砂まじりシルト質砂。
- ⑩ 灰黄褐色 10YR4/2 細砂。締まり良い。
- ⑪ 灰黄褐色 10YR5/2 細砂。締まり良い。

- ⑫ 灰黄褐色 10YR5/2 シルトを基調とし、黄色バミス・粗砂まじり。
- ⑬ 灰黄褐色 10YR5/2 シルト細砂。締まり良い。
- ⑭ ⑥に縞状の灰褐色 10YR6/2 細砂が入る。
- ⑮ 灰黄褐色 10YR5/2 細砂。締まり良い。
- ⑯ 軽石礫群。締まり良い。
- ⑰ 灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂。細砂が縞状に入る。締まりかなり良い。
- ⑱ ⑰に白砂がまじる。
- ⑲ 暗灰黄色 2.5Y5/2 シルト。
- ⑳ 明灰褐色細砂。
- ㉑ ⑱と同じ。
- ㉒ にぶい黄褐色 10YR4/3 に白砂まじり。
- ㉓ 灰黄褐色 10YR4/2 細砂。
- ㉔ 暗灰黄色 10YR5/2 シルトに灰白色 10YR5/1 細砂ブロックまじり。
- ㉕ 白色細砂。

Fig.53 1区東壁・南壁(S=1/80)





- ① 粗砂層。
- ③ オリーブ褐色 2.5Y4/3 細砂。
- ④ 粗砂と軽石礫。
- ⑤ にぶい黄褐色 10YR5/4 細砂と 10YR6/3 のブロックまじり。
- ⑥ 灰黄褐色 10YR6/2 細砂。
- ⑦ 2.5Y5/3 細砂。軽石大礫を含む。
- ⑧ 灰黄褐色 10YR5/2 粗砂。
- ⑨ にぶい黄褐色 10YR6/4 細砂。
- ⑩ にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト。
- ⑪ 白色を基調とする粗砂。鉄分を含む。
- ⑫ にぶい黄褐色 10YR7/2 類似細砂。
- ⑬ 2'・2"・3層・③の混土。
- ⑭ 灰黄褐色 10YR5/2 粘質シルトと細砂の縞状堆積層。
- ⑮ 灰黄褐色 10YR5/2 粘質シルトを基調とし、白色細砂ブロック、軽石 5cm 大の礫を含む。
- ⑯ 灰黄褐色 10YR6/2 細砂を基調とするが、3cm 大粘土ブロックや白色細砂ブロックを含む。10cm 大の軽石礫含む。

Fig.54 2区西・東トレンチ(S=1/80)

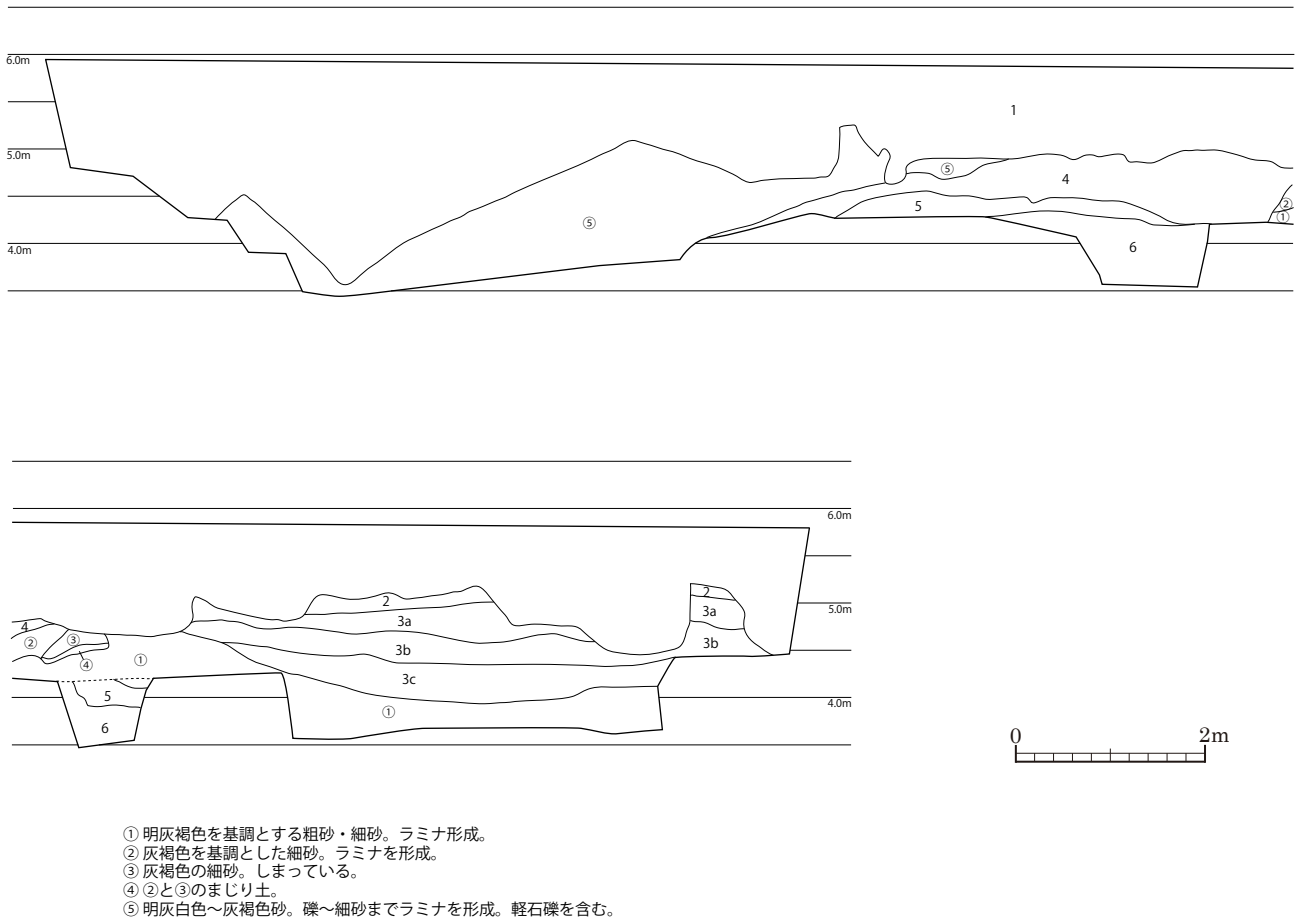


Fig.55 3区東壁(S=1/80)

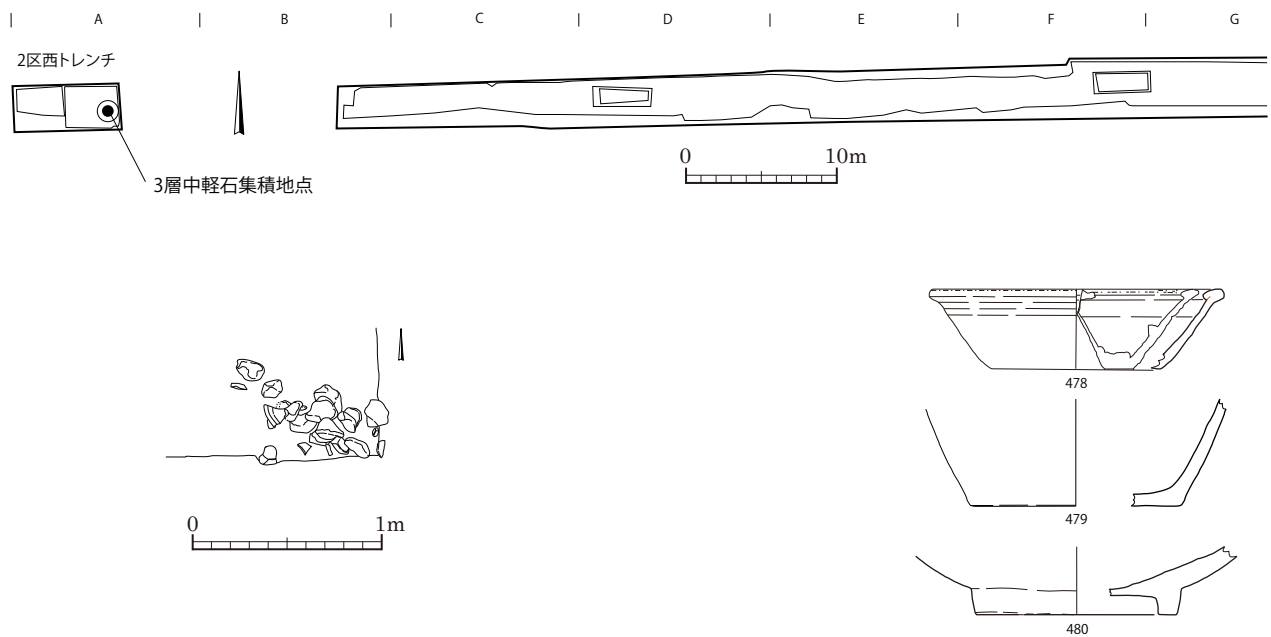


Fig.56 2区西トレンチ 3層中軽石集積(位置S=1/500, 遺構S=1/40, 遺物S=1/6)

- 4層 黄褐色2.5Y5/3を基調とする細砂，下部は粗砂。
- 5層 灰黄色2.5Y6/2細砂。

#### 2 I 区東壁

- 1層 鹿児島高等農林学校時代以降の表土・攪乱層。
- 2層 暗灰黄色2.5YR4/2細砂。
- 3層 灰黄褐色10YR5/2細砂 2～3cm大のパミスまじり。
- 4a層 にぶい黄褐色10YR5/3細砂。

#### 2 I 区北壁

- 4b層 灰黄褐色10YR5/2シルト質砂。1cm大のパミスまじり。
- 4c層 灰黄褐色10YR5/2細砂。
- 5a層 粗砂・礫。下部には15cm大の軽石礫まじり。
- 5b層 上部粗砂，下部細砂。
- 5c層 にぶい黄色2.5Y6/3粗砂。軽石礫まじり。

#### 2g・h区北壁

- 1～4層は東壁に同じ。
- 5層 4層と6層の混土に，2.5Y6/2シルトがブロック状にまじる。
- 6層 にぶい黄褐色10YR5/3粗砂，1cm大のパミスまじり。
- 7層 灰黄褐色10YR5/2細砂。
- 8層 灰黄褐色10YR6/2細砂を基調とし，黄色粗砂や10cm大のパミスまじり。

#### 2A区西壁

- 1層 鹿児島高等農林学校時代以降の表土・攪乱層。
- 2層 暗灰黄色2.5Y5/2シルト質砂，粗砂まじり。
- 3層 黄褐色10YR5/3シルト質砂。
- 4層 暗灰黄色10YR5/2細砂。
- 5層 灰黄色10YR6/2細砂。
- 6層 暗灰黄色2.5Y5/2 粗砂まじり細砂。
- 7層 灰黄褐色10YR5/2細砂。
- 8層 灰黄褐色10YR6/2細砂。

#### 3区 (Fig.55, PL.67)

- 1層 鹿児島高等農林学校時代以降の表土・攪乱層。
- 2層 明灰褐色細砂。粗砂ブロックまじり。
- 3a層 明灰褐色細砂。締まり良い。
- 3b層 灰褐色シルト。
- 3c層 灰褐色シルト。粘質。
- 4層 明灰白色細砂を基調として，灰褐色シルトや細砂ブロックを含む。
- 5層 明灰褐色砂利。
- 6層 明褐色～明灰白色粗砂～細砂。ラミナ形成。

## 5. 遺構・遺物

ここでは、上層から下層の順に、遺物・遺構を紹介する。遺跡全体の遺物集計はTab.7に、遺物の詳細は観察表Tab.8に記した。

### 1層・表土・攪乱層出土遺物 (Fig.57~63, PL.51~57)

本調査区では、鹿児島大学の前身である「鹿児島高等農林学校」時代の遺物とみられるものが多量に出土しているため紹介する。

鹿児島高等農林学校の寄宿舎で使用されていたと考えられる食器は、青の呉須で右から左方向に「鹿高農對岳寮」と1点ずつ手書きされる染付碗・皿類である。素地と呉須の様子から、碗・皿ともには2類に大別し、碗は形状からさらにa・bに細別した。1類はやや肌色の素地をもった白磁で、呉須の文字はややくすんだ色調を呈す。2類は青白色素地の白磁の口縁部に浅い段を持ち、口縁部と高台に鮮やかな呉須の圏線を二条巡らせ、1類と同様な文字を書く。

碗1a類は体部が直状に開く浅めの碗である(337~340)。碗1b類は体部が深めの碗である(341~350)。皿1類は口縁部が内弯するものである(351~360)。碗2類は、口縁部に受けのある井碗である(361~362)。皿2類は体部が屈曲して開く皿である(363~365)。

その他の碗類として、茶碗として半筒碗(366・367)や口唇部にむかって一段屈曲しながら厚みを減ずる碗(368)、やや内弯気味のもの(369・370)、体部が直状に立ち上がる碗(371・372)などがある。飯碗としては、体部が直状に開く浅めの碗である(373~376)、やや体部が膨らむ碗(377~380)、口縁部が屈曲し受けを形成する井碗(387~392)などが認められる。外面が草花文で飾られるものが多いが、370は外底面に「大日本北山製」、367は、「波佐見焼」のスタンプがみられる。390は生協の井碗<sup>1)</sup>、36は花輪内に「禄」と「寿」の旧字体をスタンプし、387・388は外面に笹葉文を描くクロム青磁で、これらは本調査区に隣接する2006年度の立会調査でも採集されている<sup>2)</sup>。

井碗の蓋は、大半が傘状の直状の開く体部から端部が内側に折れるもので、外面は草花文で飾られる(381~383)。また、ボウル状の体部から口縁部がくの字に外反するものもある(383)。ほかにも緑色の圏線をもつもの(385)は、生協井碗に類似しており、384は実験器具の蓋と考えられる。

皿は有田焼イゲ皿・八角皿などがあり、また、サイズバリエーションがある。393・394は比較的小さな皿である。395は八角皿とみられるもので、内面に魚が描かれる。369はウィローパターンの伊万里焼の銅版転写大皿である。19~20世紀のものと考えられる。397も有田焼のイゲ皿であろう。398は有田焼の皿で、内面に鶴2羽が描かれ、外底面には「香蘭社」のロゴがスタンプされる。399~401は「日本硬質陶器株式会社」(現・ニッコー株式会社)の「硬質陶器プレート」で、全体に細かい貫入がみられる特徴があり、青・緑色のスタンプのロゴや、陰刻するものもみられる(401)。農学部敷地内の調査で比較的多く出土し、器種は皿に限定されている。

402は苗代川の土瓶蓋である。ほかにも近現代の急須が得られている(403~406)。

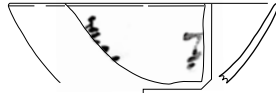
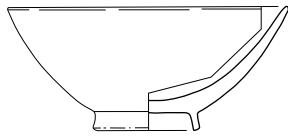
407は硯で裏面に「縣立濱田中学校 土田吾郎」と手書きで線刻される。鹿児島高等農林学校・鹿児島大学関係者ではないようである<sup>3)</sup>。

408は半銭で、「1/2 SEN」の文字が読み取れる。19世紀後半に流通したものである。

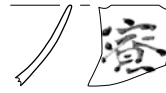
ガラス瓶は、薬品(409~417)、ビール(418)、インク(420~427)、食品(428)化粧品(429・430)などの瓶とみられるものが得られている。

一般用薬瓶として、409の「東京尾澤製」、411の「サツマ 全治水 松山製」があり、インキン・タムシ・ミズムシの治療薬である。410は「目薬精錫水」と陽刻される目薬である。医療用薬瓶に「柿原醫院」がある(416)。418は、「大日本麦酒」のビール瓶である。製瓶会社は東洋ガラス株式会社と考えられる。

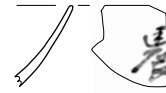
インク瓶は数種あり、円筒形を呈するもの(420~423)のうち、外底面に「M」が陽刻されるものは「丸善インキ瓶」である。424は低い四角柱状を呈し、外底面に「☆」の陽刻がある。「サンスター」製のインク瓶であると考えられる。



338



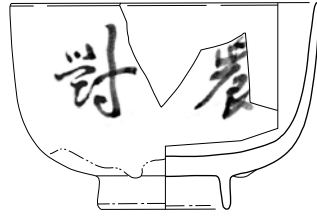
339



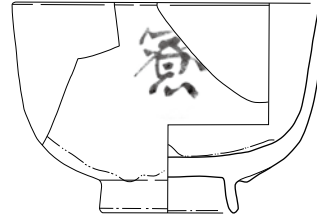
340



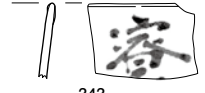
337



341



342



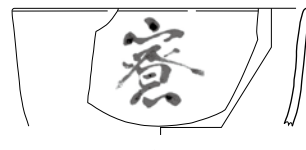
343



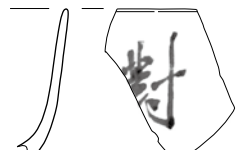
344



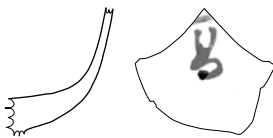
346



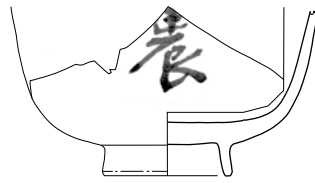
347



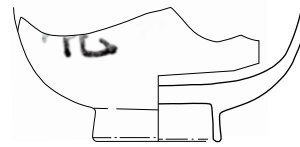
348



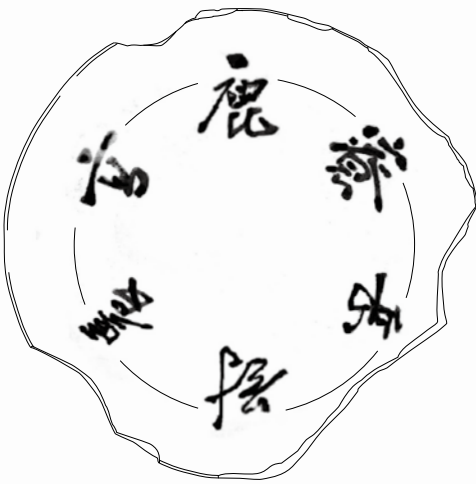
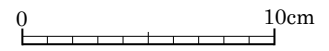
345



349



350



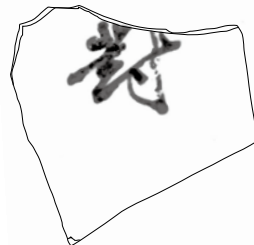
351



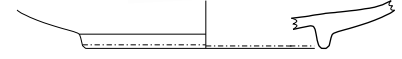
352



353



354



355

Fig.57 表土・攪乱層出土遺物(鹿兒島高等農林学校寄宿舎食器1)(S=1/3)



PL.51 表土・攪乱層出土遺物(鹿兒島高等農林学校寄宿舎食器1)



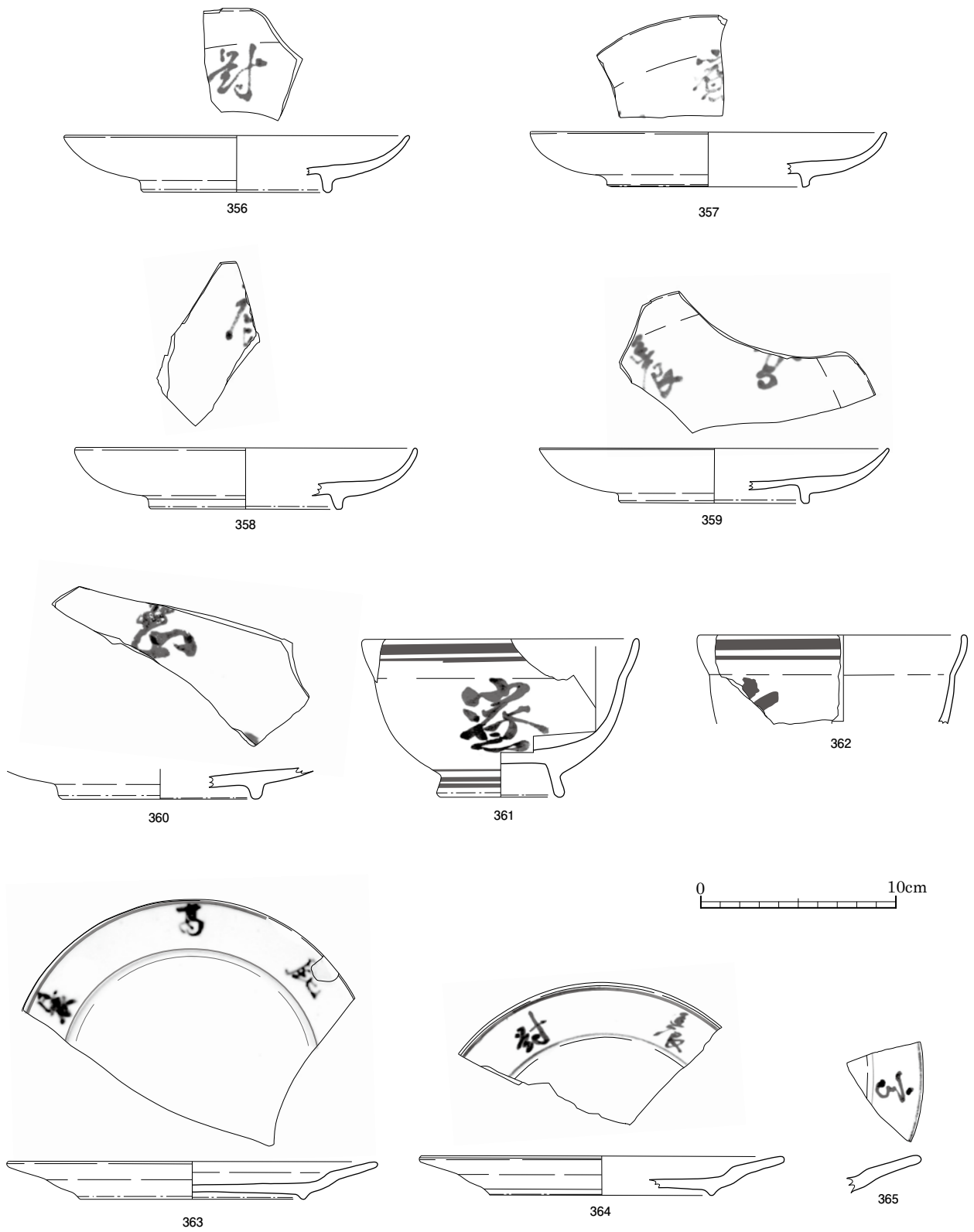
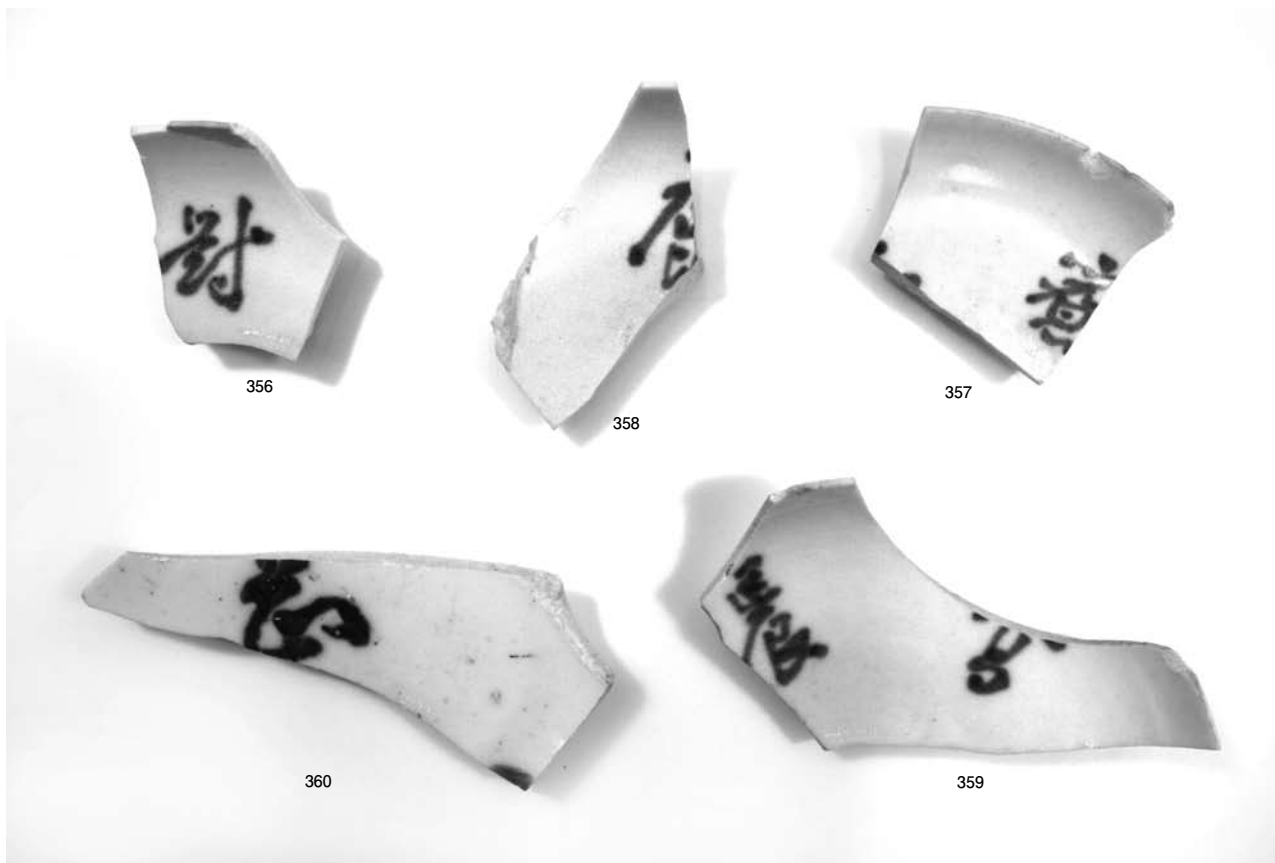


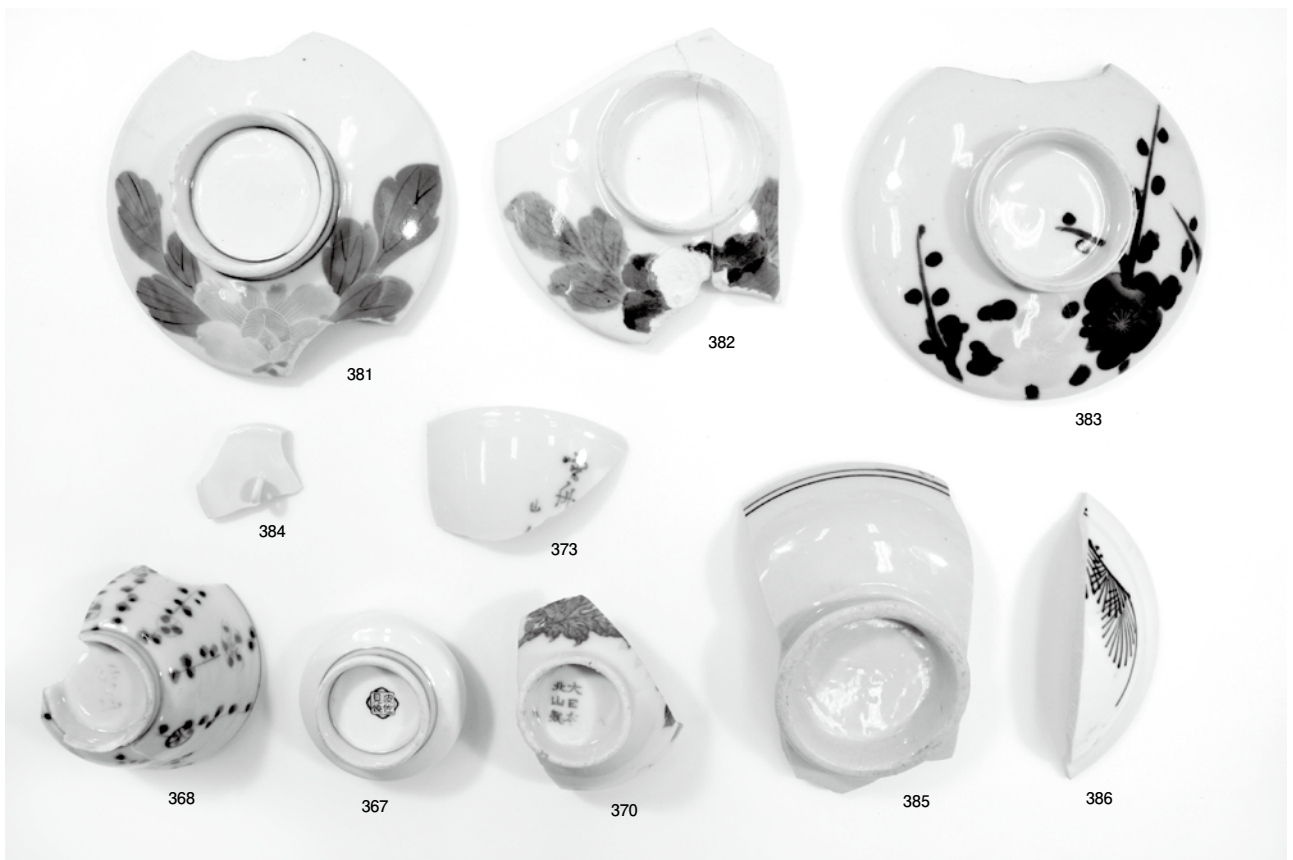
Fig.58 表土・攪乱層出土遺物(鹿児島高等農林学校寄宿舎食器2)(S=1/3)



PL.52 表土・攪乱層出土遺物(鹿児島高等農林学校寄宿舎食器2)



Fig.59 表土・攪乱層出土遺物(碗・蓋)(S=1/3)



PL.53 表土・攪乱層出土遺物(碗・蓋)

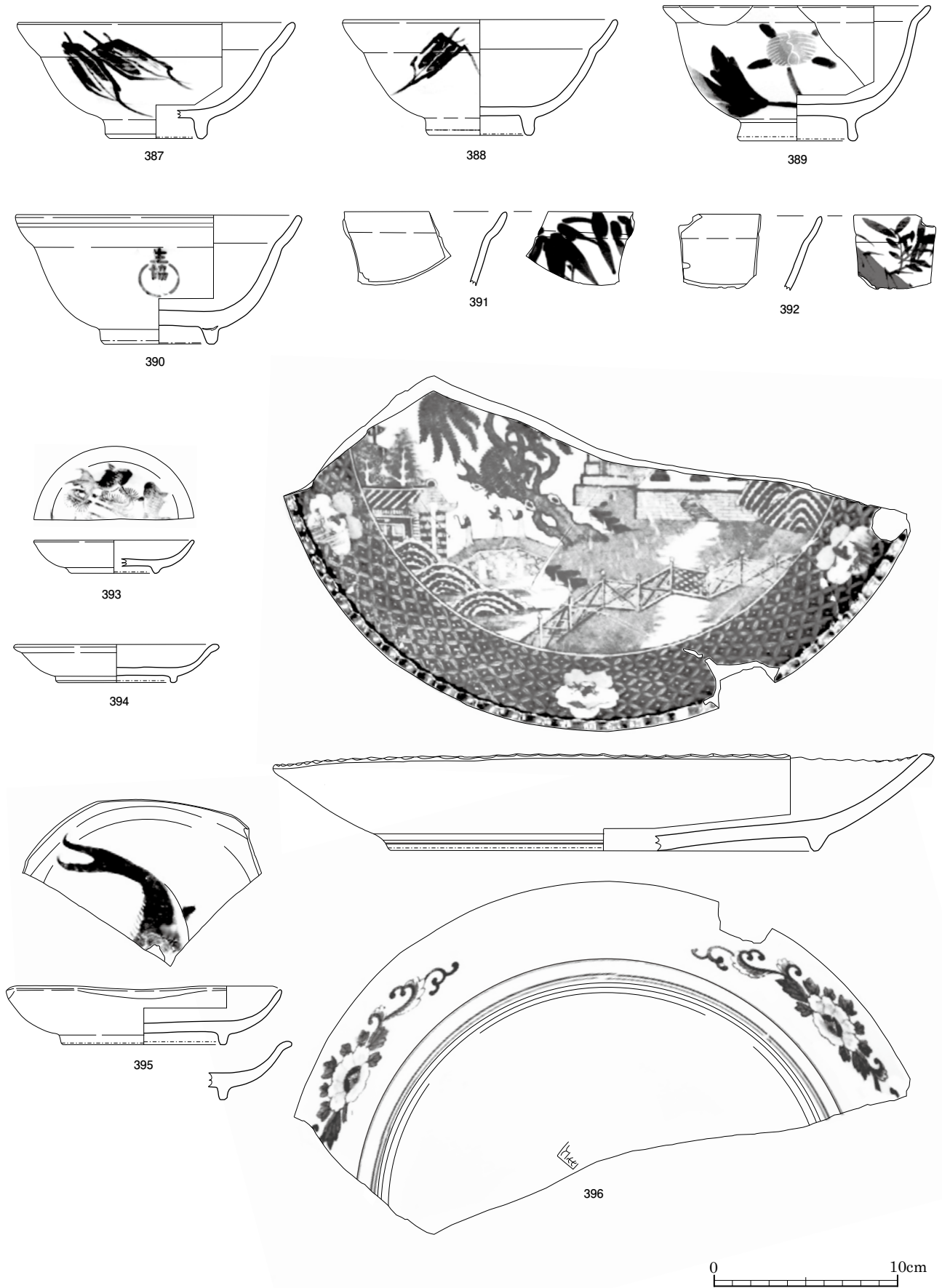
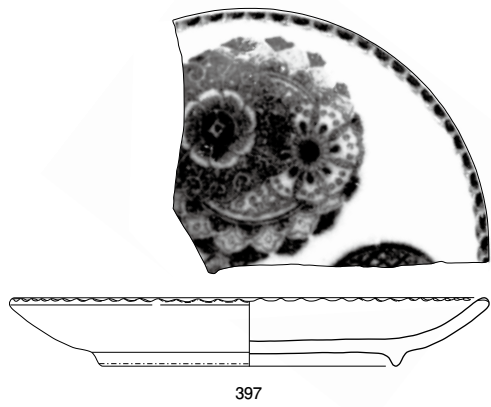


Fig.60 表土・攪乱層出土遺物(丼・皿)(2)(S=1/3)

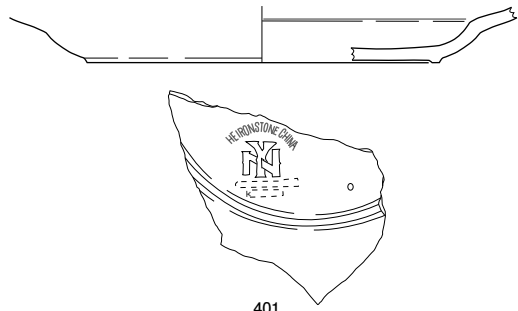


PL.54 表土・攪乱層出土遺物(丼・皿)

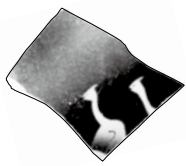




397



401



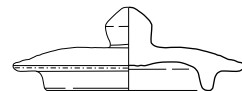
398



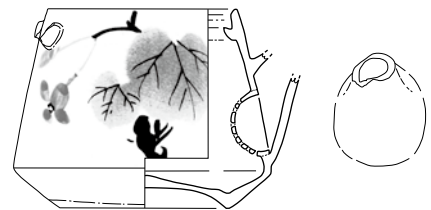
399



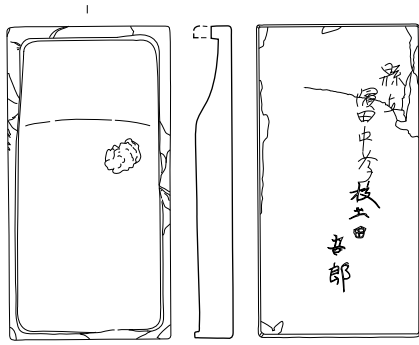
400



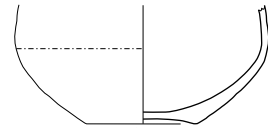
402



403



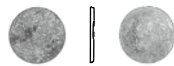
407



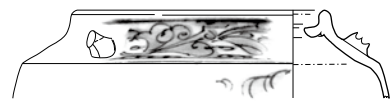
404



405



408



406



Fig.61 表土・攪乱層出土遺物(皿その他) (S=1/3)



PL.55 表土・攪乱層出土遺物(皿その他)

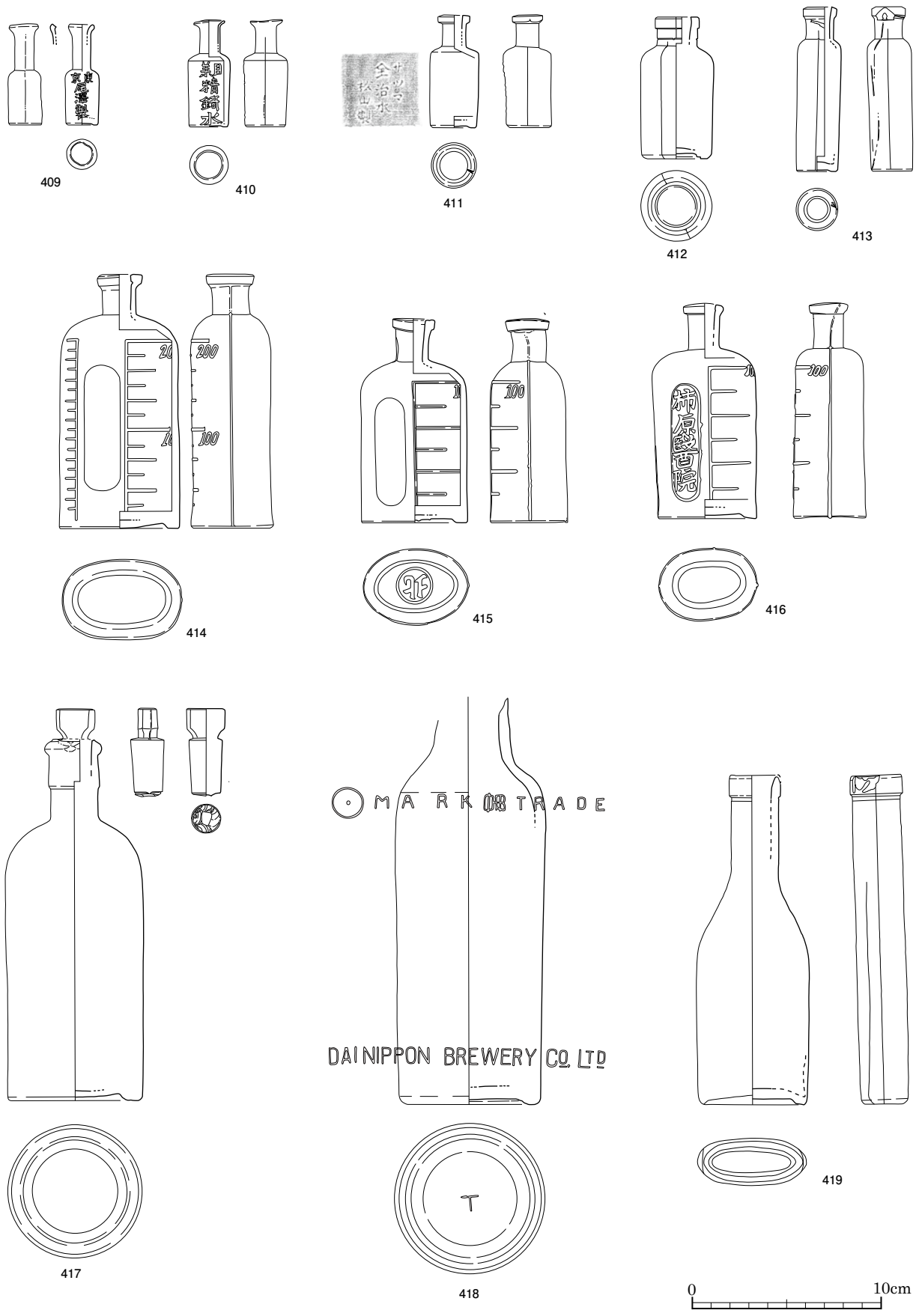


Fig.62 表土・攪乱層出土遺物(ガラス製品1) (S=1/3)



PL.56 表土・攪乱層出土遺物(ガラス製品1)

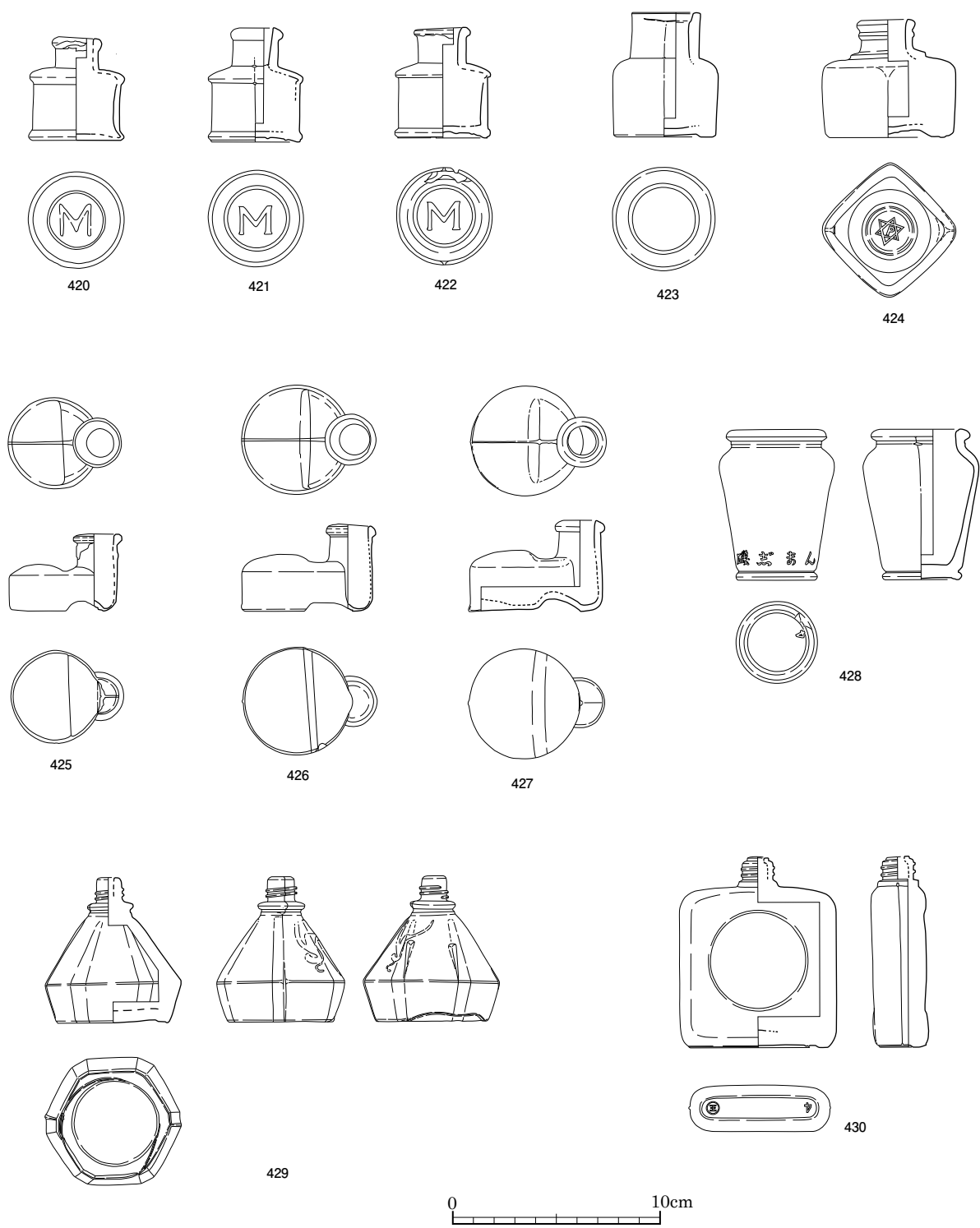


Fig.63 表土・攪乱層出土遺物(ガラス製品2) (S=1/3)



PL.57 表土・攪乱層出土遺物(ガラス製品2)



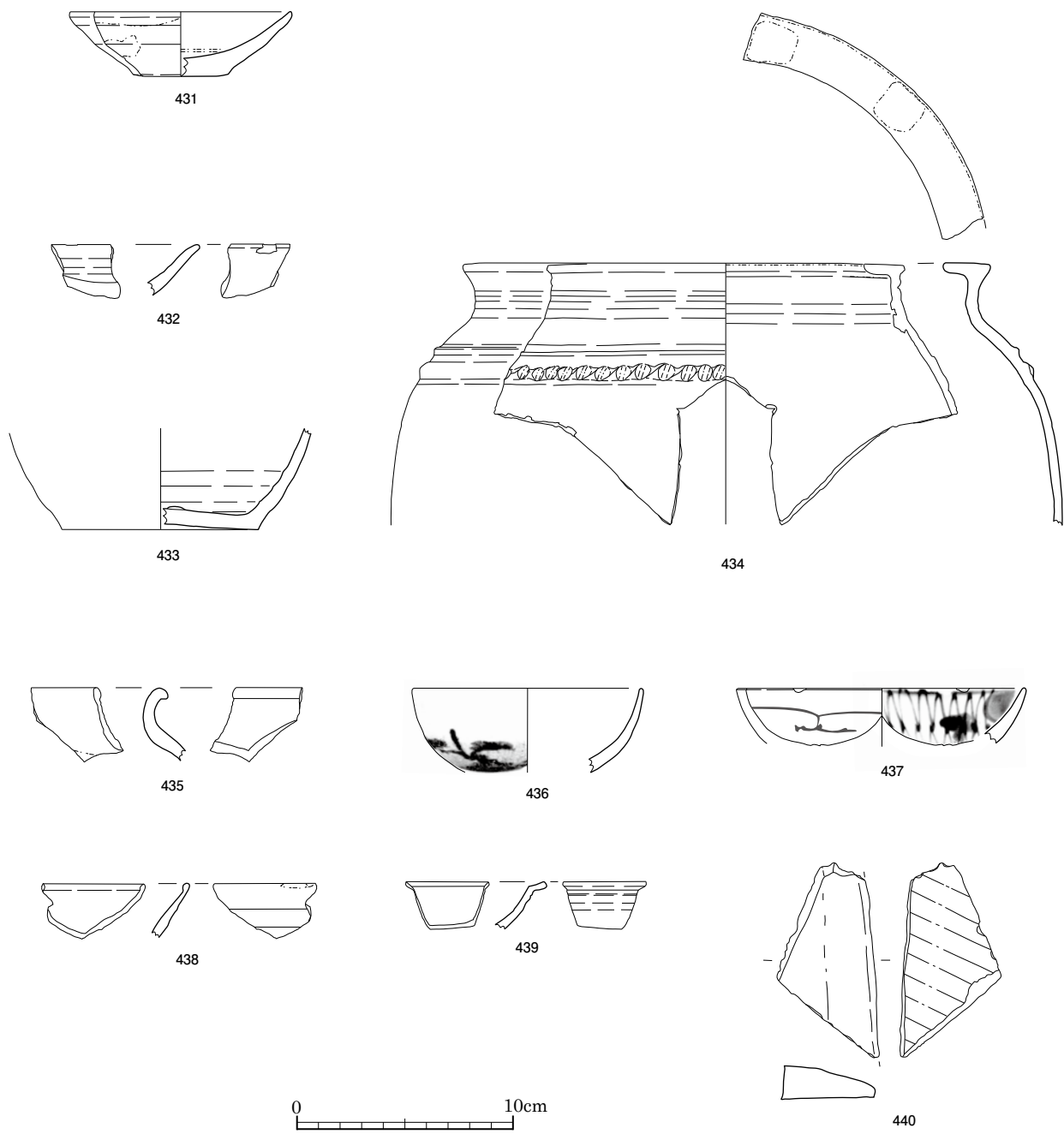
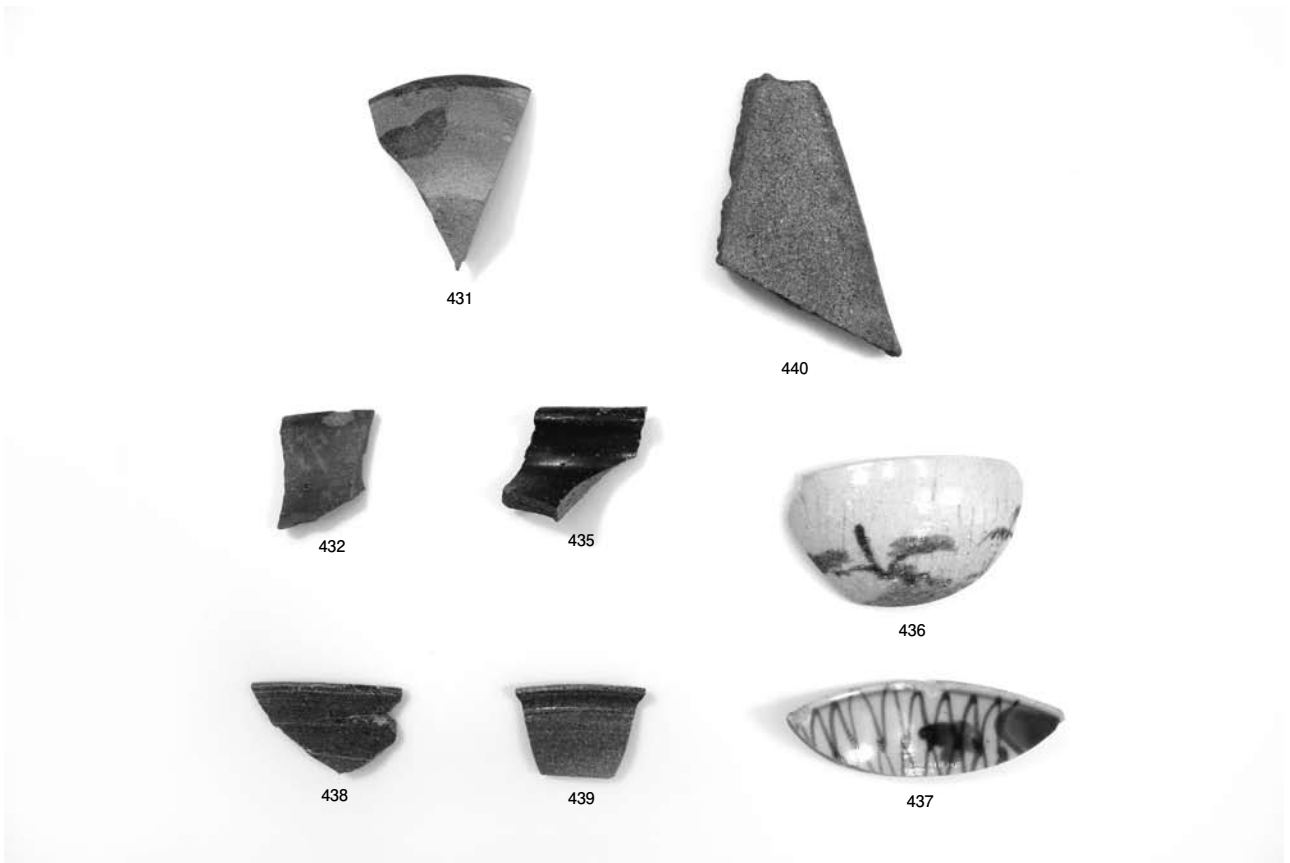


Fig.64 2層・3層出土土器(S=1/3)



PL.58 2・3層出土遺物

428はいそじまん株式会社製の海苔「いそじまん」である。底部付近に「磯志“まん”」の陽刻がある。2006年度の立会調査でも出土している<sup>5)</sup>。

429・430は化粧品瓶と考えられるものである。429は上面観が6角形を呈する。

### 2層出土遺物 (Fig.64, PL.58)

1区で出土した加治木・始良系皿片1点(431)を図化した。

### 3層出土遺物 (Fig.64, PL.58)

3層及び3a層中からは、須恵器の坏(432)、苗代川の陶器は壺底部片(433)、肩部に縄目文が巡り、口唇部には目痕が認められる甕(434)、肥前系陶器壺(435)、肥前系碗(436)・皿(437)、産地不明陶器の碗(438)、肥前陶器唐津溝縁皿(439)などが得られている。

砂岩製の砥石(440)も出土している。

### 3b層上面遺構 (Fig.56・65, PL.64・66)

1区において、3条の浅い溝跡が検出された(SD4~6)。方向は北東-南西で共通しているが、性格は不明である。遺物の出土はない。

2区3層中より遺物のまじる軽石集積遺構が検出されている。北西-南東方向に延びるものと考えられる(Fig.56)。

### 4層上面検出遺構 (Fig.66, PL.64)

1区において犁跡と考えられる細く浅い溝跡数条、堤跡? 1基、溝跡(SD8)が検出されている。堤跡は軽石まじりのシルトでつくられており、北西-南東方向に延びるものと考えられる。その東側に溝跡(SD8)が付随し、その遺構よりも東側は河川堆積物であるために、堤防と判断した。2区3層中で検出された軽石集積遺構に方向が類似し、同遺構もその東側を河川堆積物が覆うことから、同一の遺構である可能性もある。SD8からは時期不明の白磁片(608)が出土している。

### 4層出土遺物 (Fig.67, PL.59)

中世~近世の遺物が得られている。中世としては白磁碗(441)、陶器播鉢(443)、瓦質土器(444)などがある。

近世以降の遺物としては、苗代川の土瓶(447・448)・播鉢(449)・壺(450・451)などがあり、肥前系として唐津(452)・碗(455)などが確認される。他の陶磁器は産地・年代不詳であるが、近世以降のものとする。

古銭は銘の判読可能なものは寛永通宝のみである(456~459)。456・459などは数枚が付着している。ほかにも窯道具であるトチン(637)が得られている。

### 5層上面検出遺構 (Fig.70・PL.65)

土坑1基(SK1)と畦跡(AZ1-1)が1E・F区で検出された。SK1は浅く性格は不明である。AZ1-1は、5層上面で検出されたが、1区南壁断面から判断すると、畦頂部は4層上面のレベルを超えている。壁面土層の観察からは何度も作り替えが行なわれた形跡がある。6層上面で検出されたAZ1-2・3もこれを物語る。畦跡土層については1区南壁(Fig.53)参照。

### 5層出土遺物 (Fig.68, PL.60)

ほとんどが2区の河川堆積物上部から出土したもので、その土質のため、遺物の残りが比較的良い。中世~近世の遺物が得られている。

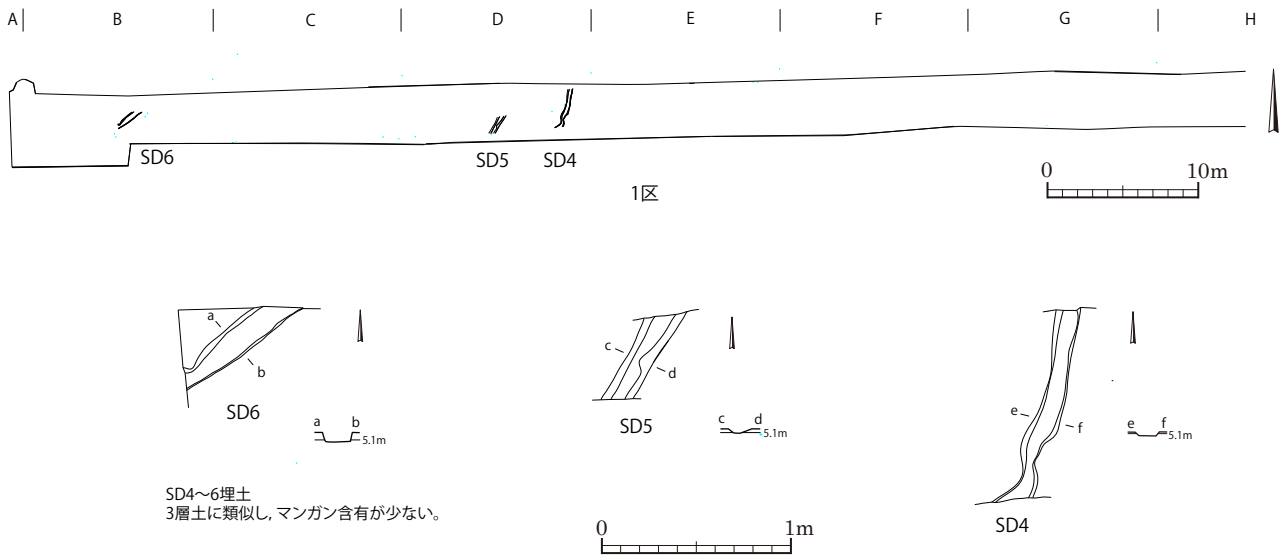


Fig.65 1区 3b層上面遺構(配置:S=1/200, 個別遺構:S=1/40)

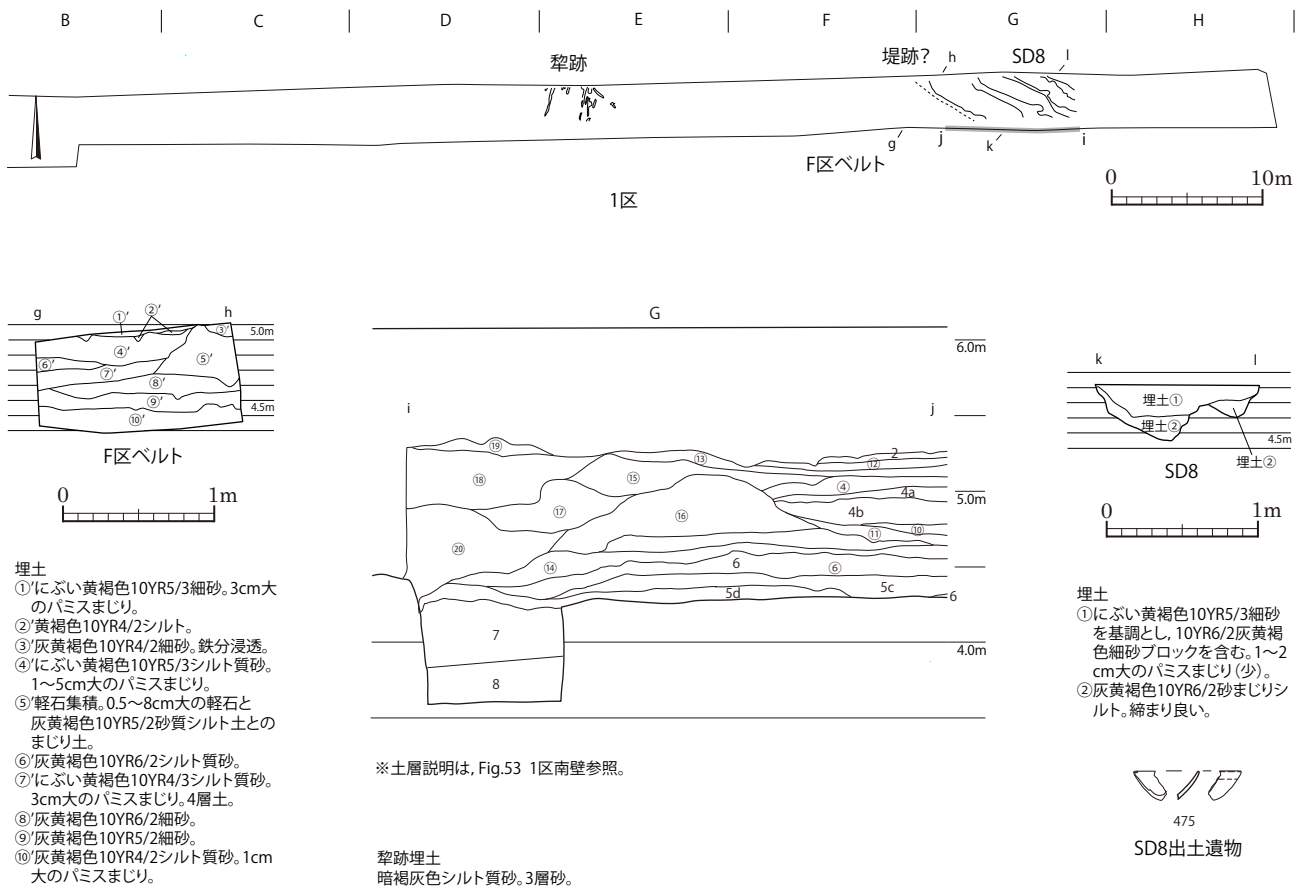


Fig.66 4層上面検出遺構(配置:S=1/200, 個別遺構:S=1/50, 遺物:S=1/6)

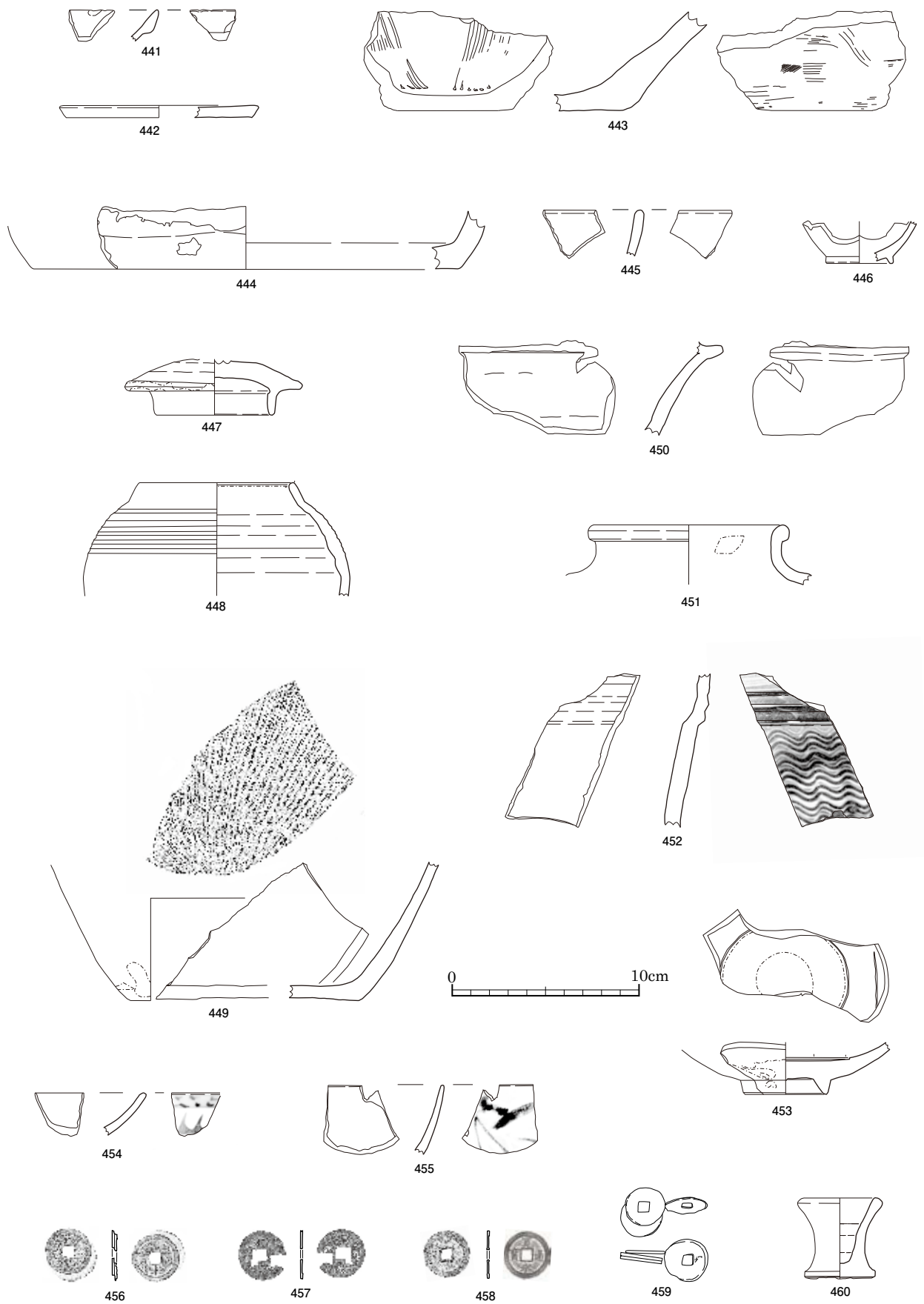
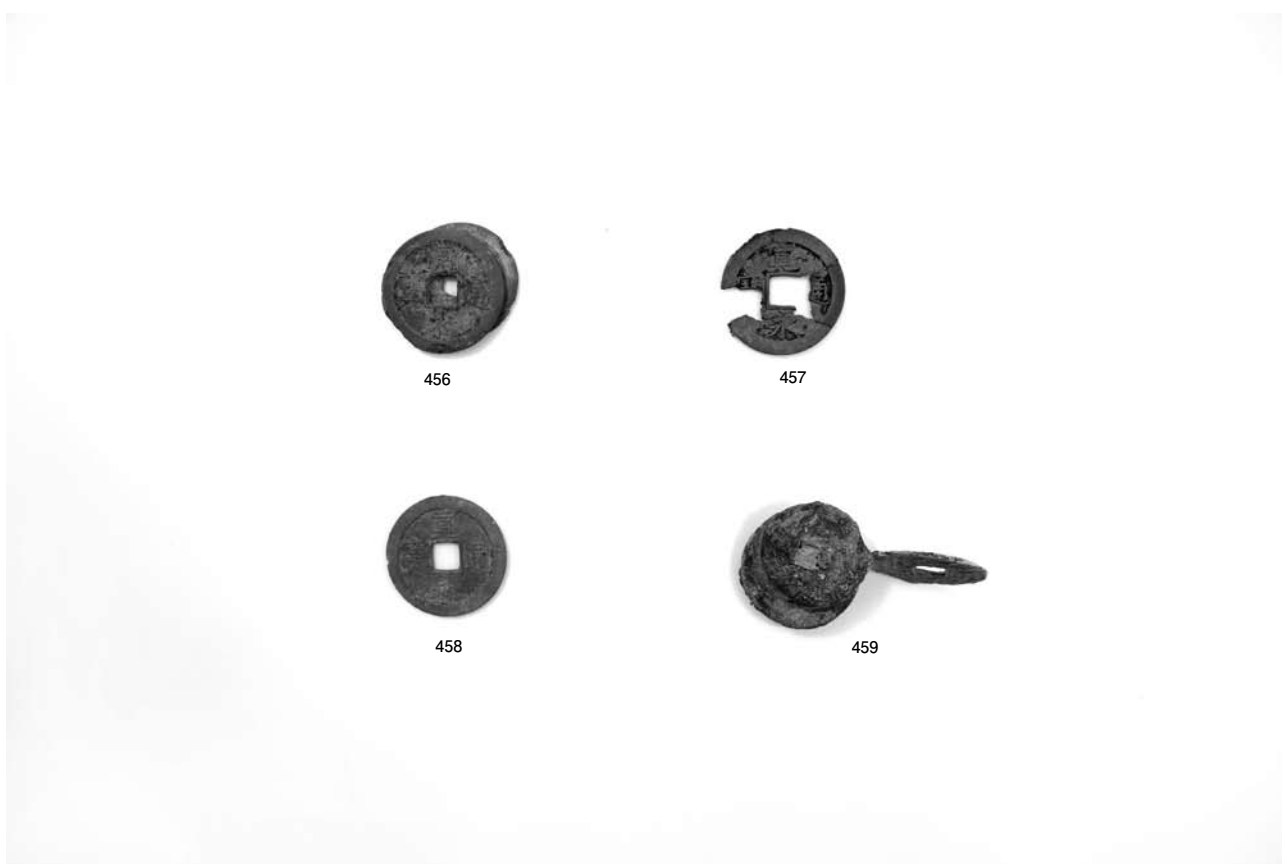


Fig.67 4層出土遺物(S=1/3)



PL.59 4層出土遺物



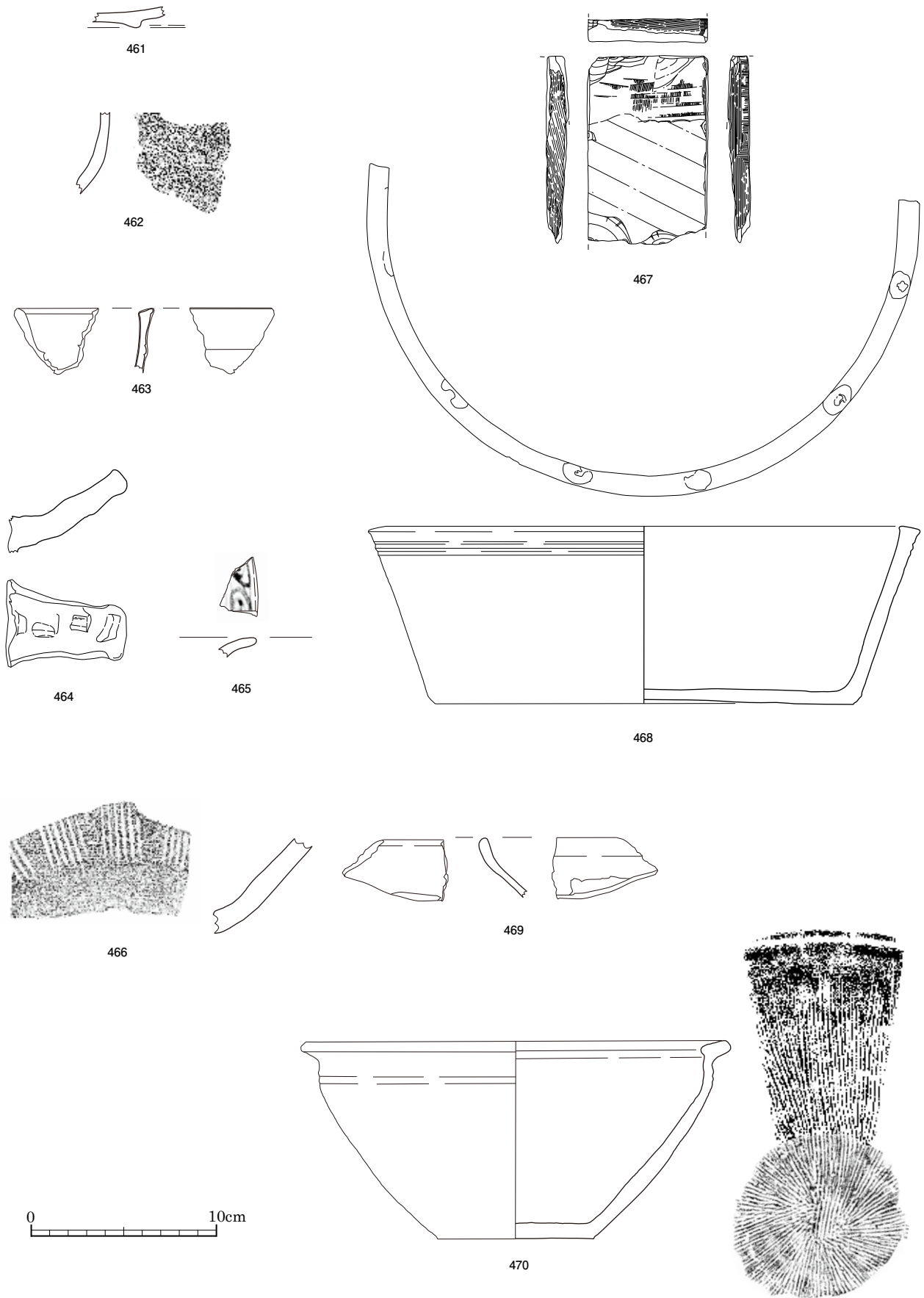


Fig.68 5層出土遺物(S=1/3)



PL.60 5層出土遺物

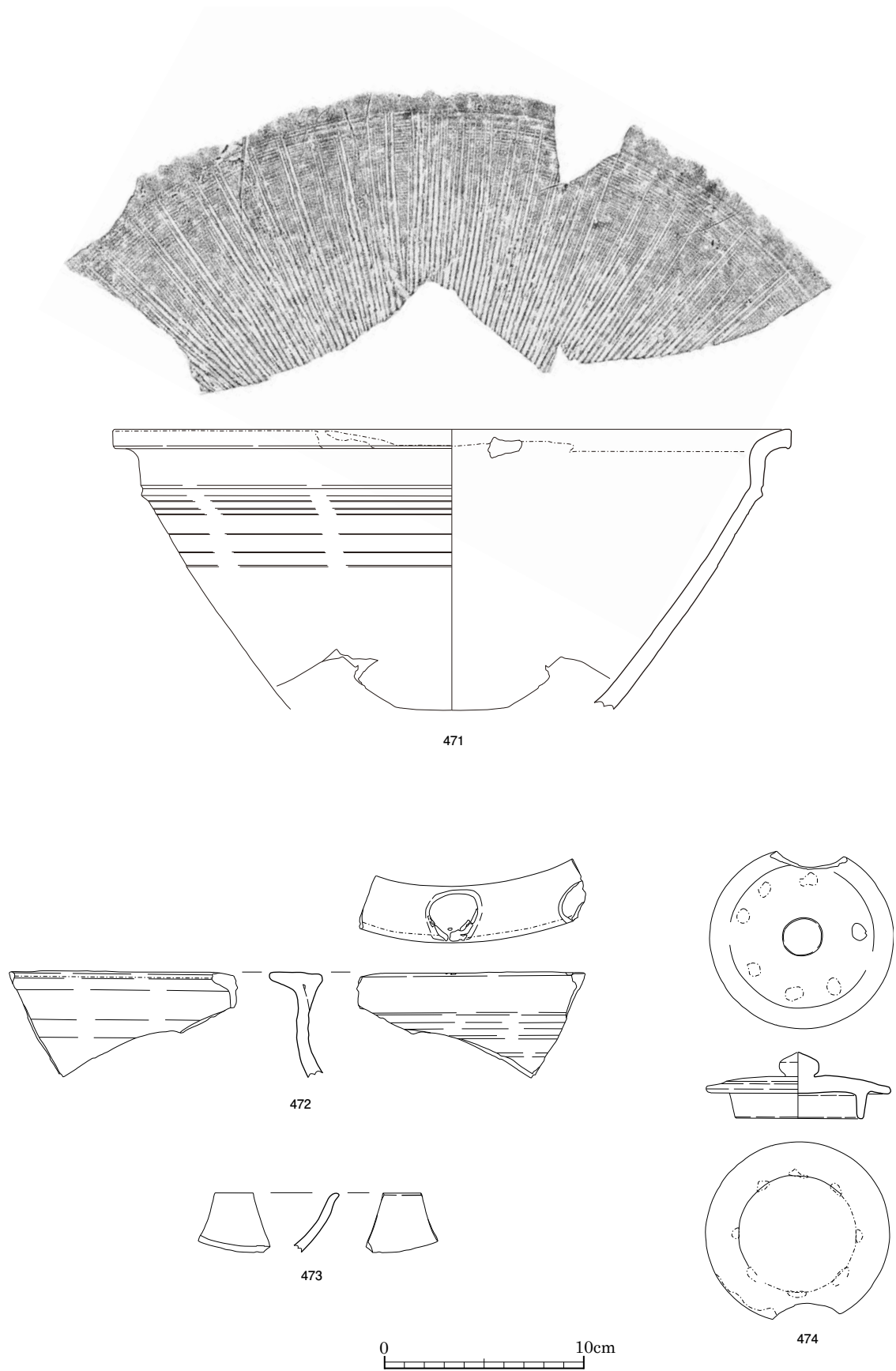


Fig.69 6層出土遺物(S=1/3)



471



472



474



473

PL.61 6層出土遺物

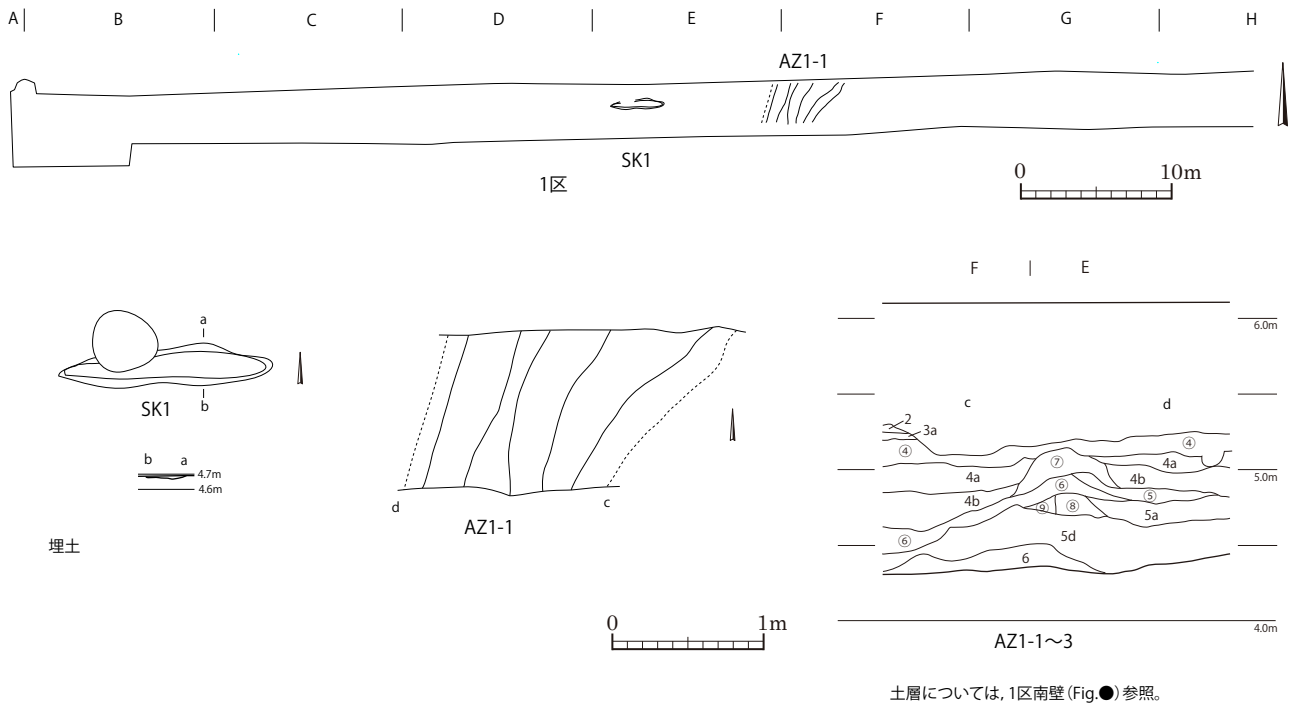


Fig.70 1区5層上面遺構(配置:S=1/200, 個別遺構:S=1/50)

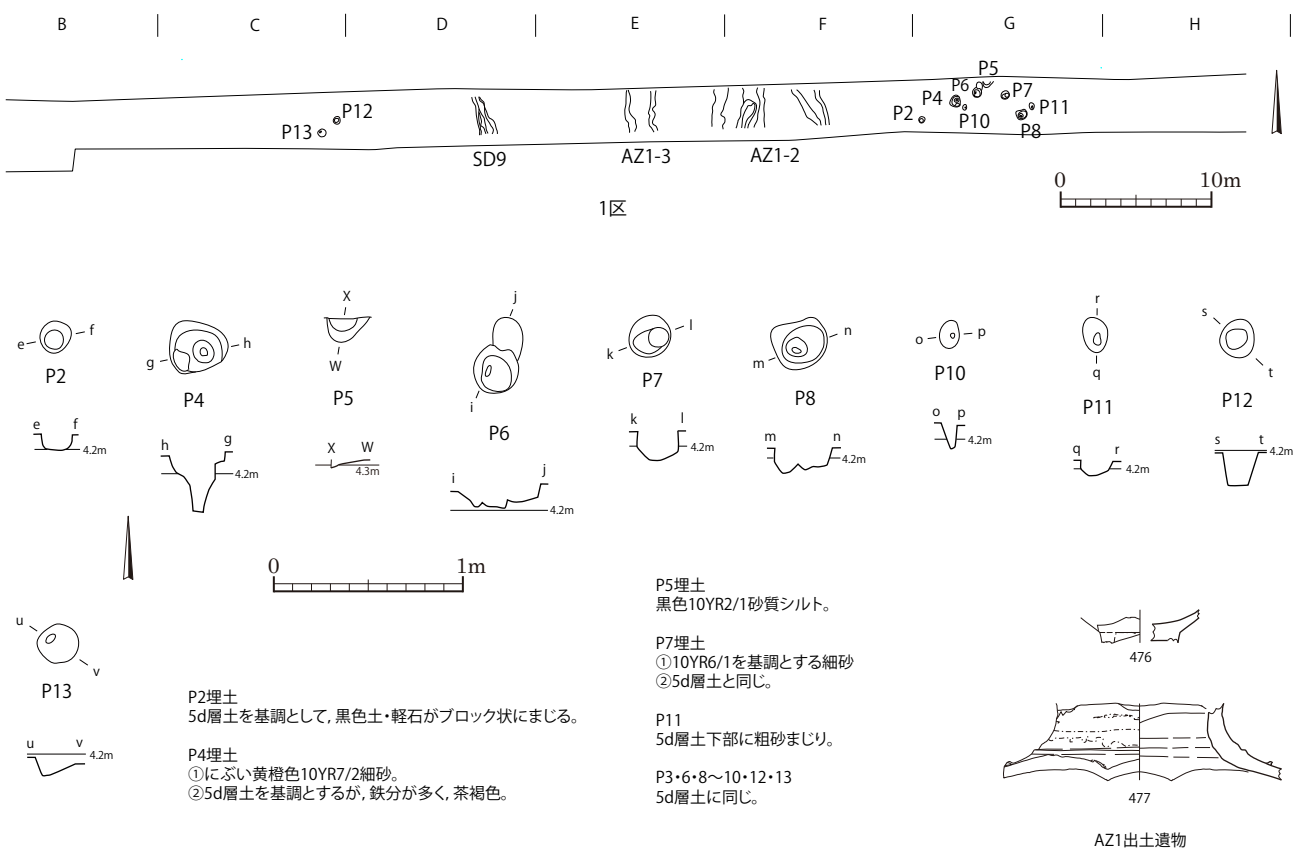


Fig.71 1区6層上面遺構(配置:S=1/200, 個別遺構:S=1/40, 遺物:S=1/6)

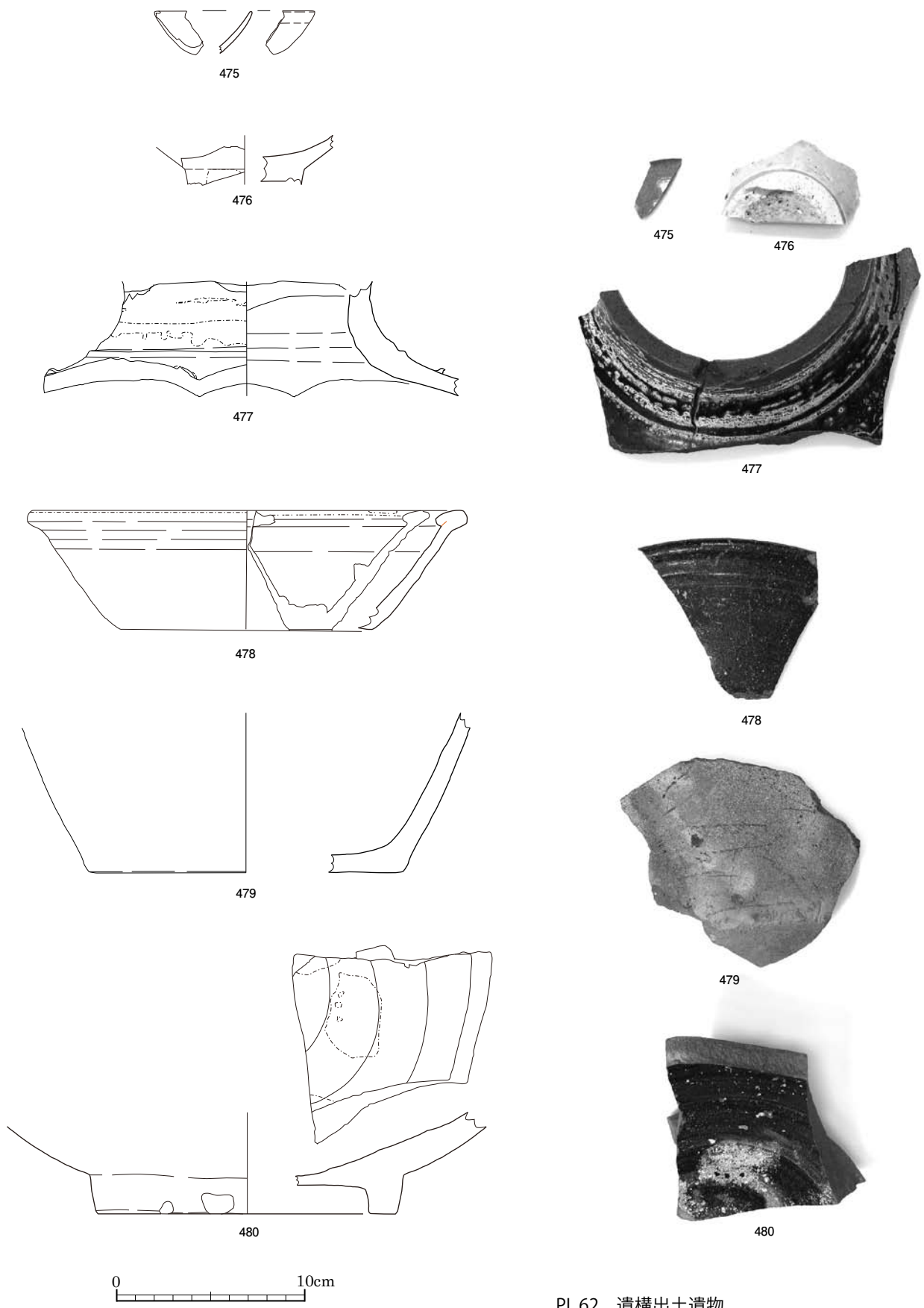


Fig.72 遺構出土遺物

PL.62 遺構出土遺物



Tab.7 遺物観察

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
337	1トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 口径(11.2cm) 底径3.8cm 器高4.9cm 1909～1934年?
338	1トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	口～胴	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 口径(10.8cm) 1909～1934年?
339	1トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	口	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 1909～1934年?
340	1トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	口	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 1909～1934年?
341	1トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 口径(12.2cm) 底径5.0cm 器高8.2cm 1909～1934年?
342	1トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 口径(12.3cm) 底径5.2cm 器高8.4cm 1909～1934年?
343	1トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	口	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 1909～1934年?
344	1トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	口～胴	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 1909～1934年?
345	攪乱	磁器	飯碗	体	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 1909～1934年?
346	1トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	口～胴	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 口径(12.6cm) 1909～1934年?
347	2区・攪乱	磁器	飯碗	口～胴	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 口径(11.6cm) 1909～1934年?
348	1区トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	口～胴	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 1909～1934年?
349	1区トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	体～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 底径(5.0cm) 1909～1934年?
350	1区トレンチ・攪乱	磁器	飯碗	体～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 底径4.9cm 1909～1934年?
351	1区・攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 口径18.6cm 底径10.4cm 器高3.3cm 全面施釉(豊付：露胎) 1909～1934年?
352	3区・攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 口径(18.2cm) 底径(10.2cm) 器高3.1cm 1909～1934年?
353	1区・攪乱	磁器	皿?	体～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 底径(9.4cm) 1909～1934年?
354	攪乱	磁器	皿	体～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 底径(10.2cm) 1909～1934年?
355	攪乱	磁器	皿?	体～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 底径(8.6cm) 1909～1934年?
356	1トレンチ・攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 口径(17.8cm) 底径(9.6cm) 器高2.9cm 1909～1934年?
357	1トレンチ・攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 口径(18.4cm) 底径(9.8cm) 器高2.8cm 1909～1934年?
358	1区・攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 口径(17.4cm) 底径(9.8cm) 器高3.2cm 1909～1934年?
359	1区トレンチ・攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 口径(18.0cm) 底径(9.6cm) 器高2.8cm 1909～1934年?
360	1区・攪乱	磁器	皿	体～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 底径(10.2cm) 1909～1934年?
361	攪乱	磁器	丼碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 口径(14.0cm) 底径(6.0cm) 器高8.1cm 1909～1934年?
362	1区・攪乱	磁器	丼碗	口	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 口径13.6cm 1909～1934年?
363	攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 口径(18.8cm) 底径(11.4cm) 器高2.0cm 1909～1934年?
364	攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 豊付：露胎 口径(18.8cm) 底径(11.4cm) 器高2.0cm 1909～1934年?
365	攪乱	磁器	皿	口	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	鹿児島高等農林学校寄宿舎食器「鹿高農對岳寮」 1909～1934年?
366	2A区・攪乱	磁器	茶碗	口～胴	釉：透明 素地：白 文様：(青)・(緑)	外：草花 口径(5.2cm) 近現代
367	攪乱	磁器	茶碗	体～底	釉：透明 素地：白 文様：(青)・赤褐	高台：圏線 外底：「波佐見焼」 底径3.9cm 近現代
368	1区・攪乱	磁器	茶碗	口～底	釉：明緑灰 素地：白 文様：(コバルトブルー)	外：蔓・圏線 豊付：露胎 口径8.4cm 底径3.8cm 器高4.7cm 近現代
369	1区・攪乱	磁器	茶碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(緑)・灰オリーブ	外：松・詩・圏線・字款 口径(7.6cm) 底径3.8cm 器高4.8cm 近現代
370	1区・攪乱	磁器	茶碗	口～底	釉：透明 素地：灰白 文様：(コバルトブルー)・(明赤灰)	外：草花・「向信」・字款 高台外、「大日本北山製」 口径(7.6cm) 底径3.8cm 器高4.8cm 近現代
371	攪乱	磁器	茶碗	完形	釉：透明 素地：灰白 文様：暗オリーブ褐	外：草花(型紙刷) 豊付：露胎 口径7.6cm 底径2.9cm 器高5.3cm 近現代
372	攪乱	磁器	茶碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)・暗オリーブ灰	外：竹 豊付：露胎 口径7.3cm 底径3.2cm 器高5cm 近現代

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
373	攪乱	磁器	飯碗	口～胴	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	外：「雪舟」ほか 口径(11.2cm) 近現代
374	1区・攪乱	磁器	飯碗	口～底	釉：透明 素地：灰白 文様：(緑)・灰赤	外：草花・扇 畳付：露胎 口径(11.4cm) 底径4.0cm 器高4.9cm 近現代
375	1区・攪乱	磁器	飯碗	口～底	釉：透明 素地：灰白よりも白味が強い 文様：(緑)	外：草花ほか 畳付：露胎 口径(11.4cm) 底径4.0cm 器高5.2cm 近現代
376	1区・攪乱	磁器	飯碗	口～底	釉：透明 素地：灰白よりも白味が強い 文様：(青)	外：雷文内に「寿」 畳付：露胎 口径(11.1cm) 底径3.8cm 器高4.9cm 近現代
377	攪乱	磁器	飯碗	体～底	釉：透明 素地：灰白に類似 文様：(青)・(緑)	外：雲 畳付：露胎 底径(3.6cm) 近現代
378	1区・攪乱	磁器	飯碗	口～底	釉：(外)明緑灰類似 (内)透明 素地：白 文様：(緑)	外：花卉内に「禄」 畳付～高台内面：露胎 口径(9.8cm) 底径(3.3cm) 器高4.7cm 近現代
379	攪乱	磁器	飯碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	外：雲・花・波・船 畳付：露胎 口径(11.4cm) 底径4.9cm 器高6.4cm 近現代
380	1区・攪乱	磁器	飯碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー) ・明赤灰・オリーブ褐	外：草花 畳付：露胎 口径(11.4cm) 底径5.0cm 器高6.9cm 近現代
381	2区・攪乱	磁器	井蓋	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(青)・ (緑)・明褐灰・オリーブ灰	外：草花 摘：圏線 口径12.2cm 摘径5.4cm 器高3.1cm 近現代
382	1区・攪乱	磁器	井蓋	摘～口	釉：透明 素地：白 文様：暗紫灰・(青) (緑)	外：草花 口径(5.4cm) 器高3.2cm 近現代
383	1区・攪乱	磁器	井蓋	口～摘	釉：透明 素地：灰白よりも白味が強い	外：草花 口径12.7cm 最大径13.0cm 摘部径5.4cm 器高2.9cm 近現代
384	攪乱	磁器	蓋	摘～口	釉：透明 素地：灰白	器高1.6cm 口径4.7cm 近現代
385	1区・攪乱	磁器	井蓋	口～摘	釉：透明 素地：灰白 文様：(緑)	外：グリーン2線 口径(14.1cm) 摘部：6.6cm 器高4.4cm 近現代
386	2区・攪乱	磁器	井蓋	口	釉：透明 素地：白 文様：(群青)	外：松葉 口径(12.8cm) 近現代
387	攪乱	クロム青磁	井碗	口～底	釉：明緑灰 素地：灰白よりも白味が強い 文様：暗褐・(緑)	外：笹 畳付：露胎 口径(15.0cm) 底径(5.2cm) 器高6.4cm 近現代
388	攪乱	クロム青磁	井碗	口～底	釉：明緑灰 素地：白 文様：暗褐・(緑)	外：笹 器高6.3cm 口径14.8cm 底径5.6cm 近現代
389	1区・攪乱	磁器	井碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(群青)・(緑)・灰赤	外：草花 畳付：露胎 口径(14.4cm) 底径6.2cm 器高7.4cm 近現代
390	攪乱	磁器	井碗	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(緑)・赤褐	外：グリーン2線・「生協」 畳付：露胎 口径15.4cm 底径(6.0cm) 器高7.1cm 美濃窯株式会社?
391	2区・攪乱	磁器	井碗	口	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	外：笹 近現代
392	2区・攪乱	磁器	井碗	口	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	外：竹 近現代
393	1区・攪乱	磁器	小皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(緑)	内：流水・金魚 畳付：露胎 口径(8.6cm) 底径(4.6cm) 器高1.8cm 近現代
394	攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白	畳付：露胎 口径(10.6cm) 底径6.4cm 器高2.1cm 近現代
395	1区・攪乱	磁器	八角皿	口～底	釉：透明 (やや厚め) 素地：白 文様：灰	内：魚 畳付：露胎 口径(15.6cm) 底径(8.8cm) 器高3.2cm 近現代
396	攪乱	磁器	大皿	口～底	釉：透明 素地：灰白よりも白味が強い 文様：(コバルトブルー)	イゲ皿 外：草花 内：ウィローパターン 高台：圏線 外底：字款(判読不明) 畳付：露胎 口径(18.0cm) 底径(23.4cm) 器高5.2cm 有田焼 明治以降
397	1区・攪乱	磁器	皿	口～底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	イゲ皿 内：花 畳付：露胎 口径(18.8cm) 底径(11.6cm) 器高2.7cm 有田焼 明治以降
398	1区・攪乱	磁器	皿?	体	釉：透明 素地：灰白 文様：(コバルトブルー)・黒	内：鶴 外底：「香蘭舎」 近現代
399	2E区・攪乱	磁器	皿?	体	釉：透明(細かい貫入あり) 素地：灰色よりもやや白味が強い 文様：(淡緑)	外底：「・・・IRONSTONE CHINA」・「N.K.PORCELAIN CO.」 日本硬質陶器(株) 大正後半～昭和初期
400	1区・攪乱	陶器	皿?	体	釉：透明(細かい貫入あり) 素地：灰色よりもやや白味が強い 文様：暗緑灰	外底：「・・・CHINA」 日本硬質陶器(株) 大正後半～昭和初期
401	1区・攪乱	磁器	皿	底	釉：透明(細かい貫入あり) 器内：灰白 文様：(コバルトブルー)	内：圏線 外底：「Y」と「N」の組み合わせ・「THE IRONSTONE CHINA」 あとは判読不明 底径(14cm) 日本硬質陶器(株) 大正後半～昭和初期
402	2A区・攪乱	陶器(苗代川)	土瓶・蓋	口～摘	釉：オリーブ黒 素地：赤褐	摘～見込み部外面：施釉 口径(6.4cm) 体部最大径(9.2cm) 摘部最大径1.8cm 器高3.3cm 18c後半～
403	1区・攪乱	陶器	急須	口～底	釉：透明(細かい貫入あり) 素地：灰色よりも白味が強い 文様：黄褐・(黒)	外：草花 畳付：露胎 口径(7.5cm) 底径6.8cm 器高8.0cm 近現代
404	1区・攪乱	陶器	急須	胴～底	釉：オリーブ黄(細かい貫入あり) 素地：灰白よりも白味が強い	底径4.4cm
405	攪乱	陶器	急須	把手	釉：オリーブ黄(細かい貫入あり) 素地：灰白	
406	攪乱	磁器	急須	口	釉：灰白 素地：白 文様：(コバルトブルー)	外：草花 口径(9.8cm) 近現代
407	攪乱	石製品	硯	完形		裏面に「懸立 濱田中学校 土田吾郎」6.5×12.5cm 厚：1.6cm 重：250g
408	1区・攪乱	銭	半銭	完形		「1/2銭」のみ判読可能 径：2.2cm 重：3.2g 鑄：1873年～1888年
409	1区・攪乱	ガラス	小瓶	完形	茶透明	インキン・田虫薬 「東京 尾澤製」 口径1.2cm 底径1.6cm 器高：5.3cm重：11.6g 明治～大正
410	1区・攪乱	ガラス	小瓶	完形	無色透明	目業 「目業 精銚水」 口径1.6cm 底径2.0cm 器高：5.7cm重：8.6g 明治
411	攪乱	ガラス	小瓶	完形	青透明	インキン・田虫薬 「サツマ 全治水 松山製」 口径1.0cm 底径2.2cm 器高：6.0cm 重：21.6g
412	1区・攪乱	ガラス	小瓶	完形	茶透明	ピオフェルミン? 口径2.1cm 底径3.2cm 器高：7.5cm 胴部最大径：3.9cm 重：49.7g
413	1区トレンチ・攪乱	ガラス	小瓶	完形	青透明	口径1.3cm 底径2.0cm 器高：8.7cm 重：39g

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
414	攪乱	ガラス	瓶	完形	淡紫透明	医療用薬 口径1.5cm 底径6.4×4.2cm 器高：13.5cm 重：86.4g
415	攪乱	ガラス	瓶	完形	淡紫透明	医療用薬 底：「○」内に「北」 口径2.2cm 底径5.6×4.0cm 器高：10.8cm 重：61.6g
416	攪乱	ガラス	瓶	完形	無透明	医療用薬 「柿原病院」 口径1.4cm 底径5.1cm 器高：11.4cm 重：69.6g
417	攪乱	ガラス	瓶	完形	淡緑透明	口径2.2cm 底径6.7cm 器高：(栓なし) 19.2cm (栓あり) 20.9cm 重：356g
418	攪乱	ガラス	瓶	頸～底	茶不透明	ビール 大日本麦酒 「DAINIPPON BREWERY CO LTD」 外底：「T」 底径7.5cm 器高：21.5cm
419	1区トレンチ・攪乱	ガラス	瓶	完形	淡緑透明	調味料? 口径2.0cm 底径5.3cm 器高：17.5cm 重：192g
420	攪乱	ガラス	小瓶	完形	無色透明	丸善最上インキ 外底：「M」 口径1.7cm 底径4.3cm 器高：5.0cm 重：46.3g 1898年～
421	1区・攪乱	ガラス	小瓶	完形	緑透明	丸善最上インキ 外底：「M」 口径1.7cm 底径4.2cm 器高：5.5cm 重：63.2g
422	攪乱	ガラス	小瓶	完形	緑透明	丸善最上インキ 外底：「M」 口径1.9cm 底径4.3cm 器高：5.3cm
423	攪乱	ガラス	小瓶	完形	緑透明	口径3.1cm 底径4.6cm 器高：6.0cm 重：73.8g
424	1区トレンチ・攪乱	ガラス	小瓶	完形	無色透明	インク? 「☆」内に「P」 口径2.3cm 底径5.0×5.0cm 器高5.7cm 重：94.6g
425	攪乱	ガラス	小瓶	完形	無色透明	インク 口径1.3cm 底径4.5cm 器高：3.7cm 重：45.1g
426	攪乱	ガラス	小瓶	完形	無色透明	インク 口径1.95cm 底径5.2cm 器高4.2cm 重：53.5g
427	1区・攪乱	ガラス	小瓶	完形	淡緑透明	インク 口径1.6cm 底径5.4cm 器高：4.4cm 重：58.1g
428	攪乱	ガラス	小瓶	完形	濃緑透明	海苔「磯じまん」 外底：「4」 口径3.9cm 底径3.5cm 器高：7.3cm 重：97.2g 1954～1958年
429	1区・攪乱	ガラス	小瓶	完形	緑透明	化粧品 口径0.6cm 底径5.4cm 器高：7.0cm 重：106.7g
430	1区トレンチ・攪乱	ガラス	瓶	完形	白不透明	化粧品 外底：「4」・「○」内に「正」 口径1.0cm 底径6.8×2.2cm 器高：9.2cm 重：149g
431	1区・2	陶器 (加治木・始良系)	皿	口	釉：オリーブ褐 素地：灰～橙	口径 (10.4cm) 底径 (4.5cm) 器高3cm
432	3区・3	須臾器	杯	口	灰	
433	2H・3	陶器 (苗代川)	壺	底	釉：褐灰 素地：灰	底径 (9.2cm) 18cか19c
434	2H・3	陶器 (苗代川)	甕	口～胴	釉：黒 素地：赤褐	口径 (32.6cm) 18c以降
435	3区・3	陶器 (肥前系)	壺	口	釉：オリーブ黒 素地：灰	
436	2H・3	磁器 (肥前系)	碗	口	釉：灰白 素地：白 文様：青灰	外：山水? 口径10.6cm 18c
437	1区・3a	磁器 (波佐見)	皿	口	釉表：明オリーブ灰 釉裏：明緑灰 素地：灰白 文様：青灰	内：網 口径 (13.5cm) 18c後半以降
438	2A・3	陶器	碗	口	釉：灰オリーブ 素地：灰	
439	2A・3	陶器	皿	口	釉：灰緑 素地：灰	
440	1区3a	石器	砥石			砂岩 重：71.5g
441	1D・4b	白磁 (大宰府Ⅳ類)	碗	口	釉：灰白 素地：灰白	玉縁 11c後半～12c前半
442	1D・4b	陶器	蓋?		上：灰黄褐 下：オリーブ黒	径 (10.7cm) 厚：6.4cm
443	1E・4	陶器	播鉢	底	暗灰黄	6条1単位のすり目 (幅2.1cm) 内面が使用でかなり滑らか 中世
444	1E・4c	瓦質土器	底	外：赤灰 内：灰白よりやや白	底径 (22.8cm)	
445	2H・4	陶器	碗	口	黄灰	
446	1区・4c	陶器 (白薩摩?)	底	釉：透明 素地：灰白	底径 (3.6cm) 近代以降	
447	2C・4	陶器 (苗代川?)	土瓶蓋		釉：灰・灰褐 素地：灰褐・明赤褐	最大径：9.5cm 口径 (6.2cm) 18c後半以降
448	2H・4	陶器 (苗代川)	土瓶	口	釉：暗褐・極暗褐 素地：にぶい橙	口径 (8.2cm) 18c後半以降
449	2A・4	陶器 (苗代川)	播鉢	底	釉：黒褐・黄灰 素地：灰褐	19c 底径 (12.1cm)
450	4C・4	陶器 (苗代川)	壺	口	釉：黒褐・黄灰 素地：にぶい赤褐・灰	
451	2A・4	陶器 (苗代川)	壺	口	釉：暗褐 素地：黒褐・黒	口縁上端：目痕 口径10cm
452	2B・4	陶器 (唐津)	甕?	胴	外：暗オリーブに近い裏：暗灰黄にやや緑かかった色	外：白化粧土を波状に掻き取る
453	2A・4	磁器	碗	底	釉：透明 素地：白 文様：オリーブ灰	内：蛇ノ目釉剥ぎ 底径 (4.4cm)
454	1E・4c	青花 (上田C群1類)	皿	口	釉：透明 素地：(白) 文様：(青)	外：波濤文帯・芭蕉葉文 内：二重圏線2条 15c後半～16c中
455	1D・4B	磁器	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：青灰	
456	2A・4	銭	寛永通宝	完形		二枚付着 径：2.5cm 孔径：0.6cm
457	2A・4	銭	寛永通宝			径：2.6cm
458	2A・4	銭	寛永通宝	完形		径：2.5cm 孔径：0.6cm 重：2.9g
459	2A・4	銭				四枚付着
460	1D区・4b	土製品	トチン	口～底	にぶい橙・にぶい黄橙	窯道具 口径 (4.6cm) 底径3.8cm 器高4.3cm 近代以降?
461	1D・5	瓦器	椀	高台	外：淡黄 内：高台内：灰	
462	1c・5	瓦質土器	鍋	胴	内：肉：灰	外面：スス付着
463	1E・5	青磁	香炉	口	釉：明緑灰 素地：(白)	
464	2E区・5	土師器	瑠璃	把手	外：浅黄橙・黒褐 裏：浅黄橙 断面：灰白・黄灰	器高4.5cm
465	1B・5a	青花 (漳州窯系?)	皿	口	釉：灰白 素地：(白) 文様：(青)	口縁内面：文様 16c後半以降
466	1D・5	瓦質土器	播鉢	底	外：橙 内：にぶい黄橙 器肉：灰	6条1単位のすり目 (幅2cm)
467	2F区・5	石製品	砥石			頁岩 最大幅：6.5cm 厚：1.2cm 重：130g
468	2I区・5	陶器 (苗代川)	鉢	口～底	釉：オリーブ黒・暗灰黄 断面：にぶい赤褐	口唇：貝目痕 口径 (29.8cm) 底径22.6cm 器高9.5cm 17c後半～18c
469	2F区・5	陶器 (苗代川)	土瓶	口	釉：黒褐・黒 素地：にぶい褐	18c 後半以降

番 号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
470	2H区・5	陶器 (苗代川)	擂鉢		釉：オリーブ黒・黒褐 断面：にぶい赤褐	口径 (23.4cm) 底径8.5cm 器高10.6cm 18c
471	2H区・6	陶器 (苗代川)	擂鉢	口～胴	釉：黒褐 素地：暗褐色	口径 (34.0cm) 残高14.65cm 18c
472	2G区・6	陶器 (苗代川)	甕	口	釉：茶褐色 素地：にぶい赤	口縁上面：貝目痕 17c後半～18c
473	2H・6	陶器	碗	口	釉：灰黄・明青灰 素地：灰白	近代以降
474	2F区・6	陶器	蓋		釉：茶褐色 素地：にぶい赤褐・赤褐	蓋上：アルミナ目痕 口径6.4cm 最大径9.3cm 器高3.3cm 明治以降?
475	SD8・埋土	白磁 (大宰府VI類)	皿	口	釉：オリーブ黄 素地：灰白	11c後半～12c前半
476	1E・AZ1・?	白磁 (大宰府V類)	碗	高台	釉：透明 素地：白	高台内面：露胎 11c後半～12c前半
477	1E・AZ1	陶器 (中国)	耳壺	肩	釉：オリーブ黒 素地：灰褐	
478	2A区・軽石集積	陶器 (苗代川)	鉢	口～底	釉：オリーブ黒	口径 (21.0cm) 底径 (13.5cm) 器高6.3cm 18cか19c
479	2A区・軽石集積	陶器	鉢	底	釉 (内)：暗灰黄 素地：橙・灰	底径 (16.8cm)
480	2A区・軽石集積	陶器 (肥前)	大皿	底	釉 (内)：灰褐 胎土：灰赤	内：目痕 底径 (15.9cm)

Tab.8 2006-4 遺物集計

時代	時期	種別	器種	地区層位不明	攪乱	1区 2層一括	2層	2a層	3層	3a層	3b層	3c層	3d層	SD	畦	4層	4a層	4b層	4c層	5層	5a層	5d層	6層	計	
弥生		土器	甕				1																	1	
古墳		成川式	高坏か鉢																1					1	
弥生 古墳		土器	甕		1	1	1		4				1		1	1		1		21			1	38	
		1条突帯																1						1	
古代 中世		須恵器	坏						1															1	
		土師器	坏															1		1				2	
		土師器					2									3		7	1	10				23	
		瓦器	碗																	1				1	
		瓦器																			2			2	
		瓦質土器																1	2	3				6	
		中世陶器	搦鉢													1		1						2	
		白磁	玉縁碗															1						1	
		白磁	碗											1										1	
		白磁	皿											1										1	
		青磁・竜泉窯系	碗															1	1	2				4	
		青磁・竜泉窯系	香炉																	1				1	
		青磁・竜泉窯系																		2				2	
		磁器	碗																				1	1	
	中世後期		磁器	皿															1					1	
16c後半		漳州窯系	皿																1	1			2		
近世 近代	17c後半～18c	苗代川	甕						1														1	2	
	18c以降	苗代川	甕						1															1	
	19c以降	苗代川	甕				1									1								2	
	17c後半～18c	苗代川	甕か壺													1								1	
	18c	苗代川	甕か壺												3	1								4	
	18cか19c	苗代川	甕か壺	1			2									5							1	9	
	18cか19c	苗代川	壺						3															3	
		苗代川	壺													2								2	
	17c後半～18c	苗代川	鉢																	1				1	
	18cか19c	苗代川	鉢												1									1	
	18c	苗代川	搦鉢																	1			1	2	
	18cか19c	苗代川	搦鉢						2								1							3	
	19c	苗代川	搦鉢													1								1	
	18c後半以降	苗代川	土瓶・蓋	1					1							1		1						4	
	18c後半以降	苗代川	土瓶		1	5										3		1		1				11	
	近代以降	苗代川	植木鉢	1																					1
	近代以降	苗代川?	土管	4																					4
		苗代川	搦鉢			1													1						2
		苗代川	山茶家																		1				1
	17c～18c	苗代川																1							1
	17cか18c	苗代川																			1				1
	18cか19c	苗代川		1					2	1								4	1	4			1	14	
	近代以降	苗代川																					1		1
		苗代川				2		1	1				1			3		1					1	9	
	18c	加治木・始良系?														1									1
	19c以降	加治木・始良系	皿				1																		1
		加治木・始良系	皿				1																		1
	18c後半～19c	龍門司	小坏か小皿				1																		1
	明治以降	龍門司?					1																		1
	明治以降?	白薩摩		1																					1
	近代以降	白薩摩	碗	1																					1
	近代以降	白薩摩?																		1					1
		肥前陶器	大皿													1									1
		肥前陶器	甕?														1								1
		肥前陶器?++	壺						1																1
		肥前陶器															1								1
	19c?	琉球	土瓶?				1																		1
		琉球	大壺か大甕	1																					1
		焼き締め陶器	搦鉢																		1				1
		焼き締め陶器	蓋?																1						1
	陶器	碗						1								2							1	4	
	陶器	鉢													1									1	
	陶器	皿	1					1																2	
	陶器	小皿						1								1								2	
	陶器	搦鉢					1																	1	
	陶器	壺													1									1	
明治以降?	陶器	土瓶・蓋																				1		1	

時代	時期	種別	器種	地区層位不明	攪乱	1区2層一括	2層	2a層	3層	3a層	3b層	3c層	3d層	SD	畦	4層	4a層	4b層	4c層	5層	5a層	5d層	6層	計			
近世～近代		陶器	土瓶?				1																	1			
		陶器	急須		2																				2		
		陶器			1		2	1	2							2		2		8					18		
	18c以降	肥前	皿									1													1		
	18c後半以降	肥前・波佐見	皿							1															1		
		肥前系	碗				1		1									1							3		
		肥前系?	坏															1							1		
		肥前	皿													1										1	
		肥前系	イゲ皿		5																					5	
		肥前系																1								1	
	磁器 (中国)	碗か皿																		1					1		
	磁器 (中国?)	小皿																		1					1		
近世?	磁器	皿		1																					1		
近代～現代		陶器	急須		1																				1		
		陶器	植木鉢		2																					2	
		肥前・波佐見	碗		1																					1	
		肥前・有田 (香蘭社)	皿?		1																					1	
		肥前・有田	イゲ皿		1																					1	
		日本硬質陶器(株)	皿		7																					7	
		高等農林食器	碗		23																					23	
		高等農林食器	皿		20																						20
		クロム青磁	碗		4																						4
		ワイローパターン	大皿		1																					1	
		「生協」	碗		1																					1	
		「生協」	皿		1																					1	
		磁器製品	ガイシ		1																					1	
		磁器	碗	1	92																	1				94	
		磁器	蓋		1																					1	
		磁器	皿		11																					11	
		磁器	小皿		1											1										2	
		磁器	鉢	1	1																					2	
		磁器	碗・蓋		11																					11	
		磁器	急須		1																					1	
	磁器			2																					2		
	磁器			13																					13		
	磁器	碗					1								1	1	1					2			6		
	磁器	皿		1													1								2		
	磁器			8			2								5		2	1							18		
その他		土製品	土人形				1																		1		
		土製品	焙烙																		1				1		
	近代以降?	土製品 (窯道具)	トチン														1								1		
		古銭	寛永通宝ほか		1				1							4										6	
		鉄			1											7				8						16	
		硯			1																					1	
		砥石								1											1					2	
		木炭					1									2				2						5	
		種																1								1	
		タイル			3																					3	
		瓦			6	1	3									1										11	
		石			1		3														1					5	
		骨					1																			1	
		黒曜石							1										1							2	
	ガラス	瓶		26																					26		
	ガラス 破片	皿		1																					1		
	ガラス 破片	器種不明		1																					1		
計				2	271	4	34	2	25	2	1	1	2	1	9	52	3	42	8	78	4	1	8		550		





1区完掘[東より]



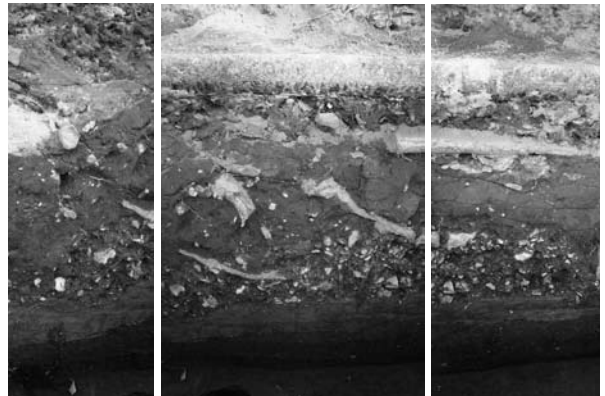
1G区南壁



1区東壁



1E・F区南壁AZ1付近

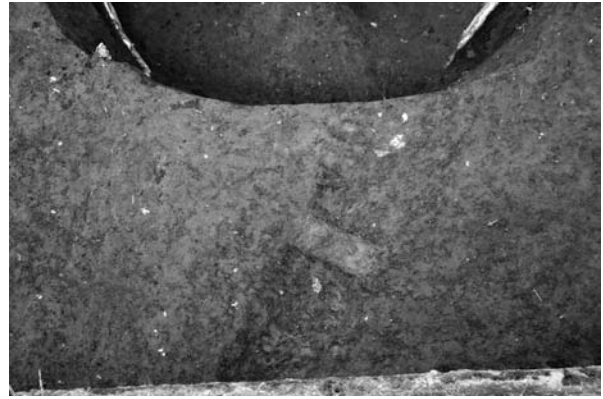


1G区南壁AZ2付近

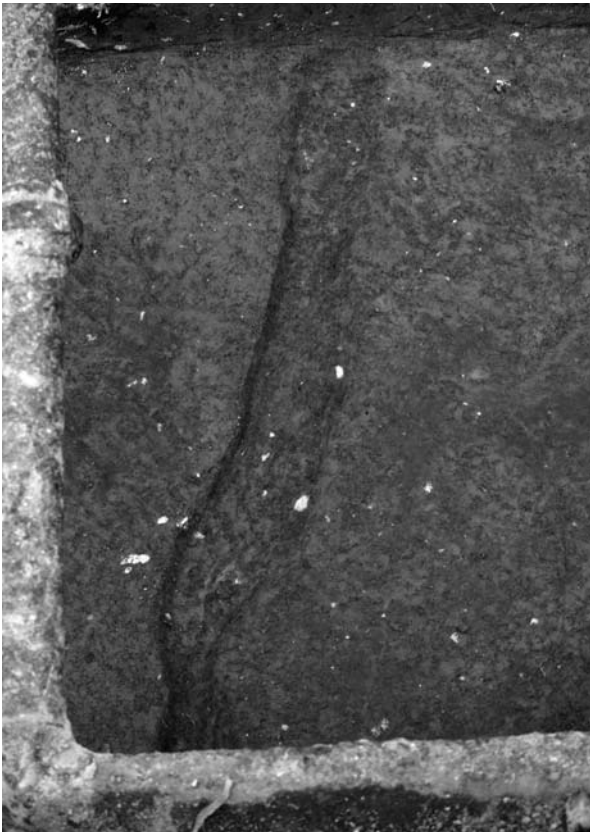
PL.63 1区



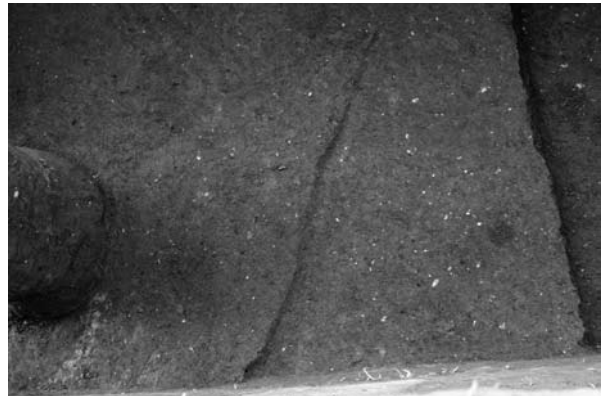
3層上面検出SD6[南より]



3層上面検出SD5[南より]



3層上面検出SD4[南より]



4層上面検出犁跡[北より]

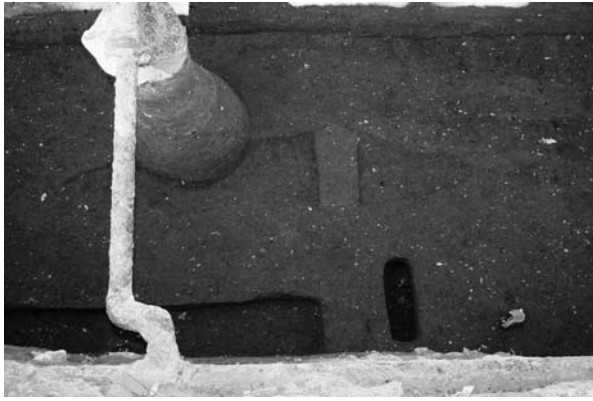


F区ベルトAZ2[東より]



AZ2・SD8[東より]

PL.64 1区



5層上面SK1[南より]



AZ1東側軽石群(5層中)[東より]



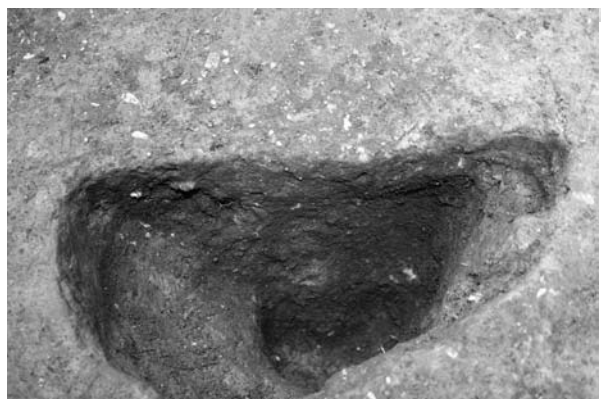
AZ1西側軽石群(5層中)[西より]



6層上面AZ1-2~3[西より]



6層上面SD9[南より]



P4断面[東より]

PL.65 1区



2区掘削[東より]



西壁



軽石集積[南より]



北壁



東壁



東側河川砂層



4層中古銭出土状況(No.459)

PL.66 2区





2区5層中軽石



2区深掘トレンチ3



2区東側河川深掘トレンチ1(森脇広教授による土層調査)



3区[南より]



3区河川砂層



3区東壁河川砂層

PL.67 2・3区

中世の遺物としては、瓦器碗（461）・瓦質土器（462・466）・青磁香炉（463）・漳州窯系青花（465）などがある。

近世の遺物として、苗代川鉢（468）・土瓶（469）・播鉢（470・471）・甕（472）などがあり、焙烙（464）も得られている。

ほかにも産地・時期不明の陶器碗（473）、蓋（474）、砥石（467）などがある。

#### 6層上面検出遺構（Fig.71, PL.65）

畦跡（AZ1-2・3）、溝跡（SD9）、ピット群（P2・4～13）が検出された。畦跡は、ほぼ同じ位置に作り替えが行なわれたものである。SD9は浅く性格は不明である。ピット群は1G区に集中する傾向にあるが、性格は不明である。

#### 遺構出土遺物（Fig.72, PL.62）

475は1区4層上面検出の溝跡（SD8）埋土中より出土したもので、やや内湾する薄手の中世白磁皿である。476・477は1区5・6層上面検出の畦跡埋土中から出土したもので、475は中世白磁碗、477は中国製の耳壺ではないかと考えられる。時期は不明。

478～480は2区3層中軽石集積遺構にまじって出土したもので、605は苗代川鉢、480は肥前陶器大皿、610は陶器鉢である。近世以降の遺構であると判断する。

## 6. 小結

本調査区では、弥生時代～古墳時代の土器片、中世～近代の遺物が得られているものの、掘削可能であった6層まで近世遺物が出土し、出土遺物の大半が近世以降のものであることから（Tab.7）、近世以降の遺跡であると捉えることができる。

3～6層上面で確認された遺構はほとんどが性格を明らかにすることができなかったが、畦跡（AZ1）の存在から概ね水田跡に付随する遺構であると捉えている。注目されるのは畦跡埋没後に河川堆積層との境界で確認される堤跡の存在で、近世のある段階に河川流路が変化したために、水田を防御するために構築されたものではないかと想定している。2区で検出された軽石集積遺構も堤跡の北西延長上に位置するとみられ、同様の遺構ではなかろうか。

近代遺構の遺物では、鹿児島大学の前身である鹿児島高等農林学校の遺物が多量に出土した。寄宿舍食堂の食器が多いのではないかと考えられる。本調査区付近は、寄宿舍「対岳寮」の食堂・賄所付近に位置しており、その出土量は首肯される。

また、ガラス瓶などもインキン・タムシや目薬の一般薬品のほか、医療用薬瓶も出土しており、寄宿舍に南接していた診療室・病室の存在を裏づけるものであろう。

当時、日本最南端の農業専門学校として開校した鹿児島高等農林学校銘入りの食器は、鹿児島大学構内遺跡郡元団地で主体的に出土する遺物であることも特に強調しておきたい。

## 註

- 1) 生協の丼碗については、美濃窯業株式会社製ではないかと考えているが、確証は得られていない。農学部前田芳實教授より、大学生協のライス（大）の容器であるのご教示を得た。
- 2) 新里貴之ほか（編）2009『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』22・23
- 3) 土田氏（故人）は、県立濱田中学校に在籍していたことは確認できたが、鹿児島高等農林学校には在籍していない。





PL.68 北壁層位



PL.69 7b層上面検出哇，足跡

## V 2007-4 郡元団地C-6区南九州地区軽種馬医療体制整備事業 (農学部附属病院軽種馬診療センター新営)に伴う発掘調査

### 1. 調査にいたる経過

鹿児島大学では、郡元団地内において、社団法人日本軽種馬協会が財団法人全国競馬・畜産振興会の助成を受け、軽種馬診療センターを寄贈するという診療棟建設が予定された。同地区では平成7年に試掘調査が行われており（遺伝子実験施設建設予定地<sup>1</sup>：建設なし）、地表下3mまで近世の水田と河の交互層が確認されていた。東に近接する農学部研究棟A（旧・2号館）の発掘調査（IV章参照）でも、土層は同様に、薩摩焼を主体とした遺物の出土をみている。南接する農学部共通棟（旧・1号館）中庭（III章参照）では、弥生時代中期の住居跡や古墳時代の包含層、近世の土坑や水田跡、建物跡などが検出されている。これらのことから、今回の建設予定地においても工事に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を行なうこととなった。

### 2. 調査体制

調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が以下の体制と期間で行なった。

所在地 鹿児島市郡元一丁目21-24

調査面積 350㎡

発掘期間 平成19年12月18日～平成20年3月31日

調査体制 主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室長 新田栄治

担当者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室員 新里貴之

国際航業株式会社

現場代理人 竹内眞哉

調査員 東園千輝男

作業員 石田万里子・石谷美智子・今村ノリ子・岩川わかさ・岩切ひとみ・太田政子・鹿倉征治・加治屋幸雄・川口永流・川俣友秀・北村浩士・清川幸一・末吉サチ子・末吉幸子・末吉サツ子・平トシ子・地島幸代・粒崎幸蔵・徳田幸一・富岡道男・中村 学・濱田綾子・東リヨ子・福満一典・水迫久夫・山口雄幸・山下キヨミ・脇 秋江・脇 春教・脇 満則（五十音順）

### 3. 発掘調査経過

今回の調査は、平成19年12月18日より開始された。舗装されていない屋外駐車場ほぼ全域の約350㎡が調査対象地域となった。

調査区の南北ラインのほぼ中央に位置する調査杭2を基準とし、西壁側から東方向へ10mごとに区切り、10mごとの基準を南北に延ばして調査区とした。南北ラインを北からA・Bとし、東西ラインを西から1～3とした（Fig.73）。

表土は重機によって除去し、一部の段落ち箇所等については、手作業で表土除去を行なった。その後、各地点ともに人力による層ごとの掘削作業を行なった。水の湧き出すまでに3mは掘削する予定であったため、水田層と河川砂層という性質に鑑み、地表下1.5mで1m幅の段を設け、以下は1mごとに段を設けた。最後は地表下3.8mで、30cm比高の段となった。

1層は近現代であり、2層以下に鹿児島高等農林学校時代、鹿児島大学時代の配管や基礎跡が検出された。3層は粗細砂層で、約30～50cmの厚みで全面を覆っており、河川の氾濫によるものと判断された。遺物もほとんど含んでいない。4～10層は、近世の水田層で、畦や足跡・鋤跡と考えられる溝などが検出され、それらを写真・測量で記録しつつ下層を掘り下げた。ただし、9層は調査区全面を覆う河川の氾濫層であると考えられ、10cm程度の厚さであった。

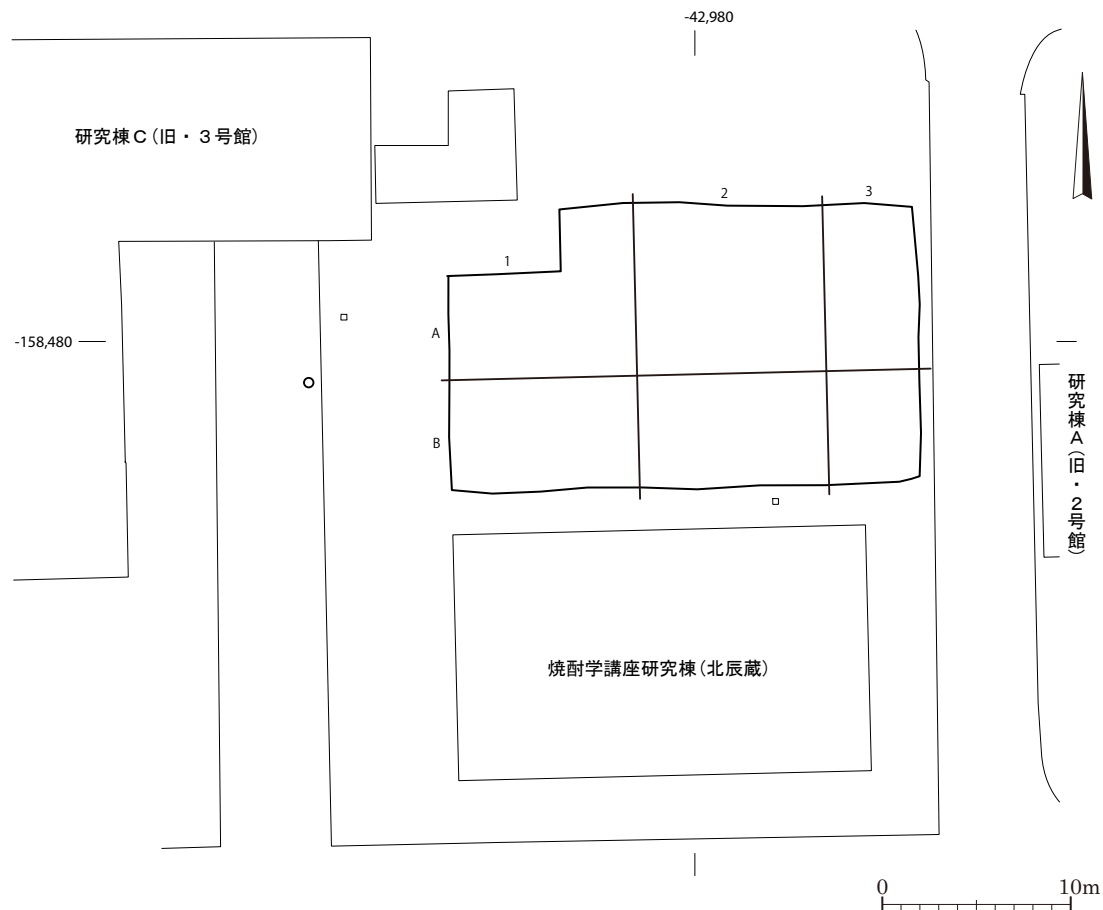


Fig.73 調査地点とグリッド配置 (S=1/400)

11層は大規模な河川埋土で遺物を多量に含むものの、地表下約4mで大量の水が湧きだし、掘削が不可能となった。そのため、河川本来の深さを確認することはできなかった。この時点で写真撮影や各壁面図を作成し、調査を終了した。その後は、建設工事まで時間が空いたため、安全のために廃土置場の土を調査区へ運び埋め戻しを行って、現状に復した。

#### 4. 層位 (Fig.74・75, PL.70)

基本土層として、大別して11枚の層が確認された。最も土層の判断しやすかった北壁を中心に層位について述べる。

基本的に2・4～8・10層はシルト層で水田層と判断され、3・9・11層は河川粗細砂層であると考えられた。

1層は、近現代の造成土層である。旧・高等農林学校や現・鹿児島大学の建物基礎跡や配管跡が2層以下で検出された。一部炭を含む部分があり、昭和20年の高等農林学校の空襲によるものではないかと考えられた。2層は、0～cの4層に細分される水田層である（面的にはa～c層であったが、北壁断面で2a層よりも上部の層が確認されたため、2ゼロ層とした）。3層はa～cに細分される。本来、水田があった場所に河川の氾濫粗細砂がこれを覆ったもので、特に3a層はラミナが発達し水の流れがあったとみなせる。調査区の西半部に面的に厚く堆積していたが、各調査区壁面側では攪乱が深かったために、壁面に反映されていない。

ところで、畦1～7は同じ場所に同じ方向で作り続けられ、3層水田に対応する時期から、8層段階までこの位置と規模はほとんど変化していない。畦の堆積状況は約80cmにも及ぶ。

4層は畦1を挟んで調査区西半に存在する水田である。a・bに細分される。5・6層は調査区東半部の2・3層以下に位置する水田層で、本来は同一水田である可能性が高い（面的な掘下げ中には判断できなかった）。

7層はa・b層に細分され、8層はa～c層に細分される水田層である。8c層は調査区全面に及ぶ厚さ・質ともに平均したシルト層であることから、造成土を持ってきたものではないかと判断された。

9層は厚さ10cm程度であるが、調査区全面に及ぶ河川細砂層である。ラミナの発達は見られず、人為的に攪拌された可能性も否定できない。10層もa～c層に細分される水田層であるが（10c層は場所によって上下層に再細分される）、11層の河川細砂層を掘りこんで、作られている。掘り残された箇所が畦8として機能し、畦1～5と同様の方向で、やや東寄りに位置する。

11層はa・bに細分されるが、11a層がクロスラミナの発達する細砂層で、11b層がクロスラミナの発達する粗砂層であるが、明確な分離ができないほど複雑に入り組む。遺物は際限なく出土し、河川粗細砂も下位に続くようであったが、その下部は多量に水が湧き出し人力掘削が不可能となったため、確認していない。

本調査区は、概ね東側に段落ちする水田であったと考えられ、唐湊の山側から桜島海側へ緩やかに傾斜する自然地形に沿って利用されたものと考えられた。

以下、北壁を中心に基本土層を記す。その他基本土層に貫入する地点ごとの土層は、各壁面図に記載してある。

1層 攪乱層。高等農林学校～鹿児島大学までの攪乱層。1層にまとめて重機で除去した。

2層 水田層。土壌の密度が粗で、1層に土質が類似する。調査区の東半部に分布する。3層の河川氾濫層を切っていることから、氾濫後、水田を再生したものであると考えられる。

2o層 暗褐色10YR3/3砂質シルト。ややパサつく。0.5～2cm大のパミスまじり。締まり良い。北壁の土層観察で確認された。調査中には、表土とともに除去された。

2a層 暗褐色7.5YR3/4砂質シルト。ややパサつく。0.5～2cm大のパミスまじり。締まり良い。

2b層 黒褐色10YR3/2砂質シルト。ややパサつく。0.5～2cm大のパミスまじり。締まり良い。

2c層 灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。ややパサつく。0.5～2cm大のパミスまじり。締まり良い。

3層 河川氾濫砂層であり、下部はシルト質である。水成作用を示すクロスラミナが形成される。2層によって切られている。調査区西半に分布する粗細砂層は厚いところで約30cmある。

3a層 におい黄橙色10YR7/4細砂（わずかに粗砂まじり）。0.5～5cm大のパミスまじり。締まり悪い。一気に埋まった感がある。

3b層 におい黄褐色10YR4/3細砂質シルト。締まり良い。

3c層 におい黄褐色10YR4/3シルト。締まり良い。粘質。

4層 水田層。

4a層 灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のパミスまじり（少）。締まり良い。

4b層 4a層に類似するが、色調はやや明るい。

4c層 におい黄褐色10YR4/3砂質シルト。0.5～1cm大のパミスまじり（少）。締まり良い。

5層 A1区で検出された段。畦として機能していた可能性もあるが、検出幅が不安定。

5層 におい黄橙色10YR7/4砂質シルト。0.5～5cm大のパミスまじり。締まり良い。

5'層 5層よりやや暗め。

6層 AZ1西側に接した部分とB2区を中心として確認された砂層。除去された河川氾濫層の可能性もある。におい黄橙色10YR7/4粗細砂。0.5～5cm大のパミスまじり。締まり悪い。

7層 水田層。

7a層 灰黄褐色10YR4/2シルト。0.5～1cm大のパミスまじり（少）。締まり良い。粘質。

7b層 灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のパミスまじり（少）。締まり良い。

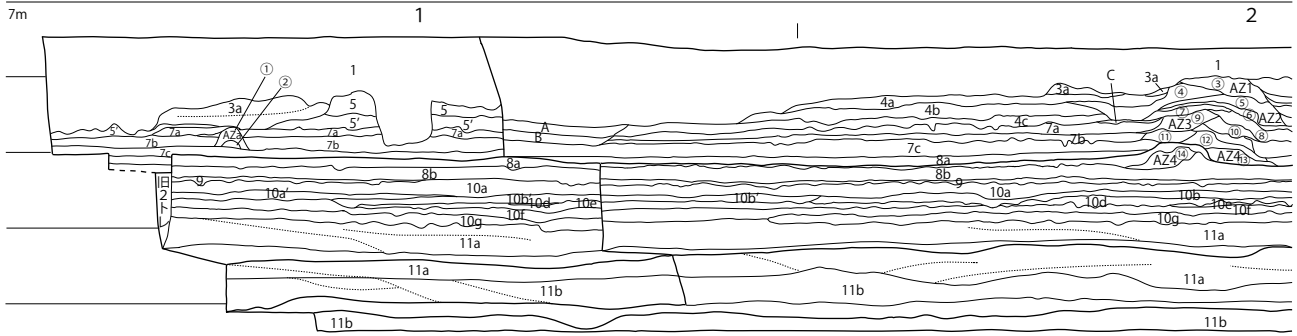
7c層 灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～1cm大のパミスまじり（少）。締まり良い。

8層 水田層。

8a層 におい黄褐色10YR4/3砂質シルト。0.5～1cm大のパミスまじり（少）。締まり良い。



北壁



2m

AZa(壁面で初確認。延びる方向など不明)

- ① 灰黄褐色 10YR4/2 シルト。0.5-1cm 大のパミスまじり(少)。やや粘性強い。
- ② 灰黄褐色 10YR4/2 シルト。0.5-3cm 大のパミスまじり(少)。やや粘性強い。

AZ1-4

- ③ 黄褐色 10YR5/4 砂質シルト。0.5-1cm 大のパミスまじり。締まり良い。
- ④ にぶい黄色 10YR6/4 シルト質砂。0.5-1cm 大のパミスまじり(多)。締まり良い。
- ⑤ ④よりもややシルト質。
- ⑥ オリーブ褐色 10YR4/4 砂質シルト。部分的に粗砂まじり。締まり良い。
- ⑦ ④に類似。
- ⑧ 暗灰黄 10YR4/2 砂質シルト。締まり良い。
- ⑨ ⑧よりもやや暗く、シルト質。
- ⑩ ⑧よりもやや明るい。
- ⑪ 暗灰黄色 10YR4/2 砂質シルト。締まり良い。
- ⑫ ⑤に類似。
- ⑬ 黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。0.5-1cm 大のパミスまじり。締まり良い。
- ⑭ やや明るい黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。0.5-1cm 大のパミスまじり。締まり良い。

AZ7

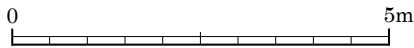
- ⑮ 浅黄色 10YR7/3 シルト質細砂ベースに黄褐色 10YR5/4 シルトが縞状にまじる。締まり悪い。

AZ8

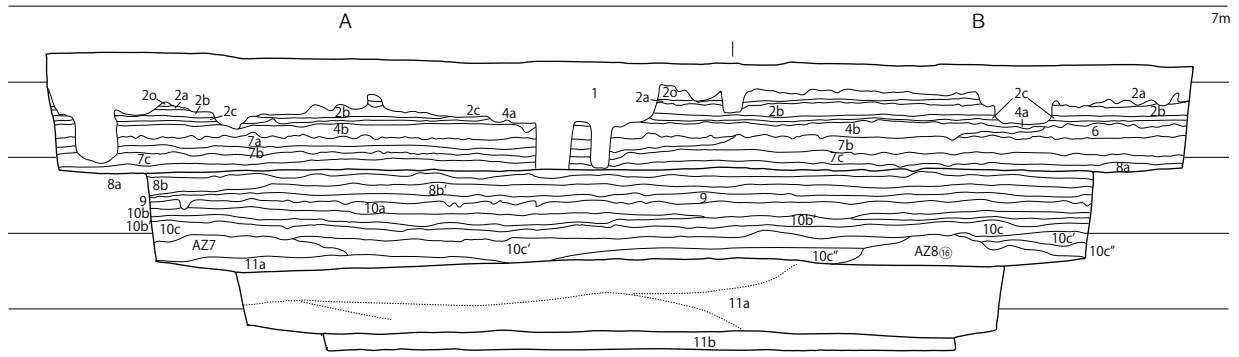
- ⑯ にぶい黄色 10YR6/4 細砂ベースに 10YR5/4 シルトが縞状にまじる。締まり悪い。

水田跡?(壁面で初確認)

- A 灰黄褐色 10YR4/2 シルト。0.5cm 大のパミスまじり(少)。締まり良い。粘性強い。
- B にぶい黄褐色 10YR5/3 粗砂。締まり悪い。
- C 黄灰色 10YR4/1 シルト質砂。
- D 10a 層よりもやや明るい。



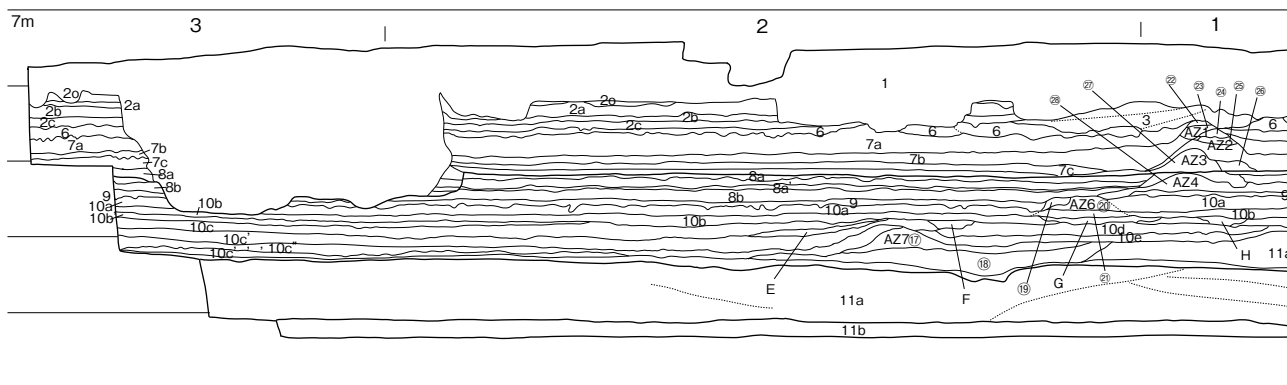
東壁



2m

Fig.74 北壁・東壁 (S=1/100)

南壁



2m

E やや暗い褐灰色 10YR4/1 シルト。0.5-1cm 大のパミスまじり。締まり良い。粘性強い。

F 褐灰色 10YR5/1 シルト。0.5-1cm 大のパミスまじり。締まり良い。粘性強い。

G 黒褐色 10YR3/1 砂質シルトベースに、黒褐色 10YR5/6・黒 0YR2/1

シルトがブロック状にまじる。

H G に類似。

AZ7

⑰ 黄褐色 10YR5/2 細砂ベースに黒褐色 10YR3/2 シルトが縞状・マーブル状にまじる。締まり良い。

⑱ 灰黄色 2.5Y7/2 細砂ベースに、黒褐色 10YR3/2 シルブロックがまじる。締まり悪い。

AZ6

⑲ 暗灰黄色 10YR4/2 シルト。締まり良い。

⑳ 黒褐色 10YR3/1 シルト。締まり良い。

㉑ ㉒よりやや明るい。

AZ1-4

㉓ 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5-1cm 大のパミスまじり。締まり良い。

㉔ ㉒よりはやや暗い粗砂まじりシルト。0.5-1cm 大のパミスまじり。締まりよい。

㉕ にぶい黄褐色 10YR6/4 シルト質粗砂。締まり悪い。

㉖ 7b 層に類似。

㉗ ㉒に類似。

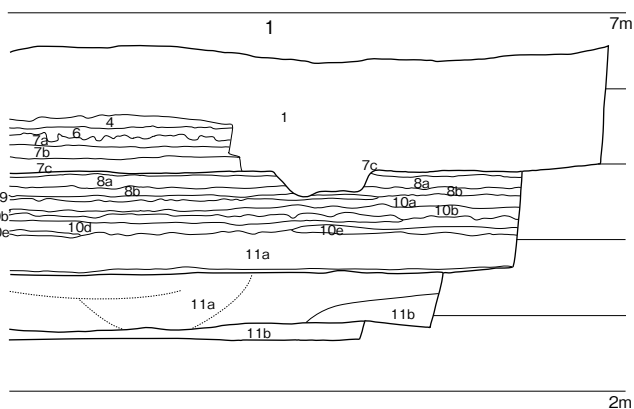
㉘ 7b 層よりやや暗め。

㉙ やや明るい黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。0.5-1cm 大のパミスまじり。締まり良い。

AZ5

㉚ ㉛よりやや明るい。

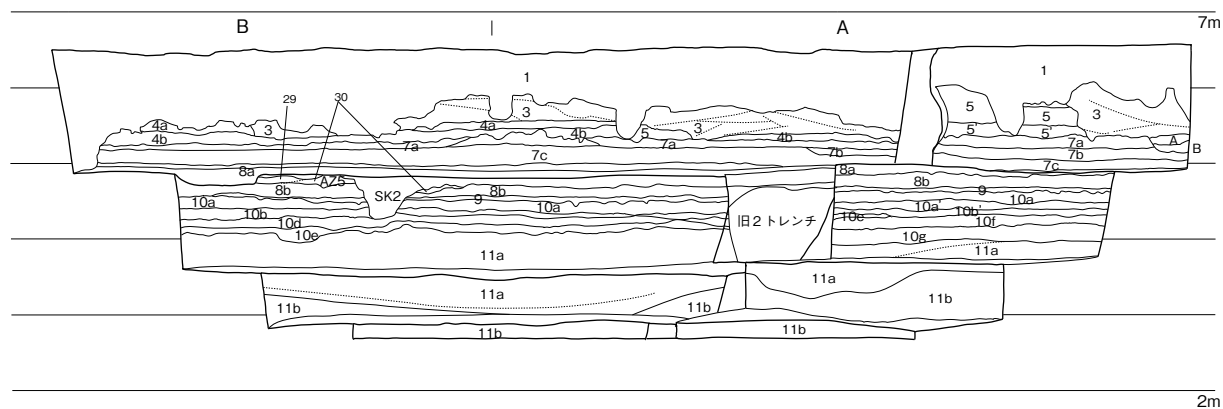
㉜ 黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。締まり良い。



2m



西壁



2m

Fig.75 南壁・西壁 (S=1/100)





北壁



北壁



北壁



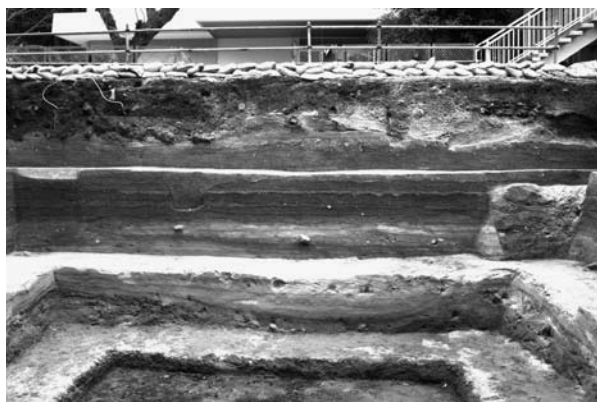
東壁



南壁



南壁



西壁



西壁

PL.70 壁面

- 8b層 黒褐色10YR3/2砂質シルト。0.5～1cm大のパミスまじり（少）。締まり良い。
- 8b'層 8b層に類似。調査中は8b層とともに掘り下げている。
- 9層 河川氾濫砂層。薄く堆積しているため、除去された河川氾濫層の可能性もある。にぶい黄褐色10YR5/3細砂。0.5～1cm大のパミスまじり（少）。締まり良い。
- 10層 水田層。10a・10b層は調査区全域にほぼ分布するが、AZ7を境に東側に10a～c層、西側に10d～10g層が分布する。東西の明確な共時性はつかめなかった。
- 10a 黒褐色10YR3/2砂質シルト。0.5～1cm大のパミスまじり。締まり良い。
- 10b 10a層に類似するが、色調はやや明るい。
- 10b' 10b層に類似。調査中は10b層として掘り下げている。
- 10c 灰褐色10YR4/2粗砂質シルト。0.5～1cm大のパミスまじり。締まり良い。
- 10c'・10c" 10cに類似するが、色調はやや明るい。壁面の土層観察で区分できたが、調査中には10c層として掘り下げた。
- 10d 10bよりやや明るい。
- 10e にぶい黄褐色10YR6/3砂質シルト。締まり良い。
- 10f 灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5cm大のパミスまじり。
- 10g 灰黄褐色10YR5/2砂質シルト。0.5～1cm大のパミスまじり。
- 11層 河川砂層。水成作用を示すラミナが形成される。本来は数十層に分けられるが、大きく2層に区分した。地表下4mで地下水が湧出し、それ以下の調査を断念した。河川の底を確認することはできなかった。
- 11a層 灰黄褐色10YR5/2細砂。わずかに粗砂が混じる。脆い。
- 11b層 褐灰色10YR5/1粗砂。0.5～50cm大のパミスまじり（多）。脆い。諸所に鉄分の浸透や、泥炭のブロックがまじる。

## 5. 遺構・遺物

紹介する遺物の詳細は観察表（Tab.9）に、遺跡出土遺物の出土傾向は集計表（Tab. 10）に掲載した。

### 1層（表土・攪乱層・排土）の遺物（Fig.76～79, PL.71～74）

1層の遺物は、鹿児島大学の前身である鹿児島高等農林学校時代（明治42年）以降の遺物が得られている。下層から掘り起こされたと考えられる弥生～古墳時代、近世以降の遺物や、同層に帰属する近現代の遺物などである。

481は弥生時代の壺の底部とみられる資料である。463は古墳時代成川式壺の底部で外面に赤色顔料が塗布されている。483は酸化炎焼成の須恵器である。

484～486は近世薩摩焼苗代川産陶器であり、484・485が土瓶、486は器種不明である。469・470は近世薩摩焼加治木・始良系陶器であり、前者がひょうそく（燈火具）、後者が高坏である。489は陶器碗、490は沖縄産陶器と思われる壺である。491は肥前磁器半筒碗である。492は波佐見焼の皿である。

493は近現代の小皿で見込みに魚文が描かれる。494は日本硬質陶器株式会社製の皿である。大正後半～昭和初期のものである。495～498は近現代の磁器井碗で、496は内面に電話番号が書かれており、外部からの出前用容器かもしれない。349は蓋、475は口縁外面に緑色二条の圏線を巡らすから、「生協」食器の可能性もある。499はガラス製品で灰皿と考えられる。底部外面には「MADE IN YANAGIMOTO ^泉 KIIYOTO JAPAN」の文字が容器上面から読めるように外側から陰刻される。500は井田京堂製メヌマボマードである。501は茶色透明のガラス瓶で、化粧品容器と思われる。

502～505は配管跡から出土した陶管であり、大中小のサイズと分岐部が出土している。502などは先端に横位方向の溝が刻まれ、接着の工夫がなされる。あまり焼き締まっておらず、破損しやすい。

506～508はゴミ穴8から出土したもので、近現代の磁器小皿（506）・碗（507）、ヌノビキタンサンの緑

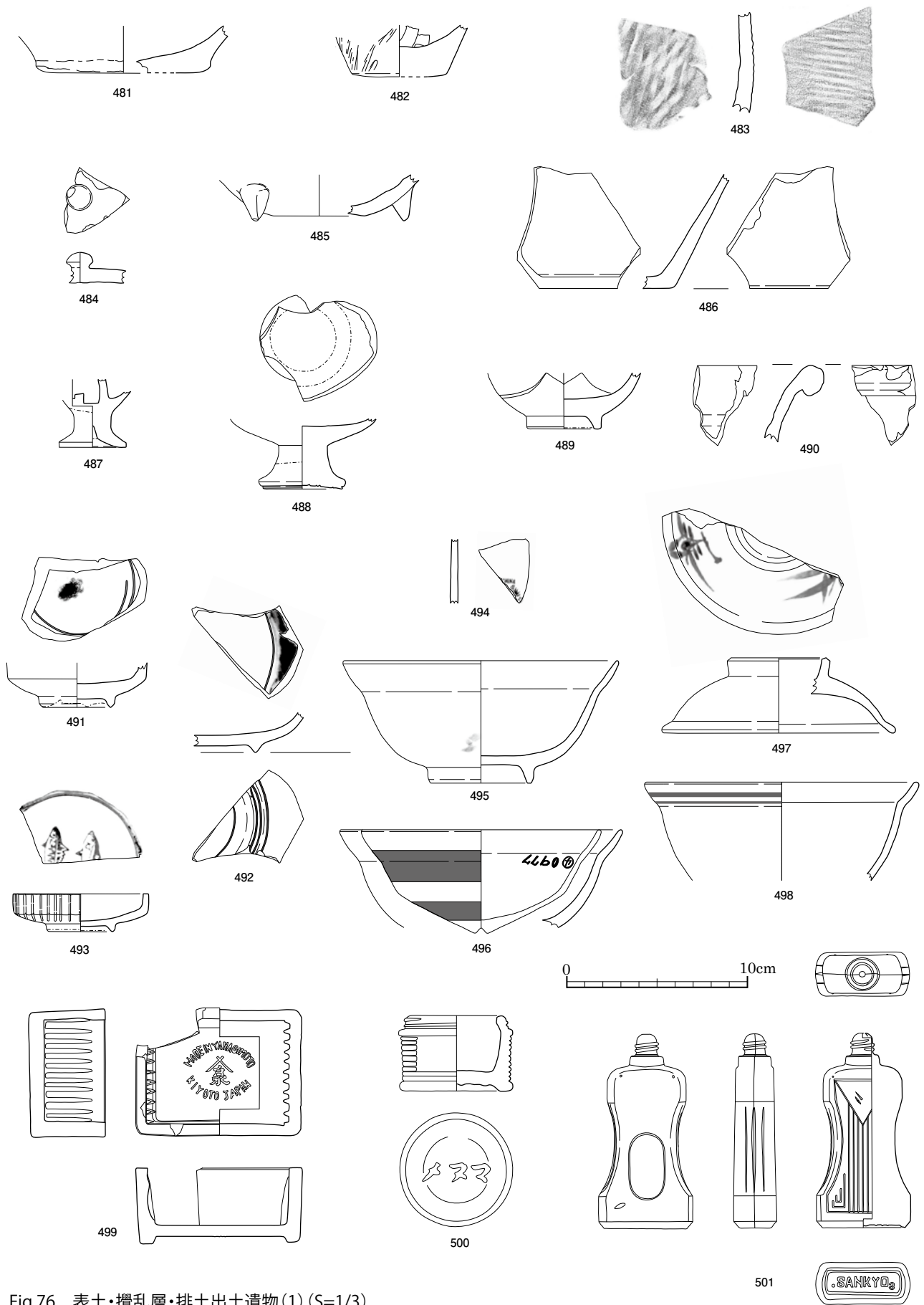
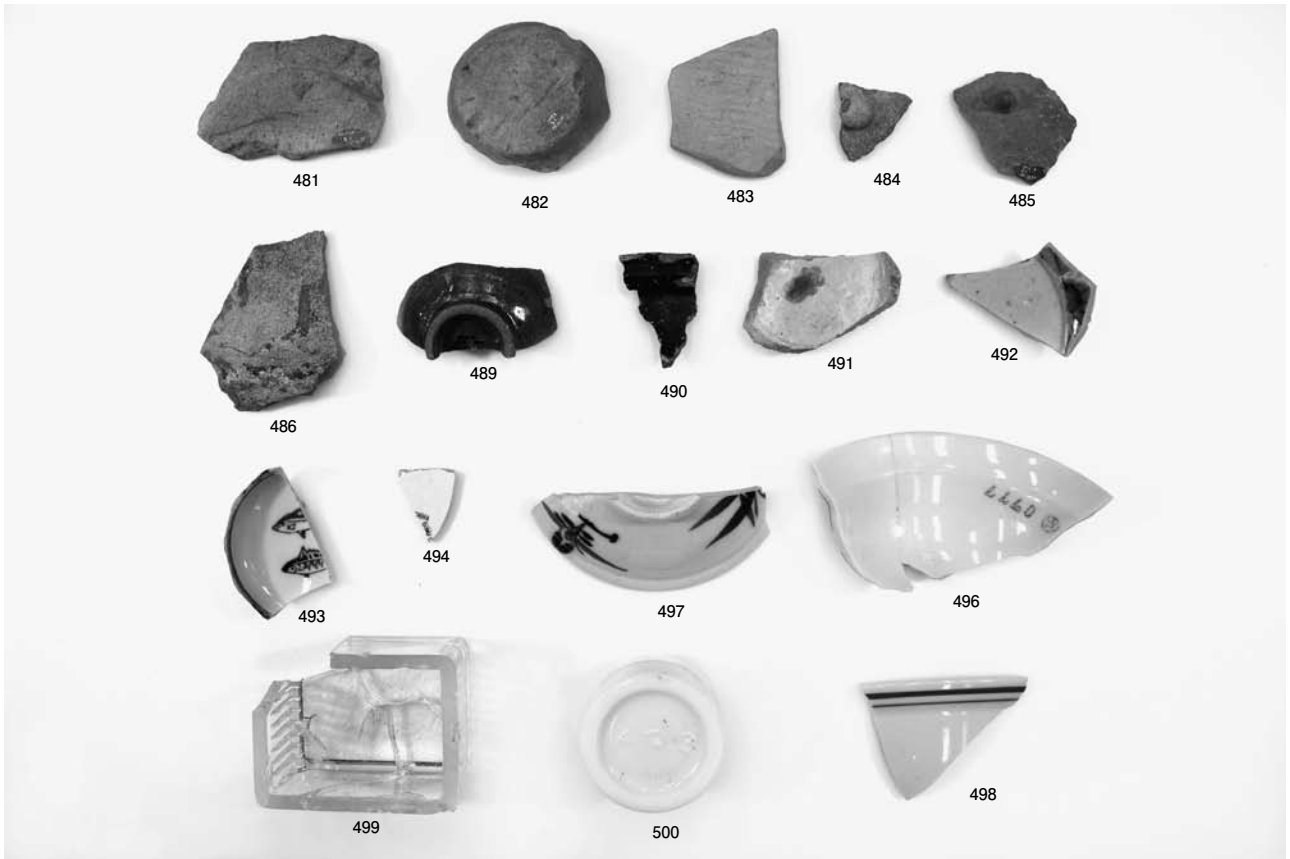


Fig.76 表土・攪乱層・排土出土遺物(1) (S=1/3)



PL.71 表土・攪乱層・排土出土遺物(1)

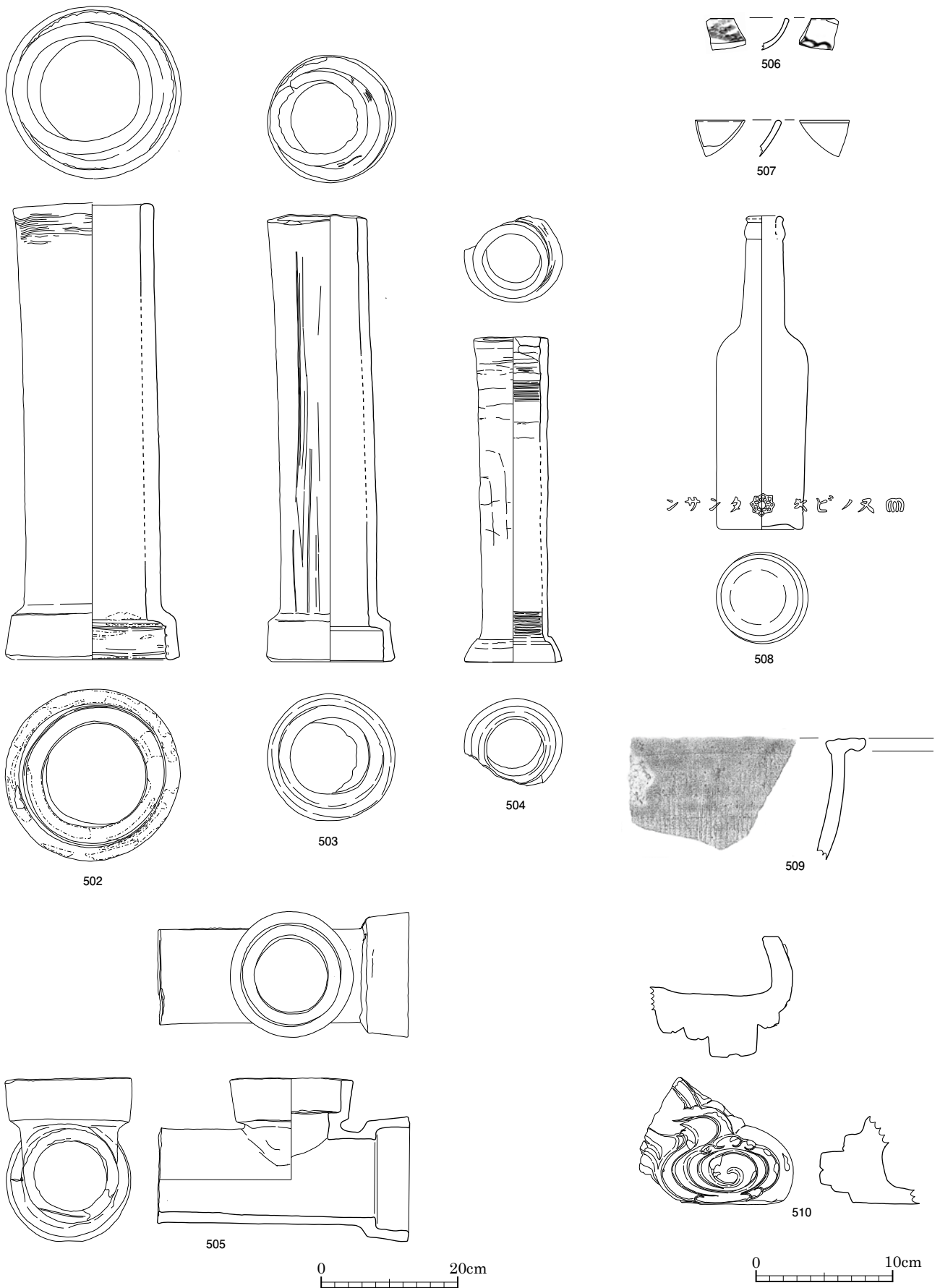


Fig.77 表土・攪乱層・排土出土遺物(2) (502~505:S=1/8, 506~510:S=1/4)



PL.72 表土・攪乱層・排土出土遺物(2)



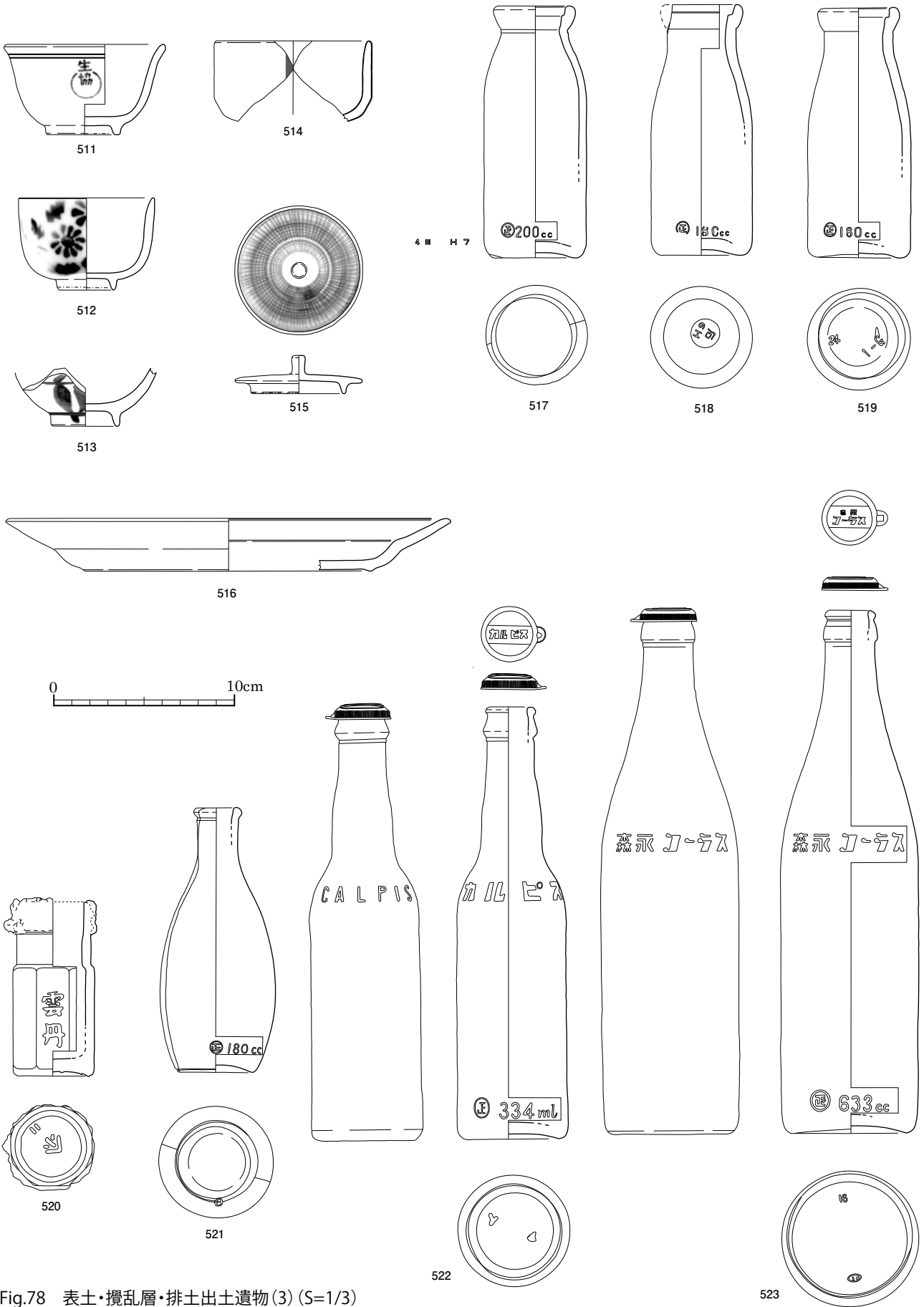


Fig.78 表土・攪乱層・排土出土遺物(3) (S=1/3)



PL.73 表土・攪乱層・排土出土遺物(3)

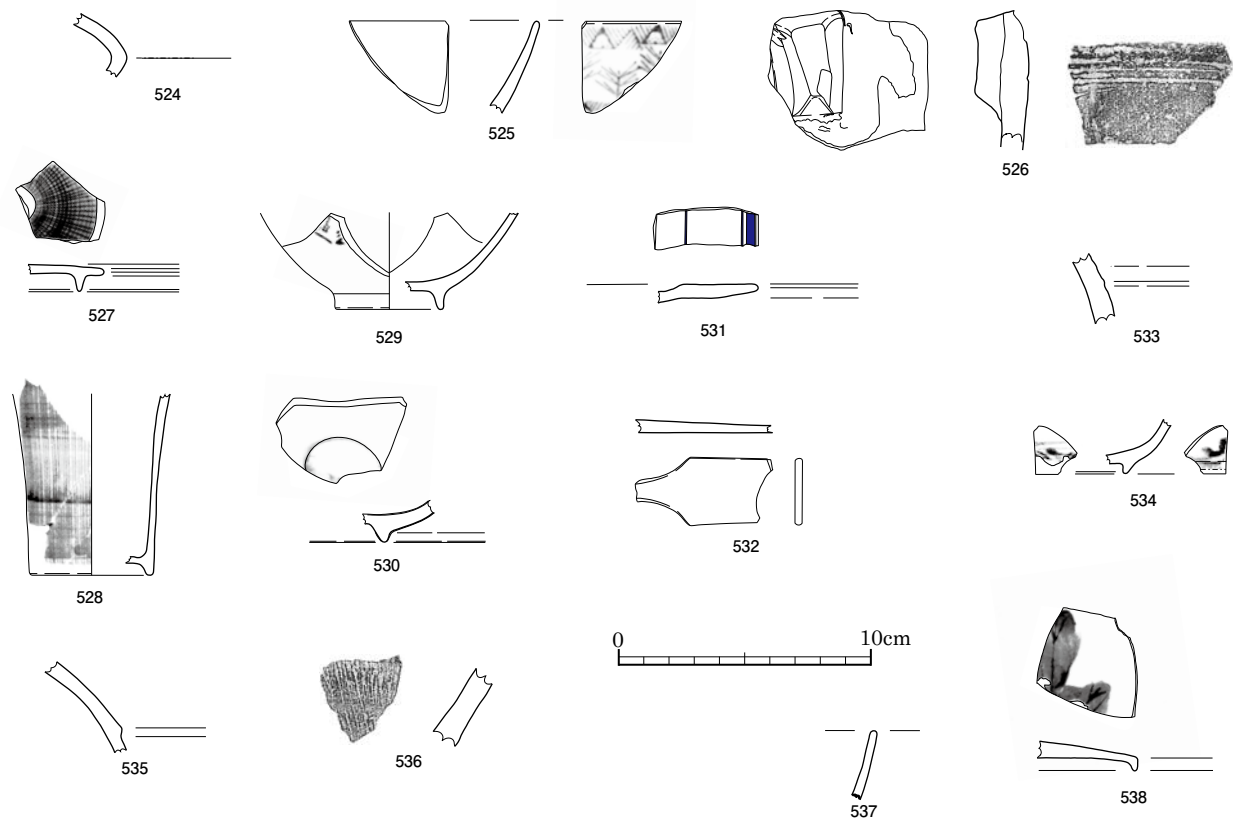
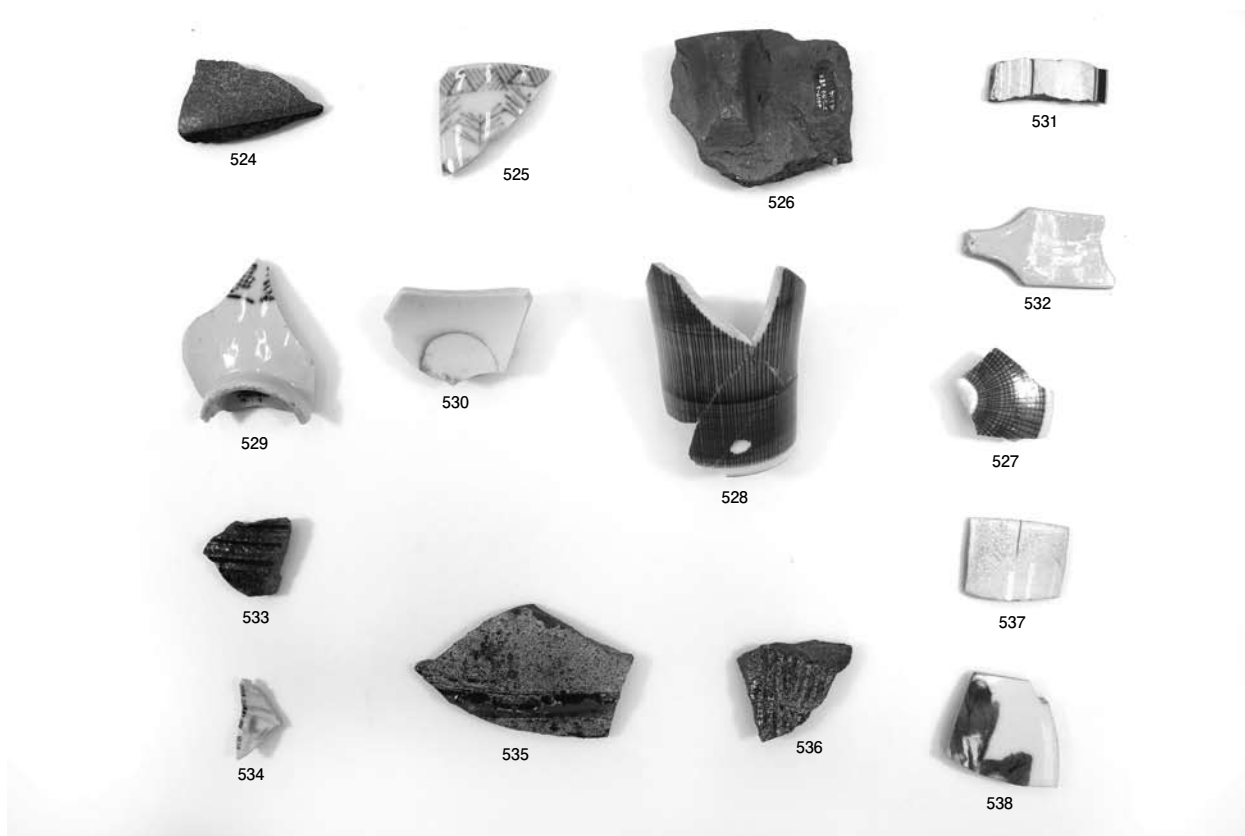


Fig.79 表土・攪乱層・排土出土遺物(4) (S=1/3)



PL.74 表土・攪乱層・排土出土遺物(4)

色透明ガラス瓶が得られている。

509・510はゴミ穴4から出土したもので、509が苗代川産播鉢、510は瓦当である。

511はゴミ穴1から出土した「生協」磁器碗で口縁部外面に緑色二条の線が巡る。IV章で紹介した井碗(390)とセットとなる湯飲みであろう。

512・513はゴミ穴2から出土した近現代磁器碗である。

514～523はゴミ穴3から出土した近現代遺物で、磁器碗(514)・湯飲み蓋(515)・皿(516)などがある。517～523はガラス瓶である。517は雪印製品、518は森永製品で石塚硝子株式会社の打刻がある。519は「霧島ヨーグルト」飲料である。517は昭和45年以降のもの、518・519は昭和45年以前のものであろう。520は「雲丹」の八角瓶で外面に陽刻がある。437は酒瓶である。522は「カルピス」、523は「森永コーラス」の瓶である。両者ともにプラスチックの蓋が残存している。

524～532はゴミ穴6から出土した遺物である。524は近世薩摩焼苗代川土瓶である。526は土製のコンロで口縁部に四条の沈線文が巡る。525・527～532は近現代の磁器で、525・527～530が碗で、527・528は対になる。531は皿、532は不明品である。

533・534はゴミ穴7から出土した遺物で、前者が苗代川甕、後者は中国青花である。

535・536はゴミ穴10から出土した苗代川産陶器で、前者が甕、後者が播鉢である。

537・538はゴミ穴11から出土した近現代磁器で、前者が碗、後者は井碗の蓋と考えられる。

### 2・3層上面検出遺構 (Fig.80, PL.75・76)

調査区東半部の2層上面、西半部の3層上面に掘り込まれる形で、鹿児島高等農林学校時代の製糸工場検査室・実験室基礎跡の一部、配管跡・ゴミ穴・樹木移植による抜去痕、性格不明のピット群、平成7年の試掘調査トレンチなどが検出されている。配管跡・ゴミ穴・樹木移植による抜去痕から近現代遺物が出土している。

### 2層出土遺物 (Fig.82～84, PL.78～80)

弥生～古墳時代の土器、打製石鏃、土師器、中世の陶磁器、近世の陶磁器、焙烙、近代以降の陶磁器、泥メッコ、火打石、砥石、古銭、煙管などが得られている。

539・540は如意形口縁の弥生時代前期甕であり、口縁端部に刻目を施す。541は弥生時代中期ごろの甕の底部である。542は弥生時代前期突帯文系の甕である。543は弥生土器の壺、544は古墳時代成川式甕の脚台である。545は幅1.2cmの低い突帯上に浅い刺突文を施すものであり、礫を多量に胎土に含む特徴は、他の土器とは異なっている。壺形を呈すると思われる。546は成川式の壺と思われる。

547～549は焙烙、550・554は不明土器、551は青磁で見込みにスタンプの双魚文がある。552・555は土師器で555は外面にススが付着している。553は瓦器碗である。

556～571は苗代川産陶器で、556～559は鉢、560～562は播鉢、563～566は土瓶、567・568は山茶家、569は甕、570は羽釜、571は壺である。

572～575は近世薩摩焼加治木・始良系陶器で、572・573は灯明皿、575は皿、576は薩摩焼堅野系の土瓶と思われる。577は白薩摩、578～582は薩摩磁器で、581が皿、残りは碗である。

583は当初、肥前系の磁器と考えてこの項に入れたが、後に14世紀以降の白磁四耳壺ということが判明した。

584・585は肥前系磁器碗、586は波佐見焼である。587～590は肥前系の皿で、587は大皿である。591・592は肥前小杯である。

447は関西系の煎じ碗である。18世紀中ごろに位置づけられる。

産地・時期不明の陶器には碗(594)・土釜(596)・器種不明(597・601)などがある。

595は日本硬質陶器株式会社製の皿と考えられる。ほかに近現代の磁器として、皿(598)・碗(599)・仏飯具(600)・紅皿(602・603)が得られている。

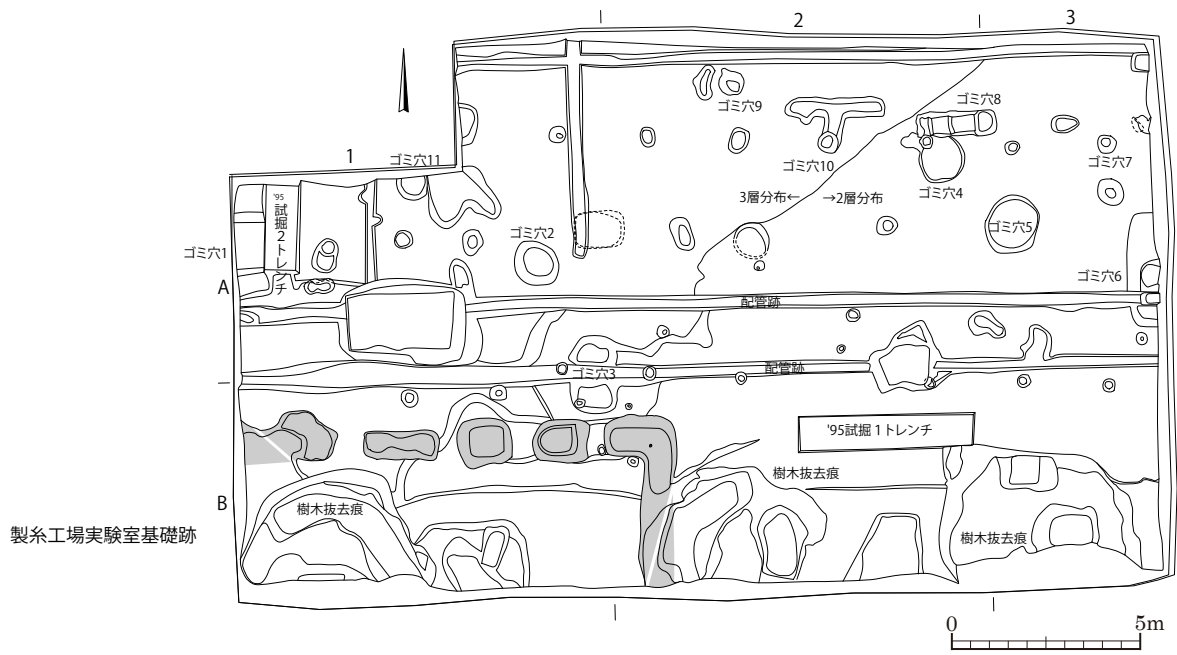


Fig.80 2・3層上面検出遺構(S=1/200)

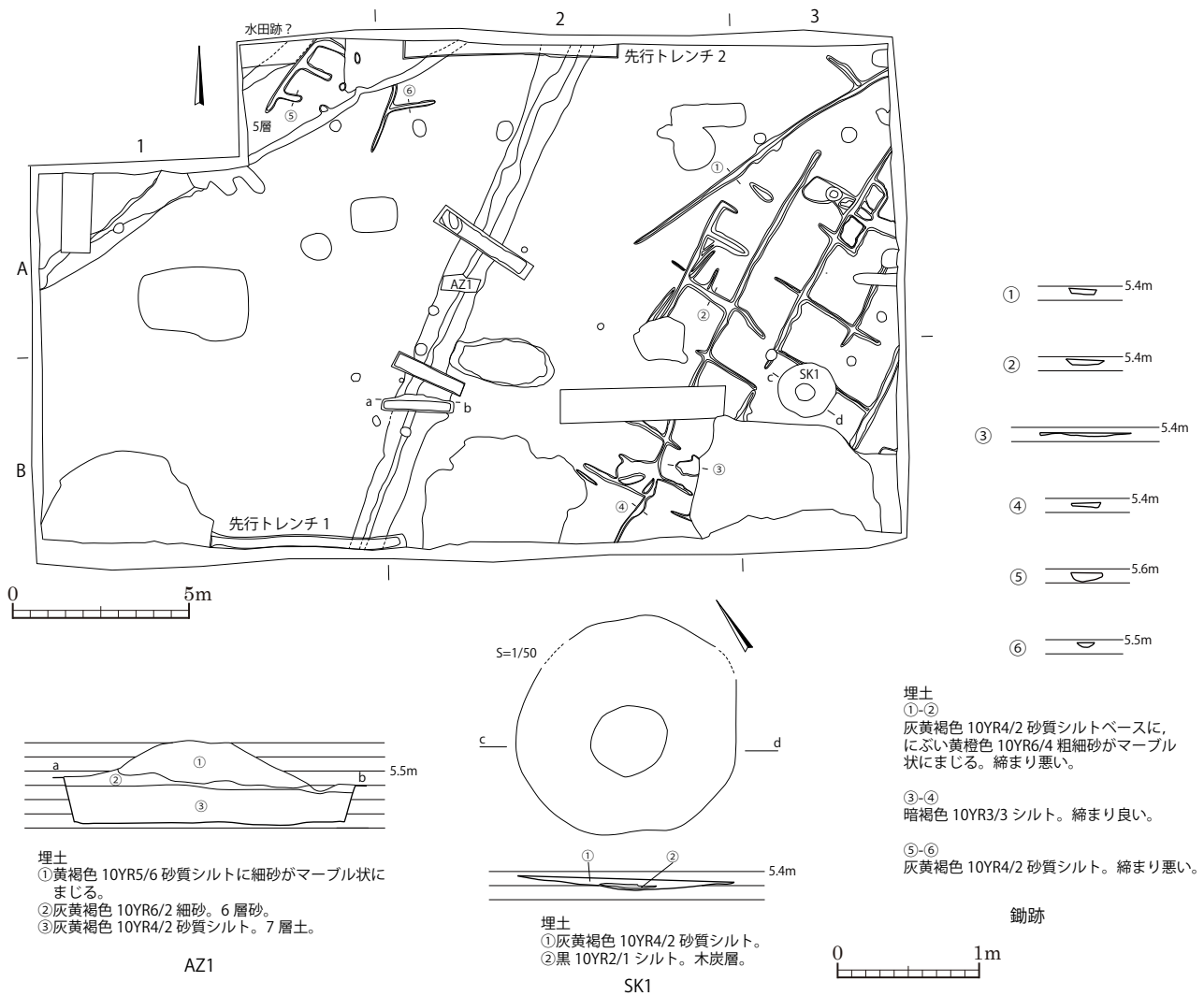


Fig.81 4a層上面(東半部)・4c層上面(西半部)検出遺構(S=1/200),個別遺構(S=1/50)



発掘調査前のボーリング調査(2007.11.26)



発掘調査前のボーリング調査(2007.11.26)



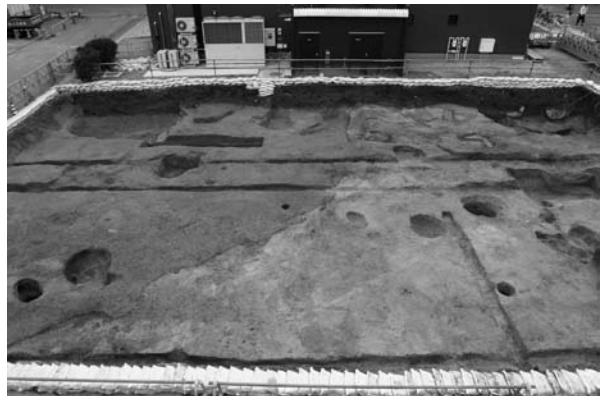
表土剥ぎ[西より]



表土剥ぎ[西より]



表土剥ぎ後[西より]



表土剥ぎ後[北より]



水田層(2層土)と氾濫層(3層砂)の切りあい[南より]



氾濫層(3層)の堆積[東より]

PL.75 ボーリング調査・表土剥ぎ後・3層堆積状況





4a層上面鋤跡・SK1検出[南より]



4a層上面SK1断面[南より]



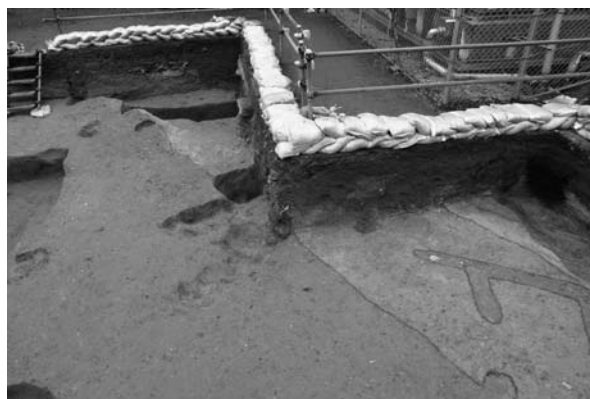
3層除去[西より]



3層除去[北より]



4層検出ライン[西より]



4層・5層ライン検出[東より]



AZ1を覆う4層土[南より]



4層除去[北より]

PL.76 4a層上面検出遺構・3～5層



4層除去/6層検出[西より]



AZ1埋土[南より]



AZ1[南より]



AZ1[西より]



7層上面[西より]



7層上面[北より]



AZ1ベルト1[北より]



AZ1ベルト2[北より]

PL.77 6層検出・AZ1検出・7層上面検出

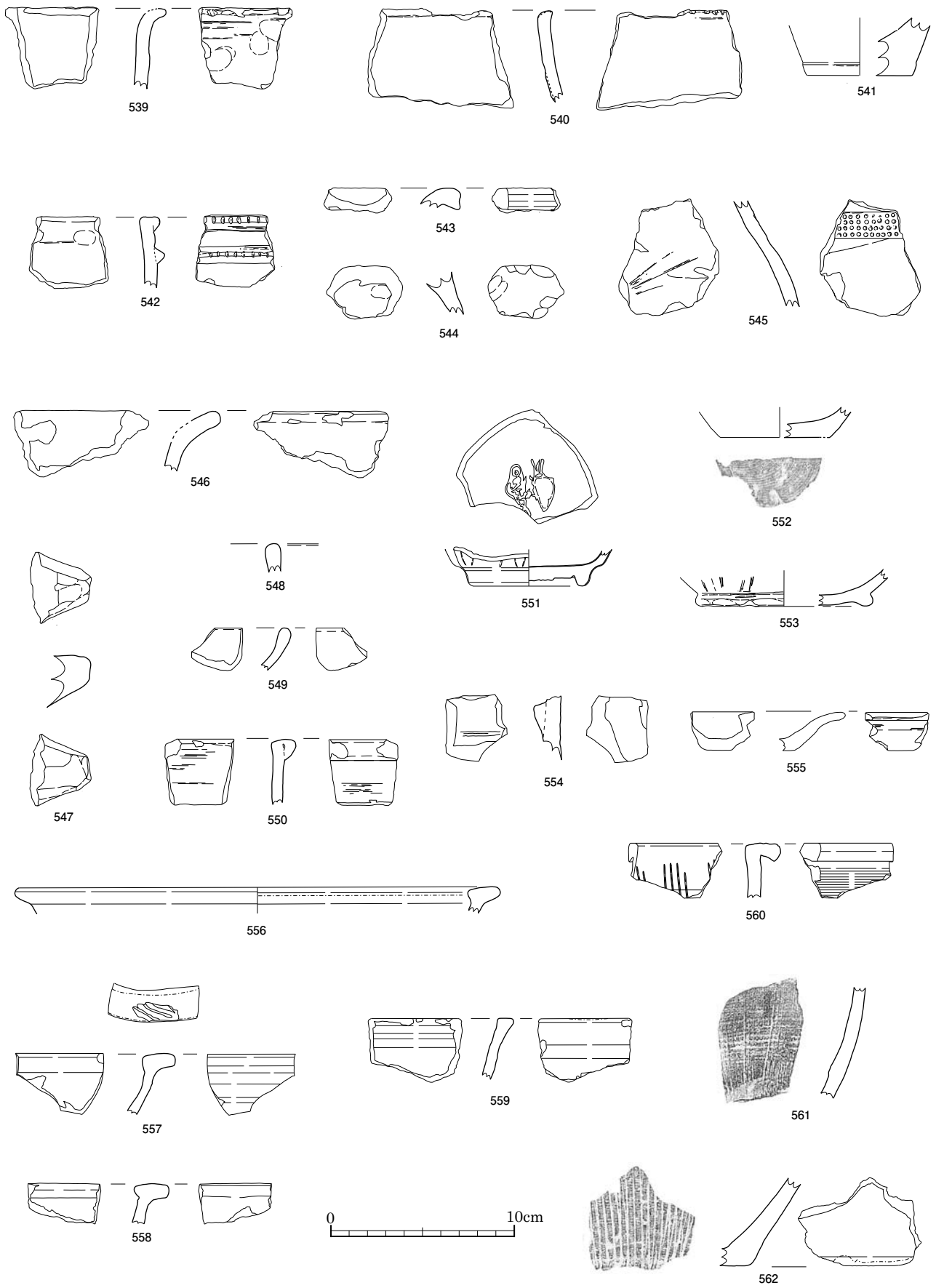
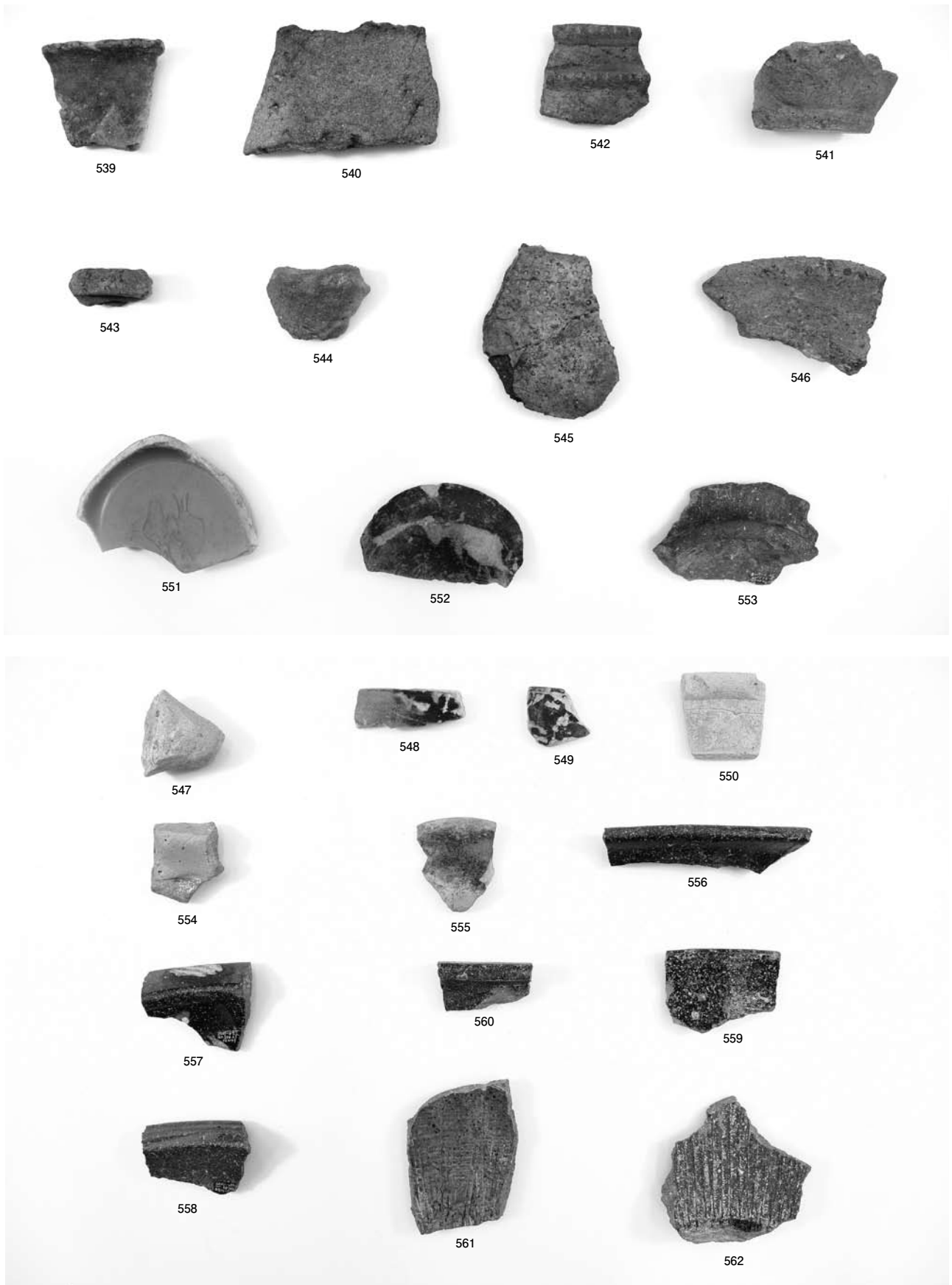


Fig.82 2層出土遺物(1)(S=1/3)



PL.78 2層出土遺物(1)

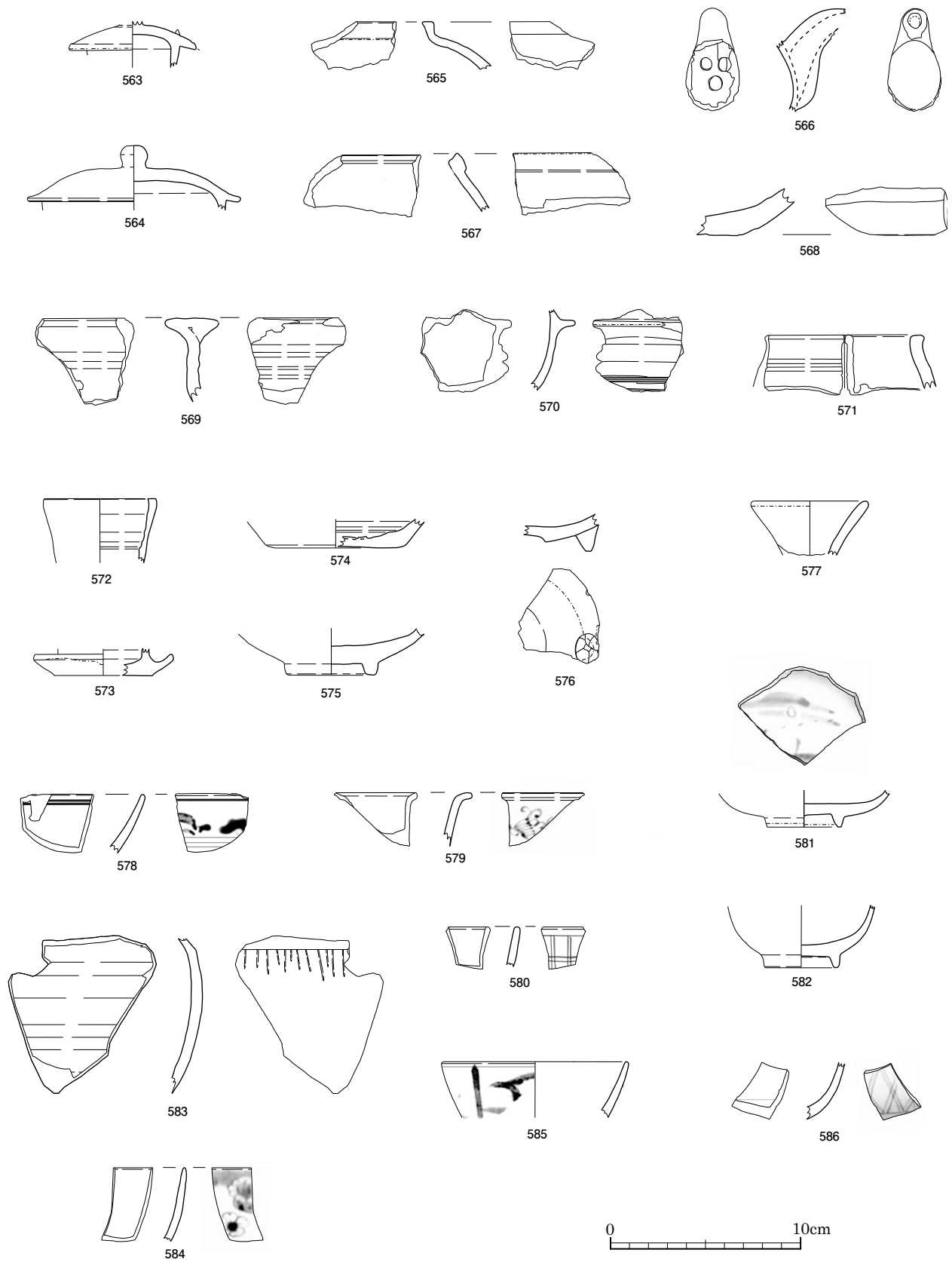
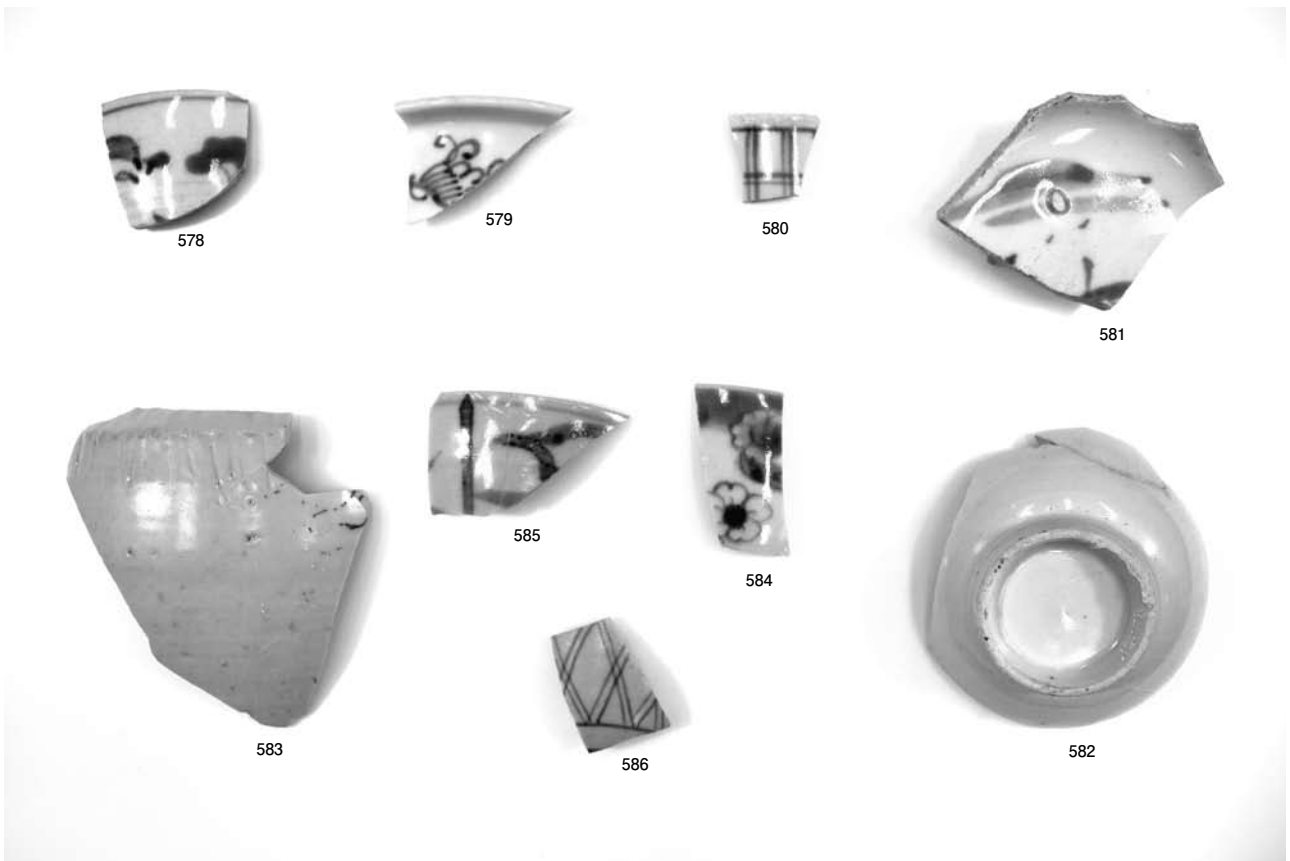
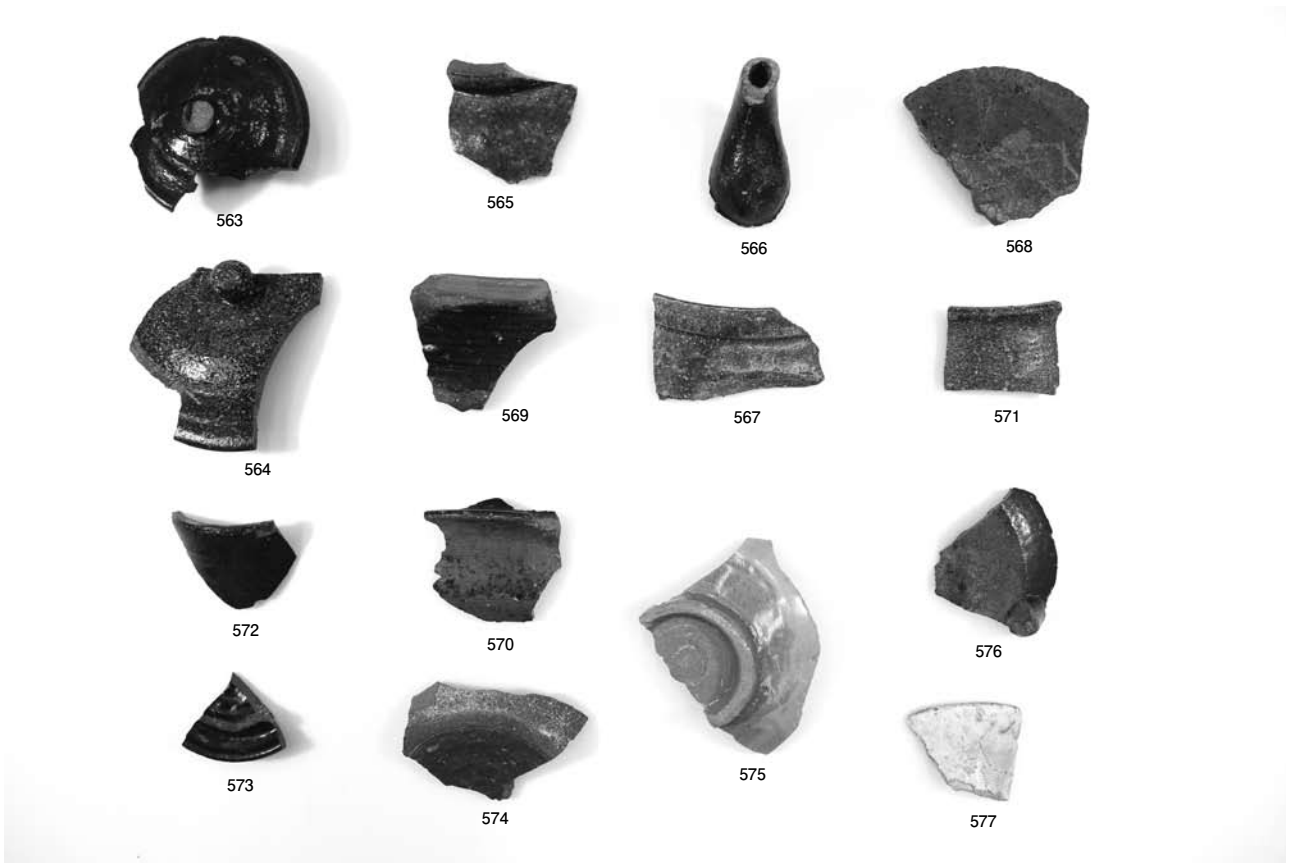


Fig.83 2層出土遺物(2) (S=1/3)



PL.79 2層出土遺物(2)



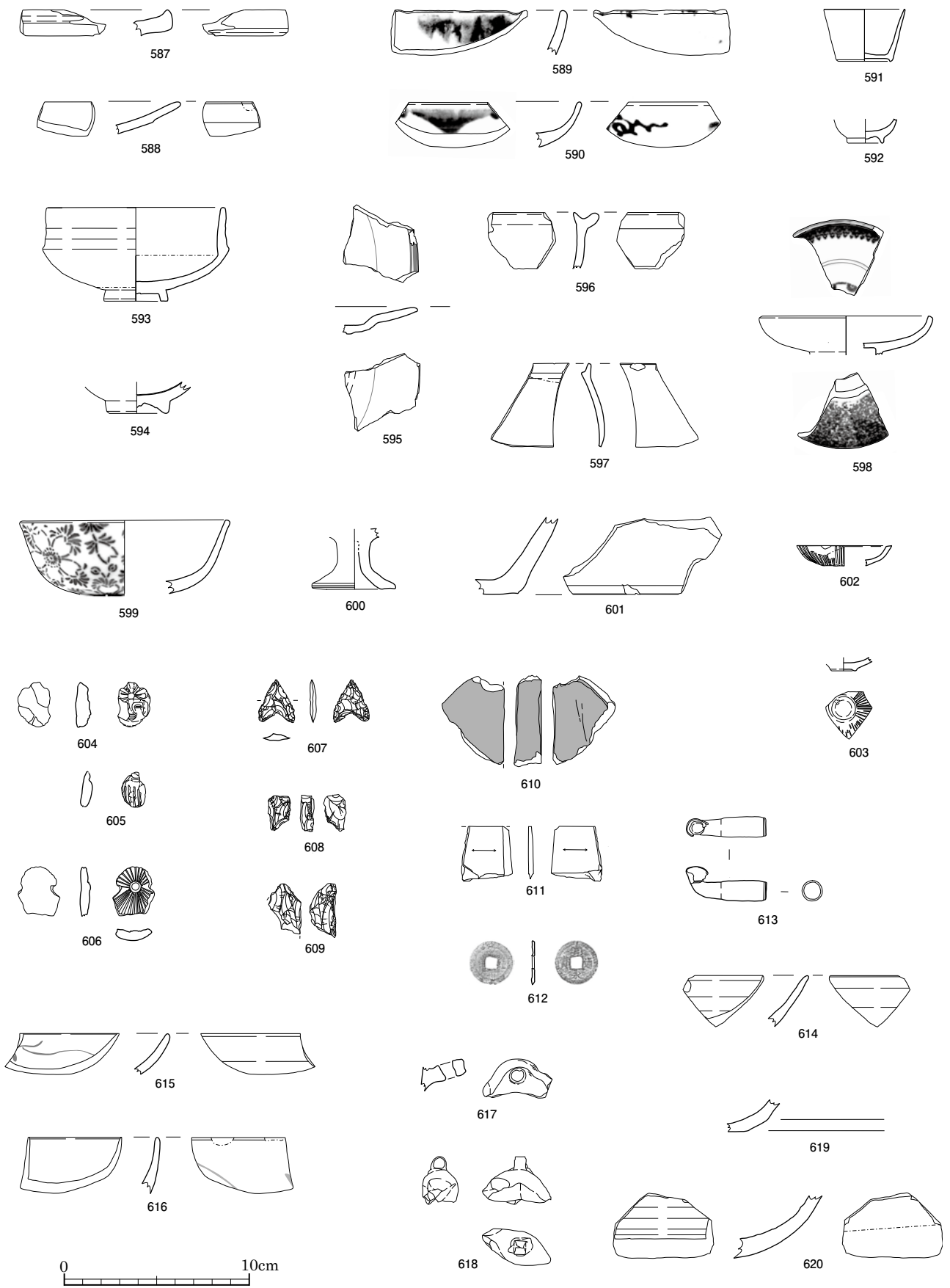
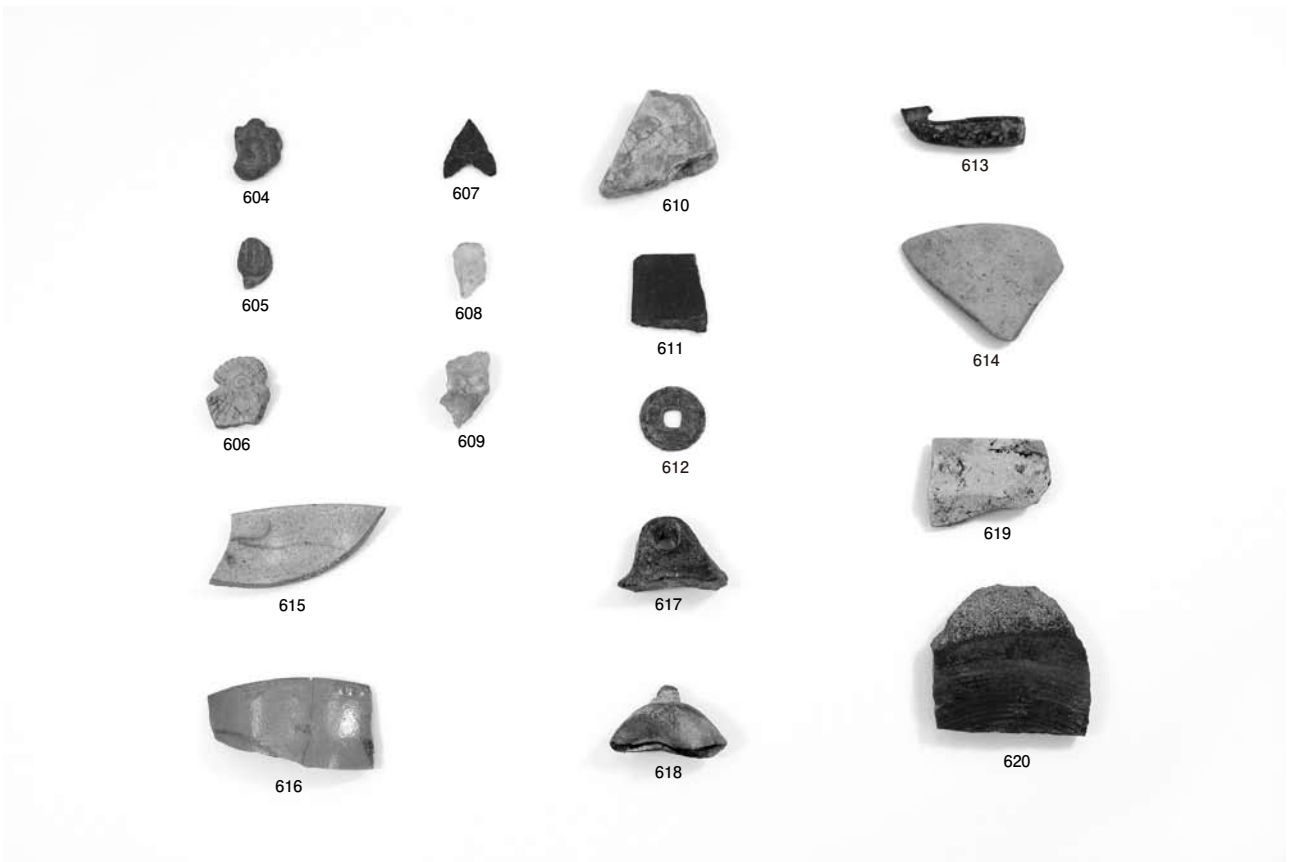
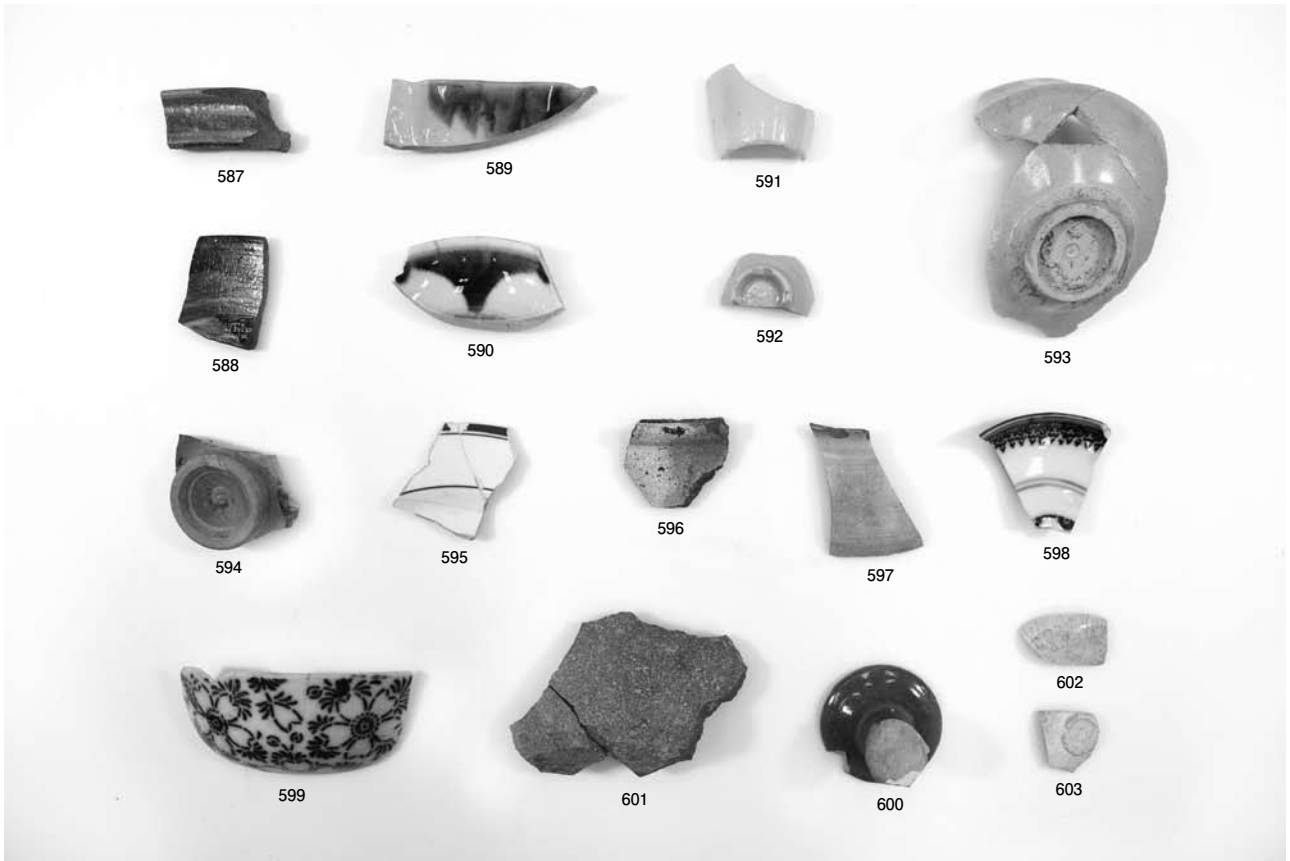


Fig.84 2層(3)・3層・4層・6層出土遺物(S=1/3)



PL.80 2層(3)・3層・4層・6層出土遺物

604～606は泥メンコで、604は人物である。607は安山岩製の打製石鏃である。608・609は玉髓製の火打石で、角が潰れている。610は砥石、611は薄手の製品である。612は寛永通宝である。613は煙管の雁首であり、火皿が短く補強帯がないもので19世紀ごろのものと考えられる。クリーニング中に内部に羅字の一部が認められた。

### 3層出土遺物 (Fig.84, PL.80)

調査区西半部を覆う3層からは遺物がほとんど出土していない。図化できたのは614の土師器坏のみである。この状況は、同層の性格が河川の氾濫土砂であり、短期間で堆積したことを示すものかもしれない。本調査前にボーリング調査が行われたが(PL.75)、同層と思われる砂層から磁器碗が1点出土している (Fig. 99, PL.91)。

### 4a層上面 (東半部), 4c層上面 (西半部) 検出遺構 (Fig.81・103, PL.76・77・95)

調査区中央部にやや北東—南西方向に大畦 (AZ1) が検出された。攪乱部を利用した先行トレンチで断面埋土を確認すると、畦埋土①は② (6層砂) 上に載っている状況であったために、記録調査後には除去した。埋土中からは近世薩摩焼苗代川産陶器 (800) などが得られている。

調査区東半部を中心として、20～50cm幅で深さ5cm内の犁跡 (SD) が検出された。産地・時期不明の磁器小片 (801) が得られている。また、性格不明の浅めの土坑 (SK1) が検出され、底面に木炭まじりのシルト層が確認されている。調査区西半部の段となっている5層上面や4c層上面においても、犁跡が検出されている。

### 4層出土遺物 (Fig.84, PL.80)

4層も遺物の出土量は多くない。615は加治木・始良系と思われる皿である。616は肥前系の碗、617は苗代川土瓶である。618は青銅製の鈴である。

### 5層出土遺物

5層もA1区に限定されているわずかな土壌であるので、遺物出土量は多くない。土師器、苗代川播鉢が出土しているが小破片のため、図化できなかった。

### 6層出土遺物 (Fig.84, PL.80)

6層は3層に類似した河川堆積物であり、調査区に部分的に分布するだけであるので、出土量は少ない。土師器 (619) と苗代川土瓶 (620) が図化できた。

### 6層上面・7a層上面検出遺構 (Fig.85, PL.77)

畦 (AZ1) の西側下端付近と調査区東側南半部には河川氾濫砂と思われる砂層が偏在して分布しており、河川氾濫層を除去した痕跡と判断した。これを除去すると、B2区付近に犁跡が検出された。これらは6層砂で覆われている。

### 7b層上面検出遺構 (Fig.86, PL.81)

大畦 (AZ1) を除去した後、下層から同じ位置に大畦 (AZ2) が検出された。畦1を除去する際に、水平に除去したが、本来凹凸があったらしく、AZ2の最頂部が除去されてしまった。Fig.86にあるように、2か所の土層ベルト南側に検出された上場が本来のAZ2上端である。

AZ2の東側北半部を主体として、稲株痕と人足跡、犁跡が検出された。足跡の大部分はAZ2に接して検出された。また、足跡・犁跡はAZ2に並行するように走る。これらの遺構は検出ラインの測量のみで掘り下げは行わなかった。稲株痕は不明確であった。

### 7層出土遺物 (Fig.90, PL.84)

621は中世青磁皿である。

622は土師質の香炉であるが時期などは不明である。

623・624は白薩摩であり、623が瓶、624が香炉で近代以降のものと考えられる。625～629は苗代川陶器で、625・750は鉢、627が壺、628は甕か壺の底部であると考えられる。629は加治木・始良系の可能性のある蓋物である。

630～632・634～636は肥前・肥前系磁器で、630・631が碗、632が皿、634が小杯、635・636が瓶である。633は波佐見の磁器皿である。637は唐津の陶器であり溝淵皿である。

638は陶器香炉、639は磁器碗、641・642は陶器碗である。

近世陶磁器は17世紀にさかのぼる製品が安定して出土している。

640は中国青花であり、18世紀末～19世紀初頭のものである。

643～645は円盤状加工品であり、643・644は苗代川播鉢を転用している。646は比較的大型の土錘である。

647・648は煙管であり、火皿部に補強帯をもつことから、17世紀後半以降のものと考えられる。649・650は寛永通宝であり、650は縁が腐食している。651は鉛のようなずっしりと重みのある金属製品であり、用途は不明である。

表土を除去した段階で、AZ1南側・北側に先行トレンチを掘削したが (Fig. 81)、7層と考えられる土層で、成川式甕の脚部 (811) と中世白磁皿 (812) が出土した (Fig.99, PL.91)。

### 8a層上面検出遺構 (Fig.87, PL.81)

大畦 (AZ3) と、これを境とする調査区東半部で大畦に並走する鋤・犁跡と、垂直に横走するそれらを検出した。上層の7b層上面と異なり、横走する犁・鋤跡が目立つ。鋤・犁跡は一部を掘削し、断面で深さを確認したが5cmほどの深さであった。

AZ3からは糸切底の土師器底部 (802) が出土している (Fig.103, PL.95)。

### 8a層中検出遺構 (Fig.88, PL.82)

8a層条件検出遺構を測量し、掘り下げている途中で、調査区東半部において大畦 (AZ4) に並走する犁・鋤跡が検出され、また、調査区東半部の南側に大畦 (AZ4) に垂直に接する小畦 (AZ5) の頂部が検出されたため、測量を行なった。

犁跡の一部を掘削したが、3cm程度の深さであった。

### 8b層上面検出遺構 (Fig.89, PL.82)

大畦 (AZ4) の下端と小畦 (AZ5) の下端を検出するとともに、調査区東西部でAZ4に並走する犁・犁跡、AZ5に並走するそれを検出した。また、AZ5を切る形で性格不明の土坑 (SK2) が検出された。8a層中では土坑の開口部は検出されなかったことから、AZ5の機能が停止した後、SK2が掘削されたことを示しているが、8a層上面でも水田が継続されて機能していることを考えると、SK2は極めて短時間に掘られて埋め戻された土坑であると考えられる。水田地域での土坑群の検出は、連合大学農学課<sup>2)</sup>や農学部研究棟D (Ⅱ章参照)、農学部共通棟 (Ⅲ章参照) においても確認されており、連合大学農学課では粘土掘削坑の機能が想定されている。本地点では粘土層が存在せず、遺物もほとんど含まれていないことから、他地点と同様に遺構の性格は不明である。

犁・鋤跡は一部を掘削したが、3～5cm程度の深さであった。AZ5埋土からは16世紀後半～17世紀ごろの中国青花 (805) が出土している (Fig.103, PL.95)。

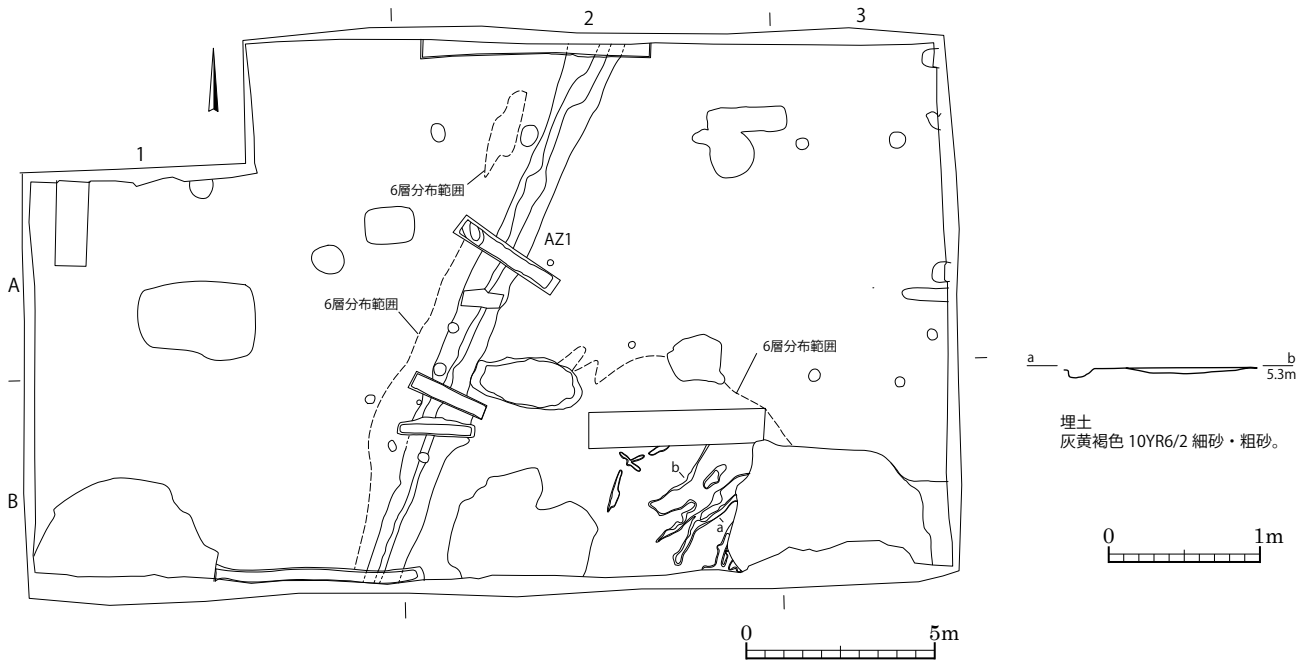


Fig.85 6層・7a層上面(S=1/200)

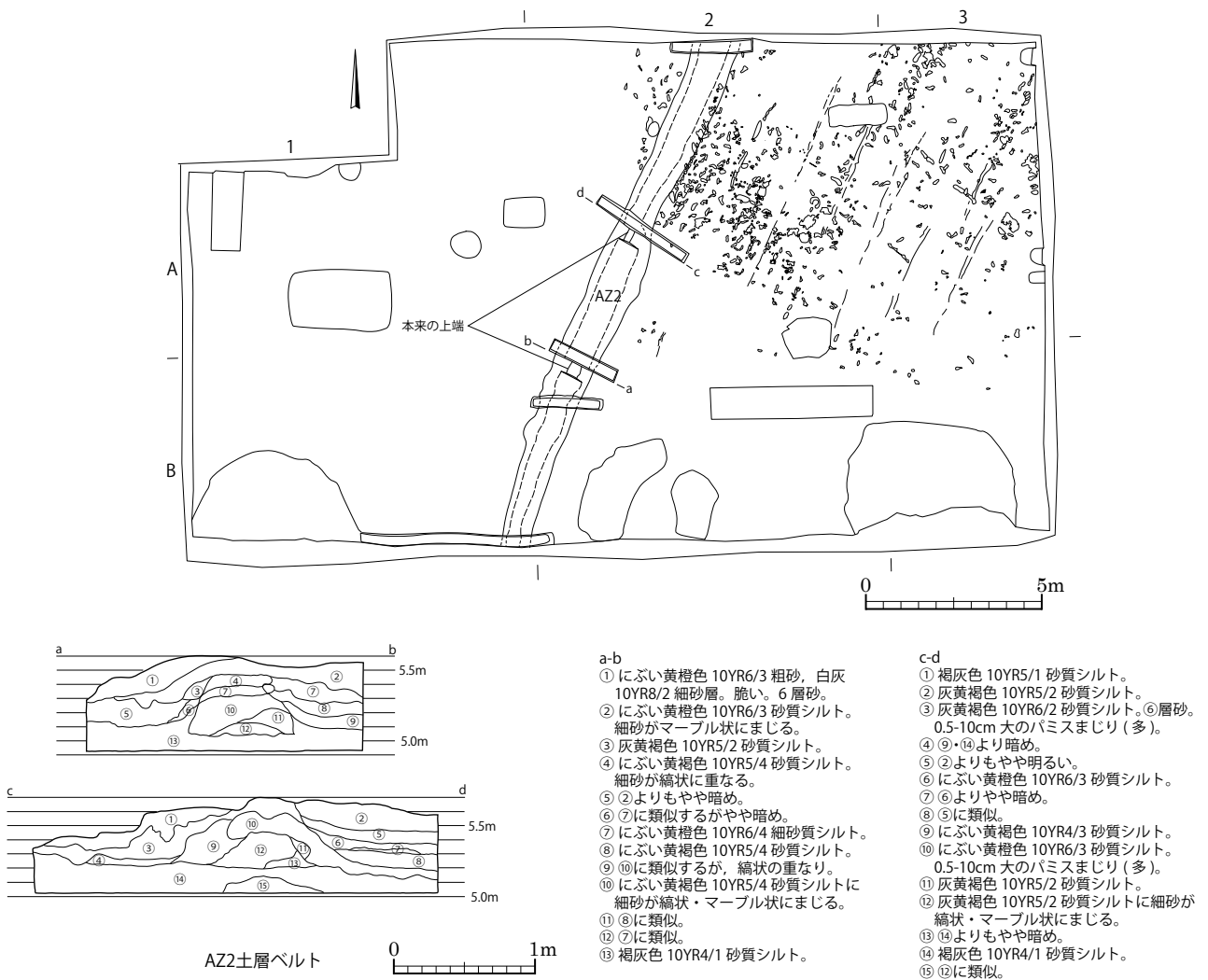


Fig.86 7b層上面検出遺構(遺構配置:S=1/200, 個別遺構:S=1/50)

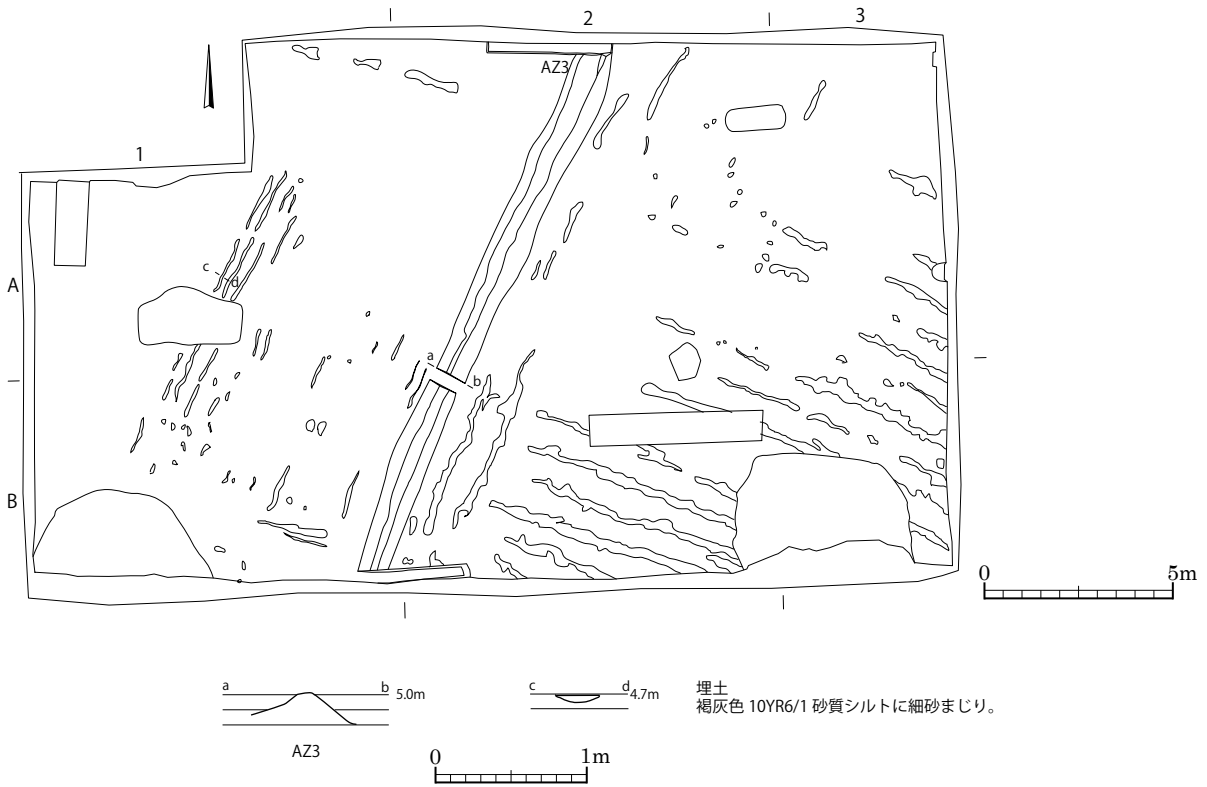


Fig.87 8a 層上面検出遺構 (遺構配置:S=1/200, 個別遺構:S=1/50)

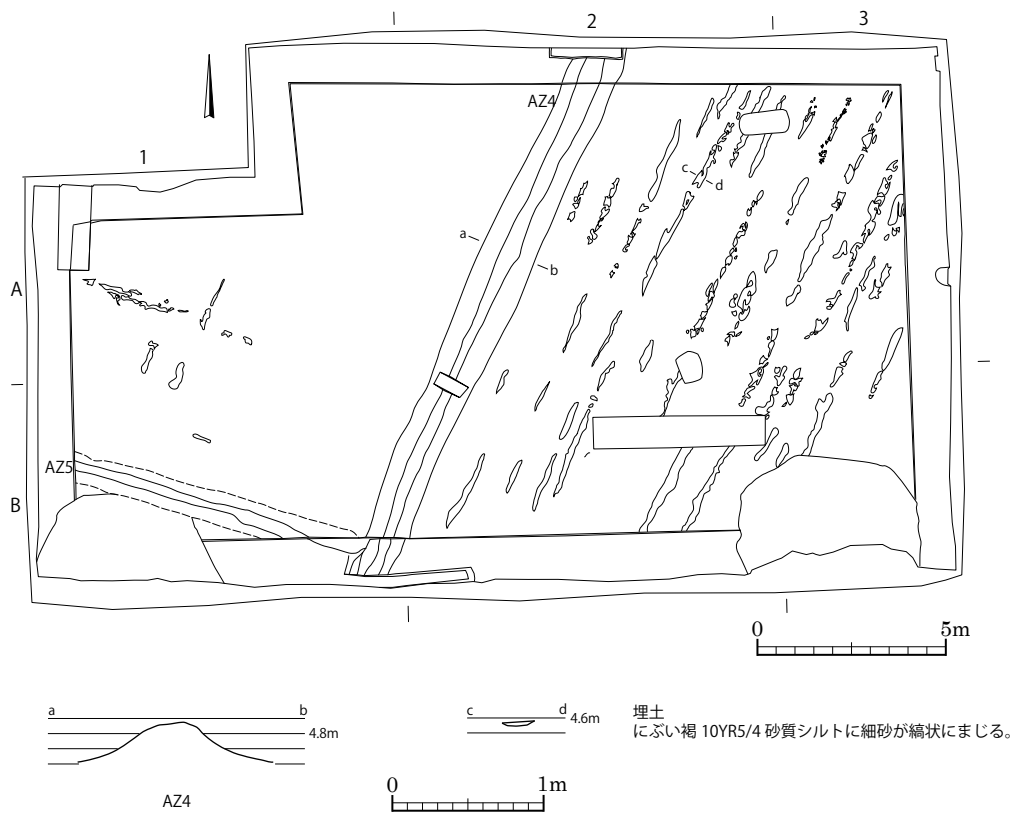
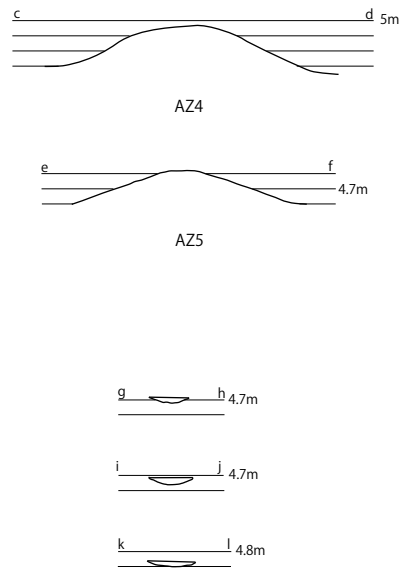
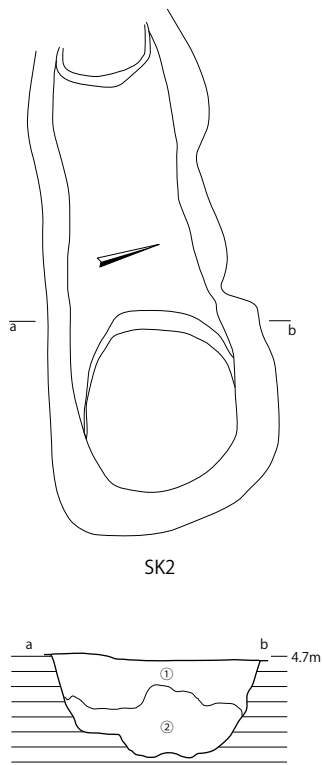
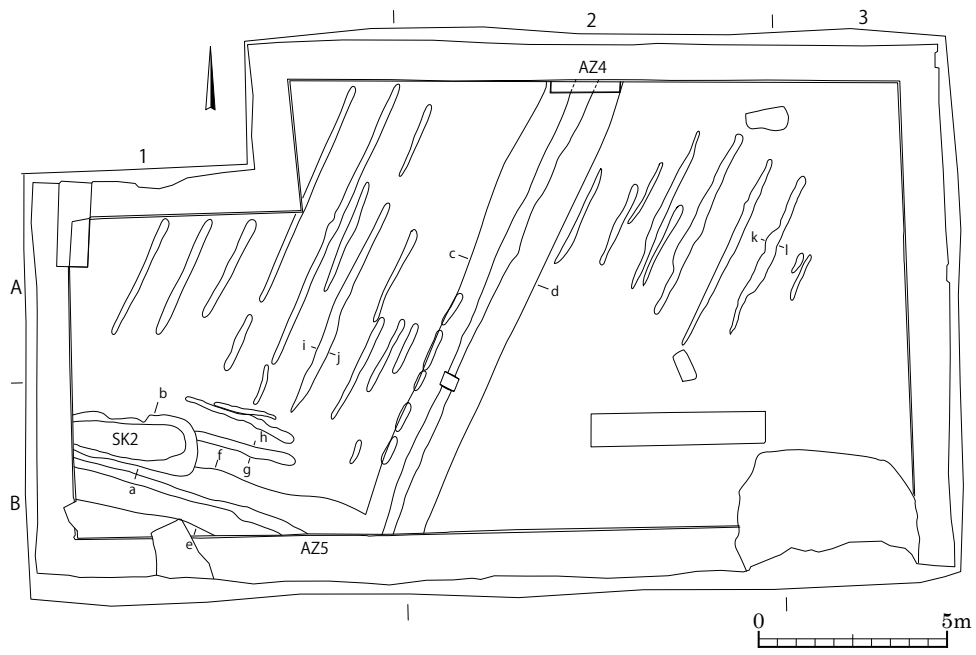


Fig.88 8a 層中検出遺構 (遺構配置:S=1/200, 個別遺構:S=1/50)





埋土  
 褐灰色 10YR5/1 砂質シルトに細砂まじり。



- ① 灰黄褐色 10YR4/2 細砂ベースに黒褐色 10YR3/2 砂質シルトがまだらにまじる。締まり良い。0.5-1cm 大のパミス(少)。木炭まじり(少)。マンガンまじり。
- ② 黒褐色 10YR3/2 砂質シルトベースに灰黄褐色 10YR4/2 細砂がまだらにまじる。締まり良い。0.5-1cm 大のパミス(少)。

Fig.89 8b層上面検出遺構(遺構配置:S=1/200, 個別遺構:S=1/50)



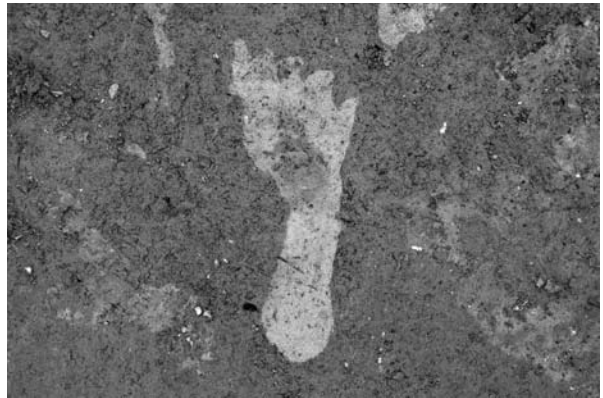
7b層上面[北より]



7b層上面[北より]



7b層上面足跡[西より]



7b層上面足跡



土錘出土



8a層上面[北より]



AZ3[南より]



8a層上面鋤跡[南より]

PL.81 7b層上面遺構・8a層上面検出遺構



8a層中遺構[北より]



8a層中鋤跡[北より]



8a層中AZ4[南より] 下端は未検出



8a層中AZ5[東より] 下端は未検出



8a層中鋤跡[南より]



8a層中ガラスビーズ出土



8b層上面[北より]



8b層上面[西より]

PL.82 8a層中検出遺構・8b層上面検出遺構



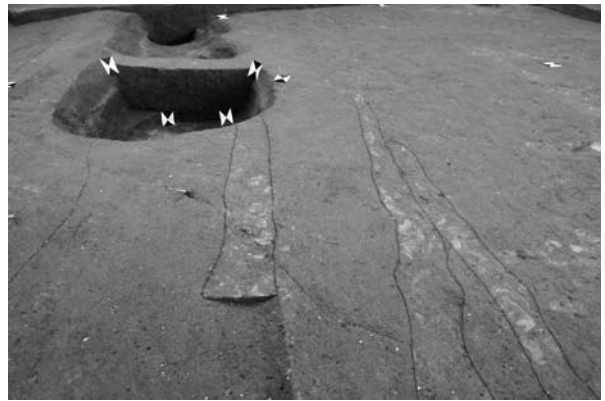
SK2[北より]



SK2埋土[東より]



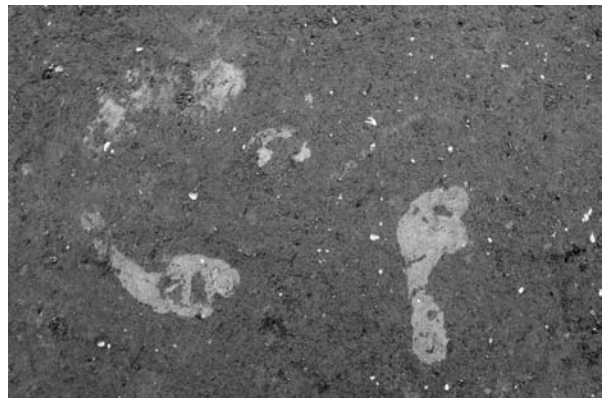
8b層上面鋤跡[南より]



8b層上面鋤跡[東より]



AZ4[南より]



8b層掘り下げ中検出足跡



9層上面[北より]



9層上面[北より]

PL.83 8b層上面検出遺構・9層上面検出

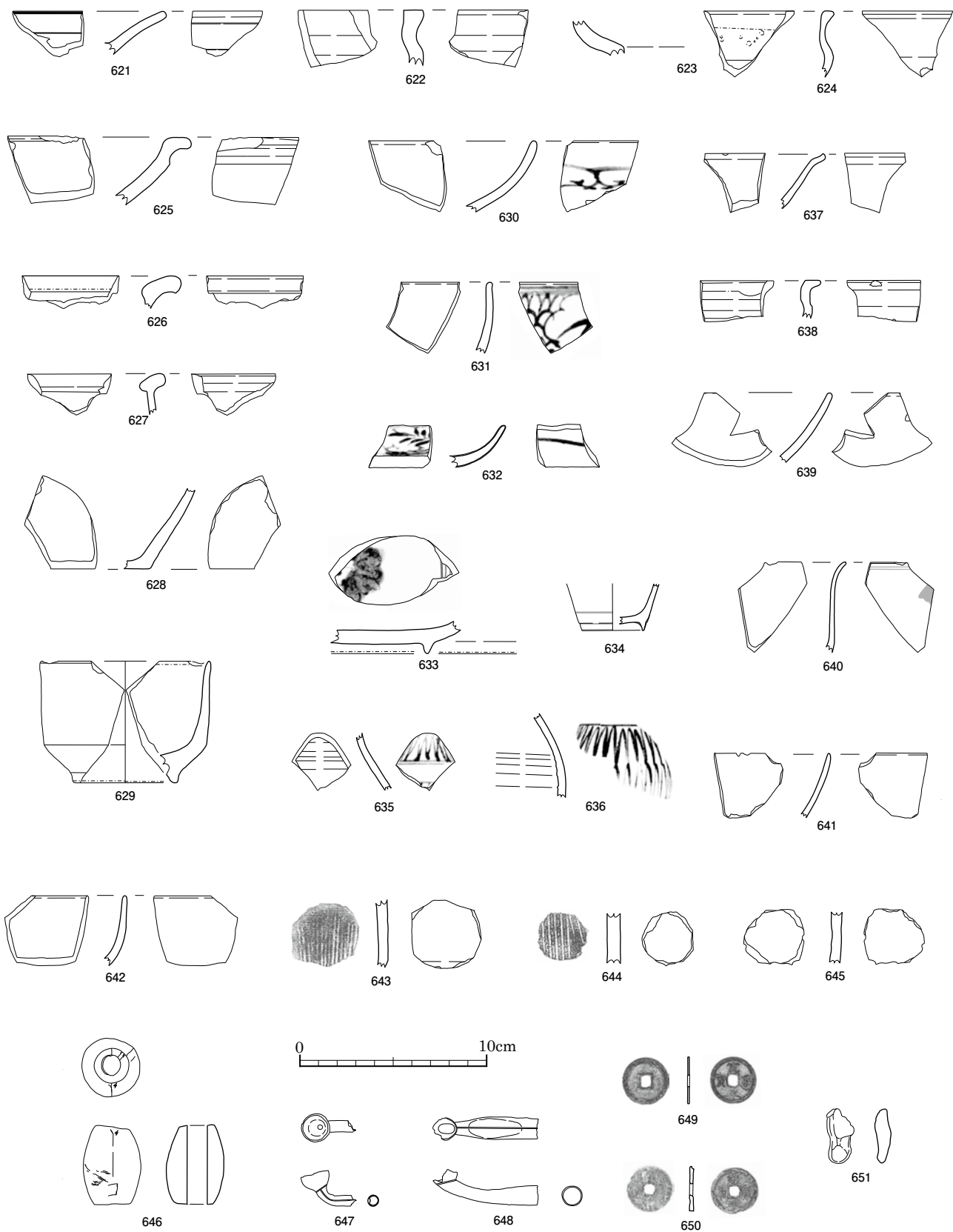
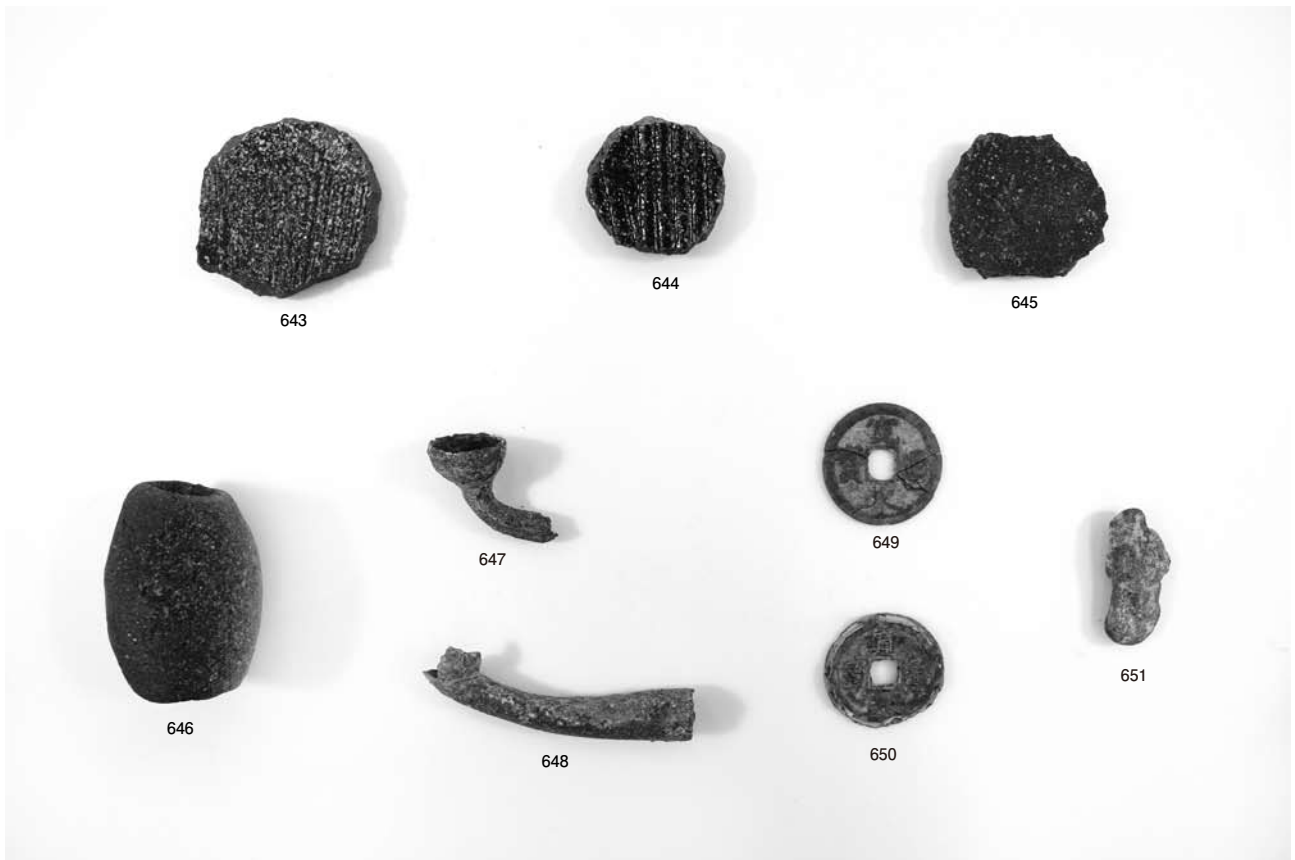
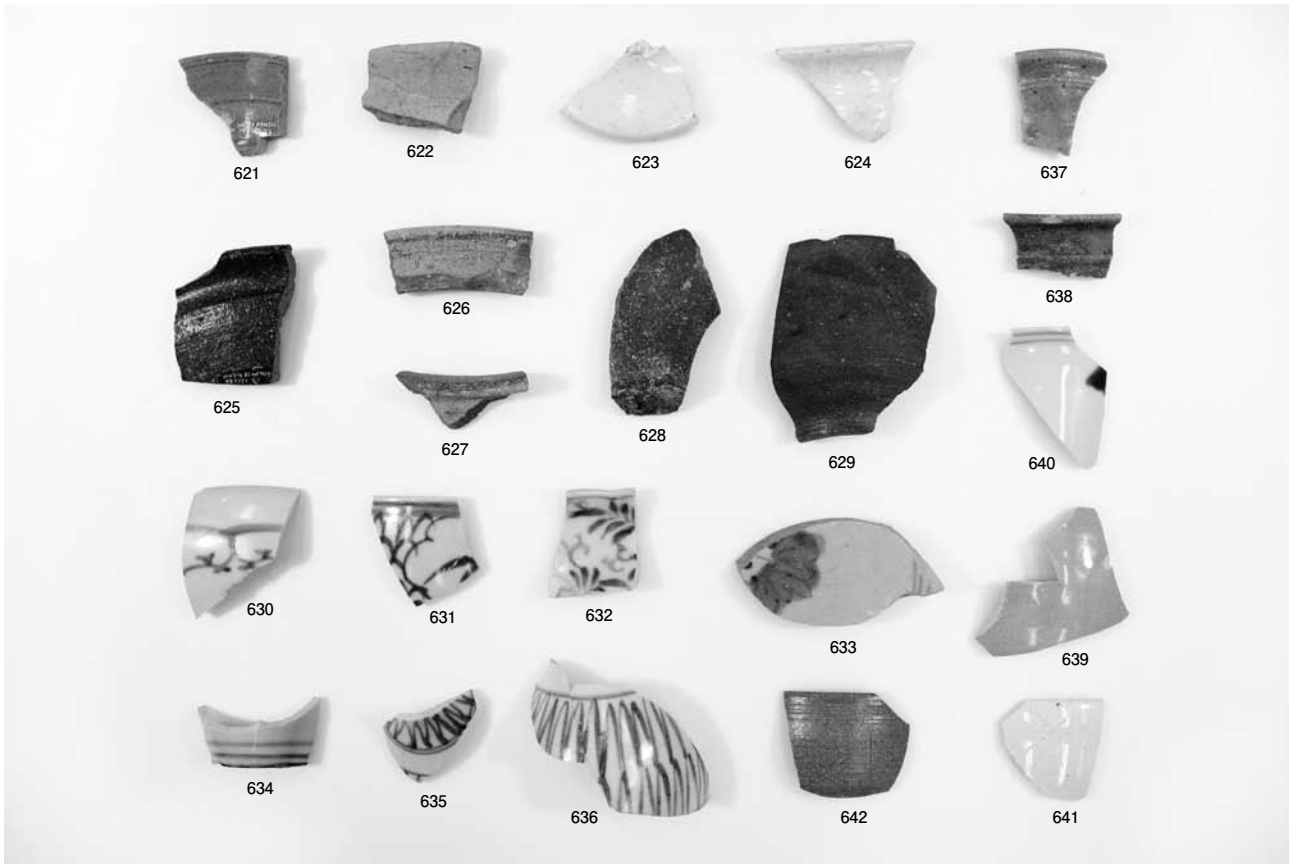


Fig.90 7層出土遺物(S=1/3)



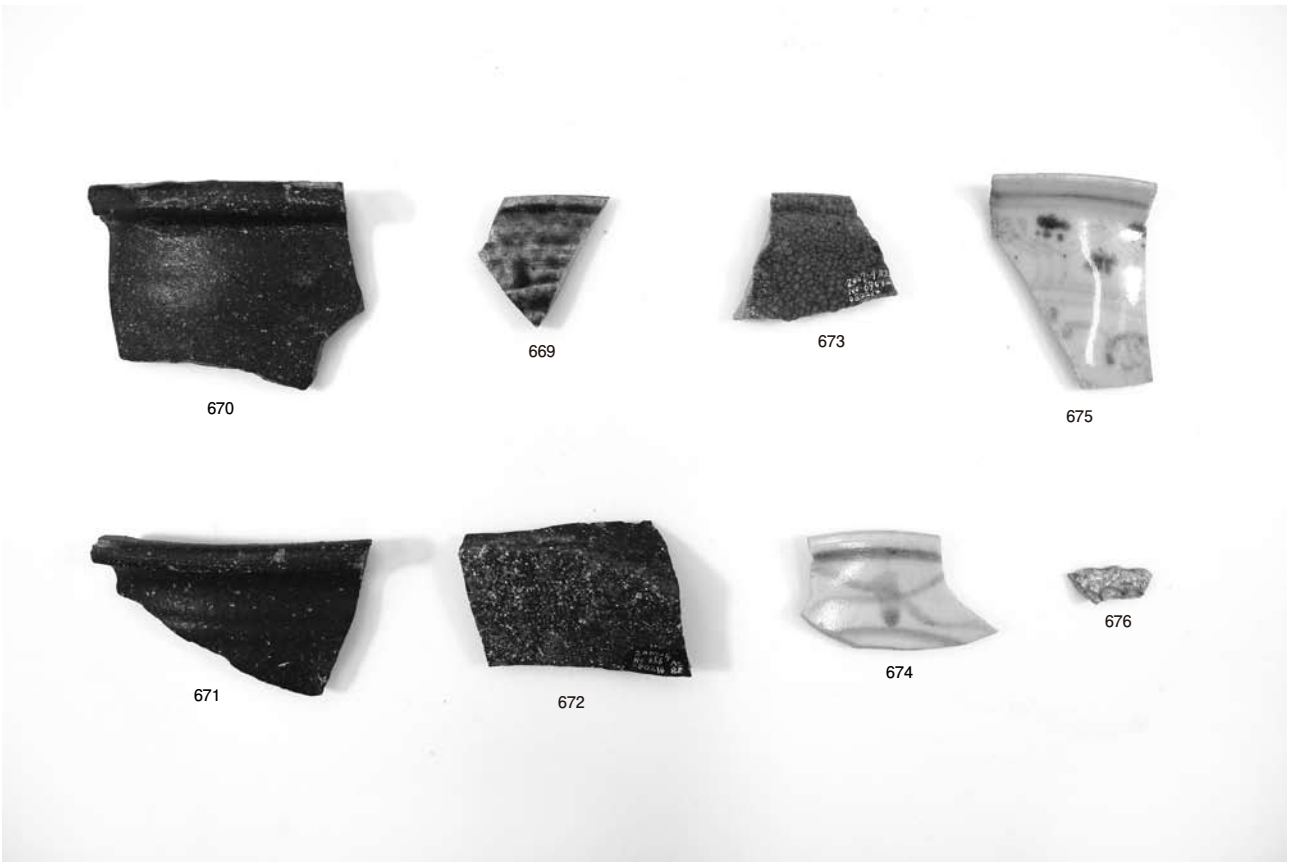
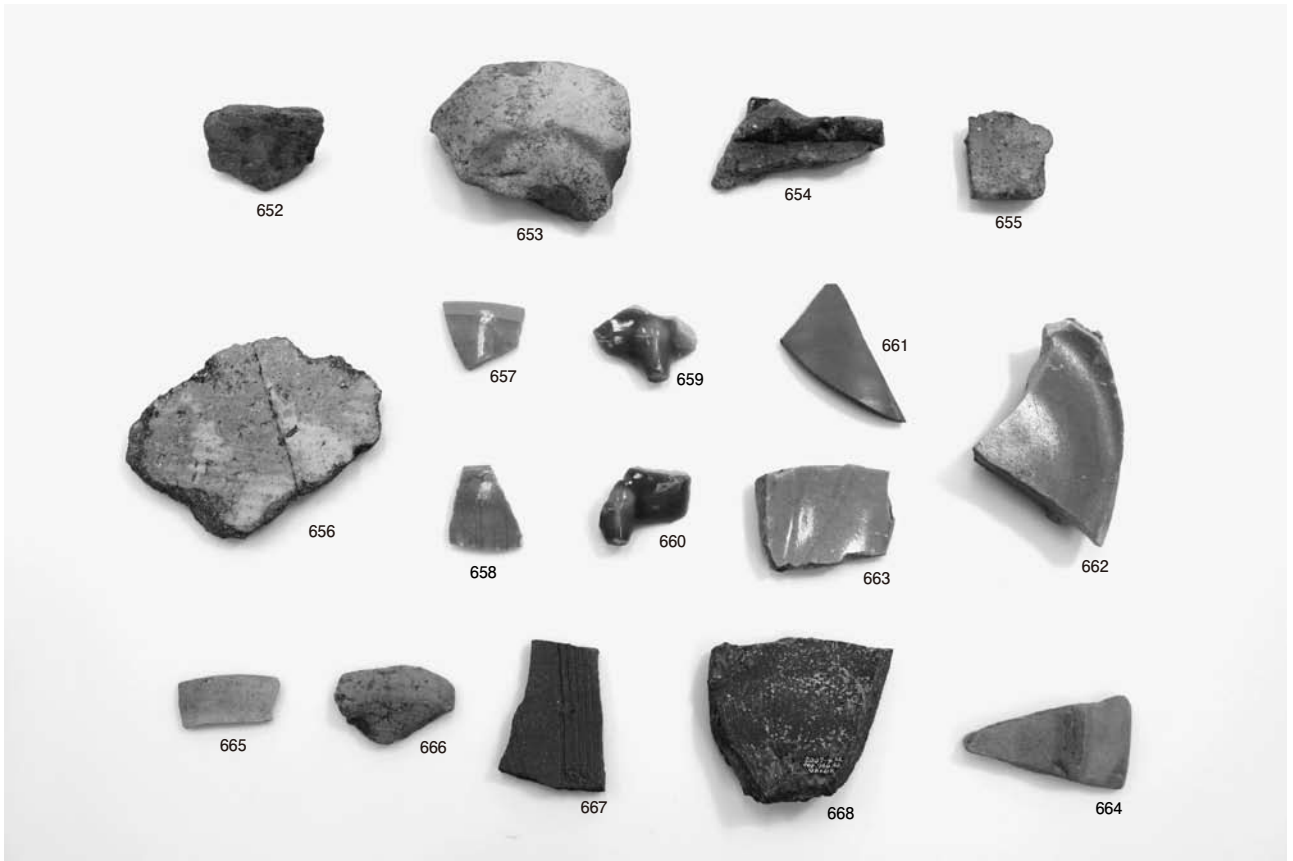


PL.84 7層出土遺物





Fig.91 8層出土遺物(1)(S=1/3)



PL.85 8層出土遺物

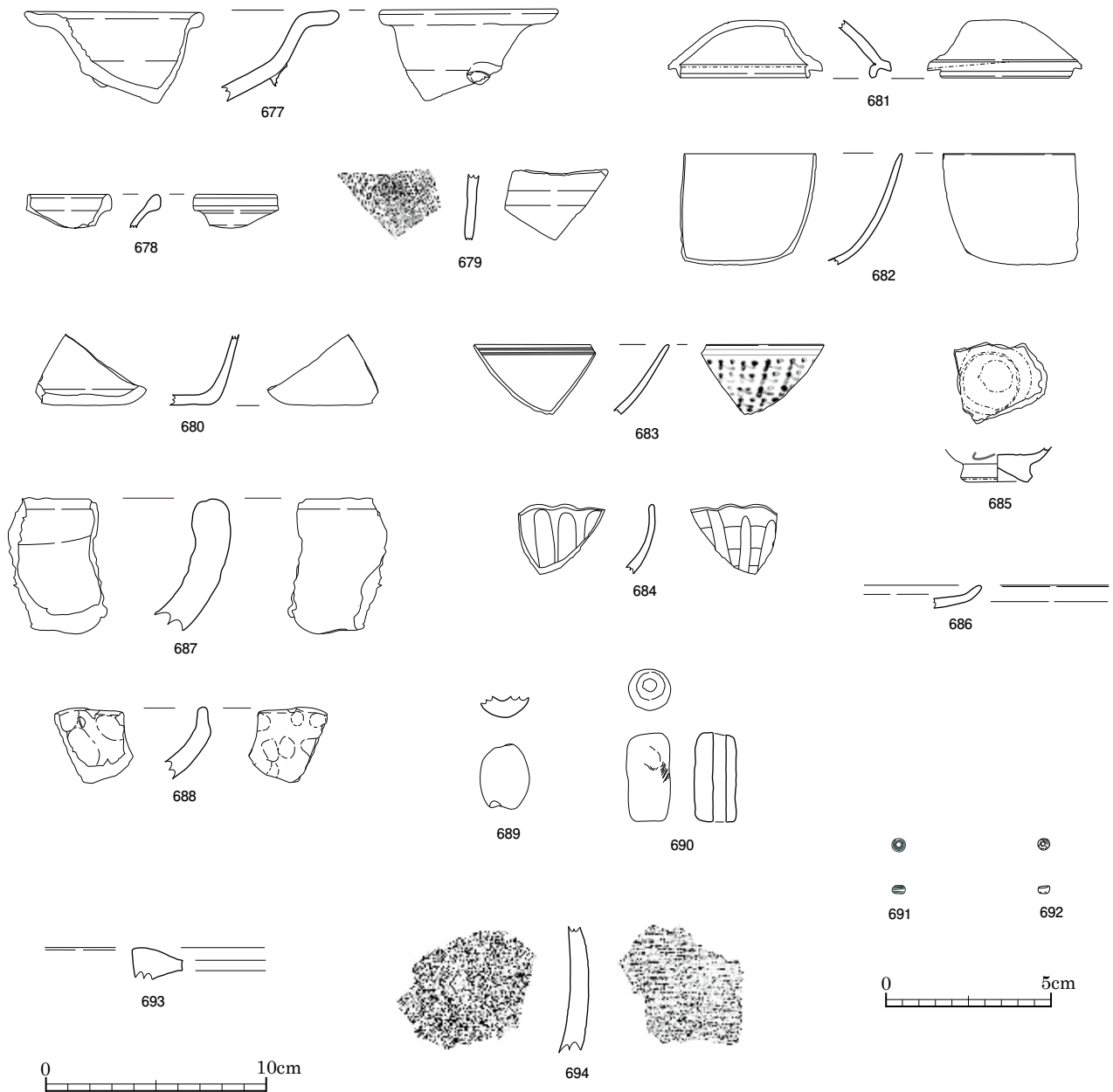


Fig.92 8層(2)・9層出土遺物(677~690・693・694:S=1/3, 691・692:S=1/2)

### 9層上面検出遺構 (PL.83)

調査区西半部を主体に、大畦に垂直に横走する犁・鋤跡(8層土を埋土とする)が検出されたが、範囲が不明瞭であったために、写真のみ掲載した。

### 8層出土遺物 (Fig.91・92, PL.84・85)

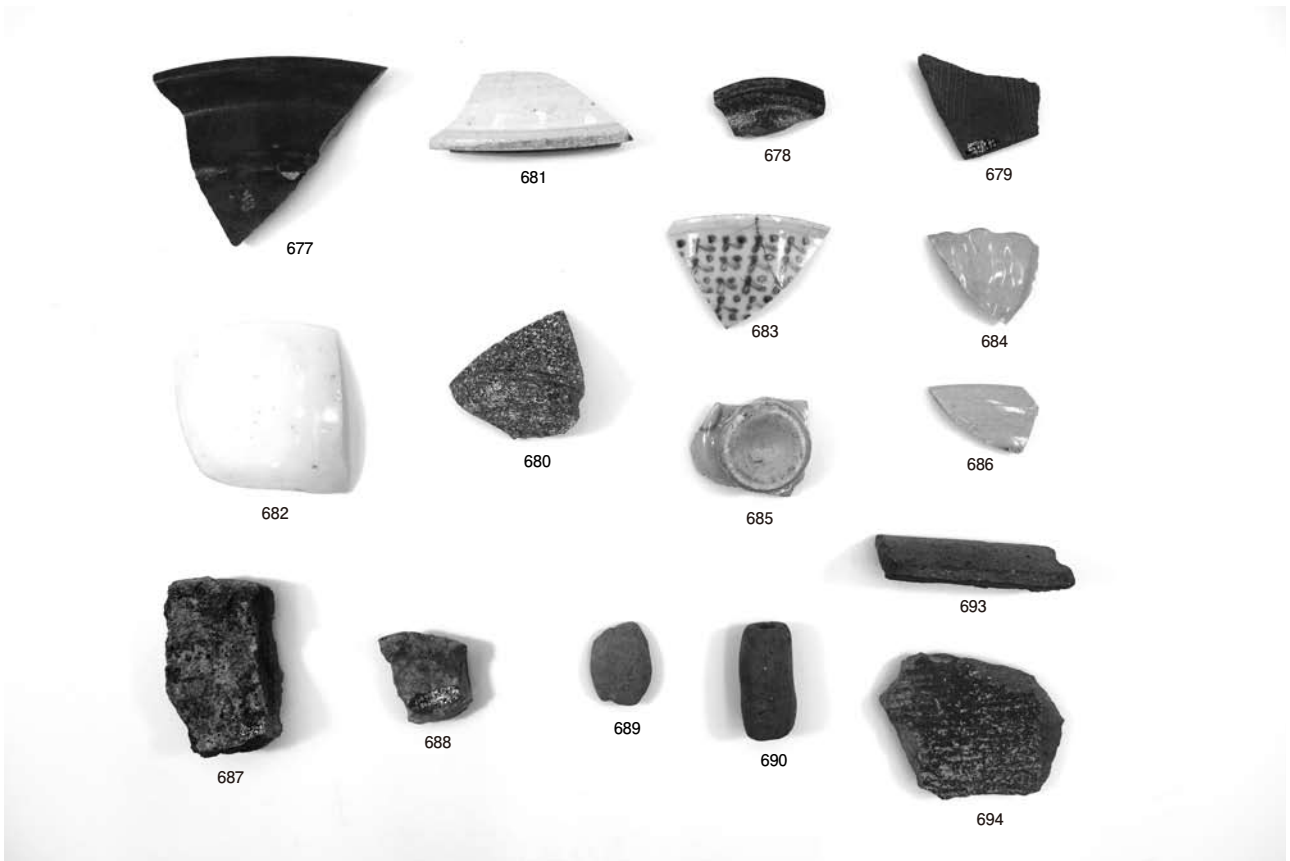
652~655は弥生時代~古墳時代の土器, 656は須恵器である。652は山ノ口Ⅱ式甕である。653は成川式の壺底部と考えられる。654は成川式甕の突帯部であり, 刻目が施される。655は成川式甕の脚部である。

657~663は中世の青磁であり, 657・658・661・662は碗, 659・660は香炉, 663は皿である。

664は土師質の拓と考えられる。665・666は土師器であり, 前者は皿となる。

667・668は備前の播鉢である。667は17世紀前半のものと考えられる。

669は加治木・始良系の碗である。670~672は苗代川の陶器であり, 670・671は鉢, 672は甕か鉢の底部



PL.86 8層(2)・9層出土遺物



Fig.93 10a層上面検出遺構 (S=1/200)

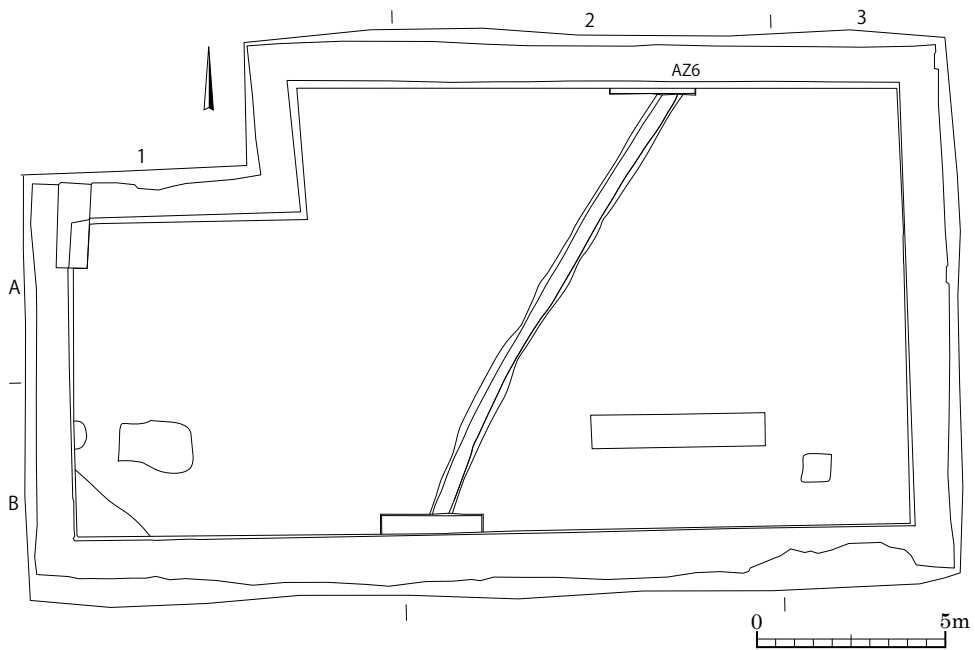


Fig.94 10b層上面検出遺構 (S=1/200)



10a層上面[北より]



10a層上面[西より]



10a層上面[北より]



10a層上面[東より]



鋤跡



稲株痕



10b層上面AZ6[北より]



10b層上面AZ6[西より]

PL.87 10a層上面検出遺構・10b層上面検出遺構



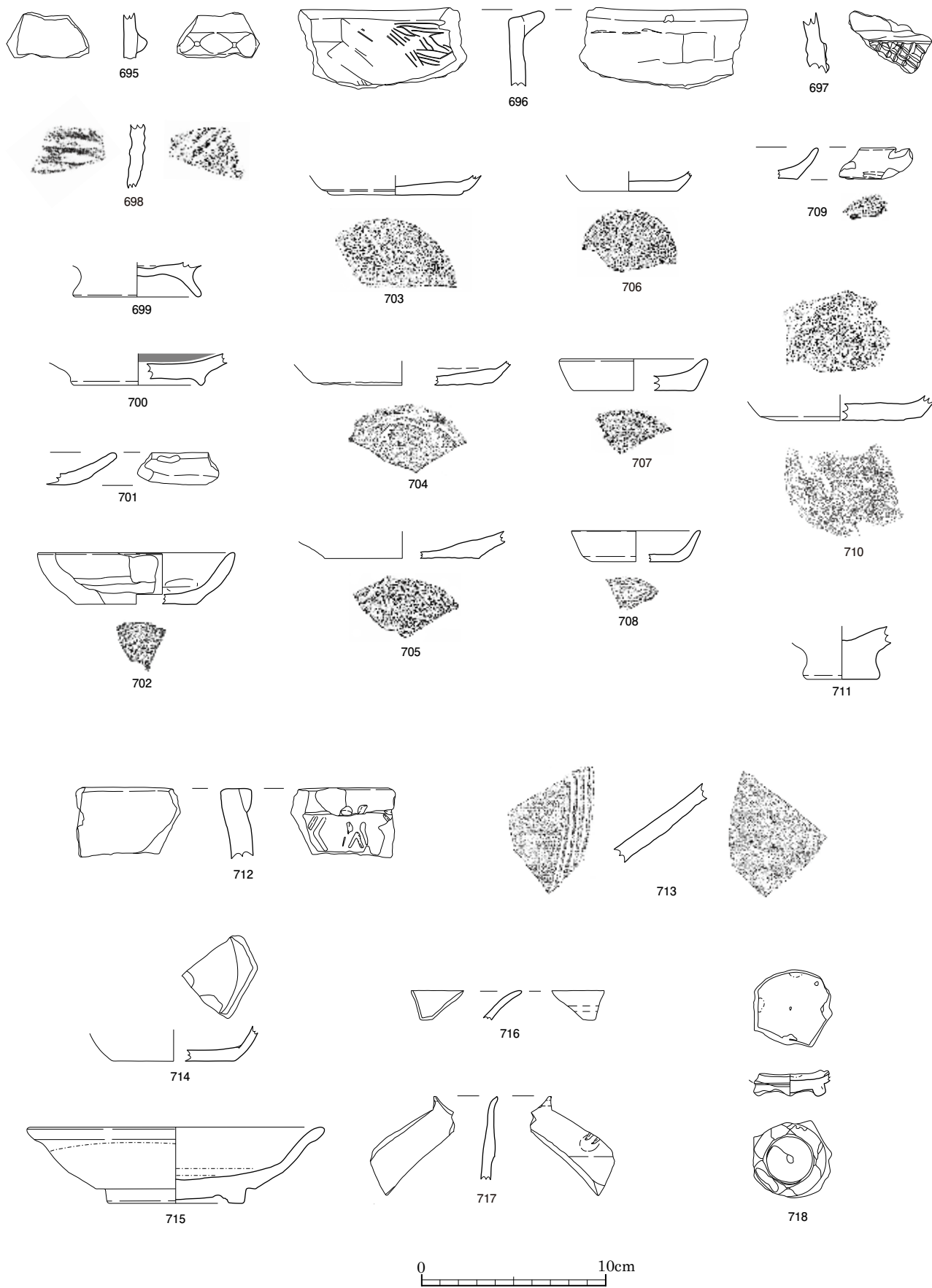
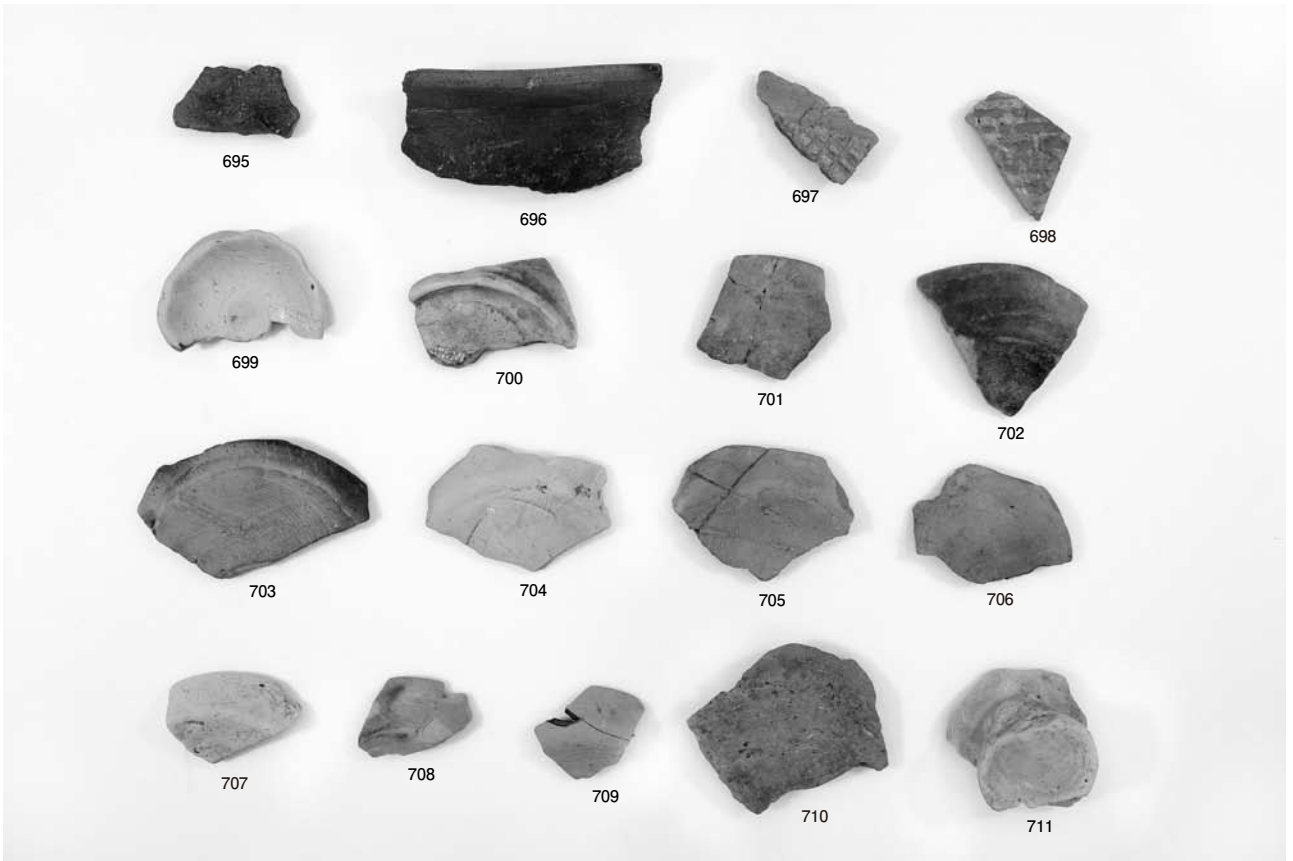


Fig.95 10層出土遺物(1) (S=1/3)



PL.88 10層出土遺物(1)

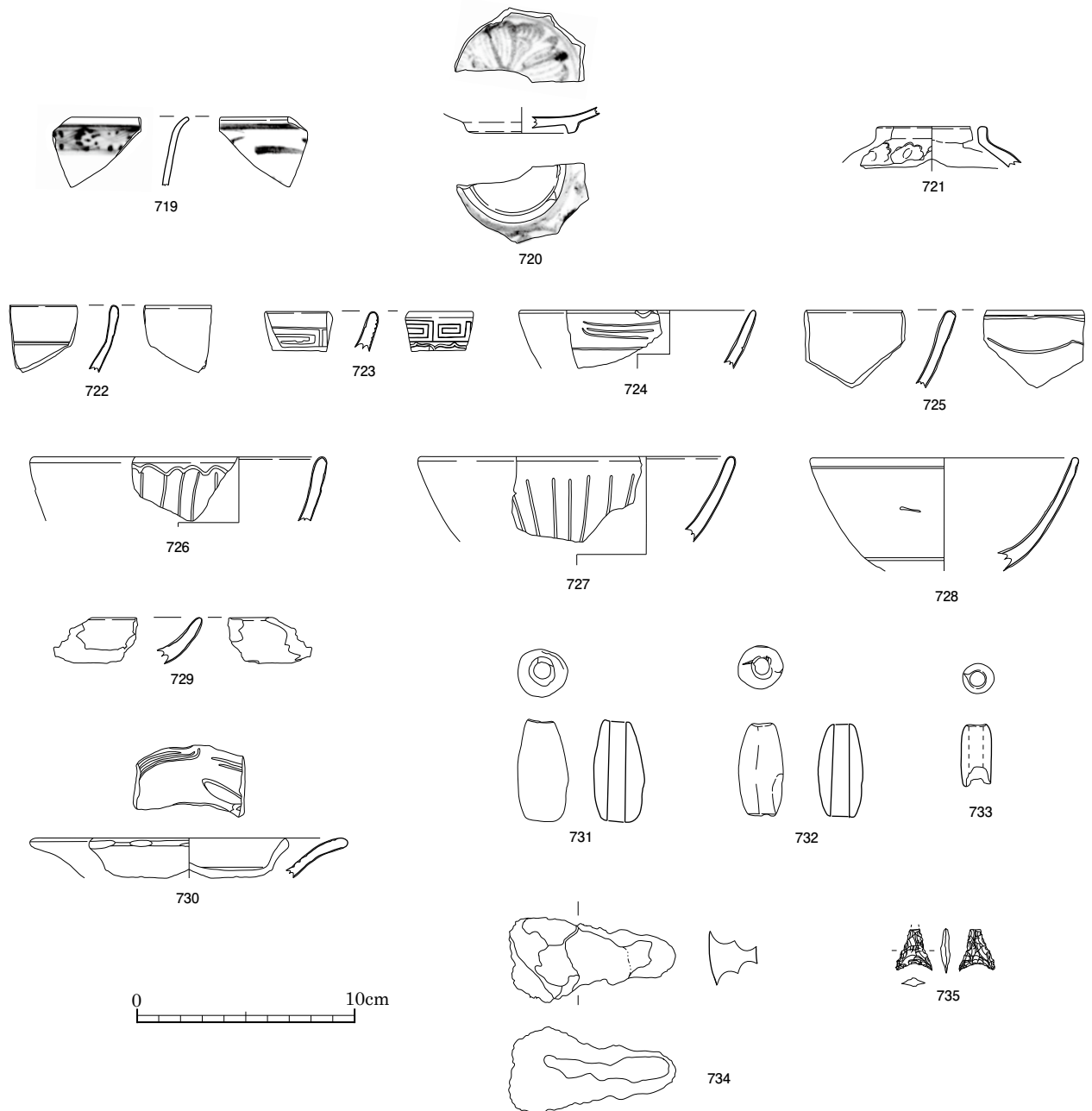


Fig.96 10層出土遺物(2) (S=1/3)

であろう。673は唐津の溝淵皿，674は肥前系磁器皿である。

675は景德鎮の青花であり，16世紀前半～17世紀前半のものである。676は中国産磁器でヒスイ釉輪花小皿である。16c後半以降のものである。

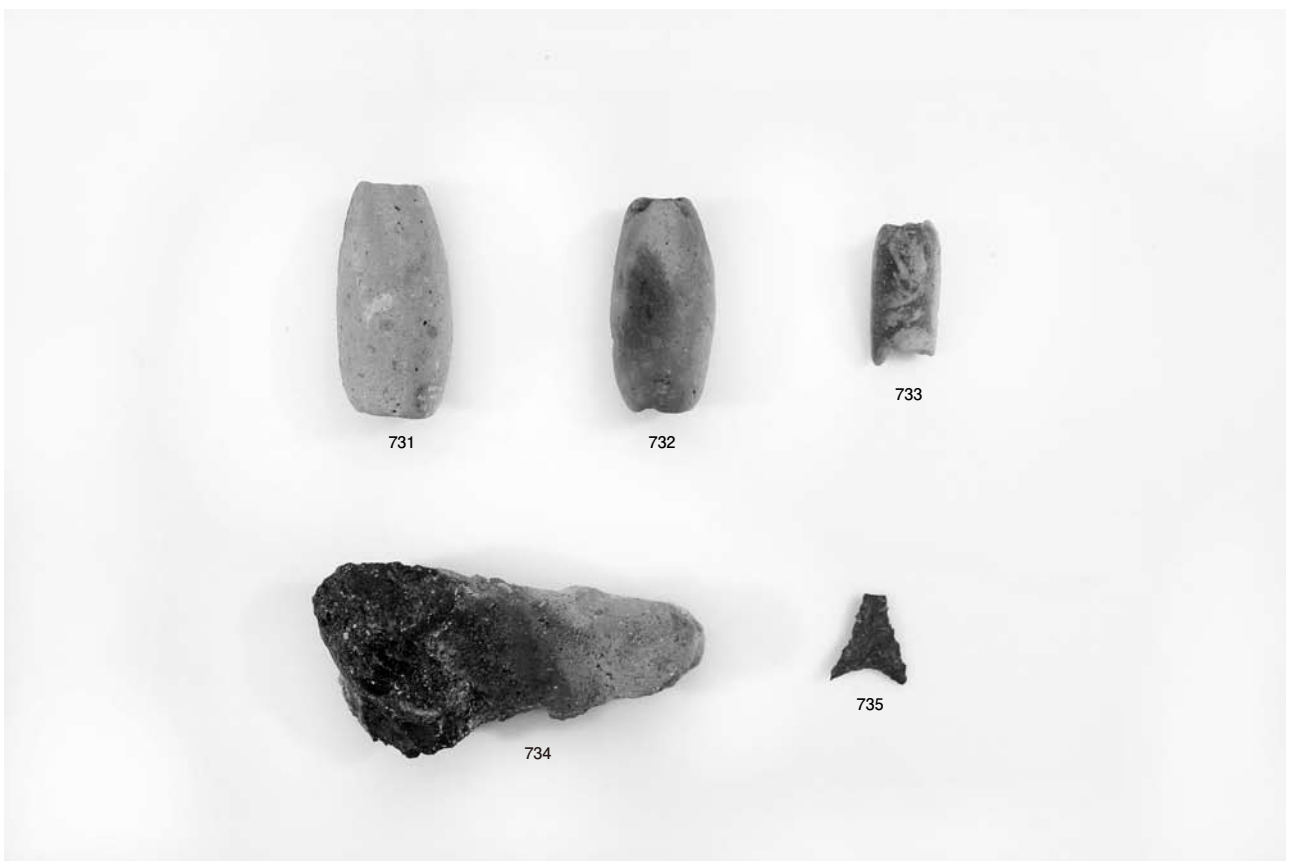
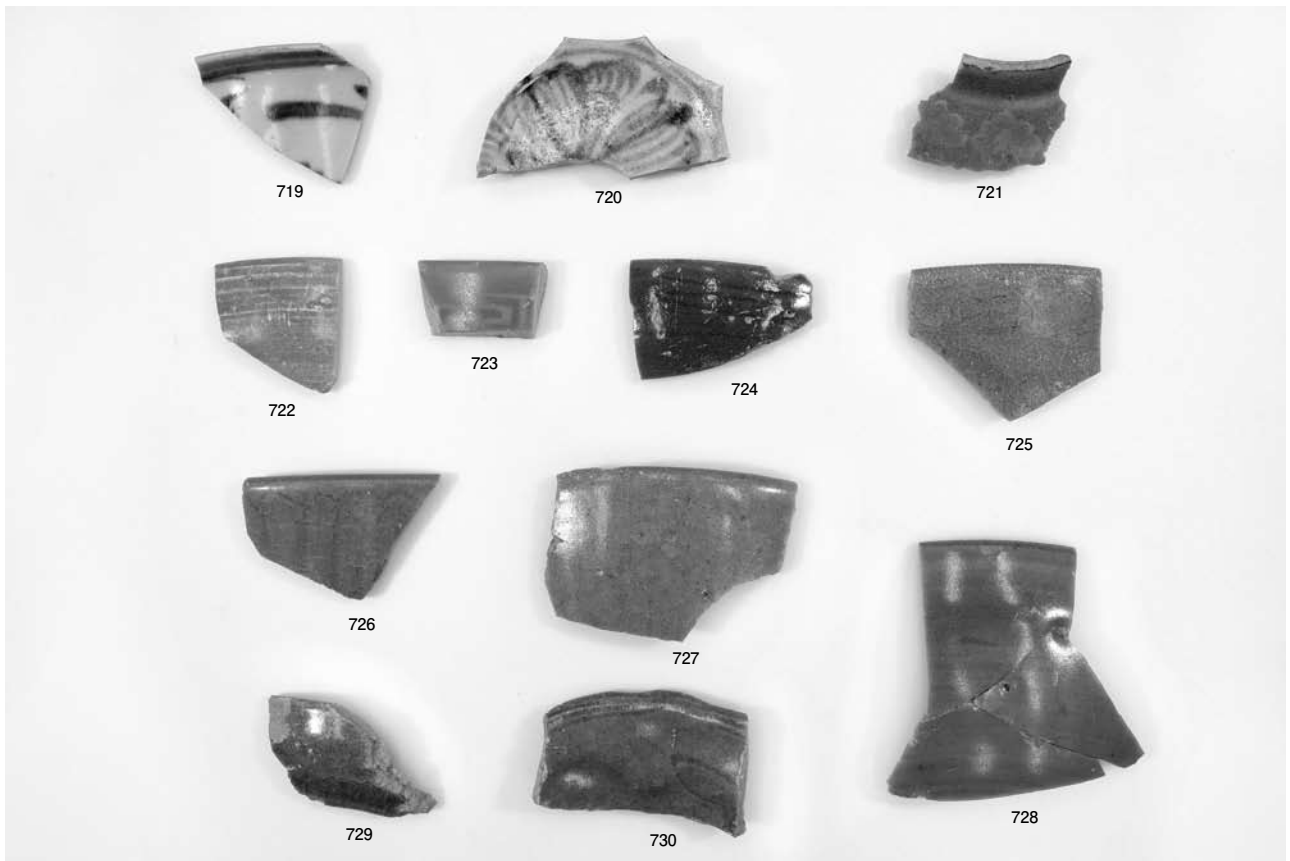
677は器種不明の陶器，678は陶器壺，679は陶器挿鉢，680は陶器底部である。

681は近現代磁器の可能性はあるが，紛れ込みと考えている。

682は磁器碗，683は景德鎮の青花碗であり，16世紀後半～17世紀のものである。684は15世紀後半～16世紀前半の白磁菊花皿である。685は磁器小皿であり，薩摩磁器の可能性はある。686は白磁皿である。

687・688は埴塙と考えられるものである。689・690は土錘である。691・692はガラス小玉であり，691は緑色透明に白色の縞模様がある。692は風化のためか白色化している。

8層出土遺物は7層出土遺物よりもさらに安定した量で，備前系陶器，加治木・始良系陶器，苗代川陶器など17世紀にさかのぼる製品が出土する傾向にある。



PL.89 10層出土遺物(2)

### 9層出土遺物 (Fig.92, PL.86)

遺物の出土は非常に少なく、図化できたのは2点にすぎない。鉄や鉄滓も少量出土する。693は弥生時代中期の壺口縁部と思われるものである。694は須恵器の胴部片である。

### 10a層上面検出遺構 (Fig.93, PL.87)

上層に大畦 (AZ1~4) があつた付近を空白地とし、調査区全体に無数の稲株痕が検出された。埋土は9層細砂である。犁・鋤跡や人足跡などがほとんど不明なことが注意された。

### 10b層上面検出遺構 (Fig.94, PL.87)

大畦 (AZ6) が検出された。畦の延びる方向は北東-南西であるが、上層の大畦 (AZ1~4) に比してやや東寄りであり、規模も小さい。稲株痕などが不明であつた。畦の埋土からは糸切底の土師器 (806~808) や関西系磁器 (809)、青磁皿 (810) などが出土している (Fig.103, PL.95)。

### 10層出土遺物 (Fig.95・96, PL.88・89)

695は縄文時代晩期の浅鉢のリボン状突帯部分である。696は弥生時代中期後半の甕と考えられるが、口縁端部を丸くする特徴から、肥後黒髪式との折衷タイプではないかと考えられる。697は古墳時代成川式壺の幅広突帯部と思われ、突帯に斜位に格子文を施す。698は須恵器である。

699~711は土師器である。699は比較的高い高台のつく碗であり、700は瓦器碗である。701・702には外面にスガが付着する。702~709は糸切底である。707はロク口整形される。710は内外面ともにヘラ削りで整形されている。711は東九州系の柱状高台をもつ皿である。702が14世紀ごろ、708は13世紀後半ごろのものと考えられる。

712は瓦質土器火鉢である。713は備前播鉢である。

714~718は中世白磁であり、714~716・718は皿、717は器種が不明のものである。白磁は13世紀後半~16世紀前半の幅がある。

719・720は中国青花で、前者が碗、後者が皿である。皿は16世紀後半のものであろう。

721~730は青磁であり、721が肩部に花文のスタンプの巡る小壺、722~728は碗、729・730は皿である。12世紀中頃の遺物から出土するが、ほとんどが14~15世紀のもので、16世紀前半ごろまでの時期幅で捉えられる。731~733は土錘である。734はふいごの羽口、735は打製石鏃である。

10層は河川砂層の上に土壌を入れて土地改良したものと考えられるが、下層で厚く堆積する11a層中にはほとんど遺物が入っていないことから、下層から掘り起こされたものではなく、運ばれた改良土壌とともに持ち込まれた遺物である可能性もある。肥前系磁器小破片1点と時期・生産地不明の陶磁器のほかは、中世以前のものに限定されている。

### 11a層上面検出遺構 (Fig.97, PL.90)

河川が埋没した後、11a層の河川砂層を掘りこみ、土壌改良して造営されたと思われる水田跡で、本調査区で最初の水田跡である。大畦 (AZ7) が検出されており、上層の大畦 (AZ6) よりもさらに東寄りに位置しているが、方向は同様に北東-南西である。また、やや下層に小畦 (AZ8) が直角に交わっている。AZ7には1×0.6m規模の水口がつけられている。稲株痕などを検出することはできなかった。

### 11b層中 (完掘) (Fig.98, PL.90)

11b層を掘り下げる段階で、3.8m深度で水が湧き出したため、調査を断念した。泥炭や黒色シルト層がブロック状にまじることはあるが、安定した層を検出することはできなかった。まだ河底には至っていないと考えられる。安全のため3段掘りで調査したが、壁面の図化はこの段階で行なつた。

## 11層出土遺物 (Fig.99~102, PL.91~94)

11層は細砂が主体となるa層と粗砂・軽石礫が主体となるb層に細分されるが、遺物はほとんど下層の11b層から出土した。また、土器・土師器類はほとんど水摩を受けており、長時間水中にあったことを示すものであろう。

609~743は縄文時代の土器である。609は縄文時代前期の曾畑式土器と思われるものである。737は縄文時代前期末~中期初頭の深浦式土器、738は縄文時代中期の春日式と思われる資料、739は春日式土器前谷段階、740は春日式土器轟ヶ迫段階である。741は縄文時代後期市来式土器であろう。742・743は縄文時代晩期の浅鉢と考えられる。

744~748・753・754は縄文時代晩期末~弥生時代前期のものであり、744~746は口唇部からやや下がった位置に刻目突帯を巡らすものであり、747はやや上向き浅い刻目突帯を巡らす。748は二条の刻目突帯を巡らすものである。753は如意形口縁である。754は壺の肩部に添付される文様帯ではないかと考えられる。

749は弥生時代中期前半(古)の incoming I 式と考えられる。750は同中期前半(新)の incoming II 式、751は同中期後半、752は口縁部の立ち上がり具合から弥生時代後期ごろのものとしておきたい。755は時期不明の甕か鉢、756は弥生時代中期後半の大甕の突帯部ではないかと考えられる。757は弥生時代中期の甕の底部であろう。

758は弥生時代中期後半北九州系の須玖 II 式丹塗甕である。759は弥生時代中期後半~後期の袋状口縁壺である。760は山ノ口 II 式の壺である。761は瀬戸内系凹線文系壺で、弥生時代後期のものと考えられる。762は口縁外面に縦位のミガキを施す壺である。763は古墳時代成川式の甕であると考えられる。764は成川式壺の肩部で、布目圧痕をもつ刻目を施す。765は成川式の埴と思われる。766・767は成川式甕の底部であろう。768は高埴の脚部である。外面に赤色顔料が塗布される。

769~771は中世陶器と思われる。772~774は土師器で糸切底である。772は埴、773・774は皿である。775・776は瓦器碗である。777は備前播鉢で13世紀末~15世紀初頭のものと考えられる。778は東播系捏鉢であり、12世紀末~13世紀初頭のものと考えられる。780は瓦質土器播鉢である。779・781は中国陶器の可能性はある。782は中国耳壺で13世紀前半のものである。783は白化粧土を施す陶器碗、784は陶器大甕あるいは壺ではないかと思われる。

785~787は白磁であり、785は玉縁碗、786・787は口禿皿と考えられる。前者が11世紀後半~12世紀前半、後者が13世紀後半~14世紀前半である。788~794は青磁であり、碗のみ得られている。12世紀中~15世紀中ごろにいたる製品である。

795は瓦、796は土錘、797はふいご羽口、798は砥石と考えられる。799は中央部に大きな抉りのある軽石製品で、用途は不明である。



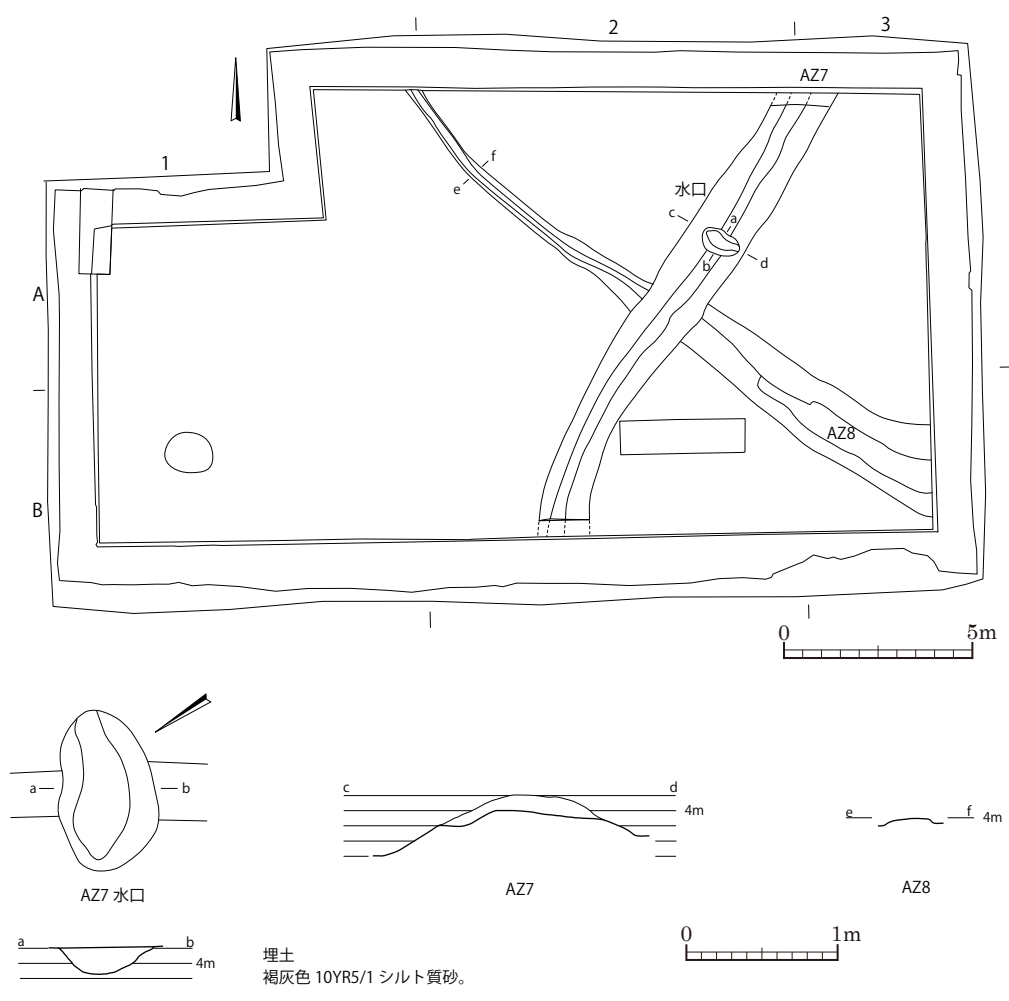


Fig.97 11a 層上面検出遺構(遺構配置:S=1/200, 個別遺構:S=1/50)

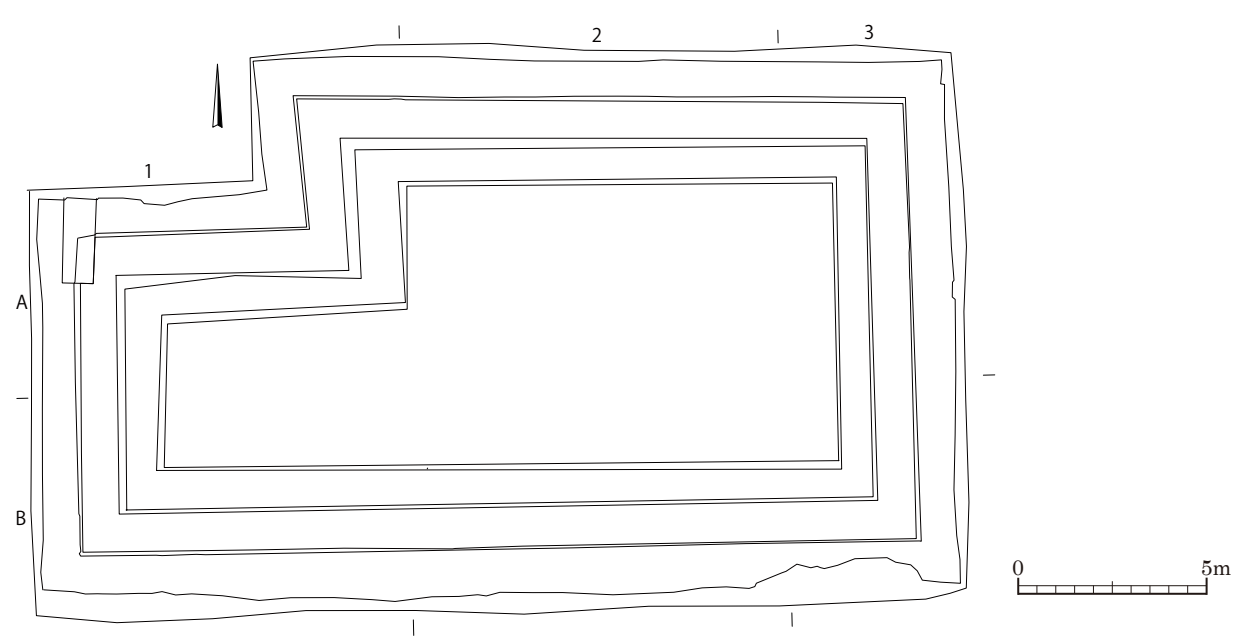
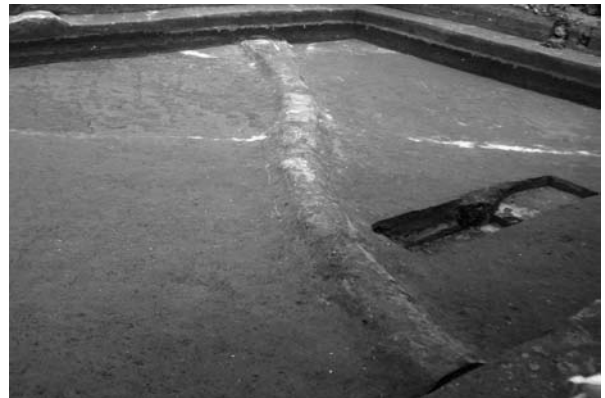


Fig.98 11b 層中(完掘) (S=1/200)



10c/10f層上面AZ7[北より]



10c/10f層上面AZ7[南より]



11a層上面AZ7・8[北より]



11a層上面AZ7・8[南より]



AZ7水口[南より]



AZ7水口断面[西より]



11b層(完掘)[北より]



11b層(完掘)[西より]

PL.90 10c/10f層上面検出遺構・11層上面検出遺構・完掘

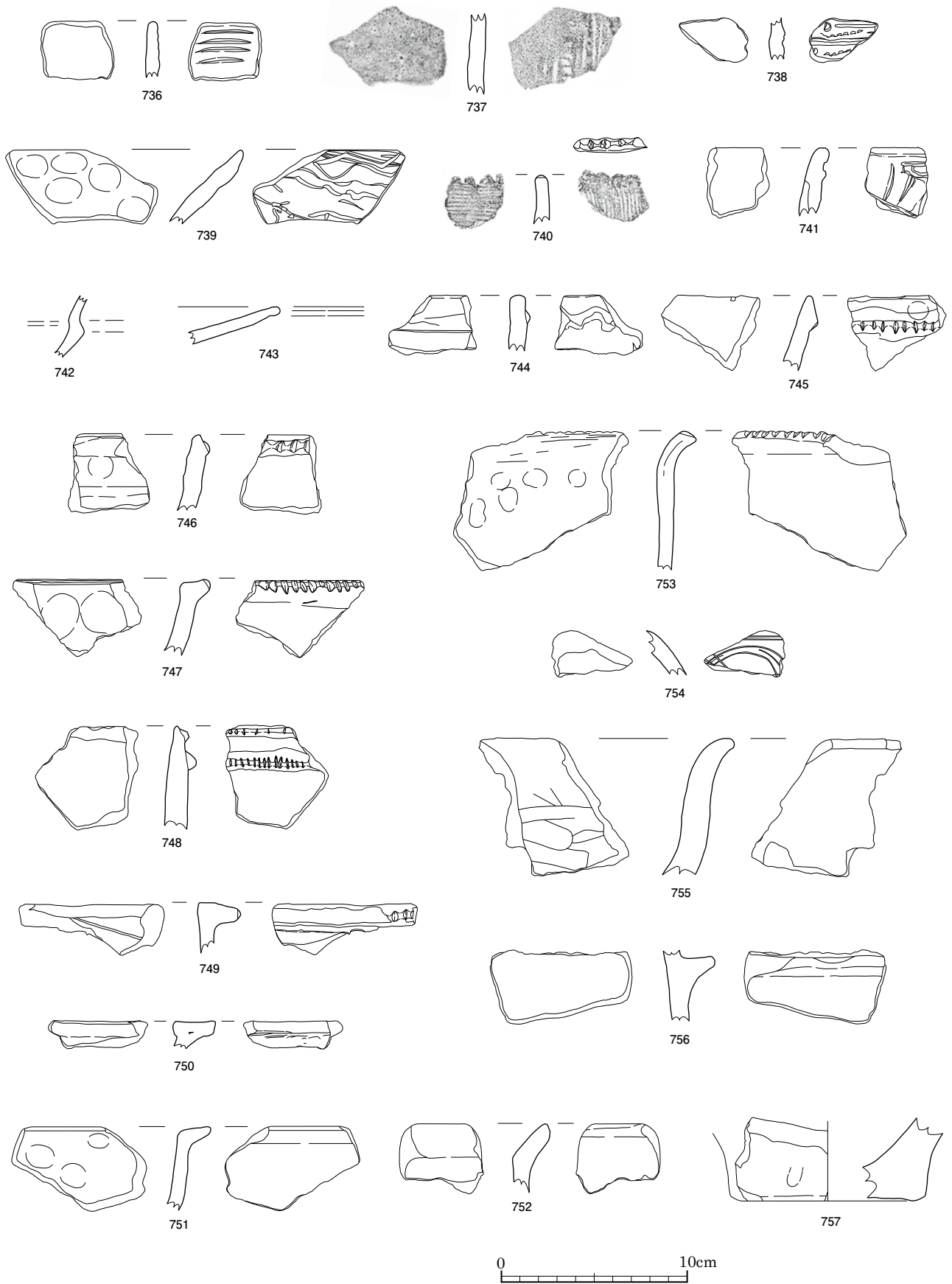
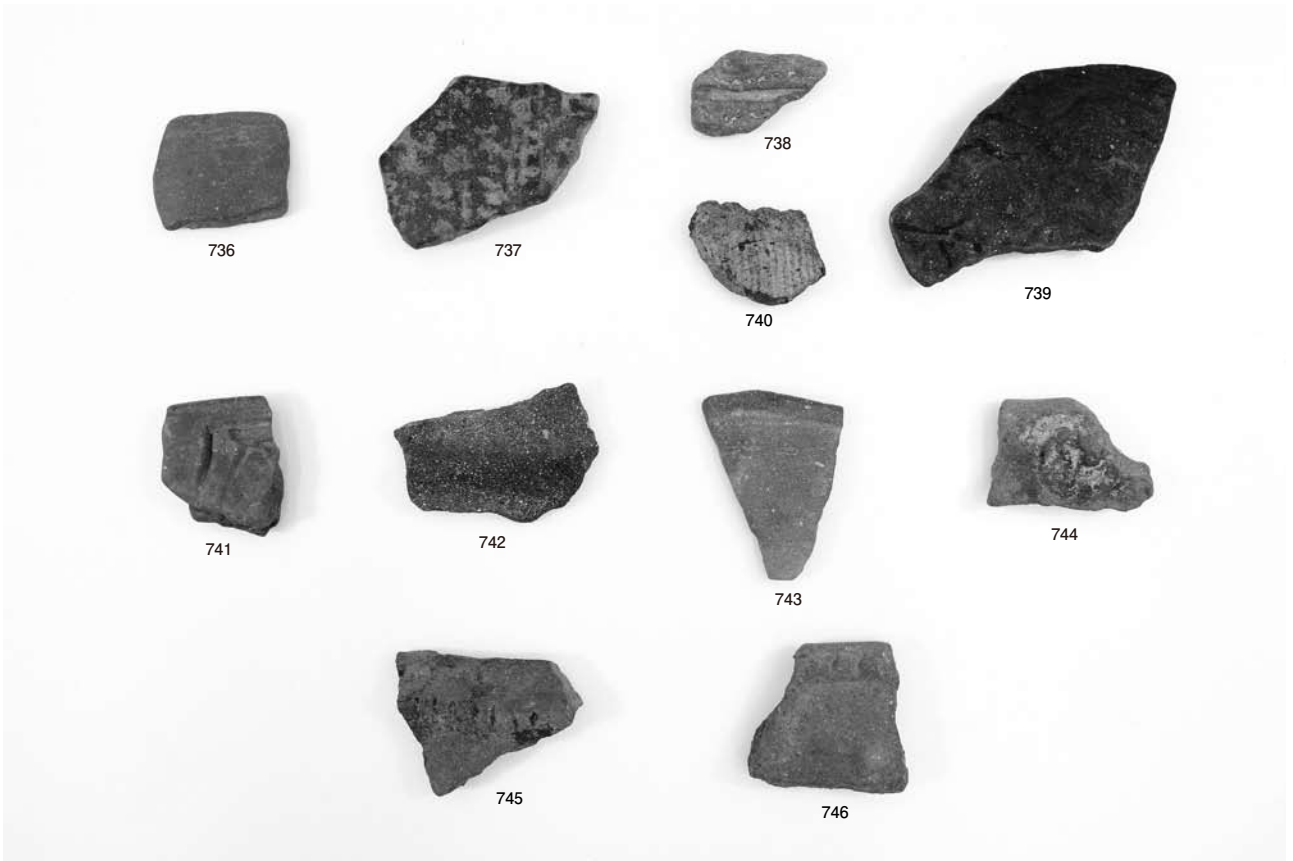


Fig.99 11層出土遺物(1) (S=1/3)



PL.91 11層出土遺物(1)

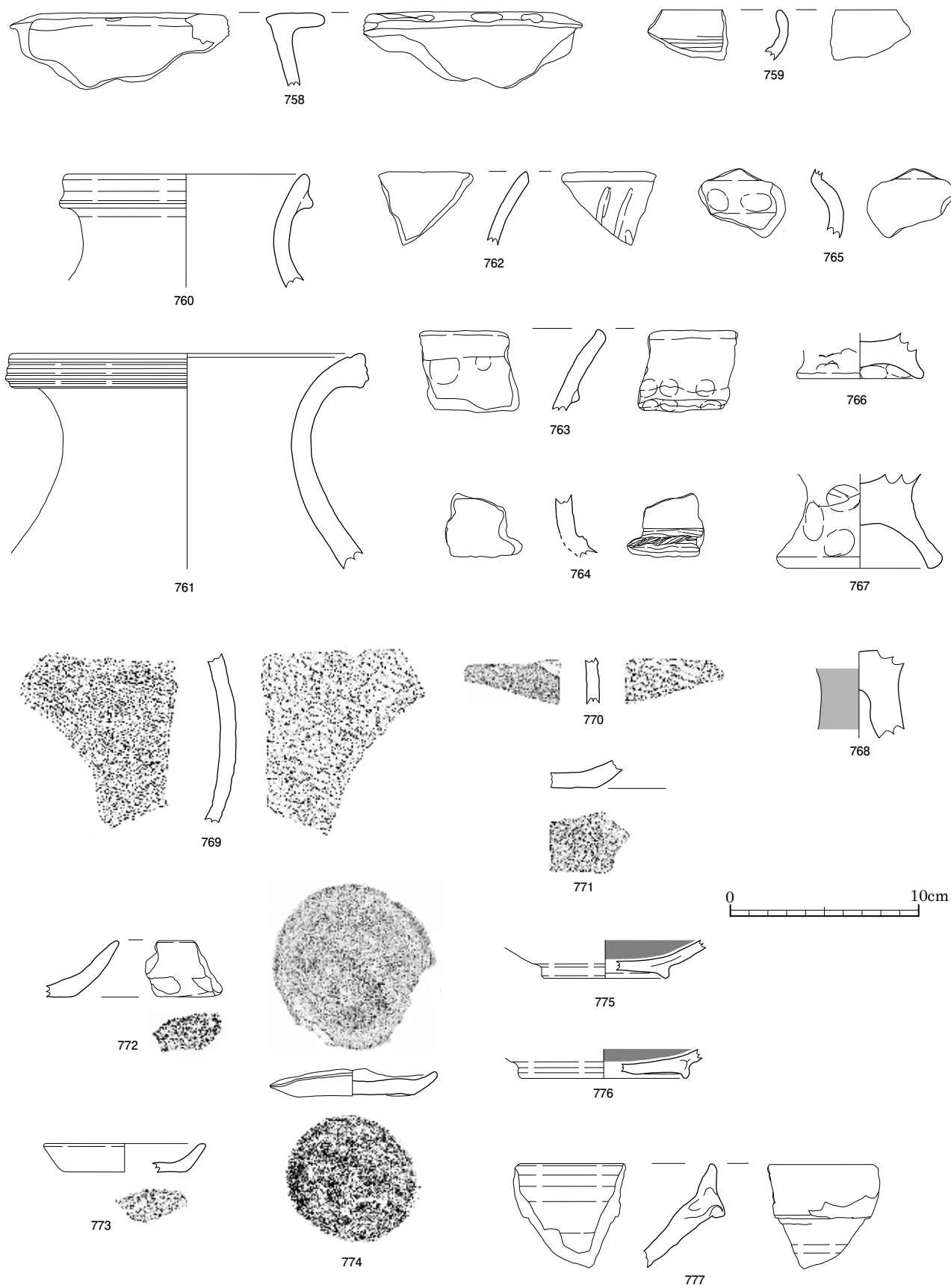
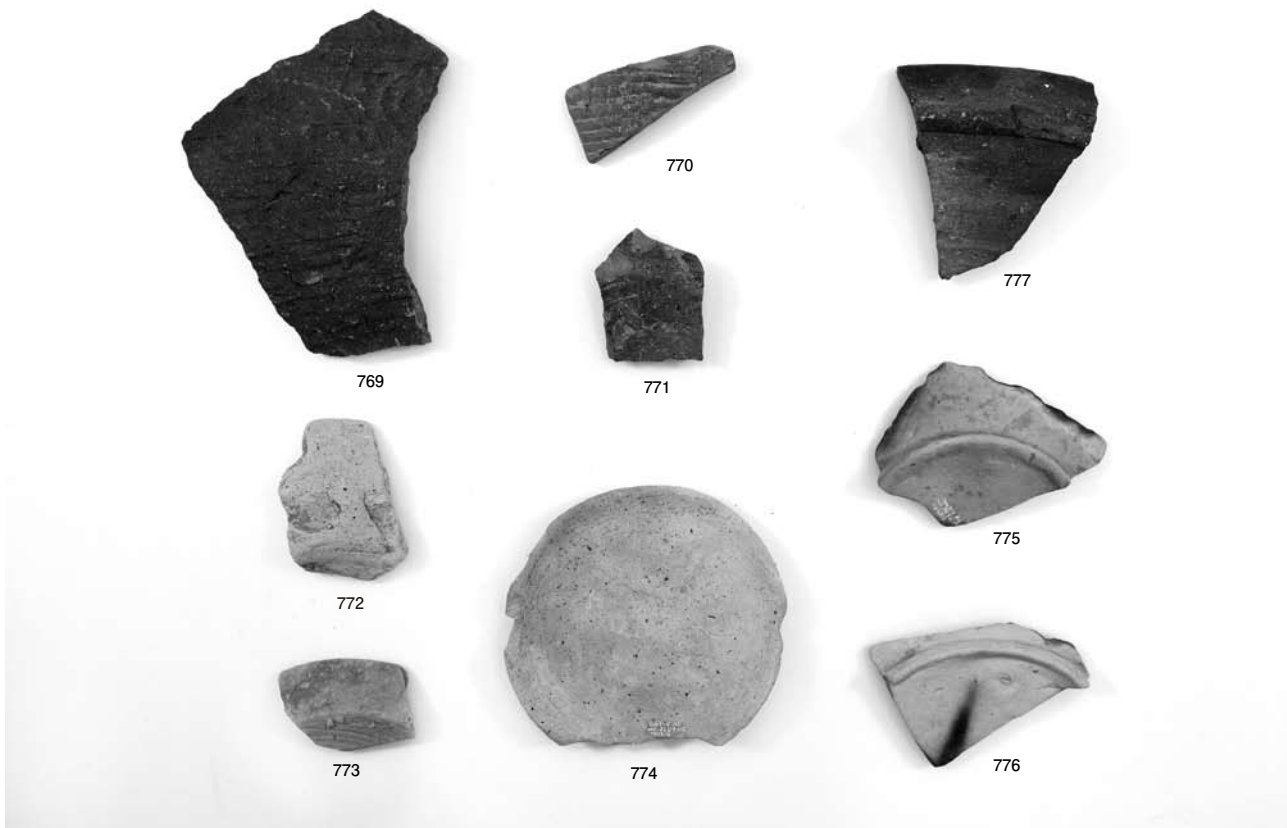
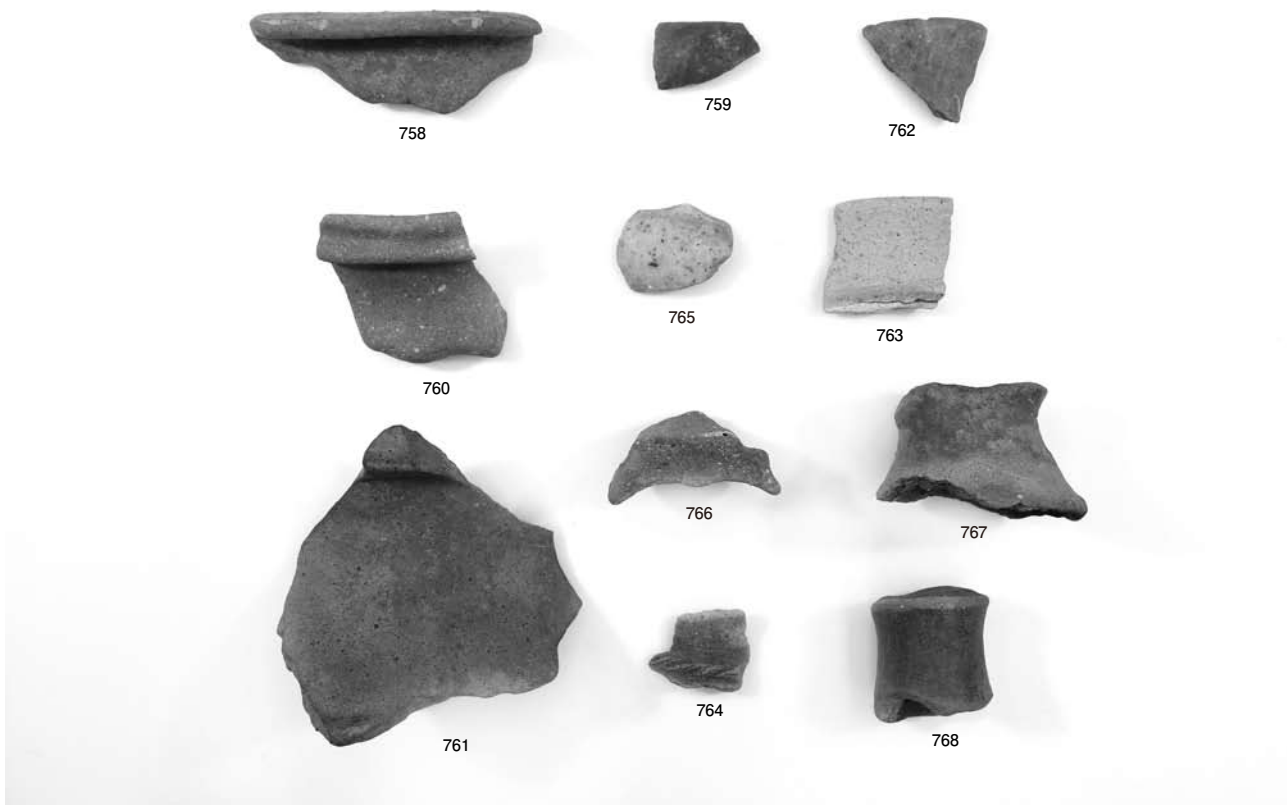


Fig.100 11b層出土遺物(2)(S=1/3)



PL.92 11層出土遺物(2)



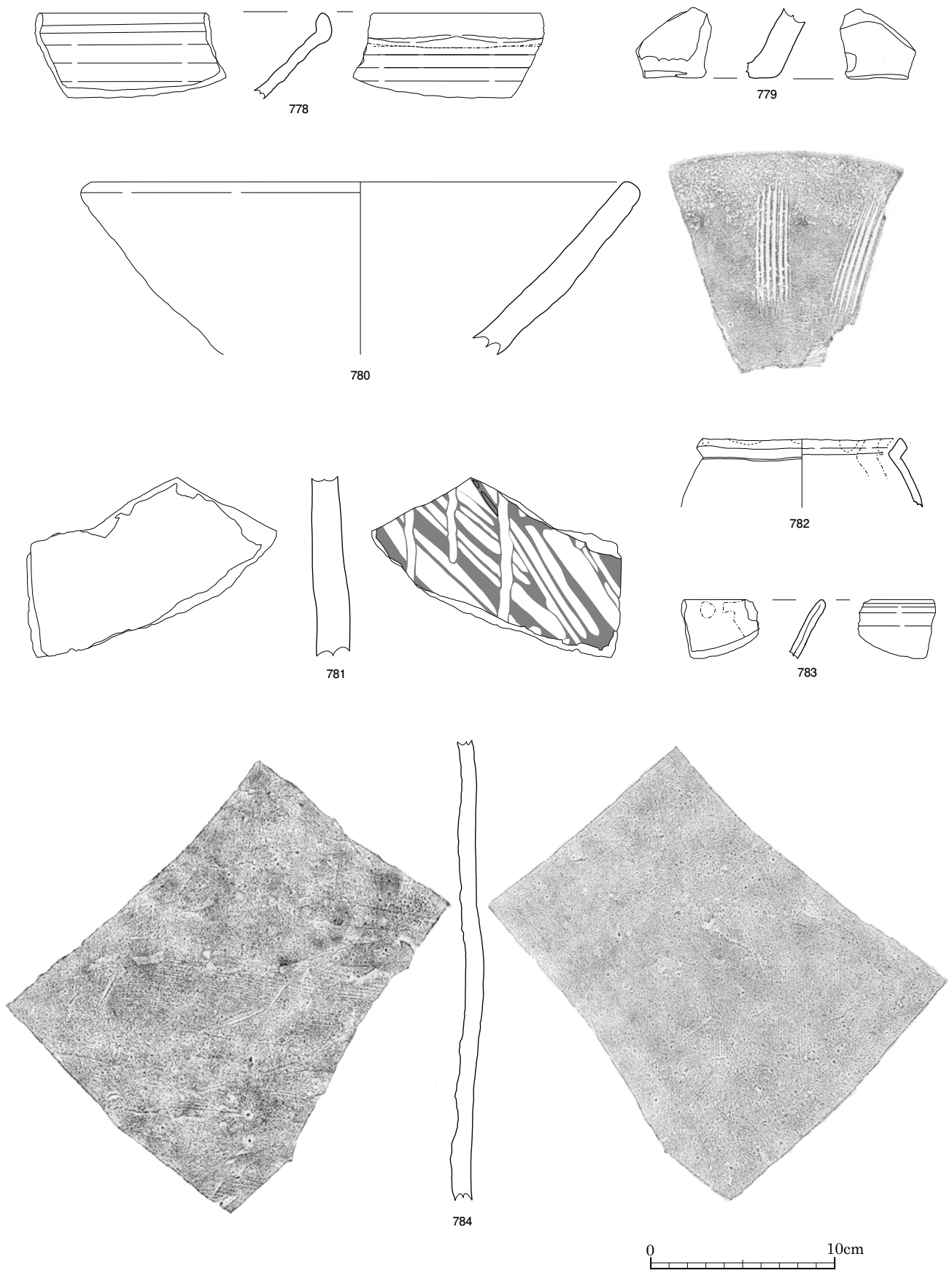
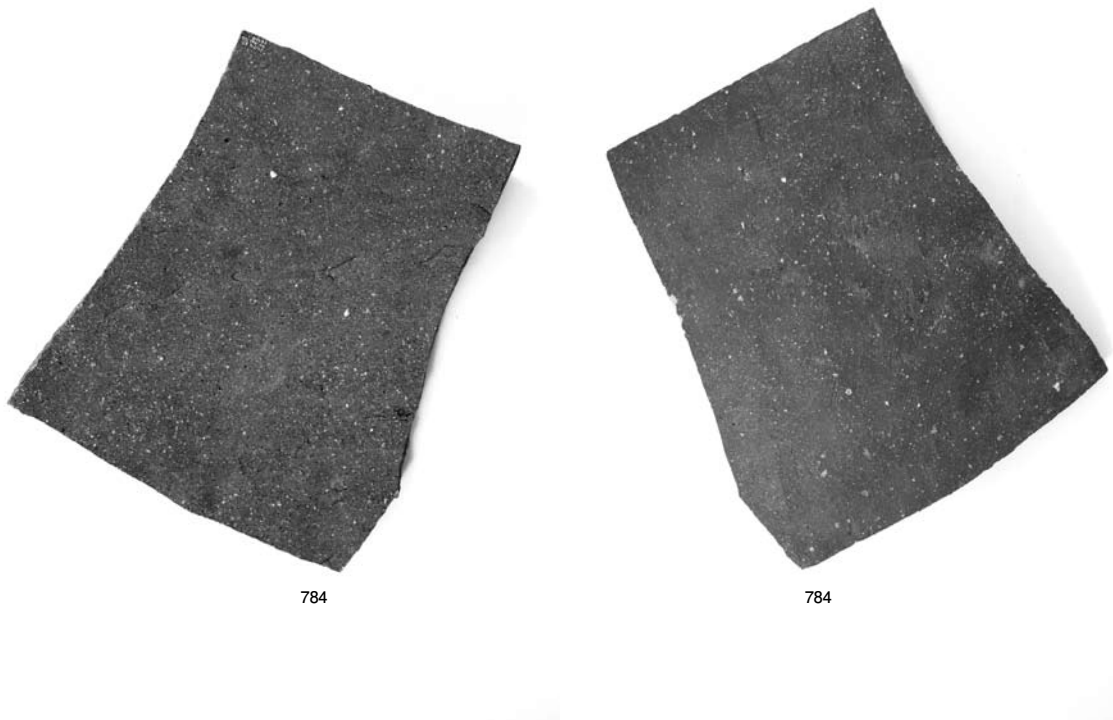


Fig.101 11層出土遺物(3) (S=1/3)



PL.93 11層出土遺物(3)

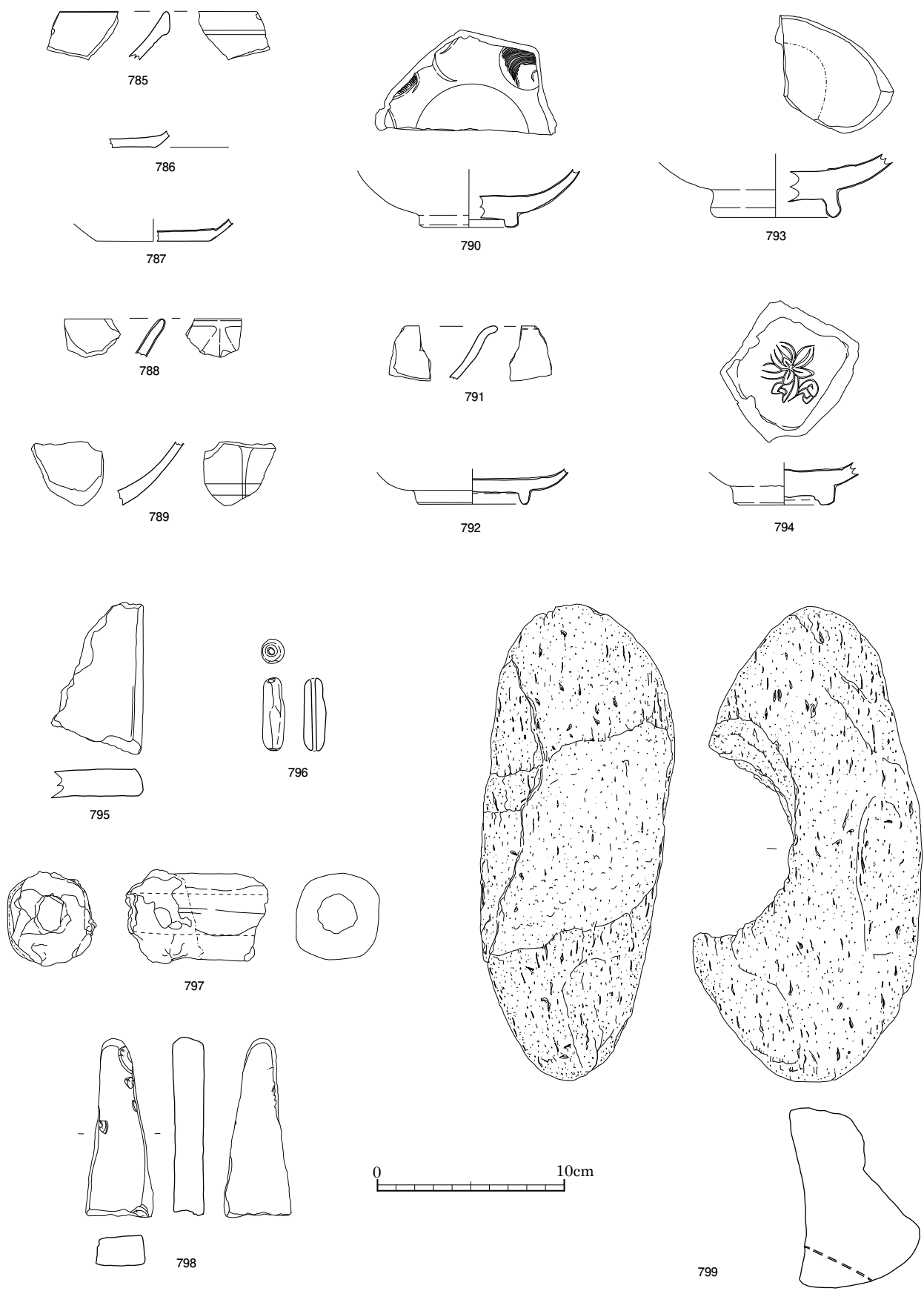
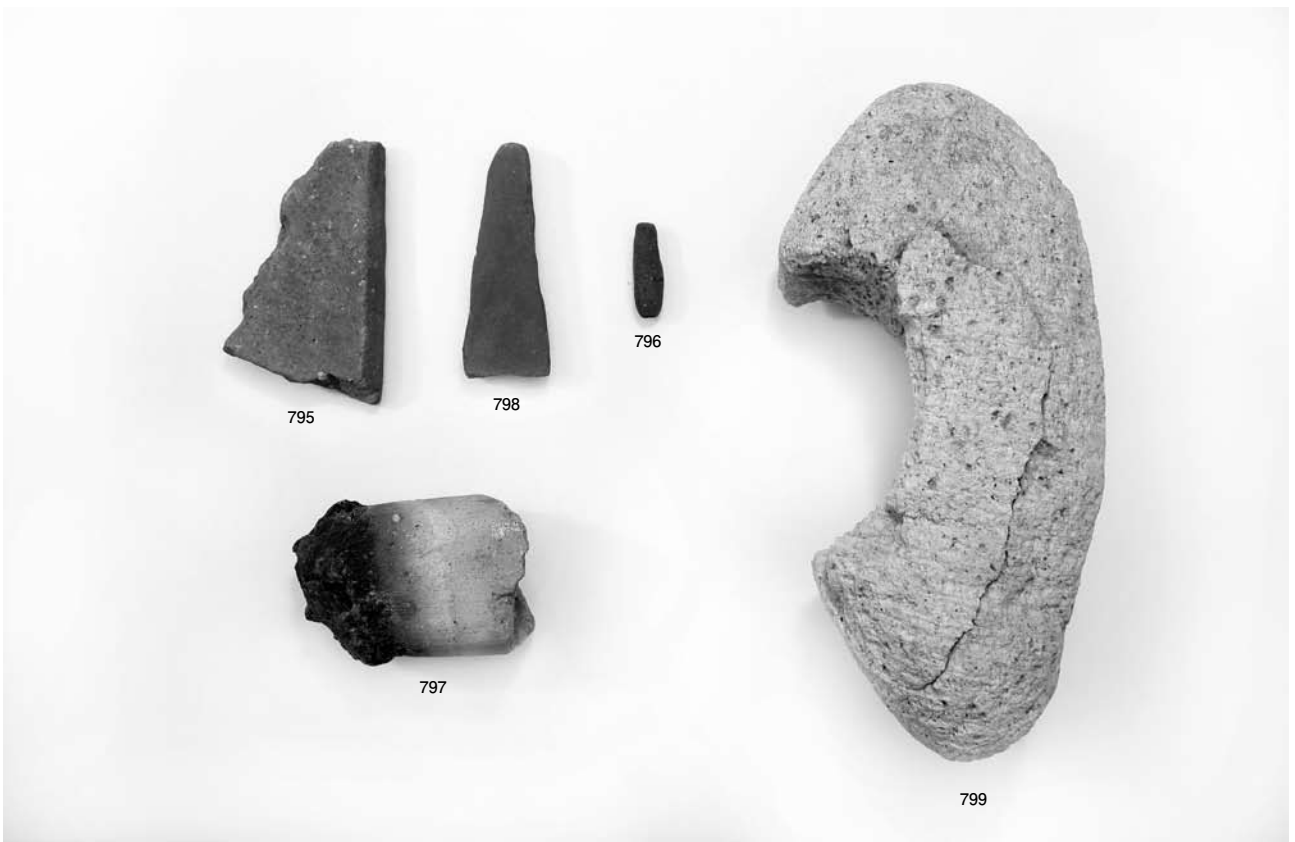
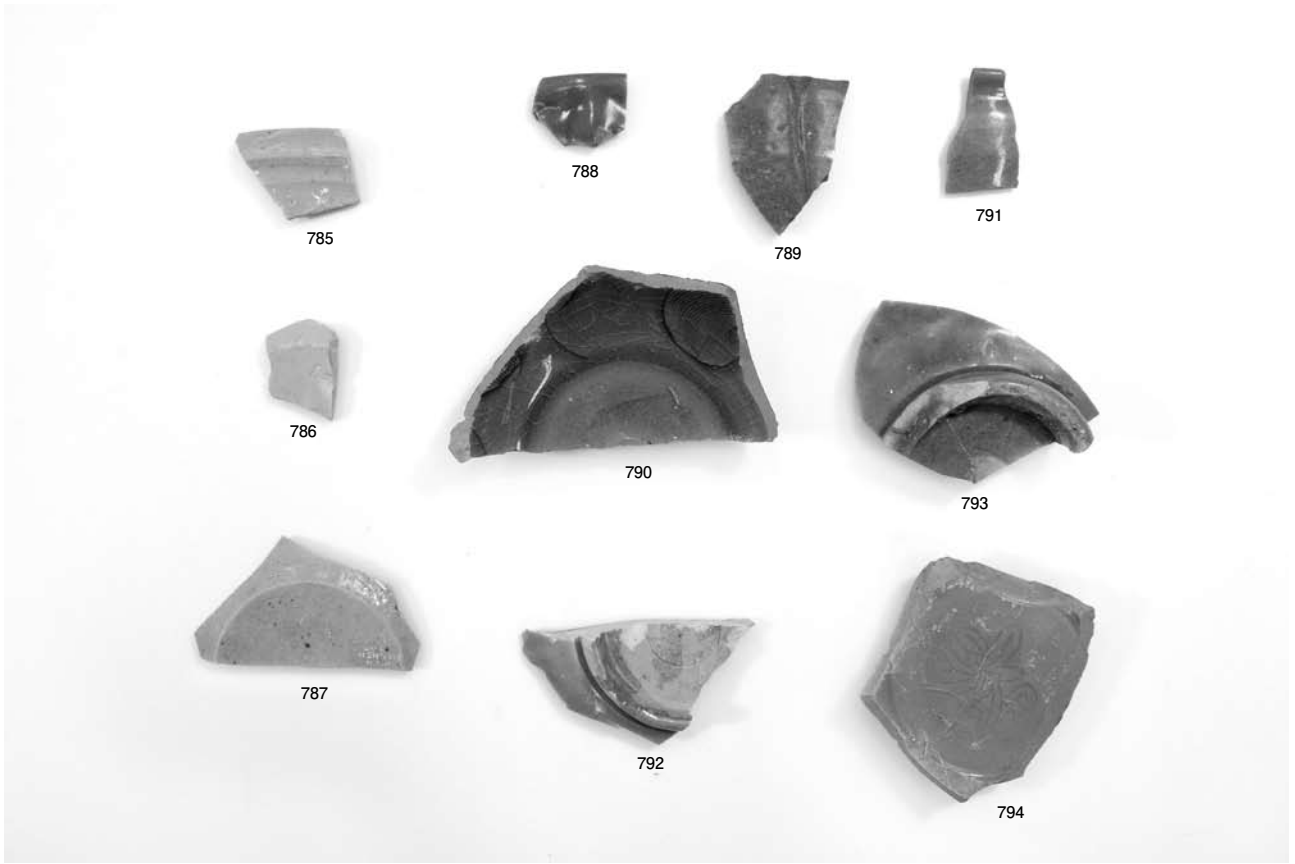


Fig.102 11層出土遺物(4) (S=1/3)



PL.94 11層出土遺物(4)

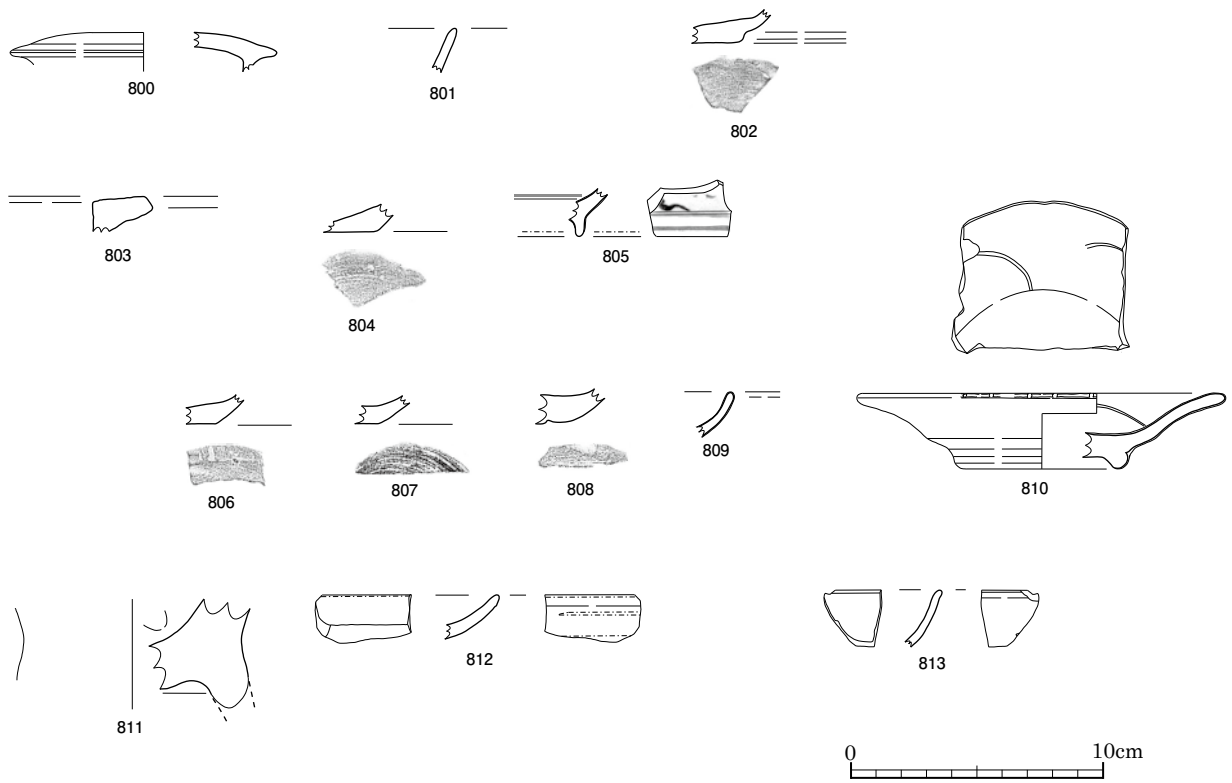
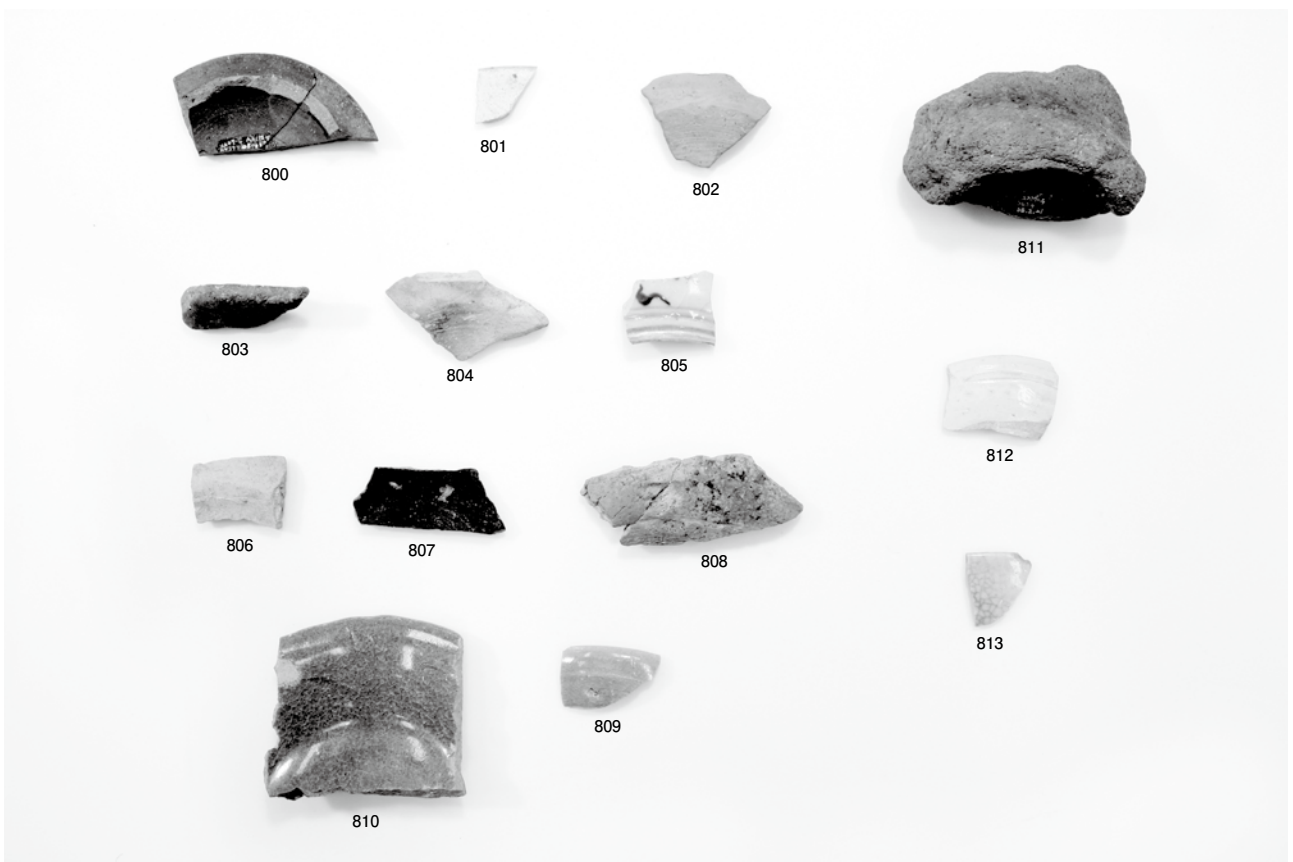


Fig.103 遺構出土遺物その他(S=1/3)



PL.95 遺構出土遺物その他

Tab.9 遺物観察

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
481	表土	弥生土器	壺?	底	内：浅黄 外：灰黄 器内：浅黄	底径 (9.6cm)
482	表土	成川式	壺	底	内：にぶい黄橙 器内：にぶい黄橙 顔料：にぶい赤褐	底内：著しいケズリ 外：赤色顔料塗布 底径5.3cm
483	樹木痕	須恵器		胴	にぶい黄橙	酸化焼成 叩き：平行 当具：平行
484	表土	陶器 (苗代川)	土瓶蓋	摘	釉：灰白 素地：にぶい橙	18c後半以降
485	表土	陶器 (苗代川)	土瓶	底	釉：暗褐 素地：にぶい黄橙	底径 (5.0cm) 18c後半以降
486	表土	陶器 (苗代川)	不明	底	釉：灰白 素地：黄灰	18c ~ 19c
487	表土	陶器 (加治木・始良系)	ひょうそく	脚	釉：オリーブ褐 素地：灰褐	底径3.7cm 18c ~ 19c
488	表土	陶器 (加治木・始良系)	高杯	脚	釉：灰黄 素地：灰黄褐	蛇ノ目釉剥ぎ 底径4.8cm 18c後半以降
489	樹木痕	陶器	碗	底	釉：灰オリーブ 素地：灰	底径 (3.8cm)
490	表土	陶器 (琉球?)	壺	口	釉：黒・灰 素地：にぶい赤褐	
491	表土	磁器 (肥前)	半筒碗	底	釉：オリーブ灰・灰白 素地：にぶい黄橙 文様：緑灰黒褐	見込：二重圏線その他 底径3.8cm 18c後半
492	表土	磁器 (波佐見)	皿	底	釉：透明 素地：灰 文様：緑灰・暗オリーブ灰	内：草花? 高台：圏線 18c
493	廃土	磁器	小皿	口~底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	見込：双鱼 近現代
494	表土	陶器	皿?	胴	釉：透明 素地：白 文様：暗オリーブ灰	外底：「・・CHINA」 日本硬質陶器 (株) 大正後半~昭和初期
495	表土	磁器	井碗	口~底	釉：明緑灰 素地：白	口径 (15.1cm) 底径5.4cm 器高6.8cm 近現代
496	表土	磁器	井碗	口	釉：透明 素地：白 文様：青黒・(緑)	内：④0977 (電話番号) 口径 (15.6cm) 近現代
497	廃土	磁器	井蓋	摘~口	釉：透明 素地：灰白 文様：(コバルトブルー)	外：草花? 口径12.5cm 摘部5.3cm 器高4.2cm 近現代
498	表土	磁器	井碗	口~胴	釉：透明 素地：灰白 文様：(緑)	外：グリーン2線 口径 (14.8cm) 「生協」か?
499	表土	ガラス製品	灰皿?	口~底	無色透明	底：「MADE IN YANAGIMOTO Δ泉 KIYOTO JAPAN」 口径7.1×9.3cm 器高4.3cm
500	表土	ガラス製品	瓶	完形	白不透明	井田京堂堂メスマボマード 口径4.5cm 底径5.6cm 器高4.2cm 重：134g
501	表土	ガラス製品	瓶	完形	茶透明	化粧品? 外底：「SANKYO」・「3」 器高10.75cm 口径0.3cm 底径4.6cm 重：90.7g
502	配管跡	陶器	土管	完形	釉：黒褐 素地：赤褐	長：67.2cm 内径：16.7×21.5cm 重：14.6kg
503	配管跡	陶器	土管	完形	釉：黒褐 素地：赤褐	長：65.6cm 内径：11.5×15.6cm 重：7.4kg
504	配管跡	陶器	土管	口~底	釉：暗赤褐 素地：赤褐	長：47.8cm 内径：8.4×12.6cm 重：2.8kg
505	配管跡	陶器	土管	完形	釉：黒褐 素地：赤褐	長：37cm 内径：10.8×12.8cm 重：5.4kg
506	ゴミ穴8	磁器	小皿	口	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	外：山? 内：波濤 近現代
507	ゴミ穴8	磁器	碗	口	釉：透明 素地：灰白	近現代
508	ゴミ穴8	ガラス製品	瓶	完形	緑透明	ヌノビキタンサン 「王冠文 ヌノビキ<花文>タンサン」 口径1.7cm 底径5.7cm 器高23cm
509	ゴミ穴4	陶器 (苗代川)	播鉢	口	釉：黒褐 素地：にぶい赤褐	19c以降
510	ゴミ穴4	瓦	瓦当		外：灰 内：灰白	
511	ゴミ穴1	磁器	茶碗	完形	釉：透明 素地：白 文様：赤・(緑)	グリーン2線・「生協」 口径8.6cm 底径3.7cm 器高5.0cm 美濃窯業 (株) 1965年以降
512	ゴミ穴2	磁器	茶碗	口~底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)・明赤褐	外：草花 口径 (7.4cm) 底径 (3cm) 器高5.1cm 近現代
513	ゴミ穴2	磁器	茶碗	底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	外：草花・圏線 底径 (3.8cm) 近現代
514	ゴミ穴3	磁器	茶碗	口~胴	釉：透明 素地：灰白	口径 (8.4cm)
515	ゴミ穴3	磁器	茶碗蓋	完形	釉：透明 素地：白 文様：灰・(青緑)	最大径 (7.1cm) 口径 (5.1cm) 器高2.1cm 近現代
516	ゴミ穴3	磁器	皿	口~底	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	内：圏線 口径 (24.3cm) 底径 (15.8cm) 器高 (2.9cm) 鹿児島高等農林学校食器?
517	ゴミ穴3	ガラス製品	瓶	完形	無色透明 プリント：赤	雪印製品 「雪印 200 要冷蔵」・「SNOW BRAND 200」のプリントが剥げる 「○内に正 200cc」・「4皿 H 7」の陽刻 口径3.3cm 底径4.4cm 器高14cm 昭和45年以後
518	ゴミ穴3	ガラス製品	瓶	口~底	無色透明	森永製品 「森永…」のプリントが剥げる 「○内に正 180cc」の陽刻 外底：「石 6 H」の陽刻 口径3.9cm 底径4.2cm 器高13.95cm 昭和45年以前
519	ゴミ穴3	ガラス製品	瓶	完形	無色透明 プリント：赤	「霧島ヨーグルト」のプリントが剥げる 「○内に正 180cc」の陽刻 外底：「1-G 24」の陽刻 口径3.5cm 底径4.4cm 器高13.95cm 昭和45年以前
520	ゴミ穴3	ガラス製品	八角瓶	完形	透明	「雲丹」陽刻 外底：「△山 11」の陽刻 口径2cm 底径4cm 器高9.7cm 銷蓋あり
521	ゴミ穴3	ガラス製品	瓶	完形	透明	「寶星・・・酒」のプリントが剥げる 「○内に正 180cc」の陽刻 口径1.8cm 底径4.1cm 器高14.7cm
522	ゴミ穴3	ガラス製品	瓶	完形	茶透明	「カルピス CALPIS」・「○内に正 334ml」の陽刻 口径1.9cm 底径5.2cm 器高24cm プラスティック蓋あり
523	ゴミ穴3	ガラス製品	瓶	完形	茶透明	「森永コーラス」・「○内に正 633cc」の陽刻 口径2.2cm 底径6.3cm 器高 (瓶) 28.9cm (キャップ付) 29.3cm プラスティック蓋あり
524	ゴミ穴6	陶器 (苗代川)	土瓶	底	釉：灰黄 素地：にぶい橙	18c後半以降
525	ゴミ穴6	磁器	碗	口	釉：透明 素地：灰白 文様：(青)	外：枯木 近現代
526	ゴミ穴6	土器	コンロ	口	にぶい橙	口縁：4条の平行沈線
527	ゴミ穴6	磁器	茶碗蓋	口	釉：透明 素地：白 文様：灰・(青緑)	近現代
528	ゴミ穴6	磁器	碗	底	釉：透明 素地：白 文様：灰・(青緑)	底径 (4.9cm) 近現代
529	ゴミ穴6	磁器	茶碗	底	釉：透明 素地：灰白 文様：(コバルトブルー)	外：草花? 底径 (4.3cm) 近現代



番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
530	ゴミ穴6	磁器	皿	口	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)	内：圏線 鹿児島高等農林学校食器？ 近現代
531	ゴミ穴6	磁器		底	釉：透明 素地：白 文様：赤褐	見込：圏線？ 近現代
532	ゴミ穴6	磁器		胴	釉：透明 素地：白	
533	ゴミ穴7	陶器(苗代川)	甕？	胴	釉：オリーブ黒 素地：にぶい赤褐	
534	ゴミ穴7・埋土	磁器	小碗	高台	釉：明緑灰 素地：(白) 文様：(青)	16c後半～17c前半
535	ゴミ穴10	陶器(苗代川)	甕	胴	釉：灰褐 素地：にぶい赤褐	17c後半～18c
536	ゴミ穴10	陶器(苗代川)	播鉢	胴	釉：灰褐・暗灰黄 器内：にぶい赤褐	18c～19c
537	ゴミ穴11	磁器	碗	口	釉：透明 素地：灰白	近現代
538	ゴミ穴11	磁器	蓋	口	釉：透明 素地：白 文様：(コバルトブルー)・緑	近現代
539	A2・2a	弥生土器	甕	口	外：褐 内：にぶい橙とにぶい褐の中間 器肉：灰白	如意形口縁 弥生前期
540	B2・2a	弥生土器	甕	口	外：にぶい褐と明褐の中間 内：褐 器肉：黒褐	如意形口縁 弥生前期
541	A2・2a	弥生土器	甕	底	外：にぶい橙 内：橙 底：オリーブ褐 器肉：にぶい黄橙	底径(5.7cm)
542	A3・2a	弥生土器	甕	口	外：褐 内：明褐 器肉：明赤褐	弥生前期
543	A3・2a	弥生土器	壺	口	外：橙 内：赤褐	
544	A2・2a	成川式	甕	脚	にぶい橙	
545	B2・2a		壺	頸	外：にぶい黄橙 内：浅黄橙 器肉：黄灰	幅広突帯上に円形刺突 礫を多量に含む(搬入品か)
546	A2・2a	成川式	壺	口	外：橙 内：橙 器肉：にぶい褐	
547	B3・2a	瓦質土器	火鉢	足	外：にぶい黄橙	
548	B3・2a	土製品	焙烙	口	外：にぶい黄褐 内・器肉：灰白	外：スス付着
549	A3・2b	土製品	焙烙	口	外：オリーブ黒 内：灰白 器肉：灰白	外：スス付着
550	B3・2a	土師器		口	内外：浅黄橙	
551	AZ2?・2a	青磁(竜泉窯系・沖繩V類)	碗	高台	釉：オリーブ灰 素地：灰白	外：蓮弁文 見込：スタンプ双魚文 高台内：蛇ノ目 釉剥ぎ14c中～15c中 底径(6.0cm)
552	A3・2a	土師器	?	底	内：橙	外：スス付着 底径(5.4cm)
553	A3・2a	瓦器	碗	高台	内外：黒褐	底径(9.0cm)
554	B2・2b	土器		口	外：にぶい橙 内：橙 器肉：にぶい橙	
555	B3・2a	土師器	皿	口？	内：にぶい黄橙	外：スス付着
556	A2・2a	陶器(苗代川)	鉢	口	釉：茶褐 器肉：灰赤	口径(26.2cm) 18c
557	A3・2b	陶器(苗代川)	鉢	口	釉：オリーブ黒 素地：灰	口縁上面：貝目痕 18c
558	A3・2b	陶器(苗代川)	鉢	口	釉：灰 素地：にぶい赤褐	18c後半～19c
559	A2・2a	陶器(苗代川)	鉢	口	釉：ややオリーブ黒かかった黒 素地：にぶい褐	18～19c
560	A2・2b	陶器(苗代川)	播鉢	口	釉：黒褐・灰褐 素地：灰褐・にぶい橙	19c
561	A2・2b	陶器(苗代川)	播鉢	胴	釉：黒褐・褐 素地：黄灰	18c～19c
562	B2・2a	陶器(苗代川)	播鉢	底	釉：オリーブ黒	
563	B3・2a	陶器(苗代川)	土瓶・蓋	口	釉：茶褐 素地：赤褐	最大径(6.7cm) 18c後半以降
564	A2・2a	陶器(苗代川)	土瓶・蓋	摘～口	釉：オリーブ黒 素地：暗灰黄・灰赤	最大径(11.3cm) 18c後半以降
565	A2・2b	陶器(苗代川)	土瓶	口	釉：暗オリーブ褐 素地：にぶい橙	18c後半以降
566	B3・2a	陶器(薩摩焼?)	土瓶	注口	釉：茶褐 素地：にぶい黄橙	18c後半以降
567	A3・2a	陶器(苗代川)	山茶家	口	釉：濃緑 素地：暗赤褐・明赤褐	19c以降
568	A2・2b	陶器(苗代川)	山茶家?	底	釉：にぶい赤褐・褐灰 素地：にぶい赤褐	19c以降
569	A2・2a	陶器(苗代川)	甕	口	釉：茶褐 素地：褐・暗赤灰	18c～19c
570	A3・2a	陶器(苗代川)	羽釜(土鍋)	胴	釉：黒褐・灰黄 素地：灰褐	近代以降
571	A2・2a	陶器(苗代川)	壺	口	釉：オリーブ黒 素地：赤褐	18c～19c 口径7.4cm
572	B2・2a	陶器(加治木・始良系)	燈明皿	口	釉：茶褐 素地：濃青灰	口径(5.8cm) 19c
573	A2・2a	陶器(加治木・始良系)	燈明皿受	胴～底	釉：茶褐 素地：暗褐	底径(5.2cm) 19c
574	A3・2a	陶器(加治木・始良系)		底	釉：茶褐 素地：にぶい赤褐	底径(6.4cm) 19c以降
575	A2・2a	磁器(加治木・始良系)	皿	底	釉：淡緑 素地：灰よりやや薄め	底径(4.6cm)
576	B2・2a	陶器(薩摩焼・堅野系?)	土瓶	底	釉：赤褐 素地：褐	明治以降
577	A3・2a	陶器(白薩摩)		口？	釉：透明 素地：白	口径5.8cm
578	A3・2a	磁器(薩摩)	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：淡青・濃青灰	外：圏線その他 内：圏線 19c
579	A3・2a	磁器(薩摩)	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：淡青	外：草花? 19c
580	A2・2b	磁器(薩摩)	碗	口	釉：透明 素地：灰白 文様：青灰	外：格子 近世
581	A3・2a	磁器(薩摩)	皿	底	釉：透明 素地：白 文様：薄淡青	見込：山水 底径(3.9cm) 19c中～幕末
582	A2・2a	磁器(薩摩)	碗	底	釉：透明 素地：白	底径3.8cm 19c
583	B2・2b	白磁	四耳壺	肩～胴	釉：明緑灰 素地：灰白	肩部に縦方向に沈線を刻む 14c以降
584	A2・2b	磁器(肥前)	碗	口	釉：灰白 素地：白 文様：青灰	外：花
585	A2・2a	磁器(肥前)	碗	口	釉：透明 素地：白 文様：暗青灰	外：圏線ほか 内：圏線 口径(9.7cm)
586	B3・2a	磁器(波佐見)		胴	釉：透明 素地：白 文様：淡緑	外：襷・圏線 内：圏線 18c
587	A2・2b	陶器(肥前)	大皿	口	釉：褐灰 素地：にぶい赤褐	
588	A2・2b	陶器(肥前系?)	小皿	口	釉：黒褐・褐灰 素地：褐灰	
589	B3・2a	磁器(肥前)	皿	口	釉：透明 素地：白 文様：淡青	輪花 18c～19c

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
590	A2・2b	磁器(肥前)	皿	口	釉:灰白 素地:白 文様:青灰・(青)	外:圏線ほか 18c~19c
591	2b	磁器(肥前)	小杯	底	釉:灰白 素地:白	口径(4.4cm) 底径(2.8cm) 器高2.8cm 19c
592	A2・2b	磁器(肥前)	小杯	底	釉:透明 素地:灰白	底径(1.8cm) 19c
593	A3・2a	磁器(関西系)	碗	口~底	釉:透明 素地:灰白	口径(9.6cm) 底径3.4cm 器高5.1cm 18c中
594	A2・2a	陶器	碗	高台	釉:灰黄・にぶい赤褐 素地:浅黄	底径(3.2cm)
595	A3・2a	磁器	皿	口~高台	釉:透明 素地:白磁土 文様:(コバルトブルー)	内:圏線 日本硬質陶器株式会社? 近現代
596	B3・2b	陶器	土釜	口	釉:白・灰黄 素地:灰	
597	A2・2b	陶器	急須	口	釉:灰白 素地:にぶい黄橙	近現代
598	A3・2a	磁器	皿	口~底	釉:透明 素地:白 文様:(コバルトブルー)	口径(9cm) 近現代
599	A3・2a	磁器	碗	口	釉:透明 素地:白 文様:(コバルトブルー)	外:桜 口径(10.1cm) 近現代
600	A2・2a	磁器	仏飯具	脚	釉:(青) 素地:灰白	底径4.5cm 近現代
601	A2・2b	陶器(苗代川)	甕か壺	底	釉:灰オリーブ 素地:橙	18c後半以降
602	A2・2b	磁器	紅皿	胴	釉:透明 素地:白	口径(5.1cm)
603	A3・2b	磁器	紅皿	底	釉:透明 素地:灰白	底径1.3cm
604	A3・2a	土器	泥面子	人面	外・内:橙 器肉:明赤褐	2.7g
605	A2・2a	土器	泥面子	俵?	橙	1.2g
606	A2・2b	土器	泥面子	後光?	にぶい黄橙	3.1g
607	A2・2a	石器	石鏃	完形		安山岩 1.1g
608	A2・2a	石器	火打石			玉髓 1.9g
609	A3・2a	石器	火打石			玉髓 6.7g
610	A2・2a	石器	砥石			砂岩製 28.1g
611	A3・2a	石器				厚:0.3cm 3.8g
612	A3・2b	銭	寛永通宝	完形		径:2.3cm 孔径:0.6cm 重:2.8g
613	A3・2a	金属製品	煙管	雁首		補強帯なし 雁首内に羅字残存 8.9g 19c
614	B1・3	土師器	坏	口	内外:浅黄橙	
615	A1・4	陶器(加治木・始良系?)	皿	口	釉:透明 素地:灰 文様:淡緑	内:蔓?
616	A1・4	磁器(肥前系)	碗	口	釉:灰オリーブ 素地:灰	
617	B1・4	陶器(苗代川)	土瓶	把手	釉:暗オリーブ褐 素地:にぶい橙	18c後半以降
618	A1・4	青銅製品	鈴			7.7g
619	A3・6	土師器	?	底	浅黄橙	
620	B3・6	陶器(苗代川)	土瓶	底	釉:灰・灰黄褐 素地:にぶい黄橙	18c後半以降
621	A1・7b	青磁(竜泉窯系・沖繩V-0類)	皿	口	釉:オリーブ灰 素地:灰白	内:圏線 14c中~15c中
622	B1・7b	土師器	香炉?	口	内外:にぶい橙 器肉:灰黄	
623	A1・7b	陶器(白薩摩)	瓶	肩	釉:透明 素地:白	
624	B2・7a	陶器(白薩摩)	香炉	口	釉:透明 素地:灰白	線香立て 近代以降
625	B2・7a	陶器(苗代川)	鉢	口	釉:オリーブ黒 素地:にぶい赤褐	18c~19c
626	A2・7b	陶器(苗代川)	鉢	口	釉:灰白 素地:明赤褐	18c
627	A3・7b	陶器(苗代川)	壺	口	釉:灰白 素地:灰	
628	B2・7b	陶器(苗代川)	甕か壺	底	釉:黄灰 素地:灰	17c後半~18c
629	A2・7a	陶器(加治木・始良系?)	碗	口~底	釉:褐灰・灰褐 素地:にぶい橙	蓋物 口径(9.1cm) 底径(5.6cm) 器高6.5cm
630	A2・7a	磁器(肥前)	碗	口	釉:明緑灰 素地:白 文様:青灰	18c~19c
631	B1・7a	磁器(肥前)	碗	口	釉:灰白 素地:白 文様:青灰	外:草花? 18c~19c
632	B2・7b	磁器(肥前系)	輪花皿	口	釉:明オリーブ灰 素地:白 文様:青灰	内:草花
633	4・7	磁器(波佐見)	皿	底	釉:透明 素地:灰白 文様:青灰	見込:草花 18c~19c
634	B2・7b	磁器(肥前)	小杯	底	釉:明緑灰 素地:白 文様:緑灰	底径(3.4cm) 近世
635	A2・7b	磁器(肥前)	瓶	頸	釉:透明 素地:白 文様:青灰	外:圏線・網目 伊万里 17c後半
636	A1・7a	磁器(肥前)	瓶	胴	釉:灰白 素地:白 文様:青灰	外:網目 伊万里 17c後半
637	B2・7b	陶器(唐津)	溝淵皿	口	釉:灰オリーブ 素地:灰白	近世
638	A2・7b	陶器	香炉	口	釉:暗褐 素地:浅黄橙	
639	A2・7b	磁器	碗?	口	釉:にぶい黄 素地:灰白	
640	A1・7b	磁器(中国)	碗	口	釉:透明 素地:白 文様:青灰	18c末~19c
641	A3・7b	陶器(白薩摩)	碗	口	釉:透明 素地:白	近代以降
642	A1・7a	陶器	碗	口	釉:灰オリーブ 素地:灰	
643	A1・7b	陶器(苗代川)	円盤状加工	胴	釉:オリーブ黒 素地:灰	挿鉢転用 12g 18c以降
644	B2・7a	陶器(苗代川)	円盤状加工	胴	釉:黒褐 素地:褐灰	挿鉢転用 8.4g 18c以降
645	B2・7a	陶器	円盤状加工	胴	釉:オリーブ黒 褐灰	8.7g
646	A1・7b	土製品	土錘	完形	オリーブ黒	長:4.2cm 最大径:3cm 孔径:1cm 重:39.4cm
647	A3・7C	金属製品	煙管			火皿径1.5cm 17c後半~
648	A2・7	金属製品	煙管			管部径:1cm 17c後半~
649	A1・7b	銭	寛永通宝	完形		径:2.5cm 孔径:0.6cm 重:1.4g
650	A2・7b	銭	寛永通宝			孔径:0.6cm 土付着 縁辺部が腐食
651	B3・7a	金属製品				鉛? 青錆 重:10.8g
652	B2・8b	弥生土器	甕	口	内外:橙 器肉:明黄褐	山ノ口Ⅱ式 弥生中期後半・新
653	A2・8a	成川式	壺	底	外:浅黄橙 内:浅黄 器肉:黄灰	

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
654	A1・8a	成川式		突帯	外：暗灰黄 内：灰黄 器肉：に ぶい黄	刻目突帯
655	B・8a	成川式	甕	脚	外：にぶい黄橙 内：にぶい赤褐 器肉：にぶい黄橙	
656	B1・8a	須恵器		胴	内外：灰 器肉：にぶい橙	叩き：平行 当具：同心円
657	A3・8b	青磁（竜泉窯系・大宰府 I6類）	碗	口	釉：灰オリーブ 素地：灰白	12c中～後半
658	B1・8a	青磁（竜泉窯系・沖繩 VI-1類）	碗	口	釉：オリーブ黄 素地：灰白	外：剣先細蓮弁文 15c後半～16c前半
659	A1・8a	青磁	香炉？	足	釉：オリーブ灰 素地：白	畳付：無釉
660	A1・8b	青磁	香炉？	足	釉：オリーブ灰 素地：灰白	
661	A2・8b	青磁（竜泉窯系・沖繩IV -0類）	碗	口	釉：オリーブ灰 素地：灰	14c中～15c初
662	A2・8b	青磁（竜泉窯系・沖繩V類）	碗	高台	釉：オリーブ灰 素地：灰白	高台内：蛇ノ目釉剥ぎ 底径（7.9cm） 14c中～15c 中
663	B2・8b	青磁（竜泉窯系・沖繩 V-0類）	皿	口～腰	釉：明緑灰 素地：灰白	稜花・腰折 14c中～15c中
664	A3・8b	土製品	拓？	口	外：にぶい黄橙 内：橙	
665	B2・8a	土師器	皿	口	灰黄	
666	B2・8a	土師器		底	橙	糸切底
667	B2・8b	陶器（備前）	播鉢	胴	外：明赤褐と赤褐の中間 内：赤	17c前半
668	B2・8b	陶器（備前）	播鉢	底	外：灰 内：灰黄褐	5条1単位のスリ目（幅1cm）
669	B2・8a	陶器（加治木・始良系？）	碗	口	釉：黄褐 素地：白	17c後半～18c前半
670	A3・8b	陶器（苗代川）	鉢	口	釉：黒褐 素地：黄灰	17c
671	A1・8b	陶器（苗代川）	鉢	口	釉：黒褐・黒 素地：褐灰	17c後半～18c
672	A2・8b	陶器（苗代川）	甕か壺	底	釉：茶褐釉 素地：褐灰	17c？
673	B2・8a	陶器（肥前）	溝淵皿	口	釉：灰オリーブ 素地：灰	
674	A2・8a	磁器（肥前系）	皿	口	釉：透明 素地：白 文様：緑灰	
675	A2・8b	青花	碗	口	釉：明緑灰 素地：灰白 文様：(青)	景德鎮 外：亀甲文帯ほか 内：亀甲文帯 16c後半 ～17c前半
676	A2・8b	陶器（中国・ヒスイ釉）	小皿	口	釉：(淡青) 素地：灰白	輪花 16c後半以降
677	A2・8b	陶器		口	釉：黒褐 素地：灰白	
678	A1・8a	陶器	壺？	口	釉：オリーブ黒 素地：黄灰	
679	A1・8a	陶器	播鉢	胴	内外：黄灰	
680	A2・8b	陶器	壺	底	釉：にぶい黄褐 素地：灰	中世？
681	A2・8a	磁器	蓋？	口	釉：透明 素地：白	近現代
682	B2・8b	白磁	碗	口～胴	釉：白 素地：灰白	
683	A1・8b	青花	碗	口	釉：明緑灰 素地：白 文様：青 灰	景德鎮 16c後半～17c
684	A2・8b	白磁（沖繩・E群）	菊花皿	口	釉：灰白 素地：灰白	15c後半～16世紀前半
685	B2・8b	磁器（薩摩？）	小皿	底	釉：明緑灰 素地：白 文様：青 灰	見込：蛇ノ目釉剥ぎ 底径2.8cm
686	A1・8b	白磁	皿	口	釉：灰白 素地：灰白	口縁：内折れ
687	B2・8a	土製品	埴塙	口	外・内：褐灰 器肉：灰	
688	A3・8b	土製品	埴塙	口	外：灰白類似 内：灰黄	
689	8b	土製品	土錘		にぶい黄橙	
690	A2・8a	土製品	土錘	完形	にぶい褐	長：3cm 径：2.3cm 重：17.2g
691	B2・8a	ガラス製品	小玉	完形	緑透明・白縞	径：4mm 幅：2mm 孔径：約1.5mm 重：0.06g
692	A2・8b	ガラス製品	小玉	完形	白	径：3.5mm 幅：約2.0mm 孔径：約1.5mm 重：0.03g 外面：風化
693	A2・9	弥生土器	壺	口	にぶい黄橙	入来Ⅱ式～山ノ口Ⅱ式 弥生中期
694	A2・9	須恵器	甕か壺	胴	釉：灰褐 器肉：灰	叩き：平行 当具：同心円
695	A2・10G	縄文土器	浅鉢	胴	外：にぶい黄橙 内：明赤褐 器肉： にぶい橙	黒川式 リボン状突起 縄文晩期
696	A2・10f	弥生土器	甕	口	外：橙・にぶい黄褐 内：にぶい橙・ 灰黄褐	肥後・黒川式折衷タイプ 弥生中期後半
697	A1・10d	成川式	壺	突帯	外：にぶい橙 内：にぶい黄橙 器肉：灰	
698	B2・10f	須恵器		胴	内外：灰類似	叩き：平行 当具：平行
699	A2・10b	土師器	碗	高台	内外：浅黄橙	底径（6.8cm）
700	B3・10b	瓦器	碗	高台	外：灰黄 内：黒褐	底径（6.9cm）
701	A1・10f	土師器	坏	口	内外：にぶい黄橙	内：スス付着
702	A2・10d	土師器	坏	口～底	内外：にぶい橙	外：スス付着 口径（10.6cm） 底径（6.4cm） 器高 2.8cm 14c代
703	A2・10f	土師器（坏A）	坏	底	内外：浅黄	糸切底 底径（6.9cm）
704	B1・10d	土師器	坏	底	内外：淡黄	糸切底 底径（9.7cm）
705	B3・10b	土師器（坏B）	坏	底	外：橙 内：にぶい黄橙	ロクロ整形 糸切底 底径（8.4cm）
706	A3・10a	土師器	坏	底	内外：にぶい橙 器肉：橙	糸切底 底径（5.2cm）
707	A2・10a	土師器	皿	底	内外：浅黄橙	糸切底 口径（7.9cm） 底径（6.5cm） 器高1.7cm
708	A2・10d	土師器（小皿B）	小皿	口～底	内外：にぶい黄橙	糸切底 口径（6.9cm） 底径（4.5cm） 器高1.7cm 13c後半～
709	B2・10f	土師器（小皿B）	小皿	口～底	内外：にぶい橙 器肉：浅黄橙	糸切底
710	A3・10a	土師器	坏	底	内外：橙	内：ヘラ削り 底：ヘラ削り 底径（8.8cm）
711	A3・10c	土師器（東九州系）	皿	底	内外：灰白	柱状高台 底径（3.8cm）
712	B1・10a	瓦質土器	火鉢	口	内外：浅黄 器肉：にぶい橙	口縁：X字スタンプ
713	A2・10b	陶器（備前）	播鉢	胴	外：灰白 内：橙	
714	B2・10a	白磁（大宰府IX-1類）	皿	底	釉：灰白 素地：灰白	底径（6.5cm） 13c後半～14c前半
715	B2・10b	白磁（沖繩D群？）	皿	口～高台	釉：浅黄 素地：淡黄	見込：蛇ノ目釉剥ぎ 口径（11.8cm） 底径5.4cm 器 高3.1cm 15c後半～16c前半
716	A1・10g	白磁（華南系）	小皿	口	釉：灰白 素地：灰白	
717	A2・10f	白磁（華南系）		口～胴	釉：灰白 素地：灰白	

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
718	B3・10c	白磁(沖繩D群)	小皿	高台	釉:灰白 素地:灰白	挟入高台 底径3.3cm 15c前半~中
719	B1・10a	青花(小野B群XV類)	碗	口	釉:明青灰類似 素地:(白) 文様:(青)	外:圏線ほか 内:四方襷
720	B3・10a	青花(小野B群VI類)	皿	高台	釉:明青灰類似 素地:(白) 文様:(青)	見込:十字花・圏線 外:牡丹唐草 底径(4.3cm) 16c後半~17c
721	B2・10a	青磁(竜泉窯系)	壺	口	釉:オリーブ灰 素地:灰白	肩部に花文のスタンプが巡る 口径(4.8cm)
722	A3・10c	青磁(同安窯系・大宰府I-1A類)	碗	口	釉:浅黄 素地:淡黄	12c中~後半
723	B3・10b	青磁	碗	口	釉:オリーブ灰 素地:灰白	外:ネガ雷・内:ボジ雷
724	A2・10a	青磁(竜泉窯系・沖繩V-2類)	碗	口	釉:灰オリーブ 素地:灰白	外:雷 口径(10.7cm) 14c中~15c中
725	B1・10d	青磁(竜泉窯系・沖繩V-2類)	碗	口	釉:オリーブ灰 素地:灰	外:雷 14c中~15c中
726	B1・10d	青磁(竜泉窯系・沖繩VI-1類)	碗	口	釉:オリーブ灰 素地:灰白	外:剣先線刻蓮弁 口径(13.2cm) 15c後半~16c前半
727	B2・10a	青磁(竜泉窯系・沖繩VI-1類)	碗	口	釉:オリーブ灰 素地:灰白	剣先:線刻蓮弁(不明瞭) 口径(14.3cm) 15c後半~16c前半
728	A3・10b	青磁(竜泉窯系・沖繩V-0類)	碗	口~胴	釉:オリーブ灰 素地:灰白	口径(12.2cm) 14c中~15c中
729	A2・10b	青磁(竜泉窯系・沖繩IV-0類)	皿	口	釉:オリーブ灰 素地:灰白	14c中~15c初
730	A1・10a	青磁(竜泉窯系・沖繩V-0類)	皿	口	釉:オリーブ灰 素地:灰白	内:草花 稜花 口径(14.2cm) 14c中~15c中
731	B1・10e	土製品	土錘	完形	にぶい黄橙	長さ4.7cm 最大径2.2cm 孔径7.4cm 19.3g
732	A1・10a	土製品	土錘	完形	浅黄橙・褐灰・橙	長:4.3cm 最大幅:2.1cm 孔径:0.8cm 15.4g
733	A1・10a	土製品	土錘		灰白・灰黄褐	最大幅:1.4cm 孔径:0.6mm
734	A310a	土製品	羽口		にぶい黄橙・灰	
735	A2・10d	石器	石鏃			安山岩 重:0.7g
736	11b	縄文土器	深鉢	口	外:赤褐 内:明赤褐	曾畑式? 縄文前期 水磨を受ける
737	11b	縄文土器	深鉢	胴	外:明褐・黒褐 内:橙・褐	縄文前期末~中期初頭 水磨を受ける
738	11b	縄文土器	深鉢	胴	外:赤褐 内:にぶい橙・褐	深浦式 縄文中期 春日式? 水磨を受ける
739	A3・11b	縄文土器	深鉢	口	外:にぶい黄褐・灰黄褐・黒 内:にぶい黄橙・灰黄褐	春日式(前谷段階) 縄文中期 水磨を受ける
740	A1・11b	縄文土器	深鉢	口	内外:暗オリーブ灰	春日式(轟ヶ迫段階) 縄文中期 水磨を受ける
741	11b	縄文土器	深鉢	口	外:にぶい赤褐 内:明褐	市来式 縄文後期 水磨を受ける
742	11b	縄文土器	浅鉢	胴	外:オリーブ黒 内:暗灰黄 器肉:黄灰	縄文晩期 水磨を受ける
743	11b	縄文土器	深鉢	口	外:にぶい黄褐・褐灰 内:明褐・褐灰	縄文晩期 水磨を受ける
744	A2・11b	縄文土器	深鉢	突帯	外:にぶい黄褐・黒褐 内:明黄褐	刻目突帯文 縄文晩期~弥生初 水磨を受ける
745	B2・11b	縄文土器	深鉢	口	内外:黒褐	刻目突帯文 縄文晩期~弥生初 水磨を受ける
746	B2・11b	縄文土器	深鉢	口	外:にぶい黄褐 内:にぶい褐 器肉:黄褐	刻目突帯文 縄文晩期~弥生初 水磨を受ける
747	A2・11b	弥生土器	甕	口	内外:にぶい褐・明褐	弥生前期 水磨を受ける
748	B2・11b	弥生土器	甕	口	外:橙・褐 内:にぶい橙	弥生前期 水磨を受ける
749	B1・11a	弥生土器	甕	口	外:灰黄褐・にぶい橙 内:灰白	入来I式 弥生中期前半・古 水磨を受ける
750	A2・11b	弥生土器	甕	口	外:にぶい黄褐 内:黄褐 器肉:にぶい黄褐	入来II式 弥生中期前半・新 水磨を受ける
751	11b	弥生土器	甕	口	外:灰黄~暗灰黄 内:灰黄・灰黄褐・褐灰	弥生中期後半 肥後・黒髪式折衷タイプ 水磨を受ける
752	A2・11b	弥生土器	甕	口	外:灰白・灰黄褐 内:にぶい橙・橙	中津野式 弥生終末期 水磨を受ける
753	A2・11b	弥生土器	甕	口	外:黒褐・にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 器肉:にぶい褐	弥生前期 如意形口縁 水磨を受ける
754	B1・11b	弥生土器	壺	胴	外:橙・褐 内:褐	弥生前期 水磨を受ける
755	A2・11b	弥生土器	甕か鉢	口	外:黄橙・灰褐・黒 内:黄橙・褐・黒	水磨を受ける
756	B2・11b	弥生土器	大甕	突帯	内外:にぶい黄褐 器肉:暗灰黄	弥生中期後半 水磨を受ける
757	A2・11b	弥生土器	甕	底	外:にぶい黄褐 内:にぶい黄褐 器肉:にぶい黄褐	底径(9.5cm) 弥生中期 水磨を受ける
758	A1・11b	弥生土器(北九州系)	甕	口	外:橙・褐 内:明赤褐・赤褐	須玖II式 弥生中期後半 外:丹塗 水磨を受ける
759	B1・11b	弥生土器	壺	口	外:明褐・褐 内:にぶい褐	袋状口縁 弥生中期後半~後期 水磨を受ける
760	A2・11b	弥生土器	壺	口	外:オリーブ 内:にぶい橙	山ノ口II式 口径(12.7cm) 弥生中期後半 水磨を受ける
761	B1・11b	弥生土器(瀬戸内系)	壺	口	外:橙・明赤褐 内:橙	凹線文系 弥生後期 口径(18.4cm) 水磨を受ける
762	B2・11b	弥生土器?	壺	口	外:にぶい橙・橙 内:浅黄橙・にぶい橙	外:縦方向のミガキ 水磨を受ける
763	A1・11b	成川式	甕	口	外:淡橙 内:灰白・黄橙・明褐	水磨を受ける
764	B3・11b	成川式	壺	胴	外:灰白・にぶい橙 内:にぶい橙	布目圧痕をもつ刻目 水磨を受ける
765	B2・11b	成川式	卍	胴	外:淡黄 内:黄灰	水磨を受ける
766	A2・11b	成川式	甕	脚	外:にぶい赤褐・明赤褐 底内:にぶい橙 底外:橙	底径(6.4cm) 水磨を受ける
767	A2・11b	成川式	甕	脚	外:にぶい黄橙・橙 内:橙・褐灰	底径(7.7cm) 水磨を受ける
768	B1・11b	成川式	高杯	脚	橙	外:赤色顔料塗布 水磨を受ける
769	B1・11b	陶器	胴		内外:灰	叩き:平行 内:刷毛目 中世
770	A2・11b	陶器	底		外:褐灰 内:にぶい橙	叩き:格子 内:ナデ
771	B2・11b	陶器	底		内外:灰	
772	B2・11b	土師器	坏	口~底	内外:浅黄橙	糸切底
773	A2・11b	土師器(小皿A)	小皿	口~底	外:明黄褐 内:にぶい黄橙	糸切底 口径(8.3cm) 底径(6.5cm) 器高1.7cm

番号	地点・層位	種別	器種	部位	色調	備考
774	A2・11b	土師器	皿	完形	外：灰白 内：灰白	糸切底 口径9cm 底径6cm 器高1.4cm
775	B2・11b	瓦器	椀	高台	外：にぶい橙 内：黒	底径 (6.5cm)
776	A2・11b	瓦器	椀	高台	外：灰白 内：黒	底径 (8.8cm)
777	A2・11b	陶器 (備前)	播鉢	口	外：灰 内：黒褐 器肉：明赤褐	13c末～15c初
778	A1・11b	陶器 (東播系)	捏鉢	口	釉：黒 素地：灰	12c末～13c初
779	A1・11b	陶器 (中国)		底	釉：黄 素地：灰	
780	B1・11b	瓦質土器	播鉢	口～胴	内外：灰オリーブ 器肉：明黄褐	すり目：7条1単位 (幅1.9cm) 口径 (30.6cm)
781	A1・11b	陶器 (中国)	甕か壺	胴	外：褐灰 内：灰黄褐 器肉：灰白・橙	
782	A1・11b	陶器 (中国・大宰府耳壺VI類)	耳壺	口	釉：オリーブ灰 素地：灰	口径 (10.7cm) 13c前半
783	A2・11b	陶器	碗	口	化粧土：白 素地：淡黄	白化粧土
784	A2・11b	陶器	胴		外：にぶい赤褐 内：にぶい黄褐	
785	B2・11	白磁 (大宰府IV類)	碗	口	釉：灰白 素地：灰白	玉縁 11c後半～12c前半
786	A1・11b	白磁 (大宰府IX-1類)	皿	底	釉：灰白 素地：灰白	口禿 13c後半～14c前半
787	A2・11b	白磁 (大宰府IX-1類)	皿	底	釉：灰白 素地：灰白	口禿 底径 (6.1cm) 13c後半～14c前半
788	A2・11b	青磁 (竜泉窯系・大宰府II-B類)	碗	口	釉：灰オリーブ 素地：灰	外：鎚連弁 13c前半
789	B1・11b	青磁 (竜泉窯系・大宰府II-A類)	碗	胴	釉：灰オリーブ 素地：浅黄	外：鎚連弁 焼きが甘い 13c前半
790	A2・11b	青磁 (竜泉窯系・大宰府I-3A類)	碗	高台	釉：灰オリーブ 素地：灰オリーブ	内：櫛描 底径 (4.9cm) 12c中～後半
791	A2・11b	青磁 (竜泉窯系・沖繩V-0類)	碗	口	釉：オリーブ灰 素地：灰	14c中～15c中
792	B1・11a	青磁 (竜泉窯系沖繩V-0類)	碗	高台	釉：明オリーブ 素地：灰白	底径 (5.6cm) 14c中～15c中
793	A2・11b	青磁 (竜泉窯系・沖繩IV'類)	碗	高台	釉：オリーブ灰 素地：灰白	見込：釉剥ぎ 底径 (6.2cm) 高台内：蛇ノ目釉剥ぎ 14c中～15c初
794	B1・11b	青磁 (竜泉窯系・大宰府I類)	碗	高台	釉：オリーブ灰 素地：灰白	見込：花 底径4.8cm 12c中～後半
795	B2・11b	瓦			外：にぶい黄 内：黄褐 器肉：明黄褐	
796	A1・11b	土製品	土錘	完形		長：3.9cm 最大幅：1.2cm 孔径：0.3cm 重：5.3g
797	B2・11b	土製品	羽口		灰白・浅黄橙	断面形：略方形 孔径：2.6×2.7cm
798	A2・11b	石製品	砥石	完形		最大長：9.5cm 最大幅：3.6cm 最大厚：1.6cm 重：82.1g
799	A2・11b	軽石製品				最大長：25.5cm 挟り径：11cm 重：660g
800	AZ1	陶器 (苗代川)	土瓶蓋		釉：黒褐 素地：灰	最大径 (10.6cm) 18c後半以降
801	鋤跡・埋土	磁器		口	釉：灰 素地：灰	
802	AZ3	土師器		底	内外：にぶい橙	糸切底
803	AZ5	弥生土器	甕	口	外：にぶい黄褐 内：灰黄褐 器肉：にぶい黄褐	山ノ口II式 弥生中期後半・新
804	AZ5・埋土	土師器		底	内外：浅黄	糸切底 外：スス附着
805	AZ5・埋土	青花	碗	高台	釉：明緑灰 素地：(白) 文様：(青)	内外：圏線ほか 16c後半～17c
806	AZ6・埋土	土師器		底	内外：浅黄橙	糸切底
807	AZ6・埋土	土師器		底	内外：黒 器肉：灰黄褐	糸切底 内外：スス附着
808	AZ6・埋土	土器		底	内外：橙 器肉：浅黄橙	丸底?
809	AZ6・埋土	陶器 (関西系?)	碗か皿	口	釉：明黄褐 素地：灰白	
810	AZ6・埋土	青磁 (竜泉窯系・沖繩V-0類)	皿	口～高台	釉：暗オリーブ 素地：灰白	稜花・腰折 高台内：蛇ノ目釉剥ぎ 口径 (14.2cm) 底径 (6.0cm) 器高3.0cm 14c中～15c中
811	先行トレンチ1	成川式	甕	脚	外：橙 内：黄灰 器肉：橙	
812	先行トレンチ1	白磁 (大宰府VI類)	皿	口	釉：灰白 素地：白	11c後半～12c前半
813	ボーリング・川砂 (3層対応)	不明磁器	碗	口	釉：灰白 (貫入) 素地：灰	

## 6. まとめ

本調査区では、中世の河川跡と近世～近代の水田跡という2つの遺跡の性格と、包含層の良好な包蔵状況を確認できた。

Fig.3にもあるように、弥生時代～古墳時代の河川跡は郡元団地中央部を西から東方向へ流れていたと考えられる。しかし、これは中世には埋没して細い流れとなっていることが分かっており<sup>3)</sup>、これが北側に流れを大きく変えて、本調査区の河川跡となっているものと思われる。

本調査区の中世の河川跡は、地表下4mまで掘っても河底に到達せず、かなり大きな河川であったと考えられる。遺物は縄文時代から中世までの遺物を含むが、土製品はほとんどが表面の磨滅を受けており、河川中に永くあったと考ええると上流の遺跡のものではないかとも考えられる。遺物を多量に含む11b層は、粗砂と軽石礫（0.5cm大から人頭大までを含む）で構成され、かなり流れの強い状況であった可能性が考えられる。この上部に位置する11a層は粗砂を含むものの、細砂が主体であり、流れが安定しながら埋没したことを示している。

この安定した砂層を掘りくほめ、また土壌を持ち込んで、最初の水田は造営されている。10層の遺物からすると16世紀後半までのものが含まれており、16世紀には河川は埋没してその跡地を水田へと改変したと考えておきたい。その後、近代にいたるまで連続と水田を営むようであるが、何度も水田を覆う河川堆積物の砂層（9層・6層・3層）から考えれば、決して安定した河川ではなかったことが窺える。そして何度も砂層を除去し、再生していたのであろう。水田跡は2mほど堆積しているが、これは雨季の氾濫が多い元河川付近を土地改良したことに起因するかもしれない。

水田は大畦を北東－南西方向という基準は継続しているため、水田造営に大きく断絶があったとは考えにくい。ただし、大畦も上層になるにつれ、やや西側へと徐々に位置が移行しており、小畦（AZ5）をつくったり、段落ち（5層）をつくったりと様相がやや複雑化する。土地が安定していくにつれ、土地の移譲や改良が行なわれたのかもしれない。

本調査区では、19世紀の城下絵図などに描かれる水田地帯の様相が、16世紀段階までさかのぼる可能性が指摘できる点、郡元団地内を横断する河川跡が、弥生時代～古墳時代→中世～近世へと流路が変化していることを明らかにした点において重要な地点となった。

今回図化しなかったが、鉄釘や性格不明の鉄製品、鉄滓は2～11層まで出土している（Tab.10）。

## 註

- 1) 中村直子・大西智和 1997『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』11
- 2) 松永幸男・砂田光紀1990『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』V
- 3) 平成15年度郡元団地H-12・13区（VBL棟）発掘調査（2002-2）。未報告。



Tab.10 2007-4 遺物集計

時代	時期	種別	器種	地区層位不明	攪乱	旧1トレ埋土	ゴミ穴埋土	ゴミ穴1埋土	ゴミ穴2埋土	ゴミ穴3埋土	ゴミ穴4埋土	ゴミ穴5埋土	ゴミ穴6埋土	ゴミ穴7埋土	ゴミ穴8埋土	ゴミ穴9埋土	ゴミ穴10埋土	ゴミ穴11埋土	ベルト2・3	先行トレンチ1	2層	2a層	2b層	3層	4層	5層	鋤跡埋土	6層	AZ1埋土	7層	7a層	7b層
縄文	前期		深鉢																													
	前期末～中期		深鉢																													
	後期		深鉢																													
	晩期		深鉢																													
	晩期		浅鉢																													
	晩期		深鉢																													
弥生	晩期～弥生初		深鉢																						1							
	前期		甕																						3							
	前期		壺																						14							
	中期		甕																													
	中期		大甕																													
	中期		甕or鉢																													
古墳	中期	須玖Ⅱ式	甕			1																		1								
		成川式	甕																	1		1										
		成川式	高杯																													
		成川式	赤色顔料																													
		成川式	1条刻目																													
		成川式	壺			1																			2							
		成川式	壺?																													
		成川式	壺or埴																													
		成川式	埴																													1
		成川式	壺			1																										
弥生・古墳	須恵器				1															1		1										
	土器				17	1						2	2							1		229	7	1			1		3	9		
	土器	1条突帯			1																	6	2									
	土器	1条刻目																				5										
	土器	2条突帯																				1								1		
中世	土器	沈線																														
	土師器	皿・坏 (笥切)																														
	土師器	皿 (糸切)																						1								
	土師器	杯 (糸切)																														
	土師器	杯・碗																						1								
	土師器	糸切底			1																								1	1		
	土師器	高台																														
	土師器	柱状高台																														
	土師器				1																			9	3		1	1		3	5	
	瓦器																						1									
	備前	播鉢																														
	東播系	播鉢																														
	東播系	捏鉢																														
	陶器	壺																														
	陶器																															
	瓦質土器																															
	白磁	玉縁碗																			1											
	白磁	口禿皿																														
	白磁	耳壺																														
	白磁																							1								1
青磁・竜泉窯系	鎗連弁碗																															
青磁・竜泉窯系	櫛描文碗																															
青磁・竜泉窯系	線刻連弁碗																															
青磁・竜泉窯系	雷文碗																								1							
青磁・竜泉窯系	無文碗																															
青磁・竜泉窯系	香炉																															
青磁・竜泉窯系	輪花皿																														1	
青磁・竜泉窯系	皿																														1	
青磁・竜泉窯系	壺																															
青磁・竜泉窯系						1																		1							1	
16c後半～17c前半	青花・景德鎮窯	碗																														
16c後半～17c前半	青花	碗											1																			
16c後半～17c	青花	皿																							1						1	
16c後半～17c前半	青花	小皿																														
16c後半～17c	青花	碗・皿																														
16c後半以降	中国	輪花皿																														
17c	苗代川	鉢																														
17c～18c	苗代川	鉢																							1							
17c後半～18c	苗代川	鉢																														
18c	苗代川	鉢																							1	1					1	
18c～19c	苗代川	鉢																						1	2						1	

時代	時期	種別	器種	AZ3	7c	8a	SK2	AZ5	8b	9	10	10a	AZ6	10b	10c	10d	10e	10f	10g	11	11a	11b	計				
				埋土	層	層	埋土	層	層	埋土	層	層	層	埋土	層	層	層	層	層	層	層	層		層	層		
縄文	前期		深鉢																			1	1				
	前期末~中期		深鉢																				4	4			
	後期		深鉢																				1	1			
	晩期		深鉢																				1	1			
	晩期		浅鉢																	1			1	2			
	晩期		深鉢									1							1				3	5			
弥生	晩期~弥生初		深鉢																				4	5			
	前期		甕																				5	8			
	前期		壺																				1	1			
	中期		甕					1	1			1		1				1				1	8	28			
	中期		大甕																				1	1			
	中期		甕or鉢																				1	1			
古墳	中期	須玖Ⅱ式	甕							1													4	7			
		成川式	甕			2				1		1				1							11	19			
		成川式	高杯																				2	2			
		成川式	赤色顔料									1							1						2		
		成川式	1条刻目			1						1			1									1	4		
		成川式	壺			1										1								3	8		
		成川式	壺?													1								1	1		
		成川式	壺or埴																					1	1		
		成川式	埴									1												1	3		
		成川式										4				15								2	22		
弥生~古墳	須惠器			1		1			1	1									2				3	12			
	土器			2		48	1	13	101	39	7	188	7	45	20	12	7	18	12		1	573	1367				
	土器	1条突帯				1			2			4	2	1	1								19	39			
	土器	1条刻目										1											7	13			
	土器	2条突帯																					6	8			
中世	土器	沈線																						1	1		
	土師器	皿・坏(窺切)				1						1													2		
	土師器	皿(糸切)										1				1		1						2	6		
	土師器	杯(糸切り)										1		1		2		1						1	6		
	土師器	杯か椀											1					1							3		
	土師器	糸切底	1		2		1	6	2		28	2	2	3										1	51		
	土師器	高台										1		2											3		
	土師器	柱状高台														1									1	2	
	土師器				13		1	1	18	11	12	77	1	17	9	12	4	8	3					24	234		
	瓦器								6		1	3		6	3	3	4	4	2					7	36		
	備前	播鉢							1			1		1											1	4	
	東播系	播鉢	1					1																	1	3	
	東播系	捏鉢																								1	1
	陶器	壺							1																	1	2
	陶器												1													1	2
	瓦質土器												1													1	3
	白磁	玉縁碗																			1						2
	白磁	口禿皿																								1	1
	白磁	耳壺																									1
	白磁					1			4			3			1	1		1	2				1	1	17		
	青磁・竜泉窯系	鎗連弁碗																							2	2	
	青磁・竜泉窯系	櫛描文碗							1																2	3	
	青磁・竜泉窯系	線刻連弁碗				2			3			6				1										13	
	青磁・竜泉窯系	雷文碗										1		1												2	
	青磁・竜泉窯系	無文碗	1						3			6		1	1	1							1	6	20		
	青磁・竜泉窯系	香炉				1			1																	2	
	青磁・竜泉窯系	輪花皿							1	1		1	1		1											6	
青磁・竜泉窯系	皿							1			8		2											1	13		
青磁・竜泉窯系	壺										1														1		
青磁・竜泉窯系		1		2				2	1	1	2		2				1								15		
16c後半~17c前半	青花・景德鎮窯	碗							2																2		
16c後半~17c前半	青花	碗					1	1				1													4		
16c後半~17c	青花	皿									3														5		
16c後半~17c前半	青花	小皿						1																	1		
16c後半~17c	青花	碗か皿									1														1		
16c後半以降	中国	輪花皿						1																	1		
近世~近代	17c	苗代川	鉢						1																1		
	17c~18c	苗代川	鉢																						1		
	17c後半~18c	苗代川	鉢						1																1		
	18c	苗代川	鉢																						3		
	18c~19c	苗代川	鉢																							4	

時代	時期	種別	器種	地区層位不明	攪乱	旧1ト埋土	ゴミ穴埋土	ゴミ穴1埋土	ゴミ穴2埋土	ゴミ穴3埋土	ゴミ穴4埋土	ゴミ穴5埋土	ゴミ穴6埋土	ゴミ穴7埋土	ゴミ穴8埋土	ゴミ穴9埋土	ゴミ穴10埋土	ゴミ穴11埋土	ベルト2・3	先行トレンチ1	2層	2a層	2b層	3層	4層	5層	鋤跡埋土	AZ1埋土	7層	7a層	7b層	
	18c後半～19c	苗代川	鉢																				1									
	19c	苗代川	鉢																			1										
	17c?	苗代川	鉢																				1									
	17c後半～18c	苗代川	甕															1														
	18c～19c	苗代川	甕																				2									
		苗代川	甕													1						1										
近世 近現代	17c?	苗代川	甕か壺																													
	17c後半～18c	苗代川	甕か壺																												1	
	18c以降	苗代川	甕か壺																				1									
	18c後半	苗代川	甕か壺																				1									
	18c後半以降	苗代川	甕か壺																					1								
	19c以降	苗代川	甕か壺																				1									
		苗代川?	甕か壺																				1									
	18c～19c	苗代川	壺																					1								
		苗代川	壺																												1	
	17c～18cか	苗代川	播鉢																												1	
	18c	苗代川	播鉢																				2								1	
	18c～19c	苗代川	播鉢																				2	15	8			1				
	19c	苗代川	播鉢																					2								
		苗代川	播鉢										1										4									
	18c後半以降	苗代川	土瓶																				9	6		2			2		2	
	18c後半以降	苗代川	土瓶・蓋																				4	1				1	1			
	19c以降	苗代川	山茶家																				1								1	
	19c以降	苗代川	山茶家?																				1	1							2	
	19c以降	苗代川	土瓶or土鍋																				1									
	17c	苗代川	(朝鮮陶器?)																													
	近現代	苗代川	土鍋																				1									
	近現代	苗代川	鉢																				1									
	17c	苗代川																														
	17c～18c	苗代川																													2	1
	18c～19c	苗代川																						8	1		3		1		4	1
		苗代川																						83	24							4
		苗代川?																						3							1	1
	17c後半～18c前半	加治木・始良系	碗																				1									
	18c前半	加治木・始良系	碗																												1	
	18c～19c	加治木・始良系	小皿																					3								
	18c～19c	加治木・始良	ひょうそく																													
	18c～19c	加治木・始良系	灯明皿受け				1																									
	19c	加治木・始良系	灯明皿受け																					1								
		加治木・始良系	灯明皿受け																					3								
	18c後半以降	加治木・始良系	高杯				1																									
	18c後半～19c	加治木・始良系	壺or皿																													1
	17c後半～18c前半	加治木・始良系?	碗か皿																													
	18c前半	加治木・始良系?	碗か皿																													1
	18c	加治木・始良系	皿																					1								
		加治木・始良系	皿																					1			1					
		加治木・始良系	小皿																						1							
		加治木・始良系?	碗																						1							1
	17c後半～18c前半	加治木・始良系																														
	18c	加治木・始良系																														
	19c末	加治木・始良																							1							
	近現代	加治木・始良系																							1							
		加治木・始良系																						1	2	2						
	18c後半～19c	龍門司	小皿																													
	近現代	龍門司	皿																					1								
	18c後半以降	龍門司																									1					
	18c～19c	堅野か龍門司					1																									
	近代以降	堅野系?	土瓶																					1								
	近現代	白薩摩	線香立て																													1
	近現代	白薩摩	碗																													1
		白薩摩	瓶か花瓶																													1
		白薩摩																						1	2							2
	18c後半以降	薩摩焼	土瓶																						1	3	1					
		薩摩焼	土瓶・蓋				1																									
	18c後半以降	薩摩焼																														
近現代	薩摩焼?	急須																					1									
年代不明	薩摩焼?	土瓶																						1								
17c後半～18c前半	肥前(内野山)	皿																													1	
17c後半～18c後半	肥前(内野山)																															
17c初め	肥前(唐津)	溝淵皿																													1	
18c前半	肥前	碗																					1	1								

時代	時期	種別	器種	AZ3	7c	8a	SK2	AZ5	8b	9	10	10a	AZ6	10b	10c	10d	10e	10f	10g	11	11a	11b	計
				埋土	層	層	埋土	埋土	層	層	埋土	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	
	18c後半～19c	苗代川	鉢																				1
	19c	苗代川	鉢																				1
		苗代川	鉢																				1
	17c?	苗代川	甕			1																	1
	17c後半～18c	苗代川	甕																				1
	18c～19c	苗代川	甕																				2
		苗代川	甕																				2
近世 近代	17c?	苗代川	甕か壺						1														1
	17c後半～18c	苗代川	甕か壺																				1
	18c以降	苗代川	甕か壺																				1
	18c後半	苗代川	甕か壺																				1
	18c後半以降	苗代川	甕か壺																				1
	19c以降	苗代川	甕か壺																				1
		苗代川?	甕か壺																				1
	18c～19c	苗代川	壺																				1
		苗代川	壺																				2
	17c～18cか	苗代川	搦鉢																				1
	18c	苗代川	搦鉢																				2
	18c～19c	苗代川	搦鉢																				31
	19c	苗代川	搦鉢																				3
		苗代川	搦鉢																				4
	18c後半以降	苗代川	土瓶																				28
	18c後半以降	苗代川	土瓶・蓋																				8
	19c以降	苗代川	山茶家																				2
	19c以降	苗代川	山茶家?																				4
	19c以降	苗代川	土瓶or土鍋																				1
	17c	苗代川	(朝鮮陶器?)			1																	1
	近現代	苗代川	土鍋																				1
	近現代	苗代川	鉢																				1
	17c	苗代川				3				2													5
	17c～18c	苗代川				2				1													6
	18c～19c	苗代川																					19
		苗代川				1				1													117
		苗代川?																					5
	17c後半～18c前半	加治木・始良系	碗																				1
	18c前半	加治木・始良系	碗																				1
	18c～19c	加治木・始良系	小皿																				3
	18c～19c	加治木・始良	ひょうそく																				1
	18c～19c	加治木・始良系	灯明皿受け																				1
	19c	加治木・始良系	灯明皿受け																				3
	18c後半以降	加治木・始良系	高杯																				1
	18c後半～19c	加治木・始良系	壺or皿																				1
	17c後半～18c前半	加治木・始良系?	碗か皿			1																	1
	18c前半	加治木・始良系?	碗か皿																				1
	18c	加治木・始良系	皿																				1
		加治木・始良系	皿																				2
		加治木・始良系	小皿																				1
		加治木・始良系?	碗																				2
	17c後半～18c前半	加治木・始良系								1													1
	18c	加治木・始良系																					1
	19c末	加治木・始良																					1
	近現代	加治木・始良系																					1
		加治木・始良系																					5
	18c後半～19c	龍門司	小皿																				1
	近現代	龍門司	皿																				1
	18c後半以降	龍門司																					1
	18c～19c	堅野か龍門司																					1
	近代以降	堅野系?	土瓶																				1
	近現代	白薩摩	線香立て																				1
	近現代	白薩摩	碗																				1
		白薩摩	瓶か花瓶																				1
		白薩摩																					5
	18c後半以降	薩摩焼	土瓶																				4
	薩摩焼	土瓶・蓋																				1	
18c後半以降	薩摩焼																					1	
近現代	薩摩焼?	急須																				1	
年代不明	薩摩焼?	土瓶																				1	
17c後半～18c前半	肥前(内野山)	皿																				1	
17c後半～18c後半	肥前(内野山)				1																	1	
17c初め	肥前	溝淵皿				1																2	
18c前半	肥前	碗																				2	



時代	時期	種別	器種	AZ3埋土	7c層	8a層	SK2埋土	AZ5埋土	8b層	9層	10層	10a層	AZ6埋土	10b層	10c層	10d層	10e層	10f層	10g層	11層	11a層	11b層	計	
	18c後半	肥前	陶胎染付碗																				1	
		肥前	大皿																					2
		肥前	大壺																					1
		肥前	搦鉢																					1
		肥前?	搦鉢																					1
		肥前系?	小皿																					1
		肥前																						1
		肥前?																						4
		琉球																						7
		琉球?																						2
	17c前半	備前	搦鉢						1														1	
	19c以降	備前(常滑)	急須																				1	
近世 近世		備前?										1											1	
		天目																					2	
		宋胡録写?																					1	
	18c中頃	関西系	腰折碗																				1	
		関西系?	碗か皿										1										1	
		関西系?																						1
	18c	京焼	色絵碗																					1
	18c後半以降	陶器	山茶家・蓋																					1
	18c後半以降	陶器	土瓶																					1
		陶器	突帯部																					4
	17c後半	肥前(伊万里)	瓶																					3
	18c後半	肥前	半筒碗																					1
	18c~19c	肥前	碗																					3
	近世	肥前	碗																					2
	19c	肥前系	碗																					1
		肥前系	碗							3			2											15
		肥前	油壺																					1
	18c~19c	肥前	皿																					2
	18c~19c	肥前	輪花皿																					1
	19c	肥前	皿																					2
		肥前	皿																					2
		肥前系	皿			1			1															3
		肥前?	皿										1											1
		肥前系	輪花皿			2							1											5
	18c後半	肥前	皿か鉢																					1
	19c	肥前	小杯																					2
	19c中~幕末	肥前	薄手酒盃																					1
	近世	肥前	杯																					1
	18c後半	肥前																						2
		肥前								2			1											26
		肥前系					17		7	22		1	7			1								94
	18c~19c	肥前(波佐見)	碗																					1
	18c	肥前(波佐見)	皿																					1
	18c~19c	肥前(波佐見)	皿																					1
	18c	肥前(波佐見)																						1
	18c~19c	肥前(波佐見)				1																		1
	19c	薩摩磁器	碗																					6
	19c中~幕末	薩摩磁器	碗																					1
	近世	薩摩磁器	碗																					2
	19c	薩摩磁器?	碗																					1
		薩摩磁器	碗																					1
		薩摩磁器?	皿																					1
		薩摩磁器?	小皿							1														1
	19c	薩摩磁器	輪花皿																					1
	19c中~幕末	薩摩磁器	皿																					1
19c	薩摩磁器	蓋																					1	
19c	薩摩磁器?	蓋																					1	
19c	薩摩磁器?	小杯																					1	
19c~幕末	薩摩磁器																						1	
19c以降	薩摩磁器																						1	
18c末~19c	中国	碗																					1	
	中国?	輪花皿																					1	
	中国?	碗か鉢							1														1	
19c以降	磁器																						1	
近現代	陶器	急須																					1	
	陶器	土瓶																					1	
	日本硬質陶器	皿																					1	
	高等農林食器	碗																					1	
	高等農林食器	皿																					3	





時代	時期	種別	器種	AZ3	7c	8a	SK2	AZ5	8b	9	10	10a	AZ6	10b	10c	10d	10e	10f	10g	11	11a	11b	計	
				埋土	層	層	埋土	埋土	層	層	埋土	層	層	埋土	層	層	層	層	層	層	層	層		層
		生協食器	碗																				2	
		東洋陶器(株)																						1
		磁器	蓋			1																		9
		磁器	井碗																					2
		磁器	碗																					42
		磁器	急須																					3
		磁器	仏飯具																					1
		磁器	輪花皿																					3
		磁器	皿																					14
		磁器	小皿																					3
不明		磁器				2																1	67	
		陶器	甕			1																	19	
		陶器	小壺			1																	2	
	陶器	土釜																					1	
時期・系統不明		陶器	碗																			1	7	
		陶器	播鉢			1																	4	
		陶器	土瓶																				7	
		陶器	香炉																				1	
		陶器	(陶胎染付)									1											3	
		陶器 (中国)																				2	2	
		陶器		1	1	17			26		1	14			1	1							7	237
		磁器	碗						2														7	
		磁器	壺									1											1	
		磁器	皿																				1	
		磁器	輪花皿																				1	
		磁器	紅皿																				2	
		磁器	小杯																				1	
その他		磁器				4	1	1	6		1	4		1	1				1			1	84	
		円盤状加工(陶器転用)																					3	
		瓦							1				1	1								1	100	
		土製品	焙烙						1														12	
		土製品	泥面子						1														4	
		土製品	土人形																				3	
		土製品	土錘			1			1			2					1					1	7	
		土製品	コンロ																				2	
		土製品	拓						1														1	
		土製品	埴塙			1			1													1	3	
		土製品	香炉																				1	
		ふいご	羽口										1										3	4
		土製品		1					6			3	1	1									15	
		滑石製品																1					1	
		石器				1						2		1	1			1					1	10
		石鏃														1							2	
		砥石																					1	2
		火打石																						2
		石材																						1
		黒曜石											3					1					2	14
		軽石										2				1							1	4
		石				1			3	2		11	1	2	1			1	1		1		23	57
		古銭																						3
		青銅製品	キセル			1																		3
		青銅製品							1															5
		鉄				3			1	1		2				1								22
		鉄滓							4	2		12				1						1	2	30
		木炭										1												22
		ガラス瓶																						12
		ガラス製品				1			1															20
		土管																						14
		骨(獣骨)																						1
		ビニール袋																						1
	プラスチック																						1	
	アスファルト																						1	
	セメント																						1	
	レンガ																						1	
	爆弾片																						1	
	計			9	3	143	3	28	252	61	24	423	17	87	44	60	12	44	23	1	7	768	3519	

## VI 総括

農学部敷地内（以下、農学部地区）の発掘されたデータをもとに、同地区の変遷を、遺構を中心として以下に見ていくことにする。なお、本編で紹介した各調査地点は、2005-4～2007-4のように発掘調査コードで表す。

### 縄文時代

農学部地区における最も古い遺物は、縄文時代前・中期の土器である。これらは2007-4地点の河川堆積物内において出土し、かつ水摩を受けていることから、帰属する遺跡は河川上流のものであった可能性が高い。しかしながら、平成9年度の工学部共通棟の発掘調査では、安定して縄文時代中期の遺物が出土していることから<sup>1)</sup>、近隣に同時代の遺跡があったことは確実である。2006-2地点5層を中心として比較的安定した数量で出土するのが、縄文時代晩期末～弥生時代初頭の刻目突帯文土器である。しかしながら、この時期の明確な遺構は不明であり、郡元団地内でも不明であることから、この時期の遺跡があったのかは未だ確言できない。

また、2006-2地点の確認トレンチ①の泥炭層の年代分析では、9a層（黒色シルト）と9e層（泥炭）の年代は、それぞれcal 3140±50 BP (2σ), cal 3370±40 BP (2σ) であり、縄文時代後期に相当する比較的若い泥炭層である。農学部より西側（山側）に位置する工学部稲盛会館地点の泥炭層は、13層上部で4410±90 BP, 15層上部で4890±90 BP, 同層下部で4780±100 BPとなっており<sup>2)</sup>、13層上部が縄文時代中期初頭に相当する古い泥炭層である。より海側の農学部地点で若い湖沼が形成されることを考えると、縄文時代後期の海退現象を間接的にあらわしていると考えられることができる。

### 弥生時代～古墳時代

2006-2地点5層及び2005-4地点4層がこの時期に相当する。弥生時代中期の遺物はこれまでも郡元団地内からも多量に出土し、生産遺跡も確認されていることから<sup>3)</sup>、集落があるだろうと想定されていたが、今回、郡元団地内において初の竪穴住居跡検出例があった。2006-2地点において6層上面より方形竪穴住居跡（SK21）が1棟検出され、長軸方向の中央部に4つの主柱列をもつ住居跡であり、切妻形の上屋と南向きの入口が想定される。中摩浩太郎氏による南九州の弥生時代竪穴住居跡分類<sup>4)</sup>に従えば、IA類（中心軸採用型・単純方形竪穴）に類するものであろう。同類型の分布域は南九州全域であるので合致しており、竪穴面積は同類型でもやや大型に属する。SK21住居跡内の遺物はさほど多くはないが、弥生時代中期後半（古）の山ノ口I式段階の土器と考えられる。これは上層からも一定量出土している。また、石器として剥片を利用した利器が出土しており、刃部の使用痕分析からは、草本類の株などの刈取作業によるものであると想定されている（付編3参照）。上述のように、近隣に生産遺跡の検出もあることから首肯される結果であるが、住居内床面の土壌分析ではイネはほとんど検出されていない（付編1参照）。郡元団地内の古墳時代包含層の土壌分析結果<sup>5)</sup>で多量のプラントオパールが検出されることから考えれば、古墳時代とは水田農耕への生業的依存度が異なるのかもしれない。もしくはこの剥片石器そのものが稲作と関わりのないものである可能性もある。2006-2地点は、古墳時代には小規模の自然流路が流れる湿地のような環境に変化していたのではないかと考えられる。出土遺物と埋土の観察から自然流路の一部と考えられるSK68(69)は、自然流路としては形状が不整形で、土坑軸がSK21住居跡に類似することから、弥生時代の住居跡に古墳時代の自然流路が流れ込んでこれを削平したものと考えられる。

### 古代～中世

2006-4地点1区東側と2区のほぼ全域・3区全域、2007-4地点全域（11層）で河川跡が確認された。しかし、古代・中世の遺構はほとんどない。古代の遺物はほとんどないが、中世の遺物は一定量出土することから、

遺物包含層は存在したものの、近世の水田層によって削平されたものと考えられる。遺物は2007-4地点で最も多く、河川堆積層である11b層では先史時代の遺物を除いてほぼ中世の遺物で占められ、近世の遺物はほとんど見当たらない。遺物からみると、16世紀ごろには河川は完全に埋没している可能性がある。2006-4地点においても河川埋没後の土層6層で残りの良い17~19世紀の遺物が出土していることから首肯される。郡元団地内を東西方向に走る河川跡 (Fig.3参照) は、中世には小規模の河川に変遷している<sup>6)</sup>とともに、農学部地点で中世遺物を包含する大規模な河川跡が検出されたことから考えて、中世の前半期に郡元団地内の河川跡は大きく流路を変えて北側へ移動したものとみなしておきたい (Fig.104参照)。しかしながら、この河川も近世初期には埋没していると考えられる。

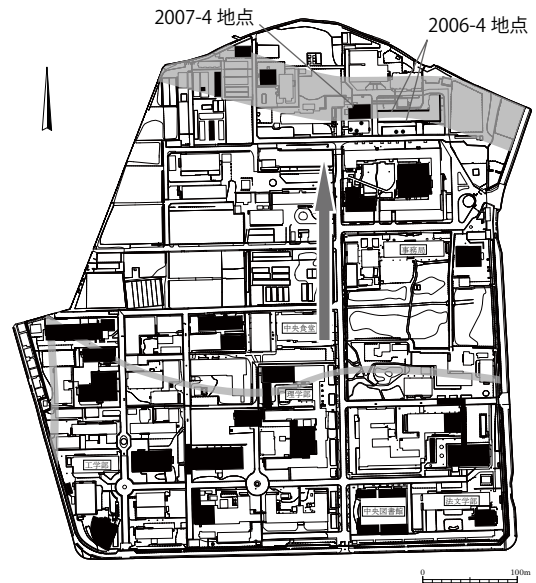


Fig.104 河川流路の変化

## 近世～近代

農学部地点の主体的な時期は近世～近代であり、この時期の遺構・遺物が最も多い。2005-4地点2・3層、2006-2地点2~4層、2006-4地点1区2~5層、2007-4地点2・4・5・7・8・10層がこの時期に相当すると考えられる。これらの地点における最初期の水田跡は、2007-4地点11層上面で検出され、遺物から16世紀後半代に位置づけられる。河川が埋没し土壌が安定した段階から土地改変が行なわれたと捉えることができる。しかしながら、河川はその後も断続的に氾濫を起こしていると考えられ、水田跡に間層として河川砂層が貫入するもの (2007-4地点: 9・6・3層)、これらを除いた後、水田を再生したと考えられる状況 (2006-2地点SD1~4・水田跡③・⑥・⑦、2007-4地点: 8・4・2層)、また、河川と水田の境界に軽石を含む土壌を突き固めたような堤跡 (2006-4地点: 堤跡・軽石集積遺構) が検出された。水田跡は造営当初から大きく位置を変えない大畦と、それに直交する小畦で区画され、小畦は作り替えて位置が移動する場合もある (2006-2地点・2007-4地点)。この状況は連合大学農学科地点 (以下、連大地点)<sup>7)</sup>でも看取され、耕地改変や土地の移譲などに伴う移動ではないかと判断される。水田跡には稲株痕や人足跡のほか、2006-2地点では牛足痕も検出されており、畦に沿って並走した犁跡も検出されていることから「牛耕」の存在が考古学的にも明らかとなった。2006-2地点のプラントオパール分析では (付編1参照)、4層で最も量が多く、次いで2層、最も少ないのは3層となっている。3層は遺物の出土量も上下の層に比して少ないため、比較的短期間で放棄された水田であるのかもしれない。4b層には少量ながらもムギも検出されていることから、近隣における畑作の存在も示唆される。2007-4地点のプラントオパール分析では (付編2参照)、2c・7c・8a・8b・10c層においてイネが多量に検出され、稲作が想定されている。試みに分析依頼した河川氾濫層である3層・9層、および畦畔であるAZ7については、検出量が極めて少ない結果が得られている。注目すべきは、11a層の河川砂層を掘りこんで畦を構築し、土壌を入れ込んで造営したと考えられる原始的な最下層の水田跡においても、安定したイネの検出量があったことである。

2006-2地点では大畦の下位に、畦を構築する以前の小規模の溝跡と、この溝跡と軸を同じくし、小面積の簡素な建物跡が同層位で検出された (SD28~30など、建物跡①~⑤)。これは水田を造営するための耕地測量の痕跡と槽跡ではないかと想定したが、今後類例を集成し、また、文献資料からも検証していきたい。

鹿児島大学を含めた広範囲の水田は、絵地図にも描かれており、19世紀には城下町の水田地帯であったことが窺い知れる<sup>8)</sup>。大畦の位置を、「鹿児島都市計画復興土地地区画整理事業鴨池工区現況図」<sup>9)</sup>と併せると、大畦付近を通る地籍境界線があり、近世から近代にかけて造営されていた水田の大畦が昭和21年頃ま

で地籍境界となっていたのではないかと考えられる (Fig.105)。

農学部地点における顕著な近世の遺構に粘土採掘坑がある。最初に連大地点で多数検出されて明らかとなったもので、底面が粘土層を掘削し袋状を呈する土坑である<sup>10)</sup>。これに類似するものが、2005-4地点 (SK2), 2006-2地点 (SK48ほか多数), 2007-4地点 (SK2) で検出されているものの、2006-2地点SK48以外の大半は、粘土層に達せず砂層を底面としており、遺物もほとんど含まれないため機能が不明である。そのなかで2006-2地点SK40・41は底面ならびに壁面に粘土を貼り付けており、液体が漏れないような構造をしている。当初は水田以前の畑地における肥溜めではないかと考え、寄生虫卵分析を試みたが (付編1参照)、ほとんど検出されなかったため、小規模の天水溜めと想定している。

近世の遺物は、陶磁器類からみると近世薩摩焼 (苗代川・苗代川系, 加治木・始良系, 豎野系, 龍門司, 薩摩磁器), 肥前・肥前系陶磁器 (有田・伊万里・波佐見・唐津), 沖縄産陶器 (壺屋), 清朝磁器, 関西系磁器, 瀬戸美濃磁器などが得られているが、そのほとんどが18世紀~19世紀の遺物である。この時期の薩摩焼は苗代川産陶器の調理具 (鉢・播鉢), 貯蔵・運搬具 (甕・壺), 煮沸具 (土瓶) が多く, 肥前・肥前系の陶磁器は圧倒的に食膳具 (碗・皿・瓶) である。このバランスはこれまでの薩摩藩内における陶磁器流通

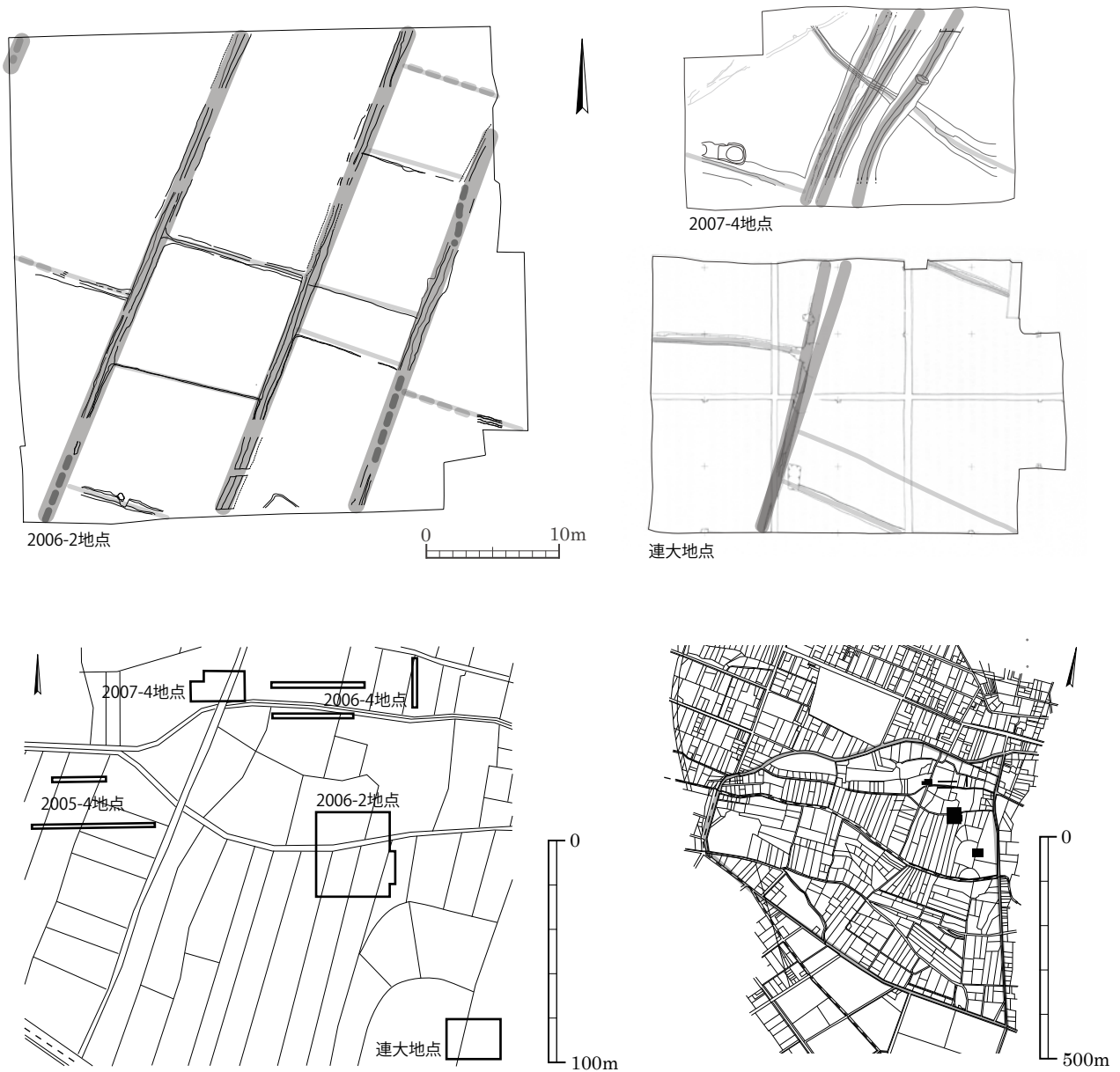


Fig.105 昭和21年地籍図の境界ラインと調査地点の大畷の位置



の研究成果<sup>11)</sup>を、城下町の生産遺跡近辺でも応用できることを示している。ほかには、泥メンコ、寛永通宝や清朝銭（乾隆通寶）、青銅製鈴、ガラス玉、釣針状製品、鍛冶滓、ふいご羽口、埴塙、トチン（窯道具：近代の可能性あり）などがあり、水田にはそぐわないような遺物も出土している。石器では、玉髓製の火打石が選別できた成果は大きい。

近代以降の遺物の大半は、陶磁器類であるが、香炉、仏飯具・仏花器なども出土しており、2005-4地点で出土した凝灰岩製の五輪塔と考え合わせると、水田地帯の一角に位置する墓地の存在を想定できるのかもしれない。

## 近代

また、西南戦争時のスナイドル銃弾が2006-2地点において出土している。同地点ではわずかに2点の出土であるが、郡元団地内ではほかにも連大地点<sup>12)</sup>、学術情報基盤センター<sup>13)</sup>、郡元南食堂<sup>14)</sup>などで小銃弾・四斤野砲弾などが出土している。明治10年5月24日、武村と紫原方面で戦闘があり、特に後者の戦闘は、それまでの鹿児島方面最大の激戦といわれ、官軍211名、薩軍66名の死傷者を出したとされる<sup>15)</sup>。鹿児島大学敷地は、旧武村と涙橋の中間地帯にあり（Fig.106）、これらの戦いの砲弾や銃弾がもたらされたものかもしれない。

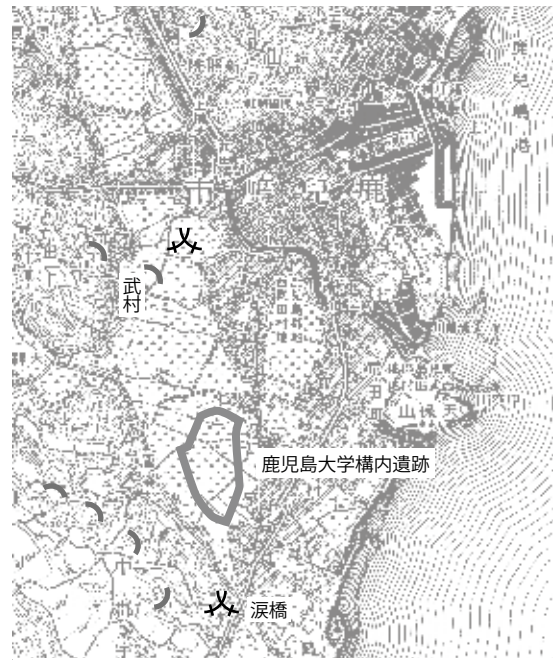


Fig.106 明治10年5月24日の戦闘と鹿児島大学構内遺跡の位置  
○は薩軍の配置

## 近代（鹿児島高等農林学校時代：明治42～昭和27年）

2006-2地点では鹿児島高等農林学校（後の農林専門学校；以下、高農）の本館北側に当たる第一・二教室、職員・学生便所、雨天体操場（後に柔剣道場）などの建物基礎跡が確認された。2006-4地点では、食堂近くの賄所・配膳室に相当し、2007-4地点では、製糸工場の実験室・検査室の基礎跡が確認されており、かなり正確に、鹿児島高等農林学校と鹿児島大学の建物配置の関係が分かるようになった（Fig.107）。遺物としては、「鹿高農対岳寮」の食器類が注目される。焼きと呉須の具合から2類に分類し、1類→2類の変遷を想定した（Ⅲ章参照）。これらは高農25周年記念アルバムの食堂風景写真にはなく、この段階には既に使用されていない可能性がある。むしろ、同サイズの食器類（例えばⅣ章Fig.59-381～383・387～389など）が、写真に掲載されているものである可能性が高い<sup>16)</sup>。ほかにも当時の建物の屋根を葺いていたと考えられる文字瓦が出土している（2006-2・2007-4地点）。当時の鹿児島では日置瓦が著名であるが、出土した刻印瓦は「柳川・武藤製」・「筑後・小宮製」・「筑後・大津製」となっており、福岡製である。県外商品が用いられることは、近代工業化された製品流通の性格を表すものであろう。また、2006-4地点でインキン・タムシの市販薬や医療薬瓶が出土していることは、高温多湿であったとされる寮生活<sup>17)</sup>の一端が垣間見える。個人を特定できる遺物としては、裏に旧制中学校と個人名のある硯が出土しており、高農時代のものではあったが、高農出身者ではなかった<sup>18)</sup>。

## 現代（鹿児島大学時代：昭和24年～現在）

ここでは、生協と農学部を食器を取り上げる。鹿児島大学では、昭和25年文理学部、昭和26年農学部設置された「厚生協同組合」が合併・改称し、昭和33年より法人化した「鹿児島大学生協同組合」となる。この「生協」の食器類が確認されている（2006-2・2006-4・2007-4地点）。また、農学部地点の過去の立会調査においても出土しており<sup>19)</sup>、大きく2分類可能である（Fig.108）。1類は白地に濃青色の「生協」

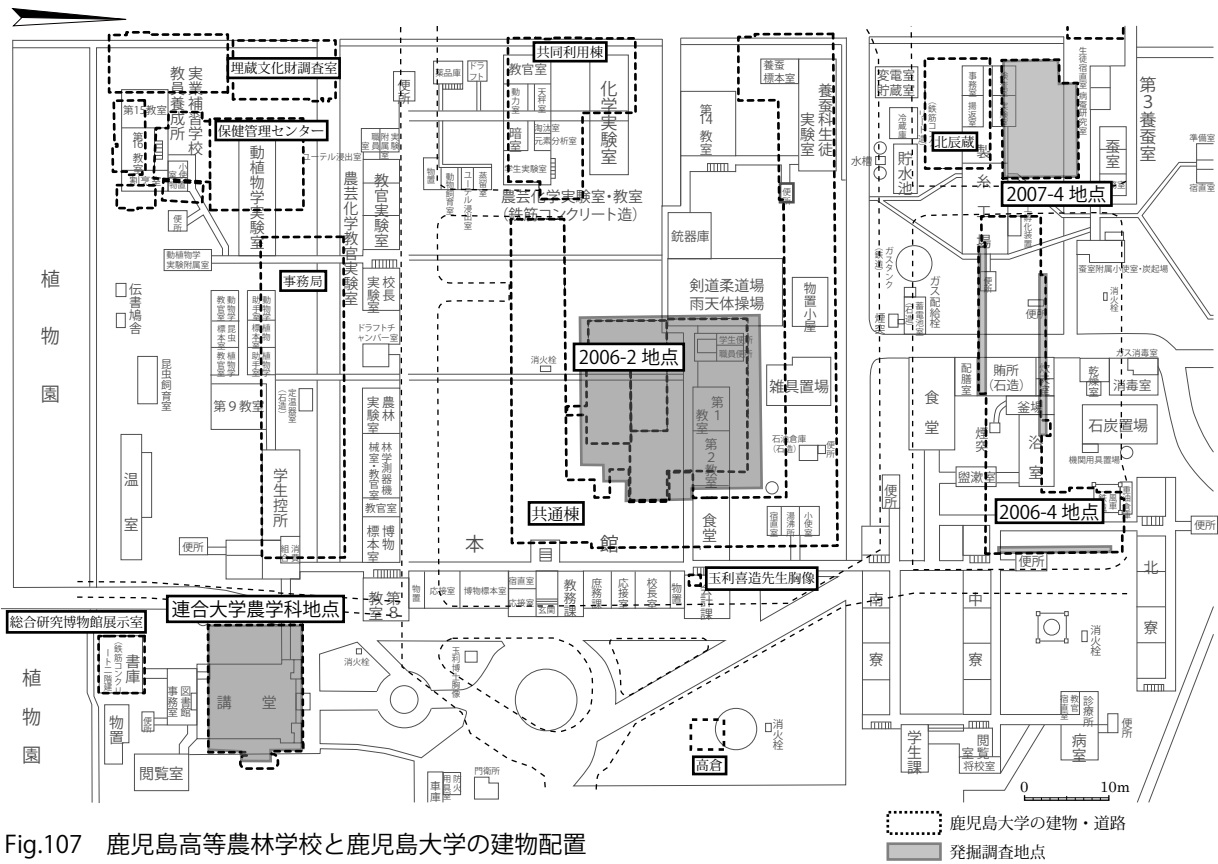


Fig.107 鹿児島高等農林学校と鹿児島大学の建物配置

スタンプがつくもので、湯飲み碗・丼碗・皿が得られている。2類は白地に口縁部に二条の緑色圈線が巡り、赤字で「生協」とスタンプされるものである。湯飲み碗・丼碗が得られている。単純から複雑への変化を想定すれば、1類→2類の変遷が想定される。1類は、高台外底面に、1cm大の低平な菱形内に「MINO」と書かれたスタンプ社章があり、「美濃窯業株式会社製陶部」(現・美濃窯業株式会社)製品であることが確認された。同社の商品カタログを見ると、昭和36年までは鹿児島大学は納品先に入っておらず、昭和40年ごろには鹿児島医学部とともに取引先のひとつとなっている<sup>20)</sup>。

農学部の湯飲み茶碗は、2006-2地点で出土しているが、噴煙を上げる桜島の上部に「大學」の文字、下部に「KAGOSIMA」と描かれた鹿児島大学の学章と、その反対面に「農学部」とスタンプのある茶碗である<sup>21)</sup>。学章は開学30周年で変更しているもので、昭和24年から昭和54年の30年間に発注されたものと考えられることができよう (Fig.109)。

以上に見てきたように、現・農学部の敷地内では、弥生時代には住居が営まれ、居住に適した比較的水はけの良い場所であったと想定される。しかしながら、古墳時代には湿地へと変化している。

中世には大規模な河川が流路を変えて農学部地点を流れており、近世には埋没する。近世以降には、水田

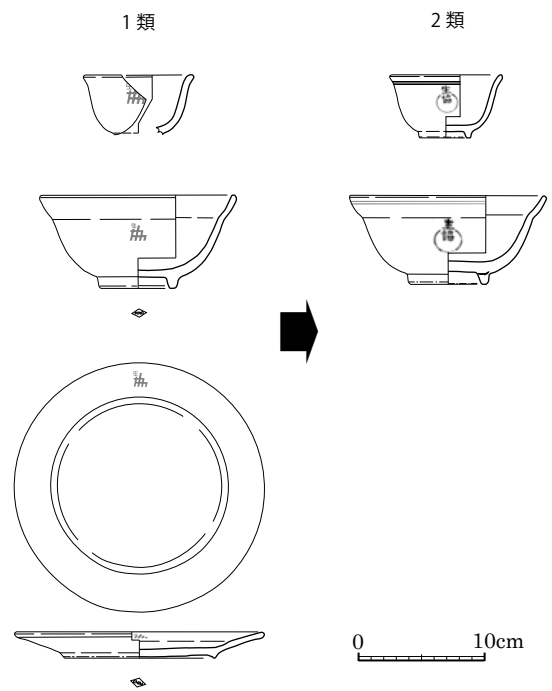


Fig.108 生協食器分類



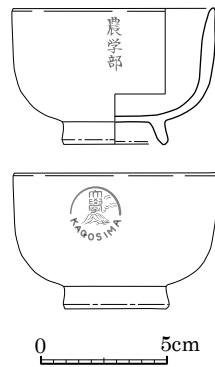


Fig.109 学章の変化と農学部茶碗

地帯として大規模な造成が行なわれ、生産地へと土地利用が変遷した。大畦付近に建てられた簡素な建物は、水田区画の測量場所が想定でき、軽石を含む水田は災害後の土地利用の様相が、そして主畦に直交する小畦（区画畦）の移動は、土地の移譲や作り変えのあったことを窺うことができる。平野部の乏しい鹿児島の農地利用の実態が明らかになっていくだろう。

国策のなかで南方開発の使命を帯びた農業専門学校として開校する鹿児島高等農林学校は、鹿児島県の農業教育の一端を担うとともに、第二次大戦時には、3度にわたる戦災を受けた教育施設としても注

目される。銘入りの食器などの遺物群は、当然ながら現・鹿児島大学内でしか出土しない遺物でもある。また、福岡製瓦を取り寄せていたことや、大学時代には食堂の食器を岐阜から取り寄せていたことなど、考古学的にしか分からない部分が多く、近代工業化された焼物の流通という側面を窺うことも可能である。

「鹿児島大学構内遺跡」は、先史時代の遺跡としても重要な側面を持っているが、農業教育施設の変遷を窺うことのできる重要な遺跡であり、ひいては鹿児島県域の農地開発の地域性を読み解く上でも重要な遺跡であるといえよう<sup>22)</sup>。今後、鹿児島大学構内遺跡は、近世以降の重要性も訴え、調査方法を検討していく必要があると考える。

註

- 1) 平成9年度郡元団地J・K-10・11区（工学部校舎）発掘調査（97-1）。未報告。
- 2) 大西智和・藤原宏志 1994『鹿児島大学構内遺跡郡元団地L-11・12区』鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 3) 前掲1) および、平成14年度郡元団地J・K-9・10区（理工系総合研究棟Ⅱ）発掘調査（2002-1）。未報告。ほかに小規模調査ではあるが、郡元団地K-9区（総合研究棟Ⅱ建設予定地）の試掘調査における分析結果がある（中村直子ほか 2003『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』17）
- 4) 中摩浩太郎 1998「南部九州弥生時代堅穴住居の分類」『人類史研究』10
- 5) 新里貴之・藤原宏志 2004『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』18
- 6) 平成15年度郡元団地H-12・13区（VBL棟）発掘調査（2002-2）。未報告。
- 7) 松永幸男・砂田光紀1990『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』V
- 8) 「鹿児島御城下明細図（1821〔文政4〕年）」「鹿児島城下絵図（1842〔天保13〕年頃）」「旧薩藩御城下絵図（1859〔安政6〕年）」など。塩屋郁夫編 2002『鹿児島城下絵図（文政・天保・安政）索引』を参考にした。
- 9) 鹿児島市区画整理課所蔵のS=1/1200図で、鴨池工区は、昭和21年着工、昭和34年工事完了、昭和50年に換地公告されている。なお、この図は「現況図」で、明治初期の地籍図を用いて筆数であらわしたものであり、精密な測量図とは異なる。
- 10) 前掲7)
- 11) 橋口亘 2002「鹿児島県地域における16～19世紀の陶磁器の出土様相」『鹿児島地域史研究』No.1  
渡辺芳郎 2007『薩摩川内市平佐焼窯跡群の考古学的研究』鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室
- 12) 前掲7)
- 13) 松永幸男・坪根伸也『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅲ  
中村直子 2006『鹿児島大学構内遺跡郡元団地H-9区』鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 14) 中村直子ほか 1995『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Ⅸ・Ⅹ
- 15) 国龍会本部 1909『西南記傳』中巻二  
加治木常樹 1912『薩南血涙史』薩南血涙史発行所  
陸上自衛隊北熊本修親会 1977『新編西南戦史』原書房  
Fig.106については、大日本帝国陸地測量部 1909「鹿児島（明治35年測図・明治38年製版五万分の一）地図」上に、上記文献を参考に図をプロットした。  
2006-2地点のスナイドル銃の弾丸については、西南戦争を記録する会の高橋信武氏に写真と実測図を送付し鑑定していただいた。弾丸を確実に同定はできないがとの前提で、薩軍が製造したスナイドル銃弾である可能性があるとのことご教示を賜った。同資料については、鹿児島市南州記念館にも多数所蔵されているのを確認した。
- 16) 農学部所蔵『開校二十五周年記念写真帖』（そのⅠ）掲載の食堂風景写真。また、農学部所蔵食器にFig.59-381・392と同文様の

皿があることから、高等農林学校時代のものである公算が高い。

- 17) 鹿児島大学農学部開学75周年記念事業実行会 1985 『「あらた」七拾五年の歩み』
- 18) 県立浜田高等学校よりご教示賜った。故・土田吾郎氏は大正7年に同旧制中学校を卒業しておられた。
- 19) 新里貴之ほか 2009 『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』 22・23
- 20) 美濃窯業株式会社 2002 『美濃窯業社史－1918～2002 83年の歩み』  
美濃窯業製陶株式会社 2006 『美濃窯業製陶株式会社社史－1919～2002 83年の歩み』
- 21) 前掲19)
- 22) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室・農学部 2001 『地中からみた農学部のあゆみ』 農学部開学100周年記念事業配布パンフレット

# 付編 1 2006-2 郡元団地D・E-5区農学部共通棟 発掘調査における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## I. 放射性炭素年代測定

### 1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去の大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度は一定ではなく、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した校正曲線により  $^{14}\text{C}$  年代から暦年代に換算する必要がある。

### 2. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	確認1トレ泥炭層 (9a層)	堆積物	acid washes	AMS
No.2	確認1トレ泥炭層 (9e層)	泥炭	acid/alkali/acid	AMS

acid/alkali/acid : 酸-アルカリ-酸洗浄, acid washes : 酸洗浄

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

### 3. 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	暦年代 Calendar Age ( $2\sigma$ : 95% 確率, $1\sigma$ : 68% 確率)
No. 1	227603	$3170 \pm 50$	-27.0	$3140 \pm 50$	交点 : Cal BC 1420 $2\sigma$ : Cal BC 1500-1310 $1\sigma$ : Cal BC 1450-1390
No. 2	227604	$3410 \pm 40$	-27.6	$3370 \pm 40$	交点 : Cal BC 1670 $2\sigma$ : Cal BC 1750-1530 $1\sigma$ : Cal BC 1730-1720, 1690-1620

BP : Before Physics (Present), Cal : Calibrated, BC : 紀元前, AD : 紀元後

#### (1) 未補正 $^{14}\text{C}$ 年代

試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。  $^{14}\text{C}$  の半減期は5730年とされているが、国際的慣例により Libby の5568年を用いて計算している。

#### (2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の  $\delta^{13}\text{C}$  値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

#### (3) $^{14}\text{C}$ 年代

$\delta^{13}\text{C}$  測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

#### (4) 暦年代 (Calendar Age)

$^{14}\text{C}$ 年代を実際の年代(暦年代)に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動および $^{14}\text{C}$ の半減期の違いを較正する必要がある。較正には、年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値およびサングのU/Th(ウラン/トリウム)年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。IntCal04ではBC24050年までの換算が可能である(樹木年輪データはBC10450年まで)。

暦年代の交点は、 $^{14}\text{C}$ 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を示し、 $1\sigma$ (68%確率)と $2\sigma$ (95%確率)は、 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の $1\sigma$ ・ $2\sigma$ 値が表記される場合もある。

## 4. 所見

加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定の結果、9a層では $3140 \pm 50$ 年BP( $2\sigma$ の暦年代でBC1500~1310年)、9e層では $3370 \pm 40$ 年BP(同BC1750~1530年)の年代値が得られた。

## 文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

尾崎大真(2005)INTCAL98からIntCal04へ。学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo3-炭素年代測定による高精度編年体系の構築-, p.14-15.

中村俊夫(1999)放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院, p.1-36.

# CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27;lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-227603**

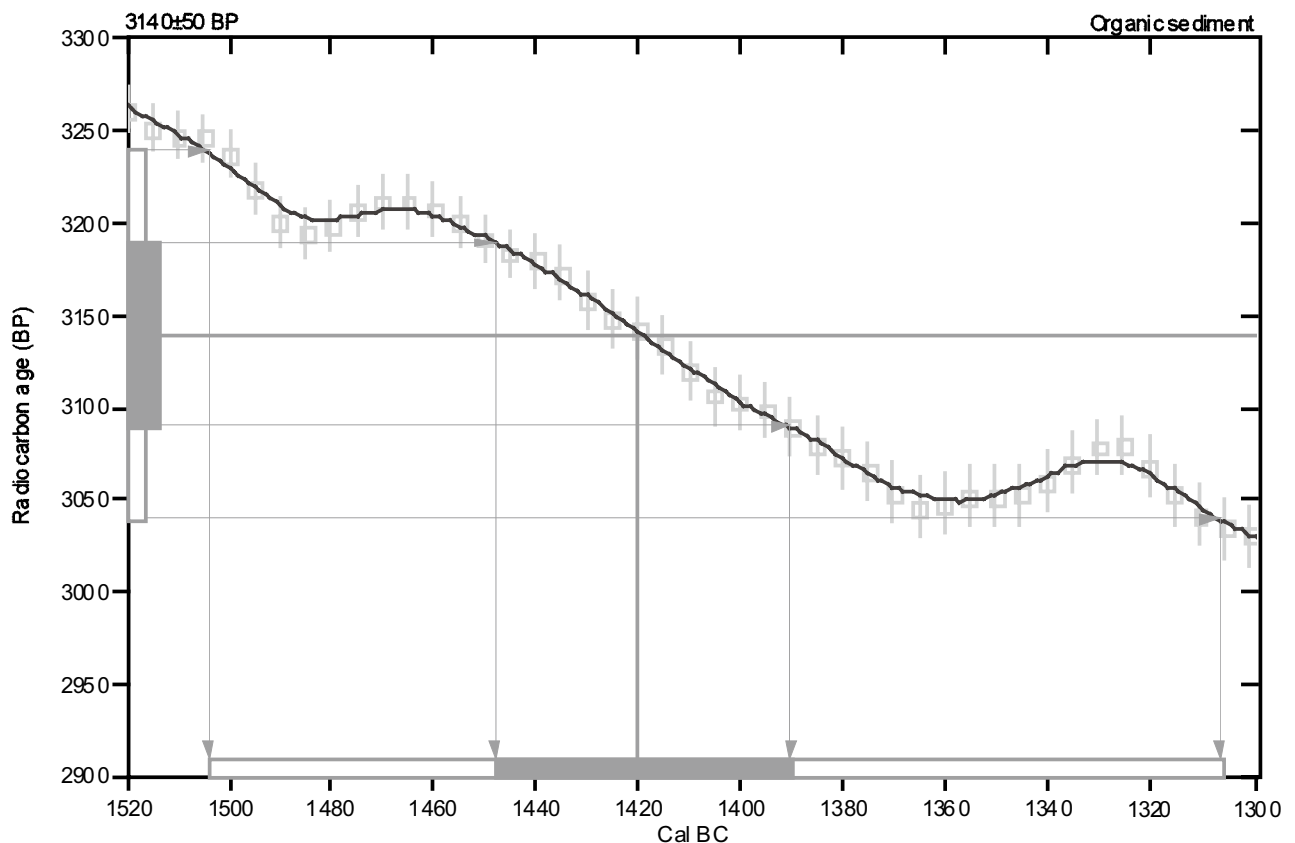
Conventional radiocarbon age: **3140±50 BP**

**2 Sigma calibrated result: Cal BC 1500 to 1310 (Cal BP 3450 to 3260)**  
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: **Cal BC 1420 (Cal BP 3370)**

**1 Sigma calibrated result: Cal BC 1450 to 1390 (Cal BP 3400 to 3340)**  
(68% probability)



## References:

### Database used

*INTCAL04*

### Calibration Database

*INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration*

*IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).*

### Mathematics

*A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates*

*Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322*

## Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: [beta@radiocarbon.com](mailto:beta@radiocarbon.com)

# CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.6:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-227604**

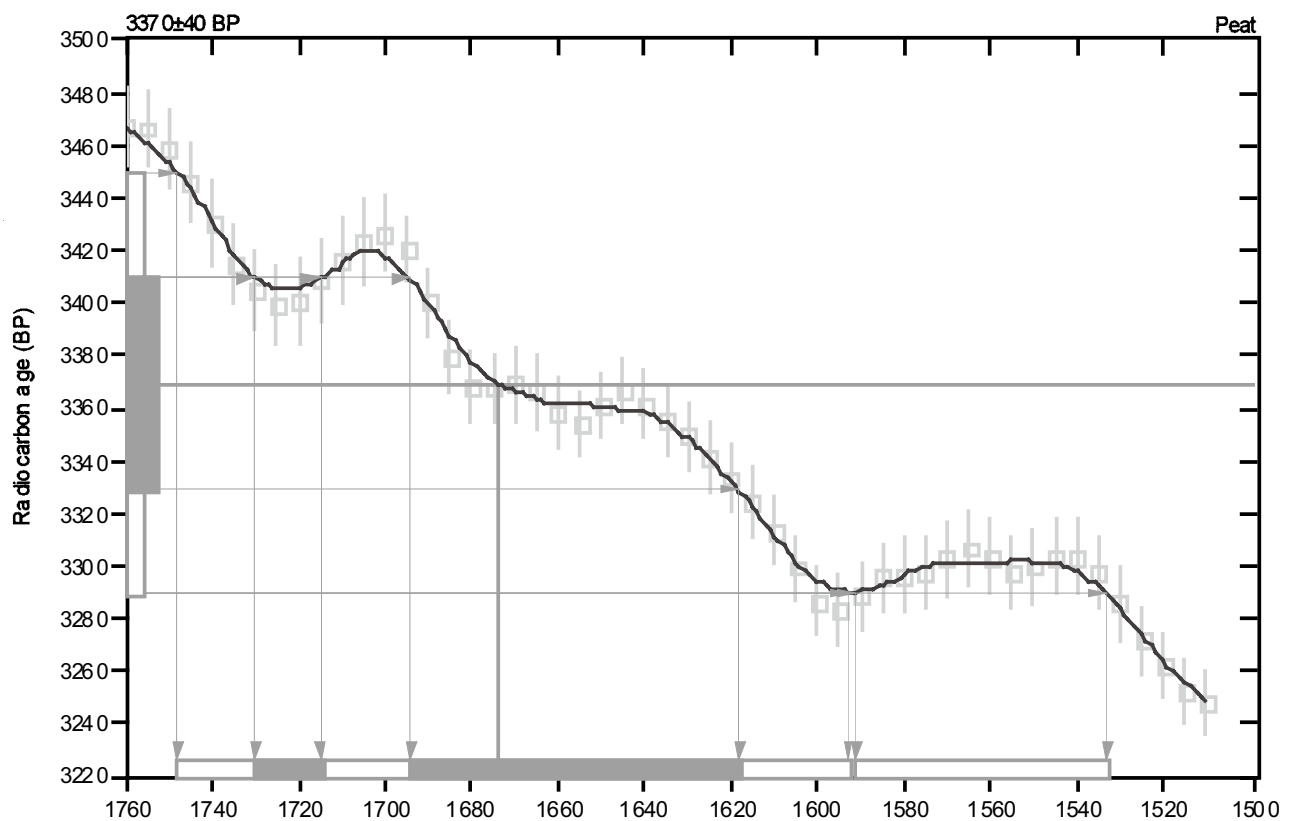
Conventional radiocarbon age: **3370±40 BP**

2 Sigma calibrated results: **Cal BC 1750 to 1590 (Cal BP 3700 to 3540) and  
(95% probability) Cal BC 1590 to 1530 (Cal BP 3540 to 3480)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: **Cal BC 1670 (Cal BP 3620)**

1 Sigma calibrated results: **Cal BC 1730 to 1720 (Cal BP 3680 to 3660) and  
(68% probability) Cal BC 1690 to 1620 (Cal BP 3640 to 3570)**



## References:

*Database used*

*INTCAL04*

*Calibration Database*

*INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration*

*IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).*

*Mathematics*

*A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates*

*Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p31 7-3 22*

## Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: [beta@radiocarbon.com](mailto:beta@radiocarbon.com)





Beta Analytic Inc.  
 4985 SW 74 Court  
 Miami, Florida 33155 USA  
 Tel: 305 667 5167  
 Fax: 305 663 0964  
 Beta@radiocarbon.com  
 Www.radiocarbon.com

Mr. Darden Hood  
 Director

Mr. Ronald Hatfield  
 Mr. Christopher Patrick  
 Deputy Directors

*Consistent Accuracy...  
 Delivered On Time.*

**Quality Assurance Report**

This report provides the results of reference materials used to validate radiocarbon dating results on unknown materials, prior to reporting. Known age reference materials were analyzed as QA measurements to verify the accuracy of the results. These are analyzed in multiple detectors. To test accuracy, the "blind sample" was measured in TWO separate detectors without the engineers knowing the age. This report quotes the results of the QA measurements.

Report Date: March 20, 2007  
 Submitter: Mr. Kazumi Asai / Mr. Sumihisa Matsuyama  
 Sample: Beta-227603, 227604, 228485

**QA MEASUREMENTS**

TIRI wood standard (international standard)

Expected value: 4500 +/- 50 BP  
 Measured value: 4490 +/- 40 BP  
 Agreement: accepted

TIRI carbonate standard (international standard)

Expected value: 18160 +/- 100 BP  
 Measured value: 18130 +/- 90 BP  
 Agreement: accepted

Blind sample

Known age: 890 +/- 40 BP  
 AMS age: 840 +/- 40 BP  
 Agreement: accepted

Background signal

Expected value: greater than 39000 BP  
 Measured value: 40410 +/- 230 BP  
 Agreement: accepted

COMMENT: All standards were within accepted ranges. (TIRI stands for Third International Radiocarbon Inter-comparison. This material has a very well known age.) The "Blind sample" is a sample that was measured at least twice in a detector at different times.

Validation: *Darden Hood*

Date: March 20, 2007

## Ⅱ. 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山1984）。

### 2. 試料

分析試料は、西壁63地点の2a層から4c層、確認トレンチ①の6c・8c層までの層準から採取された試料1～試料9、およびSK21の③層から採取された試料10の計10点である。

### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40  $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20  $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{g}$ ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

### 4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

[イネ科－タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

[イネ科－その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

## 5. 考察

### (1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

#### 1) 西壁63地点・確認トレンチ①

2層（試料1）から8c層（試料9）までの層準について分析を行った。その結果、2層（試料1）から4c層（試料7）までの各層からイネが検出された。このうち、4a層（試料5）、4b層（試料6）、4c層（試料7）では、密度が19,000個/g、22,000個/g、15,300個/gとかなり高い値であり、2層（試料1）と3a層（試料2）でも5,700個/gおよび8,600個/gと高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

3a'層（試料3）と3b層（試料4）では、密度が2,200個/gおよび700個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

#### 2) SK21

③層（試料10）について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

### (2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、今回の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類（穎の表皮細胞）が検出されたのは、西壁63地点の4b層（試料6）である。密度は700個/gと低い値であるが、穎（籾殻）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

### (3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。西壁63地点の8c層では、ヨシ属、ウシクサ族A、および樹木のブナ科（シイ属）などが検出されたが、いずれも少量である。6c層では樹木のブナ科（シイ属）が増加し、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）なども出現している。4c層から4a層にかけては、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、およびブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などが検出されたが、いずれも少量である。3b層より上位でも、おおむね同様の結果であるが、ヨシ属は見られなくなっている。おもな分類群の推

定生産量によると、8c層ではヨシ属が優勢であり、4c層より上位（3c層、3b層を除く）ではイネが卓越している。

以上の結果から、稲作が開始される以前の調査区周辺は、部分的にヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、4c層より上位層の時期にはおおむね継続して稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育しており、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

## 6. まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、2層、3a層、4a層～4c層の各層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、3a'層と3b層でも稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、4b層ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

稲作が開始される以前の調査区周辺は、部分的にヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、4c層より上位層の時期にはおおむね継続して稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育しており、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

## 文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究、38(2)、p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社、p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9、p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学、17、p.73-85.

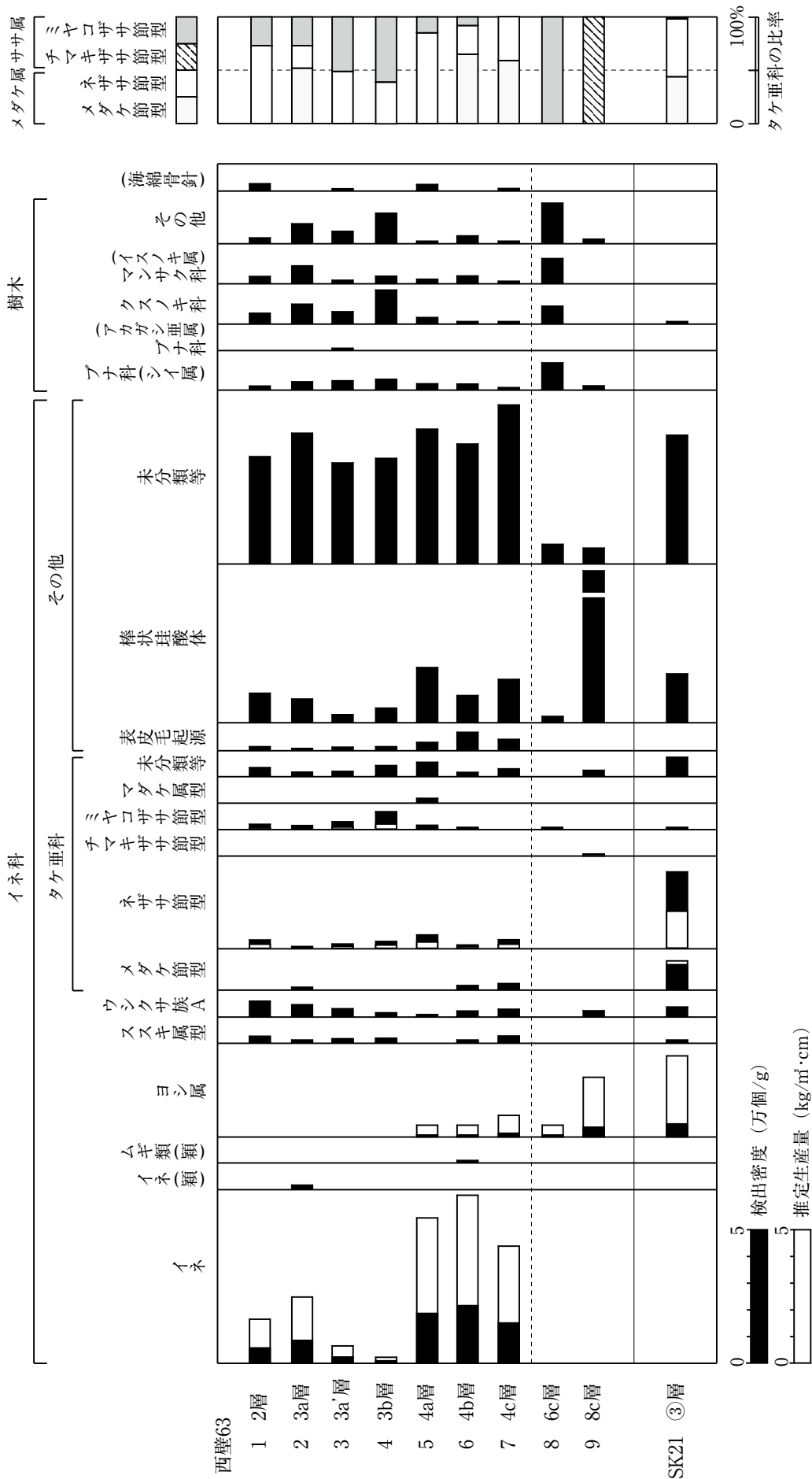


図1 鹿児島大学構内遺跡における植物珪酸体分析結果

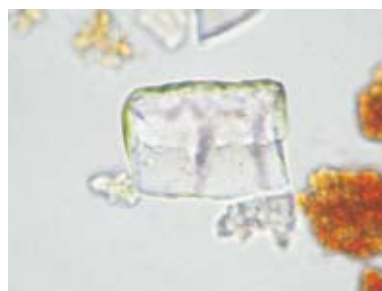
鹿児島大学構内遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）



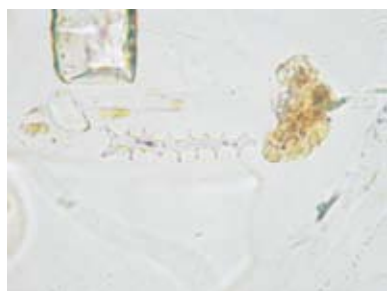
イネ



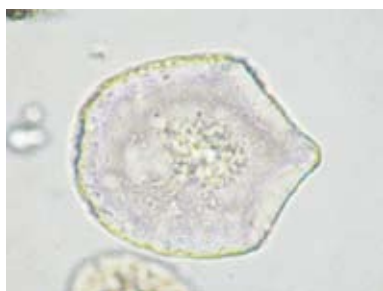
イネ



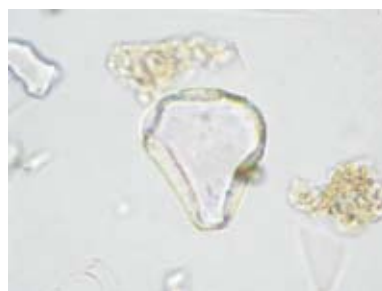
イネ(側面)



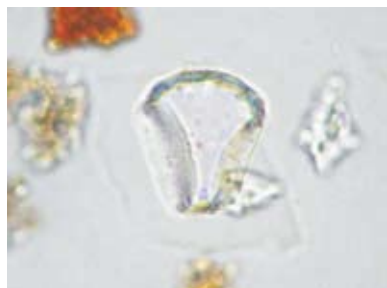
ムギ類(穎の表皮細胞)



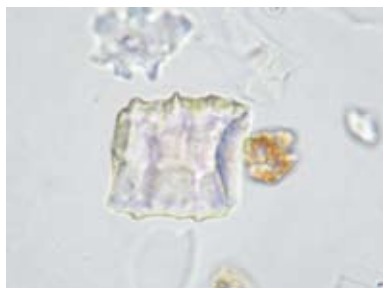
ヨシ属



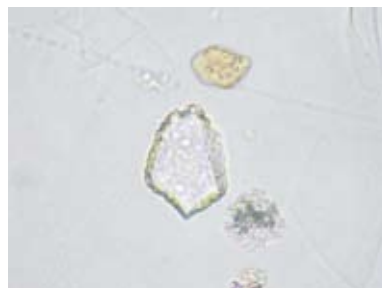
ススキ属型



メダケ節型



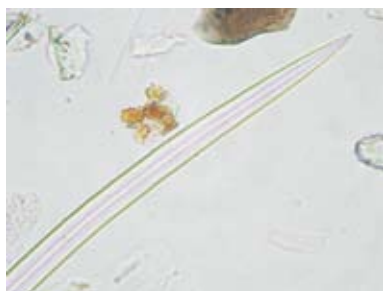
ネザサ節型



ミヤコザサ節型



棒状珪酸体



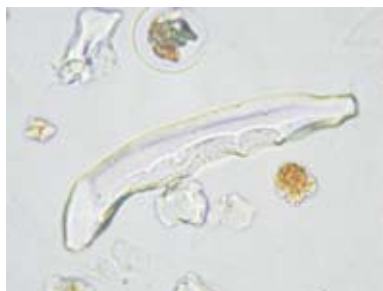
海綿骨針



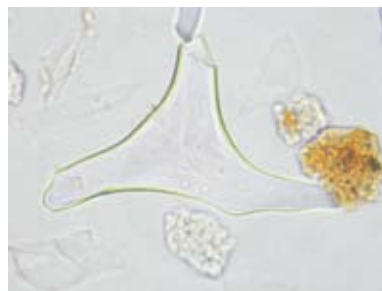
ブナ科(シイ属)



ブナ科(アカガシ亜属)



クスノキ科



マンサク科(イスノキ属)

50 μ m

### Ⅲ. 花粉分析および寄生虫卵分析

#### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

#### 2. 試料

分析試料は、SK40の⑫層から採取された試料11（灰褐色シルト）およびSK41の⑫層から採取された試料12（灰褐色微砂）の2点である。

#### 3. 方法

花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) サンプルを採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸を加えて30分静置
- 5) 遠心分離（1500rpm, 2分間）による水洗の後にサンプルを2分割
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

#### 4. 結果

##### (1) 分類群

花粉分析で検出された分類群は、樹木花粉7、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉14、シダ植物胞子2形態の計24であり、寄生虫卵分析では3分類群である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クリ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

マメ科



#### 〔草本花粉〕

イネ科, イネ属型, カヤツリグサ科, ホシクサ属, タデ属サナエタデ節, ソバ属, アカザ科-ヒユ科, ナデシコ科, アブラナ科, チドメグサ亜科, セリ亜科, タンポポ亜科, キク亜科, ヨモギ属

#### 〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子, 三条溝孢子

#### 〔寄生虫卵〕

回虫卵, 鞭虫卵, 不明虫卵

### (2) 花粉群集の特徴

#### 1) SK40

⑫層(試料11)では, 草本花粉の占める割合が極めて高い。草本花粉では, イネ科(イネ属型を含む)が卓越し, カヤツリグサ科, アブラナ科, ヨモギ属, キク亜科, タンポポ亜科などが伴われる。また, 低率ながらソバ属も認められた。樹木花粉では, マツ属単維管束亜属, コナラ属アカガシ亜属などが検出されたが, いずれも少量である。寄生虫卵分析では, 回虫卵, 鞭虫卵, 不明虫卵が検出されたが, いずれも少量である。なお, 明らかな消化残渣は認められなかった。

#### 2) SK41

⑫層(試料12)では, マツ属単維管束亜属, スギ, アブラナ科などが検出されたが, いずれも少量である。なお, 寄生虫卵および明らかな消化残渣は認められなかった。

## 5. 考察

### (1) SK40

⑫層の堆積当時は, おもに水田稲作が行われていたと考えられ, 部分的にソバ属やアブラナ科などの畑作が行われていた可能性も認められた。当時の調査区周辺は, イネ科を主体としてカヤツリグサ科, ヨモギ属, キク亜科, タンポポ亜科なども生育する草原的な環境であったと考えられ, 周辺地域にはマツ類(マツ属単維管束亜属)やカシ類(コナラ属アカガシ亜属)などが分布していたと推定される。

寄生虫卵分析では, 回虫卵, 鞭虫卵, 不明虫卵が検出されたが, いずれも低密度であることから, 集落周辺における通常の生活汚染程度と考えられる。回虫と鞭虫は, 中間宿主を必要とせず, 虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。寄生虫に起因する回虫症や鞭虫症は, 腹痛を主とする消化器病症がおこり, 多数寄生の場合は症状が重い。

### (2) SK41

⑫層では, 花粉がほとんど検出されないことから, 植生や環境の推定は困難である。花粉が検出されない原因としては, 乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことや, 水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。

## 文献

中村純(1973)花粉分析. 古今書院, p.82-110.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

中村純(1974)イネ科花粉について, とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純(1977)稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard(1992)Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

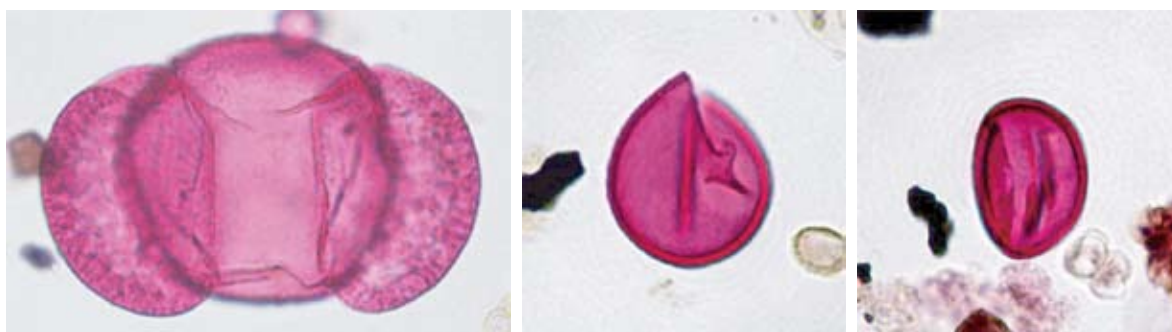
金原正明・金原正子(1992)花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊-, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.  
金原正明（1999）寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

表1 鹿児島大学構内遺跡における花粉・寄生虫卵分析結果

分類群		SK40(⑫層)	SK41(⑫層)
学名	和名		
Arboreal pollen	樹木花粉		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	11	1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1	
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属	4	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	8	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Leguminosae	マメ科	4	
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科	242	
<i>Oryza type</i>	イネ属型	52	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	51	
<i>Eriocaulon</i>	ホシクサ属	1	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	
Cruciferae	アブラナ科	30	3
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	4	
Apioideae	セリ亜科	1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	5	
Asteroidaeae	キク亜科	13	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	21	
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	8	1
Trilate type spore	三条溝胞子	4	
Arboreal pollen	樹木花粉	27	3
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	4	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	424	3
Total pollen	花粉総数	455	6
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	5.8	4.2
		×10 <sup>4</sup>	×10
Unknown pollen	未同定花粉	10	0
Fern spore	シダ植物胞子	12	1
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(-)
Helminth eggs	寄生虫卵		
<i>Ascaris(lumbricoides)</i>	回虫卵	6	
<i>Trichuris(trichiura)</i>	鞭虫卵	1	
Unknown eggs	不明虫卵	1	
Total	計	8	0
Helminth eggs frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度	5.6	0.0
		×10	
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)

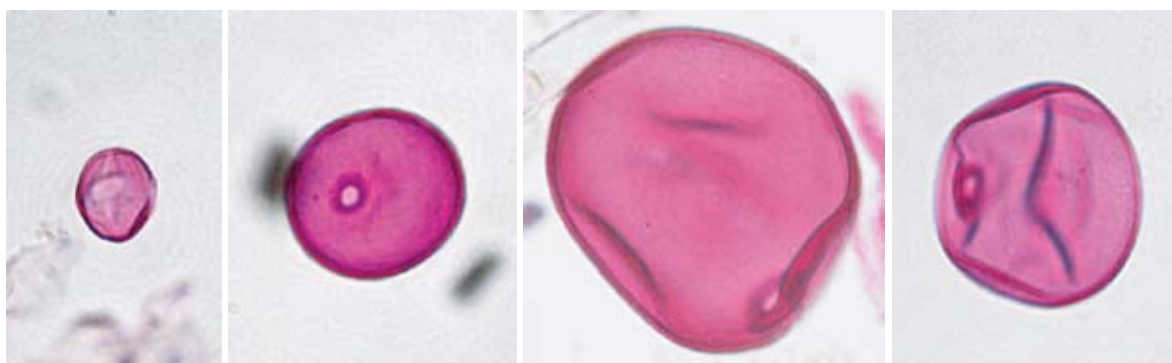




1 マツ属複維管束胚属

2 スギ

3 コナラ属アカガシ胚属

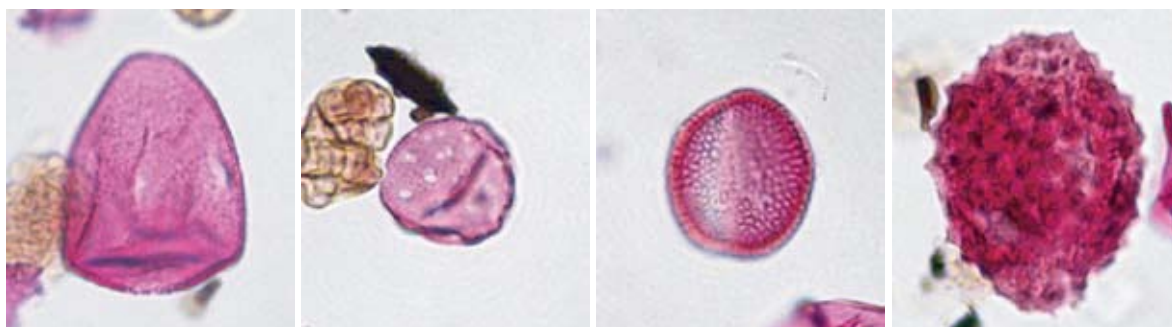


4 マメ科

5 イネ科

6 イネ科

7 イネ属型

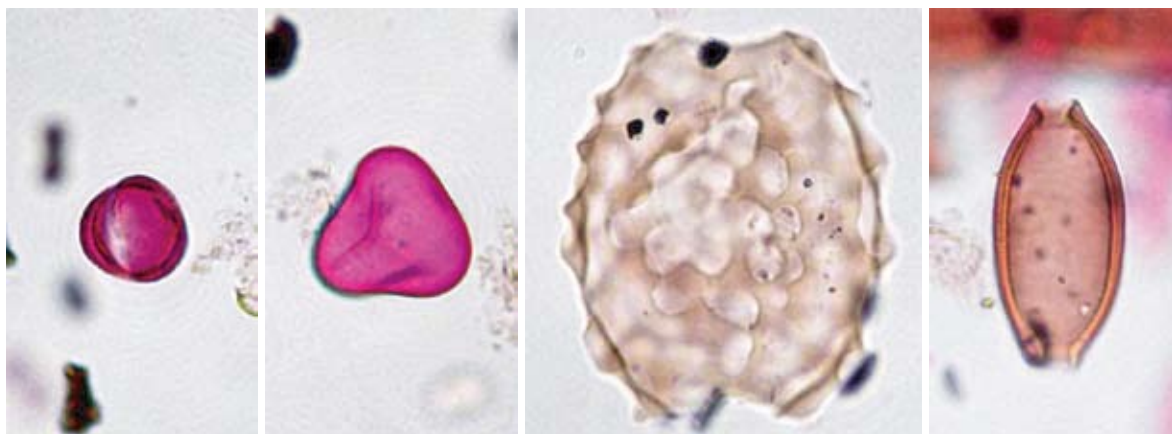


8 カヤツリグサ科

9 アカザ科-ヒユ科

10 アブラナ科

11 キク亜科



12 ヨモギ属

13 シダ植物  
三条溝孢子

14 回虫卵

15 鞭虫卵

— 10 μm

# 付編2 2007-4 郡元団地C-6区農学部附属病院軽種馬 診療センター発掘調査における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

## 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山1984)。

## 2. 試料

分析試料は、郡元団地C-6区 (農学部附属病院軽種馬診療センター新営) において、近世～近代の水田層とみられる土層から採取された計10試料である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

## 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40  $\mu\text{m}$  のガラスビーズを約0.02g添加 (0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20  $\mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位:  $10^{-5}\text{g}$ ) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

## 4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ, イネ (穎の表皮細胞由来), ヨシ属, シバ属, キビ族型, ススキ属型 (おもにススキ属), ウシクサ族A (チガヤ属など)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節, ヤダケ属), ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節), チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など), ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節)

など), マダケ属型 (マダケ属, ホウライチク属), 未分類等  
〔イネ科-その他〕

表皮毛起源, 棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来), 未分類等  
〔樹木〕

ブナ科 (シイ属), クスノキ科, マンサク科 (イスノキ属), アワブキ科, その他

## 5. 考察

### (1) 稲作跡の検討

水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合, 一般にイネの植物珪酸体 (プラント・オパール) が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に, そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している (杉山2000)。なお, 密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから, ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

郡元団地C-6区では, 2c層 (試料4) から畦AZ7 (試料20) までの層準から採取された計10試料について分析を行った。その結果, 3c層 (試料7) を除く9試料からイネが検出された。このうち, 7c層 (試料12) と8b層 (試料14) では密度が10,700個/gおよび13,500個/gとかなり高い値であり, 2c層 (試料4), 8a層 (試料13), 10c層 (試料19) でも5,000~7,100個/gと高い値である。したがって, これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では, 密度が700~2,100個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては, 稲作が行われていた期間が短かったこと, 土層の堆積速度が速かったこと, 採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと, および上層や他所からの混入などが考えられる。

### (2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには, イネ以外にもムギ類, ヒエ属型 (ヒエが含まれる), エノコログサ属型 (アワが含まれる), キビ属型 (キビが含まれる), ジュズダマ属 (ハトムギが含まれる), オヒシバ属 (シコクビエが含まれる), モロコシ属型, トウモロコシ属型などがあるが, これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため, その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお, 植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため, 根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

### (3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では, 全体的にススキ属型, ウシクサ族A, ネザサ節型, ミヤコザサ節型などが検出され, 部分的にヨシ属, キビ族型, メダケ節型, マダケ属型なども認められたが, いずれも比較的少量である。また, 樹木 (照葉樹) のブナ科 (シイ属), クスノキ科, マンサク科 (イスノキ属) なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると, 2c層, 7c層~8b層, 10c層ではイネが優勢となっており, 8a層ではヨシ属もやや多くなっている。

以上の結果から, 各層準の堆積当時は, ススキ属やチガヤ属, キビ族, 笹類などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ, 8a層などではヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと推定される。また, 遺跡周辺にはシイ属, クスノキ科, イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

## 6. まとめ

植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析の結果, 2c層, 7c層, 8a層, 8b層, 10c層の各層準では, イネが



多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、3c層を除くその他の層準でも、少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

各層準の堆積当時は、ススキ属やチガヤ属、キジ族、笹類などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

## 文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学, 19, p.69-84.
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究. 38(2), p.109-123.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表 1 鹿児島大学構内遺跡：郡元団地C-6区における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位：×100個/g)		地点・試料									
分類群	学名	2c層	3b層	3c層	4b層	7c層	8a層	8b層	9層	10c層	AZ7
イネ科	Gramineae										
イネ	<i>Oryza sativa</i>	54	21	7	107	50	135	14	71	14	
イネ初殻 (穎の表皮細胞)	<i>Oryza sativa</i> (husk Phytolith)			7	14		7				
ヨシ属	<i>Phragmites</i>				14						
シバ属	<i>Zoysia</i>	7				7					
キビ族型	Panicaceae type	7	14	7		7	7		7		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	7	28	14	33	21	13	14	35		
ウシクサ族 A	Andropogoneae A type	20	7	14	26	28	43	35	43	7	
タケ亜科	Bambusoideae										
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nipponocalamus	7	14	7	21	7	27				
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nezasa	7	7	20	21	29	20			7	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	40	21	98	33	21	43	7	21	21	
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>	7		7		7					
未分類等	Others	27	21	28	7	22	20	28	14	14	
その他のイネ科	Others										
表皮毛起源	Husk hair origin	27	7	21	33	21	47	7	21		
棒状珪酸体	Rod-shaped	47	21	105	78	28	81	28	78	21	
未分類等	Others	107	35	70	59	142	50	47	63	21	
樹木起源	Arboreal										
ブナ科 (シイ属)	<i>Castanopsis</i>	13	14	7	20	21	22	20	28	43	
クスノキ科	Lauraceae	13	35	91	39	28	43	61	28	21	
マンサク科 (イスノキ属)	<i>Distylium</i>	27	28	77	39	7	22	20	56	14	
アワブキ科	Sabiaceae	7		7				13	7	7	
その他	Others	20	69	119	52	21	43	81	77	21	
(海綿骨針)	Sponge spicules	7					7	13			
植物珪酸体総数	Total	430	333	681	463	554	548	660	401	511	205
おもな分類群の推定生産量 (単位：kg/m <sup>2</sup> ・cm)：試料の反比重を1.0と仮定して算出											
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.38	0.61	0.19	3.13	1.48	3.96	0.41	2.09	0.42	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>				0.90	0.45	0.42				
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.08	0.34	0.17	0.40	0.26	0.17	0.17	0.44		
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nipponocalamus		0.08	0.16	0.08	0.25	0.08	0.31			
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nezasa		0.03	0.03	0.09	0.10	0.14	0.10		0.03	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.12	0.06	0.29	0.10	0.06	0.13	0.02	0.06	0.06	
タケ亜科の比率 (%)											
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nipponocalamus	46	33	28	60	24	73				
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. Nezasa	19	7	35	25	39	23			35	
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	35	60	37	15	37	5	100	100	65	
メダケ率	Medake ratio	0	65	40	63	85	95	0	0	35	

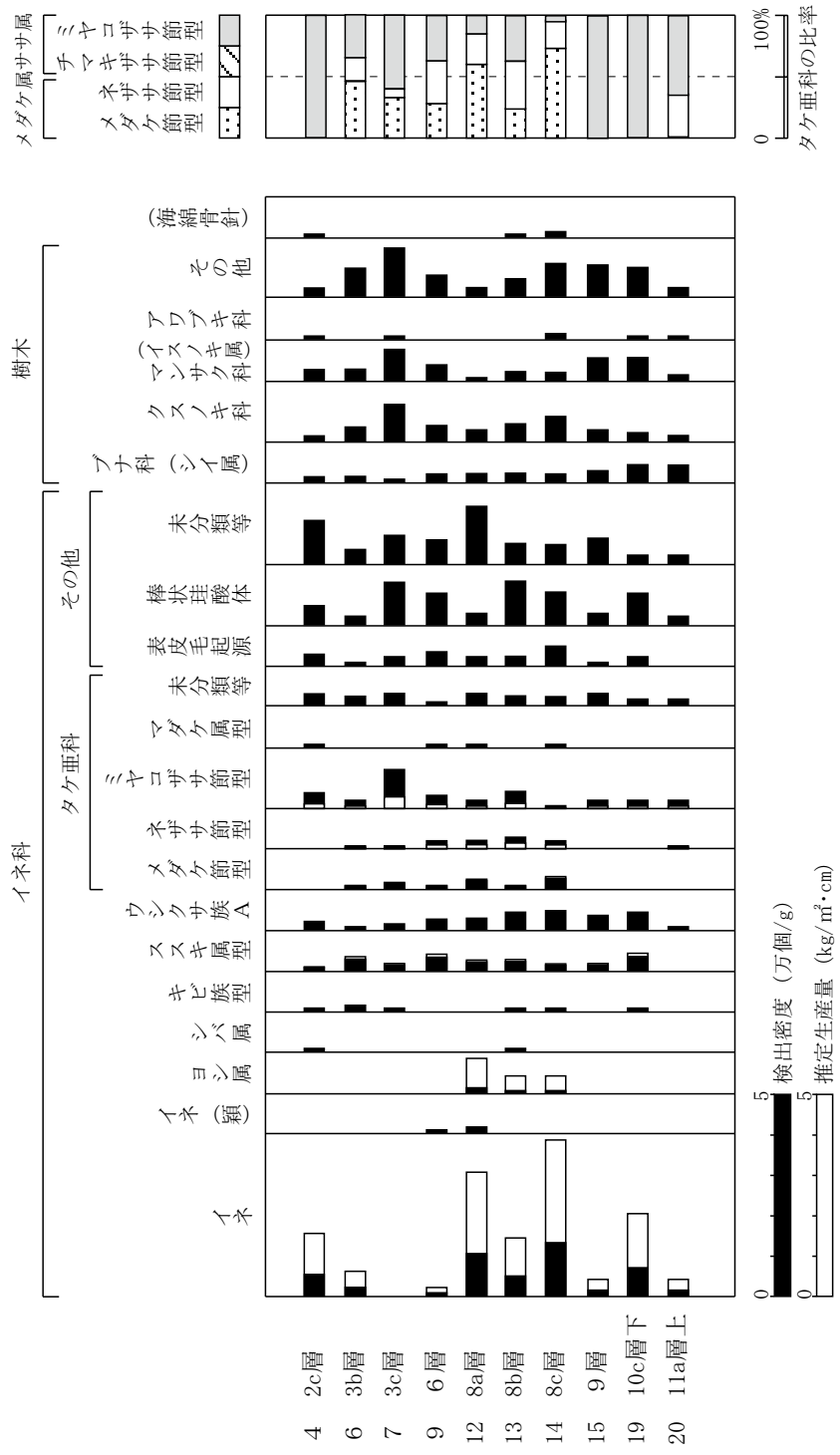
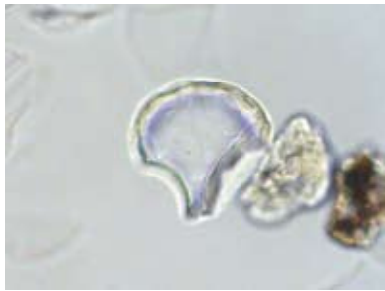
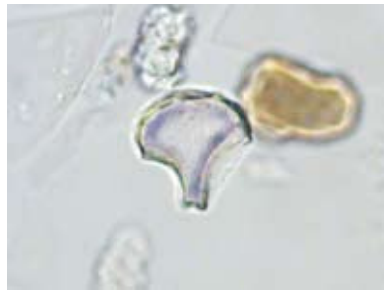


図1 鹿児島大学構内遺跡：郡元団地C-6区における植物珪酸体分析結果

郡元団地C-6区の植物珪酸体（プラント・オパール）



イネ



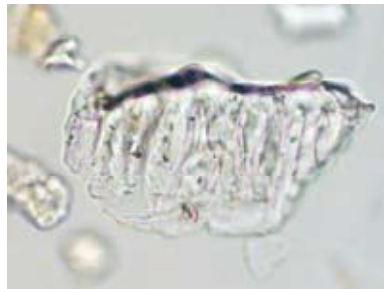
イネ



イネ（側面）



イネの籾殻（穎の表皮細胞）



イネの籾殻（穎の表皮細胞）



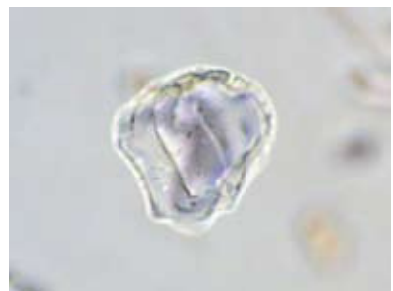
ヨシ属



ススキ属型



メダケ節型



ネザサ節型



ミヤコザサ節型



表皮毛起源



ブナ科（シイ属）



クスノキ科



マンサク科（イスノキ属）



アワブキ科

— 50 μ m

# 付編3 鹿児島大学構内遺跡郡元団地出土の横刃形石器の使用痕分析

寒川 朋枝

鹿児島大学構内遺跡郡元団地出土の石器2点の使用痕分析を行った。出土地点は異なっているが、2点とも板状の安山岩を素材とした横刃状の剥片石器であり、鋭い側縁を利用して刃部とする。

## 1. 分析方法

使用痕分析は、ルーペ・実体顕微鏡を用い10~50倍で観察を行ったのち、金属顕微鏡（Nikon ECRIPISE L150, BUEHLERメタルスコープ ViewMet）を用い、100~200倍での観察を行った。資料は観察前にエタノールを含ませた脱脂綿で拭き取った上、観察を行った。観察項目は、使用痕光沢面・微小剥離痕・線状痕に着目した。特に、使用痕光沢面の分布については、その発達程度（強：Aタイプの光沢面が肉眼で確認できる範囲、弱：100倍で確認できるA・Bタイプ光沢面<sup>1)</sup>が密に分布する範囲）を図に示した<sup>2)</sup>。ただし、その分布範囲の境界は明瞭に分かれているわけではなく、漸移的である。

## 2. 結果

a. 2006-2 取上げNo.1225 (Fig.44-328) は、郡元団地D・E-5区農学部1号館改修工事に伴う発掘調査において、弥生時代中期土器を包含する住居SK21埋土より出土した石器である。最大長13.8cm, 最大幅6cm, 刃部長13.5cm, 最大厚3.5cmである<sup>3)</sup>。刃部平面形態は凹刃で刃部がゆるやかにカーブし、鎌身に類似する。刃角は35~62度で両刃であり、二次加工は認められない。上側縁は腹面側に部分的に微小剥離痕がみられる。刃部付近は両面とも光沢面が観察される。左右側面は折れ面であり一部欠損している可能性があるが、光沢面が広く認められるのは刃部中心部であり、対象物は主に刃部中心に接触していたと考えられる。

図1-2~6はA・Bタイプ光沢である。線状痕は刃部平行方向ないしやや斜方向に認められるものが多い(図1-4・5)。

b. 2001-2 取上げNo.1547は、郡元団地I・J-7・8区理学部改修に伴う発掘調査において、土坑SK2aより出土している。土坑の年代は不明であるが、本調査区では土坑SK2a近辺より入来I式土器が出土した溝状遺構や古墳時代の集落が検出されており、No.1547剥片石器も弥生時代中期前半もしくは古墳時代に該当する資料と思われる。最大長・刃部長は16cm, 最大幅6.2cm, 最大厚1cmである。刃部平面形は直線刃で、刃角は30~34度、部分的に微小剥離痕が認められ、推定縁辺角13~15度である。上側縁と左側縁上部が欠損しているが、刃部の使用範囲から考えても刃部はほぼこの長さであったと考えられる。

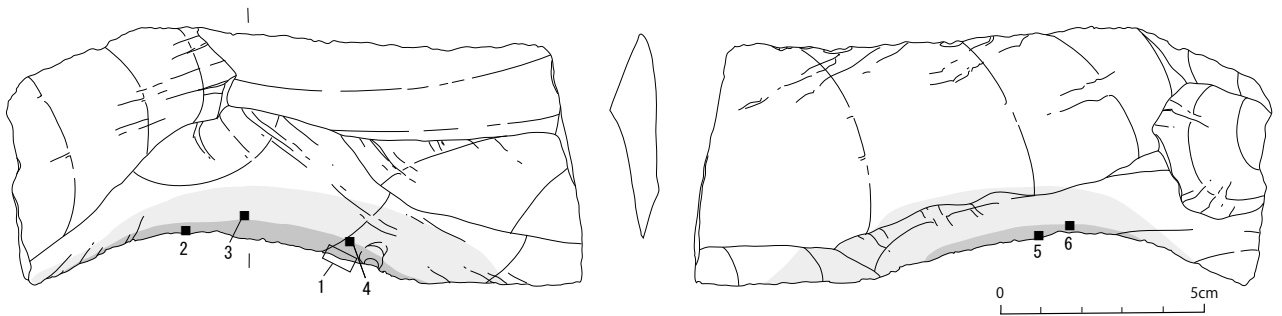
刃部縁辺中央付近は肉眼でも光沢のある滑らかな面が確認できる。図2-2・3はAタイプ光沢であり、平行方向の線状痕も認められる。図2-4はBタイプ光沢である。

## 3. まとめ

観察を行った2点の石器に認められる蠟を薄く塗りつけたような光沢<sup>4)</sup>は、いわゆる「ロー状光沢」と呼ばれ、コーングロスパッチの集合体であり(町田2002)、発達したAタイプ光沢面である(御堂島1989)。一方、磨製石包丁にはBタイプ光沢は認められるものの、ロー状光沢は認められず、これは「摘み取り」という使用法・操作法に起因すると指摘されている(町田2002)。

今回観察を行った石器の使用痕は、刃縁中心部で最も明瞭に光沢が認められ、表裏面ともに刃部中心部より光沢面が広がる。線状痕は、刃部と平行または斜方向のものが主に認められた。また、使用痕の範囲が刃部を中心に内側に広く広がるという状況からも、草本類の株などの厚みのある植物に対して、刃部に平行方向に石器を動かすという、いわゆる「刈り取り」の作業が行なわれたことが推定される。





(濃いトーンは肉眼、薄いトーンは顕微鏡観察による使用痕)

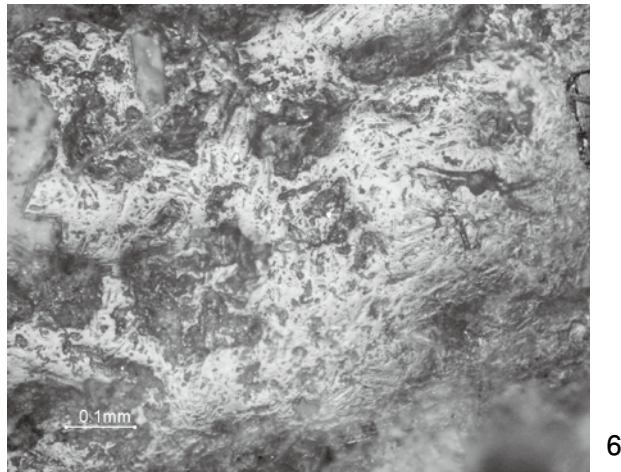
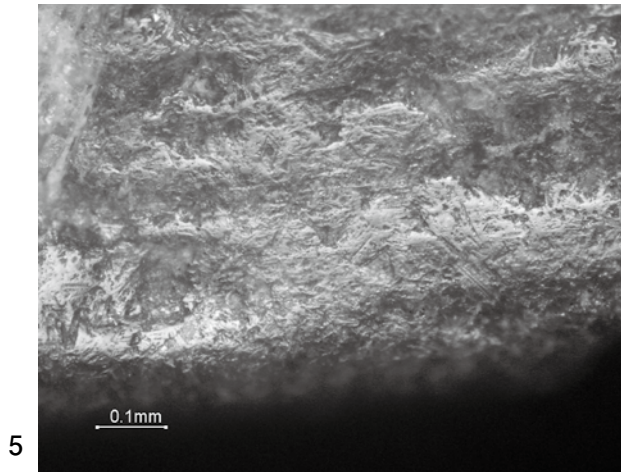
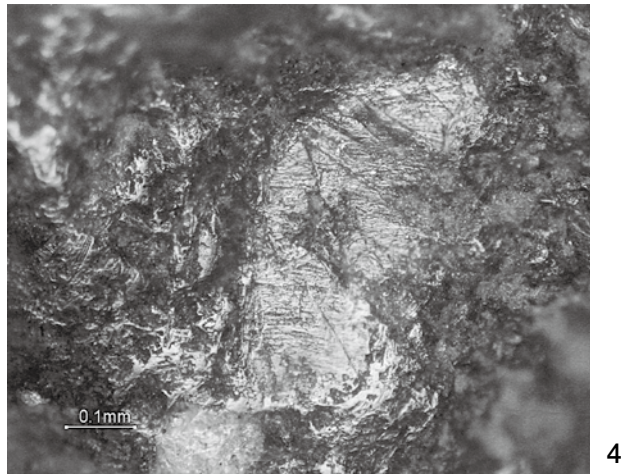
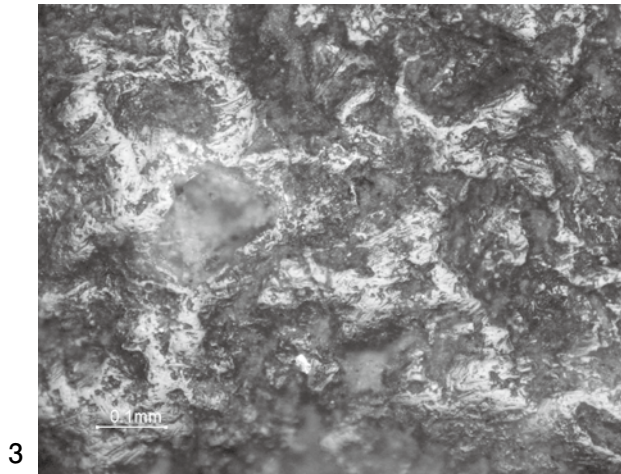
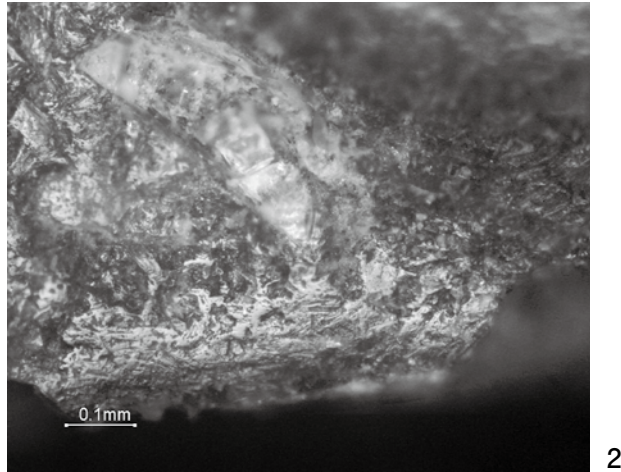
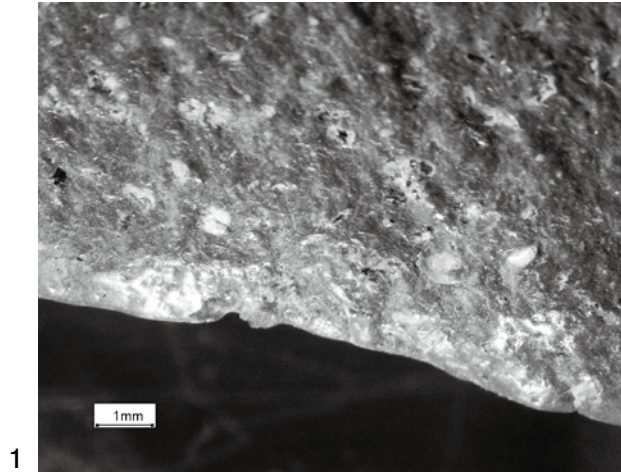
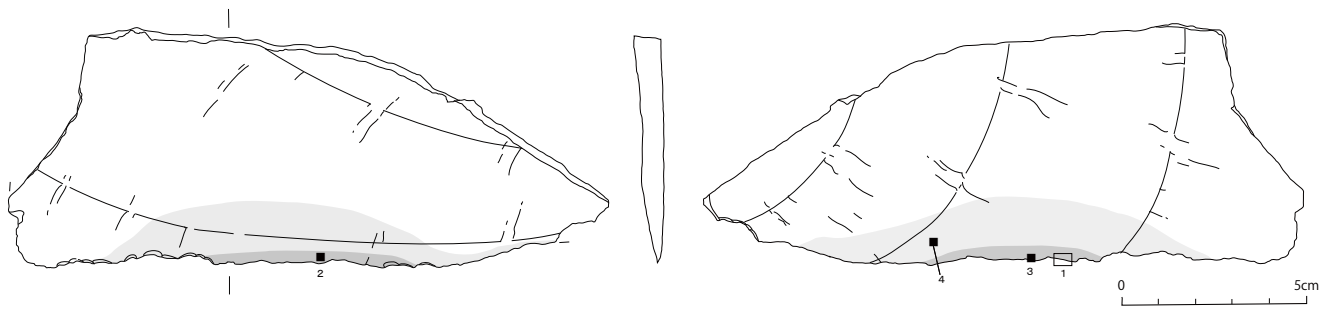
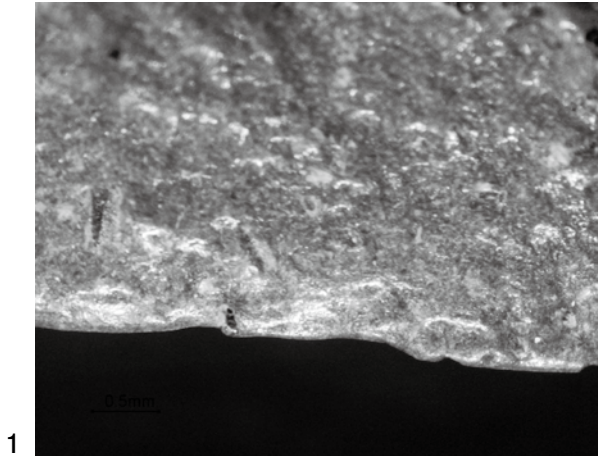


図1. 2006-2 Fig.44-328 石器使用痕

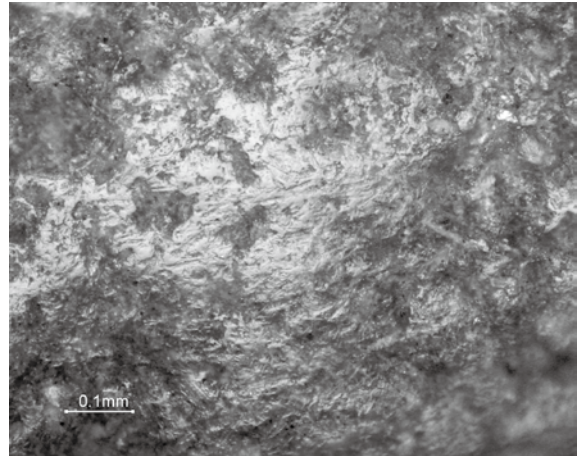




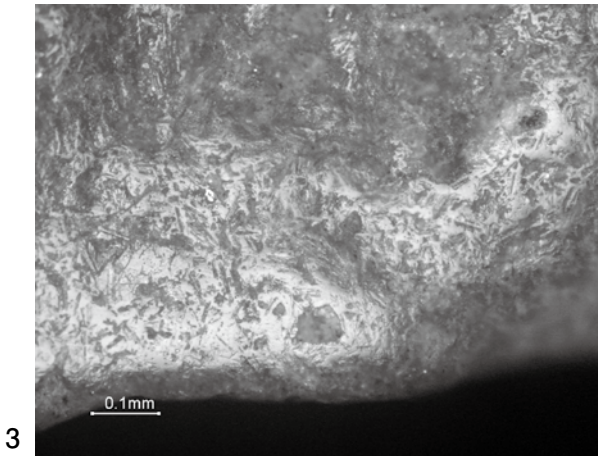
(濃いトーンは肉眼、薄いトーンは顕微鏡観察による使用痕)



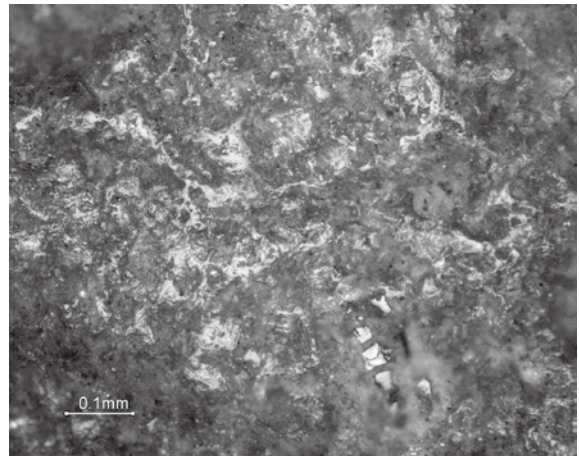
1



2



3



4

図2. 2001-2 No.1547 石器使用痕

なお本論の作成にあたり、山田しょう氏の御教示、鹿児島県立埋蔵文化財センターの御協力を得た。記して感謝致します。

### 註

- 1) Aタイプ光沢は、明るく非常に滑らかで発達すると表面の凹凸をおおう光沢を呈し、イネ科植物の草本類に作業したときに特徴的に生じる。Bタイプ光沢は、Aタイプ同様明るく滑らかな光沢であるが凸部を中心に発達し、イネ科草本の作業量が少ない段階や、木・竹に作業したときに生じる光沢面である(阿子島1989, 御堂島1988)。
- 2) 観察対象石器は高倍率の観察では石器表面全体に光沢が認められるが、これは埋没光沢soil sheen(阿子島1989)の可能性もある。今回は明瞭なA・Bタイプ光沢について記述した。光沢の各タイプについては、石材の差を超えて類似することが指摘されている(阿子島1989, 御堂島1988)。安山岩は粒度が粗いため、光沢の面的な発達是他石材に比べてやや弱い(山田しょう氏御教示)という傾向が見受けられるが、今回の安山岩製石器の観察において認められた、凸部を中心に広がる滑らかな光沢面の一部は肉眼でも認められるものであり、A・Bタイプに特徴的な光沢面と捉えられよう。今後、同質の安山岩による実験が必要である。



- 3) 計測方法と刃部形態については、齋野裕彦1993.1994「弥生時代の大型直縁刃石器（上）（下）」『弥生文化博物館研究報告』2. 3を参考とした。
- 4) 使用による光沢面の形成要因については、シリカ・ゲル説と摩耗説がある（山田1986, 町田2002）。

## 参考文献

- 阿子島香 1989『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社
- 町田勝則 2002「所謂「ロー状光沢」とは何か」『弥生石器と石器使用痕研究』石器使用痕研究会・大阪府立弥生文化博物館
- 御堂島正 1988「使用痕と石材－チャート, サスカイト, 凝灰岩に形成されるポリッシュ－」『考古学雑誌』74(2)
- 1989「有肩扇状石器の使用痕分析－南信州弥生時代における打製石器の機能－」『古代文化』42(1)
- 山田しょう 1986「使用痕光沢の形成過程」『考古学と自然科学』19日本文化財科学会

---

---

鹿児島大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 第5集

郡元団地  
D-7・8区 D・E-5区  
C-4・6区 C-6区

2010年3月発行

編集・発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査室  
鹿児島市郡元一丁目21-24  
TEL 099-285-7270

印刷 湧上印刷株式会社  
鹿児島市南栄3-1-6  
TEL 099-268-1002

---

---